



早稲田大学

大学院人間科学研究科 要項

2012年度



GRADUATE SCHOOL OF HUMAN SCIENCES, WASEDA UNIVERSITY



早稲田大学教旨

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ全ウシ、学問ノ活用ヲ效シ、模範国民ヲ造就スルヲ以テ建学ノ本旨ト爲ス。

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ本旨ト爲スヲ以テ、之カ自由討究ヲ主トシ、常に独創ノ研鑽ニカメ以テ世界ノ学問ニ裨補セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ学問ノ活用ヲ本旨ト爲スヲ以テ、学理ヲ学理トシテ研究スルト共ニ、之ヲ實際ニ応用スルノ道ヲ講シ以テ時世ノ進運ニ資セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ模範国民ノ造就ヲ本旨ト爲スヲ以テ、個性ヲ尊重シ、身家ヲ發達シ、国家社会ヲ利濟シ、併セテ広ク世界ニ活動ス可キ人格ヲ養成セン事ヲ期ス。

2012年度大学院大学暦

行 事			日 程	
大学院入学式（全学）			2 0 1 2 年 4 月 2 日（月）	
人間科学学術院入学式			4 月 3 日（火）	
前 期	前 期 開 始 日		4 月 1 日（日）	
	前期授業開始日		4 月 6 日（金）	
	授 業 終 了		7 月 2 6 日（木）	
	補 講 期 間		7 月 2 7 日（金）～8 月 2 日（木）	
	夏 季 休 業	自	8 月 3 日（金）	
		至	9 月 2 0 日（木）	
9 月学位授与式			9 月 1 5 日（土）	
9 月入学式			9 月 2 2 日（土）	
後 期	後 期 開 始 日		9 月 2 1 日（金）	
	後期授業開始		9 月 2 8 日（金）	
	冬 季 休 業	自	1 2 月 2 3 日（日）	
		至	2 0 1 3 年 1 月 5 日（土）	
	授 業 終 了		1 月 2 9 日（火）	
	補 講 期 間		1 月 3 0 日（水）～2 月 5 日（火）	
	春 季 休 業	自	2 月 6 日（水）	
		至	3 月 3 1 日（日）	
学位授与式			3 月 2 6 日（火）	

[行事等]

体育祭 : 11月 2日（金）
 早稲田祭 : 11月 3日（土）・4日（日）
 夏季一斉休業期間 : 8月13日（月）～8月17日（金）
 創立記念日 : 10月21日（日）
 年末年始一斉休業期間 : 12月29日（土）～2013年1月5日（土）

[成績発表]

修士課程2年制2年生以上、修士課程1年制コース :
 前期 9月7日（金） 後期 2013年3月1日（金）
 修士課程2年制1年生、博士後期課程 :
 前期 9月7日（金） 後期 2013年3月9日（土）

早稲田大学学則第9条および早稲田大学大学院学則第26条第3項にもとづき、授業日数を確保するため、休業日に授業を行う。2012年度は以下の休業日に授業を実施することとする。

7月16日（月）：海の日
 10月 8日（月）：体育の日
 11月23日（金）：勤労感謝の日

※十分な授業回数を確保するために休業日に授業を実施することから、臨時の休業日を設ける。2012年度は、5月1日（火）、5月2日（水）、2013年1月15日（火）を休業日とする。

授業時間

授業時間は下記のとおりである。所沢キャンパス以外のキャンパスで行う授業については、移動に伴う時間を考慮し、科目の登録を行う必要がある。

1時限目	9 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0
2時限目	1 0 : 4 0 ~ 1 2 : 1 0
3時限目	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0
4時限目	1 4 : 4 5 ~ 1 6 : 1 5
5時限目	1 6 : 3 0 ~ 1 8 : 0 0
6時限目	1 8 : 1 5 ~ 1 9 : 4 5
7時限目	1 9 : 5 5 ~ 2 1 : 2 5

目 次

大学院人間科学研究科暦、授業時間	
I 大学院人間科学研究科沿革	1
II 大学院人間科学研究科の理念	2
III 大学院人間科学研究科の研究領域	3
IV 早稲田大学大学院学則(抜粋)	5
V 早稲田大学学位規則(抜粋)	12
VI 修士論文・課題研究論文作成に関して	14
VII 博士論文作成に関して(課程による者)	16
VIII 研究生制度について	18
IX 人を対象とする研究および動物実験に関する規程	18
X 人間科学研究科学科目配当	19
XI 修了要件・学科目の履修方法	20
XII 教育職員免許状取得について	27
XIII 学費	39
XIV 学生生活等	42
1. 学籍番号	42
2. 学生証(身分証明書)	42
3. 各種証明書の交付	43
4. 諸願および諸届	43
5. 奨学金制度	44
6. 各種補助	45
7. 所沢総合事務センター	46
8. 掲示	46
9. 交通機関のストライキと授業	46
10. 天候悪化(台風・大雪等)による休講等の取り扱いについて	47
11. 自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について	47
12. 早稲田大学保健センター所沢分室	49
13. 早稲田大学学生健康増進互助会(学生早健会)	49
14. 早稲田大学学生補償制度(傷害補償)	49
XV 所沢図書館および中央図書館の利用について	51
XVI 研究指導・演習・講義科目の概要	54
XVII 全学共通設置科目の概要	277
(大学院人間科学研究科学科目配当表)	329
(索引)	344
XVIII 教員名簿	349

I 大学院人間科学研究科沿革

早稲田大学では創立100周年記念事業の一環として、1987年4月に森と湖に囲まれた狭山丘陵に所沢キャンパスを開設した。この狭山所沢キャンパスには、旧来の学問体系を基盤とする既存の学部とは異なる、人間を中心においた総合科学を形成する新しい人間科学部が創設された。ここには同時に大学内の共同利用研究施設として、人間総合研究センターが開設されて、人文科学・社会科学・自然科学にわたる学際的な人間総合科学の研究プロジェクトが展開されることとなった。

早稲田大学大学院人間科学研究科の設置は、人間科学部の設置準備段階で提案されていたものであるが、学部発足後まもなく、その完成年度に大学院人間科学研究科を開設することが教授会で承認され、設立準備検討委員会が具体的な活動を始めた。1990年の学内理事会において、人間科学研究科という名称のもとに、人文科学・社会科学・自然科学の多様な分野を含む、生命科学専攻と健康科学専攻を擁する大学院を設置する計画が承認され、その後文部省に申請して認可された。

1991年4月に人間科学研究科の修士課程として24の研究指導が開設され、2年後の1993年3月には49人の修士(人間科学)を送り出した。これに続いて、1993年4月には博士課程として19の研究指導が設置され3年後の1996年3月には、課程内学位論文審査により4人の博士(人間科学)が誕生した。翌1997年からは課程外学位論文の審査も開始された。

2010年度までに、1406人が修士号を取得し、課程内・課程外あわせて、291人が博士学位を取得している。これら修了生や学位取得者は、人間科学の種々の分野での研究の成果を活かして、教育・研究機関、官公庁、企業・マスコミなど、社会の各分野で活躍している。

2000年度以降には、社会人入試の開始、研究指導の再編成と人間科学専攻への一本化、入学定員の増加などを通して、新しい人間科学研究科の創造と展開に取り組んでいる。

2004年9月に人間科学部・人間科学研究科からなる人間科学学術院が組織されたのを機に、2006年度より、5つに分けられていた研究領域を8つに分けることで、研究・教育の内容の特徴を明確に打ち出した。

また、社会的ニーズに敏速且つ柔軟に応え、2007年度より社会人入試の一環として修士課程1年制コース(教育臨床コース)を開設し、実践的高度職業人の育成に努めている。

Ⅱ 大学院人間科学研究科の理念

－ 3つの方針 －

1. ディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与に関する方針)

早稲田大学の総合性・独創性を生かし、体系的な教育課程と、全学的な教育環境と学生生活環境のもとに、多様な学問・文化・言語・価値観の交流を育み、地球社会に主体的に貢献できる人材を育成する。人間科学研究科では、科学技術の飛躍的な進歩のなかで失われた人間性を回復するために、人間と環境の調和や心身の健康の維持増進などを通して生活の質の向上に貢献するような、人間を中心においた総合科学を形成することを目的としている。

人間の総合的な理解のために、人間科学研究科ではきわめて多岐にわたる研究が行われているが、それらを相互に連携させるために、各研究指導を「地域・地球環境科学」、「人間行動・環境科学」、「文化・社会環境科学」、「健康・生命医科学」、「健康福祉科学」、「臨床心理学」、「感性認知情報システム」、および「教育コミュニケーション情報科学」の8つの研究領域に分けた。さらに、社会的ニーズに迅速かつ柔軟に応え、高度で実践的な職業人の育成を目指した「教育臨床コース」を加え、人間科学専攻を構成している。

各研究領域およびコースにおいては、国際社会で活躍できる高い専門性を備えた研究者・実践家の育成を目的とすると言うまでもない。それと同時に、人文・社会科学と自然科学が相互浸透する総合科学としての人間科学を追究するわが国で最初期の大学院のひとつであることから、高い専門性とそれを取り巻く広い学際性を背景に、人間をめぐる多様な諸問題に柔軟に対応できる、新しいタイプの研究者・実践家の育成を目指している。

2. カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針)

各研究領域に所属する学生は、所属する研究領域の演習に専念するだけでなく、同じ研究領域内の関連する多様な演習や講義科目をはじめ、他の研究領域の講義科目などを広く履修して、学際的な人間総合科学の全体像を把握した上で研究を行う。各課程の標準修業年限までに学位を取得することを目標に、多くの演習と講義科目、および多様な研究指導を設置した。ただし、特に優れた研究業績を上げた学生については、標準修業年限以下で修了できる制度も設けた。

人間科学研究科の研究分野では、国際的なフィールドを調査・研究の対象とするケースが多いことも特徴のひとつである。そこで、海外を含む学外でのフィールド調査・実験・研究を促進し、国際的な場で活躍できる研究者・実践家を育成するため、特に海外での授業・調査・実習などの活動を含む科目を8つの研究領域に数多く設置するとともに、インターネットを介したオンデマンド科目を積極的に導入して、これら学外での研究・調査活動と勉学の両立を容易に実現できるようにした。また、「教育臨床コース」においては、おもに夕方以降に開講する科目、およびオンデマンド科目を設置し、演習と研究指導を含むこれらの科目を、社会人が仕事を続けながら履修して、実践修士の学位を取得できるように配慮した。

3. アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)

早稲田大学では、『学問の独立』の教育理念のもとで、一定の高い基礎学力を持ち、かつ知的好奇心が旺盛で、本学の理念である進取の精神に富む、勉学意欲の高い学生を、わが国をはじめ世界から多数迎え入れている。

とくに人間科学研究科では、総合科学としてだけでなく、各研究指導ごとに新しい研究も行っている。つまり、人間の総合理解に貢献する人間科学という研究は8つの研究領域、あるいはそれを越えた新しい枠組みで展開されている。そのため、本学人間科学部からの内部進学者はもちろんのこと、他大学(国内外)の理学部、工学部、医学部、文学部、法学部、経済学部等の出身者などを積極的に広く受け入れている。修士課程では、他領域で学士号をもつ者には一般入試において、本学人間科学部の学生には一般入試・推薦入試において選抜を行っている。また、博士後期課程にも多数の研究指導が設置され、すでに多くの博士号取得者を輩出し、高度に専門的な研究や総合科学的研究をリードする人材を育成している。人間科学研究科は、本学人間科学部から進学して総合科学を目指す人だけでなく、ある領域の専門性をすでにもっているみなさんにも広く門戸を開いている。

Ⅲ 大学院人間科学研究科の研究領域

人間科学研究科にある地域・地球環境科学、人間行動・環境科学、文化・社会環境科学、健康・生命医科学、健康福祉科学、臨床心理学、感性認知情報システム、教育コミュニケーション情報科学の8研究領域のそれぞれの内容は次のとおりである。

【博士後期課程・修士課程(2年制)】

(1) 地域・地球環境科学研究領域

本研究領域では、持続可能な社会の構築に向けて、地域・地球環境を自然科学および社会科学の分野から解析することを目的とする。自然科学分野では生態学、環境科学など、社会科学分野では環境社会学、人口学、人類学などの研究を行う。また、自然と地域社会との統合的な視野を大切にし、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(2) 人間行動・環境科学研究領域

本研究領域では、環境と人間の複雑多様な関係のあり方について、物理的、社会的、文化的環境を人間が創り出し、自ら創出した環境によって人間が形づくられる、という双方向性に等しく注目し、その関係のあるべき姿について心理学および建築学を中核とした学際的な研究を行う。また、環境創造と人間の心理行動発達の双方向の視野に立ち、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(3) 文化・社会環境科学研究領域

本研究領域では、日本をはじめ、アジア、アフリカ、中東、欧州、北南米などを対象として、実践的なフィールドワークと文献研究を駆使した文化と社会の解読を目的とする。さらに、社会科学、人文科学の多様な領域を横断する学際的な研究を通じて、現代社会の諸問題の解明および多文化・多民族共生の持続可能な社会の構築に向けて、人間総合科学としての体系的な研究・教育能力を有する研究者や専門的能力に秀でた実務家などの人材を育成する。

(4) 健康・生命医科学研究領域

本研究領域では、健康科学と生命科学の研究領域とを融合させることにより、生命現象の本質を解剖学、生化学、生理学、栄養学、内分泌学、免疫学、神経科学、バイオメカニクス等の立場から解明すると共に、健康の増進や生活の質の向上、疾患の一次予防を視野にいれた健康科学の確立を目指す。併せて、これらの領域における国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成すると共に、研究成果を踏まえて、健康に関わる行政、教育に対しても有意義な提言を行える人材を育成する。

(5) 健康福祉科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている人間の健康医療福祉の充実を目指し、医学および人間工学・支援工学、福祉ロボット開発・産業化、ならびに社会保障政策、老年社会福祉、障害児福祉、幼少児福祉教育の研究、さらにスポーツ健康マネジメントや緩和医療学など、多方面から健康福祉を調査研究する。その成果を健康福祉政策・行政や実践に反映させるとともに、行政や実践の場で活躍できる国際的水準の人材を育成する。

(6) 臨床心理科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている心身の健康の維持増進にかかわる心身医学、認知行動カウンセリング学、学校カウンセリング、心理臨床学、行動臨床心理学を中心に研究を展開する。さらに、臨床心理学の基盤的な研究から実践的な研究を通じて、臨床心理科学研究と心理臨床実践の双方の能力を兼ね備えた心身の健康の維持増進に携わる国際的水準の人材を育成する。

(7) 感性認知情報システム研究領域

本研究領域では、人間の「感性」を感覚－知覚－認知という一連の情報処理プロセスの中に位置づけ、生体情報をベースに、感性、情動、言語、イメージなどの心の構造と機能ならびにその測定法を研究する。さらに、

認知科学、情報科学、人間工学、システム工学などの基盤的研究から実践的研究を通じて、さまざまな人間の営みにおける安全性、快適性、生活の質の向上に貢献する国際的水準の人材を育成する。

(8) 教育コミュニケーション情報科学研究領域

本研究領域では、学際的な視点に立ち、教育やコミュニケーションと情報科学とを融合して、高度情報化社会における人間の営みと情報行動について探究する。多様性を尊重しながら、快適さを追求する人間中心のシステムと社会の在り方を、国際的な視野から多面的に研究するとともに、従来の研究分野にとらわれず、文理融合・理工連携を図り、人間社会にとって有用なシステム開発研究を行い、体系的な国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成する。

【修士課程1年制コース】

(1) 教育臨床コース

本コースでは、総合的・科学的な視野をもった実践的方法論の習得を目指す。また現役職業人の勉学・職業の両立を可能とする勉学機会の拡大を考慮しながら社会人の育成を目指す。児童・生徒の立場に立脚し、集団生活の基盤である学級での教育法を習得し、個々の多様性や個性を重視した指導方法等にかかる知識・方法論を修得する。

Ⅳ 早稲田大学大学院学則（抜粋）

第1章 総 則

（設置の目的）

第1条 本大学院は、高度にして専門的な学術の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて、文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的とする。

（博士課程）

第2条 本大学院に博士課程をおく。

2 博士課程の標準修業年限は、5年とする。

3 博士課程は、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を、修士課程として取り扱うものとする。

4 前項の前期2年の課程は、「修士課程」といい、後期3年の課程は、「博士後期課程」という。

5 修士課程の標準修業年限は、2年とする。ただし、教育研究上の必要があると認められる場合には、研究科、専攻または学生の履修上の区分に応じ、その標準修業年限は、2年を超えるものとすることができる。

6 前項の規定にかかわらず、修士課程においては、主として実務の経験を有する者に対して教育を行う場合であって、教育研究上の必要があり、かつ、昼間と併せて夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適切な方法により教育上支障を生じないときは、研究科、専攻または学生の履修上の区分に応じ、標準修業年限を1年以上2年未満の期間とすることができる。

（課程の趣旨）

第3条 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

2 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うものとする。

（研究科の構成）

第4条 本大学院に次の研究科をおき、各研究科にそれぞれの専攻をおく。

研 究 科	課 程	
	修 士 課 程	博 士 後 期 課 程
人間科学研究科	人間科学専攻	人間科学専攻

第2章 教育方法等

（教育方法）

第6条 本大学院の教育は、授業科目および学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）によって行うものとする。

（教育方法の特例）

第6条の2 次に掲げる研究科は、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適当な方法によって教育を行うことができる。

第7条 各研究科における授業科目の内容・単位数および研究指導の内容ならびにこれらの履修方法は各研究科において別に定める。

2 学生の研究指導を担当する教員を指導教員という。

3 本大学院の講義、演習、実習などの授業科目の単位数の計算については、本大学学則第12条および第1

3条の規定を準用する。

(他研究科または学部の授業科目の履修)

第8条 当該学術院教授会または研究科運営委員会(以下「研究科運営委員会等」という。)において、教育研究上有益と認めるときは、他の研究科の授業科目または学部の授業科目を履修させ、これを第13条、第13条の2または第13条の3に規定する単位に充当することができる。

(入学前の既修得単位の認定)

第8条の2 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、本大学院に入学する前に本大学院または他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)において修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む。)は、10単位を超えない範囲で、第13条に規定する単位に充当することができる。

(授業科目の委託)

第9条 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)と予め協議の上、その大学院の授業科目を履修させることができる。

2 前項の規定により履修させた単位は10単位を超えない範囲で、これを第13条に規定する単位に充当することができる。

(研究指導の委託)

第10条 当該研究科運営委員会等において、教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院または研究所(外国の大学の大学院または研究所を含む。)と予め協議の上、本大学院の学生にその大学院等において研究指導を受けさせることができる。ただし、修士課程の学生について認める場合には、当該研究指導を受ける期間は、1年を超えないものとする。

(単位の認定)

第11条 授業科目を履修した者に対しては、試験その他の方法によって、その合格者に所定の単位を与える。

(試験および成績評価)

第12条 授業科目に関する試験は、当該研究科運営委員会等の定める方法によって、毎学年末、またはその研究科運営委員会等が適当と認める時期に行う。

2 授業科目の成績は、 $A^+ \cdot A \cdot B \cdot C \cdot F$ の五級に分ち、 $A^+ \cdot A \cdot B \cdot C$ を合格とし、 F を不合格とする。

3 前項の規定にかかわらず、学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、必要な学修を考慮して単位を認めることができる。なお、成績は、 P 、 Q の二級に分ち、 P を合格とし、 Q を不合格とする。

第3章 課程の修了および学位の授与

(修士課程の修了要件)

第13条 修士課程の修了の要件は、大学院修士課程に2年以上在学し、各研究科の定めるところにより、所要の授業科目について所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

2 前項の場合において、当該修士課程の目的に応じ適当と認められるときは、特定の課題についての研究の成果の審査をもって修士論文の審査に代えることができる。

3 2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分にあつては第1項の前段に規定する在学年数については、当該標準修業年限以上在学するものとする。

(博士課程の修了要件)

第14条 博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学

院博士課程に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。

- 2 第2条第6項の規定により標準修業年限を1年以上2年未満とした修士課程を修了した者および第13条第1項ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に修士課程における在学期間に3年を加えた期間以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程における在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。
- 3 前2項の規定にかかわらず、第29条第2号、第3号および第4号の規定により、博士後期課程への入学資格に関し修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者が、博士後期課程に入学した場合の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に3年以上在学し、各研究科の定めた所定の博士論文提出資格要件を満たし、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。
- 4 専門職学位課程を修了した者の博士課程の修了要件は、大学院博士課程に5年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた上、当該研究科運営委員会等の行う博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、標準修業年限を1年以上2年未満または2年とした専門職学位課程を修了した場合は、大学院博士課程に3年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学すれば足りるものとする。
- 5 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り、当該研究科運営委員会等の許可を得て、博士論文を提出し、試験を受けることができる。

(博士学位の授与)

第15条 本大学院の博士課程を修了した者には、博士の学位を授与する。

(修士学位の授与)

第16条 本大学院の修士課程を修了した者には、修士の学位を授与する。

(課程によらない者の博士学位の授与)

第17条 博士学位は、第15条の規定にかかわらず、博士論文を提出して、その審査および試験に合格し、かつ、専攻学術に関し博士課程を修了した者と同様に広い学識を有することを確認された者に対しても授与することができる。

第5章 学年、学期および休業日

(学年および学期)

第25条 本大学院の学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

2 学年は次の2期に分ける。

前期 4月1日から9月20日まで

後期 9月21日から翌年3月31日まで

(休業日)

第26条 定期休業日は、次のとおりとする。

一 日曜日

二 国民の祝日に関する法律に規定する休日

三 本大学創立記念日(10月21日)

四 夏季休業 8月上旬から9月20日まで

五 冬季休業 12月下旬から翌年1月7日まで

六 春季休業 2月中旬から3月31日まで

2 夏季、冬季、春季休業期間の変更または臨時の休業日については、その都度公示する。

3 休業日でも、特別の必要があるときは授業を行うことがある。

第6章 入学、休学、退学、転学、専攻の変更および懲戒

(入学の時期)

第27条 入学時期は、毎学期の始めとする。

(修士課程の入学資格)

第28条 本大学院の修士課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について、入学を許可する。

一 大学を卒業した者

二 学校教育法第68条の2第3項の規定により学士の学位を授与された者

三 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者

四 文部科学大臣の指定した者

五 大学に3年以上在学し、または外国において学校教育における15年の課程を修了し、本大学院において、所定の単位を優れた成績をもって修得したものと認めた者

六 各研究科において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22歳に達した者

(博士後期課程の入学資格)

第29条 本大学院の博士後期課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について入学を許可する。

一 修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を得た者

二 外国において修士もしくは修士(専門職)の学位またはこれに相当する学位を得た者

三 文部科学大臣の指定した者

四 各研究科において、個別の入学資格審査により、修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達した者

(入学検定の手続)

第30条 本大学院に入学を志願する者は、第40条に定める入学検定料を納付し、必要書類を提出しなければならない。

(入学手続)

第31条 入学を許可された者は、別に定める入学金および授業料等を添えて、本大学院所定の用紙による誓約書、保証書および住民票記載事項証明書を指定された入学手続期間中に提出しなければならない。

(保証人)

第32条 保証人は、父兄または独立の生計を営む者で、確実に保証人としての責務を果し得る者でなければならない。

2 保証人として不適当と認めたときは、その変更を命ずることができる。

3 保証人は、保証する学生の在学中、その一身に関する事項について一切の責任を負わなければならない。

4 保証人が死亡し、またはその他の理由でその責務を果たし得ない場合には、新たに保証人を選定して届け出なければならない。

(在学年数の制限)

第33条 本大学院における在学年数は、修士課程および専門職学位課程にあつては4年、博士後期課程にあつては6年を超えることはできない。

2 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分にお

ける修士課程および専門職学位課程の在学年数にあつては当該標準修業年限の2倍を超えることはできないものとする。

(休 学)

第34条 病気その他の理由で引き続き2カ月以上出席することができない者は、休学願書にその理由を付し、保証人連署で所属する研究科の研究科長に願い出なければならない。

- 2 休学は当該学年限りとする。ただし、特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。この場合、休学の期間は通算し修士課程および専門職学位課程においては2年、博士後期課程においては3年を超えることはできない。
- 3 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の通算年数にあつては当該標準修業年限を超えることはできない。
- 4 休学者は、学期の始めでなければ復学することができない。
- 5 休学期間は、在学年数に算入しない。

(専攻および研究科の変更等)

第35条 専攻および研究科の変更または転入学に関する願い出があつた場合には、当該研究科運営委員会等の議を経てこれを許可することができる。

(任意退学)

第36条 任意に退学しようとする者は、理由を付し、保証人と連署で願い出なければならない。

第37条 削除

(措置退学)

第37条の2 次の各号の一に該当する者については、退学の措置をとるものとする。

- 一 第33条に定める在学年数を満了した者
- 二 指導教員から博士後期課程において研究指導を終了する旨の報告が教授会に対してされた者
- 三 各研究科が定める一の学年から次の学年に進むための要件を満たすべき期間を満了した者
- 四 正当な理由がなく、各研究科が定める出席基準を満たさない者
- 五 学業を怠り、各研究科が定める必要単位数を一定期間に満たさない者

(懲 戒)

第38条 学生が、本大学の規約に違反し、または学生の本分に反する行為があつたときは懲戒処分に付することがある。

- 2 懲戒は、戒告、停学、退学の3種とする。

(懲戒退学)

第39条 本大学の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者は、懲戒による退学処分に付する。

(再入学)

第39条の2 第36条または第37条の2第3号から第5号までの規定により退学した者が再入学を志望したときは、別に定める期間内に限り、選考の上これを許可することがある。ただし、退学した日の属する学期の翌学期の始めにおいてこれを許可することはできない。

- 2 第39条の規定により退学した者が再入学を志望したときは、これを許可しない。ただし、退学後別に定める期間を経過し、改悛の情が顕著でありかつ成業の見込みがある場合には、選考の上これを許可することがある。
- 3 再入学を許可された者が退学または学費未納により抹籍となった場合、以後の再入学は認めない。ただし、特別の事情がある場合はこの限りではない。
- 4 第1項から前項までの規定により再入学を許可した場合においては、既修の科目の全部または一部を再び履修させることがある。

(教授会の議)

第39条の3 入学、退学、休学もしくは研究科の変更の許可または懲戒は、各教授会の議を経てこれを行う。

懲戒による退学とすべき事由がある者については、他の事由による退学を認めないものとする。

第40条 削除

第41条 削除

(授業料等の納入期日)

第41条の2 学生は、第31条の場合を除き、次の各号に掲げる学期に係る授業料、施設費、演習料および実験演習料(以下「授業料等」という。)を当該各号に掲げる日までに大学に納めなければならない。

一 前期(アジア太平洋研究科の学生については、春学期および夏学期) 4月15日

二 後期(アジア太平洋研究科の学生については、秋学期および冬学期) 10月1日

2 前項の規定にかかわらず、修業年限を超えて在学する者の授業料等の額および納入期日は、細則で定める。

(授業料等の額)

第42条 入学金および授業料等の額は、別表2のとおりとする。

(納入学費の取扱)

第43条 既に納入した授業料およびその他の学費は、事情のいかんにかかわらず返還しない。

(中途退学者の学費)

第44条 学年の途中で退学した者でも、その期の学費を納入しなければならない。

(抹 籍)

第45条 学費の納入を怠った者は、抹籍することがある。

第9章 科目等履修生

(科目等履修生)

第51条 第27条から第29条までの規定によらないで、本大学院において授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、科目等履修生として入学させることができる。

(科目等履修生の種類)

第52条 官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託に基づく者を委託履修生という。

2 前項に定める履修生以外の者を一般履修生という。

(科目等履修生の選考)

第53条 科目等履修生として入学を志願する者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(科目等履修生の履修証明書)

第54条 科目等履修生が履修した科目について試験を受け、合格したときは、単位を授与し、本人の請求によって証明書を交付する。

第10章 研究生

(研究生)

第57条 本大学院博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、研究生として入学させることができる。

(研究生の選考)

第58条 研究生として研究指導を受けようとする者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(研究生の入学手続、学費および在学期間等)

第59条 研究生の入学手続、学費および在学期間等については別に規程をもって定める。

(正規学生の規定準用)

第60条 研究生については、本章の規定および別に定める規程によるほか、正規の学生に関する規定を準用する。

Ⅴ 早稲田大学学位規則（抜粋）

（目的）

第1条 この規則は、早稲田大学学則(1949 年4月1日示達。以下「大学学則」という。)および早稲田大学大学院学則(1976 年教務達第1号。以下「大学院学則」という。)に定めるもののほか、早稲田大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

（学位）

第2条 本大学において授与する学位は、学士、博士、修士および専門職学位とする。

3 博士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻	博士（人間科学）

3 大学は、前項に定める学位のほか博士(学術)の学位を授与することができる。

4 修士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻	修士（人間科学） または 修士（実践人間科学）

（博士学位授与の要件）

第4条 博士の学位は、大学院学則第14条により博士課程を修了した者に授与する。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位は本大学院の博士課程を経ない者であっても、大学院学則第17条により授与することができる。

（修士学位授与の要件）

第6条 修士の学位は、大学院学則第13条により修士課程を修了した者に授与する。

（課程による者の学位論文の受理）

第7条 本大学院の課程による者の学位論文は、修士課程および専門職学位課程については2部を、博士後期課程については3部を作成し、それぞれに論文概要書を添えて研究科長に提出するものとする。ただし、研究科長は、審査に必要な部数の追加を求めることができる。

2 研究科長は、前項の学位論文を受理したときは、学位を授与できる者か否かについて研究科運営委員会の審査に付さなければならない。

（学位論文）

第10条 博士、修士および専門職学位の学位論文は1篇に限る。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 前項により、一旦受理した学位論文等は返還しない。

3 審査のため必要があるときには、学位論文の副本、訳文、模型または標本等の資料を提出させることがある。

（審査員）

第12条 研究科運営委員会は、第7条第2項の規定により、学位論文が審査に付されたとき、または第8条お

よび第9条の規定により、学位の審査を付託されたときは、当該研究科の教員のうちから、3人以上の審査員を選任し、学位論文の審査および試験または学識の確認を委託しなければならない。

- 2 研究科運営委員会が必要と認めたときは、前項の規定にかかわらず本大学の教員または教員であつた者を、学位論文の審査および試験または学識の確認の審査員に委嘱することができる。
- 3 研究科運営委員会が必要と認めたときは、第1項の規定にかかわらず他の大学院または研究所等の教員等に学位論文の審査員を委嘱することができる。
- 4 研究科運営委員会は、第1項の審査員のうち1人を主任審査員として指名しなければならない。ただし、研究科委員会が必要と認めたときは、第2項の審査員のうち、本大学の教員である者を主任審査員として指名することができる。

(論文審査要旨の公表)

第20条 博士の学位を授与したときは、その論文の審査要旨は、大学が適当と認める方法によってこれを公表する。

(学位論文の公表)

第21条 博士の学位を授与された者は、授与された日から1年以内に、当該博士論文を、印刷公表しなければならない。ただし、学位を授与される前に、印刷公表されているときは、この限りではない。

- 2 前項の規定にかかわらず博士の学位を授与された者は、やむを得ない理由がある場合には、研究科運営委員会の承認を受けて、当該論文の全文に代えて、その内容を要約したものを印刷公表することができる。この場合、大学はその論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。
- 3 第1項の規定により、公表する場合は、当該論文に「早稲田大学審査学位論文(博士)」と、また前項の規定により公表する場合は、当該論文の要旨に、「早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨」と明記しなければならない。

(学位の名称)

第22条 本大学の授与する学位には、早稲田大学と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第23条 本大学において博士、修士または専門職学位を授与された者につき、不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したときは、総長は、当該研究科運営委員会および研究科長会の議を経て、既に授与した学位を取り消し、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

VI 修士論文・課題研究論文作成に関して

当年度の詳細は、5月以降に所沢連絡webページ

(<http://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/>) で必ず確認してください。

【 修士論文〔修士課程（2年制）】 】

1. 学位

本研究科修士課程に通常2年以上4年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文の審査および最終試験に合格した者に対して「修士(人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

修士論文の提出資格は、次の要件が満たされていないといけない。

- (1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。
- (2) 修士論文計画書が提出済みであること。

3. 修士論文計画書

- (1) 修士論文を提出する者は、その年度の6月下旬に、所定の様式で修士論文計画書を提出しなければならない。
- (2) 修士論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認を受けていなければならない。
- (3) 修士論文計画書の提出については、5月に知らせる。

4. 修士論文提出期日および受付期間(詳細は5月に所沢連絡webページに掲載する。)

- (1) 提出日 1月上旬(予定)
- (2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(時間厳守のこと)(ただし、12:30～1:30を除く)
- (3) 提出受付場所 大学院人間科学研究科(所沢総合事務センター)(予定)
- (4) その他 ①受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。

5. 修士論文要旨の作成(詳細は5月に所沢連絡webページに掲載する。)

修士論文要旨はA4判2枚で作成する。

6. 修士論文の作成(詳細は5月に所沢連絡webページに掲載する。)

- (1) 提出部数は審査員の人数分とする。

7. 公開審査会の開催

2月上旬に行う。修士論文公開審査会は学生発表部分を公開とし、修士論文要旨は要旨集として予め配付し、所沢図書館に配架する。

8. 修士論文審査員

- (1) 修士論文の審査員は、人間科学研究科の修士課程研究指導担当教員3名以上をもって構成し、その内1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。
- (2) 各審査員は、運営委員会の議を経て決定する。

9. 所沢図書館保管用修士論文の提出(詳細は5月に所沢連絡webページに掲載する。)

公開審査会などでの指示を受けて修正したもの1部を、審査のあとで提出する。図書館では、学内外から要望があった場合は、閲覧に供する。

10. 学術誌『人間科学研究』掲載用修士論文要旨の提出

修士論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、審査のあとで提出する。

【 課題研究論文〔修士課程 1 年制コース〕 】

1. 学位について

本研究科修士課程1年制コースに通常1年以上2年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、課題研究論文の審査および最終試験に合格した者に対して、「修士(実践人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

課題研究論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

(1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。

(2) 「課題研究論文計画書」が提出済みであること。

3. 課題研究論文計画書

(1) 課題研究論文を提出する者は、その年度の所定の期日(10月頃)までに、所定の様式で「課題研究論文計画書」を提出しなければならない。

(2) 課題研究論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認を受けていなければならない。

(3) 課題研究論文計画書の提出についての詳細は、5月に所沢連絡 web ページで知らせる。

4. 課題研究論文提出期日および受付期間(詳細は5月に所沢連絡 web ページに掲載する。)

(1) 提出日 1月上旬(予定)

(2) 提出受付時間 18:00～21:25(予定)

(3) 提出受付場所 並木校舎(予定)

(4) その他 ①受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。

5. 課題研究論文要旨の作成(詳細は5月に所沢連絡 web ページに掲載する。)

課題研究論文要旨はA4判2枚で作成する。

6. 課題研究論文の作成(詳細は5月に所沢連絡 web ページに掲載する。)

(1) 提出部数は審査員の人数分とする。

7. 公開審査会の開催

1月26日に行う。課題研究論文公開審査会は学生発表部分を公開とし、課題研究論文要旨は要旨集として予め配付し、所沢図書館に配架する。

8. 課題研究論文審査員

(1) 課題研究論文の審査員は、人間科学学術院の専任教員2名以上をもって構成し、その内の修士課程研究指導担当教員1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

9. 所沢図書館保管用課題研究論文の提出(詳細は5月に所沢連絡 web ページに掲載する。)

公開審査会などでの指示を受けて修正したもの1部を、審査のあとで提出する。図書館では、学内外から希望があった場合は、閲覧に供する。

10. 『人間科学研究』掲載用課題研究論文要旨の提出(詳細は5月に所沢連絡 web ページに掲載する。)

課題研究論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、審査のあとで提出する。

VII 博士論文作成に関して（課程による者）

当年度の詳細は、所沢連絡webページ

(<http://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/>) で確認してください。

1. 学位について

本研究科博士後期課程に通常3年以上6年以内在学し、所要の研究指導を受けた上、博士学位論文の審査および試験に合格した者に対して「博士（人間科学）」の学位が授与される。

2. 提出資格について

博士学位論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

- (1) 早稲田大学大学院学則第14条に定めるもののほか、次の(2)または(3)の要件を満たしていなければならない。
- (2) 博士後期課程在学が3年以上の場合は、原則として研究業績が、博士学位論文に関連して、申請者が第一著者である公表学術論文または著書が、印刷中のものを含めて1編(冊)以上あること。
- (3) 博士後期課程在学が3年に満たずに提出しようとする場合は、(2)の条件を満たした上で、申請者を第一著者とする公表学術論文または著書が、申請者の所属する研究グループ以外の研究者により、積極的な評価を受けて、公表学術論文または著書に3回以上引用されていること。

なお、公表学術論文とは、日本学術会議に登録された学会が発行する審査規定が明記された学会誌に掲載された論文、およびそれに準ずる論文、または、海外において第三者審査委員が明記されている学会誌・学術雑誌に掲載された論文を指す。

3. 博士学位申請に関する提出書類について

(1) 学位申請書(大学所定)	1部
(2) 学位論文	3部
(3) 論文概要書	1部
(4) 履歴書(人間科学研究科所定)	1部
(5) 研究業績書(人間科学研究科所定)	1部
(6) 研究業績書に記載した学術論文等の抜刷	各1部
(7) 大学院における成績証明書(修士課程)	1部

4. 博士学位論文等の提出期日について

例年、5月と10月の2回受け付ける。詳細な期日等はその都度掲示等で伝達する。

5. 博士学位論文等の作成要領について

(1) 博士学位論文

使用言語は原則として日本語とする。ただし、英語での提出を妨げないが英語の場合は和訳を提出させることがある。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判タイプ用紙等にワープロ等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。英文の場合はダブルスペースとする。

(2) 論文概要書

使用言語は原則として日本語とする。ただし、英語での提出を妨げないが英語の場合は和訳を提出させることがある。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判タイプ用紙等にワープロ等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。

字数は、A4サイズ2枚程度とする。

6. 博士学位論文審査員について

論文審査員は、人間科学研究科の博士後期課程研究指導担当の教員または教員であった者3名以上をもって構成し、その内研究科運営委員の教員1名を主任審査員とする。必要な場合には、修士課程研究指導担当教員および他の大学院あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

7. 審査について

(1) 予備審査

提出された学位論文および書類等をもとに学位論文の受理を検討する予備審査を行う。

(2) 公開審査会

論文審査にあたり、公開審査会を開催する。

※ 博士後期課程に3年以上在学し、かつ所要の研究指導を受けて退学した場合（通称、満期退学または単位取得退学）は、退学した日から起算して3年以内に限り『課程による者』として博士学位論文を提出することができる。なお、退学後3年以内とは、博士学位論文の「受理」を決定する運営委員会の開催日が、3年以内にあることであり、例年、受理を決定する運営委員会は6月と11月に開催される。

※ 審査に合格した学位論文は、本学中央図書館・所沢図書館・国会図書館に配架し閲覧に供する。

VIII 研究生制度について

本研究科は、大学院学則第57条の定めるところにより本研究科博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上、研究生として入学を許可することがある。

以下「大学院研究生に関する規程」の抜粋

(出願手続)

第2条 研究生として入学を志願する者は、所定の願書により、当該研究科長に願い出なければならない。

(入学手続、学費)

第3条 研究生として入学を許可された者は、入学後の最初の学期に係る研究指導料、演習料および実験実習料を納入し、学生証の交付を受けなければならない。

- 一 研究指導料 博士後期課程の3年生が支払うべき授業料の半額
- 二 演習料・実験実習料 博士後期課程の3年生が支払うべき演習料または実験実習料の額

(在学期間)

第4条 研究生の在学期間は入学した年度の3月15日までとする。ただし、研究指導を継続して受けようとする時は、原則として2回に限り延長することができる。

- 2 在学期間の延長を希望する者は、3月15日までに、理由を付して、当該研究科長に願い出なければならない。
- 3 在学期間の延長の許可は、当該研究科運営委員会の儀を経て、研究科長が行う。

IX 人を対象とする研究および生物実験に関する規程

「人を対象とする研究に関する倫理規程」および「生物実験安全管理規程」は、大学で定められている。人間科学研究科に所属する学生は、上記規程を充分遵守のうえ研究活動に精進されることを期待する。

なお、規定に従い研究計画を申請する際は、指導教員と充分相談のうえ申請すること。

Ⅹ 人間科学研究科学科目配当

1. 学科学科目配当の構成

課 程	研究領域・コース	科目区分
修士課程 (2年制)	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理科学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域	研究指導 修士論文 演習(1) 演習(2) 講義科目 実習科目
修士課程 1年制コース	教育臨床コース	研究指導 課題研究論文 コース必修(演習) コース必修(実習) コース選択必修 コース選択 選択科目
博士後期課程	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理科学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域	研究指導 博士論文

2. 科目の説明

課 程	科目区分	配 当	期 間	単 位	備 考
修士課程 (2年制)	研究指導	1・2年	半期	無	曜日時限設定なし
	修士論文	2年	—	無	
	演習(1)	1・2年	半期	4単位	
	演習(2)	1・2年	半期	4単位	
	講義科目	1・2年	半期	2単位	
	実習科目	1・2年	半期	2単位	臨床心理実習ⅠⅡは2年配当
修士課程 1年制 コース	研究指導	1年	半期	無	曜日時限設定なし
	課題研究論文	1年	—	無	
	コース必修(演習)	1年	半期	4単位	
	コース必修(実習)	1年	半期	2単位	
	コース選択必修	1年	半期	2単位	
	コース選択	1年	半期	2単位	
	選択科目	1年	半期	2単位	修士課程(2年制)配当科目
課 程	科目区分	配 当	期 間	単 位	備 考
博士後期 課程	研究指導	1・2・3年	半期	無	曜日時限の設定なし
	博士論文	3年	—	無	

注意: 集中講義として行う場合は期間相当分を実施

3. 大学院人間科学研究科学科目配当表

科目の概要に続き掲載。

X I 修了要件・学科目の履修方法

— 修士課程 —

【 修了要件 】

1. 修士課程（2年制）

修士課程(2年制)の修了要件は、通常2年以上4年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ(研究指導の評価が2年以上にわたり合格「P」であること)、修士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(人間科学)」の学位が授与される。

ただし、優れた業績を上げた者について本研究科運営委員会が認めた場合に限り、修士課程に1年以上在学すれば修了できる。

2. 修士課程1年制コース

修士課程1年制コースの修了要件は、通常1年以上2年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ(研究指導の評価が合格「P」であること)、課題研究論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(実践人間科学)」の学位が授与される。

【 授業科目の履修方法 】

1. 修士課程（2年制）

(1) 研究指導および修士論文

研究指導を2年以上にわたり合格し、修士論文に合格しなければならない。

(2) 必修科目

各自が所属する研究指導の演習科目(1)A・B、(2)A・Bの計8単位を履修しなければならない。

一部、研究指導教員が担当する研究指導名と演習科目名が異なる科目があるが、この場合、研究指導教員が担当する演習科目(1)A・B、(2)A・Bを履修するものとする。

(3) 選択科目

演習科目、講義科目の中から研究領域にとらわれずに22単位(以上)を履修しなければならない。

各自が所属する研究指導以外の演習科目は、8単位以内に限り、修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(4) 各学年において登録できる授業科目の登録制限単位は34単位とする。

(5) 上記の履修方法を表にすると下記ようになる。

必修/選択	科目区分	科目の説明（単位数）	修了要件
必修	研究指導		2年分合格(単位なし)
	修士論文		合格(単位なし)
	演習科目	所属する研究指導の演習(1)A・B、(2)A・B	8単位
選択	演習科目	所属する研究指導以外の演習(1)A・B(2)A・B	22単位(以上)
	講義科目	領域にとらわれず自由に選択	
修了単位			30単位(以上)

2. 修士課程 1 年制コース

(1) 研究指導および課題研究論文

研究指導および課題研究論文に合格しなければならない。

(2) コース必修科目

① コース必修科目 (演習)

各自が所属する研究指導の演習科目 (1) A・B の 4 単位を履修しなければならない。

② コース必修科目 (実習)

心理教育臨床実習 A・B、心理臨床事例実習 A・B の各 1 単位、4 単位分を履修しなければならない。

(3) コース選択必修科目

コース選択必修科目から 12 単位 (以上) を履修しなければならない。

(4) コース選択科目

必要に応じてコース選択科目から履修する。

(5) 選択科目

修士課程 (2 年制) に設置されている演習科目、講義科目の中から研究領域・コースにとらわれずに、30 単位を満たすように履修する。各自が所属する研究指導以外の演習科目は、演習 (1) A・B に限り 2 科目 4 単位を修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(6) 1 年間に登録できる授業科目の登録制限単位は 46 単位とする。

(7) 上記の履修方法を表にすると下記のとおりとなる。

科目区分	科目の説明	修了要件
研究指導	所属する研究指導	合格 (単位なし)
課題研究論文		合格 (単位なし)
コース必修科目 (演習)	所属する研究指導の演習 (1) A・B	4 単位
コース必修科目 (実習)	心理教育臨床実習 A・B 心理臨床事例実習 A・B	4 単位 (1 単位 × 4 科目)
コース選択必修科目		12 単位 (以上)
コース選択科目		30 単位より上記で取得した 単位を除いた単位数を取得
選択科目	修士課程 (2 年制) 設置科目	
修了単位数		30 単位 (以上)

3. 通年科目履修の弾力化

半期休学・半期留学をした際の研究指導、演習の履修について、研究指導担当教員の許可がある場合に限り、継続して履修することができる。ただし、継続履修できるのは、同じ担当教員の科目を登録した場合に限る。

4. 他箇所設置科目および入学前修得科目 (修士課程 (2 年制) ・ 修士課程 1 年制コース共通)

(1) 本大学の他箇所に設置されている大学院生対象科目を指導教員の許可を得て履修することができる。

修得した授業科目の単位のうち、10 単位以内に限り講義科目の代替科目として修了に必要な単位に算入することができる。この場合の登録単位数は、当該年度の登録制限単位数の中に含まれる。

上記の他に、自由科目(修了に必要な単位とはならない科目)として他箇所で開催されている科目を履修することができる。

- (2) 本研究科在学中に外国の大学院へ留学し、留学先で修得した講義科目の単位のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (3) 本研究科入学前に、本大学の研究科または他大学大学院(外国の大学院を含む)において修得した講義科目の単位(科目等履修生として修得した単位を含む)のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて、認定することがある。なお、本研究科の科目等履修生として在学し、本研究科に設置されている演習科目を履修している場合も同様の取り扱いとする。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (4) 上記に規定する単位は、併せて10単位を限度とする。
- (5) 本研究科入学前に人間科学部の学生として、本研究科の科目を先取履修で修得した単位は、14単位を限度として自動的に本研究科の修了単位に計上する。この場合の計上された単位数は、登録制限単位数の中に含まれない。

【 9月修了について 】

修士課程の学位授与の要件中、3月までに

- ① 修士論文または課題研究論文に関する要件を満たさなかった場合
- ② 所定の単位を充足することができなかった場合
- ③ 上記 ① ② いずれの要件も満たさなかった場合

のために、修了に関する要件を具備することができず、そのために引き続き在学する者については、以下の基準によりその年の9月に修士の学位を授与(9月15日付)されることができる。

1. 修士論文について

- ① 修了できなかった年度に修士論文計画書または課題研究論文計画書を提出していること
- ② 9月修了を希望する年度に指導教員の「研究指導」を登録していること
- ③ 9月修了を希望する年度の9月までに修士論文または課題研究論文に関する要件を具備すること

2. 授業科目について

- ① 修士課程(2年制):修了所要単位に4単位以内の不足であること
修士課程1年制コース:修了所要単位に8単位以内の不足であること
- ② 不足単位を修得する場合は、前期終了科目であること
演習科目または講義科目の通年科目を履修する場合は、9月修了の対象とはならない。

3. 手続について

9月修了を希望する場合は、その年度の4月の所定の期日までに研究科所定の書類で、その旨研究科長へ届け出なければならない。その場合、指導教員の承認印が必要となる。

— 博士後期課程 —

【 修了要件 】

1. 博士後期課程の修了要件は、通常3年以上6年以内在学し、論文作成のために必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には「博士(人間科学)」の学位が授与される。
2. 授業科目について必要単位はないが、指導教員の指示により、修士課程の授業科目を履修しなければならない場合がある。
3. 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り博士論文を提出し受理されれば、「課程による者」として審査および試験を受けることができる。「3年以内」とは、提出された博士論文の受理を決定する学術院運営委員会の日付であり、年2回(6月と11月)開催される。

— 修士課程・博士後期課程 —

【 成 績 】

成績は、次のとおり表示する。なお、入学年度により表記の方法が異なる。

1. 2006年度以降入学者

(1) 研究指導

合否区分	合 格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	P	記載なし

(2) 授業科目、修士論文、課題研究論文

合否区分	合 格				不合格
点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A+	A	B	C	F
成績証明書	A+	A	B	C	記載なし

2. 2005年度以前入学者

(1) 研究指導、修士論文

合否区分	合 格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	合 格	記載なし

(2) 授業科目

合否区分	合 格				不合格
点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A+	A	B	C	F
成績証明書	優		良	可	記載なし

【 G P A (Grade Point Average)】

本研究科では、成績を数値に換算し、科目登録した単位あたりの平均値をもとめている。海外に留学する際に、主に用いられ、算出方法は次のとおり。

成績	換算値	算 出 方 法
A+	4	修了算入科目について、左記の換算値により 1 単位あたりの平均値を算出する。 G P A = $\frac{\text{科目の単位数} \times \text{その科目に対応する換算値}}{\text{総登録単位数 (不合格科目を含む)}}$ の総和 ※G P Aは、小数第2位まで表示する
A	3	
B	2	
C	1	
F	0	

※G P Aは成績通知書により通知する。また、研究科として証明する。

※研究指導、博士学位論文の評価区分(合格:P、不合格:Q)は GPA 計算の対象外。

— 科目名称変更 —

【 修 士 課 程 】

1. 研究指導

下記の研究指導は名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

変更後研究指導名	変更前研究指導名	変更年度
緩和医療学・臨床死生学研究指導	緩和医療学研究指導	2010
児童家庭福祉論研究指導	障害児福祉論研究指導	2008
生物圏生態学研究指導	生物圏情報科学研究指導	2005
学習動機づけ論研究指導	学習動機づけ研究指導	2005
建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導	2005
移住論研究指導	応用言語学研究指導	2005
物質文化論研究指導	考古学研究指導	2005
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導	2005
生体構造学研究指導	神経形態学研究指導	2005
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導	2005
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導	2005
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導	2005
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導	2005
予防医学研究指導	環境保健学研究指導	2005
学校カウンセリング学研究指導	学校カウンセリング研究指導	2005
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導	2005
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導	2005
知識情報科学研究指導	データサイエンス研究指導	2005
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導	2005
スポーツ倫理学・教育学研究指導	スポーツ倫理学研究指導	2005
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導	2005
スポーツビジネスマネジメント論研究指導	スポーツビジネス・マーケティング研究指導	2005
スポーツ神経精神医科学研究指導	精神医学研究指導	2005
スポーツ健康管理学研究指導	スポーツ内科学研究指導	2005
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導	2005

2. 演習科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

変更後科目名	変更前科目名	変更年度
学校臨床心理学演習	学校臨床心理学演習(1)	2011
臨床認知発達学演習	臨床認知発達学演習(1)	2011
緩和医療学・臨床死生学演習(1)、(2)	緩和医療学演習(1)、(2)	2010
児童家庭福祉論演習(1)、(2)	障害児福祉論演習(1)、(2)	2008
生物圏生態学演習(1)、(2)	生物圏情報科学演習(1)、(2)	2006
学習動機づけ論演習(1)、(2)	学習動機づけ演習(1)、(2)	2006
建築環境学演習(1)、(2)	環境・行動学演習(1)、(2)	2006
移住論演習(1)、(2)	応用言語学演習(1)、(2)	2006
物質文化論演習(1)、(2)	考古学演習(1)、(2)	2006
生体発達科学演習(1)、(2)	細胞生物学演習(1)、(2)	2006
生体構造学演習(1)、(2)	神経形態学演習(1)、(2)	2006
生体機能学演習(1)、(2)	健康生体機能学演習(1)、(2)	2006
神経内分泌学演習(1)、(2)	神経行動学演習(1)、(2)	2006
運動制御・バイオメカニクス演習(1)、(2)	身体運動科学演習(1)、(2)	2006
応用健康科学演習(1)、(2)	身体行動科学演習(1)、(2)	2006
予防医学演習(1)、(2)	環境保健学演習(1)、(2)	2006
学校カウンセリング学演習(1)、(2)	学校カウンセリング演習(1)、(2)	2006
感性認知科学演習(1)、(2)	色彩認知科学演習(1)、(2)	2006
安全人間工学演習(1)、(2)	安全行動学演習(1)、(2)	2006
知識情報科学演習(1)、(2)	データサイエンス演習(1)、(2)	2006
ネットワーク情報システム学演習(1)、(2)	ネットワーク情報システム演習(1)、(2)	2006
スポーツ倫理学・教育学演習(1)、(2)	スポーツ倫理学演習(1)、(2)	2006
健康スポーツ論演習(1)、(2)	体力科学演習(1)、(2)	2006
スポーツビジネスマネジメント論演習(1)、(2)	スポーツビジネス・マーケティング演習(1)、(2)	2006
スポーツ神経精神医学演習(1)、(2)	精神医学演習(1)、(2)	2006
スポーツ健康管理学演習(1)、(2)	スポーツ内科学演習(1)、(2)	2006
スポーツ神経科学演習(1)、(2)	生体機能学演習(1)、(2)	2006
心理臨床学演習(1)、(2)	医療心理学演習(1)、(2)	2005

3. 講義科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

変更後科目名	変更前科目名	変更年度
視覚デザイン特論	視覚デザイン	2012
科学英語論文作成法特論	科学英語論文作成法	2012
科学英語論文口演特論	科学英語論文口演法	2012
メディアリテラシー特論	言語教育方法特論	2012
教育システム工学特論	教育システム工学	2012
教育集団心理学特論	教育集団心理学	2012
野生動物学特論	動物行動学特論	2010
ワークショップデザイン特論	学習科学特論	2010
環境生態学特論	自然環境論	2006
学習動機づけ特論	ヒューマン・モチベーション特論	2006
学習環境心理学特論	環境認知学特論	2006
自然人類学特論	人類学特論	2006
生体発達科学特論	発生生物学特論	2006

運動制御・バイオメカニクス特論	身体運動科学特論	2006
健康医学特論	健康管理医学特論	2006
応用健康科学特論	健康行動科学特論	2006
老年社会福祉学特論	老年福祉学特論	2006
安全人間工学特論	応用実験心理学	2006
教授学習過程特論	認知科学特論	2006
スポーツ表象特論	スポーツ表象論	2006
健康スポーツマネジメント特論	健康スポーツ特論	2006
スポーツビジネスマネジメント特論	スポーツビジネス特論	2006
メディカルコンディショニング特論	メディカルコンディショニング論	2006
スポーツ統計学特論	スポーツ統計学	2006
運動器解剖実習	運動器解剖学実習	2006

【博士後期課程】

下記の研究指導は、名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

変更後研究指導名	変更前研究指導名	変更年度
建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導	2006
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導	2006
生体構造学研究指導	神経形態学	2006
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導	2006
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導	2006
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導	2006
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導	2006
予防医学研究指導	環境保健学研究指導	2006
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導	2006
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導	2006
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導	2006
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導	2006
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導	2006
スポーツ心理学研究指導	精神生理学研究指導	2006
色彩認知科学研究指導	環境色彩認知科学研究指導	2003
教育開発論研究指導	教育工学研究指導	2003
スポーツ生理学研究指導	運動生理学研究指導	2003
身体形態学研究指導	トレーニング科学研究指導	2003

ⅩⅡ 教育職員免許状取得について

1. 人間科学研究科で取得できる免許の種類及び教科は、次のとおりである。

○印が取得できる免許状

免許状の種類 / 教科	社会	地理歴史	公民	福祉	情報
中学校教諭専修免許状	○				
高等学校教諭専修免許状		○	○	○	○

2. 免許状取得の条件

本研究科入学以前に、当該教科の中学校教諭一種免許状又は高等学校教諭一種免許状を取得した者、又は教育職員免許法の5条第一項別表第1の所要資格を充たしている者。（「5条第一項別表第1の所要資格」とは、一種免許状取得に必要な「教職および教科に関する科目」の法令で定める単位数を言う）

3. 免許状取得に必要な科目

次項以降に記載されている、別表の人間科学研究科設置科目のなかから該当する免許状に関する科目を24単位以上履修し、修士の学位を得ることにより、専修免許状が取得できる。（24単位の履修方法は科目区分・分野に関係なく任意に履修して可）ただし、科目設置以前の年度に修得した科目については、専修免許科目として申請することはできない。

なお、過年度の対象科目については過年度の研究科要項を参考のこと。

4. その他

免許状の申請は、本人が、自分の住所地又は教員採用学校所在地の授与権者（都道府県教育委員会）に対して行う。ただし、日本の大学（学部）を卒業しており、かつ3月の修了予定者に限り、大学がとりまとめて申請を代行（一括申請）し、学位授与当日に免許状を手渡せるようとりはかっている。

また、免許状授与証明書の請求は、授与権者に行うこと。

別表 社会専修免許 2012年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教科に関する科目	アジア社会論演習(1) A B
	アジア社会論演習(2) A B
	アジア地域研究特論
	移住論演習(1) A B
	移住論演習(2) A B
	移民研究特論
	家族社会学演習(1) A B
	家族社会学演習(2) A B
	家族社会学特論
	科学史科学哲学演習(1) A B
	科学史科学哲学演習(2) A B
	科学史科学哲学特論
	開発援助実践学特論
	環境社会学演習(1) A B
	環境社会学演習(1) A B
	環境社会学特論
	技術史・技術文化論演習(1) A B
	技術史・技術文化論演習(2) A B
	建築環境学演習(1) A B
	建築環境学演習(2) A B
	建築環境学特論
	考古学特論
	産業職業社会学演習(1) A B
	産業職業社会学演習(2) A B
	産業職業社会学特論
	社会人類学演習(1) A B
	社会人類学演習(2) A B
	水域環境学演習(1) A B
	水域環境学演習(2) A B
	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) A B
	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) A B
	スペイン社会文化特論
	生活文化史研究特論
	生態心理学演習(1) A B
	生態心理学演習(2) A B
	地域資源特論
	地域資源論演習(1) A B
	地域資源論演習(2) A B
	ドイツ近代国民国家特論
	ドイツ政治社会文化論演習(1) A B
	ドイツ政治社会文化論演習(2) A B
	都市社会学演習(1) A B
	都市社会学演習(2) A B
	都市社会学特論
	人間環境変遷特論
	日本物質文化論演習(1) A B
	日本物質文化論演習(2) A B
	発達行動学演習(1) A B
	発達行動学演習(2) A B
	発達行動学特論
	フランス表象文化史研究特論
	フランス表象文化論演習(1) A B
	フランス表象文化論演習(2) A B
文化生態学演習(1) A B	
文化生態学演習(2) A B	
民族誌学特論	
歴中人類学特論	

[illegible]

別表 社会専修免許 2011年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
社会の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境社会学特論 民族誌学特論 人間環境変遷特論 地域資源特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 建築環境学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習 臨床認知発達学演習 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論 教育発達心理学特論(2011年度のみ)

別表 地歴専修免許 2012年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目	免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教科に関する科目	アジア社会論演習(1) A B	教職に関する科目	インストラクショナルデザイン特論
	アジア社会論演習(2) A B		インストラクショナルデザイン論演習(1) A B
	アジア地域研究特論		インストラクショナルデザイン論演習(2) A B
	移住論演習(1) A B		学校カウンセリング学演習(1) A B
	移住論演習(2) A B		学校カウンセリング学演習(2) A B
	移民研究特論		学校臨床心理学演習 A B
	技術史・技術文化論演習(1) A B		学校臨床心理学特論
	技術史・技術文化論演習(2) A B		学校臨床生徒指導学特論
	考古学特論		学習動機づけ特論
	社会人類学演習(1) A B		学習動機づけ論演習(1) A B
	社会人類学演習(2) A B		学習動機づけ論演習(2) A B
	水域環境学演習(1) A B		教育開発特論
	水域環境学演習(2) A B		教育開発論演習(1) A B
	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) A B		教育開発論演習(2) A B
	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) A B		教育システム工学特論
	スペイン社会文化特論		教育実践学演習(1) A B
	生活文化史研究特論		教育実践学演習(2) A B
	ドイツ近代国国民国家特論		教育集団心理学特論
	ドイツ政治社会文化論演習(1) A B		教育情報工学演習(1) A B
	ドイツ政治社会文化論演習(2) A B		教育情報工学演習(2) A B
	日本物質文化論演習(1) A B		教育情報工学特論
	日本物質文化論演習(2) A B		教育心理学特論
	人間環境変遷特論		教育臨床査定特論
	フランス表象文化史研究特論		教育臨床心理学特論
	フランス表象文化論演習(1) A B		教師学特論
	フランス表象文化論演習(2) A B		教授学習過程特論
	文化生態学演習(1) A B		行動療法特論
	文化生態学演習(2) A B		心理療法特論 I
	民族誌学特論		特別支援教育特論
	歴史人類学特論		臨床心理アセスメント学演習(1) A B
			臨床心理アセスメント学演習(2) A B
			臨床心理学校地域援助特論
			臨床心理学特論Ⅲ
			臨床認知発達学演習 A B
			臨床認知発達学特論
			ワークショップデザイン特論

別表 地理歴史専修免許 2011年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
地理歴史の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)・(2) 民族誌学特論 人間環境変遷特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習 臨床認知発達学演習 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論 教育発達心理学特論(2011年度のみ)

別表 公民専修免許 2012年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教科に関する科目	開発援助実践学特論
	科学史科学哲学演習(1) A B
	科学史科学哲学演習(2) A B
	科学史科学哲学特論
	家族社会学演習(1) A B
	家族社会学演習(2) A B
	家族社会学特論
	環境社会学演習(1) A B
	環境社会学演習(2) A B
	環境社会学特論
	環境心理・環境デザイン演習(1) A B
	環境心理・環境デザイン演習(2) A B
	感情心理学特論
	感性認知科学演習(1) A B
	感性認知科学演習(2) A B
	感性心理学特論
	建築環境学演習(1) A B
	建築環境学演習(2) A B
	建築環境学特論
	産業職業社会学演習(1) A B
	産業職業社会学演習(2) A B
	産業職業社会学特論
	心理行動学演習(1) A B
	心理行動学演習(2) A B
	生態心理学演習(1) A B
	生態心理学演習(2) A B
	生態心理学特論
	地域資源特論
	地域資源論演習(1) A B
	地域資源論演習
	都市社会学演習(1) A B
	都市社会学演習(2) A B
	都市社会学特論
	発達行動学演習(1) A B
	発達行動学演習(2) A B
	発達行動学特論

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	インストラクショナルデザイン特論
	インストラクショナルデザイン論演習(1) A B
	インストラクショナルデザイン論演習(2) A B
	学校カウンセリング学演習(1) A B
	学校カウンセリング学演習(2) A B
	学校臨床心理学演習 A B
	学校臨床心理学特論
	学校臨床生徒指導学特論
	学習動機づけ特論
	学習動機づけ論演習(1) A B
	学習動機づけ論演習(2) A B
	教育開発特論
	教育開発論演習(1) A B
	教育開発論演習(2) A B
	教育システム工学特論
	教育実践学演習(1) A B
	教育実践学演習(2) A B
	教育集団心理学特論
	教育情報工学演習(1) A B
	教育情報工学演習(2) A B
	教育情報工学特論
	教育心理学特論
	教育臨床査定特論
	教育臨床心理学特論
	教師学特論
	教授学習過程特論
	行動療法特論
	心理療法特論Ⅰ
	特別支援教育特論
	臨床心理アセスメント学演習(1) A B
	臨床心理アセスメント学演習(2) A B
	臨床心理学地域援助特論
	臨床心理学特論Ⅲ
	臨床認知発達学演習 A B
	臨床認知発達学特論
	ワークショップデザイン特論

別表 公民専修免許 2011年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
公民の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 感性認知科学演習(1)・(2) 心理行動学演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境心理・環境デザイン演習(1)・(2) 環境社会学特論 地域資源特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 建築環境学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 感性心理学特論 感情心理学特論 生態心理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習 臨床認知発達学演習 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論 教育発達心理学特論(2011年度のみ)

別表 福祉専修免許 2012年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教科に関する科目	健康福祉管理特論
	健康福祉管理論演習(1) A B
	健康福祉管理論演習(2) A B
	健康福祉支援工学演習(1) A B
	健康福祉支援工学演習(2) A B
	健康福祉支援工学特論
	社会保障政策特論
	社会保障政策論演習(1) A B
	社会保障政策論演習(2) A B
	児童家庭福祉特論
	児童家庭福祉論演習(1) A B
	児童家庭福祉論演習(2) A B
	精神保健福祉特論
	精神保健福祉論演習(1) A B
	精神保健福祉論演習(2) A B
	ソーシャルワーク特論
	ソーシャルワーク論演習(1) A B
	ソーシャルワーク論演習(2) A B
	福祉教育特論
	福祉教育論演習(1) A B
	福祉教育論演習(2) A B
	臨床死生学特論
	老年社会福祉学演習(1) A B
	老年社会福祉学演習(2) A B
	老年社会福祉学特論

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	インストラクショナルデザイン特論
	インストラクショナルデザイン論演習(1) A B
	インストラクショナルデザイン論演習(2) A B
	学校カウンセリング学演習(1) A B
	学校カウンセリング学演習(2) A B
	学校臨床心理学演習 A B
	学校臨床心理学特論
	学校臨床生徒指導学特論
	学習動機づけ特論
	学習動機づけ論演習(1) A B
	学習動機づけ論演習(2) A B
	教育開発特論
	教育開発論演習(1) A B
	教育開発論演習(2) A B
	教育システム工学特論
	教育実践学演習(1) A B
	教育実践学演習(2) A B
	教育集団心理学特論
	教育情報工学演習(1) A B
	教育情報工学演習(2) A B
	教育情報工学特論
	教育心理学特論
	教育臨床査定特論
	教育臨床心理学特論
	教師学特論
	教授学習過程特論
	行動療法特論
	心理療法特論Ⅰ
	特別支援教育特論
	臨床心理アセスメント学演習(1) A B
	臨床心理アセスメント学演習(2) A B
	臨床心理学地域援助特論
	臨床心理学特論Ⅲ
	臨床認知発達学演習 A B
	臨床認知発達学特論
	ワークショップデザイン特論

別表 福祉専修免許 2011年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
福祉の教科に関する科目	老年社会福祉学演習(1)・(2) 社会保障政策論演習(1)・(2) 福祉教育論演習(1)・(2) 児童家庭福祉論演習(1)・(2) 精神保健福祉論演習(1)・(2) 健康福祉支援工学演習(1)・(2) 健康福祉管理論演習(1)・(2) ソーシャルワーク論演習(1)・(2) 老年社会福祉学特論 社会保障政策特論 健康福祉管理特論 福祉教育特論 児童家庭福祉特論 精神保健福祉特論 健康福祉支援工学特論 ソーシャルワーク特論 臨床死生学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習 臨床認知発達学演習 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論 教育発達心理学特論(2011年度のみ)

別表 情報専修免許 2012年度設置科目

[illegible]

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	インストラクショナルデザイン特論
	インストラクショナルデザイン論演習(1) A B
	インストラクショナルデザイン論演習(2) A B
	学校カウンセリング学演習(1) A B
	学校カウンセリング学演習(2) A B
	学校臨床心理学演習 A B
	学校臨床心理学特論
	学校臨床生徒指導学特論
	学習環境デザイン特論
	学習動機づけ特論
	学習動機づけ論演習(1) A B
	学習動機づけ論演習(2) A B
	教育開発特論
	教育開発論演習(1) A B
	教育開発論演習(2) A B
	教育システム工学特論
	教育実践学演習(1) A B
	教育実践学演習(2) A B
	教育集団心理学特論
	教育情報工学演習(1) A B
	教育情報工学演習(2) A B
	教育情報工学特論
	教育心理学特論
	教育臨床査定特論
	教育臨床心理学特論
	教師学特論
	教授学習過程特論
	行動療法特論
	情報メディア教育特論
	情報メディア教育論演習(1) A B
	情報メディア教育論演習(2) A B
	心理療法特論Ⅰ
	特別支援教育特論
	臨床心理アセスメント学演習(1) A B
臨床心理アセスメント学演習(2) A B	
臨床心理学特論Ⅲ	
臨床心理学学校地域援助特論	
臨床認知発達学演習 A B	
臨床認知発達学特論	
ワークショップデザイン特論	

別表 情報専修免許 2011年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報処理心理学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) 対話情報処理論演習(1)・(2) 情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 学習環境デザイン論演習(1)・(2) 情報処理心理学特論 言語情報科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理学特論 対話情報処理特論 マルチメディア特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 インターネット科学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 情報メディア教育論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習 臨床認知発達学演習 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 情報メディア教育特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 学習環境デザイン特論 臨床心理学校地域援助特論 教育発達心理学特論(2011年度のみ)

XⅢ 学費

1. 修士課程(2年制)

2012 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	362,500	90,000	35,000	1,500	689,000
	後期	—	362,500	90,000	35,000	1,500	489,000
	計	200,000	725,000	180,000	70,000	3,000	1,178,000
二年度	前期	—	365,000	90,000	35,000	1,500	491,500
	後期	—	365,000	90,000	35,000	1,500	491,500
	計	—	730,000	180,000	70,000	3,000	983,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

2011 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
二年度	前期	—	362,500	80,000	35,000	1,500	479,000
	後期	—	362,500	80,000	35,000	1,500	479,000
	計	—	725,000	160,000	70,000	3,000	958,000

2. 修士課程 1年制コース

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	453,000	90,000	35,000	1,500	779,500
	後期	—	453,000	90,000	35,000	1,500	579,500
	計	200,000	906,000	180,000	70,000	3,000	1,359,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

3. 博士後期課程

2012 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	300,000	55,000	35,000	1,500	591,500
	後期	—	300,000	55,000	35,000	1,500	391,500
	計	200,000	600,000	110,000	70,000	3,000	983,000
二年度	前期	—	302,000	55,000	35,000	1,500	393,500
	後期	—	302,000	55,000	35,000	1,500	393,500
	計	—	604,000	110,000	70,000	3,000	787,000
三年度	前期	—	304,000	55,000	35,000	1,500	395,500
	後期	—	304,000	55,000	35,000	1,500	395,500
	計	—	608,000	110,000	70,000	3,000	791,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

2011 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境整備費	実験演習料	学生健康増進互助会費	
二 年 度	前期	—	300,000	45,000	35,000	1,500	381,500
	後期	—	300,000	45,000	35,000	1,500	381,500
	計	—	600,000	90,000	70,000	3,000	763,000
三 年 度	前期	—	302,000	45,000	35,000	1,500	383,500
	後期	—	302,000	45,000	35,000	1,500	383,500
	計	—	604,000	90,000	70,000	3,000	767,000

2010 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験演習料	学生健康増進互助会費	
三 年 度	前期	—	300,000	40,000	35,000	1,500	376,500
	後期	—	300,000	40,000	35,000	1,500	376,500
	計	—	600,000	80,000	70,000	3,000	753,000

4. 所定年限以上在学する学生(延長生)

所定年限以上在学する学生(延長生)の学費は、学期ごとに以下のように徴収する。

判定	授業料	教育環境整備費 (施設費)	実験演習料
研究指導のみ残っている	算出基準 の 50%	算出基準 の 50%	算出基準 と同額
修了に必要な単位数に対する不足単位数 はあるが研究指導は修了している			
修了に必要な単位数に対する不足単位数 が 14 単位以下で研究指導と授業科目を 履修する場合	算出基準 の 70%		
修了に必要な単位数に対する不足単位数 が 15 単位以上で研究指導と授業科目を 履修する場合	算出基準 の 100%		

※この場合の不足単位数とは、卒業所要単位数と前学期終了時点での既得単位との差を指す。

※研究指導が終わっているか否かは修士論文または博士論文が合格しているか否かで判断する。

※算出基準とは、修士課程は2年生、博士後期課程は3年生。

他に、学生健康増進互助会費も併せて徴収する。

5. 学費未納による抹籍

学費未納の場合は、以下の日程で自動的に抹籍（本学学生の身分を失う）となり、学費が納入された学期末に遡って退学とみなす。この場合、学費未納学期の在学年数および成績が無効となるので注意すること。また、抹籍日以降、抹籍の取消しは一切認められない。

なお、特別の事情により学費納入が遅れる場合は「学費延納願」を提出すること。提出のない場合は、各学期の終了日を以て抹籍となる。抹籍日以前に離籍を希望する場合は、「退学願」を提出のこと。

「学費等延納願」を提出した場合（2012 年度学費例）

学費未納学期	学費等口座振替日	自動的に抹籍となる日	遡って退学とみなす日
前期	2012 年 5月1日	2013 年 1月10日	2012 年3月31日付
後期	2012 年10月1日	2013 年 7月 1日	2012 年9月20日付

「学費等延納願」を提出しない場合（2012 年度学費例）

学費未納学期	学費等口座振替日	自動的に抹籍となる日	遡って退学とみなす日
前期	2012 年 5月1日	2012 年 9月20日	2012 年3月31日付
後期	2012 年10月1日	2013 年 3月31日	2012 年9月20日付

※口座振替日が金融機関休業日の場合、学費等口座振替日は翌営業日。

※振込用紙による学費等納入の場合の振込期限は、前期 4 月 15 日、後期 10 月 1 日。

振込期限が金融機関休業日の場合、翌営業日。

※自動的に抹籍となる日より前までに学費等を納入すること。

XIV 学生生活等

1. 学籍番号

学生は各自学籍番号をもつ。

学籍番号は各自の氏名にも代わるほど重要なもので、間違わないように記憶しておく必要がある。

2012年4月に人間科学研究科の1年次に入学した者の学籍番号は次のとおりである。

3 8 1 2 C □ □ □ - □

a b c d e

a : 箇所コード (人間科学研究科)

b : 入学年度 (西暦下2桁)

c : 専攻コード : C-人間科学専攻

d : 個人番号

百の位は次の課程を示す

0~2: 修士課程 (2年制)、3: 修士課程1年制コース、5: 博士後期課程、9: 科目等履修生

e : チェックデジット (CD)

2. 学生証 (身分証明書)

本大学の学生には入学と同時に学生証(身分証明書)を交付する。本学ではカード式の学生証を使用する。この学生証(カード)は、その身分を証明するために必要であるばかりでなく、学習上・事務手続き上のいろいろな場合に必要となるので常に携帯し、破損・紛失のないように注意しなければならない。

- 1) 学生証は、学生証 (カード) と有効年度を明示した「裏面シール」とからなり、学生証 (カード) の裏面に「裏面シール」を貼り合わせてから、効力が生じる。「裏面シール」は、毎学年度末に所沢総合事務センターで交付するので、自分で貼り替えること。

なお、学生証は修了・退学など学生の身分がなくなる時点で所沢総合事務センターに返還しなければならない。

- 2) 学生証の交付を受けたら、速やかに学生証の裏面に「裏面シール」を貼り、学生証の氏名欄に、楷書で氏名を記入すること。

なお、漢字を持たない留学生は、裏面シールの氏名欄に印刷されているアルファベットと同じように、活字体で記入する。

以下の場合、すみやかに所沢総合事務センターに届け出て、必要に応じて再発行の手続きをとること。再発行の際はカラー写真 (縦4センチ×横3センチ) 1枚が必要となる。

種別	再発行有無	料金
住所変更	裏面シールのみ加筆訂正 または再発行	

紛失・破損	再発行	2,000 円
改姓(名)	再発行	無料
カード読込不能	再発行	無料
写真変更	再発行	無料(在学中1回に限る)

3. 各種証明書および学割証の発行

1) 証明書および学割証は、学生証および Waseda-net ID のパスワードにより自動証明書発行機（学内設置のどの機械からも発行可）で取得することができる。

卒業生の証明書は、所沢総合事務センターでの発行が原則であるが、至急証明書が必要な場合のみ早稲田キャンパスの校友課窓口にて取得することができる。

なお、学割証は年間10枚まで発行する。有効期間は発行日より3カ月間である。特別の理由（ボランティア活動・部活の遠征試合等）により10枚以上の学割証が必要になった場合は、所沢総合事務センターに申し出ること。

2) 通学証明書を必要とする者は所沢総合事務センターにおいて所定の手続きをとり、その交付を受けること。

3) 各種証明書の料金は次のとおりである。

証明書種別一覧表

種 別	種 別
在 学 証 明 書	そ の 他 証 明 書
成 績 証 明 書	英 文 在 学 証 明 書
卒 業（修了）見込証明書	成 績 証 明 書
卒 業（修了）証明書	卒 業（修了）見込証明書
成 績・卒 業見込証明書	卒 業（修了）証明書
成 績・卒 業 証 明 書	そ の 他 証 明 書
退 学 証 明 書	[証明書料金]
在 学 期 間 証 明 書	在籍者 1通 200 円
学 位 取 得 証 明 書	卒業者・退学者等 1通 300 円
教員免許状取得見込証明書	(ただし、卒業者がその卒業日の属する
教員免許状単位取得証明書	月末までに申請する証明書料金は、1通
進 学 調 査 書	200 円とする。)
健 康 診 断 証 明 書 ※	※健康診断証明書の料金は、1通 300 円で、 当該年度に大学の健康診断を受診した者に 限り発行する。
学 生 証（再 交 付）	2,000 円

4. 諸願および諸届

学生諸君が勉学上の事故や身分その他に異動があった場合には、必ずその事項についての願または届を提出しなければならない。以下その手続き要領を説明する。

1) 所沢総合事務センターへの提出書類

種別	用紙名	添付書類
留学	留学願	留学先機関が発行する入学許可証 または受入書
休学	休学願	病気で休学する場合は診断書
復学	復学願	病気で休学した場合は診断書 (就学可能を証明するもの)
退学	退学願	学生証
* 指導教員の署名・捺印を受けた各願提出後、教授会の承認を得ることとなる。 * 修士課程在籍者は、教授会前に学生担当教務主任との面談を行う。 * 日本学生支援機構奨学金受給者は、異動願も合わせて提出すること。		
住所変更(本人)	Waseda-netポータルまたは学生 情報変更届	—
住所変更(保証人)	学生情報変更届 改姓(名)届 保証人等変更届	—
改姓(名)		戸籍抄本
学費支払者変更		—
保証人等変更		—

2) 諸願・諸届提出についての注意

(1) 留学願

留学しようとする者は、『留学の手引き』（留学センター発行）を参照のこと。

なお、単位認定、在学年数等研究科における運用についての詳細は所沢総合事務センターに問い合わせること。

(2) 休学願

病気その他の正当な理由により、引き続いて2カ月以上授業（試験を含む）に出席することができない者は、研究科手続きを経て休学することができる。休学中でも授業料は指定された期日までに納入しなければならない。

なお、休学中の授業料および期間等詳細については、所沢総合事務センターに問い合わせること。

(3) 復学願

留学・休学は復学が前提であるので、必ず研究科手続きを経て、復学許可を得なければならない。

なお、復学時期・復学後の授業料についての詳細は所沢総合事務センターに問い合わせること。

(4) 退学願

学年の途中で退学する場合でも、その期の学費を納めなければならない。納入していない場合は、退学扱いとはせず抹籍扱いとする。

5. 奨学金制度

本学の奨学金制度は、本学独自の大隈記念奨学金・小野梓記念奨学金・若手研究者養成奨学金などの学内奨学金をはじめ、日本学生支援機構・民間団体・地方公共団体の奨学金がある。

いずれの奨学金も、人物・学業成績が優秀でありながら、経済的理由により修学が困難な学生に給付または貸与することによって教育の機会均等を図るとともに、社会に貢献する人材の

育成を目的としている。

これらの奨学金を受けるには、所沢総合事務センターで配付している「CHALLENGE(奨学金情報大学院学生用)」を受け取り、これにしたがって必要な手続きを行うことになる。

なお、奨学金の登録時期は、新入生は3月から4月初旬頃、在學生は2月から3月中旬頃であるので、それ以前に「CHALLENGE(奨学金情報) 大学院学生用」を受け取る必要がある。

6. 各種補助

(1) 複写代補助費

博士後期課程在學者(助手・特別研究員DC採用者・休學者は除く)に対して、年間5,000円の補助(5,000円に満たない申請でも1人年間1回限り)を行っている。補助の対象は複写代(コピーカード配付)、学会参加費、学会年会費、論文投稿料で、受付時期については、その都度掲示で通知する。

(2) 国際会議論文発表補助費

博士後期課程の學生に対して、国際会議・シンポジウム等に参加し、研究論文等の発表を行う際に必要な経費(①登録料、②海外旅費)の一部を補助する。

(補助対象者)

博士後期課程に在學する學生(助手、特別研究員DC奨学金の交付を受けている者、休學者は除く。ただし、海外留学による休學者は対象)。

(補助の対象となる国際会議等)

二ヶ国間以上の参加者を対象とする、専門学会等が主催する国際会議・シンポジウム等。

(補助額および補助回数)

①国際会議論文発表登録料：55,000円を上限として登録料(学会参加費)の一部を補助する。

學生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4月～3月・懇親会等は対象外)

②海外論文発表出張補助費：海外で行われる国際会議・シンポジウム等において研究論文の発表を行う場合、110,000円を上限として海外旅費の一部を補助する。原則として、学会開催の前日に開催地に到着し、学会終了当日に開催地を出発して、帰着に要するまでの期間を対象とし、それを越えた場合は補助されない場合がある。學生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4月～3月)

(申請手続)

「国際会議論文発表補助費交付申請書」に、申請者が研究論文等の発表を行うことが明記されている、国際会議・シンポジウム等のプログラム等および登録料が記載されているものと登録料の領収書等を添付し、所沢総合事務センターへ提出すること。

海外論文発表出張補助費も申請する場合は事前に「出張願」と会議名・開催日・会場名が記載されているプログラムの表紙等、航空賃見積書等を所沢総合事務センターへ提出し、後日、航空賃の領収書、航空券半券を提出すること。

7. 所沢総合事務センター

大学院に関する諸手続は、100号館4階にある所沢総合事務センターで行っている。開室時間は、午前9時から午後5時を原則としているが、期間により変更することがあるため、事務センター前に掲示される開室時間を確認すること。

なお、日曜日、国民の祝日、創立記念日、夏季・冬季休業中の土曜日、夏季事務所一斉休業期間、年末年始、大学が指定する休日は、事務センターを閉室する。ただし、これらの日で全学で授業を行う日は、事務センターを開室する。

また、土曜日は取り扱う業務が限定されるため、可能な限り平日に事務センターを利用されたい。

8. 掲示

大学および大学院からの学生に対する伝達事項は、すべて掲示によることになっているから、登校の際必ず見る習慣をつけること。

掲示を見落とすと、思いがけない重大な結果を招くことがあるから十分注意すること。

掲示板は、教務に関する一切のこと、奨学金関係、大学および大学院からの伝達、その他事務所からの連絡などに使用する。

なお、本研究科の掲示板は、Dゾーン(所沢総合事務センター・図書館開放閲覧室横)に設置されている。

9. 交通機関のストライキと授業

首都圏のJR等がストを実施した場合の授業休講措置について

1. JR等交通機関のストが実施された場合(ゼネスト)

首都圏におけるJRのストが

- A 午前0時までに中止された場合、平常どおり授業を行う。
- B 午前8時までに中止された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
- C 午前8時までに中止の決定がない場合は、終日休講とする。

上記はJRの順法闘争および私鉄のストには適用しない。

2. 首都圏JRの部分(拠点)ストが実施された場合平常通り授業を行う。

3. 首都圏JRの全面時限ストが実施された場合

- A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
- B 正午までストが実施された場合、6時限目(17時55分)から授業を行う。
- C 正午を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

4. JRを除く私鉄および都市交通のみのストが実施された場合平常通り授業を行う。

5. ただし、所沢キャンパスに設置された授業科目を受講する者については、上記1・2・3は適用されるが4については

- ① 西武鉄道の新宿線または池袋線のどちらか一方でもストが実施された場合
- ② ①の西武鉄道両線のストが実施されない場合でも、西武バスのストが実施された場合次のとおりとする。
- A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。

B 午前8時を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

10. 天候悪化（台風・大雪等）による休講等の取り扱いについて

台風、大雨、洪水、暴風、暴風雪、大雪等の天候悪化に伴いキャンパスが危険であると大学が判断した場合、授業休講・試験延期の措置をとることがある。

その場合は、原則として各時限の授業・試験開始60分前までに決定し、本学ホームページ (<http://www.waseda.jp/top/index-j.html>) にて広報・周知する。ただし、気象状況が悪化し、危険であると判断した場合は、60分前を過ぎても休講・試験の延期を決定することがある。

また、台風や大雪等、気象状況が時間の経過とともに悪化することが十分予測される場合は、前日に授業の休講・試験の延期措置の決定を行うことがある。

その場合は、前日の午後7時までに決定の判断を行い、本学ホームページに前日の午後9時までに掲載して広報・周知する。

なお、授業および試験が実施される場合でも、学生はキャンパスまでの交通経路内に気象庁による気象警報が発表され、気象状況等に鑑みて通学することが危険又は困難であると自身で判断し、欠席した場合には、所属研究科による承認済みの欠席届をもって、該当科目の担当教員へ申し出ること。

11. 自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について

所沢キャンパス内は、安全を確保するために、やむを得ない事情のない限り自動車・オートバイ（原付二輪車）の乗り入れはできない。

また、事情により自動車・オートバイで通学する場合にも、所定の申請書を所沢総合事務センターへ提出し、駐輪場・駐車場の利用許可を得なければならない。

自転車・自動車・オートバイでの通学にあたっては、交通の安全、災害・騒音の防止等をはかり、教育環境の保持に努めなければならない。

1) 自転車で通学する場合

本年度より書類の提出不要とする。各個人で盗難や路上放置のないよう施錠管理しなければならない。

尚、卒業等の理由で自転車が不要になった場合は、必ず自宅に持ち帰って所属する自治体のルールに則って廃棄すること。

2) 事情により自動車で通学する場合

(1) 駐車許可証の交付を受けるには、次の書類等を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

- ① 駐車許可申請書（所沢総合事務センターに備付）
- ② 学生証
- ③ 前年度分駐車許可証（前年度からの継続利用者のみ必要）
- ④ 駐車場利用料金（年額5,000円）

※ 駐車場利用料金については、年度途中からの申請でも同一額とする。

(2) 駐車許可証の有効期間は、交付を受けた年度（1年間）限りとする。次年度も利用する

場合には、新規の申請時と同様の手続が必要である。

(3) 駐車許可申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

(4) 駐車許可証を他人に貸与し、または他人から借用してはならない。

3) 事情によりオートバイ（原付二輪車）で通学する場合

(1) 登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

① 登録申請書（所沢総合事務センターに備付）

② 学生証

※ 駐輪場利用料金は無料

(2) 登録ステッカーの有効期限は、大学院在学中とする。

(3) 登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

4) 駐輪・駐車

(1) 自転車・自動車・オートバイは、それぞれ指定された駐輪場（駐輪指定場所）・駐車場に駐輪・駐車しなければならない。駐輪場（駐輪指定場所）・駐車場以外の駐輪・駐車は厳禁する。

① 自転車…正門自転車駐輪場または北門駐車場の自転車駐輪指定場所

② 自動車…北門駐車場

③ オートバイ…北門駐車場のオートバイ駐輪指定場所

ただし、フロンティア・リサーチセンターに所属する学生は、B地区の駐輪場・駐車場を利用することができる。また、フロンティア・リサーチセンターに所属する博士後期課程の学生は、南門の駐輪場を利用することができる。

(2) 正門駐輪場の利用時間は、8:00から22:30（土日は21:30）までとする。（この時間帯以外は閉門となる。）

(3) 自転車は登録ステッカーを後輪カバーに貼り、自動車は駐車許可証をフロントガラスに表を向けて置き、オートバイは登録ステッカーをナンバープレート付近に貼っておくこと。

5) 注意事項

(1) 登録した自転車・自動車・オートバイ以外の駐輪・駐車は厳禁する。

(2) 大学・大学院等の行事、施設・設備の工事等により、駐輪場・駐車場の使用制限をすることがある。

(3) 駐輪場・駐車場内では徐行し、所定の区分に従って、整然と駐輪・駐車すること。

(4) 駐輪場（駐輪指定場所）・駐車場以外の駐輪・駐車は、通行の妨げや災害時等の避難の妨げになるので厳禁する。駐輪場・駐車場以外に駐輪・駐車している場合、長期間放置されている場合は、管理上支障をきたすので排除または処分することがある。

(5) キャンパス内、駐輪場・駐車場で的人為的事故、損傷等は、当事者間で解決すること。また、駐輪・駐車中の事故、災害、盗難等には、大学は一切責任を負わないので、各自十分に注意すること。（警察が指導する「防犯登録」は必ずしておくこと。）

- (6) 上記の事項に違反した場合、または大学の警告に従わない場合は、駐輪場・駐車場の利用許可を取り消すことがある。

1 2. 早稲田大学保健センター所沢分室

学生食堂近くの100号館308号室にあり、次の業務を行っている。

内線 3308、緊急内線 3000、DI:04-2947-6706、Fax:04-2947-6804

業務内容

- (1) 学生・教職員の定期健康診断、特殊健康診断
- (2) 各種健康診断書の発行 (ただし、定期健康診断を受診した者に限る。)
- (3) 健康相談
- (4) スポーツ障害相談、リハビリ相談
- (5) 内科相談
- (6) 精神保健相談、心理相談相談
- ※心療内科医および心理専門相談員による相談は、予約制
- (7) 保健統計、健康管理に関する調査研究
- (8) 健康教育

1 3. 早稲田大学学生健康増進互助会(学生早健会)

学生早健会は、早稲田大学学生の相互扶助の精神に基づき、在学中に会員が医院で支払った保険診療適用分の医療費につき、年間60,000円までの補助を行うなど、学生の経済的負担をできる限り軽減させることを目的としている互助組合です。医療給付の他にも歯科検診・体組成検査等を実施しています。

会員資格や医療給付の詳細については、「早稲田大学学生健康増進互助会案内」(所沢総合事務センターに常備してある)を参照のこと。

ホームページ:<http://www.waseda.jp/student/hoken/gojyokai/>

1 4. 早稲田大学学生補償制度(傷害補償)

大学の管理下にある教育研究活動中(正課中、学校行事中、学校施設内にいる間、課外活動中(届出団体のみ)、通学中、施設間移動中等)において事故に遭って、ケガが発生した場合に補償する制度です。課外活動における事故にこの制度が適用される場合は、事前に「課外活動届」を提出すること。

詳細は、早稲田大学学生補償制度(傷害補償)Webページにて確認してください。

<http://www.waseda.jp/student/hoken/gakushouho/>

ご参考、早稲田大学学生補償制度(賠償責任補償)Webページ

<http://www.waseda.jp/student/hoken/gakubaiho/>

各届出団体は、大学外での諸活動(合宿・研究・見学旅行・試合など)を行う場合は、必ず、学生生活課事務所(学生会館1階)に事前に届け出ること。特に、早稲田大学学生補償制度(傷害補償)は本学の学生のみに適用されるため、他大生がサークル活動に参加する場合には個別に保険に加入する

こと。また、大学院におけるゼミ合宿は所沢総合事務センターへ、体育各部の部活動はオープン教育センター戸山分室(35号館)に事前の届け出を行うと共に、万一事故が発生した場合は、必ず事故報告を行うことを徹底すること。

特に、夏季・冬季授業休止期間中などに国外において課外活動を行う際には、事前に綿密な計画を立て、予備調査を行った上、届け出を行うと共に、早稲田大学学生であると同時に社会的責任を負うべき市民であることを自覚し、節度ある行動をとることを希望する。

X V 所沢図書館および中央図書館の利用について

はじめに

所沢図書館は、人間科学、スポーツ科学に関連する専門書や学習書、学術雑誌を中心に、利用者の一般教養に資する図書、雑誌等も収蔵している。また早稲田大学図書館では、近年、外国雑誌を中心に電子資料やデータベースの充実を図っており、全学的に学内ネットワークからアクセスできるようになっているが、所沢キャンパスの研究分野に関連するものとしては、PsycINFO、SPORTDiscus、医中誌Web、メディカルオンラインなどがある。

所沢図書館は、キャンパスのほぼ中央に位置し、中庭に面して「コ」の字形に配されている。館内は、開架図書エリア、雑誌バックナンバー書庫、新刊雑誌コーナー等の資料収蔵施設と、閲覧席、教職員・大学院学生を対象とした閲覧個室、グループ学習ができるグループ閲覧室といった閲覧用の施設からなっている。

利用について

詳細は所沢図書館ホームページ(<http://www.wul.waseda.ac.jp/TOKOROZAWA/index.html>)を参照のこと。

1. 休館時間(通常期間)

平日 9:00～21:00

土曜日 9:00～18:00

夏・冬季休業中の開館については、別途広報する。

2. 休館日

日曜日、祝日(授業実施日を除く)、休業日、夏・冬季休業期間の一定期間。

そのほか、業務上休館の必要がある場合。

3. 利用者カード

(1) 図書館の入館および図書の貸出には、学生証を利用者カードとして使用する。

(2) 学生証は、本人以外は使用できない。

4. 入退館

(1) 入館するときは、学生証を入館装置にスキャンさせて入館する。

(2) 退館口には、BDS(図書帯出防止装置)が設置されている。

図書を館外に帯出する時は、必ずカウンターで貸出手続きをすること。

5. 資料の探し方

(1) 全ての図書は、日本十進分類法(NDC)によって分類され、配架されている(但し、織田文庫を除く)。

(2) 所蔵資料は全て早稲田大学学術情報検索システム「WINE」(<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>)で検索することができる。

6. 貸出・返却

(1) 貸出・返却時は、カウンターで手続きをすること。なお、開館時間外の返却には、専用のブックポストが利用できる。

(2) 貸出は30冊まで、貸出期間は30日とする。

(3) 参考図書および雑誌等は、館外貸し出しはできない。

(4) 館内で閲覧した貸出手続きしていない図書は、書棚の元の位置に戻すか、返却台に置くこと。

(5) 返却期限日が過ぎても返却がない場合には、反則規定が適用される。

- (6) 貸出図書を大切に扱うこと。図書を紛失したり、汚損・破損したときには、ただちに届け出ること。原則として現物または相当金額を弁償することになる。

7. 利用上の注意

- (1) 館内では他人に迷惑をかけないよう、雑談などは慎むこと(開放閲覧室・グループ閲覧室を除く)。
(2) 館内は禁煙とする。
(3) ペットボトル・水筒など密閉できる飲料の持ち込みは認める(それ以外の飲食物の持ち込みは厳禁)。
(4) 入館の際は携帯電話のスイッチを切るか、マナーモードに設定すること。
(5) 館内では貴重品などは常に携帯し、紛失や盗難に気をつけること。

8. 施設の利用

(1) 開放閲覧室(52席)

エントランスホールから入るとすぐに開放閲覧室があり、ここは図書館の開館時間外も利用できる。

(2) 新聞閲覧コーナー

継続購入している新聞は18紙で、原則として前月分までを保管している。

(3) AV資料室

図書館所蔵のビデオ・DVD等を、AV資料室の機器で利用できる。複製や館外貸出は不可。

(4) 情報検索室(ブース9席)

WINE検索用端末機、学術情報検索専用端末機およびCD-ROM専用端末機、マイクロリーダー・プリンター等が利用できる。

(5) カウンター

入・退館ゲート脇にカウンターを配し、貸出・返却および問合せへの対応を行っている。書庫へのアプローチには新着図書コーナー、新刊一般雑誌および新書・文庫コーナーを置いている。

(6) グループ閲覧室(12席／2室)

グループでの学習および研究等を行うときに利用できる。

(7) コピーコーナー

プリペイドカード式複写機が、コピーコーナー、新刊学術雑誌コーナー、情報検索室に設置されている。図書館所蔵資料のコピーに限り利用できる。コピーカードは学内図書館共通。

(8) 参考図書コーナー

辞書、事典、便覧、ハンドブック、地図等の参考図書が配架されている。

(9) 閲覧席(202席)

和書が配架されている開架書架をはさんで、南側と北側に閲覧席がある。

(10) 新刊学術雑誌コーナー

①新刊学術雑誌コーナー、②コピーコーナー、③検索コーナー、④閲覧個室等で構成されている。

(11) バックナンバー書庫

合冊製本された雑誌が、和雑誌は誌名の五十音順、外国雑誌は誌名のアルファベット順に電動書架に配架されている。

(12) 洋書コーナー

洋書は、バックナンバー書庫手前の電動書架に配架されている。

中央図書館およびキャンパス図書館等の利用について

早稲田大学創立100周年記念事業の一環として計画され建設された中央図書館は、蔵書数・座席数ともに大学図書館としては日本有数の設備規模である。また、学内の各キャンパスには、高田早苗記念研究図書館、

戸山図書館、理工学図書館があり、それぞれ特色ある資料を収集し、利用に供している。

所沢図書館は、キャンパス図書館の一つとして位置づけられ、上記の各図書館と連携してサービスの拡充に努めている。WINEで各館の所蔵検索が可能であり、図書や文献複写の取り寄せもできる。また、中央図書館、各キャンパス図書館へ直接出向いて利用することもできる。各学部の学生読書室の利用もこれに準じる。

各図書館・図書室の利用案内を参照のこと。(http://www.wul.waseda.ac.jp/Libraries/index.html)

XVI 研究指導・演習・講義科目の概要

－修士課程－

【研究指導】

【地域・地球環境科学研究領域】

環境管理計画学研究指導 A（前期）・B（後期）

天野 正博

授業概要：地球規模での環境問題のうち、地球温暖化と森林との関係、熱帯林の減少問題あるいは我が国の山村の自然環境の劣化に焦点を当てながら、環境問題の状況を現地調査、統計データなどから分析するとともに、問題が生じる社会構造を明らかにするために現象をモデル化する手法を習得し、これを用いてどのような対策を立てるべきかを考える。また、環境問題を解決するための様々な国際的、国内的制度のあり方、国際間や住民の利害関係などを配慮しながら、環境問題の解決方法を検討する。具体的には関連する文献の読み方、得られたデータの統計解析手法、現象を表現するための数学モデル・計量地理学・GISなどの手法を習得して、特定の地域を対象にランドスケープレベルでの問題解決プロセスを策定する。こうした研究手法をベースにし、地球環境問題に関連したテーマを各自が設定し、共同研究の形で研究指導を行う。

授業の到達目標：具体的な研究対象地を設定し、そこで環境問題を分析するとともに、問題を解決するための具体的な提案ができるようになる。

人口学研究指導 A（前期）・B（後期）

阿藤 誠

授業概要：各人が自分の修士論文のために選択した研究テーマに即して、文献レビュー、理論的枠組みの構築、具体的仮説の導出、仮説検証のためのデータの検討、適切なデータ分析、分析結果の検討、それを踏まえた仮説・理論的枠組の再検討、政策提言などを順次発表し、それについての改善方法を指導し、高い水準の修士論文の作成を目指す。

授業の到達目標：専門分野における学会報告あるいは学術論文として発表可能な修士論文の作成を目標とする。

生物圏生態学研究指導 A（前期）・B（後期）

太田 俊二

授業概要：従来の学問領域で言えば、生態学と気象学の融合的な高度な研究を遂行するために必要事項を個別に指導する。設定された研究テーマにもとづいた指導を行うが、従来の生態学のみ、気象学のみ研究に終始することなく、融合的かつ人間活動の評価を含ませるようにしたい。このように人間科学を強く意識するものの、従来からの領域である個々の生態学や気象学のなかでも十分な研究成果が得られることも大切である。また、将来の人間社会、地球社会の予測研究といった社会的要請の強い領域に寄与できるような研究に発展できるように指導を進める。なお、修士課程での取り組みを修士論文の提出で集大成とするのではなく、可能な限り国際誌への投稿、受理までを目標としたい。そのための前段階として本科目においては、国内の学会発表の準備や投稿論文の書き方を中心に研究指導を行っていく。

授業の到達目標：可能な限り国際誌への投稿、受理されるまでを目標としたい。最低限の目標は、国内の学会発表（全国大会レベル）である。

環境生態学研究指導 A（前期）・B（後期）

森川 靖

授業概要：人間活動は生態系に影響を与え、ヒトの生存にかかわる環境問題となっている。本研究指導では、こうした人間活動と生態系の関係に理解を深め、環境問題の解決に向けた科学的根拠を養うことを目的とする。また、基礎が解れば応用がきく、を研究指導の理念としたい。

授業の到達目標：人間科学研究科は文理融合を理念とする。すなわち、院生が自らを文系あるいは理系という枠にとらわれることを排することが指導の要点である。

環境社会学研究指導 A（前期）・B（後期）**鳥越 皓之**

授業概要：論文作成にあたっての具体的な指導をおこなう。各自のテーマに合わせて指導をおこなうことになるが、それに必要な基本文献の検討なども随時おこなう必要がある。基本的には環境社会学の分野での研究指導になるだろう。なお、評価は学生の報告内容によって行なう。

授業の到達目標：専門分野の論文を作成できるようになることを目標とする。

社会人類学研究指導 A（前期）・B（後期）**矢野 敬生**

授業概要：〈異なる文化〉を対象として、それぞれの文化を成り立たせている社会システムを中心に解析することを目的とする。履修院生各自の研究課題に即して具体的な研究テーマを設定する（たとえば、「東南アジア島嶼部社会の分析視角に関する再検討」・「東アジア社会の基層構造」など）。こうした理論的研究に加えて、各自の研究発表・フィールド調査の指導・論文プロポーザルの作成等について研究指導を行う。

授業の到達目標：修士（博士）論文の基礎となるテーマについて、指導する。

水域環境学研究指導 A（前期）・B（後期）**井内 美郎**

授業概要：

A（前期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する調査計画立案、分析計画の立案及び実施、分析結果の考察を行う。

B（後期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する文献学習、研究成果の発表及び討論を行う。

授業の到達目標：

A（前期）

湖沼域等の陸水環境変遷史に関する調査計画立案、分析実施および分析結果の考察・発表が可能になる。

B（後期）

湖沼域等の陸水環境変遷史に関する文献調査によるテーマの発掘、学会等での研究成果発表が可能になる。

地域資源論研究指導 A（前期）・B（後期）**柏 雅之**

授業概要：地域資源管理の担い手システム再建、持続可能な農業生産、地球環境時代に相応した持続可能な地域システム、フードシステム再編、などについての論理と方法について指導する。そこではEU（欧州連合）での取組みからわが国が学べるものについても考えていく。なお、方法論としての農業農村経済学、環境経済学、食料経済学、地域政策論などについて初年度ではより理解を深めてもらう指導をおこなう。

授業の到達目標：国内の農業経済学、農村計画学などの諸学会、また東京大学・東京農工大学・早大の合同ゼミにおいて高い評価を受けうる研究報告ができるような能力を涵養する。

大気環境科学研究指導 A（前期）・B（後期）**松本 淳**

授業概要：大気環境科学分野について高度な研究を遂行するために必要事項を個別に指導する。特に、対流圏大気化学に関する視点から、設定されたテーマに基づいて指導を行う。具体的には、光化学オキシダントやその関連成分の大気動態について、室内実験・大気観測・モデル計算などに基づく研究を、テーマの中心に据える。ただし、本研究分野が学際的である性質上、化学のみに特化せずに、関連する諸分野との連携も考慮する。複合的・多様な視点から環境問題に対処できる人材の育成を最終的な目標とする。

授業の到達目標：文献・資料の調査、情報の収集、実験等の準備・実施・解析、成果の報告・発表、の作業を通して、大気環境科学の研究を遂行する能力を養う。学会等における成果発表を行なう。学術雑誌等への投稿の経験も積むことが望ましい。

動物行動生態学研究指導 A（前期）・B（後期）**三浦 慎悟**

授業概要：野生動物の行動生態学、個体群生態学、野生動物管理のうち、特定分野について深く学ぶために、専門学術誌の最新の論文、学会報告を中心に個別的に検討を行い、方法や知見、その意義について議論すると同時に、研究課題の設定、方法の検討、データの蓄積、進捗状況を点検し、論文作成へと導く。

授業の到達目標：研究課題の設定、方法の習得、論文の作成

[人間行動・環境科学研究領域]

学習動機づけ論研究指導 A（前期）・B（後期）

青柳 肇

授業概要：実験を年2回程度行ない、分析する。

授業の到達目標：修論の基礎となるデータを取ることに。

発達行動学研究指導 A（前期）・B（後期）

根ヶ山 光一

授業概要：各自の研究テーマについて、研究計画（いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差別化していかに originality を盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか）・実施（フィールドや実験場面をどう確保し、具体的な手続きをどうするか）・分析（どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか）・考察（データと仮説・先行研究をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか）・発表（研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか）の指導を行う。

授業の到達目標：発達行動学に関する研究を自ら計画・実施し、論文にまとめる力をつける。

建築計画学研究指導 A（前期）・B（後期）

佐野 友紀

授業概要：受講者各自が設定した建築・都市計画に関わるテーマについて、実習的な調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって現象を分析し、結論を導き出す方法を学ぶ。

授業では受講者の発表・ディスカッションを通して、問題解決の方法を探る。また、研究指導等を通して、成果を論文形式にまとめ、発表する。

授業の到達目標：建築、都市計画に関わる問題を発見し、分析を行うことで、問題解決方法を提案する手法を学ぶことを目標とする。

建築環境学研究指導 A（前期）・B（後期）

小島 隆矢

授業概要：住居・建築・都市などの環境と、それら環境に関する広い意味での顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識・行動・ニーズ・CS（顧客満足）に関わる諸問題をテーマとした研究指導を行う。各自、自主的に選んだテーマについて、1）社会的背景、既往研究などの調査、2）研究目的の設定、3）研究方法の検討・設定、4）調査・分析の実施、5）考察・結論の導出、というプロセスを遂行する。要所要所で進捗状況の発表・検討会を開催し、内容のブラッシュアップをはかる。成果は論文としてまとめ、発表する。

授業の到達目標：

- ・研究する意義がある「研究目的」を設定でき、「研究の背景」等からそれを無理なく納得できるよう説得力のある研究ストーリーを組み立てることができる。
- ・目的に対して合理的な「研究方法」を選択でき、適切な「分析・考察」を行える。
- ・独創性、新規性、汎用性、精緻性、実用性など、何らかの意味で魅力のある研究を遂行することが望ましい。

環境心理・環境デザイン研究指導 A（前期）・B（後期）

佐藤 将之

授業概要：建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。応用的な学問としての環境心理学を議論する。環境デザインの議論については、デザイナー向けだけでなく、一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標：フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材となること。」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材となる。」

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会科学研究指導 A（前期）・B（後期）

河西 宏祐

授業概要：労使関係論について文献講読とともに実態調査を実施する。それを通して論文作成を指導する。

授業の到達目標：研究論文を作成する。

文化生態学研究指導 A (前期)・B (後期)**蔵持 不三也**

授業概要：学会誌及び紀要などへの論文作成指導と学会・研究会発表のためのトレーニングを行う。

授業の到達目標：論文作成と学会・研究発表。

アジア社会論研究指導 A (前期)・B (後期)**店田 廣文**

授業概要：中東・北アフリカ、アジアおよび日本社会を対象として、各自の研究課題に即した実証的研究を実施するよう指導する。

授業の到達目標：実証的研究の企画・実施と分析能力を養成しつつ、論文作成および研究発表能力を修得すること。

移住論研究指導 A (前期)・B (後期)**森本 豊富**

授業概要：国内外の移民研究に関する最新動向を把握し、フィールドワークを中心とした調査研究をまとめ発表する。

授業の到達目標：

A (前期)

修士論文のための問題設定をし、学会発表の準備を行う。

B (後期)

修士論文のための問題設定を初期段階で明確にし、調査結果の成果を学会発表等で明らかにする。

家族社会学研究指導 A (前期)・B (後期)**池岡 義孝**

授業概要：

A (前期)

家族をめぐるさまざまな社会現象や家族問題を研究テーマとして研究指導を行う。研究のアプローチとしては、インタビューや会話データ、活字記録、画像・映像などの言説データやドキュメントデータにもとづく質的な研究法を重視する。そのため、質的な家族研究法および欧米と日本の家族研究史ないしは家族学説史の学習を、文献研究と実際の社会調査を併用したかたちで行うことにしたい。各人の研究については、これら基礎的な学習を前提にしたうえで取り組むよう指導する。

B (後期)

家族社会学研究指導Aで学習したさまざまな質的研究法のうち、受講生が取り組む方法を決めて、それについてより専門的に指導する。関連した調査法の歴史、研究史も文献によって詳しく検討し、同種の方法を用いたモデルとなるような先行研究についても学習する。その上で、テーマを定めて、具体的なデータ収集とデータ分析を試みることにしたい。

授業の到達目標：

A (前期)

家族をめぐるさまざまな社会現象や家族問題について、家族社会学の観点からそれを理解できるようにし、さらに、それにもとづいて各人の研究テーマを確定していく。研究のアプローチとしては、インタビューや会話データ、活字記録、画像・映像などの言説データやドキュメントデータにもとづく質的な研究法を学習し、またその前提となる質的な家族研究法および欧米と日本の家族研究史ないしは家族学説史の概要を、文献研究を中心に理解する。こうした基礎的な学習をふまえて、各人の研究に取り組むよう指導する。

B (後期)

家族社会学研究指導Aでの学習をふまえて、さまざまな質的研究法のうち、受講生が各人の研究で採用する方法についての理解をより深め、具体的なテーマのもと、その方法を用いた実際のデータ収集とデータ分析を試行的に実施することができるようになることを到達目標とする。

都市社会学研究指導 A (前期)・B (後期)**臼井 恒夫**

授業概要：都市は人間がつくった最大の創造物であるといわれる。しかし、人間のためにつくられたはずの都市は、しばしば人間の手を離れて一人歩きをしていく。現代の都市や都市社会を理解するためには、どのような視点が必要とされるのか。本研究指導では、都市社会学の研究を参照しながら、受講生の問題関心に沿った研究を進めていくための指導を行う。

授業の到達目標：

A（前期）

授業を通じて、研究の進め方やまとめ方について基本的な知識を習得する。

B（後期）

授業の中では受講生各自の問題関心や研究テーマを明確化することに重点を置く。各自の研究テーマに沿って報告を重ねながら、研究の方向性や進め方について指導を行う。

科学史・科学論研究指導 A（前期）・B（後期）

加藤 茂生

授業概要：受講生の関心に応じて、科学史、科学哲学、科学社会学など広い意味での科学論の研究の指導を行う。

一次資料および二次資料を読解し、討論を行うという演習形式で行う。

科学史、科学哲学、科学社会学など広い意味での科学論に関する研究方法の指導、研究テーマの設定の仕方、研究計画の立案、文献の検索方法、文書の探索方法、論文の書き方などを指導する。

授業の到達目標：科学史・科学論分野での修士論文を書ける能力を身につけること。

物質文化論研究指導 A（前期）・B（後期）

谷川 章雄

授業概要：考古学は、主として発掘調査の成果をもとに、モノと人間との関係を読み解く学問である。また、考古学は調査・研究のさまざまなレベルにおいて、歴史学・民俗学をはじめとする他の領域との接点をもっており、総合的、学際的方向性を本質的に内包している分野である。こうした視点にもとづいて、各自が論文を作成していく上での資料の特質と限界と観察・記載の方法、分析の方法、解釈の方向性などについて指導する。

授業の到達目標：修士論文の完成を到達目標とする。

表象文化論研究指導 A（前期）・B（後期）

中村 要

授業概要：人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標：表象文化研究について理解を深め、各自の研究成果に到達すること。

政治社会文化論研究指導 A（前期）・B（後期）

村上 公子

授業概要：ドイツの過去との取り組みを見る。取り上げる分野は履習者の研究分野を考慮して決定する。

授業の到達目標：修士論文執筆の準備が行えるようにする。

技術文化論研究指導 A（前期）・B（後期）

余語 琢磨

授業概要：技術文化論とは、技術／テクノロジーの特性とその利用に関連する人々の世界観を中心に、モノ・ヒト・コトの民俗的・歴史的な相互作用を読み解く研究である。したがって本研究指導では、文献資料ないしはフィールドワークで得たデータをもとに、1. 自然環境から資源を利用する技術、および関連する人間の営みを探求する生業史・生業システム研究、2. 技術や道具・生産物と、関連する社会組織・流通・消費・儀礼・表象・意味などの関係を探求する生活文化研究、3. 身体を加工・治療・介護する技術と情報および心身の相互作用を探求する医療人類学的研究を中心テーマとし、対象フィールドに日本および東南アジアを選ぶ大学院生に対して、修士論文の完成をゴールとする実践的な指導を行う。

授業の到達目標：

- ・技術史・技術文化論演習での理論的な蓄積を踏まえたうえで、民族誌的フィールドワーク（エスノグラフィ）が自ら実践できる。
- ・文献資料やフィールドデータの整理とイーミックな分析、および関連先行研究を踏まえたエティックな考察が多角的に展開できる。

地域文化論研究指導 A（前期）・B（後期）**竹中 宏子**

授業概要：

A（前期）

できる限りローカルな地点、そしてより具体的な問題から研究を進めることにより（＝地域研究）、現代社会の本質が見えてくる。本研究指導では、主にヨーロッパを対象として、地域研究について当分野と大いに関連する文化・社会人類学、社会学、歴史学などを基礎にした文献から、地域文化および地域社会の研究方法を探求していく。指導教員はこれまでスペインの小都市における祝祭と地域アイデンティティの関係、世界遺産の地域的な解釈・取り込みに関して調査・研究を行い、地域文化の形成過程における住民と地方行政や国家との関係を考察してきた。学生は指導教員の地域とテーマに限定されることなく、ヨーロッパにおけるものであれば広く研究テーマを選択することが可能であるが、対象地域の言語を習得していることが要求される。

B（後期）

地域文化論研究指導Aに続き同様の指導を行って行くが、より各学生の修士論文のテーマに合った文献を用いながら指導が行われる。指導は、学生個人のテーマに沿った形で行われ、主に文献に関するコメントなどを通じた議論、またフィールドワーク計画およびその過程での助言で実施される。

授業の到達目標：学生個人が立てた研究計画に従い、修士論文作成が円滑に進められることが最終的な到達目標である。

[健康・生命医科学研究領域]**生体機能学研究指導 A（前期）・B（後期）****今泉 和彦**

授業概要：骨格筋の可塑性（肥大・萎縮）とその調節機構、微量元素（亜鉛・鉄）欠乏による遺伝子発現および生体情報伝達シグナル応答とその機構、ドーピング作動薬（ β_2 -アゴニスト）・茶カテキン・アルコール・香辛料摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、主として動物実験を中心として研究する。これらの研究を推進すると共に、日々の研究、論文の検索・読み方、実験法の測定・解析の習得および研究発表・論文の書き方・纏め方などについて直接指導・助言する。

授業の到達目標：授業概要を具体的に理解するために Powerpoint で説明できるようにすると共に、実験の測定法と解析法を習得することを目標とする。

神経内分泌学研究指導 A（前期）・B（後期）**山内 兄人**

授業概要：生殖細胞の成熟、排卵、性行動、妊娠、授乳、母性行動にいたる子どもをつくる雌の生殖機能は、脳と生殖器官、それに、内分泌器官の相互作用により正常に保たれている。雄においても精子形成や性行動は神経とホルモンにより制御されている。雌雄の生殖機能には大きな違いがあるが、それは脳の性分化の結果によるものである。当研究指導では、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を、神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学、および、神経行動学的手法により解析し、脳の性差およびその機序を明らかにする。生殖機能に関しては特にセロトニン神経系に着目している。また、植物エストロゲンの動物の生殖への影響も調べている。

授業の到達目標：英文雑誌に投稿する又は投稿できる程度の実験結果をだす。

運動制御・バイオメカニクス研究指導 A（前期）・B（後期）**鈴木 秀次**

授業概要：身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。本研究指導の特徴は、姿勢維持やロコモーション中における身体運動を運動制御とバイオメカニクスの領域から総合的に研究し、動きの仕組みを解明するところにある。よって指導内容は、その動きが神経的にどのように制御されているかを研究する神経生理の領域と、動きについて研究するキネマティクス、そしてその動きの起こりとなる力について研究するキネティクスの領域が中心となる。そのため、上記の研究課題に関連の深い文献を読み、十分な討論を行うと共に、特定の研究課題に対する問題点の所在を明らかにし、修士論文を纏める上での科学的なものの見方や考え方を養うことを目的とする。

授業の到達目標：修士論文を纏める。

統合生理学研究指導 A（前期）・B（後期）**永島 計**

授業概要：体温、体液の調節機構の理解と研究方法の習得を大きな柱とする。

具体的には、1) 生理学的、2) 組織科学的、3) 分子生物学的、手法を用いて体温調節機構と体液調節機構の相互関係を明らかにしておくことであり、その既存の知識を深め、最新の情報を習得し、自らのテーマをもとに新しい知見を得ていくことにある。

現在、担当教員の所属研究室で進行しているテーマは1) 体温の概日リズムと代謝の調節メカニズム、2) 女性ホルモンの体温調節に及ぼす影響、3) 脱水時の人の温度感覚の変化、4) 女性の温度感覚、にもとづいて行われている。

授業の到達目標：上記のテーマを中心に理解を深めていく。

健康医学研究指導 A（前期）・B（後期）

河手 典彦

授業概要：わが国が世界に冠たる長寿国の地位を築いていることの背景には、医学の進歩と普及、それを支えている特異的とさえ言える医療保険制度の存在など、貢献する多岐にわたる要素が関連している。真に人生を謳歌するためにも、単なる生命の延長に止まらずに健康寿命を延長することが極めて重要であり、健康医学研究もこの目標を実現するための方策を検討する一領域として捉えることができる。この健康医学研究指導の根幹は、“Medical Aspects of Health Maintenance”にある。即ち、臨床医学的要素に関連性の高い研究領域が特色である。演習（Ⅰ）、（Ⅱ）を履修することによって健康医学の多岐にわたる取り組みの現状を可能な限り正確に理解し、それらの領域の中から教員と協議の上で各自が選択した課題について、調査、研究を開始する。適時、応談による指針提示、修正指導などを交えながら研究を進捗させ、論文を完成させる。

授業の到達目標：この健康医学研究指導の根幹である“Medical Aspects of Health Maintenance”全般について、基本的な医学知識を正確に習得し、その上で実際の臨床医療の実践について論述することができる。

応用健康科学研究指導 A（前期）・B（後期）

竹中 晃二

授業概要：身体活動・運動、食生活およびストレスマネジメントなどの健康行動の採択、継続、および逆戻り予防に関する研究を行う。特に、ヘルスプロモーションや生活習慣病予防に果たす生活活動や運動の行動変容研究が中心となる。主な研究課題は、身体活動量増強を目的とした行動変容介入の効果、定期的な身体活動・運動習慣がメンタル・ヘルスに及ぼす影響、一過性の身体活動・運動が気分および感情の変容に及ぼす効果、身体活動とQOLおよびウェルネスの関係、身体的セルフエフィカシーと心理的安寧、心理的安寧強化のための運動療法、運動アドヒアランス強化の方法、運動アディクションの評価基準と予防、身体運動、瞑想、およびリラクゼーションの関係、子どものストレス・マネジメント教育、勤労者のストレス対処、高齢者・障害者の健康関連QOLおよびウェルネス、女性のスポーツ参加に伴う諸問題（月経障害、摂食障害、抑うつなど）とその予防、スポーツ選手のストレス・マネジメント、スポーツ障害の予防と心理的ケアである。

授業の到達目標：健康行動変容に関わる理論・モデルおよび技法について、またこれらの実践適用について理解し、自身の研究との関係性を理解できる。

医療人類学研究指導 A（前期）・B（後期）

辻内 琢也

授業概要：健康や病い（health and illness）、そして医療や臨床の現実とは、身体的・心理的・社会的・文化的（bio-psycho-socio-cultural）な複合産物として構築されている。医療人類学では、その複合産物に影響を与える生物生態学および社会文化的要因について、人類の歴史を背景に比較文化的に探求する。

<Keyword>病いの語り、ナラティブ・ベイスド・メディスン（NBM）、保健医療行動、質的心理学研究、補完代替医療、東洋医学、世界の伝統医学、医療の文化人類学、臨床人類学、スピリチュアリティ

授業の到達目標：災厄や苦悩の表象としての病いの語り（narrative）、近代の生物医学システムの抱える諸課題、様々な世界各地域における健康増進（health-promotion）運動、瞑想・気功などの宗教的・シャーマニック医療における“癒し”の生物生態学的メカニズム・社会文化的メカニズムの解明、などの研究を目指す。

分子神経科学研究指導 A（前期）・B（後期）

榊原 伸一

授業概要：最近発表された本人の研究領域の先端的な論文を紹介、輪読し、プレゼンテーションおよび質疑応答を行う。

授業の到達目標：神経発生に関する最新の知見を得る。

基礎老化学研究指導 A（前期）・B（後期）

千葉 卓哉

授業概要：老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分

子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱うため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な知識を学びながら実際に実験を行う。

授業の到達目標：基礎老化学研究に必要な基本的学説および研究法を理解し、修士論文を作成する際の基盤となる知識を習得する。

〔健康福祉科学研究領域〕

福祉産業学研究指導 A（前期）・B（後期）

可部 明克

授業概要：演習（１）・演習（２）をベースに、健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業との共同研究を中心として、実践的な開発プロジェクトを実施する。

さらに、MOT（Management of Technology）の基本となる技術・経営の知識と実践的なプロジェクト経験により、企業での研究開発力の養成を行う。

授業の到達目標：ロボットの要素技術を含むシステム開発を行い、試作品を完成させ対外的な発表および評価・改善を行う。

老年社会福祉学研究指導 A（前期）・B（後期）

加瀬 裕子

授業概要：高齢化や少子化によって生じる個人的社会的問題について、老年社会福祉学における研究をレビューし、問題意識から仮説モデルの策定、研究方法の設定へと研究計画を展開する方法を指導する。

授業の到達目標：高齢化先進諸国が行っている政策の共通点について理解し、わが国の高齢者政策について自分の意見を述べる事が出来るようになることを目指す。

バイオエシックス研究指導 A（前期）・B（後期）

土田 友章

授業概要：履修者の研究主題について、随時、協議・検討する。それぞれの主題から、さらにバイオエシックス全体を展望できるよう支援する。

授業の到達目標：倫理についての洞察を獲得し、修士論文作成と学会発表にも備える。

スポーツ健康マネジメント論研究指導 A（前期）・B（後期）

吉村 正

授業概要：スポーツ健康マネジメントを専門的に学習する場合、その現場を知ることが極めて重要である。本研究指導では、スポーツや健康に関連する組織や企業に出向き、あるいはチームやグループに合流し、そこでマネジメントの方法を学習する。

日々の研究・教育活動では、指導者の在り方学習、コーチング技術の習得学習、関連文献の講読、レジュメや論文作成の指導等を行う。

授業の到達目標：授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかり説明出来るようになることを目標とする。

社会保障政策論研究指導 A（前期）・B（後期）

植村 尚史

授業概要：社会保障政策は、年金政策、医療政策、介護政策等幅広い範囲にわたっているため、その中から具体的テーマを選定し研究を進める。研究方法についても、テーマによって異なるため、その内容に応じた研究方法を選定する。

授業の到達目標：研究論文の作成、発表。

予防医学研究指導 A（前期）・B（後期）

町田 和彦

授業概要：21世紀の日本は人類がかつて経験しなかった程の急速な高齢社会を迎えようとしている。戦後順調に発展を遂げてきた日本経済はバブル経済の破綻以降立ち直りをみせず、異常な累積債務を抱え、政治の混乱もあり、先の見えない社会となり、人々の気持ちも荒んだものになるつつある。一方世界的な視野から見ても、未成熟な民主主義、環境破壊の容認、格差社会の容認のもと経済発展のみを優先する巨大人口を要する発展諸国の台頭は民主主義社会の根幹を揺るがせ、政治的混乱、深刻な環境問題、テロの横行、食糧や資源の分配、経済発展から取り残された発展途上国の問題などから来る多くの問題を生み、今まで世界政治に無関心で、危機管理意識の薄い日本人に深刻な影響を与えるものと思われる。

このような厳しい内外の状況下のもとでは予防医学も根本的な改革が必要とされる。今迄の予防医学は個々の疾病を対策を中心とした医学部教育の一環として行われてきたが、これからは生命延長の時代ではなく、単に疾病対策にとどまらず、疾病の起こる原因を人間をとりまく自然科学的、社会科学的、人文科学的要因から解明し、胎内からの健康教育の充実、各時代における心身に与える影響の除去を柱とした政策を志向し、各自が健康の維持・増進を理解するだけでなくそれに向けて実行し、生きがいのある一生を送れるような社会を作ることが必要である。そのための教育を院生と考えていきたいと思う。

授業の到達目標：修士課程の学生は授業概要にある様な新しい概念の予防医学を学んでもらいたいので、当研究室の学部教育を受けていない院生に対してはより基礎的なことも学んでもらいつつ、授業概要で示されたような予防医学をより多くの人に理解してもらうにはどのようなことを行っていくたらいのかを学んでもらいたいと思う。

幼少児福祉教育論研究指導 A（前期）・B（後期）

前橋 明

授業概要：

A（前期）

子どもたちが心身ともに健康で生き生きとした暮らしが送れるように、これまで数多くの福祉・幼少児健康教育研究がなされ、あわせて児童家庭福祉施策が講じられてきた。しかし、近年になって、子どもたちの抱える心身や生活上の問題は、非常に複雑、多岐にわたり、新たな展開が迫られている。

こうした社会や生活の背景を踏まえながら、近年のこの分野における研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、研究計画の実施と論文の作成、成果の発表ができるよう、研究指導を展開する。

B（後期）

子どもたちが心身ともに健康で生き生きとした暮らしが送れるように、これまで数多くの福祉・幼少児健康教育研究がなされ、あわせて児童家庭福祉施策が講じられてきた。しかし、近年になって、子どもたちの抱える心身や生活上の問題は、非常に複雑、多岐にわたり、新たな展開が迫られている。

こうした社会や生活の背景を踏まえながら、近年のこの分野における研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、研究計画の実践と論文の作成、成果の発表ができるよう、研究指導を展開する。

授業の到達目標：子どもの福祉教育や健康福祉分野における研究動向を学ぶとともに、各自の研究計画の実施と論文の作成、成果の発表ができるようになる。

緩和医療学・臨床死生学研究指導 A（前期）・B（後期）

小野 充一

授業概要：個人の“死”を、“生命の終わり”と捉える視点から、新しい世代への“生命の伝承”という視点に変換していくことで獲得する様々な“受容の概念”について、伝承されるものを受け止める側と伝える側の両極から検証し、支える技術、支えられる方法、関係性調整の方法などを具体的に研究する作業を指導する。

授業の到達目標：

- 1）緩和医療学あるいは臨床死生学における質的研究手法の習得
- 2）死生の臨床現場におけるフィールド調査を実施し研究結果をまとめて学会発表を行う
- 3）研究結果をまとめて投稿論文としてまとめて発表する

児童家庭福祉論研究指導 A（前期）・B（後期）

川名 はつ子

授業概要：

A（前期）

実親の下で暮らすことの出来ない被虐待児や、障害児・非行少年等の社会的養護と自立支援をテーマに、子どもとその家族の支援について理論的・実践的に考究し、当事者のニーズに沿った支援のあり方を探っていく。

修士論文は、原則として養育家庭、ファミリーホーム、児童福祉施設（乳児院や児童養護施設、障害児の入所・通所施設）等でフィールドワークを行って作成する。

そのために学内外の研究会や里親大会、学会等に積極的に参加し、当事者との接触・フィールドの開拓・情報の収集・知識や援助技術の習得に努めることを推奨する。

B（後期）

実親の下で暮らすことの出来ない被虐待児や、障害児・非行少年等の社会的養護と自立支援をテーマに、子どもとその家族の支援について理論的・実践的に考究し、当事者のニーズに沿った援助のあり方を探っていく。

修士論文は、原則として養育家庭、ファミリーホーム、児童福祉施設（乳児院や児童養護施設、障害児の入所・

通所施設）等でフィールドワークを行って作成する。

そのために学内外の研究会や里親大会、学会等に積極的に参加し、当事者との接触・フィールドの開拓・情報の収集・知識や援助技術の習得に努めることを推奨する。

授業の到達目標：個別の支援から発展し、地域福祉につながる支援のあり方を考察・提案できることを目標とする。

精神保健福祉論研究指導 A（前期）・B（後期）

田中 英樹

授業概要：精神保健福祉専門教育は、精神障害及び広く国民の精神的健康を対象に、社会福祉の視座から解決課題に接近する学問です。具体的には、精神科リハビリテーションを中心とした根拠に基づく臨床実践（EBCP）、精神障害者のニーズオリエンテッドの立場、精神保健福祉の研究手法や研究論文の書き方、文献レビューの方法、学会や学術誌での発表及びプレゼンテーションスキルの習得、そしてより実践的な講義や演習を展開します。

授業の到達目標：大学院では、将来の福祉現場での指導的立場やスペシャリストの養成もしくは、教育と研究における基礎能力を備え創造性豊かな自立した研究者を育成します。教育方法では、精神保健福祉研究で必要となる問題意識の涵養、思考の幅を広げ豊かな感性を培うこと、共同研究できる能力、教育指導の方法を含め必要な能力を身につけること、実践現場での力量形成などを主眼とします。そのために、アジアの主要国でのフィールド調査に同行させます。

健康福祉支援工学研究指導 A（前期）・B（後期）

畠山 卓朗

授業概要：障がいがある人や高齢者が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について、工学的な側面のみならず、人の心理面にも着目しながら実践的な研究を行う。

授業の到達目標：各自の関心事を具体的なテーマにまとめあげ、研究計画の立案、実施、評価、論文作成、発表へつながることを目標とする。

健康福祉管理論研究指導 A（前期）・B（後期）

扇原 淳

授業概要：健康・福祉に関わる「情報」は、人々の様々な行動に影響し、個人レベルから集団レベルで、その健康に大きく影響する。健康・福祉に関連する問題の解決には、「情報」を量的に扱う多角的なアプローチに加えて、情報発信者側と情報利用者とのよりよいコミュニケーションが不可欠である。

これらの事柄を踏まえた上で、研究する際に求められる、「情報」を横断的、包括的に扱うための原理や方法論について、調査研究やフィールドでの研究活動を通して指導する。

また、国際・国内学会での発表とともに学術論文の執筆・投稿について積極的に指導する。

授業の到達目標：

- 1) 「情報」を横断的、包括的に扱うための原理や方法論を説明できる。
- 2) 国際・国内学会で自身の研究を発表できる。

ソーシャルワーク論研究指導 A（前期）・B（後期）

岩崎 香

授業概要：社会福祉基礎構造改革における福祉サービス供給システムの転換により、福祉も契約の時代を迎えた。諸サービスを受ける際のクライアントの契約能力が問われ、判断能力が不十分な高齢者、障害者等の人権がクローズアップされている。契約における対等性の担保、つまり、パートナーシップの形成は共生社会を志向する現在の国際的な潮流の中でも強調されており、障害者の権利条約の採択といった動きに呼応するものでもある。そうしたシステムがクライアントのニーズ実現に向けて機能するために必要とされるソーシャルワーカーの実践力とは何だろうか。フィールドワーク等を通して検討し、その根底を支えるソーシャルワークの価値や倫理に関して考察する。

授業の到達目標：実践に寄与する研究とは何かということに関して、最近の研究動向を含めて検討し、自分自身が取り組むテーマを明確化する。

リハビリテーション科学研究指導 A（前期）・B（後期）

村岡 慶裕

授業概要：心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引きのばす方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評

価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標：授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

〔臨床心理学研究領域〕

心身医学研究指導 A（前期）・B（後期）

野村 忍

授業概要：心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。心身症、神経症やうつ病の診断・治療に関わる研究のみならず、健康者における心身相関の研究やヘルスプロモーションに関わる研究も行っている。この科目では、修士論文作成の指導（グループ指導ならびに個人指導）を行う。各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。

授業の到達目標：研究計画の立案・実施、修士論文作成。

認知行動カウンセリング学研究指導 A（前期）・B（後期）

根建 金男

授業概要：近年、認知行動カウンセリングの発展はめざましい。特に、不安障害、強迫性障害、統合失調症などの新しいモデルが提示され、それらをめぐる実証研究も盛んである。一方、従来の典型的な合理的認知行動カウンセリングの限界を乗り越えるべく登場した構成主義的カウンセリングも活発になってきた。構成主義的カウンセリングでは、人の一生の発達を視野にいれたうえで、人が世界をどう構成（認識）しているかをその人の側から真剣に理解し、アプローチしようとする。このことは、エビデンス重視の典型的な認知行動カウンセリングの難点を補い発展させるうえで重要である。カウンセリングは精神疾患のある人に限らず健康者をも広く対象とするものであることを念頭に置いたうえで、上記の研究動向を更に推し進めるような研究を行うことが必要である。そこで、この研究指導では、認知行動カウンセリング学あるいはそれと関連する領域の研究を実施し、修士論文をまとめることができるように指導する。

授業の到達目標：認知行動カウンセリングや構成主義的カウンセリングの理念を認識したうえで、修士論文を作成する、あるいはそのための準備をする。

学校カウンセリング学研究指導 A（前期）・B（後期）

菅野 純

授業概要：学校カウンセリングは、単に学校内でのカウンセリング活動というレベルにとどまらず、乳幼児期の発達心理学、発達障害心理学、そして児童期から青年期に至る臨床心理学、カウンセリング心理学、教育臨床心理学、教育社会心理学、教育心理学、家族心理学などを含む総合的領域である。ここでは学校カウンセリング学演習（１）（２）と教育心理臨床体験を踏まえ、各自が定めたテーマに沿って研究をすすめていく。

授業の到達目標：修士論文の完成を到達目標とする。

行動臨床心理学研究指導 A（前期）・B（後期）

嶋田 洋徳

授業概要：臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、（認知）行動論的アプローチを用いて研究と実践を行う。特に、不安、抑うつ、心理的ストレス、学校不適応、職場不適応、心身症などについて、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状の形成と維持、治療効果に及ぼす個人差変数の検討などが主なテーマとなる。

授業の到達目標：修士論文の作成にあたり、必要な理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

産業カウンセリング学研究指導 A（前期）・B（後期）

鈴木 伸一

授業概要：うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関与する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱えやすい生活上の問題や罹患しやすい身体疾患（生活習慣病や慢性疾患など）の予防およびケアにも焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した研究を行う。

授業の到達目標：研究室で行っている「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究班」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究班」、および「健康づくり・ストレスマネジメントに関する研究班」のプロジェクトに参画するとともに、各プロジェクトとリンクした個別の研究テーマを選定し、取り組んでいく。

臨床心理アセスメント学研究指導 A（前期）・B（後期）

熊野 宏昭

授業概要：人間はどうして変わることができるのか、その過程をどうすれば測定できるか、「治療の科学科」はいかにして実現できるか、に焦点を当てて行く。そのためには、心理的变化の基礎メカニズムを追及し、アセスメントの方法論を洗練化し、ケースフォーミュレーションの最適化と治療過程のデータベース化を進めることが必要になる。そこで、臨床行動分析（アクセプタンス&コミットメント・セラピー：ACT）やマインドフルネスに関わる基礎研究及び介入研究、注意訓練やマインドフルネスが前頭葉機能と心理行動的な介入効果に及ぼす影響の研究、そして「治療・援助プロセスの科学化」を目指す臨床心理アセスメントに関わる研究などの指導を行う。

授業の到達目標：臨床行動分析と認知神経科学の基礎と応用について理解し、自らの研究の方法論として使いこなせるようになることを目標とする。

〔感性認知情報システム研究領域〕

感性認知科学研究指導 A（前期）・B（後期）

齋藤 美穂

授業概要：

A（前期）

情報化社会におけるバーチャルな空間は各国間の隔たりをますます小さくしている。このような環境において他の文化における感性の違いを知ることはグローバルなマーケティング戦略を展開する為に必要不可欠と考えられる。

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法も多岐にわたる。そこでこの研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、情報化社会においてこれからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ（具体的には「感性認知科学演習（１）」および「感性認知科学演習（２）」に記載）に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導、修士論文に対する直接的な指導を行っていく。

B（後期）

情報化社会におけるバーチャルな空間は各国間の隔たりをますます小さくしている。このような環境において他の文化における感性の違いを知ることはグローバルなマーケティング戦略を展開する為に必要不可欠と考えられる。

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法も多岐にわたる。そこでこの研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、情報化社会においてこれからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ（具体的には「感性認知科学演習（１）」および「感性認知科学演習（２）」に記載）に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導など論文に対する直接的な指導を行っていく。

授業の到達目標：

A（前期）

具体的研究テーマは、１）色彩やデザインに関する嗜好と認知、２）色彩やデザインが及ぼす心理的効果や生理的効果、３）香りや色、音や色などの感覚協調、４）表情や化粧などの対人認知、５）これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主としている。これらに沿って吟味された各人の具体的研究テーマについて、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね修士論文に対する直接的な指導を行っていく。修士論文の提出が目

標となるが、その他にも、学会発表（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会、国際色彩学会など）や投稿論文などに関する指導を通して、感性認知科学への理解を深めて行く。

B（後期）

具体的研究テーマは、1）色彩やデザインに関する嗜好と認知、2）色彩やデザインが及ぼす心理的効果や生理的効果、3）香りや色、音と色などの感覚協調、4）表情や化粧などの対人認知、5）これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主としている。これらに沿って吟味された各人の具体的研究テーマについて、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね修士論文に対する直接的な指導を行っていく。修士論文の提出が目標となるが、その他にも、学会発表（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会、国際色彩学会など）や投稿論文に関する指導を通して感性認知科学への知見を深めることを到達目標とする。

安全人間工学研究指導 A（前期）・B（後期）

石田 敏郎

授業概要：安全人間工学は、人間を取りまく機械や環境および他の人間との関わりを如何にしたら安全を保てるかを考える科学である。現在システムの巨大化や複雑化に伴い、人間が意図しない事故や不具合が発生している。人間の行動的側面を検討することで、事故を未然に防止するための方策を中心に研究している。そのため、ヒューマンエラーの認知心理学的検討、事故分析の方法論、人間工学的対策の策定手法等の研究指導を行う。主な研究テーマは、人間の情報処理・応答特性、視知覚特性の計測と評価、ストレス下での作業特性、ヒューマンエラーの分析と評価等である。現実のフィールドとしては、自動車交通、航空、各種産業現場などを対象としている。

授業の到達目標：学生の研究テーマに沿って、修士論文を作成するための研究計画を作成する。

福祉工学研究指導 A（前期）・B（後期）

藤本 浩志

授業概要：福祉工学演習（1）福祉工学演習（2）と併せて、具体的に修士論文研究の目標設定方法、ならびに問題解決のために研究を推進する上で必要となる方法論を指導する。研究は、問題設定、アプローチの取捨選択、結果のまとめの3段階から構成されるが、個々に具体例に基づいて合理的な論理展開が身につくようにトレーニングする。

授業の到達目標：実際に個人が推進する修士課程の研究の過程において、上記の目標が達成できるように成長すること。

情報処理心理学研究指導 A（前期）・B（後期）

中島 義明

授業概要：

A（前期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（前段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、ブライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、修士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

B（後期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（後段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、ブライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、修士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

授業の到達目標：

A（前期）

本研究指導の過程を経て、修士学位論文の作成（前段階）へと導く。

B（後期）

本研究指導の過程を経て、修士学位論文の作成（後段階）へと導く。

社会的実践認知科学研究指導 A（前期）・B（後期）**宮崎 清孝**

授業概要：認知に対する「文化歴史的アプローチ」に基づく具体的な研究の遂行を指導する。具体的な研究計画の実行に加え、英語論文の講読もおこなう。

授業の到達目標：最終的には修士論文を質の高いものとして仕上げられるようにすること。

心理行動学研究指導 A（前期）・B（後期）**鈴木 晶夫**

授業概要：人間を研究する際に、大きく認知的、行動的、生理的側面に分類できよう。それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。そこで、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用、健康と感情の関係、言語的・非言語的情報伝達手段の構造と機能、非言語行動と感情、食行動と人間関係、生活習慣と健康、positive psychologyなどを手がかりとした研究を中心的なテーマとする。また、東洋の思想からの「からだところの知恵」「東洋の行法からの健康法」にも興味がある。心理行動学、身体心理学は既存の領域ではないので、関連する領域の広範な文献研究から、過去の関連研究、現在の動向を探り、将来への実践的研究にまとめたい。実験計画を踏まえた実験室的研究はもとより、調査研究、フィールド研究などの各種研究手法を駆使して新しい領域を開拓すること、心理療法への応用のみならず、福祉・看護・医療場面への応用などについても考えたい。

授業の到達目標：専門的知識の説明ができること、研究方法の理解と適用ができること、批判的・創造的な論理思考を形成すること、心理行動学の実際応用と理解ができること、心理行動学に関わる価値観を形成すること、学会誌への投稿、修士論文完成などを到達目標とする。

言語情報科学研究指導 A（前期）・B（後期）**菊池 英明**

授業概要：情報化社会の進展に伴い音声言語メディアの役割は今後一層重要になる。言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。具体的には、言語学、心理学、認知科学、脳科学といった人間科学の基礎学問を前提としながら、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築していく。主な研究課題は、会話メカニズムの解明、人と機械の対話インタフェース、音声による感情・態度の理解・表出モデル、知的検索エンジンなど。

授業の到達目標：各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。成果としては学術論文誌への論文掲載を目標とする。

知識情報科学研究指導 A（前期）・B（後期）**松居 辰則**

授業概要：これからの時代は情報機器、特にコンピュータやインターネット技術と人間が高度に共生し、人間中心の豊かで安心な生活環境を構築して行かねばなりません。そのためには、コンピュータに高度な知性（Intelligence）をもたせるための人工知能研究、知識処理研究への期待は今まで以上に大きくなってきます。

そこで本研究室では、我々人間がもつ「感性」や、実生活空間の中での「暗黙知」について様々な観点から研究をしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究内容の一例です。

（１）人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発（音楽情報処理）、（２）コンピュータの上のエージェント（疑似人間）やロボットと人間とのインタラクション、（３）コンピュータ上での何気ない操作（マウスやキーボード）からの人間の心理的な状態の推定方法、（４）人間の感じる「調和感」の生成メカニズム、（５）人間の心理的要因を考慮した経済予測モデル、（６）医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システム、（７）（うまい）授業、スポーツ、芸術におけるスキルに関する研究（スキルサイエンス）、（８）学習者の「やる気」や「モチベーション」を維持するための e-learning システムや教材開発、（９）人間の「感性」の起源に関する研究、（１０）遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズム

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な

な対象領域と研究方法論を決めることになります。その後は、ユニークな研究を期待しています。

授業の到達目標：各自の研究を推進し、修士学位の取得を目指します。

修士課程での研究になりますので、関連学会の研究会や全国大会での口頭発表を目指します。具体的には、人工知能学会、感性工学会、電子情報通信学会、情報処理学会、教育システム情報学会が中心的な活動の場となります。さらに、国際会議での発表も推奨します。研究成果は国内外のジャーナルに掲載されるように指導します。

また、大学院修士課程の学生として後輩学生の研究指導補助、若手の研究者として様々な社会活動（学会活動補助、企業との連携事業の推進、実験器材の管理等）も積極的に行います。

研究力のみならず教育力、組織のマネジメント力をバランスよく身に付けた学生として成長するよう指導します。

人間生体機能動態学研究指導 A（前期）・B（後期）

宮崎 正己

授業概要：本指導では、人間の快適性は、何かという疑問点を人間工学という学問体系を踏まえた応用的な観点から、追及をすることを目的し、最終的には、人間の健康にいかにか寄与できるかについて考察を加えていく。人間の感性は何か、人間の感覚は何かなど基本的な知識から、人間は、身体的にも精神的にも如何にあるべきかという点を解明する手続きを実験的な手法を会得し、定量的な観点からの研究をおこなうことを目的とする。

授業の到達目標：人間の理想的なパラメータを変化させることにより、人間は、いかなる生体反応に従うか、また如何に健康になりうるかについて、具体的且つ実践的な追及を理解することが目標となる。

感覚情報処理学研究指導 A（前期）

百瀬 桂子

授業概要：さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、主に生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの視覚機能およびその情報処理機構に着目し、それらを客観的にとらえるための技術として脳活動計測を利用する。研究テーマとしては、視覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法の開発などが挙げられる。このような研究について、研究計画の立案と実践、論文作成を指導する。

授業の到達目標：個別に設定した研究テーマについて、研究計画を適切に立案して実践できるようになる。

研究を進めるうえで必要な知識や技術を、担当教員および関連分野の研究者の指導の下で、理解・習得する。

自身の研究テーマについての論文を作成する。

自身のテーマについての研究発表と質疑応答ができるようになる。

生態心理学研究指導 A（前期）・B（後期）

三嶋 博之

授業概要：人間が環境から獲得する有意義な情報単位を特定すること、その情報単位の特性とそれを知覚し利用する人間の振るまいとの間にある法則性を解明すること、行為の学習や発達という変化を支える環境資源について特にそこで利用されている情報の観点から明らかにすること、等について扱う。技術的には実験心理学的な手法を、理論的には J. J. Gibson の生態学的アプローチを、それぞれ研究遂行のための支えとする。関連分野の文献の検討、先行研究の追試、新しい解析手法の試用等を行って基礎固めをしながら、実証的でオリジナルな研究の確立を目指す。

授業の到達目標：生態心理学分野の専門的な文献について自律的に読み解く能力を形成する。生態心理学分野における専門的な研究手法を身につける。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

教育実践学研究指導 A（前期）・B（後期）

浅田 匡

授業概要：

A（前期）

学校教育を中心として、授業をはじめ教育実践の改善に資する実践研究を行うための研究パラダイムおよび研究方法の習得を目標として、具体的な授業実践に基づきながら研究を行う。教育実践研究は、対象とした実践の改善が少しでも果たされること、また実践者である教師自身の成長発達に少しでも資することが求められる。したがって、専門家としての教師の力量形成にとどまらず、人間的成長という視座に立ち、教育実践のバックグラウンドあるいは隣接領域研究として、自己心理学、人間性心理学、教育方法学、教育工学、システム論、組織マネ

ジメントなどの文献講読を行う。キーワードは、リフレクション、メンタリング、アクション・リサーチ、実践知、である。

B（後期）

学校教育を中心として、授業をはじめ教育実践の改善に資する実践研究を行う。教育実践における教師の役割は大きく、教師研究を中心とし、教師の実践に関する知識の獲得過程や教師間の相互作用による知識創造過程などを、具体的な授業実践に基づきながら研究を行う。方法としては、インタビュー法、観察、ビデオによる授業分析など、いわゆる質的研究法と調査法を組み合わせる。加えて教育実践の改善に資するプログラム開発やシステム開発も行う。さらに、教育センターや学校との共同研究を行う。

キーワードは、リフレクション、メンタリング、アクション・リサーチ、実践知、CPD（継続的な職能発達）、学校改善である。

授業の到達目標：

A（前期）

1. 教育実践研究を行い、実践研究のパラダイムの理解する。
2. 実践研究に隣接する人間性心理学、システム論、教育学、組織マネジメントなど、教育実践研究の背景となる基本的な知識を身につける。

B（後期）

1. 教育実践研究を行うための研究方法論、研究倫理、研究デザイン力を身につける。

情報意味論研究指導 A（前期）・B（後期）

岩坪 秀一

授業概要：調査目的にそった正確な情報を得るために、アンケート調査法をいかに工夫すべきかを学ぶ。とくに質問文及び回答選択肢からなる質問項目の数の適正規模、質問文の妥当性、回答選択肢の数と内容の妥当性について、良い例と悪い例を上げて比較検討をする。

授業の到達目標：アンケート調査票作成に注意すべき重要な点を学び、調査票の妥当性、信頼性を出来る限り実現するために努力する態度・技能を養うことを目標とする。

情報コミュニケーション科学研究指導 A（前期）・B（後期）

金子 孝夫

授業概要：音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学の研究の基礎手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための入門技術を調査研究の対象とする。

授業の到達目標：本研究指導の調査研究によって、修士論文を執筆できるようになる。

ネットワーク情報システム学研究指導 A（前期）・B（後期）

金 群

授業概要：情報システムはますます多様化、大規模化、ネットワーク化の様相を呈している。実用に耐えるネットワーク化した情報システムや、何時でも何処でも誰もが簡単に利用できる安全・安心な情報環境の構築を実現するため、従来のソフトウェア工学的アプローチに加え、システム利用者である人間のふるまいを考慮した広い視野に立って、設計・開発・応用・評価法およびそれらの支援環境の構築法に関する研究を行う。また、ネットワーク情報システムで生じる諸問題と社会への影響やユーザ中心のネットワーク情報システムの未来像についても研究する。

授業の到達目標：ネットワーク情報システム学および関連専門分野への理解とそれらを柔軟に応用でき、さらに、新しい技術の動向にすばやく対応できるような、見識の豊かな研究者・技術者を育成する。

インストラクショナルデザイン論研究指導 A（前期）・B（後期）

向後 千春

授業概要：インストラクショナルデザインにおける各自の研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿までを指導します。これらを積み上げて、最終的には修士論文の作成を指導します。

授業の到達目標：全国規模の学会の論文誌に投稿できるレベルの研究をまとめること。

情報コミュニケーション技術論研究指導 A（前期）・B（後期）

スコット ダグラス

授業概要：Individualized research on a topic related to information and communication technologies to be negotiated

with the professor. A wide variety of topics are possible and interested students should contact the professor to discuss their project. Course readings, discussions, and papers will be in English. Students should have TOEIC scores of 700 and above to function effectively in this class.

Sample topics include:

- The Exchange of Emotional Content in Business Communications: A Comparison of PC and Mobile Email Users.
- Patterns of Emotional Transmission in Japanese Young People's Text-Based Communication in Four Basic Emotional Situations.
- Relationships between Emotional States and Emoticons in Email Communication in Japan.
- Gender Differences in Japanese College Students' Participation in a Qualitative Study.
- Analysis of Anger in Mobile Phone Email Communications in Japan.
- Comparing Cultural and Gender Differences in the Informal Mobile Telephone Text Messages of Japanese and American College Students.
- Use of iPods to Support Content Learning in a Japanese College Lecture Course.

授業の到達目標：To support various research projects in English.

教育情報工学研究指導 A（前期）・B（後期）

永岡 慶三

授業概要：教育工学のなかでも特に情報を扱う分野あるいは情報の観点から見た領域についての研究指導を行います。外国語を含む文献の探し方、読み方、引用のし方、解釈のし方、またデータの収集、整理、分析、吟味、論理展開の各方法を基本として学習し、課題の設定、発見、分析、仮説設定とその実証方法としての実験または観察についての計画、実施、整理にもとづき、論文形式で研究成果をまとめるまでをOJT形式で指導します。

授業の到達目標：文献の探し方、読み方、引用のし方、解釈のし方、またデータの収集、整理、分析、吟味、論理展開の各方法を実際に実施できること、および、課題の設定、発見、分析、仮説設定とその実証方法としての実験または観察についての計画、実施、整理にもとづき、論文形式で研究成果をまとめることができることを目標とします。

インターネット科学研究指導 A（前期）・B（後期）

西村 昭治

授業概要：2011年現在、およそ9億台のコンピュータが接続され約21億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。私の意図する「インターネット科学」は100億ページにも及ぶWorld Wide Web、P2Pネットワーク、ソーシャルネットワーキング（SNS）などを対象にその技術的な成り立ちを解析し、社会的な影響を数理的に評価するものである。本研究指導ではインターネット科学演習（1）（2）での学習をふまえ、インターネットという研究対象を数理的に分析するとともに、創造性のあるソフトウェアの開発を目指す。

授業の到達目標：インターネットという研究対象を数理的に分析する能力の獲得。創造性のあるソフトウェアの開発能力の獲得。

教育開発論研究指導 A（前期）・B（後期）

野嶋 栄一郎

授業概要：教育環境と学習の様々なレベルでの交互作用を明らかにする。これらの研究を行っていくうえで、最も重要視する方法論は、開発研究及び実践研究であるが、このような研究には必ず、実験研究や調査研究に基づく裏づけが必要となり、両面からの方法論が展開される。各人固有の問題意識を尊重し、理論的、方法論的検討に院生全員の討議を重ね、常にバイオニア的研究に焦点を当てる。インターネットを利用したインターカルチャルコミュニケーションカリキュラムの開発、CSCWに関するヒューマンファクターの研究、教育実践研究に対応した教育測定法の開発等、具体的研究事例をベースに研究領域の拡大を図る。

授業の到達目標：学位論文（修士課程）の完成。

教育コミュニケーション学研究指導 A（前期）・B（後期）

保崎 則雄

授業概要：授業前半は、基本的な理解として、授業研究、メディア教育、教材デザイン研究・開発、教員養成・研修に関する分野の国内外の文献を講読をしながら、研究指導を進める予定です。後半は、受講生が関心ある研究課題についての指導を中心に行います。授業研究では、実際に教育現場で観察、録画、調査など triangulation の手法を用いて行い、分析します。必要に応じて、授業記述（Flanders, OSIA）などをベースに、授業中の対話の分析をしつつ、教材開発については実際に作業をしつつ指導を行います。あくまでも、授業は生き物ですから、録

音、録画した時点で、すでに on-going のデータではなくなり、過去のものとなりますから、要注意です。最終的には、修論作成に向けた指導につなげられるような方向で進めます。毎回何か細かな課題に取り組むということを行い、それらを積み重ねたものが修士論文につながるように計画します。

授業の到達目標：修士論文作成につながることを最終到達目標とします。

情報メディア教育論研究指導 A（前期）・B（後期）

森田 裕介

授業概要：情報メディアを活用した教育に関する研究について、方法、開発、評価の観点から理解を深めるよう支援を行うとともに研究方法を指導する。受講者は、各自で論文を検索し、精読する。そして、情報メディアを活用した教育について、教育現場の視点から「問題は何か」を問い、具体的かつ実践的な問題解決を行うための計画を立案する。立案について十分な議論を重ねたのち、実際の研究（開発、実験、調査など）を実施し、データを収集する。データについては、統計的な手法を用いた解析までのプロセスを習得する。そして、研究論文として成果をまとめ、学会等において成果を公表する。

授業の到達目標：本講義の到達目標は、（１）情報メディアを活用した教育に関する研究論文を読み、問題点を示すことができる、（２）プレゼンテーションを作成することができる、（３）研究上の有用性や問題点、限界等について自分の考えを論理的に文章としてまとめ、学会等において成果を公表することができる、の３点である。

学習環境デザイン論研究指導 A（前期）・B（後期）

尾澤 重知

授業概要：本授業では、何らかのテクノロジーや道具、システムを用いた学びの支援と評価方法について、教育工学、学習科学、知識科学の観点から検討する。「理論」と「実践」のバランスを図りつつ、研究内容を第三者に分かりやすく伝えるための論文作法やプレゼンテーション技法も扱う。

授業の到達目標：講義、輪講、ケース・スタディ、ディスカッション等を通して、（１）関連する理論を第三者に対して分かりやすく説明する力、（２）先行研究や先行事例を批判的に捉えると同時に、経験から学ぶ姿勢の修得、（３）学習環境のデザインと評価技法の習得を目指す。

【演習】

【地域・地球環境科学研究領域】

環境管理計画学演習（１） A（前期）・B（後期）

天野 正博

授業概要：地球環境問題の大部分は人為活動によって引き起こされている。また、顕著に環境問題が生じている地域では往々にして貧困、過疎、人口の急増など、社会的な歪みが存在していることが多い。演習では都市と農村、先進国と途上国の間にある格差が環境問題を与えている影響について、アマルティア・センの「不平等の再検討」をテキストにし公平性という視点から考える。

授業の到達目標：地球環境問題について問題の構造、解決すべき視点について十分な理解ができる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方	第1回：輪読（８）ロールズの正義と政治的構想
第2回：輪読（１）なぜ平等か、何の平等か	第2回：輪読（８）についての分析結果の発表
第3回：輪読（１）についての分析結果の発表	第3回：輪読（９）多様性—目的と個人的特性
第4回：輪読（２）人間の多様性と基礎的平等	第4回：輪読（９）についての分析結果の発表
第5回：輪読（２）についての分析結果の発表	第5回：輪読（10）厚生経済学と不平等
第6回：輪読（３）手段と自由、福祉	第6回：輪読（10）についての分析結果の発表
第7回：輪読（３）についての分析結果の発表	第7回：輪読（11）不平等と貧困
第8回：輪読（４）自由、成果、資源	第8回：輪読（11）についての分析結果の発表
第9回：輪読（４）についての分析結果の発表	第9回：輪読（12）階級、ジェンダー
第10回：輪読（５）潜在能力の集合	第10回：輪読（12）についての分析結果の発表
第11回：輪読（５）についての分析結果の発表	第11回：輪読（13）平等の要件
第12回：輪読（６）潜在能力と機能	第12回：輪読（13）についての分析結果の発表
第13回：輪読（６）についての分析結果の発表	第13回：輪読（14）責任と公正
第14回：輪読（７）自由・福祉とエージェンシー	第14回：輪読（14）についての分析結果の発表
第15回：輪読（７）についての分析結果の発表	第15回：レポート課題と解説

教科書：アマルティア・セン、「不平等の再検討」

参考文献：授業の中で紹介。

成績評価方法：

A（前期）

レポート 40% プレゼンテーション及びレポート内容で評価する。

平常点評価 40% 演習での議論への貢献度で評価する。

その他 20% 出席回数

B（後期）

レポート 40% プレゼンテーション及びレポート内容で評価する。

平常点評価 40% 演習における議論への貢献度によって評価する。

その他 20% 出席回数

環境管理計画学演習（２） A（前期）・B（後期）

天野 正博

授業概要：環境問題が生じている山村、途上国のフィールドにおいて実際に調査を行いながら、演習（１）で学んだ公平性の概念に基づいて、生じている環境問題が社会にどのような影響を与えているかを調査し、自然科学だけでなく社会科学的な見地からも調査や情報の収集を行う。得られたデータから問題の構造を分析しモデル化をするとともに、解決策を提案する。

授業の到達目標：環境問題が生じる背景を理解し、問題を引き起こす要因を具体的に指摘できる。また、問題を解決するための具体案を提示できるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方	第1回：調査結果の分析（５）

第2回：環境問題の背景分析	第2回：調査結果の分析（6）
第3回：環境問題に現状調査（1）	第3回：環境問題を引き起こす要因に関する調査（1）
第4回：環境問題に現状調査（2）	第4回：環境問題を引き起こす要因に関する調査（2）
第5回：環境問題に現状調査（3）	第5回：環境問題を引き起こす要因に関する調査（3）
第6回：環境問題に現状調査（4）	第6回：環境問題を引き起こす要因に関する調査（4）
第7回：調査結果の分析（1）	第7回：調査結果の分析（7）
第8回：調査結果の分析（2）	第8回：調査結果の分析（8）
第9回：環境問題が生じた地域の社会経済調査（1）	第9回：調査結果の分析（9）
第10回：環境問題が生じた地域の社会経済調査（2）	第10回：調査結果の分析（10）
第11回：環境問題が生じた地域の社会経済調査（3）	第11回：環境問題発生機構のモデル化（1）
第12回：環境問題が生じた地域の社会経済調査（4）	第12回：環境問題発生機構のモデル化（2）
第13回：環境問題が生じた地域の社会経済調査（5）	第13回：環境問題発生機構のモデル化（3）
第14回：調査結果の分析（3）	第14回：調査結果の分析についてのまとめ
第15回：調査結果の分析（4）	第15回：レポート課題と解説

成績評価方法：

A（前期）

レポート 40% 調査結果の分析および考察結果について評価する。

平常点評価 40% 調査活動を評価する。

その他 20% 出席回数

B（後期）

レポート 40% 調査結果の分析、考察内容を評価する。

平常点評価 40% 調査内容を評価する。

その他 20% 出席回数

人口学演習（2） A（前期）・B（後期）

阿藤 誠

授業概要：各人が修士論文の第1次構想を発表し、これについて議論し、修正を図る。各人が修士論文に向けて自分が選択した専門分野の専門論文を読み発表し、議論する。あわせて、各人が、その専門分野の統計データ・個票データを用いたデータ分析を行い、発表し、議論する。最終的に、修士論文の中間レポートを作成・発表し、修士論文の第2次構想につなげる。

授業の到達目標：各人が選択した専門分野についての知識習得、一定水準の人口データの分析方法の習得、修士論文の構想の確定を目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方	第1回：英文専門論文の講読
第2回：英文専門論文の講読（人口学の専門誌）	第2回：修士論文のための人口データ分析（4）
第3回：修士論文の構想発表（1）	第3回：英文専門論文の講読
第4回：英文専門論文の講読	第4回：修士論文のための人口データ分析（5）
第5回：修士論文の構想発表（2）	第5回：英文専門論文の講読
第6回：英文専門論文の講読	第6回：修士論文のための人口データ分析（6）
第7回：修士論文の構想発表（3）	第7回：英文専門論文の講読
第8回：英文専門論文の講読	第8回：修士論文のための人口データ分析（7）
第9回：修士論文の構想発表（4）	第9回：英文専門論文の講読
第10回：英文専門論文の講読	第10回：修士論文のための人口データ分析（8）
第11回：修士論文のための人口データ分析（1）	第11回：英文専門論文の講読
第12回：英文専門論文の講読	第12回：修士論文の中間報告（1）
第13回：修士論文のための人口データ分析（2）	第13回：修士論文の中間報告（2）
第14回：英文専門論文の講読	第14回：修士論文の中間報告（3）
第15回：修士論文のための人口データ分析（3）	第15回：修士論文の中間報告（4）

成績評価方法：

レポート 50% 修士論の構想の進捗状況

平常点評価 50% 発表内容の理解度

生物圏生態学演習（１） A（前期）・B（後期）

太田 俊二

授業概要：地球環境システムの重要な構成要素である生物圏（人間圏を含む）に関わるさまざまな研究をとりあげ、気候学、生態学などの領域の最新の研究動向について理解していく。また、気候データ、地理情報、エネルギー利用などに関する膨大なデータの収集と整備を各自の修士研究にあわせて進めていく。

授業の到達目標：大量のデータを管理することができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：新しい気候データベースの作成（４）
第2回：生態学の考え方、基本用語の整理（１）	第2回：新しい気候データベースの作成（５）
第3回：生態学の考え方、基本用語の整理（２）	第3回：新しい気候データベースの作成（６）
第4回：生態学の考え方、基本用語の整理（３）	第4回：新しい気候データベースの作成（７）
第5回：生態学の考え方、基本用語の整理（４）	第5回：エネルギー利用のデータベースの作成（１）
第6回：生態学に関する新着論文の輪読（１）	第6回：エネルギー利用のデータベースの作成（２）
第7回：生態学に関する新着論文の輪読（２）	第7回：エネルギー利用のデータベースの作成（３）
第8回：生態学に関する新着論文の輪読（３）	第8回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（１）
第9回：過去のデータベースの確認（１）新着論文との関連	第9回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（２）
第10回：過去のデータベースの確認（２）新着論文との関連	第10回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（３）
第11回：過去のデータベースの確認（３）新着論文との関連	第11回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（４）
第12回：新しい気候データベースの作成方針（作成するデータベースは毎年異なる）	第12回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（１）
第13回：新しい気候データベースの作成（１）	第13回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（２）
第14回：新しい気候データベースの作成（２）	第14回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（３）
第15回：新しい気候データベースの作成（３）	第15回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（４）

成績評価方法：

平常点評価 100% 取り組みを直接評価する。

備考・関連 URL：各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

生物圏生態学演習（２） A（前期）・B（後期）

太田 俊二

授業概要：修士研究課題と関連する過去から現在までの原著論文、総説を多数収集して、各自の修士研究の位置づけを整理、再考する。同時に、収集した原著論文のデジタルなデータベース化をはかる。

授業の到達目標：各自の修士研究のテーマに促して必要な論文を管理することができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス、過去のデータベースの確認、主要学術雑誌の検索	第1回：PDFの管理、データベースの作成（１）
第2回：過去２年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（１）	第2回：PDFの管理、データベースの作成（２）
第3回：過去２年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（２）	第3回：PDFの管理、データベースの作成（３）

第4回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（3）	第4回：PDFの管理、データベースの作成（4）
第5回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（4）	第5回：PDFの管理、データベースの作成（5）
第6回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（5）	第6回：PDFの管理、データベースの作成（6）
第7回：abstract、著者等の整理（1）	第7回：PDFの管理、データベースの作成（7）
第8回：abstract、著者等の整理（2）	第8回：PDFの管理、データベースの作成（8）
第9回：abstract、著者等の整理（3）	第9回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（4）
第10回：興味あるテーマ、手法等の整理（1）	第10回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（5）
第11回：興味あるテーマ、手法等の整理（2）	第11回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（6）
第12回：興味あるテーマ、手法等の整理（3）	第12回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（1）
第13回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（1）	第13回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（2）
第14回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（2）	第14回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（3）
第15回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（3）	第15回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（4）

成績評価方法：

平常点評価 100% 取り組みを直接評価する。

備考・関連 URL：各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

環境生態学演習（1） A（前期）・B（後期）

森川 靖

授業概要：人間活動は生態系に影響を与え、人の生存にかかわる環境問題となっている。演習では、こうした人間活動と生態系の関係に理解を深め、環境問題の解決に向けた科学的根拠を養うことを目的とする。また、自らがデータを収集する困難さを体験し、ネット等で得られるデータの習得がいかに大変なことかを認識してもらう。したがって、モットーは「実践によって認識は始まる」としている。

授業の到達目標：人間科学研究科は文理融合を理念としている。すなわち、院生が自らを文系あるいは理系という枠にとらわれることを排し、社会人として「私は文理融合系」です、となれるようにすることが演習の目標である。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の進め方	第1回：環境に関する諸問題（輪読7）
第2回：生態学の基礎（輪読1）	第2回：環境に関する諸問題（輪読8）
第3回：生態学の基礎（輪読2）	第3回：個別テーマの発表（1）
第4回：生態学の基礎（輪読3）	第4回：個別テーマの発表（2）
第5回：生態学の基礎（輪読4）	第5回：個別テーマの発表（3）
第6回：生態学の基礎（輪読5）	第6回：個別テーマの発表（4）
第7回：生態学の基礎（輪読6）	第7回：個別テーマの発表（5）
第8回：生態学の基礎（輪読7）	第8回：個別テーマの発表（6）
第9回：生態学の基礎（輪読8）	第9回：私の研究の方法論（1）指導教員
第10回：環境に関する諸問題（輪読1）	第10回：私の研究の方法論（2）指導教員
第11回：環境に関する諸問題（輪読2）	第11回：個別修士論文課題の発表（1）
第12回：環境に関する諸問題（輪読3）	第12回：個別修士論文課題の発表（2）
第13回：環境に関する諸問題（輪読4）	第13回：個別修士論文課題の発表（3）

第14回：環境に関する諸問題（輪読5）	第14回：個別修士論文課題の発表（4）
第15回：環境に関する諸問題（輪読6）	第15回：演習に関する講評

成績評価方法：

レポート 100% レポートによる評価

備考・関連 URL：http://www.f.waseda.jp/yasu/

環境生態学演習（2） A（前期）・B（後期）

森川 靖

授業概要：人間活動は生態系に影響を与え、人の生存にかかわる環境問題となっている。演習では、こうした人間活動と生態系の関係に理解を深め、環境問題の解決に向けた科学的根拠を養うことを目的とする。また、自らがデータを収集する困難さを体験し、ネット等で得られるデータの習得がいかに大変なことを認識してもらう。したがって、モットーは「実践によって認識は始まる」としている。

授業の到達目標：人間科学研究科は文理融合を理念としている。すなわち、院生が自らを文系あるいは理系という枠にとらわれることを排し、社会人として「私は文理融合系」です、となれるようにすることが演習の目標である。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の進め方	第1回：調査結果の発表（3）
第2回：森林調査法講義（1）	第2回：個別テーマの進捗状況発表（1）
第3回：森林調査法講義（2）	第3回：個別テーマの進捗状況発表（2）
第4回：森林調査法（1）；野外	第4回：個別テーマの進捗状況発表（3）
第5回：森林調査法（2）；野外	第5回：個別テーマの進捗状況発表（4）
第6回：森林調査法（3）；野外	第6回：個別テーマの進捗状況発表（5）
第7回：森林調査法（4）；野外	第7回：個別テーマの進捗状況発表（6）
第8回：野外調査データの計算（1）	第8回：個別テーマの進捗状況発表（7）
第9回：野外調査データの計算（2）	第9回：個別テーマの進捗状況発表（8）
第10回：野外調査データの計算（3）	第10回：個別テーマの進捗状況発表（9）
第11回：野外調査データの計算（4）	第11回：個別テーマの進捗状況発表（10）
第12回：調査結果の発表準備（1）	第12回：個別テーマの進捗状況発表（11）
第13回：調査結果の発表準備（2）	第13回：個別テーマの進捗状況発表（12）
第14回：調査結果の発表（1）	第14回：進路相談・検討
第15回：調査結果の発表（2）	第15回：演習に関する講評

成績評価方法：

レポート 100% レポートによる評価

備考・関連 URL：http://www.f.waseda.jp/yasu/

環境社会学演習（1） A（前期）・B（後期）

鳥越 皓之

授業概要：環境社会学に関する理論研究と環境問題についての社会学的分析について講義をするとともに、討議の機会を設ける。学部レベルの環境社会学について、十分な理解があることを受講条件とする。また、この科目の性格上、教室に止まることなく、現地に出向き、調査をすることを授業の一環とするので、フィールドに向ける時間的用意が必要である。

授業の到達目標：環境社会学の専門的な理解。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：社会学基礎論	第1回：自然環境についての分析1
第2回：社会学における環境社会学の位置づけ	第2回：自然環境についての分析2
第3回：環境社会学の諸理論	第3回：自然環境についての分析3
第4回：基本文献の講読1、基礎理論に関わること	第4回：自然環境についての分析4
第5回：基本文献の講読2、基礎理論の特徴	第5回：日常環境についての分析1
第6回：基本文献の講読3、環境をどうとらえるのか	第6回：日常環境についての分析2

第7回：基本文献の講読4、環境社会学とは	第7回：日常環境についての分析3
第8回：基本文献の講読5、環境社会学の特徴	第8回：日常環境についての分析4
第9回：基本文献の講読6、環境社会学の潮流	第9回：歴史的環境についての分析1
第10回：基本文献の講読7、環境社会学の可能性	第10回：歴史的環境についての分析2
第11回：日本の環境社会学	第11回：歴史的環境についての分析3
第12回：日本の環境社会学史1	第12回：歴史的環境についての分析4
第13回：日本の環境社会学史2	第13回：環境社会学の応用1
第14回：欧米の環境社会学	第14回：環境社会学の応用2
第15回：アジアの環境社会学	第15回：環境社会学的分析の可能性と限界

成績評価方法：

そ の 他 100% 発言内容と出席

環境社会学演習（2） A（前期）・B（後期）

鳥越 皓之

授業概要：環境社会学に関する専門的応用的な課題を対象とし、受講者の環境社会学分野の修士論文作成のための基本的な分析方法についての一助とする。登録資格は2年生。1年生でも教員の許可を得て例外的に許可することがある。便宜的に授業曜日を設定しているが、環境社会学の科目の性格上、環境問題の現場近くで集中的に作業を行うことが多い。

授業の到達目標：環境社会学の専門的な理解とその応用。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：環境社会学の基本的な考え方	第1回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析7
第2回：研究に対する基本姿勢	第2回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析8
第3回：環境社会学的分析の方法	第3回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析9
第4回：論文を書くときに陥りやすい問題点	第4回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析10
第5回：環境社会学的論文の書き方1	第5回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析11
第6回：環境社会学的論文の書き方2	第6回：環境社会学の論文の論理の洗練法1
第7回：環境社会学的論文の書き方3	第7回：環境社会学の論文の論理の洗練法2
第8回：環境社会学的論文の書き方4	第8回：環境社会学の論文の論理の洗練法3
第9回：環境社会学的論文の書き方5	第9回：環境社会学の論文の論理の洗練法4
第10回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析1	第10回：環境社会学の論文の論理の洗練法5
第11回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析2	第11回：環境社会学の論文の論理の洗練法6
第12回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析3	第12回：論文の研究史と分析
第13回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析4	第13回：論文の結論の位置づけ
第14回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析5	第14回：論文表現の意味と価値
第15回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析6	第15回：論文と現代社会との緊張関係

成績評価方法：

そ の 他 100% 発言内容と出席

社会人類学演習（1） A（前期）・B（後期）

矢野 敬生

授業概要：地域研究としてのフィールドワークの手法を学ぶことを目的とする。そのために、①地域研究やフィールドワークの方法論の検討、②個別地域の民族誌の検討、③現代社会人類学の理論的動向と民族誌との関係について、文献の講読を行いつつ、受講者1人1人が自らフィールドワークを実践し、自前の理論を組み立てられる能力の養成をめざす。

授業の到達目標：フィールドワークの成果としての「エスノグラフィーを書く」ことを通して、自力で社会人類学の質的調査を実践することができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習のガイダンス	第1回：テーマ発表（その1）—テーマをめぐって、序論 上
第2回：履修者のテーマについて報告（1） 上	第2回：テーマ発表（その1）—テーマをめぐって、序論 下
第3回：履修者のテーマについて報告（2） 下	第3回：テーマ発表（その2）—調査手法、調査対象他、人々 準初級
第4回：研究動向・フィールドワークについて（1） 初級	第4回：テーマ発表（その2）—調査手法、調査対象他、人々 初級
第5回：研究動向・フィールドワークについて（2） 中級	第5回：テーマ発表（その2）—調査手法、調査対象他、人々 中級
第6回：研究動向・フィールドワークについて（3） 上級	第6回：テーマ発表（その2）—調査手法、調査対象他、人々 上級
第7回：研究テーマの発表（1） 初級	第7回：テーマ発表（その3）—課題、命題 初級
第8回：研究テーマの発表（2） 中級	第8回：テーマ発表（その3）—課題、命題 中級
第9回：研究テーマの発表（3） 上級	第9回：テーマ発表（その3）—課題、命題 上級
第10回：調査テーマ・調査他、手法に関して（1） 準初級	第10回：テーマ発表（その4）—内容の分析 初級
第11回：調査テーマ・調査他、手法に関して（2） 初級	第11回：テーマ発表（その4）—内容の分析 中級
第12回：調査テーマ・調査他、手法に関して（3） 中級	第12回：テーマ発表（その4）—内容の分析 上級
第13回：調査テーマ・調査他、手法に関して（4） 上級	第13回：テーマ発表（その5）—結論の分析 初級
第14回：テーマ発表（その1）—テーマをめぐって、序論 上	第14回：テーマ発表（その5）—結論の分析 中級
第15回：テーマ発表（その1）—テーマをめぐって、序論 下	第15回：テーマ発表（その5）—結論の分析 上級

参考文献：『京大式フィールドワーク入門』（NTT 出版）

成績評価方法：

レポート 50% レポートを実施し、理解度の確認を行う。

平常点評価 50% 授業中の発言など、授業への積極性を評価する。

社会人類学演習（2） A（前期）・B（後期）

矢野 敬生

授業概要：履修学生の問題関心やフィールドに即して、院生諸君の研究発表および討論を中心に構成する。さらに、関連領域に関するモノグラフ研究および現代文化人類学の理論的研究について文献研究をあわせて行う。

授業の到達目標：文化の独自性と多様性の理解とあわせて、特定個別文化を読み解くことを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習ガイダンス	第1回：テーマ発表（その1）—研究テーマをめぐって・文献を読む（1） 上
第2回：履修者の研究テーマについて報告（1） 上	第2回：テーマ発表（その1）—研究テーマをめぐって・文献を読む（2） 下
第3回：履修者の研究テーマについて報告（2） 下	第3回：テーマ発表（その2）—調査手法・調査対象他・文献を読む（3） 準初級
第4回：研究動向・フィールドワークに関して報告（1） 初級	第4回：テーマ発表（その2）—調査手法・調査対象他・文献を読む（4） 初級

第5回：研究動向・フィールドワークに関して報告（2） 中級	第5回：テーマ発表（その2）—調査手法・調査対象他・文献を読む（5） 中級
第6回：研究動向・フィールドワークに関して報告（3） 上級	第6回：テーマ発表（その2）—調査手法・調査対象他・文献を読む（6） 上級
第7回：研究テーマの概要（1）+C.ギアツを読む（1） 初級	第7回：テーマ発表（その3）—課題・論点・文献を読む（7） 初級
第8回：研究テーマの概要（2）+C.ギアツを読む（2） 中級	第8回：テーマ発表（その3）—課題・論点・文献を読む（8） 中級
第9回：研究テーマの概要（3）+C.ギアツを読む（3） 上級	第9回：テーマ発表（その3）—課題・論点 上級
第10回：調査地域・手法・調査テーマに関して（1）+C.ギアツを読む（4） 準初級	第10回：テーマ発表（その4）—内容の分析 初級
第11回：調査地域・手法・調査テーマに関して（2）+C.ギアツを読む（5） 初級	第11回：テーマ発表（その4）—内容の分析 中級
第12回：調査地域・手法・調査テーマに関して（3）+C.ギアツを読む（6） 中級	第12回：テーマ発表（その4）—内容の分析 上級
第13回：調査地域・手法・調査テーマに関して（4）+C.ギアツを読む（7） 上級	第13回：テーマ発表（その5）—結論 初級
第14回：テーマ発表（その1）—研究テーマをめぐって+C.ギアツを読む（8） 上	第14回：テーマ発表（その5）—結論 中級
第15回：テーマ発表（その1）—研究テーマをめぐって 下	第15回：テーマ発表（その5）—結論 上級

参考文献：

A（前期）

柿崎京一他編『東アジア村落社会の基礎構造』（御茶の水書房）

B（後期）

柿崎京一他編『東アジア村落社会の基礎構造』（御茶の水書房）

佐藤郁哉の著作・文献

成績評価方法：

レポート 30% レポートを実施し、理解度の確認を行う。

平常点評価 70% 授業中の発言など、授業への積極性を評価する。

水域環境学演習（1） A（前期）・B（後期）

井内 美郎

授業概要：地球規模環境問題の自然科学的側面の例として水収支を取り上げる。記録の指標として湖水面高度を取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら展開する。

授業の到達目標：地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の水収支についての議論が可能となる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：ガイダンス 本講義の目的と概要について説明します。
第2回：地球環境変動と水収支	第2回：湖水面高度推定法一序 様々な湖水面高度推定法について学びます。
第3回：湖水面高度を決めるもの—水収支—	第3回：音波探査記録の束層序学的検討—束層序学とは シーケンス層序学の概要について学びます。

第4回：水収支に関する論文検索－論文検索とは	第4回：音波探査記録の束層序学的検討－海水準変動 海水準変動に伴って特徴のある堆積体が形成されることを学びます。
第5回：水収支に関する論文検索－論文検索法	第5回：音波探査記録の束層序学的検討－低海水準期 堆積体 海水準上昇初期の堆積体について学びます。
第6回：水収支に関する論文検索－検索の実際	第6回：音波探査記録の束層序学的検討－海進期堆積 体 海水準上昇中期の堆積体について学びます。
第7回：水収支に関する論文検索－検索論文の整理	第7回：音波探査記録の束層序学的検討－高海水準期 堆積体 海水準上昇後期の堆積体について学びます。
第8回：水収支に関する論文検索－まとめ	第8回：音波探査記録の束層序学的検討－「海退期」 堆積体 海水準低下期の堆積体について学びます。
第9回：水収支に関する論文のとりまとめ－最近の研究動向	第9回：琵琶湖音波探査記録の束層序学的検討－琵琶 湖の音波探査記録 琵琶湖の音波探査記録について検討します。
第10回：水収支に関する論文のとりまとめ－研究史	第10回：琵琶湖音波探査記録の束層序学的検討－反射 面とその年代 琵琶湖の反射面の年代推定法について学びます。
第11回：水収支に関する論文のとりまとめ－研究の進展	第11回：琵琶湖音波探査記録の束層序学的検討－湖水 面変動とその要因 琵琶湖の湖水面変動の要因について学びます。
第12回：水収支に関する論文のとりまとめ－今後の方向	第12回：野尻湖音波探査記録の束層序学的検討－野尻 湖の音波探査記録 野尻湖の音波探査記録について検討します。
第13回：湖水面高度推定法－堆積物を用いる方法	第13回：野尻湖音波探査記録の束層序学的検討－反射 面とその年代 野尻湖の反射面の年代推定法について学びます。
第14回：湖水面高度推定法－音波探査記録を用いる方法	第14回：野尻湖音波探査記録の束層序学的検討－湖水 面変動とその要因 野尻湖の湖水面変動の要因について学びます。
第15回：まとめ	第15回：まとめ この講義のまとめを行います。

教科書：特に指定しない

参考文献：適宜紹介する

成績評価方法：

試験 0% 予定していない

レポート 100% 適宜レポートを課す

備考・関連 URL：開講回数1/3以上欠席の場合、成績評価は行わない。

本講義は学生の主体的取り組みを前提としている。

水域環境学演習（2） A（前期）・B（後期）

井内 美郎

授業概要：地球規模環境問題の自然科学的側面の例として気候変動を取り上げる。記録の指標として生物源シリカを取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら展開する。

授業の到達目標：地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の気候変動についての議論が可能となる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス 本講義の目的と概要について説明します	第1回：ガイダンス 本講義の目的と概要について説明します。
第2回：地球環境変動と気候変動 地球環境変動と気候変動を概観します。	第2回：グローバルな気候変動と各地での「遅延」について一序 グローバルな気候変動と各地での「遅延」について概観します。
第3回：琵琶湖における研究の現状 琵琶湖における気候変動研究成果について学びます。	第3回：気候変動の要因と各地での「遅延」ー日本周辺域 日本周辺域の気候変動の「遅延」について学びます。
第4回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索ー海洋酸素同位体比 海洋酸素同位体比の変遷に関する論文検索を行います。	第4回：気候変動の要因と各地での「遅延」ー太平洋域 太平洋域の気候変動の「遅延」について学びます。
第5回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索ー日射量変動 日射量変動に関する論文の検索を行います。	第5回：気候変動の要因と各地での「遅延」ーインド洋域 インド洋域の気候変動の「遅延」について学びます。
第6回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索ー氷床コア 氷床コアに関する論文の検索を行います。	第6回：気候変動の要因と各地での「遅延」ーまとめ 各地の気候変動の「遅延」についてまとめます。
第7回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索ー海洋堆積物 海洋堆積物に記録された気候変動に関する論文の検索を行います。	第7回：琵琶湖の応答ー生物源シリカ 琵琶湖の生物源シリカ濃度に基づく気候変動の「遅延」について学びます。
第8回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索ーモンスーン モンスーンに関する論文の検索を行います。	第8回：琵琶湖の応答ー湖水面変動 琵琶湖の湖水面変動に基づく気候変動の「遅延」について学びます。
第9回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめー海洋酸素同位体比 海洋酸素同位体比に関する論文の内容について議論します。	第9回：琵琶湖の応答ーまとめ 琵琶湖の気候変動の「遅延」の原因を議論します。
第10回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめー日射量変動 日射量変動に関する論文の内容について議論します。	第10回：野尻湖の応答ー生物指標 野尻湖の生物指標に基づく気候変動の「遅延」について学びます。
第11回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめー氷床コア 氷床コアに関する論文の内容について議論します。	第11回：野尻湖の応答ー湖水面変動 野尻湖の湖水面変動に基づく気候変動の「遅延」について学びます。
第12回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめー海洋堆積物 海洋堆積物に関する論文の内容について議論します。	第12回：野尻湖の応答ーまとめ 野尻湖の気候変動の「遅延」の原因を議論します。
第13回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめーモンスーン モンスーンに関する論文の内容について議論します。	第13回：気候変動と応答の「遅延」について 各地の「遅延」について整理します。
第14回：気候変動の要因とその応答に関する議論 気候変動の要因とその応答に関する学習内容に基づいて議論	第14回：「遅延」はなぜ生じるのか 「遅延」が生じる原因について議論します。
第15回：まとめ 本演習のまとめを行う。	第15回：まとめ この講義のまとめを行います。

教科書：特に指定しない

参考文献：適宜紹介する

成績評価方法：

試験 0% 予定していない

レポート 100% 適宜レポートを課す

備考・関連 URL：開講回数の1／3以上欠席の場合、成績評価は行わない。

本講義は学生の主体的取り組みを前提としている。

地域資源論演習（１） A（前期）・B（後期）

柏 雅之

授業概要：農山村における地域資源の利用・管理システム再建問題について学ぶ。春学期は、おもにその方法論的基礎となる経済理論についてテキストの輪読形式で演習を進める。秋学期は、経済のグローバル化のなかで、いかに従来の農山村地域資源の利用・管理システムが危機に瀕し、また再建のあり方をどう考えるのかについて学べるようにする。最後に、持続可能な社会の条件としての農山村地域資源管理の意義と課題を皆で考えていく。

授業の到達目標：農業・農村問題や食料問題に関する社会科学的なアプローチのしかたについて理解を深めてもらう。また、東京大学大学院（山路研究室）、東京農工大学大学院（千賀研究室）、早大大学院経済学研究科（堀口研究室）との間での討論会などをとおしてプレゼン能力の涵養を行う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：農産物価格の理論
第2回：市場経済の理論	第2回：農産物価格の理論
第3回：完全競争市場と不完全競争	第3回：農産物価格の理論
第4回：市場の失敗	第4回：農産物価格の理論
第5回：消費と生産の理論	第5回：農業の構造問題
第6回：生産要素価格と所得分配の理論	第6回：農業の構造問題
第7回：経済政策の理論	第7回：農業の構造問題
第8回：経済学の土台から考えなおしてみる	第8回：農業の構造問題
第9回：エントロピー学派の意義	第9回：農業の構造問題
第10回：世界の食料・農業・環境問題の構図	第10回：食料自給問題を考える
第11回：農業生産と環境負荷	第11回：食料自給問題を考える
第12回：農業生産とエネルギー収支	第12回：食料自給問題を考える
第13回：世界の農業危機の構図	第13回：都市と農山村
第14回：フードシステム	第14回：都市と農山村
第15回：アグリビジネス	第15回：都市と農山村

教科書：未定

参考文献：

- （１）神野直彦 『地域再生の経済学』 中公新書
- （２）宇沢弘文 『社会的共通資本』 岩波新書
- （３）室田武・多辺田政弘・槌田敦編 『循環の経済学』 学陽書房

成績評価方法：

平常点評価 100% 輪読の状況や理解状況、議論の状況を総合的に判断する。

地域資源論演習（２） A（前期）・B（後期）

柏 雅之

授業概要：農業・農山村地域再生の方法や政策について学ぶ。ここでは持続性の概念がキーとなる。春学期はその基礎として、EU（欧州連合）の環境農業政策や共通地域政策の論理、構造と方法について学ぶ。秋学期は、世界の農政改革の状況をふまえる中で、日本の農政改革の論理と方法について理解を深める。この演習（２）は2年生を対象とする。受講においては、同演習（１）を履修していることが望ましいが、必須とはしない。

授業の到達目標：先進国の農政改革の論理と実態、および日本の農業・農村再生のための改革のあり方についての理解を深め、東京大学大学院（山路研究室）、東京農工大学大学院（千賀研究室）、早大大学院経済学研究科（堀口研究室）らとの合同ゼミでの討論会や研究成果報告会において高い評価を受けえる研究とプレゼンのできる能力を涵養する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：EU 農村地域政策の論理

第2回：地域再生の政策科学	第2回：EU 農村地域政策の論理
第3回：地域再生の政策科学	第3回：EU 農村地域政策の論理
第4回：地域再生の政策科学	第4回：EU の環境農業政策
第5回：地域再生の政策科学	第5回：EU の環境農業政策
第6回：経済政策と地域政策の原理	第6回：EU の環境農業政策
第7回：経済政策と地域政策の原理	第7回：イギリスの地域再生政策
第8回：経済政策と地域政策の原理	第8回：イギリスの地域再生政策
第9回：日本の過疎地域・農山村地域問題	第9回：イギリスの地域再生政策
第10回：日本の過疎地域・農山村地域問題	第10回：地域再生と戦略的パートナーシップ
第11回：EU（欧州連合）の共通地域政策	第11回：地域再生と戦略的パートナーシップ
第12回：EU（欧州連合）の共通地域政策	第12回：地域ガバナンス
第13回：EU（欧州連合）の共通地域政策	第13回：地域ガバナンス
第14回：EU（欧州連合）の共通地域政策	第14回：日本の地域再生問題を考える
第15回：EU 共通農業政策改革と農村地域政策の登場	第15回：日本の地域再生問題を考える

教科書：未定

参考文献：柏雅之『条件不利地域再生の論理と政策』農林統計協会

成績評価方法：

平常点評価 100% 輪読報告や議論の内容をもとに判断する。

大気環境科学演習（1） A（前期）・B（後期）

松本 淳

授業概要：大気環境科学分野に関する各自の修士課程での研究を遂行するために、輪読や論文調査を通して、基礎事項から最新の研究動向までを理解し、研究の背景・目的を明確にする。特に、対流圏大気化学について、光化学オキシダントやその関連成分の大気動態を中心として、室内実験・大気観測・モデル計算などの研究動向を調査・把握する。

授業の到達目標：文献や書籍の調査・精読・紹介資料の作成・発表といった一連の作業を通して、他者にわかりやすく説明する経験を積むとともに、大気環境科学に関する各自の研究の背景・目的を明確にする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：学術論文の調査・紹介に関するガイダンス
第2回：大気環境科学の基礎的事項（1）	第2回：最近の学術論文の調査・リストアップ（1）
第3回：大気環境科学の基礎的事項（2）	第3回：最近の学術論文の調査・リストアップ（2）
第4回：輪読（1）大気組成の単位と大気圧	第4回：最近の学術論文の紹介・発表（1）
第5回：輪読（2）化学反応の動力学	第5回：最近の学術論文の紹介・発表（2）
第6回：輪読（3）対流圏の酸化力	第6回：最近の学術論文の紹介・発表（3）
第7回：輪読（4）オゾンによる大気汚染	第7回：最近の学術論文の紹介・発表（4）
第8回：輪読（5）エアロゾル	第8回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の調査（1）
第9回：輪読（6）酸性雨	第9回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の調査（2）
第10回：輪読（7）化学物質の循環	第10回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（1）
第11回：輪読（8）簡略化モデル	第11回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（2）
第12回：輪読（9）大気の輸送	第12回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（3）
第13回：輪読（10）成層圏オゾン	第13回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（4）

第14回：輪読（11）温室効果	第14回：過去の論文から得た知識等を各自の研究に活用する（1）
第15回：輪読のまとめ	第15回：過去の論文から得た知識等を各自の研究に活用する（2）

教科書：ジェイコブ「大気化学入門」

参考文献：秋元肇「対流圏大気化学と地球環境」ほか、授業中に随時紹介する。

成績評価方法：

平常点評価 100% 演習への取り組み姿勢を評価する。

大気環境科学演習（2） A（前期）・B（後期）

松本 淳

授業概要：大気環境科学分野に関する修士課程での研究を遂行するために、各自の進捗状況の報告（プロGRESS・レポート）および学会等での研究成果発表のための準備を通して、現状の把握、研究遂行のための考察・改善、成果のまとめと報告・発表を行ない、課せられたテーマを着実に遂行する能力を磨く。各自のテーマに合わせて、対流圏大気化学（光化学オキシダントやその関連成分の大気動態）にて重要な「室内実験」「大気観測」「モデル計算」それぞれについて、適切な研究遂行手順について学ぶ。

授業の到達目標：研究動向の把握・実験等の準備と実施・データの取得と解析・結果の検証と要約・成果の発表といった一連の作業を通して、各自が設定したテーマ・目標に向かって必要な課題を見出し解決する能力を身につける。特に、各自の研究の背景・目的・手順・結果・考察内容を的確にまとめ、他者にわかりやすく説明する能力を磨く。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：室内実験に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（1）
第2回：大気環境科学全般の研究動向調査（1）	第2回：室内実験に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（2）
第3回：大気環境科学全般の研究動向調査（2）	第3回：大気観測に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（1）
第4回：進捗状況の報告（1）研究の背景・目的の設定（問題点の発見）	第4回：大気観測に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（2）
第5回：進捗状況の報告（1）研究の背景・目的の設定（問題点の発見）	第5回：モデル計算に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（1）
第6回：進捗状況の報告（2）研究の具体的な手順の考察（解決法の提案）	第6回：モデル計算に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（2）
第7回：進捗状況の報告（2）研究の具体的な手順の考察（解決法の提案）	第7回：進捗状況の報告（7）改善結果の紹介と考察
第8回：進捗状況の報告（3）研究の具体的な手順の準備と工夫	第8回：進捗状況の報告（7）改善結果の紹介と考察
第9回：進捗状況の報告（3）研究の具体的な手順の準備と工夫	第9回：成果発表の準備（1）発表する内容やデータの整理・確認
第10回：進捗状況の報告（4）初期データの紹介と初步的な考察	第10回：成果発表の準備（2）発表する学会・学術雑誌の調査・選定
第11回：進捗状況の報告（4）初期データの紹介と初步的な考察	第11回：成果発表の準備（3）発表の「たたき台」の作成
第12回：進捗状況の報告（5）改善すべき点の検討（新たな問題点の発見と対策の提案）	第12回：成果発表の準備（4）発表の練習 または 原稿の推敲
第13回：進捗状況の報告（5）改善すべき点の検討（新たな問題点の発見と対策の提案）	第13回：成果発表の準備（5）発表内容の確定～発表
第14回：進捗状況の報告（6）改善点の準備	第14回：成果発表の反省・まとめ

第15回：ここまでの進捗状況のまとめ・報告	第15回：大気環境科学の研究遂行と成果発表に関するまとめ

成績評価方法：

平常点評価 100% 演習への取り組み姿勢を評価する。

動物行動生態学演習（１） A（前期）・B（後期）

三浦 慎悟

授業概要：野生動物の行動生態及び個体群生態学についての基本的な理論や知識を紹介し、野生動物の社会構造、繁殖システム、性選択、適応戦略、また個体群動態論などに関する知見を各種論文の輪読によって集積する。同時に野生動物のフィールドに滞在し、行動生態に関するデータ収集法と分析法を習得する。与えられた課題の達成度と出席、及び課題の発表状況によって評価する。

授業の到達目標：研究課題の抽出とその分析視点と方法について学ぶ。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：イントロダクションと演習の進め方	第1回：フィールド調査法とデータ収集
第2回：演習に関する文献の紹介	第2回：フィールド調査法とデータ収集
第3回：研究論文の紹介と輪読	第3回：研究論文の輪読
第4回：研究論文の紹介と輪読	第4回：研究論文の輪読
第5回：研究論文の輪読	第5回：研究論文の輪読
第6回：研究論文の輪読	第6回：研究論文の輪読
第7回：研究論文の輪読	第7回：研究論文の輪読
第8回：研究論文の輪読	第8回：研究論文の輪読
第9回：研究論文の輪読	第9回：研究論文の輪読
第10回：研究論文の輪読	第10回：論文テーマの絞り込み
第11回：研究論文の輪読	第11回：論文テーマの絞り込み
第12回：研究論文の輪読	第12回：論文テーマの絞り込み
第13回：研究論文の輪読	第13回：論文テーマの絞り込み
第14回：研究論文の輪読	第14回：論文テーマの絞り込み
第15回：フィールド演習（調査法の紹介）	第15回：論文テーマの絞り込み

教科書：随時資料を配布する。

参考文献：随時紹介する。

成績評価方法：

平常点評価 100% 授業出席状況

動物行動生態学演習（２） A（前期）・B（後期）

三浦 慎悟

授業概要：野生動物の行動生態及び個体群生態学についての基本的な理論や知識を踏まえ、研究テーマを絞り込み、データの収集法と分析法について議論し、決定し、実践する。同時に既往成果や文献などの調査し、得られた知見の位置づけを行う。評価は課題の達成状況と論文のレベルを中心に行う。

授業の到達目標：研究課題の設定、方法の習得、論文の作成。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の進め方と研究テーマの絞り込み	第1回：研究論文作成法
第2回：研究テーマの設定	第2回：研究論文作成法
第3回：研究関連データ収集法	第3回：研究論文作成法
第4回：研究に関するデータ収集法	第4回：研究論文作成法
第5回：研究に関する文献輪読	第5回：研究論文作成法
第6回：研究に関する文献輪読	第6回：研究論文作成法
第7回：研究に関する文献輪読	第7回：研究論文作成法
第8回：研究に関する文献輪読	第8回：研究データ解析法

第9回：研究に関する文献輪読	第9回：研究データ解析法
第10回：研究に関する文献輪読	第10回：研究データ解析法
第11回：研究に関する文献輪読	第11回：研究データ解析法
第12回：研究に関する文献輪読	第12回：研究データ解析法
第13回：研究に関する文献輪読	第13回：研究論文作成進捗状況の点検
第14回：研究に関する文献輪読	第14回：研究プレゼンテーション法
第15回：研究論文作成法	第15回：研究論文のプレゼンテーション

教科書：随時資料を配布する。

参考文献：随時紹介する。

成績評価方法：

平常点評価 100% 授業出席状況

【人間行動・環境科学研究領域】

学習動機づけ論演習（2） A（前期）・B（後期）

青柳 肇

授業概要：外国論文の輪読を行なう。

授業の到達目標：動機づけの面接の技法の習得。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：Motivational Interviewing の文献講読（1）	第1回：Motivational Interviewing の文献講読（16）
第2回：Motivational Interviewing の文献講読（2）	第2回：Motivational Interviewing の文献講読（17）
第3回：Motivational Interviewing の文献講読（3）	第3回：Motivational Interviewing の文献講読（18）
第4回：Motivational Interviewing の文献講読（4）	第4回：Motivational Interviewing の文献講読（19）
第5回：Motivational Interviewing の文献講読（5）	第5回：Motivational Interviewing の文献講読（20）
第6回：Motivational Interviewing の文献講読（6）	第6回：Motivational Interviewing の文献講読（21）
第7回：Motivational Interviewing の文献講読（7）	第7回：Motivational Interviewing の文献講読（22）
第8回：Motivational Interviewing の文献講読（8）	第8回：Motivational Interviewing の文献講読（23）
第9回：Motivational Interviewing の文献講読（9）	第9回：Motivational Interviewing の文献講読（24）
第10回：Motivational Interviewing の文献講読（10）	第10回：Motivational Interviewing の文献講読（25）
第11回：Motivational Interviewing の文献講読（11）	第11回：Motivational Interviewing の文献講読（26）
第12回：Motivational Interviewing の文献講読（12）	第12回：Motivational Interviewing の文献講読（27）
第13回：Motivational Interviewing の文献講読（13）	第13回：Motivational Interviewing の文献講読（28）
第14回：Motivational Interviewing の文献講読（14）	第14回：Motivational Interviewing の文献講読（29）
第15回：Motivational Interviewing の文献講読（15）	第15回：Motivational Interviewing の文献講読（30）

成績評価方法：

平常点評価 100% 出席・レポーターの発表状態

発達行動学演習（1） A（前期）・B（後期）

根ヶ山 光一

授業概要：行動発達に関する諸問題について、基本的文献を講読し、あわせて関連の問題を討論し、それによって人間存在への理解を深める。とくに身体と行動発達の関連性にかかわる諸問題、たとえば哺乳・離乳、身体接触、食、姿勢と位置移動、事故、モノの存在、性、排泄と世話、遊び、攻撃などについて、霊長類行動や進化などにも言及しながら議論を重ね、そのことを通じて行動発達研究の理論と方法論に関する理解を促進する。

なお、本授業は原則として1年生を対象とする。

授業の到達目標：

A（前期）

発達行動学に関する国内外の基本的文献を読解できる。

それをもとに議論し、自己の考えをまとめて再構造化できる。

B（後期）

発達行動学に関する国内外の基本的文献を読解できる。

議論をもとに自己の考えを再構造化し、それを主張し公開できる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要説明	第1回：文献講読（15）
第2回：文献講読（1）	第2回：文献講読（16）
第3回：文献講読（2）	第3回：文献講読（17）
第4回：文献講読（3）	第4回：文献講読（18）
第5回：文献講読（4）	第5回：文献講読（19）
第6回：文献講読（5）	第6回：文献講読（20）
第7回：文献講読（6）	第7回：文献講読（21）
第8回：文献講読（7）	第8回：文献講読（22）
第9回：文献講読（8）	第9回：文献講読（23）
第10回：文献講読（9）	第10回：文献講読（24）
第11回：文献講読（10）	第11回：文献講読（25）
第12回：文献講読（11）	第12回：文献講読（26）
第13回：文献講読（12）	第13回：文献講読（27）
第14回：文献講読（13）	第14回：文献講読（28）
第15回：文献講読（14）	第15回：総括

教科書：後日指示する。

参考文献：適宜指示する。

成績評価方法：

平常点評価 90% 文献の理解度、発表、受講状況

その他 10% 勉学態度

備考・関連 URL：研究に対する誠実な態度を期待する。

発達行動学演習（2） A（前期）・B（後期）

根ヶ山 光一

授業概要：行動発達に関する諸問題について、各自関心のあるテーマを文献あるいはデータに基づいてまとめ、それを個人発表するとともに、その問題について全員で討論する。発表に際しては、テーマの選定、基本的文献の選択、データの分析・読み取り・考察、議論の展開の論理整合性、今後の展開、他の研究との関連性と独自性、などについてとくに考慮する。

なお、本授業は原則として2年生を対象とする。

授業の到達目標：

A（前期）

発達行動学に関する研究を自ら計画・実施し論文にまとめるための力をつける。

B（後期）

発達行動学に関する研究を自ら計画・実施し論文にまとめるための力をつける。

実際に論文作成に取り組むことが出来る。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要説明	第1回：各自の研究発表（15）
第2回：各自の研究発表（1）	第2回：各自の研究発表（16）
第3回：各自の研究発表（2）	第3回：各自の研究発表（17）
第4回：各自の研究発表（3）	第4回：各自の研究発表（18）
第5回：各自の研究発表（4）	第5回：各自の研究発表（19）
第6回：各自の研究発表（5）	第6回：各自の研究発表（20）
第7回：各自の研究発表（6）	第7回：各自の研究発表（21）
第8回：各自の研究発表（7）	第8回：各自の研究発表（22）
第9回：各自の研究発表（8）	第9回：各自の研究発表（23）

第10回：各自の研究発表（9）	第10回：各自の研究発表（24）
第11回：各自の研究発表（10）	第11回：各自の研究発表（25）
第12回：各自の研究発表（11）	第12回：各自の研究発表（26）
第13回：各自の研究発表（12）	第13回：各自の研究発表（27）
第14回：各自の研究発表（13）	第14回：各自の研究発表（28）
第15回：各自の研究発表（14）	第15回：総括

成績評価方法：

レポート 20% 研究内容の到達度・独創性

平常点評価 70% 研究への積極性、授業への参加度

その他 10% 勉学態度

備考・関連 URL：研究に対する誠実な態度を期待する。

建築計画学演習（1） A（前期）・B（後期）

佐野 友紀

授業概要：建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する方法を学ぶ。

授業の到達目標：与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探ることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その1（1）	第1回：質問紙調査分析 その4（1）
第2回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その2（1）	第2回：質問紙調査分析 その5（1）
第3回：人間工学分析 その1（1）	第3回：質問紙調査分析 その6（1）
第4回：人間工学分析 その2（1）	第4回：グループ調査分析 その1（1）
第5回：人間工学分析 その3（1）	第5回：グループ調査分析 その2（1）
第6回：人間工学分析 その4（1）	第6回：グループ調査分析 その3（1）
第7回：行動観察分析 その1（1）	第7回：グループ調査分析 その4（1）
第8回：行動観察分析 その2（1）	第8回：グループ調査分析 その5（1）
第9回：行動観察分析 その3（1）	第9回：グループ調査分析 その6（1）
第10回：行動観察分析 その4（1）	第10回：修士研究テーマに関わる調査分析 その1（1）
第11回：行動観察分析 その5（1）	第11回：修士研究テーマに関わる調査分析 その2（1）
第12回：行動観察分析 その6（1）	第12回：修士研究テーマに関わる調査分析 その3（1）
第13回：質問紙調査分析 その1（1）	第13回：修士研究テーマに関わる調査分析 その4（1）
第14回：質問紙調査分析 その2（1）	第14回：修士研究テーマに関わる調査分析 その5（1）
第15回：質問紙調査分析 その3（1）	第15回：修士研究テーマに関わる調査分析 その6（1）

教科書：必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献：建築計画教科書、都市計画教科書、建築人間工学事典（いずれも彰国社）

成績評価方法：

レポート 50% 建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。

平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

備考・関連 URL：本授業は、建築計画学演習（2）と連携して行う。

建築計画学演習（2） A（前期）・B（後期）

佐野 友紀

授業概要：建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは捨選択的に解決する方法を学ぶ。

授業の到達目標：与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探ることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その1（2）	第1回：質問紙調査分析 その4（2）
第2回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その2（2）	第2回：質問紙調査分析 その5（2）
第3回：人間工学分析 その1（2）	第3回：質問紙調査分析 その6（2）
第4回：人間工学分析 その2（2）	第4回：グループ調査分析 その1（2）
第5回：人間工学分析 その3（2）	第5回：グループ調査分析 その2（2）
第6回：人間工学分析 その4（2）	第6回：グループ調査分析 その3（2）
第7回：行動観察分析 その1（2）	第7回：グループ調査分析 その4（2）
第8回：行動観察分析 その2（2）	第8回：グループ調査分析 その5（2）
第9回：行動観察分析 その3（2）	第9回：グループ調査分析 その6（2）
第10回：行動観察分析 その4（2）	第10回：修士研究テーマに関わる調査分析 その1（2）
第11回：行動観察分析 その5（2）	第11回：修士研究テーマに関わる調査分析 その2（2）
第12回：行動観察分析 その6（2）	第12回：修士研究テーマに関わる調査分析 その3（2）
第13回：質問紙調査分析 その1（2）	第13回：修士研究テーマに関わる調査分析 その4（2）
第14回：質問紙調査分析 その2（2）	第14回：修士研究テーマに関わる調査分析 その5（2）
第15回：質問紙調査分析 その3（2）	第15回：修士研究テーマに関わる調査分析 その6（2）

教科書：必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献：建築計画教科書、都市計画教科書、建築人間工学事典（いずれも彰国社）

成績評価方法：

レポート 50% 建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。

平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

備考・関連 URL：本授業は、建築計画学演習（1）と連携して行う。

建築環境学演習（１） A（前期）・B（後期）

小島 隆矢

授業概要：

A（前期）

住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱うための主要な調査分析手法を習得することを目標として演習を行う。具体的には、１）感覚・知覚、２）印象・イメージ、３）着眼点と評価構造 に関する測定と分析について、講義・実習を行う。

B（後期）

建築環境学演習（１）Aに引き続き、住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱うための主要な調査分析手法を習得することを目標として演習を行う。具体的には、４）満足度、５）環境に対する意識、６）価値、７）項目間の因果関係 に関する測定と分析について、講義・実習を行う。

授業の到達目標：

- ・環境心理・行動学分野における主要な調査分析手法を習得する。
- ・各自が取り組む研究テーマにどんな手法が活用できるか検討できる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：建築環境工学および建築環境心理学の成立	第１回：環境に関する満足度調査の方法
第２回：建築環境心理分野における調査分析手法概観	第２回：環境に関する満足度調査の事例
第３回：感覚・知覚に関する環境心理評価研究の方法	第３回：環境に関する満足度調査法演習（実査）
第４回：感覚・知覚に関する環境心理評価研究事例	第４回：環境に関する満足度調査法演習（分析）
第５回：感覚・知覚に関する環境心理評価法演習（測定）	第５回：環境に関する意識調査の方法・事例
第６回：感覚・知覚に関する環境心理評価法演習（分析）	第６回：環境に関する意識調査法演習（実査）
第７回：印象・イメージに関する環境心理評価研究の方法	第７回：環境に関する意識調査法演習（分析）
第８回：印象・イメージに関する環境心理評価研究事例	第８回：環境の価値に関する環境心理評価研究の方法
第９回：印象・イメージに関する環境心理評価法演習（測定）	第９回：環境の価値に関する環境心理評価研究事例
第10回：印象・イメージに関する環境心理評価法演習（分析）	第10回：環境の価値に関する環境心理評価法演習（実査）
第11回：評価項目抽出のための定性調査の方法	第11回：環境の価値に関する環境心理評価法演習（分析）
第12回：評価項目抽出のための定性調査の事例	第12回：環境心理評価項目間の因果関係の分析法
第13回：評価項目抽出のための定性調査法演習（実査）	第13回：環境心理評価項目間の因果関係の分析事例
第14回：評価項目抽出のための定性調査法演習（結果の整理・分析）	第14回：環境心理評価項目間の因果分析法演習（実査）
第15回：学習した手法に関する総合討論	第15回：環境心理評価項目間の因果分析法演習（分析）

教科書：とくに指定しない。

参考文献：適宜、指示する。

成績評価方法：

- レポート 30% 実習の結果に基づき、それぞれの手法の習得度を評価する。
- 平常点評価 40% 出席状況および熱心さを評価する。
- その他 30% 各自の自主的な取り組みなどを総合的に評価する。

建築環境学演習（２） A（前期）・B（後期）

小島 隆矢

授業概要：

A（前期）

建築環境心理分野ほか、住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱う研究分野にお

けるこれまでの研究対象環境および研究テーマの動向について学習する。さらに今後研究すべき課題について検討することにより、各自の見識を深めるとともに、修士論文の研究につなげる。

B（後期）

建築環境学演習（２）Aに引き続き、建築環境心理分野ほか、住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱う研究分野におけるこれまでの研究対象環境および研究テーマの動向について学習する。さらに今後研究すべき課題について検討することにより、各自の見識を深めるとともに、修士論文の研究につなげる。

授業の到達目標：

- ・ 建築環境心理分野および関連する周辺分野の研究動向を把握する。
- ・ 今後、どんな課題を研究すべきか、自分なりの見解を持つ。
- ・ 本講義で学んだことを各自の修士論文の研究等に役立てる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：建築環境心理分野における研究対象環境・テーマ歴史	第1回：公共施設に関する研究事例
第2回：建築環境心理分野における昨今の研究対象環境・テーマ	第2回：公共施設に関する研究課題検討（ディスカッション）
第3回：住居・室内に関する研究事例	第3回：公共施設に関する研究計画立案（発表）
第4回：住居・室内に関する研究課題検討（ディスカッション）	第4回：公共施設に関する研究計画検討（ディスカッション）
第5回：住居・室内に関する研究計画立案（発表）	第5回：集客施設に関する研究事例
第6回：住居・室内に関する研究計画検討（ディスカッション）	第6回：集客施設に関する研究課題検討（ディスカッション）
第7回：オフィスに関する研究事例	第7回：集客施設に関する研究計画立案（発表）
第8回：オフィスに関する研究課題検討（ディスカッション）	第8回：集客施設に関する研究計画検討（ディスカッション）
第9回：オフィスに関する研究計画立案（発表）	第9回：街路・公共空間に関する研究事例
第10回：オフィスに関する研究計画検討（ディスカッション）	第10回：街路・公共空間に関する研究課題検討（ディスカッション）
第11回：都市・地域に関する研究事例	第11回：街路・公共空間に関する研究計画立案（発表）
第12回：都市・地域に関する研究課題検討（ディスカッション）	第12回：街路・公共空間に関する研究計画検討（ディスカッション）
第13回：都市・地域に関する研究計画立案（発表）	第13回：他分野の理論・手法を取り入れた研究事例
第14回：都市・地域に関する研究計画検討（ディスカッション）	第14回：今後、注目すべき他分野の理論・手法（発表・ディスカッション）
第15回：総合討論	第15回：総合討論

教科書：とくに指定しない。

参考文献：適宜、指示する。

成績評価方法：

平常点評価 50% 出席状況、発表内容などを評価する。

その他 50% 各自の自主的な取り組みなどを総合的に評価する。

環境心理・環境デザイン演習（１） A（前期）・B（後期）

佐藤 将之

授業概要：建築や都市におけるフィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。

演習では、環境心理・環境デザイン・建築計画、各学の諸相を外観し、フィールドでの基本を理解すると共に新規的研究を模索する。また、応用として個々のフィールドや課題を探し、研究準備を整える。

※演習（１）は、演習（２）と連動して進める。

授業の到達目標：フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材となること。」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材

となる。」

演習では、学術学会での発表を行えるレベルの研究成果をまとめることを必修とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要説明	第1回：データ処理の方法その4（1）
第2回：演習の計画と進め方	第2回：環境デザイン発想法の実習その1（1）初級
第3回：寸法計測調査その1（1）初級	第3回：環境デザイン発想法の実習その2（1）上級
第4回：寸法計測調査その2（1）上級	第4回：環境行動の記述方法に関する実習その1（1）初級
第5回：行動観察調査その1（1）初級	第5回：環境行動の記述方法に関する実習その2（1）中級
第6回：行動観察調査その2（1）中級	第6回：環境行動の記述方法に関する実習その3（1）中級
第7回：行動観察調査その3（1）中級	第7回：環境行動の記述方法に関する実習その4（1）上級
第8回：行動観察調査その4（1）上級	第8回：表現技法の実習その1（1）初級
第9回：建築の使われ方調査その1（1）初級	第9回：表現技法の実習その2（1）中級
第10回：建築の使われ方調査その2（1）中級	第10回：表現技法の実習その3（1）上級
第11回：建築の使われ方調査その3（1）中級	第11回：個々の課題（修士論文）の検討その1（1）目的の検討
第12回：建築の使われ方調査その4（1）上級	第12回：個々の課題（修士論文）の検討その2（1）アウトラインの検討
第13回：データ処理の方法その1（1）初級	第13回：個々の課題（修士論文）の検討その3（1）調査法の検討
第14回：データ処理の方法その2（1）中級	第14回：個々の課題（修士論文）の検討その4（1）分析法の検討
第15回：データ処理の方法その3（1）上級	第15回：総括

教科書：適宜印刷物を配布する

参考文献：コンテンツごとに講義中に紹介する

成績評価方法：

レポート 50% 提出した課題を評価する

平常点評価 50% 出席および、作業や議論への参加を評価する

環境心理・環境デザイン演習（2） A（前期）・B（後期）

佐藤 将之

授業概要：建築や都市におけるフィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。

演習では、環境心理・環境デザイン・建築計画、各学の諸相を外観し、フィールドでの基本を理解すると共に新規的研究を模索する。また、応用として個々のフィールドや課題を探し、研究準備を整える。

※演習（2）は、演習（1）と連動して進める。

授業の到達目標：フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材となること。」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材となる。」

演習では、学術学会での発表を行えるレベルの研究成果をまとめることを必修とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要説明	第1回：データ処理の方法その4（2）
第2回：演習の計画と進め方	第2回：環境デザイン発想法の実習その1（2）初級
第3回：寸法計測調査その1（2）初級	第3回：環境デザイン発想法の実習その2（2）上級
第4回：寸法計測調査その2（2）上級	第4回：環境行動の記述方法に関する実習その1（2）初級

第5回：行動観察調査その1（2）初級	第5回：環境行動の記述方法に関する実習その2（2）中級
第6回：行動観察調査その2（2）中級	第6回：環境行動の記述方法に関する実習その3（2）中級
第7回：行動観察調査その3（2）中級	第7回：環境行動の記述方法に関する実習その4（2）上級
第8回：行動観察調査その4（2）上級	第8回：表現技法の実習その1（2）初級
第9回：建築の使われ方調査その1（2）初級	第9回：表現技法の実習その2（2）中級
第10回：建築の使われ方調査その2（2）中級	第10回：表現技法の実習その3（2）上級
第11回：建築の使われ方調査その3（2）中級	第11回：個々の課題（修士論文）の検討その1（2）目的の検討
第12回：建築の使われ方調査その4（2）上級	第12回：個々の課題（修士論文）の検討その2（2）アウトラインの検討
第13回：データ処理の方法その1（2）初級	第13回：個々の課題（修士論文）の検討その3（2）調査法の検討
第14回：データ処理の方法その2（2）中級	第14回：個々の課題（修士論文）の検討その4（2）分析法の検討
第15回：データ処理の方法その3（2）上級	第15回：総括

教科書：適宜印刷物を配布する

参考文献：コンテンツごとに講義中に紹介する

成績評価方法：

試験 0% 試験は行わない

レポート 50% 提出した課題を評価する

平常点評価 50% 出席および、作業や議論への参加を評価する

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学演習（2） A（前期）・B（後期）

河西 宏祐

授業概要：

A（前期）

労働組合論について、実態調査を行う。受講生が、産業職業社会学演習（1）A、産業職業社会学演習（1）Bの成果の上に立って、さらに研究を深め、より高いレベルの研究論文（6万字以上）を作成する。

B（後期）

労働組合論について、実態調査を行う。受講生が、産業職業社会学演習（1）A、産業職業社会学演習（1）B、産業職業社会学演習（2）Aの成果の上に立って、さらに研究を深め、よりレベルの高い研究論文（6万字以上）を作成する。

授業の到達目標：研究論文（6万字上）の作成。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（授業の目的・概要）	第1回：ガイダンス（授業の目的・概要）
第2回：文献研究（1）労働組合の理論（上級）	第2回：実態調査（1）労働組合の組織（上級）
第3回：文献研究（2）労働組合の理論（準上級）	第3回：実態調査（2）労働組合の組織（準上級）
第4回：文献研究（3）労働組合の理論（超上級）	第4回：実態調査（3）労働組合の組織（超上級）
第5回：文献研究（4）労働組合の組織論（上級）	第5回：実態調査（4）労働組合の機能（上級）
第6回：文献研究（5）労働組合の組織論（準上級）	第6回：実態調査（5）労働組合の機能（準上級）
第7回：文献研究（6）労働組合の組織論（超上級）	第7回：実態調査（6）労働組合の機能（超上級）
第8回：文献研究（7）労働組合の機能論（上級）	第8回：研究結果発表（1）（上級）
第9回：文献研究（8）労働組合の機能論（準上級）	第9回：研究結果発表（2）（準上級）
第10回：文献研究（9）労働組合の機能論（超上級）	第10回：研究結果発表（3）（超上級）

第11回：実態調査（１）労働組合の組織の実態（上級）	第11回：研究論文の提出
第12回：実態調査（２）労働組合の組織の実態（超上級）	第12回：研究論文の添削
第13回：実態調査（３）労働組合の機能の実態（上級）	第13回：研究論文の再提出
第14回：実態調査（４）労働組合の機能の実態（超上級）	第14回：研究論文の再添削
第15回：研究論文（６万字以上）の提出	第15回：完成論文の提出

参考文献：授業のなかで随時紹介する。

成績評価方法：

そ の 他 出席状況・研究論文（６万字以上）を総合して評価する。

備考・関連 URL：

A（前期）

- ・授業の内容は極めて高度であり、専門的である。高度な研究水準・知識がなければ、履修は難しい。
- ・産業職業社会学演習（２）Bを合わせて履修すること。
- ・産業職業社会学研究指導A、産業職業社会学研究指導Bを合わせて履修すること。
- ・産業職業社会学演習（１）A、産業職業社会学演習（１）Bを既に履修していること。

B（後期）

- ・授業の内容は極めて高度であり、専門的である。高度な研究水準・知識がなければ、履修は難しい。
- ・産業職業社会学演習（２）Aを合わせて履修すること。
- ・産業職業社会学研究指導A、産業職業社会学研究指導Bを合わせて履修すること。
- ・産業職業社会学演習（１）A、産業職業社会学演習（１）Bを既に履修していること。

文化生態学演習（１） A（前期）・B（後期）

蔵持 不三也

授業概要：文化人類学のさまざまなトピックスを、歴史学や社会学、美術史、思想、哲学などの領域とも関連づけながら講義する。

授業の到達目標：文化人類学を専攻するものとしての知見と方法論を習得してもらう。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：文化人類学の現在：諸理論（１）	第1回：文化人類学：文献解題（６）
第2回：文化人類学の現在：諸理論（２）	第2回：文化人類学：文献解題（７）
第3回：文化人類学の現在：諸理論（３）	第3回：文化人類学：文献解題（８）
第4回：文化人類学の現在：諸理論（４）	第4回：文化人類学：文献解題（９）
第5回：文化人類学の現在：諸理論（５）	第5回：文化人類学：文献解題（10）
第6回：文化人類学の現在：諸理論（６）	第6回：蔵持著作解題（１）
第7回：文化人類学の現在：諸理論（７）	第7回：蔵持著作解題（２）
第8回：文化人類学の現在：諸理論（８）	第8回：蔵持著作解題（３）
第9回：文化人類学の現在：諸理論（９）	第9回：蔵持著作解題（４）
第10回：文化人類学の現在：諸理論（10）	第10回：蔵持著作解題（５）
第11回：文化人類学：文献解題（１）	第11回：蔵持著作解題（６）
第12回：文化人類学：文献解題（２）	第12回：蔵持著作解題（７）
第13回：文化人類学：文献解題（３）	第13回：蔵持著作解題（８）
第14回：文化人類学：文献解題（４）	第14回：蔵持著作解題（９）
第15回：文化人類学：文献解題（５）	第15回：蔵持著作解題（10）

参考文献：授業で提示する

成績評価方法：

試 験 90% 課題に対する習熟度

平常点評価 10% 出席状況

備考・関連 URL：Wikipedia の蔵持関連項目

文化生態学演習（２） A（前期）・B（後期）

蔵持 不三也

授業概要：演習（１）でのさまざまな考察と受講生自身の調査データに基づいて、学会誌や紀要用の論文作成に向けての実践的トレーニングを行なう。

授業の到達目標：文化人類学を専攻するものとしての知見と方法論を習得してもらう。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：研究発表（１）	第１回：現地調査実習（海外）
第２回：研究発表（２）	第２回：現地調査実習（海外）
第３回：研究発表（３）	第３回：現地調査実習（海外）
第４回：研究発表（４）	第４回：調査総括（１）
第５回：研究発表（５）	第５回：調査総括（２）
第６回：研究発表（６）	第６回：調査総括（３）
第７回：研究発表（７）	第７回：調査総括（４）
第８回：研究発表（８）	第８回：第１次論文構想検討会（この検討会后、受講生は速やかな論文提出を求められる）
第９回：研究発表（９）	第９回：第１次論文構想検討会（この検討会后、受講生は速やかな論文提出を求められる）
第10回：研究発表（10）	第10回：第２次論文構想検討会
第11回：研究発表（11）	第11回：第２次論文構想検討会
第12回：研究発表（12）	第12回：第３次論文構想検討会
第13回：研究発表（13）	第13回：第３次論文構想検討会
第14回：研究発表（14）	第14回：第４次論文構想検討会
第15回：現地調査実習（海外）	第15回：第４次論文構想検討会

参考文献：授業で提示する

成績評価方法：

試験 実施せず

レポート 90% 課題に対する習熟度

平常点評価 10% 出席状況

備考・関連 URL：Wikipedia の蔵持関連項目

アジア社会論演習（１） A（前期）・B（後期）

店田 廣文

授業概要：中東・北アフリカやアジアと日本社会に関する社会学文献の講読と発表をおこなう。また各自の研究課題の検討をしながら、研究テーマの絞り込みをおこなう。学部の演習と共同して実施する実態調査に参加させ、調査研究能力を養成する。

授業の到達目標：基礎的な研究能力および調査の企画・実施能力を習得させること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：アジア研究イントロダクション（１）	第１回：中東・北アフリカ研究イントロダクション（１）
第２回：アジア研究イントロダクション（２）	第２回：中東・北アフリカ研究イントロダクション（２）
第３回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（１）	第３回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（１）
第４回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（２）	第４回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（２）
第５回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（３）	第５回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（３）
第６回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（４）	第６回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（４）

第7回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（5）	第7回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（5）
第8回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（6）	第8回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（6）
第9回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（7）	第9回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（7）
第10回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（8）	第10回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（8）
第11回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（9）	第11回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（9）
第12回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（10）	第12回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（10）
第13回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（11）	第13回：中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表（11）
第14回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（12）	第14回：レポート提出と解説（1）
第15回：アジア関係 社会学基本文献講読・発表（13）	第15回：レポート提出と解説（2）

参考文献：授業中に紹介する

成績評価方法：

レポート 55% 構成、内容、文章作成などによる評価。

平常点評価 45% 出欠、発表への参加などによる評価。

備考・関連 URL：<http://www.imemgs.com>

アジア社会論演習（2） A（前期）・B（後期）

店田 廣文

授業概要：演習（1）をふまえて、各自の研究テーマに即した文献講読と発表をおこなう。また修士論文作成を前提として、学術論文作成と調査報告書作成に関する能力を養成する。

授業の到達目標：研究者としての基礎能力である、論文作成等および研究発表能力を習得すること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：アジア研究・調査イントロダクション（1）	第1回：中東・北アフリカ研究・調査イントロダクション（1）
第2回：アジア研究・調査イントロダクション（2）	第2回：中東・北アフリカ研究・調査イントロダクション（2）
第3回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（1）	第3回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（1）
第4回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（2）	第4回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（2）
第5回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（3）	第5回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（3）
第6回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（4）	第6回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（4）
第7回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（5）	第7回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（5）
第8回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（6）	第8回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（6）
第9回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（7）	第9回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（7）
第10回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（8）	第10回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（8）

第11回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（9）	第11回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（9）
第12回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（10）	第12回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（10）
第13回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（11）	第13回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表（11）
第14回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（12）	第14回：レポート提出と解説（1）
第15回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表（13）	第15回：レポート提出と解説（2）

参考文献：授業中に紹介する

成績評価方法：

レポート 65% 構成、内容、文章作成などによる評価

平常点評価 35% 出欠、発表への参加などによる評価

備考・関連 URL：<http://www.imemgs.com>

移住論演習（1） A（前期）・B（後期）

森本 豊富

授業概要：

A（前期）

- ・移民研究に関する和文・英文の論文を多読し「論文評価シート」を通じて批判的に考察し議論する。
- ・修士論文の調査・執筆に関する進捗状況を報告する。

B（後期）

- ・移民研究に関する和文・英文の論文を読み「論文評価シート」を通じて批判的に考察し議論する。
- ・修士論文の調査・執筆に関する進捗状況を報告する。

授業の到達目標：

A（前期）

- ・移民研究の最新動向について知る。
- ・課題論文の議論に積極的に参加し、論理的に意見を述べる事が出来る。
- ・論文の書き方について学び、口頭発表を行う。

B（後期）

- ・移民研究の動向について知り、議論の展開、論文の書き方を身につける。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：オリエンテーション・夏期休暇中のフィールドワーク報告
第2回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション	第2回：移民調査法の研究（総論）
第3回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション	第3回：移民調査法の研究（文献調査）
第4回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション	第4回：移民調査法の研究（インタビュー調査）
第5回：修論計画書（1）の提出と発表	第5回：移民調査法の研究（ライフヒストリー調査）
第6回：移民関連論文（出移民）の輪読とディスカッション	第6回：フィールドワークの設定
第7回：移民関連論文（出移民）の輪読とディスカッション	第7回：フィールドワーク報告
第8回：移民関連論文（出移民）の輪読とディスカッション	第8回：フィールドワーク報告
第9回：書評（1）の提出と発表	第9回：フィールドワーク報告
第10回：移民関連論文（入移民）の輪読とディスカッション	第10回：書評（2）の提出と発表

第11回：移民関連論文（入移民）の輪読とディスカッション	第11回：フィールドワーク報告
第12回：移民関連論文（入移民）の輪読とディスカッション	第12回：フィールドワーク報告
第13回：移民関連論文（トランスナショナル・マイグラント）の輪読とディスカッション	第13回：フィールドワーク報告
第14回：移民関連論文（トランスナショナル・マイグラント）の輪読とディスカッション	第14回：フィールドワーク報告
第15回：フィールドワークの設定と夏期休暇中の計画提出と発表	第15回：修論計画書（2）の提出と発表

成績評価方法：

A（前期）

レポート 50% 課題の提出と発表をもとに総合的に評価する。

平常点評価 50% 欠席は3回までとする。

B（後期）

レポート 40% 課題の提出と発表をもとに総合的に評価する。

平常点評価 60% 欠席は3回までとする。

移住論演習（2） A（前期）・B（後期）

森本 豊富

授業概要：

A（前期）

- ・和文・英文の論文を読み移民研究の最新動向を知る。
- ・調査の進捗状況について口頭発表を定期的に行う。

B（後期）

- ・共通の英文テキストを中心に移民研究の最新動向を知る。
- ・調査発表を定期的に行う。

授業の到達目標：

A（前期）

- ・和文・英読文献を多読・精読し、説得力のある議論の力をみにつける。
- ・フィールド調査のスキルを向上させる。

B（後期）

- ・英読文献を多読・精読し、説得力のある議論の力をみにつける。
- ・フィールド調査のスキルを向上させる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：オリエンテーション・夏期休暇中のフィールドワーク報告
第2回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション	第2回：移民調査法の研究（総論）
第3回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション	第3回：移民調査法の研究（文献調査）
第4回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション	第4回：移民調査法の研究（インタビュー調査）
第5回：修論計画書（1）の提出と発表	第5回：移民調査法の研究（ライフヒストリー調査）
第6回：移民関連論文（出移民）の輪読とディスカッション	第6回：フィールドワークの設定
第7回：移民関連論文（出移民）の輪読とディスカッション	第7回：フィールドワーク報告

第8回：移民関連論文（出移民）の輪読とディスカッション	第8回：フィールドワーク報告
第9回：書評（1）の提出と発表	第9回：フィールドワーク報告
第10回：移民関連論文（入移民）の輪読とディスカッション	第10回：書評（2）の提出と発表
第11回：移民関連論文（入移民）の輪読とディスカッション	第11回：フィールドワーク報告
第12回：移民関連論文（入移民）の輪読とディスカッション	第12回：フィールドワーク報告
第13回：移民関連論文（トランスナショナル・マイグラント）の輪読とディスカッション	第13回：フィールドワーク報告
第14回：移民関連論文（トランスナショナル・マイグラント）の輪読とディスカッション	第14回：フィールドワーク報告
第15回：フィールドワークの設定と夏期休暇中の計画提出と発表	第15回：修論計画書（2）の提出と発表

成績評価方法：

レポート 40% 課題の提出状況と内容をもとに判断する。

平常点評価 60% 欠席は3回までとする。

家族社会学演習（1） A（前期）・B（後期）

池岡 義孝

授業概要：

A（前期）

本演習では、家族社会学研究と質的調査研究の歴史と現状について解説をしたあと、質的家族研究が依拠している質的調査研究の方法と研究成果を主として文献講読によって検討する。そのことで後期の演習（1）Bの基礎力をつけるのが本演習の目的である。講読は邦文文献を主とするが、必要に応じて欧文文献も取り上げることがある。

B（後期）

質的調査研究一般について幅広く学習した家族社会学演習（1）Aをふまえて、質的家族研究の方法とその研究成果について、主として文献講読によって検討する。したがって、本演習で取り上げる文献は、質的な家族研究に限定する。邦文文献を主とするが、必要に応じて欧文文献も取り上げることがある。

授業の到達目標：

A（前期）

各人が取り組む研究に必要でその基礎となる質的調査研究の方法と研究成果を文献講読を通じて学習し、理解を深めることが目標である。また、それら質的調査研究の論文や著書を、場合によっては批判できるような評価能力も培うことも目標としたい。

B（後期）

各人が取り組む研究に必要でその基礎となる質的家族研究の方法を文献講読を通じて学習し、理解を深めることが目標である。また、それら質的家族研究の論文や著書を、場合によっては批判できるような評価能力も培うことも目標としたい。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）	第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）
第2回：家族社会学研究の研究史と現状（欧米の場合）	第2回：質的家族研究の歴史と現状（欧米の場合）
第3回：家族社会学研究の研究史と現状（日本の場合）	第3回：質的家族研究の歴史と現状（日本の場合）
第4回：質的調査研究の歴史と現状（欧米の場合）	第4回：講読文献の選択と解説
第5回：質的調査研究の歴史と現状（日本の場合）	第5回：欧米の質的家族研究の歴史についての文献講読
第6回：講読文献の選択と解説	第6回：日本の質的家族研究の歴史についての文献講読

第7回：欧米の質的調査研究の歴史についての文献講読	第7回：欧米の質的家族研究の現状についての文献講読
第8回：欧米の質的調査研究の現状についての文献講読	第8回：日本の質的家族研究の現状についての文献講読
第9回：日本の質的調査研究の歴史についての文献講読	第9回：インタビューによる家族研究の文献講読
第10回：日本の質的調査研究の現状についての文献講読	第10回：家族の言説分析の文献講読
第11回：インタビュー調査についての文献講読	第11回：生活史法を用いた家族研究の文献講読
第12回：生活史調査についての文献講読	第12回：エスノメソドロジーを用いた家族研究の文献講読
第13回：言説分析についての文献講読	第13回：歴史社会学的方法を用いた家族研究の文献講読
第14回：社会構築主義についての文献講読	第14回：社会構築主義を用いた家族研究の文献講読
第15回：総括（演習の成果と課題の確認）	第15回：総括（演習の成果と課題の確認）

教科書：とくに使用しない

参考文献：受講生と相談のうえで決定する

成績評価方法：

レポート 30% 最終レポートによって学習成果を評価する。

平常点評価 70% 毎回の報告やディスカッションで、理解度および授業への積極性を評価する。

家族社会学演習（2） A（前期）・B（後期）

池岡 義孝

授業概要：

A（前期）

家族社会学演習（1）における社会調査の質的調査研究一般や質的家族研究の文献講読による学習を基礎にして、それと関連させながら各人の研究テーマを検討することが本演習の目的である。具体的には各人の研究テーマの報告とその検討を中心に進めることになる。また、必要に応じて、各人の研究テーマに関連した研究論文の報告と検討も行う。

B（後期）

家族社会学演習（2）Aで確定した研究テーマについて、その分析枠組、データ収集とデータ分析の方法などから、さらに詳しく検討するのが本演習の目的である。具体的には各人の研究テーマの報告とその検討を中心に進めることになるが、必要に応じて、各人の研究テーマに関連した研究論文の報告と検討も行う。

授業の到達目標：

A（前期）

研究テーマに関連した文献を収集し、そのうち重要なものについて取り上げて報告し検討することによって、研究テーマを確定することが本演習の目的である。

B（後期）

研究テーマに関連した文献を収集し、そのうち重要なものについて取り上げて報告することによって、研究の枠組みや方法を検討し、それにもとづいて具体的に研究に着手するところまで到達することを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）	第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）
第2回：卒業研究の報告と検討	第2回：研究テーマの報告と検討
第3回：研究テーマ（希望するテーマ）の報告	第3回：研究テーマに関連する先行研究（基本的文献）の検討
第4回：研究テーマ（希望するテーマ）の検討	第4回：研究テーマに関連する先行研究（専門的文献）の検討
第5回：関連文献（基本的文献）の報告と検討	第5回：研究枠組についての報告と検討

第6回：関連文献（応用的文献）の報告と検討	第6回：研究枠組の関連文献（基本的文献）の報告と検討
第7回：関連文献（専門的文献）の報告と検討	第7回：研究枠組の関連文献（専門的文献）の報告と検討
第8回：研究テーマ（再考したテーマ）の報告	第8回：データ収集の方法についての報告と検討
第9回：研究テーマ（再考したテーマ）の検討	第9回：データ収集の方法についての関連論文（基本的文献）の報告と検討
第10回：関連文献（基本的文献）の報告と検討	第10回：データ収集の方法についての関連論文（専門的文献）の報告と検討
第11回：関連文献（応用的文献）の報告と検討	第11回：データ分析の方法についての報告と検討
第12回：関連文献（専門的文献）の報告と検討	第12回：データ分析の方法についての関連論文（基本的文献）の報告と検討
第13回：研究テーマ（確定）の報告と検討	第13回：データ分析の方法についての関連論文（専門的文献）の報告と検討
第14回：研究テーマの確定	第14回：研究テーマと研究枠組み、データ収集と分析の方法についての最終的な報告と検討
第15回：総括（演習の成果と課題の確認）	第15回：総括（演習の成果と課題の確認）

教科書：とくに使用しない。

参考文献：受講生と相談のうえで決定する。

成績評価方法：

レポート 50% 最終レポートによって学習成果を評価する。

平常点評価 50% 毎回の報告やディスカッションで、理解度および授業への積極性を評価する。

都市社会学演習（1） A（前期）・B（後期）

臼井 恒夫

授業概要：現代都市の変容について理解を深めてもらうために、多様な視点から議論を進めていく。そのためのテキストとして今年度はD.Byrne, Understanding the Urban, Palgrave, 2001を使用する。受講生に毎回、本書の報告を分担してもらいながら、テキストの内容に沿って議論と考察を深めていく。したがって、受講生各自は報告と議論への積極的な参加が求められることになる。

授業の到達目標：現代都市の成立の背景を探るとともに、現代都市の諸相や都市問題について理解を深める。欧米の都市と日本の都市との比較の視点について検討を進めてゆく。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：The suburbs	第1回：The suburbs
第2回：Living, shopping and working ex-urban ; edge city	第2回：Living, shopping and working ex-urban ; edge city
第3回：What makes cities unequal ?	第3回：What makes cities unequal ?
第4回：The meaning of culture	第4回：The meaning of culture
第5回：The political economy of culture ; city and suburb in the urban world	第5回：The political economy of culture ; city and suburb in the urban world
第6回：The cultural turn ; city as text	第6回：The cultural turn ; city as text
第7回：Ways of being ; the constitution and reconstruction of collective identities	第7回：Ways of being ; the constitution and reconstruction of collective identities
第8回：Land matters ; building in space	第8回：Land matters ; building in space
第9回：Shopping and trading ; the postmodern urban core	第9回：Shopping and trading ; the postmodern urban core
第10回：Edge city ; the creation of placeless place	第10回：Edge city ; the creation of placeless place
第11回：Necessity for the local state	第11回：Necessity for the local state
第12回：Collective consumption	第12回：Collective consumption
第13回：Entrepreneurial regimes	第13回：Entrepreneurial regimes
第14回：Civil society, social movements and urban politics	第14回：Civil society, social movements and urban politics
第15回：レポート課題と解説	第15回：レポート課題と解説

教科書：

A（前期）

テキストは教場であらかじめ配布するので、受講生は用意する必要はない。

B（後期）

テキストはこちらで用意したものを配布する。

参考文献：参考文献は授業の中で指示する。

成績評価方法：

A（前期）

そ の 他 授業への参加度や授業態度、最終レポートなどにより総合的に評価する。

B（後期）

レポ ー ト 60% 授業期間中の2～3回程度のレポート内容で評価する。

平常点評価 40% 授業の中での報告内容や授業態度で評価する。

都市社会学演習（2） A（前期）・B（後期）

臼井 恒夫

授業概要：今日の第三世界において、都市化とグローバリゼーションの進展は各国の都市にどのような影響を及ぼしているのだろうか。本演習では、上海、ソウル、バンコク、マニラ、シンガポール、ホーチミン・シティなどのアジアの都市を事例として取り上げながら、都市化とグローバリゼーションがもたらす影響について考察していく。

受講生は、研究対象となるアジアの都市を分担しながら、各国の都市について報告を行いつつ議論を進めていく。

授業の到達目標：近年アジアでは大都市を中心に目覚ましい経済発展と都市の成長をとげている。日本の都市との比較の視点を交えながら、アジアの都市の成長と変容の過程について理解を深める。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：The suburbs
第2回：アジアにおける都市化の進展（1）	第2回：Living, shopping and working ex-urban；edge city
第3回：アジアにおける都市化の進展（2）	第3回：What makes cities unequal？
第4回：都市化の現状と問題（1）	第4回：The meaning of culture
第5回：都市化の現状と問題（2）	第5回：The political economy of culture；city and suburb in the urban world
第6回：中国における都市化の現状（1）	第6回：The cultural turn；city as text
第7回：中国における都市化の現状（2）	第7回：Ways of being；the constitution and reconstruction of collective identities
第8回：上海の都市化とその問題点（1）	第8回：Land matters；building in space
第9回：上海の都市化とその問題点（2）	第9回：Shopping and trading；the postmodern urban core
第10回：Locality；space and structure	第10回：Edge city；the creation of placeless place
第11回：World cities or cities in a world system？	第11回：Necessity for the local state
第12回：World cities as unequal cities	第12回：Collective consumption
第13回：The global and the local under postindustrial capitalism	第13回：Entrepreneurial regimes
第14回：Urban ecologies；Chicago and beyond	第14回：Civil society, social movements and urban politics
第15回：Divided cities	第15回：レポート課題と解説

教科書：テキストはこちらで用意する。

参考文献：参考文献は授業中に指示する。

成績評価方法：

A（前期）

レポ ー ト 60% 授業期間中の2～3回程度のレポートで評価する。

平常点評価 40% 授業期間中の報告と授業態度で評価する。

B（後期）

レポート 60% 授業期間中に提出するレポート内容で評価する。

平常点評価 40% 授業における報告や授業態度で評価する。

科学史科学哲学演習（１） A（前期）・B（後期）

加藤 茂生

授業概要：科学史・科学哲学に関する近年の論考を輪読する。テキストには科学史・科学哲学に関する英語の文献を用いる。

授業の到達目標：科学史・科学哲学の最新の論考を理解し、広く研究状況に通じるようになること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス。以下の授業計画は変更する可能性がある。あらかじめ了解されたい。	第1回：The development of the historiography of science 科学史のヒストリオグラフィー
第2回：What is science? 科学とは何か	第2回：The history of science and the history of society 科学史と社会史
第3回：Scientific reasoning 科学的推論	第3回：The history of science and the philosophy of science 科学史と科学哲学
第4回：Explanation in science 科学的説明	第4回：Sociological theories of scientific knowledge 科学知識の社会学理論
第5回：Realism and anti-realism 実在論と反実在論	第5回：Marxism and the history of science マルクス主義と科学史
第6回：Scientific change and scientific revolutions 科学革命論	第6回：The sociology of the scientific community 科学共同体の社会学
第7回：Philosophical problems in physics 物理学における哲学的問題	第7回：Feminism and the history of science フェミニズムと科学史
第8回：Philosophical problems in biology 生物学における哲学的問題	第8回：Language, discourse and science 言語、言説、科学
第9回：Philosophical problems in psychology 心理学における哲学的問題	第9回：Continental philosophy and the history 大陸の科学哲学と科学史
第10回：Science and its critics 科学批判	第10回：Rationality, science and history 合理性、科学、歴史
第11回：Explanation, causation and laws 説明、因果性、法則	第11回：Realism 実在論
第12回：Scientific explanation and its discontents 科学的説明とその問題点	第12回：The Copernican revolution コペルニクス革命
第13回：The structure and metaphysics of scientific theories 科学理論の構造と形而上学	第13回：The Scientific Revolution 科学革命
第14回：The epistemology of scientific theorizing 科学理論の認識論	第14回：Newton and natural philosophy ニュートンと自然哲学
第15回：The challenge of history and post-positivism 科学史と反実証主義による挑戦	第15回：Science and religion 科学と宗教

教科書：授業時に指定する。

参考文献：授業時に紹介する。

成績評価方法：

A（前期）

レポート 10% 授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。

平常点評価 90% テキストの理解力、洞察力、他者の思想への想像力で成績を評価する。

B（後期）

レポート 10% 授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。総合的に評価する。

平常点評価 90% テキストの理解力、洞察力、他者の思想への想像力で成績を評価する。

科学史科学哲学演習（２） A（前期）・B（後期）

加藤 茂生

授業概要：

A（前期）

フランスの哲学者アンリ・ベルグソンの『物質と記憶』を読む。

B（後期）

フランスの哲学者アンリ・ベルグソンの『時間と自由』を読む。

授業の到達目標：

A（前期）

唯物論と観念論を架橋するイマージュについて理解する。

B（後期）

ベルグソンの時間論について理解する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：ガイダンス
第2回：精神と物質の関係、現実の行動と行動の可能性	第2回：強さをもつものと外延的なもの
第3回：知覚、实在論と観念論	第3回：深い感情、美的感情
第4回：イマージュを分離すること、知覚と行動の関係	第4回：筋肉努力、注意と緊張
第5回：イマージュと实在、イマージュと感情的感覚	第5回：激しい情動、感情感覚
第6回：感情的感覚とはなにか、感情的感覚から区別されたイマージュ	第6回：表象感覚、音の感覚
第7回：イマージュ本来の広がり、純粹知覚	第7回：熱と重さの感覚、光の感覚
第8回：物質の問題への移行、記憶の問題への移行	第8回：精神物理学、強さと多数性
第9回：物質と記憶	第9回：数的多数性と空間、空間と等質性
第10回：イマージュの再認について、二つのタイプの記憶	第10回：等質的時間と具体的持続、持続の計測
第11回：身体の運動とイマージュの記憶、イマージュの記憶の現実化	第11回：エレア学派の錯覚、持続と同時性
第12回：イマージュの残存について、純粹記憶	第12回：速度と同時性、内的多数性
第13回：純粹記憶、現在とは何か	第13回：真の持続、自我の二つの様相
第14回：無意識、過去と現在の関係	第14回：物理的決定論、心理的決定論
第15回：一般観念と記憶、連想	第15回：自由行為、真の持続と偶然性

教科書：

A（前期）

アンリ・ベルグソン『物質と記憶』。

B（後期）

アンリ・ベルグソン『時間と自由』。

参考文献：授業時に紹介する。

成績評価方法：

レポート 10% 授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。総合的に評価する。

平常点評価 90% テキストの理解力、論理的考察力、哲学的洞察力で成績を評価する。

日本物質文化論演習（１） A（前期）・B（後期）

谷川 章雄

授業概要：日本の近世考古学を中心にした物質文化論に関連する領域の文献講読を行う。具体的には、①都市遺跡・村落遺跡・生産遺跡などの近世考古学の研究、②考古学に関連する歴史学・民俗学・自然科学などの諸分野の研究、③外国の考古学研究に関する文献をとり上げる。日本物質文化論の現状と課題、研究の視点や方法を学ぶことが本演習の目的である。

授業の到達目標：日本物質文化論の方法と視点を理解し、自分の研究の方法や視点を確立する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方（1）	第1回：演習の概要と進め方（2）
第2回：輪読（1）（近世考古学）	第2回：輪読（14）（関連分野）
第3回：輪読（2）（近世考古学）	第3回：輪読（15）（関連分野）
第4回：輪読（3）（近世考古学）	第4回：輪読（16）（関連分野）
第5回：輪読（4）（近世考古学）	第5回：輪読（17）（関連分野）
第6回：輪読（5）（近世考古学）	第6回：輪読（18）（関連分野）
第7回：輪読（6）（近世考古学）	第7回：輪読（19）（関連分野）
第8回：輪読（7）（近世考古学）	第8回：輪読（20）（外国文献）
第9回：輪読（8）（近世考古学）	第9回：輪読（21）（外国文献）
第10回：輪読（9）（近世考古学）	第10回：輪読（22）（外国文献）
第11回：輪読（10）（近世考古学）	第11回：輪読（23）（外国文献）
第12回：輪読（11）（近世考古学）	第12回：輪読（24）（外国文献）
第13回：輪読（12）（近世考古学）	第13回：輪読（25）（外国文献）
第14回：輪読（13）（近世考古学）	第14回：輪読（26）（外国文献）
第15回：レポート課題と解説（1）	第15回：レポート課題と解説（2）

成績評価方法：

平常点評価 100% 発表と討議の内容を評価する。

日本物質文化論演習（2） A（前期）・B（後期）

谷川 章雄

授業概要：日本物質文化論演習（1）を基礎として、受講生各自の研究テーマに関する文献講読、研究計画・成果の発表およびディスカッションを行う。また、学術論文の作成を目標として、そのための資料の分析・解釈の方法について習得する。

授業の到達目標：日本物質文化論の方法と視点を理解し、自分の研究の方法や視点を確立する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方（1）	第1回：演習の概要と進め方（2）
第2回：各自の研究テーマの発表（1）	第2回：各自の研究テーマの発表（7）
第3回：各自の研究テーマの発表（2）	第3回：各自の研究テーマの発表（8）
第4回：各自の研究テーマの発表（3）	第4回：各自の研究テーマの発表（9）
第5回：各自の研究テーマの発表（4）	第5回：各自の研究テーマの発表（10）
第6回：各自の研究テーマの発表（5）	第6回：各自の研究テーマの発表（11）
第7回：各自の研究テーマの発表（6）	第7回：各自の研究テーマの発表（12）
第8回：輪読（1）	第8回：輪読（8）
第9回：輪読（2）	第9回：輪読（9）
第10回：輪読（3）	第10回：輪読（10）
第11回：輪読（4）	第11回：輪読（11）
第12回：輪読（5）	第12回：輪読（12）
第13回：輪読（6）	第13回：輪読（13）
第14回：輪読（7）	第14回：輪読（14）
第15回：レポート課題と解説（1）	第15回：レポート課題と解説（2）

成績評価方法：

平常点評価 100% 発表と討議の内容を評価する。

フランス表象文化論演習（1） A（前期）・B（後期）

中村 要

授業概要：人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地

域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標：表象文化研究への理解を深めるとともに、各自の研究を進展させること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） ／本講義の目的と概要について説明します。	第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） ／本講義の目的と概要について説明します。
第2回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第2回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第3回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第3回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第4回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第4回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第5回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第5回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第6回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第6回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第7回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第7回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第8回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第8回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第9回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第9回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第10回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第10回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第11回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第11回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第12回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第12回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第13回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第13回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第14回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第14回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第15回：前期のまとめ	第15回：まとめ

参考文献：授業時に指示する。

成績評価方法：

平常点評価 50% 平常の学習態度、授業への貢献度等を総合的に評価

その他 50% 口答発表、ゼミ論等を評価

フランス表象文化論演習（2） A（前期）・B（後期）

中村 要

授業概要：人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標：表象文化研究への理解を深めるとともに、各自の研究を進展させること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） ／本講義の目的と概要について説明します。	第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） ／本講義の目的と概要について説明します。
第2回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第2回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第3回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第3回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第4回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第4回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第5回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第5回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第6回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第6回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第7回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第7回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第8回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第8回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第9回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第9回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第10回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第10回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第11回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第11回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第12回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第12回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第13回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第13回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第14回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第14回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第15回：前期のまとめ	第15回：まとめ

参考文献：授業時に指示する。

成績評価方法：

平常点評価 50% 平常の学習態度、授業への貢献度等を総合的に評価

そ の 他 50% 口答発表、ゼミ論等を評価

ドイツ政治社会文化論演習（1） A（前期）・B（後期）

村上 公子

授業概要：Peter Steinbach: Widerstand im Widerstreit 中の主要論考を読み、必要な場合はそのテーマを巡る他の論考を確認する。

授業の到達目標：ドイツにおける „Widerstand“ 概念の大略を理解する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：講読テキストの紹介、ガイダンス	第1回：テキスト3のテーマに関する議論
第2回：テキスト1輪読	第2回：テキスト4輪読
第3回：テキスト1輪読	第3回：テキスト4輪読
第4回：テキスト1輪読	第4回：テキスト4輪読
第5回：テキスト1輪読	第5回：テキスト4輪読
第6回：テキスト1のテーマに関する議論	第6回：テキスト4のテーマに関する議論
第7回：テキスト2輪読	第7回：テキスト5輪読

第8回：テキスト2輪読	第8回：テキスト5輪読
第9回：テキスト2輪読	第9回：テキスト5輪読
第10回：テキスト2輪読	第10回：テキスト5輪読
第11回：テキスト2のテーマに関する議論	第11回：テキスト5のテーマに関する議論
第12回：テキスト3輪読	第12回：テキスト6輪読
第13回：テキスト3輪読	第13回：テキスト6輪読
第14回：テキスト3輪読	第14回：テキスト6輪読
第15回：テキスト3輪読	第15回：テキスト6及び全体のテーマに関する議論

教科書：Peter Steinbach: Widerstand im Widerstreit, Schoeningh Verlag, 1999

成績評価方法：

レポート 50% 論文の内容を理解し、批判的に考察する
 平常点評価 50% 出席し、テキスト内容理解度を明確にする

ドイツ政治社会文化論演習（2） A（前期）・B（後期）

村上 公子

授業概要：Peter Steinbach/Johannes Tuchel: Widerstand gegen die nationalsozialistische Diktatur 1933-1945. から重要な論考を読む。それによりヒトラー政権に対する抵抗運動を行った人々の事蹟を学ぶ。

授業の到達目標：ナチ時代の抵抗運動のありさまを知り、それがどのような意味を持つかを様々な観点から考える。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：テキスト紹介、ガイダンス	第1回：テキスト13輪読
第2回：テキスト1輪読	第2回：テキスト10～13内容概括、確認
第3回：テキスト2輪読	第3回：テキスト14輪読
第4回：テキスト3輪読	第4回：テキスト15輪読
第5回：テキスト4輪読	第5回：テキスト16輪読
第6回：テキスト1～4内容概括、確認	第6回：テキスト14～16内容概括、確認
第7回：テキスト5輪読	第7回：テキスト17輪読
第8回：テキスト6輪読	第8回：テキスト18輪読
第9回：テキスト7輪読	第9回：テキスト19輪読
第10回：テキスト8輪読	第10回：テキスト20輪読
第11回：テキスト9輪読	第11回：テキスト21輪読
第12回：テキスト5～9内容概括、確認	第12回：テキスト22輪読
第13回：テキスト10輪読	第13回：テキスト17～22内容概括、確認
第14回：テキスト11輪読	第14回：テキスト1～22の内容に関する議論
第15回：テキスト12輪読	第15回：テキスト1～22の内容に関する議論総括

教科書：Steinbach, Peter/Johannes Tuchel: Widerstand gegen die nationalsozialistische Diktatur 1933-1945. Lukas Verlag 2004.

成績評価方法：

レポート 50% 選択したテキストで取り上げられた抵抗者について更に調べ、報告する。
 平常点評価 50% 出席の上、テキストの内容を正確に理解し、そのテーマについて議論する。

技術史・技術文化論演習（1） A（前期）・B（後期）

余語 琢磨

授業概要：

A（前期）

人間が物質的存在（道具・生産物、身体、環境資源など）に何かを働きかけるにあたっては、そこに必ずある種のプラン（技術）やルール（文化）が介在し、モノとヒトを関係づけていくことになる。そこで本演習では、ものづくり／わざ、生業、衣食住、民俗・現代医療などのなかに潜在する技術と文化の問題をテーマとして、関連する文化人類学・歴史学・考古学の著作・研究論文を精緻かつ批判的に分担講読しながら（文献は受講生の関心に合わせて柔軟に変更可）、技術／テクノロジーおよび生活文化に関する研究の意義と方法について、相互の討

議を通して理解する。

B（後期）

人間が物質的存在（道具・生産物、身体、環境資源など）に何かを働きかけるにあたっては、そこに必ずある種のプラン（技術）やルール（文化）が介在し、モノとヒトを関係づけていくことになる。そこで本演習では、ものづくり／わざ、生業、衣食住、民俗・現代医療などのなかに潜在する技術と文化の問題をテーマとして、関連する文化人類学・歴史学・考古学の著作・研究論文の成果をより具体的に咀嚼しながら、修士論文の研究計画を立てるプロセスへと展開する。

授業の到達目標：

A（前期）

基本的な関連研究の批判的検討を通じて、修士論文の着想にあたっての十分な基礎力・構想力を涵養する。

B（後期）

修士論文に関するテーマ・方法の探索を進め、2年次に移行する春からの調査研究実施・フィールドエントリができる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習オリエンテーション 本演習の目的と概要について説明し、講読で扱う基本文献の確定、分担の確認を行う。	第1回：修士論文のテーマについて 受講生各自が研究上の「問い」を立て発表し、その内容に関する討議を行う。
第2回：研究文献探索法 国内外の研究情報資源、とくに図書館・学会等の Web ページから研究の最新動向・文献を検索・入手する方法を学ぶ。	第2回：修士論文の研究対象について 受講生各自の「問い」に適切な研究対象（フィールドや資料）の選択について発表し、その内容に関する討議を行う。
第3回：文献講読（1）：『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』 技術研究への導入として、ものづくりのエスノグラフィから、伝統的生産技術に関わる多様な要素を学ぶ。	第3回：研究モデルの探索（1）：技術史・ものづくり／わざ研究の論文を読み解く 各受講生の問いと研究対象に合わせて、モデルとなる研究を探索する。
第4回：討論（1）：伝統的生産技術をめぐって 『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』から抽出された視点について、関連論文を参照しながら議論を行う。	第4回：研究モデルの探索（2）：生業／生活文化史研究の論文を読み解く 各受講生の問いと研究対象に合わせて、モデルとなる研究を探索する。
第5回：文献講読（2）：“The Oxford Handbook of Material Culture Studies” 物質文化研究の基本文献から、物質文化システムを捉える多様な方法や対象について理解する。	第5回：研究モデルの探索（3）：伝統的民俗医療／医療人類学の論文を読み解く 各受講生の問いと研究対象に合わせて、モデルとなる研究を探索する。
第6回：討論（2）：物質文化研究をめぐって “The Oxford Handbook of Material Culture Studies”から抽出された視点について、関連論文を参照しながら議論を行う。	第6回：修士論文計画発表（1）：基本構想 受講生各自が、修士論文の基本構想（目的と課題）を発表し、研究発展の可能性について討議を行う。
第7回：文献講読（3）：“Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures” 技術史研究の基本文献から、受講生の関心に合わせた章を選択し、各テーマの研究動向を把握する。	第7回：調査方法の設定（1）：技術史・ものづくり／わざ研究の方法 各受講生の修士論文基本構想に合わせて、調査研究方法を具体化する。
第8回：討論（3）：技術研究のテーマ設定をめぐって “Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures”から抽出された視点について、関連論文を参照しながら議論を行う。	第8回：調査方法の設定（2）：生業／生活文化史研究の方法 各受講生の修士論文基本構想に合わせて、調査研究方法を具体化する。

第9回：文献講読（４）：“Ethnoarchaeology in action” 民族考古学の基本文献から、エスノグラフィ 的視座により歴史を考える方法を学ぶ。	第9回：調査方法の設定（３）：伝統的民俗医療／医 療人類学の方法 各受講生の修士論文基本 構想に合わせて、調査研究方法を具体化す る。
第10回：討論（４）：民族考古学をめぐって “Ethnoarchaeology in action” から抽出された 視点について、関連論文を参照しながら議論 を行う。	第10回：修士論文計画発表（２）：対象と調査方法の 妥当性 受講生各自が、修士論文にむけた研 究方法（対象と調査方法）を発表し、その妥 当性と実現性について討議を行う。
第11回：文献講読（５）：“Techniques, Technology And Civilization” 物質文化研究の古典である同書 から、技術と文化を研究する視座について考 える。	第11回：調査対象のデータ収集法（１）：技術史・も のづくり／わざ研究に関して 調査対象の 特性に基づき、事前に可能な情報および調査 データ収集時の留意点について理解する。
第12回：討論（５）：技術／テクノロジーをめぐって “Techniques, Technology And Civilization” から 抽出された視点について、関連論文を参照し ながら議論を行う。	第12回：調査対象のデータ収集法（２）：生業／生活 文化史研究に関して 調査対象の特性に基 づき、事前に可能な情報および調査データ収 集時の留意点について理解する。
第13回：文献講読（６）：『技術への問い』 ハイデッ ガーの哲学的技術論から、技術研究の意義を 問い直す。	第13回：調査対象のデータ収集法（３）：伝統的民俗 医療／医療人類学に関して 調査対象の特 性に基づき、事前に可能な情報および調査デ ータ収集時の留意点について理解する。
第14回：討論（６）：技術研究の方向性をめぐって 『技術への問い』から抽出された視点につい て、関連論文を参照しながら議論を行う。	第14回：調査エントリーの準備（１）：研究対象への 接し方と倫理的配慮 対象（フィールドや資 料）の特性に合わせ、調査研究開始時の諸注 意事項について学ぶ。
第15回：議論の整理 基本文献の批判的講読および討 論の成果を整理し、修士論文構想への接続を 図る。	第15回：調査エントリーの準備（２）：調査機材の使 用法 対象（フィールドや資料）の特性に合 わせた、調査機材の選択・使用方法について 学ぶ。

教科書：

Dan Hicks & Mary C. Beaudry (eds.) 2010 The Oxford Handbook of Material Culture Studies, Oxford University Press.
Helaine Selin (ed.) 2009 Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures, Springer-Verlag; 2 Pap/Psc.
Nicholas David & Carol Kramer (eds.) 2001 Ethnoarchaeology in action, Cambridge University Press.

参考文献：テーマごとに紹介するが、学生自らも重要な関連文献を検索しながら採り上げること。

成績評価方法：

A（前期）

そ の 他 課題発表・討論への参加度、および出席状況を総合して評価する。

B（後期）

平常点評価 100% 課題発表・討論への参加度、および出席率を総合して評価する。

備考・関連 URL：担当教員紹介

http://www.human-waseda.jp/faculty/072_yogo.html

技術史・技術文化論演習（２） A（前期）・B（後期）

余語 琢磨

授業概要：

A（前期）

同演習（１）での理解をもとに、修士論文への実践的な研究展開を検討するので、おもに２年次での履修が望ましい。具体的には、受講生が各自の研究テーマ・対象・目的、仮説、調査方法・計画、予想される結論、および関連先行文献の研究史的な整理と読み込みについて発表し、受講生による相互討議のなかで着想を鍛える。同時に、資料収集ないしはフィールドワークに関する諸問題についての理論書および調査研究例を批判的に輪読発

表し（文献は受講生の関心に合わせて柔軟に変更する）、机上の演繹的研究と調査資料の帰納的研究をつなぐ方法を身につけた若手研究者の育成をめざす。

B（後期）

同演習（１）での理解をもとに、修士論文への実践的な研究展開を検討するので、おもに２年次での履修が望ましい。この演習（２）Ｂでは、受講生が各自の資料収集ないしはフィールドワークで得た具体的なデータをもとに分析・考察を繰り返し発表し、受講生による相互討議のなかでその解釈を鍛える。このプロセスの中で、データと考察の信憑性と説得力を備えた修士論文の完成をめざす。

授業の到達目標：

A（前期）

修士論文によく見られる調査データを既成理論に落とし込むような分析・考察ではなく、データからボトムアップ的に発見を行い、既成の理論に新たな展開を付加するような修士論文を作成する基礎能力を身につけている。

B（後期）

課程修了後、査読付学会誌に研究内容を分割して投稿しうる水準の修士論文が作成できる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：授業ガイダンス 本演習の目的と運営方法について説明し、課題発表の内容と順番を決める。	第１回：第２次調査資料のイーミックな分析（１）：技術史・ものづくり／わざ研究関連 各受講生が、夏期休業中に行った第２次資料収集またはフィールドワークの成果を報告し、内容と問題点について討議する。
第２回：資料報告（１）：収集資料の内容について 各受講生が、春季休業中に行った第１次資料収集またはフィールドワークの成果を報告し、内容と問題点について討議する。	第２回：第２次調査資料のイーミックな分析（２）：生業／生活文化史研究関連 各受講生が、夏期休業中に行った第２次資料収集またはフィールドワークの成果を報告し、内容と問題点について討議する。
第３回：資料報告（２）：収集資料の整理方法について 収集した調査資料の特性に合わせた整理・表記方法について検討する。	第３回：第２次調査資料のイーミックな分析（３）：伝統的民俗医療／医療人類学関連 各受講生が、夏期休業中に行った第２次資料収集またはフィールドワークの成果を報告し、内容と問題点について討議する。
第４回：資料報告（３）：収集資料の分析について 各受講生が、調査資料のイーミックな分析を報告し、その解釈の信頼性と妥当性について批判的に討議する。	第４回：目次の立案 調査データの全貌および分析の方向性から、修士論文全体の章節項を設定する。
第５回：先行研究の再検討（１）：技術史・ものづくり／わざ研究関連 各受講生の調査資料と分析内容に合わせて、発展的な先行研究文献を探索する。	第５回：修士論文中間発表会 目次の仮設定を受けて、修士論文の全体構成と内容の概略について発表する。
第６回：先行研究の再検討（２）：生業／生活文化史研究関連 各受講生の調査資料と分析内容に合わせて、発展的な先行研究文献を探索する。	第６回：先行研究の再検討（１）：技術史・ものづくり／わざ研究関連 各受講生の全体構想に合わせて、考察に有効なグランドセオリーの探索を行う。
第７回：先行研究の再検討（３）：伝統的民俗医療／医療人類学関連 各受講生の調査資料と分析内容に合わせて、発展的な先行研究文献を探索する。	第７回：先行研究の再検討（２）：生業／生活文化史研究関連 各受講生の全体構想に合わせて、考察に有効なグランドセオリーの探索を行う。
第８回：論文の構成および叙述スタイル（１）：執筆上の問題点について 文献『創造的論文の書き方』を講読し、修士論文執筆上の問題点を見出しながら討議する。	第８回：先行研究の再検討（３）：伝統的民俗医療／医療人類学関連 各受講生の全体構想に合わせて、考察に有効なグランドセオリーの探索を行う。

第9回：論文の構成および叙述スタイル（2）：今後の課題について 『創造的論文の書き方』から導き出された修士論文執筆上の課題について、今後解決すべき課題を設定する。	第9回：データ分析からエティックな考察へ（1）：技術史・ものづくり／わざ研究関連 各受講生の研究テーマに合わせて仮考察を発表し、その方向性について討議する。
第10回：先行研究レビューの執筆（1）：技術史・ものづくり／わざ研究関連 各受講生の調査資料と分析内容に合わせて、先行研究レビューを作成する。	第10回：データ分析からエティックな考察へ（2）：生業／生活文化史研究関連 各受講生の研究テーマに合わせて仮考察を発表し、その方向性について討議する。
第11回：先行研究レビューの執筆（2）：生業／生活文化史研究関連 各受講生の調査資料と分析内容に合わせて、先行研究レビューを作成する。	第11回：データ分析からエティックな考察へ（3）：伝統的民俗医療／医療人類学関連 各受講生の研究テーマに合わせて仮考察を発表し、その方向性について討議する。
第12回：先行研究レビューの執筆（3）：伝統的民俗医療／医療人類学関連 各受講生の調査資料と分析内容に合わせて、先行研究レビューを作成する。	第12回：考察の論理的整合性（1）：技術史・ものづくり／わざ研究関連 各受講生の研究テーマに合わせて最終考察を発表し、その信憑性・説得力について検証・討議する。
第13回：2次調査の課題と方法（1）：プランの提示レビューから敷衍された夏期休業中の第2次資料収集またはフィールドワーク・プランを報告する。	第13回：考察の論理的整合性（2）：生業／生活文化史研究関連 各受講生の研究テーマに合わせて最終考察を発表し、その信憑性・説得力について検証・討議する。
第14回：2次調査の課題と方法（2）：プランの検討前講で報告された第2次資料収集またはフィールドワーク・プランについて、問題点を討議する。	第14回：考察の論理的整合性（3）：伝統的民俗医療／医療人類学関連 各受講生の研究テーマに合わせて最終考察を発表し、その信憑性・説得力について検証・討議する。
第15回：2次調査の課題と方法（3）：プランの修正前講の問題点の指摘を受けた修正プランを報告し、第2次調査研究のプランを確定する。	第15回：修士論文発表会 完成提出した修士論文の概要について発表する。

教科書：

A（前期）

授業開始前にメーリングリストを作り、そのなかで指示する。

B（後期）

とくに指定しない。

参考文献：テーマごとに紹介するが、学生自らも重要な関連文献を検索しながら採り上げること。

成績評価方法：

平常点評価 100% 課題発表・討論への参加度、および出席率を総合して評価する。

備考・関連 URL：教員紹介： http://www.human-waseda.jp/faculty/072_yogo.html

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習（1） A（前期）・B（後期）

竹中 宏子

授業概要：

A（前期）

本授業では、まず、スペインという国家の大枠を捉えるが、そこでは地域主義の形成過程およびその現状に焦点を据えて考察する。これを基礎に、J.A.ピット＝リバーズを中心に、スペインを対象とした人類学的な研究を読み込み、地域研究としての特徴と限界を分析する。そこから、スペイン地域研究の問題点と意義を議論する。

授業は基本的に輪読が進められる。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用する。

B（後期）

本授業では、ラテン・アメリカの歴史と現状を把握し、スペイン語圏を対象とした地域研究史（主に文化人類学を基にした）を概観することを目的としている。そこではカリブ地域を含むラテン・アメリカの形成（歴史）と社会の特徴を多角的に考察する。また、スペイン地域研究との比較も行い、発展的な議論につなげる。

授業は基本的に輪読で進められる。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用する。
授業の到達目標：スペイン語圏を対象とした研究史を通して、最終的に学生自身が行う研究の位置づけを考えることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：ガイダンス
第2回：国家「スペイン」と地域主義	第2回：ラテン・アメリカ地域の概略（1）—歴史と文化—
第3回：自治州国家体制の歴史	第3回：ラテン・アメリカ地域の概略（2）—社会と政治—
第4回：多言語国家としてのスペイン	第4回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（1）—ラテン・アメリカと新自由主義—
第5回：カタルーニャの地域主義	第5回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（2）—労働者の視点から—
第6回：バスクの地域主義	第6回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（3）—ラテン・アメリカの「社会自由主義」—
第7回：ガリシアの地域主義	第7回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（4）—人間中心主義社会の思想—
第8回：アンダルシアの地域主義	第8回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（5）—地域再生と共同体—
第9回：『シエラの人びと』再考（1）—共同体の問題—	第9回：カリブ海に関する地域研究（1）—先住民・奴隷・農民—
第10回：『シエラの人びと』再考（2）—職業と身分—	第10回：カリブ海に関する地域研究（2）—カリブ海世界のゆくえ—
第11回：『シエラの人びと』再考（3）—性について—	第11回：カリブ海におけるエスニシティ
第12回：『シエラの人びと』再考（4）—政治について—	第12回：カリブ海における「奴隷」形成の歴史
第13回：『シエラの人びと』再考（5）—法と道徳について—	第13回：カリブ海地域における社会制度
第14回：ピット＝リバーズとそれ以後のスペイン研究	第14回：カリブのダンスを通して見る奴隷
第15回：まとめと展望	第15回：まとめと展望

教科書：初回の授業で指定する。

参考文献：授業中に適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 与えられた文献に関する内容のまとめとコメント、そして自分の研究との関連性について考察できているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 授業における課題の発表およびコメントについて評価する。

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習（2） A（前期）・B（後期）

竹中 宏子

授業概要：

A（前期）

演習（1）A・Bでのスペインおよびラテン・アメリカに関する基礎的な知識を基に、本授業では主にスペインを対象に、i）スペイン文化人類学の発展とスペイン社会との関係、ii）ヨーロッパ民俗学または人類学におけるスペイン研究の位置づけをテーマとして設定し、議論を行う。

扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用し、それらを読み進めながら地域文化研究に関する理論的な枠組みについても議論する。

B（後期）

演習（2）Aに続きスペインおよびラテン・アメリカを対象とした民俗学や人類学を扱うが、本授業では、民族誌に書かれた具体的な文化現象の分析を読み込み、そこに考察を加える議論を行う。テーマとしては、i）スペインの祭りや巡礼、ii）スペインとつながるラテンアメリカ文化、を取り上げ、分析概念としてのフォークロリズムの理解や、文化遺産を介した地域アイデンティティの形成も問題とする。

扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用し、それらを読み進めながら地域文化研究に関する理論的な枠組みについても議論する。

授業の到達目標：スペイン語圏に関する文化人類学的な視点を身につけ、学生自身が行うフィールドワークに役立てることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：ガイダンス
第2回：スペインの文化人類学 ―その特徴―	第2回：ヨーロッパにおける「復活する祭り」の現象
第3回：スペインの文化人類学史（1）―民俗学の時代とそれ以前―	第3回：渓谷地域における祭りの復活
第4回：スペインの文化人類学史（2）―民族誌学から民族学へ―	第4回：南スペインの聖人祭について
第5回：スペインの文化人類学史（3）―文化人類学の導入―	第5回：ロシオ巡礼の変遷
第6回：スペインの文化人類学史（4）―C. パロツハ―	第6回：フォークロリズムについて
第7回：スペインの文化人類学史（5）―E. ファブレガット―	第7回：口承伝承とフォークロリズム―カタルーニャの場合―
第8回：スペインの文化人類学史（6）―C. リソン―	第8回：フォークロリズムの使用、動機、そして意義
第9回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（1）―導入―	第9回：フォークロリズムの学術的実践と民俗的実践
第10回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（2）―南部スペインの場合―	第10回：地域文化の復活、または遺産化に関する議論
第11回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（3）―中央スペインの場合―	第11回：スペインとラテン・アメリカ文化（1）―南スペインとラテン・アメリカ―
第12回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（4）―地中海側の場合―	第12回：スペインとラテン・アメリカ文化（2）―ガリシアとラテン・アメリカ―
第13回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（5）―北部スペインの場合―	第13回：ガリシア主義と移民の歴史
第14回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（6）―島嶼部の場合―	第14回：カステラオとガリシア主義
第15回：まとめとディスカッション	第15回：まとめとディスカッション

教科書：初回の授業で指定する。

参考文献：授業中に適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 与えられた文献に関する内容のまとめとコメント、そして自分の研究との関連性について考察できているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 授業における課題の発表およびコメントについて評価する。

【健康・生命医科学研究領域】

生体機能学演習（1） A（前期）・B（後期）

今泉 和彦

授業概要：健康と生体機能との関連について総合的に理解するため、健康を支える運動、栄養および休養につ

いてそれぞれ独立して講義すると共に、運動と栄養が健康にどのように関わっているかを述べる。併せて、このような運動と栄養が関連している諸問題を示し、これらの問題を明らかにするための方法論、必要な理論や考え方などを演習形式と実習形式で具体的に述べる。

授業の到達目標：上記のような内容を中心にして専門分野の素養を身に付け、必要に応じて他者の見解や理論などに適切な批判を加え、柔軟に取り入れることができる能力を涵養する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：はじめに（1）	第1回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（4）
第2回：はじめに（2）	第2回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（5）
第3回：運動による生体分子の応答のレビュー（1）	第3回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（6）
第4回：運動による生体分子の応答のレビュー（2）	第4回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（7）
第5回：運動による生体分子の応答のレビュー（3）	第5回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（8）
第6回：運動による生体分子の応答のレビュー（4）	第6回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（9）
第7回：運動による生体分子の応答のレビュー（5）	第7回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（10）
第8回：運動による生体分子の応答のレビュー（6）	第8回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（1）
第9回：運動による生体分子の応答のレビュー（7）	第9回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（2）
第10回：運動による生体分子の応答のレビュー（8）	第10回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（3）
第11回：運動による生体分子の応答のレビュー（9）	第11回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（4）
第12回：運動による生体分子の応答のレビュー（10）	第12回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（5）
第13回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（1）	第13回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（6）
第14回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（2）	第14回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（7）
第15回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー（3）	第15回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答（8）

成績評価方法：

レポート 50% 5段階評価

平常点評価 50% 演習に取り組む内容を5段階で評価する。

備考・関連 URL：<http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

生体機能学演習（2） A（前期）・B（後期）

今泉 和彦

授業概要：ドーピング薬物・アルコール・香辛料を摂取したときの生体応答とその機構を健康科学および生理科学的立場より理解するため、文献学的に検討すると共に、研究レベルの知識や考え方を具体的に指導・助言する。併せて、骨格筋や腱の可塑性とその機構に関する研究についても指導・助言する。また、これらの分野の方法論を駆使して研究が展開できるように、測定法や解析法などについて具体的に指導する。さらに、論文の書き方についても詳細に指導・助言する。

授業の到達目標：上記のような研究活動を通し、当該学問分野の学際性・国際性・総合力を兼ね備えた人材の

育成を目指すことを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：研究課題の準備・決定（1）	第1回：研究課題の決定・発表（6）
第2回：研究課題の準備・決定（2）	第2回：研究法・実験法の習得（1）
第3回：研究課題の準備・決定（3）	第3回：研究法・実験法の習得（2）
第4回：研究課題の準備・決定（4）	第4回：研究法・実験法の習得（3）
第5回：研究課題の準備・決定（5）	第5回：研究法・実験法の習得（4）
第6回：研究課題の準備・決定（6）	第6回：研究法・実験法の習得（5）
第7回：研究課題の準備・決定（7）	第7回：研究法・実験法の習得（6）
第8回：研究課題の準備・決定（8）	第8回：研究法・実験法の習得（7）
第9回：研究課題の準備・決定（9）	第9回：研究法・実験法の習得（8）
第10回：研究課題の準備・決定（10）	第10回：研究法・実験法の習得（9）
第11回：研究課題の決定・発表（1）	第11回：研究法・実験法の習得（10）
第12回：研究課題の決定・発表（2）	第12回：研究法・実験法の習得（11）
第13回：研究課題の決定・発表（3）	第13回：研究法・実験法の習得（12）
第14回：研究課題の決定・発表（4）	第14回：研究課題の最終報告（1）
第15回：研究課題の決定・発表（5）	第15回：研究課題の最終報告（2）

成績評価方法：

レポート 50% 5段階評価

平常点評価 50% 演習に取り組む内容を5段階で評価する。

備考・関連 URL：<http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

神経内分泌学演習（1） A（前期）・B（後期）

山内 兄人

授業概要：最近発表された研究領域の先端的な論文を紹介、輪読します。

授業の到達目標：脳による生殖機能制御に関する先端知識を身に付ける。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：分娩論文輪読
第2回：排卵論文輪読	第2回：授乳論文輪読
第3回：排卵論文輪読	第3回：授乳論文輪読
第4回：排卵論文輪読	第4回：授乳論文輪読
第5回：雌性行動論文輪読	第5回：エレクション論文輪読
第6回：雌性行動論文輪読	第6回：エレクション論文輪読
第7回：雌性行動論文輪読	第7回：エレクション論文輪読
第8回：雄性行動論文輪読	第8回：セロトニン神経論文輪読
第9回：雄性行動論文輪読	第9回：セロトニン神経論文輪読
第10回：雄性行動論文輪読	第10回：セロトニン神経論文輪読
第11回：妊娠論文輪読	第11回：GABA 神経論文輪読
第12回：妊娠論文輪読	第12回：GABA 神経論文輪読
第13回：妊娠論文輪読	第13回：GABA 神経論文輪読
第14回：分娩論文輪読	第14回：総合討論
第15回：分娩論文輪読	第15回：総合討論

教科書：脳の性分化、山内兄人、新井康允共編、コロナ社

参考文献：そのつど配ります。

成績評価方法：

A（前期）

平常点評価 100% 論文解読度

B（後期）
そ の 他 内容の理解度により評価

神経内分泌学演習（２） A（前期）・B（後期）

山内 兄人

授業概要：本人の研究領域の先端的な論文内容をまとめて紹介、発表し、それについて討論します。2年生以上が登録できます。

授業の到達目標：脳による生殖機能制御に関する先端知識を身に付ける。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：分娩論文発表討論
第2回：排卵論文発表討論	第2回：授乳論文発表討論
第3回：排卵論文発表討論	第3回：授乳論文発表討論
第4回：排卵論文発表討論	第4回：授乳論文発表討論
第5回：雌性行動論文発表討論	第5回：エレクション論文発表討論
第6回：雌性行動論文発表討論	第6回：エレクション論文発表討論
第7回：雌性行動論文発表討論	第7回：エレクション論文発表討論
第8回：雄性行動論文発表討論	第8回：セロトニン神経論文発表討論
第9回：雄性行動論文発表討論	第9回：セロトニン神経論文発表討論
第10回：雄性行動論文発表討論	第10回：セロトニン神経論文発表討論
第11回：妊娠論文発表討論	第11回：GABA 神経論文発表討論
第12回：妊娠論文発表討論	第12回：GABA 神経論文発表討論
第13回：妊娠論文発表討論	第13回：GABA 神経論文発表討論
第14回：分娩論文発表討論	第14回：総合討論
第15回：分娩論文発表討論	第15回：総合討論

参考文献：The Physiology of Reproduction, edited by Knobil, E. and Neill, D. Raven Press, 1994

成績評価方法：

A（前期）
そ の 他 研究理解度で判定
B（後期）
そ の 他 内容の理解度を基準として判定
備考・関連 URL：修士2年生以上が登録できる科目です。

運動制御・バイオメカニクス演習（１） A（前期）・B（後期）

鈴木 秀次

授業概要：ヒトの身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「Nuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008」を輪読しながら演習を進める。

授業の到達目標：ヒトの身体運動における神経系の調節機構と物理的なメカニクスを上述の教科書を輪読しながら総合的に理解できるようになること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方	第1回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 5)
第2回：The Motor System (Excitable Membranes 1)	第2回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 7)
第3回：The Motor System (Excitable Membranes 3)	第3回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 1)
第4回：The Motor System (Excitable Membranes 5)	第4回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 3)

第5回：The Motor System (Excitable Membranes 7)	第5回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 5)
第6回：The Motor System (Muscle and Motor Units 1)	第6回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 7)
第7回：The Motor System (Muscle and Motor Units 3)	第7回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 1)
第8回：The Motor System (Muscle and Motor Units 5)	第8回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 3)
第9回：The Motor System (Muscle and Motor Units 7)	第9回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 1)
第10回：The Motor System (Voluntary Movement 1)	第10回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 3)
第11回：The Motor System (Voluntary Movement 3)	第11回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 1)
第12回：The Motor System (Voluntary Movement 5)	第12回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 3)
第13回：The Motor System (Voluntary Movement 7)	第13回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 1)
第14回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 1)	第14回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 3)
第15回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 3)	第15回：まとめ

教科書：Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) by Roger M. Enoka (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

参考文献：その都度提示

成績評価方法：

レポート 50% 課題のまとめの内容によって評価。

平常点評価 50% 授業ごとに輪読が課せられ、その出来栄によって評価。

備考・関連 URL：

A（前期）

演習（1Aと2A）は続けて（金3・4時限目）行うので、同年度に登録すること。

<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

B（後期）

演習：1Bと2Bは続けて（金3・4限目）行うので、同年度に登録すること。

<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

運動制御・バイオメカニクス演習（2） A（前期）・B（後期）

鈴木 秀次

授業概要：ヒトの身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008」を輪読しながら演習を進める。

授業の到達目標：ヒトの身体運動における神経系の調節機構と物理的なメカニクスを上述の教科書を輪読しながら総合的に理解できるようになること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方	第1回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 6)
第2回：The Motor System (Excitable Membranes 2)	第2回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 8)
第3回：The Motor System (Excitable Membranes 4)	第3回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 2)
第4回：The Motor System (Excitable Membranes 6)	第4回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 4)

第5回：The Motor System (Excitable Membranes 8)	第5回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 6)
第6回：The Motor System (Muscle and Motor Units 2)	第6回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 8)
第7回：The Motor System (Muscle and Motor Units 4)	第7回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 2)
第8回：The Motor System (Muscle and Motor Units 6)	第8回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 4)
第9回：The Motor System (Muscle and Motor Units 8)	第9回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 2)
第10回：The Motor System (Voluntary Movement 2)	第10回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 4)
第11回：The Motor System (Voluntary Movement 4)	第11回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 2)
第12回：The Motor System (Voluntary Movement 6)	第12回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 4)
第13回：The Motor System (Voluntary Movement 8)	第13回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 2)
第14回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 2)	第14回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 4)
第15回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 4)	第15回：まとめ

教科書：

A（前期）

Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) by Roger M. Enoka

B（後期）

Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) by Roger M. Enoka (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

参考文献：その都度提示

成績評価方法：

レポート 50% 課題のまとめの内容によって評価。

平常点評価 50% 授業ごとに輪読が課せられ、その出来栄によって評価。

備考・関連 URL：

A（前期）

演習：1Aと2Aは続けて（金3・4限目）行うので、同年度に登録すること。

<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

B（後期）

演習：1Bと2Bは続けて（金3・4限目）行うので、同年度に登録すること。

<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

統合生理学演習（1） A（前期）・B（後期）

永島 計

授業概要：体温、体液の調節をキーワードにアップデートな研究を解説する。また教官の研究領域に収束してしまわないよう Nature、Science などの科学雑誌から生物系の話題をピックアップし、広く科学のトピックが理解でき、ひいては自分の実験、研究に導入していける能力を身につけられるようトレーニングしていく。

授業の到達目標：体温、体液研究にかかわる実験技術の理論の理解、習得を目標にする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：卒業研究に関する論文検索と抄読3
第2回：オリエンテーション	第2回：卒業研究に関する論文検索と抄読4
第3回：卒業研究に向けた実験方法論1	第3回：卒業研究に関する論文検索と抄読4
第4回：卒業研究に向けた実験方法論1	第4回：実験1
第5回：卒業研究に向けた実験方法論2	第5回：実験1
第6回：卒業研究に向けた実験方法論2	第6回：実験2
第7回：卒業研究に向けた実験方法論3	第7回：実験2

第8回：卒業研究に向けた実験方法論 3	第8回：実験 3
第9回：卒業研究に向けた実験方法論 4	第9回：実験 3
第10回：卒業研究に向けた実験方法論 4	第10回：実験 4
第11回：卒業研究に関する論文検索と抄読 1	第11回：実験 4
第12回：卒業研究に関する論文検索と抄読 1	第12回：実験 5
第13回：卒業研究に関する論文検索と抄読 2	第13回：実験 5
第14回：卒業研究に関する論文検索と抄読 2	第14回：実験 6
第15回：卒業研究に関する論文検索と抄読 3	第15回：実験 6

成績評価方法：

試 験 0% 試験は行いません
レポ ー ト 30% 適時レポートを提出 評価します
平常点評価 70% 出席 授業への積極的な参加を評価します

統合生理学演習（２） A（前期）・B（後期）

永島 計

授業概要：体温、体液の調節をキーワードにアップデートな研究を解説する。また教官の研究領域に収束してしまわないよう Nature、Science などの科学雑誌から生物系の話題をピックアップし、広く科学のトピックが理解でき、ひいては自分の実験、研究に導入していける能力を身につけられるようトレーニングしていく。

授業の到達目標：体温、体液研究にかかわる実験技術の理論の理解、習得を目標にする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：実験 7	第1回：実験14
第2回：実験 7	第2回：実験15
第3回：実験 8	第3回：実験15
第4回：実験 8	第4回：卒業論文作製 1
第5回：実験 9	第5回：卒業論文作製 1
第6回：実験 9	第6回：卒業論文作製 2
第7回：実験10	第7回：卒業論文作製 2
第8回：実験10	第8回：卒業論文作製 3
第9回：実験11	第9回：卒業論文作製 3
第10回：実験11	第10回：卒業論文作製 4
第11回：実験12	第11回：卒業論文作製 4
第12回：実験12	第12回：研究発表準備
第13回：実験13	第13回：研究発表準備
第14回：実験13	第14回：研究発表準備
第15回：実験14	第15回：研究発表準備

成績評価方法：

試 験 0% 試験は行いません
レポ ー ト 30% 適時レポートを提出 評価します
平常点評価 70% 出席 授業への積極的な参加を評価します

健康医学演習（１） A（前期）・B（後期）

河手 典彦

授業概要：健康寿命の延長を図るためには、日常生活における様々な対策が重要と考える。その有効な実践のためには単に方策を知るだけでなく、根拠となる一次予防に関する幅広い知識を正しく理解することが重要である。さらに二次予防、さらには三次予防についても専門的な正確な医学知識を習得し、加えてその実態を正確に知ることが重要な意味を持つと考える。健康医学演習（１）では、健康寿命の延長を阻害する各種の関連因子の中から「疾病」を念頭に置き、それらの予防、健診、診断、治療などについて演習を進める。演習（１）の対象は、非癌である生活習慣病を主とする。主要な重要疾患に関して、文献調査、講読、さらに実践例の提示などを行いながら、正確な臨床医学領域の知識習得に努める。参考となる書籍を紹介し、演習に使用する。必ず健康医学演習（１）を先に履修すること。履修に際しては、基本的な医学知識を十分に備えていることを希望する。

授業の到達目標：対象とする非癌である主要な生活習慣病に関して、その基本的な医学的知識について正確な知識を習得し、それらの臨床医療全般について詳しく論述することができる。また、これらの一次予防、二次予防、さらには三次予防に関して、専門的且つ正確な医学知識を習得し、その実態や課題、新たな対策の必要性などについて詳細に述べることができる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：健康とは	第1回：生活習慣病各論（6）：糖尿病－2
第2回：健康寿命とQOL	第2回：生活習慣病各論（7）：高脂血症
第3回：疾病の一次予防：食事療法、運動療法など	第3回：生活習慣病各論（8）：高尿酸血症
第4回：疾病の二次予防、三次予防	第4回：生活習慣病各論（9）：脳卒中－1
第5回：臨床検査（1）	第5回：生活習慣病各論（10）：脳卒中－2
第6回：臨床検査（2）	第6回：生活習慣病各論（11）：肝臓疾患－1
第7回：生活習慣病総論（1）	第7回：生活習慣病各論（12）：肝臓疾患－2
第8回：生活習慣病総論（2）	第8回：生活習慣病各論（13）：消化器疾患－1
第9回：健診・検診の意義とその実態	第9回：生活習慣病各論（14）：消化器疾患－2
第10回：メタボリックシンドローム	第10回：生活習慣病各論（15）：呼吸器疾患－1
第11回：生活習慣病各論（1）：肥満	第11回：生活習慣病各論（16）：呼吸器疾患－2
第12回：生活習慣病各論（2）：高血圧症	第12回：生活習慣病各論（17）：動脈硬化
第13回：生活習慣病各論（3）：心臓疾患－1	第13回：生活習慣病各論（18）：骨粗鬆症
第14回：生活習慣病各論（4）：心臓疾患－2	第14回：生活習慣病各論（19）：貧血、歯周病
第15回：生活習慣病各論（5）：糖尿病－1	第15回：試験とその解説

教科書：適宜指定する。

参考文献：適宜指定する。

成績評価方法：

試験 50% 第30回に試験を実施し、知識の理解度について評価する。終了後にその解説を行う。

平常点評価 50% 学習に対する積極性、出席状況などを評価する。

健康医学演習（2） A（前期）・B（後期）

河手 典彦

授業概要：健康医学演習（2）は、健康医学演習（1）を修了した後に履修すること。健康寿命の延長を阻害する各種の関連因子の中から「疾病」を念頭に置き、それらの予防、健診、診断、治療などについて演習を進める。演習（2）の対象は、我が国の死亡原因の第一位を占める癌（悪性新生物）である。それらの中から頻度の高い疾病に関して、それぞれの調査、講読、さらに実践例の提示なども含めながら、臨床医学領域の幅広い知識を正確に習得することに努め、各自の健康医学のあり方に関する考えを探究していく。健康医学に関連する実践の医療現場の状況を可能な限り正確に広く把握すること、そして医療の現状と実践を理解した上で、健康保持に関する自主的な提言ができるようになることを目指す。また、医療の社会的、経済的な視点から、各種の医療制度などの現状とその問題点についても大きな関心を持って取り組んでいく。

授業の到達目標：対象とする癌に関して、その基本的な医学的知識について正確な知識を習得し、それらの臨床医療全般について詳しく論述することができる。癌の一次予防、二次予防、及び三次予防に関して、現状を専門的且つ正確な医学知識に則って理解できる。医療の概要を理解した上で、各種の健康保持に関する提言ができる。健康管理を視点とした医療について幅広い知識を習得し、詳細に解説することができる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：癌の疫学	第1回：腫瘍学各論：胆道系
第2回：癌とは何か	第2回：腫瘍学各論：呼吸器（1）：肺・気管支
第3回：癌と生活習慣	第3回：腫瘍学各論：呼吸器（2）：胸膜、中皮腫
第4回：腫瘍学総論（1）	第4回：腫瘍学各論：乳腺（1）
第5回：腫瘍学総論（2）	第5回：腫瘍学各論：乳腺（2）
第6回：腫瘍学総論（3）	第6回：腫瘍学各論：甲状腺
第7回：腫瘍学各論：脳	第7回：腫瘍学各論：子宮（1）

第8回：腫瘍学各論：頭頸部	第8回：腫瘍学各論：子宮（2）
第9回：腫瘍学各論：上部消化管（1）	第9回：腫瘍学各論：卵巣
第10回：腫瘍学各論：上部消化管（2）	第10回：腫瘍学各論：前立腺
第11回：腫瘍学各論：下部消化管（1）	第11回：腫瘍学各論：その他の泌尿器系
第12回：腫瘍学各論：下部消化管（2）	第12回：腫瘍学各論：骨・軟部
第13回：腫瘍学各論：肝臓（1）	第13回：腫瘍学各論：皮膚
第14回：腫瘍学各論：肝臓（2）	第14回：腫瘍学各論：血液
第15回：腫瘍学各論：脾臓	第15回：試験と解説

教科書：適宜指定する。

参考文献：適宜指定する。

成績評価方法：

試験 50% 第30回に試験を実施し、知識の理解度について評価する。終了後にその解説を行う。

平常点評価 50% 学習に対する積極性、出席状況などを評価する。

応用健康科学演習（1） A（前期）・B（後期）

竹中 晃二

授業概要：健康行動に関わる行動変容・健康心理学の研究について、欧米の関連文献を数多く読み、行動医学および健康心理学研究の方法論を学び、ポピュレーションアプローチや個別アプローチを用いたプログラム開発とその評価法を習得する。

授業の到達目標：プログラム開発方略および評価法について精通する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション、論文探索指導	第1回：発表のまとめ1
第2回：欧米関連文献の発表1	第2回：発表のまとめ2
第3回：欧米関連文献の発表2	第3回：欧米研究論文の発表1
第4回：欧米関連文献の発表3	第4回：欧米研究論文の発表2
第5回：欧米関連文献の発表4	第5回：欧米研究論文の発表3
第6回：欧米関連文献の発表5	第6回：欧米研究論文の発表4
第7回：欧米関連文献の発表6	第7回：欧米研究論文の発表5
第8回：欧米関連文献の発表7	第8回：欧米研究論文の発表6
第9回：欧米関連文献の発表8	第9回：欧米研究論文の発表7
第10回：欧米関連文献の発表9	第10回：欧米研究論文の発表8
第11回：欧米関連文献の発表10	第11回：欧米研究論文の発表9
第12回：欧米関連文献の発表11	第12回：欧米研究論文の発表10
第13回：欧米関連文献の発表12	第13回：欧米研究論文の発表11
第14回：欧米関連文献の発表13	第14回：欧米研究論文の発表12
第15回：欧米関連文献の発表14	第15回：研究発表

参考文献：関連論文の内容に応じて紹介

成績評価方法：

平常点評価 40% レジュメの内容についての熟達度

その他 60% 発表内容のレベル 授業における発表、レポートなどを総合的に評価する。

応用健康科学演習（2） A（前期）・B（後期）

竹中 晃二

授業概要：演習（1）で学んだ方法論に関する知識を基にして、主に対象（子ども、成人、中高年者、高齢者、生活習慣病患者など）および目的（健康行動の開始、継続、逆戻り予防）を絞った研究のレビューとそれらの研究の今後の方向性について発表する。

授業の到達目標：修士論文の完成

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション、修士論文テーマ、内容の指導	第1回：発表のまとめ1
第2回：欧米論文の発表1	第2回：発表のまとめ2
第3回：欧米論文の発表2	第3回：修士論文関連の発表1
第4回：欧米論文の発表3	第4回：修士論文関連の発表2
第5回：欧米論文の発表4	第5回：修士論文関連の発表3
第6回：欧米論文の発表5	第6回：修士論文関連の発表4
第7回：欧米論文の発表6	第7回：修士論文関連の発表5
第8回：欧米論文の発表7	第8回：修士論文関連の発表6
第9回：欧米論文の発表8	第9回：修士論文関連の発表7
第10回：欧米論文の発表9	第10回：修士論文関連の発表8
第11回：欧米論文の発表10	第11回：修士論文関連の発表9
第12回：欧米論文の発表11	第12回：修士論文関連の発表10
第13回：欧米関連欧米論文レビューの発表	第13回：修士論文関連の発表11
第14回：欧米関連欧米論文レビューの発表	第14回：修士論文関連の発表12
第15回：欧米関連欧米論文レビューの発表	第15回：研究発表

成績評価方法：

平常点評価 40% レジュメの内容についての熟達度

そ の 他 60% 発表内容のレベル 授業における発表、レポートなどを総合的に評価する。

医療人類学演習（1） A（前期）・B（後期）

辻内 琢也

授業概要：医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的；bio-ecological および社会文化的；socio-cultural 要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものだとして定義される。本演習は大学院修士課程1年次に履修するものとする。

授業の到達目標：演習（1）では、基礎となる文化人類学・社会人類学・自然人類学の素養を身につけることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：輪読とディスカッション8
第2回：輪読教材の選定、分担配分の決定	第2回：DVD鑑賞とディスカッション1
第3回：文化人類学とは何か（1）	第3回：DVD鑑賞とディスカッション2
第4回：文化人類学とは何か（2）	第4回：輪読とディスカッション9
第5回：医療人類学とは何か（1）	第5回：輪読とディスカッション10
第6回：医療人類学とは何か（2）	第6回：輪読とディスカッション11
第7回：多角的医療システム（1）	第7回：輪読とディスカッション12
第8回：多角的医療システム（2）	第8回：輪読とディスカッション13
第9回：輪読とディスカッション1	第9回：輪読とディスカッション14
第10回：輪読とディスカッション2	第10回：輪読とディスカッション15
第11回：輪読とディスカッション3	第11回：輪読とディスカッション16
第12回：輪読とディスカッション4	第12回：DVD鑑賞とディスカッション3
第13回：輪読とディスカッション5	第13回：DVD鑑賞とディスカッション4
第14回：輪読とディスカッション6	第14回：レポート課題と解説（1）
第15回：輪読とディスカッション7	第15回：レポート課題と解説（2）

成績評価方法：

そ の 他 100% 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考・関連 URL：辻内研究室ホームページ：<http://www.waseda.jp/sem-tsujiuchi/>

医療人類学演習（２） A（前期）・B（後期）

辻内 琢也

授業概要：医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的；bio-ecological および社会文化的；socio-cultural 要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものだとして定義される。演習（１）を基礎とし、より実践的・応用的な研究アプローチ法を用いて、現代における医学・医療の特徴・課題について考察してゆく。本演習は大学院修士課程２年次に履修するものとする。

授業の到達目標：ここでは、医療の歴史の変遷という時間軸を縦軸、世界各地の文化に応じた様々な医療という空間軸を横軸とし、健康（health）や病い（illness）を bio-psycho-socio-ecological-spiritual なレベルで多層的・多層的に捉えることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：授業の概要と進め方	第１回：輪読とディスカッション８
第２回：輪読教材の選定、分担配分の決定	第２回：DVD鑑賞とディスカッション１
第３回：心身医学研究における医療人類学の貢献（１）	第３回：DVD鑑賞とディスカッション２
第４回：心身医学研究における医療人類学の貢献（２）	第４回：輪読とディスカッション９
第５回：ポストモダン医療におけるモダン―補完代替医療の実践と専門職化（１）	第５回：輪読とディスカッション１０
第６回：ポストモダン医療におけるモダン―補完代替医療の実践と専門職化（２）	第６回：輪読とディスカッション１１
第７回：民俗セクター医療をめぐる語り―その社会・文化・歴史的構築（１）	第７回：輪読とディスカッション１２
第８回：民俗セクター医療をめぐる語り―その社会・文化・歴史的構築（２）	第８回：輪読とディスカッション１３
第９回：輪読とディスカッション１	第９回：輪読とディスカッション１４
第１０回：輪読とディスカッション２	第１０回：輪読とディスカッション１５
第１１回：輪読とディスカッション３	第１１回：輪読とディスカッション１６
第１２回：輪読とディスカッション４	第１２回：DVD鑑賞とディスカッション３
第１３回：輪読とディスカッション５	第１３回：DVD鑑賞とディスカッション４
第１４回：輪読とディスカッション６	第１４回：レポート課題と解説（１）
第１５回：輪読とディスカッション７	第１５回：レポート課題と解説（２）

成績評価方法：

その他 100% 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考・関連 URL：辻内研究室ホームページ：<http://www.waseda.jp/sem-tsujiuchi/>

分子神経科学演習（１） A（前期）・B（後期）

榊原 伸一

授業概要：最近発表された本人の研究領域の先端的な論文を紹介、輪読し、プレゼンテーションおよび質疑応答を行う。

授業の到達目標：神経発生に関する最新の知見を得る。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：受講ガイダンス	第１回：演習（輪読）と討論（１２）
第２回：神経系の概観	第２回：まとめとプレゼンテーション（１）
第３回：研究内容の概説（１）	第３回：まとめとプレゼンテーション（２）
第４回：研究内容の概説（２）	第４回：演習（輪読）（１３）
第５回：演習（輪読）（１）	第５回：演習（輪読）と討論（１４）
第６回：演習（輪読）と討論（２）	第６回：演習（輪読）（１５）
第７回：演習（輪読）（３）	第７回：演習（輪読）と討論（１６）
第８回：演習（輪読）と討論（４）	第８回：演習（輪読）（１７）
第９回：演習（輪読）（５）	第９回：演習（輪読）と討論（１８）

第10回：演習（輪読）と討論（6）	第10回：演習（輪読）（19）
第11回：演習（輪読）（7）	第11回：演習（輪読）と討論（20）
第12回：演習（輪読）と討論（8）	第12回：演習（輪読）（21）
第13回：演習（輪読）（9）	第13回：演習（輪読）と討論（22）
第14回：演習（輪読）と討論（10）	第14回：まとめとプレゼンテーション（3）
第15回：演習（輪読）（11）	第15回：まとめとプレゼンテーション（4）

参考文献：Principles of Neural Science, 4th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York
ISBN 0-8385-7701-6

成績評価方法：

レポート 20% レポート内容

平常点評価 80% 出席、プレゼンテーション内容、発言の積極性

備考・関連 URL：演習の参加には事前の教科書の予習が不可欠。

分子神経科学演習（2） A（前期）・B（後期）

榊原 伸一

授業概要：最近発表された本人の研究領域の先端的な論文を紹介、輪読し、プレゼンテーションおよび質疑応答を行う。

授業の到達目標：神経発生に関する最新の知見を得る。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：受講ガイダンス	第1回：演習（輪読）と討論（12）
第2回：神経系の概観	第2回：まとめとプレゼンテーション（1）
第3回：研究内容の概説（1）	第3回：まとめとプレゼンテーション（2）
第4回：研究内容の概説（2）	第4回：演習（輪読）（13）
第5回：演習（輪読）（1）	第5回：演習（輪読）と討論（14）
第6回：演習（輪読）と討論（2）	第6回：演習（輪読）（15）
第7回：演習（輪読）（3）	第7回：演習（輪読）と討論（16）
第8回：演習（輪読）と討論（4）	第8回：演習（輪読）（17）
第9回：演習（輪読）（5）	第9回：演習（輪読）と討論（18）
第10回：演習（輪読）と討論（6）	第10回：演習（輪読）（19）
第11回：演習（輪読）（7）	第11回：演習（輪読）と討論（20）
第12回：演習（輪読）と討論（8）	第12回：演習（輪読）（21）
第13回：演習（輪読）（9）	第13回：演習（輪読）と討論（22）
第14回：演習（輪読）と討論（10）	第14回：まとめとプレゼンテーション（3）
第15回：演習（輪読）（11）	第15回：まとめとプレゼンテーション（4）

参考文献：Principles of Neural Science, 4th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York
ISBN 0-8385-7701-6

成績評価方法：

A（前期）

レポート 0% 場合により課す

平常点評価 100% 発言内容、積極性

B（後期）

レポート 20% 場合により課す

平常点評価 80% 発言内容、積極性

備考・関連 URL：演習の参加には事前の教科書の予習が不可欠。

基礎老化学演習（1） A（前期）・B（後期）

千葉 卓哉

授業概要：老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱う

ため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な基礎知識を学ぶ。演習は輪読、プレゼンテーション及び質疑応答により進める。

授業の到達目標：基礎老化学研究に必要な基本的学説および研究法を理解し、修士論文を作成する際の基盤となる知識を習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：研究内容の概説（1）	第1回：研究内容の概説（1）
第2回：研究内容の概説（2）	第2回：研究内容の概説（2）
第3回：演習（論文紹介）と討論（1）	第3回：演習（論文紹介）と討論（1）
第4回：演習（論文紹介）と討論（2）	第4回：演習（論文紹介）と討論（2）
第5回：演習（論文紹介）と討論（3）	第5回：演習（論文紹介）と討論（3）
第6回：演習（論文紹介）と討論（4）	第6回：演習（論文紹介）と討論（4）
第7回：演習（論文紹介）と討論（5）	第7回：演習（論文紹介）と討論（5）
第8回：演習（論文紹介）と討論（6）	第8回：演習（論文紹介）と討論（6）
第9回：演習（論文紹介）と討論（7）	第9回：演習（論文紹介）と討論（7）
第10回：演習（論文紹介）と討論（8）	第10回：演習（論文紹介）と討論（8）
第11回：演習（論文紹介）と討論（9）	第11回：演習（論文紹介）と討論（9）
第12回：演習（論文紹介）と討論（10）	第12回：演習（論文紹介）と討論（10）
第13回：演習（論文紹介）と討論（11）	第13回：演習（論文紹介）と討論（11）
第14回：演習（論文紹介）と討論（12）	第14回：演習（論文紹介）と討論（12）
第15回：まとめとプレゼンテーション	第15回：まとめとプレゼンテーション

成績評価方法：

レポート 20% 授業内容の理解度確認を行う。

平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。

基礎老化学演習（2） A（前期）・B（後期）

千葉 卓哉

授業概要：老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱うため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な基礎知識を学ぶ。演習は輪読、プレゼンテーション及び質疑応答により進める。

授業の到達目標：基礎老化学研究に必要な基本的学説および研究法を理解し、修士論文を作成する際の基盤となる知識を習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：研究内容の概説（1）	第1回：研究内容の概説（1）
第2回：研究内容の概説（2）	第2回：研究内容の概説（2）
第3回：演習（論文紹介）と討論（1）	第3回：演習（論文紹介）と討論（1）
第4回：演習（論文紹介）と討論（2）	第4回：演習（論文紹介）と討論（2）
第5回：演習（論文紹介）と討論（3）	第5回：演習（論文紹介）と討論（3）
第6回：演習（論文紹介）と討論（4）	第6回：演習（論文紹介）と討論（4）
第7回：演習（論文紹介）と討論（5）	第7回：演習（論文紹介）と討論（5）
第8回：演習（論文紹介）と討論（6）	第8回：演習（論文紹介）と討論（6）
第9回：演習（論文紹介）と討論（7）	第9回：演習（論文紹介）と討論（7）
第10回：演習（論文紹介）と討論（8）	第10回：演習（論文紹介）と討論（8）
第11回：演習（論文紹介）と討論（9）	第11回：演習（論文紹介）と討論（9）
第12回：演習（論文紹介）と討論（10）	第12回：演習（論文紹介）と討論（10）
第13回：演習（論文紹介）と討論（11）	第13回：演習（論文紹介）と討論（11）

第14回：演習（論文紹介）と討論（12）	第14回：演習（論文紹介）と討論（12）
第15回：まとめとプレゼンテーション	第15回：まとめとプレゼンテーション

成績評価方法：

レポート 20% 授業内容の理解度確認を行う。
平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。

[健康福祉科学研究領域]

福祉産業学演習（1） A（前期）・B（後期）

可部 明克

授業概要：健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、事業戦略および技術戦略を調査・分析する。

その上で、新たな製品を研究開発するための「ユーザニーズ調査・技術開発」を行い、基本的な要素技術をベースに基本設計・構築を進める。このプロセスを通じて、企業での研究開発に必要な基礎技術力を養成する。なお、主に修士課程1年目を対象とする。

授業の到達目標：ロボットの基礎的な要素技術などを取り上げ、論文などをベースに詳細を把握する。また、基礎的な仕様検討などを行う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：試作品のコンセプト検討（構造）
第2回：先行企業の調査・企業の選定	第2回：試作品のコンセプト検討（制御）
第3回：事業戦略の調査（企業1）	第3回：試作品のコンセプト検討詳細（構造）
第4回：事業戦略の分析（企業1）	第4回：試作品のコンセプト検討詳細（制御）
第5回：技術戦略の調査（企業1）	第5回：試作品のコンセプトレビュー（構造）
第6回：技術戦略の分析（企業1）	第6回：試作品のコンセプトレビュー（制御）
第7回：事業戦略の調査（企業2）	第7回：試作品のコンセプトレビュー（まとめ）
第8回：事業戦略の分析（企業2）	第8回：基本設計（構造コア部）
第9回：技術戦略の調査（企業2）	第9回：基本設計（構造周辺部）
第10回：技術戦略の分析（企業2）	第10回：基本設計（制御部ハード）
第11回：ユーザニーズ調査（ヒアリング1）	第11回：基本設計（制御部ソフト）
第12回：ユーザニーズ調査（ヒアリング2）	第12回：基本設計（センサー）
第13回：ユーザニーズ調査（まとめ）	第13回：基本設計（センサー処理部）
第14回：要素技術の検討	第14回：ドキュメントまとめ（全体）
第15回：要素技術の詳細	第15回：ドキュメントまとめ（詳細）

成績評価方法：

平常点評価 100% 発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出など

福祉産業学演習（2） A（前期）・B（後期）

可部 明克

授業概要：演習（1）をベースに、健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、新たな事業戦略および技術戦略を立案する。

それに対応した、新たな製品の立案・試作を進め、ユーザ評価も行う。このプロセスを通じて、企業での研究開発および事業化に必要な実践的な技術センスを養成する。なお、主に修士課程2年目を対象とする。

授業の到達目標：ロボットの基礎的な要素技術などを取り上げ、技術開発・実装、対外発表などを行う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：実装設計（センサー処理部）
第2回：先行企業との比較検討	第2回：テスト（基本部）
第3回：事業戦略の比較検討	第3回：テスト（個別機能1）
第4回：技術戦略の比較検討	第4回：テスト（個別機能2）
第5回：試作候補の比較検討	第5回：評価（基本部）

第6回：試作品の実装検討（基本機能の概要）	第6回：評価（個別機能1、2）
第7回：試作品の実装検討（基本機能の課題）	第7回：ドキュメントまとめ（全体）
第8回：試作品の実装検討（個別機能の概要）	第8回：ドキュメントまとめ（システム構成）
第9回：試作品の実装検討（個別機能の課題）	第9回：ドキュメントまとめ（構造）
第10回：実装設計（構造コア部）	第10回：ドキュメントまとめ（制御）
第11回：実装設計（構造周辺部）	第11回：ドキュメントまとめ（ソフト）
第12回：実装設計（制御部ハード）	第12回：ドキュメントまとめ（評価1）
第13回：実装設計（制御ソフト、基本部）	第13回：ドキュメントまとめ（評価2）
第14回：実装設計（制御部ソフト、個別機能部）	第14回：ドキュメントまとめ（分析）
第15回：実装設計（センサー）	第15回：ドキュメントまとめ（レビュー）

成績評価方法：

平常点評価 100% 発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出など

老年社会福祉学演習（1） A（前期）・B（後期）

加瀬 裕子

授業概要：Gerontological Social Work や Social Gerontology の基本的文献を講読し、高齢者の強さに依拠したストレングス・モデルによるサービスや社会制度のあり方について考察する。受講生各自が、関心のある領域での先行研究の収集を行い、研究論文の評価検討をおこなうなかで、実証研究の方法を体得することをめざす。

各プロジェクトごとに毎週発表を行い、卒業研究の準備を進める。

授業の到達目標：ソーシャルワークの目的と方法について理解し、ケースワーク・グループワーク・コミュニティワークのいずれかを応用できるようになることをめざす。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 1	第1回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” 1
第2回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 2	第2回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” 2
第3回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 3	第3回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” 3
第4回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 4	第4回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” 4
第5回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 5	第5回：Strength Model Social Work について
第6回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 6	第6回：Strength Model の理論
第7回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 7	第7回：Strength Model の実際
第8回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 8	第8回：チームアプローチとソーシャルワーク 1
第9回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 9	第9回：チームアプローチとソーシャルワーク 2
第10回：ソーシャルワークの歴史について	第10回：地域福祉計画と高齢者 1
第11回：ソーシャルワークのモデルについて	第11回：地域福祉計画と高齢者 2
第12回：高齢者福祉の実際について 1—介護とソーシャルワーク—	第12回：高齢者のグループをいかに支援するか 1
第13回：高齢者福祉の実際について 2—地域づくりとソーシャルワーク—	第13回：高齢者のグループをいかに支援するか 2
第14回：高齢者福祉の実際について 3—医療モデルと生活モデル—	第14回：高齢者ケアマネジメント 1
第15回：授業のまとめ	第15回：高齢者ケアマネジメント 2

成績評価方法：

レポート 50% レポートの意義・目的・論理展開が明確に記述されているか。

平常点評価 50% 研究プロジェクト毎に行う発表を評価する。

老年社会福祉学演習（２） A（前期）・B（後期）

加瀬 裕子

授業概要：先行研究を検証して、修士論文の課題に関連した研究計画を策定する方法を学ぶ。

各自のテーマにあわせて、調査を進めると同時に互に研究の進展について報告・意見交換を行なう。

授業の到達目標：質的研究方法・量的研究方法を体得し、研究目的にあわせた適切な研究方法を選択できるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の進め方について	第1回：量的研究方法について 5 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第2回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 1	第2回：質的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第3回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 2	第3回：質的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第4回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 3	第4回：質的研究方法について 3 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第5回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 4	第5回：質的研究方法について 4 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第6回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 5	第6回：質的研究方法について 5 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第7回：老年学における研究の動向についての討論	第7回：Evidence-based research の方法について 1
第8回：社会福祉学における研究の動向についての討論	第8回：Evidence-based research の方法について 2
第9回：論文の書き方について 1 先行研究のレビュー	第9回：各自で研究をデザインする 1 調査計画作成
第10回：論文の書き方について 2 題目と方法の選定	第10回：各自で研究をデザインする 2 調査依頼の方法・倫理
第11回：論文の書き方について 3 書式	第11回：各自で研究をデザインする 3 調査票作成
第12回：量的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第12回：各自で研究をデザインする 4 調査票作成
第13回：量的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第13回：各自で研究をデザインする 5 調査票作成
第14回：量的研究方法について 3 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第14回：各自で研究をデザインする 6 調査票作成
第15回：量的研究方法について 4 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第15回：授業のまとめ

成績評価方法：

平常点評価 100% 先行研究の読み込み、明確で実現可能な研究計画の策定、テーマの創造性、演習への貢献。

バイオエシックス演習（１） A（前期）・B（後期）

土田 友章

授業概要：Bioethics（生命倫理）の関心は多岐・多層にわたる。履修者の問題提起をともに検討しつつ、絶えずbioethicsの原点に立ち返り、人間学の実践知を如何に構築してゆくかを考察する。文献講読と各人の発表が中心となる。

授業の到達目標：多様な話題を批判的に検討し、人間学的倫理的視点を獲得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：文献講読と発表	第1回：文献講読と発表
第2回：文献講読と発表	第2回：文献講読と発表
第3回：文献講読と発表	第3回：文献講読と発表
第4回：文献講読と発表	第4回：文献講読と発表
第5回：文献講読と発表	第5回：文献講読と発表
第6回：文献講読と発表	第6回：文献講読と発表
第7回：文献講読と発表	第7回：文献講読と発表
第8回：文献講読と発表	第8回：文献講読と発表
第9回：文献講読と発表	第9回：文献講読と発表
第10回：文献講読と発表	第10回：文献講読と発表
第11回：文献講読と発表	第11回：文献講読と発表
第12回：文献講読と発表	第12回：文献講読と発表
第13回：文献講読と発表	第13回：文献講読と発表
第14回：文献講読と発表	第14回：文献講読と発表
第15回：文献講読と発表	第15回：文献講読と発表

成績評価方法：

平常点評価 100% 平常点による評価

バイオエシックス演習（2） A（前期）・B（後期）

土田 友章

授業概要：演習（1）を承けて、Bioethics（生命倫理）ならびに実践倫理の方法を各人が習得し、それに基づいて、調査研究と論文執筆・発表に備える。

授業の到達目標：多様な話題を批判的に検討し、人間学的倫理的視点と方法を獲得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：文献講読と発表	第1回：文献講読と発表
第2回：文献講読と発表	第2回：文献講読と発表
第3回：文献講読と発表	第3回：文献講読と発表
第4回：文献講読と発表	第4回：文献講読と発表
第5回：文献講読と発表	第5回：文献講読と発表
第6回：文献講読と発表	第6回：文献講読と発表
第7回：文献講読と発表	第7回：文献講読と発表
第8回：文献講読と発表	第8回：文献講読と発表
第9回：文献講読と発表	第9回：文献講読と発表
第10回：文献講読と発表	第10回：文献講読と発表
第11回：文献講読と発表	第11回：文献講読と発表
第12回：文献講読と発表	第12回：文献講読と発表
第13回：文献講読と発表	第13回：文献講読と発表
第14回：文献講読と発表	第14回：文献講読と発表
第15回：文献講読と発表	第15回：文献講読と発表

成績評価方法：

平常点評価 100% 平常点による評価

スポーツ健康マネジメント論演習（1） A（前期）・B（後期）

吉村 正

授業概要：スポーツや健康に関する組織や職場、あるいはチームやグループ等がその目的を達成するために行うべき管理や運営についての理解と実践を学習する。

特に、仕事を円滑にする、人を活かす、元気のあるチームや魅力ある職場を作り出す、組織やグループを改善

する、失敗や敗戦から学ぶこと等のマネジメントを学習する。

授業の到達目標：授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかり説明出来るようになることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション（スポーツ健康マネジメントについて）	第1回：フィールドワーク②
第2回：スポーツに関するマネジメント①	第2回：フィールドワーク③
第3回：スポーツに関するマネジメント②	第3回：フィールドワークのまとめと報告書作り 報告書提出
第4回：健康に関するマネジメント① レポート提出	第4回：グループワーク①
第5回：健康に関するマネジメント②	第5回：グループワーク②
第6回：レクリエーションに関するマネジメント① レポート提出	第6回：グループワークのまとめと報告書作り 報告書提出
第7回：レクリエーションに関するマネジメント②	第7回：NPO 法人日本ティーボール協会・設立・展開・発展
第8回：リーダーシップ論 レポート提出	第8回：NPO 法人日本ティーボール今後の課題 レポート提出
第9回：リーダーとは、監督とは、その在り方について	第9回：レジメの書き方、研究発表の仕方
第10回：ヘッドコーチとはとは、アシスタントコーチとは、その在り方について	第10回：レジメの提出 そのQ & A①
第11回：スポーツ健康における組織論	第11回：レジメの提出 そのQ & A②
第12回：スポーツ健康における管理運営論	第12回：研究発表①
第13回：NPO 法人、学校法人について	第13回：研究発表②
第14回：社会福祉法人、財団法人について	第14回：研究発表③
第15回：フィールドワーク① レポート提出	第15回：まとめ

教科書：毎回資料を用意する

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 50% 授業3回に1回、レポートを提出させる。そして本演習を正確に理解しているかどうかを評価する。

平常点評価 50% レジメの内容、研究発表、授業態度、全てに関して評価の対象とする。

その他 遅刻、早退は原則として認めない。

スポーツ健康マネジメント論演習（2） A（前期）・B（後期）

吉村 正

授業概要：演習（1）で学習した基本的な内容を深める。

演習（2）では、より多くの関連文献を講読し、現場実習とグループワークを行い、各自が研究発表を行う。

授業の到達目標：授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかり説明出来るようになることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション スポーツ健康マネジメント（2）について	第1回：現場実習（フィールドワーク）③
第2回：文献講読① 早稲田大学の健康とスポーツについて	第2回：現場実習（フィールドワーク）④
第3回：文献講読② 早稲田大学の健康とスポーツについて レポート提出	第3回：現場実習（フィールドワーク）⑤

第4回：文献講読③ 健康教育マネジメント レポート提出	第4回：現場実習（フィールドワーク）のまとめと報告書作り 報告書提出
第5回：文献講読④ 健康教育マネジメント レポート提出	第5回：グループワーク①
第6回：文献講読⑤ ベース・ボールの創造・考案・マネジメント レポート提出	第6回：グループワーク②
第7回：文献講読⑥ NPO 法人日本ティーボール協会「世界への普及戦略」 レポート提出	第7回：グループワーク③
第8回：文献講読⑦ NPO 法人日本ティーボール協会「創造・展開・マネジメント」① レポート提出	第8回：グループワーク④
第9回：文献講読⑦ NPO 法人日本ティーボール協会「創造・展開・マネジメント」② レポート提出	第9回：グループワーク⑤
第10回：国民皆スポーツに向けて レポート提出	第10回：グループワークのまとめと報告書作り 報告書提出
第11回：スポーツ健康マネジメントについてのQ & A ①	第11回：研究発表 Q & A
第12回：スポーツ健康マネジメントについてのQ & A ②	第12回：研究発表 Q & A
第13回：スポーツ健康マネジメントについてのQ & A ③	第13回：研究発表 Q & A
第14回：現場実習（フィールドワーク）①	第14回：研究発表 Q & A
第15回：現場実習（フィールドワーク）②	第15回：まとめ

教科書：毎回資料を用意する

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 50% 授業3回につき約1回レポートを提出させる。その内容を評価の対象とする。

平常点評価 50% 現場実習、グループワークでの貢献、研究発表でのQ & Aをみて評価する。

その他 遅刻、早退は、理由がないものは、減点する。

社会保障政策論演習（1） A（前期）・B（後期）

植村 尚史

授業概要：本演習は、健康福祉政策を研究対象とする、政策研究分野の演習である。健康福祉政策（年金、医療、社会福祉等）の何らかの分野で、政策評価に関する研究、海外の制度との比較研究、政策決定過程に関する研究、政策の経済的、社会的効果に関する研究などのうち、いずれかの研究を行い、成果をまとめることを目標に進める。

授業の到達目標：成果をレポートにまとめる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） ／本講義の目的と概要について説明します。	第1回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第2回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第2回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

[illegible]

第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、次期の研究計画を提出します。	第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、修士論文の研究計画を提出します。

参考文献：植村尚史「社会保障を問い直す」（中央法規出版）

厚生労働白書（ぎょうせい）

その他授業の中で指示

成績評価方法：

レポート 20% 内容の理解

平常点評価 80% ディスカッションへの参加

社会保障政策論演習（2） A（前期）・B（後期）

植村 尚史

授業概要：本演習は、健康福祉政策を研究対象とする、政策研究分野の演習である。健康福祉政策（年金、医療、社会福祉等）の何らかの分野で、政策評価に関する研究、海外の制度との比較研究、政策決定過程に関する研究、政策の経済的、社会的効果に関する研究などのうち、いずれかの研究を行い、成果をまとめることを目標に進める。

授業の到達目標：成果をレポートにまとめる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） ／本講義の目的と概要について説明します。	第1回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第2回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第2回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第3回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第3回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第4回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第4回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第5回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第5回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第6回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第6回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第7回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第7回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第8回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第8回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第9回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第9回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第10回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第10回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第11回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第11回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第12回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第12回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第13回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第13回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第14回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。	第14回：報告とディスカッション 社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、次期の研究計画を提出します。	第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、修士論文の研究計画を提出します。

参考文献：

植村尚史「社会保障を問直す」（中央法規出版）

厚生労働白書（ぎょうせい）

その他授業の中で指示

成績評価方法：

レポート 20% 内容の理解

平常点評価 80% ディスカッションへの参加

予防医学演習（１） A（前期）・B（後期）

町田 和彦

授業概要：

A（前期）

古来から人間は様々な感染症に悩まされ、時にはペストのようにヨーロッパの人口の3分の1とも4分の1とも言われるほどの死者を出してきた。戦後の日本でさえ、赤痢だけでも10万人以上の患者を出し、数万人の死者を出していたが、1970年代にもなると医療の発達から今は感染症は過去のもと思われるようになってきた。しかし抗生物質の乱用は赤痢よりも凶暴な大腸菌（O157）、抗生物質の効かないブドウ球菌（MRSA）、筋肉を溶かし死に至らしめる劇症型レンサ球菌（食肉細菌）といったように今まで病原性の弱かった細菌を極端に恐ろしい菌に変化させたばかりでなく、乱開発からエイズ、エボラ出血熱、ハンタウイルス肺症候群のような非常に致死率の高いウイルス性疾患の出現を見るようになってきた。さらに今まで考えられなかった成人病と感染症の関係が次々と明らかになる一方、世界的な性感染症の流行、地球温暖化とマラリアをはじめとする熱帯病のまん延、さらにはテロと細菌兵器など感染症は今や私達の将来に大きな影響を与えるようになってきた。また、2009年には新型インフルエンザの突然の流行やこれよりもはるかに恐ろしい鳥インフルエンザの人へのパンデミックの恐れなど感染症の問題は人類に大きな影響を与えつつある。この授業ではその生体防御の仕組み（免疫）も含め2010年5月に出版された最新の教科書（「感染症ワールド第3版」）、パワーポイントを使い、さらに各回の授業にマッ

テしたビデオを用いて楽しんで聞いてもらえるような授業を進めていきたい。

B（後期）

人間をとりまく広範囲の環境がヒトの疾病の予防と健康の維持・増進に及ぼす影響を調査・実験・データ解析等多面的視点から研究していくための基本的理解と実際的方法の修得を目的とする。そのためには病原因子および環境側因子としての環境科学、生気象学、微生物学、人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの構造と機能と疾病、生体の防御機構（免疫学）、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して理解を深める。

授業の到達目標：

A（前期）

この講義は感染症を基礎医学や臨床医学の問題としてとらえるのではなく、多くの感染症についての予防医学的な観点からの特徴を学び、現在日本で問題になっている様々な問題（生活習慣病としての感染症、若者にまん延している性感染症や HIV、風邪とインフルエンザ：特に豚や鳥インフルエンザ、遅れている日本のワクチンや院内感染の実情、海外勤務の問題）についての対策を理解し、有効な予防法を身につけてもらうことを目標としている。

B（後期）

授業概要の趣旨を理解し、先輩の院生の発表を良く聞き、自分の研究に生かす努力を行う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要について説明しま）と自己紹介、新型インフルエンザ H1N1	第1回：秋学期オリエンテーション
第2回：感染症と人間、その壮絶な戦い	第2回：抄読会1（修士1年）
第3回：感染症と免疫の世界（1）：病原微生物の世界と生体防御機構	第3回：抄読会2（修士1年）
第4回：感染症と免疫の世界（2）：免疫の世界と生活習慣病予防	第4回：抄読会3（修士2年）
第5回：日本の感染症対策 ー伝染病予防法と感染症法ー	第5回：博士論文の調査と論文内容の説明1（博士3年）
第6回：日本人を襲うさまざまな感染症（1）：ワクチンと抗菌剤の発達	第6回：博士論文の調査と論文内容の説明2（博士3年）
第7回：日本人を襲うさまざまな感染症（2）：成人病・がんと感染症	第7回：博士論文の調査と論文内容の説明3（博士3年）
第8回：日本人を襲うさまざまな感染症（3）：かぜとインフルエンザ	第8回：博士論文の調査と論文内容の説明4（博士4年）
第9回：若者を襲う多彩な性感染症とエイズの流行	第9回：博士論文の調査と論文内容の説明5（博士6年）
第10回：エイズの増殖、抗 HIV 薬、エイズと社会	第10回：招へい講師 講義
第11回：環境の変化と感染症（1）：衰えない昆虫媒介感染症と海外赴任	第11回：博士論文発表（博士修了者の論文提出準備者） 1、2
第12回：環境の変化と感染症（1）：衰えない昆虫媒介感染症と海外赴任	第12回：修論発表予行
第13回：21世紀になっても新たな感染症の出現：SARSと新型インフルエンザ（鳥インフルエンザ）	第13回：抄読会10（修士1年）
第14回：生物テロの恐怖	第14回：抄読会11（修士2年）
第15回：教場試験	第15回：1年間の総括

教科書：「感染症ワールー免疫力、健康、環境ー第3版」町田和彦著、早稲田大学出版部

参考文献：授業は教科書に添って行いますが、毎回教科書にはない図表や写真を中心としたパワーポイントにより分かりやすく説明。

成績評価方法：

平常点評価 100% 平常点

備考・関連 URL : <http://www.kitanet.ne.jp/~m67235>

予防医学演習（２） A（前期）・B（後期）

町田 和彦

授業概要：演習（１）を基礎として、病原因子および環境側因子としての人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの機能と疾病、生体の防御機構（免疫学）、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して学習していくことを目的とし、これら要因に関する研究論文の紹介とそれに対するディスカッションを中心に行なっていく。

（注）修士一年生は予防医学演習（２）を選択することはできません。

授業の到達目標：授業概要の趣旨を理解し、先輩の院生の発表を良く聞き、自分の研究に生かす努力を行う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：研究室の過去の研究の説明	第１回：秋学期オリエンテーション
第２回：卒論に関する論文紹介（修士１年）	第２回：抄読会１（修士１年）
第３回：卒論に関する論文紹介（修士１年）	第３回：抄読会２（修士１年）
第４回：修士論文に関する論文紹介（修士２年）	第４回：抄読会３（修士２年）
第５回：博士論文に関する論文紹介（博士３年１）	第５回：博士論文発表予行１（博士３年）
第６回：博士論文に関する論文紹介（博士３年２）	第６回：博士論文発表予行２（博士３年）
第７回：博士論文に関する論文紹介（博士３年３）	第７回：博士論文発表予行３（博士３年）
第８回：博士論文に関する論文紹介（博士４年）	第８回：博士論文発表予行４（博士４年）
第９回：博士論文に関する論文紹介（博士６年）	第９回：博士論文発表予行４（博士６年）
第10回：招へい講師 講義	第10回：招へい講師 講義
第11回：日・中・韓およびヨーロッパ諸国の高齢者施設の比較、紹介（Ⅱ）	第11回：博士論文発表（博士修了者の論文提出希望者３）
第12回：博士論文に関する論文紹介１（博士修了者の論文提出希望者１）	第12回：修士論文について質疑応答
第13回：博士論文に関する論文紹介２（博士修了者の論文提出希望者２）	第13回：抄読会７（修士１年）
第14回：博士論文に関する論文紹介３（博士修了者の論文提出希望者３）	第14回：秋学期総括
第15回：春学期総括	第15回：１年間の総括

成績評価方法：

平常点評価 100% 平常点

福祉教育論演習（１） A（前期）・B（後期）

前橋 明

授業概要：本演習では、「福祉教育」に関する研究を進めていくための知識と技能、実践力をつけることを目的とする。とくに、「子どもたちの健全育成」や「生き生きとした、みんなの暮らしづくり」に主眼を置いて進めていく。具体的には、文献・資料講読、調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）、発表、討論などを行って、誰もがいきいきと健康的に生きていくための知見を、本講義と課題遂行を通して整理していく。

授業の到達目標：福祉教育に関する文献・資料講読、調査・測定、フィールドワークへの参加、発表、討論などを行って、誰もが生き生きと健康的に暮らせるための知見を整理し、あわせて、自分の述べたいことを論理的に記述・発表できるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：オリエンテーション：「福祉教育・健康福祉教育とは」	第１回：オリエンテーション（本講の概略と課題の提示）

第2回：先行研究を調べてのテーマの具体化 福祉教育や健康福祉に関する文献・資料講読①（日本）	第2回：学会論文（日本保育園保健学会・日本幼児体育学会などの研究論文）の講読と解説①
第3回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料講読②（日本）	第3回：学会論文（日本保育園保健学会・日本幼児体育学会などの研究論文）の講読と解説②
第4回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料講読③（日本）	第4回：学会論文（日本保育園保健学会・日本幼児体育学会などの研究論文）の講読と解説③
第5回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）①	第5回：OCR研修①：アンケート調査票の作成
第6回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）②	第6回：OCR研修②：帳票設定
第7回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料講読①（外国）	第7回：OCR研修③：OCRを用いた調査情報の画像処理とエクセルへの取り込み
第8回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料講読②（外国）	第8回：OCR研修④：エクセルデータからの作図
第9回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料講読③（外国）	第9回：OCR研修⑤：生活調査結果の分析と考察（討議）
第10回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）③	第10回：自己課題への取り組み
第11回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）④	第11回：自己課題の文章化
第12回：学会論文（日本子ども家庭福祉学会・日本幼児健康教育学会などの研究論文）の講読と解説①	第12回：自己課題の文章化 中間報告と討論①
第13回：学会論文（日本子ども家庭福祉学会・日本幼児健康教育学会などの研究論文）の講読と解説②	第13回：自己課題の文章化 中間報告と討論②
第14回：学会論文（日本子ども家庭福祉学会・日本幼児健康教育学会などの研究論文）の講読と解説③	第14回：自己課題の文章化 中間報告と討論③
第15回：課題レポートの提出と評価・解説	第15回：課題レポートの提出と評価・解説

教科書：随時、レジュメ・資料などを配布する。

参考文献：必要に応じて、随時、関連図書や文献を紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 課題を講義内容を絡めて考察し、文章化しているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 発表やディスカッション、フィールドワークへの参加状況の評価する。

福祉教育論演習（2） A（前期）・B（後期）

前橋 明

授業概要：本演習では、「福祉教育」に関する研究を進めていくための知識と技能、実践力をつけることを目的とし、だれもが穏やかに、自分らしく、いきいきと生きられるための知見を、調査・測定やフィールドワークを通して見だして、世の中に役立てていくように取り組む。調査・測定では、日常生活の身近なところで抱いた「ささやかな疑問」を大切に、その疑問を解決すべく、取り組む。そして、収集した結果（情報）をもとにして、自分の述べたいことを論理的に展開し、レポートを作成・報告する。

授業の到達目標：調査や測定、実践、観察などを通して収集した結果（情報）をもとにして、福祉教育や子どもの健康福祉に関して自分の述べたいことを論理的に文章化し、報告できるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習（2）の概要と進め方・課題レポートの提示	第1回：オリエンテーション（本講の概要説明と課題の提示）

第2回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）①	第2回：自己課題の中間報告と討論①
第3回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）②	第3回：自己課題の中間報告と討論②
第4回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）③	第4回：自己課題の中間報告と討論③
第5回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）④	第5回：学術集会への参加と研修①
第6回：研究会への参加と研修①	第6回：学術集会への参加と研修②
第7回：研究会への参加と研修②	第7回：学術集会への参加と研修③
第8回：研究会への参加と研修③	第8回：学術集会への参加と研修④
第9回：研究会への参加と研修④	第9回：自己課題への取り組み④（文章ならびに考察の再検討）
第10回：福祉教育・健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加①	第10回：自己課題への取り組み⑤（抄録作成）
第11回：福祉教育・健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加②	第11回：自己課題への取り組み⑥（パワーポイント作成）
第12回：福祉教育・健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加③	第12回：自己課題の学期末報告と討論①
第13回：自己課題への取り組み①（収集データの作図・作表）	第13回：自己課題の学期末報告と討論②
第14回：自己課題への取り組み②（測定・調査結果をもとにした考察・討議）	第14回：自己課題の学期末報告と討論③
第15回：課題レポート（自己課題の文章化）の提出と評価・解説	第15回：課題レポートの提出と評価・解説

教科書：随時、レジュメ・資料などを配布する。

参考文献：必要に応じて、随時、関連図書や文献を紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 課題を講義内容を絡めて考察し、論理的に文章化しているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 発表やディスカッション、フィールドワークや学術集会への参加・活動状況を評価する。

緩和医療学・臨床死生学演習（１） A（前期）・B（後期）

小野 充一

授業概要：

A（前期）

個人の“死”を、“生命の終わり”と捉える視点から、新しい世代への“生命の伝承”という視点に変換していくことで獲得する様々な“受容の概念”について、伝承されるものを受け止める側と伝える側の両極から検証し、支える技術、支えられる方法、関係性調整の方法などを具体的に研究する作業を指導する。

B（後期）

緩和医療学については、個人の“死”とその過程で生ずるつらさを具体的に和らげていくための知識や方法として、疼痛緩和、身体的症状緩和、精神的苦痛への対処、社会的苦痛の緩和、家族へのケアといった各領域の内容を学習することを目標とし、臨床死生学については様々な生と死の臨床現場で行動できる力や、その体験をどう伝えて共有していくかという課題に対する知識や概念について多角的に検討することを目標とする。さらにこれらの分野における研究手法として、質的および量的研究の概要を理解することを目的とする。

授業の到達目標：

A（前期）

- 1）緩和医療学あるいは臨床死生学における質的研究手法の習得
- 2）緩和医療学あるいは臨床死生学における量的研究手法の習得
- 3）学会発表年2回以上、投稿論文年1本以上を義務とする。

B（後期）

A）緩和医療学における研究論文の批判的検証が出来る。

B）臨床死生学における研究論文の批判的検証が出来る。

C）自分の選択した研究テーマに関する研究計画を立案出来る。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：グループ共同研究（1）「がんにおける関係性調整」	第1回：グループ共同研究（1）「がんにおける関係性調整」
第2回：グループ共同研究（2）「がんにおける関係性調整」	第2回：グループ共同研究（2）「がんにおける関係性調整」
第3回：グループ共同研究（3）「がんにおける関係性調整」	第3回：グループ共同研究（3）「がんにおける関係性調整」
第4回：グループ共同研究（4）「がんにおける関係性調整」	第4回：グループ共同研究（4）「がんにおける関係性調整」
第5回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」	第5回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」
第6回：卒業研究テーマに関する調査（1）	第6回：卒業研究テーマに関する調査（1）
第7回：卒業研究テーマに関する調査（2）	第7回：卒業研究テーマに関する調査（2）
第8回：卒業研究テーマに関する調査（3）	第8回：卒業研究テーマに関する調査（3）
第9回：卒業研究テーマに関する調査（4）	第9回：卒業研究テーマに関する調査（4）
第10回：卒業研究テーマに関する調査結果（中間発表）	第10回：卒業研究テーマに関する調査結果（中間発表）
第11回：卒業研究テーマに関する調査（5）	第11回：卒業研究テーマに関する調査（5）
第12回：卒業研究テーマに関する調査（6）	第12回：卒業研究テーマに関する調査（6）
第13回：卒業研究テーマに関する調査結果（中間発表）	第13回：卒業研究テーマに関する調査結果（中間発表）
第14回：学会発表準備	第14回：学会発表準備
第15回：レポート課題と解説	第15回：レポート課題と解説

成績評価方法：

A（前期）

その他 通年の学会発表及び執筆論文により評価する。

B（後期）

平常点評価 100% 出席状況

緩和医療学・臨床死生学演習（2） A（前期）・B（後期）

小野 充一

授業概要：演習（1）を基盤として、受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の分析などについて、関連する先行研究との比較を行いながら、討議を行う。

授業の到達目標：

A）緩和医療学における研究論文の批判的検証が出来る。

B）臨床死生学における研究論文の批判的検証が出来る。

C）自分の選択した研究テーマに関する研究を遂行し研究結果を学会で発表出来る。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：グループ共同研究（1）「がんにおける関係性調整」
第2回：輪読（1）、（2）（最新緩和医療学）	第2回：グループ共同研究（2）「がんにおける関係性調整」
第3回：輪読（3）、（4）（最新緩和医療学）	第3回：グループ共同研究（3）「がんにおける関係性調整」
第4回：輪読（5）、（6）（最新緩和医療学）	第4回：グループ共同研究（4）「がんにおける関係性調整」
第5回：輪読（7）、（8）（最新緩和医療学）	第5回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」

第6回：輪読（9）、（10）（最新緩和医療学）	第6回：卒業研究テーマに関する調査（1）
第7回：緩和医療現場フィールド調査（1）	第7回：卒業研究テーマに関する調査（2）
第8回：緩和医療現場フィールド調査（2）	第8回：卒業研究テーマに関する調査（3）
第9回：グループ共同研究（1）「治療停止を巡る問題」	第9回：卒業研究テーマに関する調査（4）
第10回：グループ共同研究（2）「治療停止を巡る問題」	第10回：卒業研究テーマに関する調査結果（中間発表）
第11回：グループ共同研究（3）「治療停止を巡る問題」	第11回：卒業研究テーマに関する調査（5）
第12回：グループ共同研究（4）「治療停止を巡る問題」	第12回：卒業研究テーマに関する調査（6）
第13回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」	第13回：卒業研究テーマに関する調査結果（中間発表）
第14回：卒業研究テーマ・研究計画発表会	第14回：学会発表準備
第15回：前期まとめ・講評	第15回：レポート課題と解説

成績評価方法：

平常点評価 100% 出席状況、発表内容

児童家庭福祉論演習（1） A（前期）・B（後期）

川名 はつ子

授業概要：要養護児童を支援するための狭義の社会的養護の体系を学び、家庭的養護と施設養護とを比較考察する。

視聴覚教材を通じて「子どもの養護」や「自立支援」に関する現状と支援の必要性について学ぶと共に、必要に応じて児童福祉施設の見学実習を行う。

本講義内容は、DP 科目基礎 1-3、4-1、DP 科目認知 2-1、2-2、DP 科目社会情動 1-6、1-7 および DP 科目育児保育 1-1、1-2、2-1、2-2、6-2、6-6、7-3、7-4、7-5、7-7 に該当する。

授業の到達目標：

A（前期）

要養護児童の存在やその支援の必要性を理解し、支援のあり方を考察・提案できることを目標とする。

B（後期）

要保護児童の存在やその支援の必要性を理解し、支援のあり方を考察・提案できることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：受講ガイダンス（含：教科書選定のためのニーズ調査）	第1回：中間まとめ（討論と考察）
第2回：要養護児童とは（その1：児童虐待、養育の拒否・怠慢）	第2回：情緒障害児短期治療施設のビデオ視聴
第3回：要養護児童とは（その2：障害児）	第3回：児童自立支援施設のビデオ視聴
第4回：要養護児童とは（その3：非行少年）	第4回：児童自立援助ホームのビデオ視聴
第5回：社会的養護の現状（その1：日本の家庭的養護）	第5回：中間まとめ（討論と考察）
第6回：社会的養護の現状（その2：日本の施設養護）	第6回：障害児早期療育教室の見学
第7回：海外の社会的養護の概要（その1：欧米）	第7回：障害児療育施設の見学
第8回：海外の社会的養護の概要（その2：東アジア）	第8回：肢体不自由児施設・重度心身障害児施設の見学
第9回：中間まとめ（討論と考察）	第9回：中間まとめ（討論と考察）
第10回：ビデオ「赤ちゃんポスト」の視聴	第10回：ホームビジティング（家庭訪問活動）の理論と実際
第11回：「こうのとりのゆりかご」検証報告	第11回：母子健康手帳の「ハンディのある子版」との統合

第12回：乳児院のビデオ視聴	第12回：ライフ・ストーリー・ワークとは何か
第13回：児童養護施設のビデオ視聴	第13回：スクール・ソーシャルワークとは何か
第14回：養育家庭・養子縁組家庭のビデオ視聴	第14回：「地域で子育て」の課題
第15回：まとめ	第15回：まとめ：「地域で子育て」の展望

教科書：受講生のニーズを調査した後に決定する。

参考文献：随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法：

レポート 80% 授業内のレポートや見学レポートにより理解度や考察の独自性を評価する。

平常点評価 20% 見学への参加度、出席状況を評価する。

その他 全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連 URL：

A（前期）

原則として演習（1－A、B）演習（2－A、B）の順に受講すること。

関連 URL：

NPO 法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、全国里親会、養子と里親を考える会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

B（後期）

原則として演習（1－A）を履修した後に受講すること。

関連 URL：

NPO 法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

児童家庭福祉論演習（2） A（前期）・B（後期）

川名 はつ子

授業概要：家庭的養護と施設養護について事例に即して比較検討し、実践的な知識・援助技術を身に付ける。

一方、演習（1）を経て各自が立案した研究計画に基づき、先行研究を収集し、必要な調査法・分析法を習得する。抄読会や発表・討論会を通じて具体的に助言・討論し合いながら論文（エスノグラフィー）の作成につなげていく。

本講義内容は、DP 科目基礎 1－3、4－1、DP 科目認知 2－1、2－2、DP 科目社会情動 1－6、1－7 および DP 科目育児保育 1－1、1－2、2－1、2－2、6－2、6－6、7－3、7－4、7－5、7－7 に該当する。

授業の到達目標：

1. 事例検討を通して、実践的な知識・援助技術を身に付ける。
2. 各自が立案した研究計画に基づき、論文（エスノグラフィー）の作成に必要な調査法・分析法を習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション（含：教科書選定のためのニーズ調査）	第1回：エスノグラフィーの作成要領（その1：教科書の輪読）
第2回：事例検討（その1：養育家庭A）	第2回：エスノグラフィーの作成要領（その2：教科書の輪読）
第3回：事例検討（その2：養育家庭B）	第3回：エスノグラフィーの作成要領（その3：教科書の輪読）
第4回：事例検討（その3：養育家庭C）	第4回：中間まとめ（討論と考察）
第5回：事例検討（その4：養子縁組家庭D）	第5回：見学実習（その1：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）
第6回：事例検討（その5：養子縁組家庭E）	第6回：見学実習（その2：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）
第7回：事例検討（その6：ファミリーホームF）	第7回：見学実習（その3：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）

第8回：事例検討（その7：ファミリーホームG）	第8回：見学実習（その4：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）
第9回：中間まとめ（討論と考察）	第9回：作成したフィールドノーツ要旨の発表（その1）
第10回：参与観察の技法（その1：教科書の輪読）	第10回：作成したフィールドノーツ要旨の発表（その2）
第11回：参与観察の技法（その2：教科書の輪読）	第11回：作成したフィールドノーツ要旨の発表（その3）
第12回：参与観察の技法（その3：教科書の輪読）	第12回：中間まとめ（討論と考察）
第13回：インタビューの技法（その1：教科書の輪読）	第13回：エスノグラフィーの構想発表と討論（その1）
第14回：インタビューの技法（その2：教科書の輪読）	第14回：エスノグラフィーの構想発表と討論（その2）
第15回：まとめ	第15回：まとめ

教科書：受講生のニーズに応じて決定する。

参考文献：随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法：

レポ ート 80% 授業内のミニレポートや見学レポートにより理解度と考察の独自性を評価する。

平常点評価 20% 見学実習や発表への参加度、出席状況を評価する。

そ の 他 全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連 URL：

A（前期）

原則として児童家庭福祉論（1－A、B）を履修した後に受講すること。

関連 URL：

NPO 法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

B（後期）

原則として児童家庭福祉論演習（1－A、B）および演習（2－A）を履修した後に受講すること。

関連 URL：

NPO 法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

精神保健福祉論演習（1） A（前期）・B（後期）

田中 英樹

授業概要：障害者福祉とリハビリテーションの歴史と理念を解題した上で、精神障害者及び国民の精神保健上の課題を解題していく。また、わが国の精神保健福祉施策及びその今日的課題を概観し、関連法制度の理解も求めていく。

具体的には、シラバスに譲るが、単にわが国の歴史や動向、そして課題を解説するのではなく、基準をグローバルに捉え、欧米やアジアの主要な状況と絶えず比較しながら解題する。また、わが国の課題も世界基準と照らし合わせて、遅れている権利擁護や地域のケアシステム構築を特に検討したい。

授業の到達目標：

1. 障害者福祉の理念と意義及びすべての障害者に共通の福祉施策の概要について理解させる。
2. 国民のメンタルヘルス課題について、社会福祉の視座から理解させる。
3. 精神障害者及びメンタルヘルスに関連した主要な法制度、例えば、精神保健福祉法、精神保健福祉士法、障害者基本法、障害者自立支援法、自殺対策基本法等の概要について理解させる。
4. わが国及び諸外国の精神保健福祉の歴史と動向を理解させる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション；本演習の内容と進め方	第1回：韓国における精神保健福祉の歴史と動向
第2回：各自の研究関心と問題意識（口頭発表）	第2回：NZにおける精神保健福祉の歴史と動向
第3回：障害者福祉の歴史－わが国の歴史	第3回：カナダにおける精神保健福祉の歴史と動向

第4回：障害者福祉の歴史―諸外国の歴史から	第4回：イタリアにおける精神保健福祉の歴史と動向
第5回：障害者福祉の理念（1970年代を中心に）	第5回：精神障害者のわが国の現状
第6回：障害者福祉の理念（現代を中心に）精神保健福祉法の概要	第6回：精神障害者家族のわが国の現状
第7回：ICID（国際障害分類）と ICF（国際生活機能分類）	第7回：精神保健福祉ボランティア活動
第8回：精神障害の特性	第8回：セルフヘルプグループ論
第9回：障害者基本法及び障害者自立支援法の概要	第9回：退院促進・地域生活移行支援
第10回：医療観察法の概要	第10回：職業支援制度
第11回：自殺対策基本法の概要と各地の取り組み	第11回：就労支援活動
第12回：精神保健福祉士法の概要	第12回：権利擁護精度
第13回：わが国における精神保健福祉の歴史	第13回：権利擁護活動
第14回：アメリカにおける精神保健福祉の歴史と動向	第14回：まとめ（1）：精神保健福祉の今日的課題
第15回：イギリスにおける精神保健福祉の歴史と動向	第15回：まとめ（2）：レポート解説

成績評価方法：

レポート 40% レポートによる評価
 平常点評価 60% 授業の出席を重視します。

精神保健福祉論演習（2） A（前期）・B（後期）

田中 英樹

授業概要：この講義は、精神保健福祉論演習（1）に受講した学生に開講する。まず、精神医学・精神保健福祉学・精神科リハビリテーション学の基礎知識を概説する。代表的な精神疾患では、国際疾患分類 ICD-10を基本に認知症、依存症、統合失調症、気分障害、人格障害、不安障害などを解説する。次に、実践上必要な技法や技術を解説する。薬物療法や心理療法の基礎知識に加えて、心理社会的リハビリテーションアプローチでは、心理教育と SST を理解させる。またストレングスモデルの技法を理解させる。加えて、各地で取り組まれている精神保健福祉援助実践を DVD や文献を参考に紹介する。そして、今日の主要課題について、政策動向を含めて解説する。

授業の到達目標：

1. 精神医学・精神保健及び精神科リハビリテーションの基本知識について理解させる。
2. 代表的な精神障害について理解させる。
3. 精神保健における個別課題について理解させる。
4. 精神科リハビリテーションの技術について理解させる。
5. 各地の精神保健福祉活動の実際について理解させる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション；本演習の進め方	第1回：精神科リハビリテーションの技術（6）心理教育のロールプレイ演習
第2回：各自の関心事について話し合い	第2回：ストレングスモデルの考え方
第3回：代表的な精神疾患（1）統合失調症の理解	第3回：ストレングスモデルのアセスメント演習
第4回：代表的な精神疾患（2）気分障害の理解	第4回：ストレングスモデルのケアプラン
第5回：代表的な精神疾患（3）パーソナリティディスオーダーの理解	第5回：ストレングスモデルからの社会資源の活用と開拓
第6回：精神保健の課題（1）依存症の理解と対応	第6回：障害者基本計画及び障害福祉計画の策定方法
第7回：精神保健の課題（2）自殺の理解と対応	第7回：地域自立支援協議会の機能と役割
第8回：精神保健の課題（3）危機対応	第8回：地域自立支援協議会への参加
第9回：レポート課題の討論（1）討論を中心に	第9回：進行管理について
第10回：レポート課題の討論（2）解説を中心に	第10回：進行管理の手法
第11回：精神科リハビリテーションの技術（1）デイケアとナイトケア	第11回：レポート課題の討論
第12回：精神科リハビリテーションの技術（2）デイケアプログラムの作成のロールプレイ演習	第12回：レポート課題の解説

第13回：精神科リハビリテーションの技術（３）認知行動療法と SST	第13回：ACT の活動
第14回：精神科リハビリテーションの技術（４）SST のロールプレイ演習	第14回：クラブハウス実践
第15回：精神科リハビリテーションの技術（５）心理教育	第15回：まとめ（レポート解説）

成績評価方法：

レポート 40% レポートによる評価
平常点評価 60% 授業の出席を重視します。

健康福祉支援工学演習（１） A（前期）・B（後期）

島山 卓朗

授業概要：障がいがある人や高齢者が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について学びます。演習（１）では研究を進めるための基礎を身につけます。前期には、各人の興味あるテーマを複数あげてもらい、ディスカッションを通してテーマを徐々に絞り込みます。次の先行研究の調査、研究計画の立案に取り組みます。後期には、研究計画に基づき研究を実施し、研究レポートを作成します。

授業の到達目標：研究テーマの絞り込み、研究計画の立案、研究実施、発表ができるようになる

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（前半部分）	第1回：フリーディスカッション（１）
第2回：概念地図の描き方	第2回：ガイダンス（後半部分）
第3回：支援工学（アシスティブ・テクノロジー）（１）	第3回：プレゼンテーション技法について
第4回：支援工学（アシスティブ・テクノロジー）（２）	第4回：思考のためのツール（１）概念地図
第5回：支援機器の実際（１）肢体不自由	第5回：演習（１）
第6回：支援機器の実際（２）言語障害	第6回：思考のためのツール（２）KJ法、ブレインストーミング
第7回：支援機器の実際（３）視覚障害	第7回：演習（２）
第8回：支援機器の実際（４）聴覚障害	第8回：プレゼンテーションとディスカッション（１）
第9回：支援機器の実際（５）重複障害	第9回：プレゼンテーションとディスカッション（２）
第10回：支援機器の実際（６）住宅	第10回：プレゼンテーションとディスカッション（３）
第11回：支援機器の実際（７）レクリエーション	第11回：プレゼンテーションとディスカッション（４）
第12回：支援機器の実際（８）スポーツ	第12回：プレゼンテーションとディスカッション（５）
第13回：支援機器の実際（９）就労	第13回：プレゼンテーションとディスカッション（６）
第14回：支援機器の実際（10）生きがい	第14回：まとめ、レポート課題提示
第15回：中間まとめ	第15回：フリーディスカッション（２）

参考文献：適宜紹介

成績評価方法：

平常点評価 100% 参加度・貢献度、課題提出状況などを総合的に評価する

備考・関連 URL：<http://homepage2.nifty.com/htakuro>

健康福祉支援工学演習（２） A（前期）・B（後期）

島山 卓朗

授業概要：「健康福祉支援工学演習（１）」に引き続き、さらに研究を深めます。そして修士論文を書き上げます。演習は、学生によるプレゼンテーションと教員・学生によるディスカッションを中心に行います。

授業の到達目標：修士論文の作成

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（前半部分）	第1回：フリーディスカッション（１）
第2回：先行研究に関する調査法について	第2回：ガイダンス（後半部分）
第3回：研究計画立案方法について（１）	第3回：レポートの書き方について
第4回：研究計画立案方法について（２）	第4回：プレゼンテーションとディスカッション（11）

第5回：プレゼンテーションとディスカッション（1）	第5回：プレゼンテーションとディスカッション（12）
第6回：プレゼンテーションとディスカッション（2）	第6回：プレゼンテーションとディスカッション（13）
第7回：プレゼンテーションとディスカッション（3）	第7回：プレゼンテーションとディスカッション（14）
第8回：プレゼンテーションとディスカッション（4）	第8回：プレゼンテーションとディスカッション（15）
第9回：プレゼンテーションとディスカッション（5）	第9回：プレゼンテーションとディスカッション（16）
第10回：プレゼンテーションとディスカッション（6）	第10回：プレゼンテーションとディスカッション（17）
第11回：プレゼンテーションとディスカッション（7）	第11回：プレゼンテーションとディスカッション（18）
第12回：プレゼンテーションとディスカッション（8）	第12回：プレゼンテーションとディスカッション（19）
第13回：プレゼンテーションとディスカッション（9）	第13回：プレゼンテーションとディスカッション（20）
第14回：プレゼンテーションとディスカッション（10）	第14回：まとめ、レポート課題提示
第15回：中間まとめ	第15回：フリーディスカッション（2）

参考文献：適宜紹介

成績評価方法：

平常点評価 100% 参加度・貢献度、課題提出状況、論文完成度などを総合的に評価する

備考・関連 URL：http://homepage2.nifty.com/htakuro

健康福祉管理論演習（1） A（前期）・B（後期）

扇原 淳

授業概要：健康福祉管理分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

授業の到達目標：

- 1）研究者としてプロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力を身につける。
- 2）科学的思考および論理的思考により問題の構造を客観的に捉えることができる。
- 3）データベース等を用いて先行研究の抽出を系統的かつ批判的に吟味することができる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：データマイニング（1） データマイニング法の概要
第2回：データベースの種類とその利活用	第2回：データマイニング（2） データウェアハウスとOLAP
第3回：サンプリングの方法	第3回：フィールドワーク（1） 医療機関
第4回：研究デザイン（1） 生態学的研究	第4回：フィールドワーク（2） 教育機関
第5回：研究デザイン（2） コホート、ケースコントロール	第5回：フィールドワーク（3） 行政機関
第6回：研究デザイン（3） RCT	第6回：フィールドワーク（4） 福祉機関
第7回：研究デザイン（4） 質的調査	第7回：研究計画（1） アウトラインの作成
第8回：統計的推測（1） 標本抽出	第8回：研究計画（2） ディスカッション
第9回：統計的推測（2） 推定	第9回：プレスタディ（1） 調査・研究の実施
第10回：統計的推測（3） 仮説の検定	第10回：プレスタディ（2） データの回収・入力
第11回：研究デザインで生じるバイアス	第11回：プレスタディ（3） データの分析
第12回：信頼性と妥当性	第12回：プレスタディ（4） 結果の解釈、考察
第13回：相関と回帰	第13回：研究結果発表（1） プレゼンテーション技法
第14回：多変量解析（1） 重回帰	第14回：研究結果発表（2） 論文作成法
第15回：多変量解析（2） 共分散構造分析	第15回：まとめ

教科書：John W.Creswell and Vicki L.Plano Clark, Designing and Conducting Mixed Methods Research, Sage Publications, 2011

参考文献：適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 40% 課題に対する、客観性、論理性、独自性、発展性、文章構成および表現の点から総合的に評価する。

平常点評価 60% プレゼンテーションおよびディスカッションも含めた授業に対する積極性を評価する。

健康福祉管理論演習（２） A（前期）・B（後期）

扇原 淳

授業概要：健康福祉管理分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

授業の到達目標：

- 1）研究者としてプロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力を身につける。
- 2）科学的思考および論理的思考により問題の構造を客観的に捉えることができる。
- 3）データベース等を用いて先行研究の抽出を系統的かつ批判的に吟味することができる。
- 4）テーマに即して用いられる資源の最大限を活用して適切な研究計画を立案・遂行できる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：研究テーマに関する調査（7） 研究・調査の実施
第2回：データベースの種類とその利活用	第2回：研究テーマに関する調査（8） データの回収
第3回：先行研究の紹介・検討（1） Health Care Management Rev 等	第3回：研究テーマに関する調査（9） データベースの作成
第4回：先行研究の紹介・検討（2） Am J Public Health 等	第4回：研究テーマに関する調査（10） データのクリーニング
第5回：先行研究の紹介・検討（3） Am J Epidemiology 等	第5回：研究テーマに関する調査（11） 基本統計量
第6回：先行研究の紹介・検討（4） Environmental Health Perspectives 等	第6回：研究テーマに関する調査（12） 重回帰
第7回：研究計画の発表・検討（1） 研究計画の立案	第7回：研究テーマに関する調査（13） 因子分析
第8回：研究計画の発表・検討（2） 研究計画の吟味	第8回：研究テーマに関する調査（14） 主成分分析
第9回：研究テーマに関する調査（1） 研究・調査の実施	第9回：研究テーマに関する調査（15） 数量化Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類
第10回：研究テーマに関する調査（2） データの回収	第10回：研究テーマに関する調査（16） 共分散構造分析
第11回：研究テーマに関する調査（3） データの入力	第11回：研究テーマに関する調査（17） ロジスティックモデル
第12回：研究テーマに関する調査（4） データの分析	第12回：研究テーマに関する調査（18） テキストマイニング
第13回：研究テーマに関する調査（5） データの考察	第13回：研究結果発表（1） プレゼンテーション技法
第14回：研究テーマに関する調査（6） 発表資料作成	第14回：研究結果発表（2） 論文作成法
第15回：研究結果の発表	第15回：まとめ

教科書：John W.Creswell and Vicki L.Plano Clark, Designing and Conducting Mixed Methods Research, Sage Publications, 2011

参考文献：適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 実施しない。

レポート 40% 課題に対する、客観性、論理性、独自性、発展性、文章構成および表現の点から総合的に評価する。

平常点評価 60% プレゼンテーションおよびディスカッションも含めた授業に対する積極性を評価する。

ソーシャルワーク論演習（１） A（前期）・B（後期）

岩崎 香

授業概要：演習では、主要なソーシャルワーク理論に関する文献を講読し、ソーシャルワークの歴史的な理解を深める。また、フィールドワークを並行して実施し、ソーシャルワークの理論と日本での実践の融合に関する検討を行なう。

授業の到達目標：学んできた歴史、理論、現状を念頭に置きながら、実践の質の向上に貢献する研究の視点を定める。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：ケースワークの日本での展開
第2回：各人のこれまでの研究経過と研究関心に関するプレゼンテーション	第2回：フィールドワーク①医療機関
第3回：ソーシャルワークの歴史に関する概説	第3回：フィールドワーク②精神科医療機関
第4回：ソーシャルワークの胎生期	第4回：日本におけるケースワークの現状と課題
第5回：ソーシャルワークの基盤の確立期	第5回：グループワークの日本での展開
第6回：診断主義と機能主義	第6回：フィールドワーク③地域の通所施設
第7回：ソーシャルワークの発展と統合	第7回：フィールドワーク④地域の入所施設
第8回：ソーシャルワーク理論の多様化	第8回：日本におけるグループワークの現状と課題
第9回：ソーシャルワーク理論の現状と課題	第9回：コミュニティ・ワークの日本での展開
第10回：文献講読①診断主義と機能主義	第10回：フィールドワーク⑤公的機関
第11回：文献講読②課題中心アプローチと危機介入	第11回：フィールドワーク⑥社会福祉協議会
第12回：文献講読③エコロジカル・アプローチ	第12回：日本におけるコミュニティ・ワークの現状と課題
第13回：文献講読④ストレングス・モデルとエンパワーマント・アプローチ	第13回：ソーシャルワーク理論と社会福祉実践の統合
第14回：文献講読⑤ナラティブ・アプローチ	第14回：まとめ①近年のソーシャルワークに関する動向
第15回：ソーシャルワーク理論に関するまとめ	第15回：まとめ②（レポート解説）

参考文献：授業進度にあわせて、授業の中で指示する。

成績評価方法：

A（前期）

レポート 60% ソーシャルワークの歴史と理論への理解を問う

平常点評価 40% 授業におけるリアクションペーパー及びディスカッションへの参加

B（後期）

レポート 60% ソーシャルワーク実践の現状への理解を問う

平常点評価 40% 授業におけるリアクションペーパー及びディスカッションへの参加

備考・関連 URL：定期試験：レポート

ソーシャルワーク論演習（２） A（前期）・B（後期）

岩崎 香

授業概要：演習では、ソーシャルワーク実践に関する過去の研究に関する検討を行う。その上で、最近の論文を講読し、その研究動向を探る。

特に自分の研究テーマに関する先行研究をレビューし、様々な研究法を検討する。

授業の到達目標：最終的に、自分の研究テーマの意義を明らかにし、目的に添った研究法を選択する力を養う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：ソーシャルワーク・リサーチの現状と意義
第2回：ソーシャルワークに関する研究動向①：1999年以前	第2回：リサーチの目的とその効果
第3回：ソーシャルワークに関する研究動向②：2000年以降	第3回：「社会福祉学」に見られる理論研究
第4回：ソーシャルワークの機能、モデルに関する研究①：機能	第4回：「社会福祉学」に見られる量的調査
第5回：ソーシャルワークの機能、モデルに関する研究②：実践モデル	第5回：「社会福祉学」に見られる質的調査①：グラウンデッド・セオリー
第6回：ソーシャルワークの価値、倫理に関する研究①：価値	第6回：「社会福祉学」に見られる質的調査②：フォーカス・グループインタビュー
第7回：ソーシャルワークの価値、倫理に関する研究②：倫理	第7回：「社会福祉学」に見られる質的調査③：内容分析
第8回：ソーシャルワークの評価に関する研究①：参与観察と記録	第8回：「社会福祉学」に見られる質的調査④：アクション・リサーチ
第9回：ソーシャルワークの評価に関する研究②：評価尺度	第9回：量的調査と質的調査の特徴
第10回：事例研究	第10回：各自の研究における目的
第11回：高齢者領域の研究	第11回：各自の研究テーマと実践フィールド
第12回：児童領域の研究	第12回：各自の研究テーマと調査法
第13回：障害領域の研究	第13回：研究デザインに関するプレゼンテーション
第14回：その他の領域の研究	第14回：研究法に関する最近の動向のまとめ
第15回：最近のソーシャルワークに関する研究に関するまとめ	第15回：まとめ（レポート解説）

参考文献：授業進度にあわせて、授業の中で指示する。

成績評価方法：

A（前期）

レポート 60% ソーシャルワーク実践と研究の関係性への理解を問う

平常点評価 40% 授業におけるリアクションペーパー及びディスカッションへの参加

B（後期）

レポート 60% ソーシャルワークにおける研究法への理解を問う

平常点評価 40% 授業におけるリアクションペーパー及びディスカッションへの参加

備考・関連 URL：定期試験：レポート

リハビリテーション科学演習（1） A（前期）・B（後期）

村岡 慶裕

授業概要：心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引きのばす方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標：授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：ガイダンス
第2回：論文輪読	第2回：論文輪読
第3回：オペアンプ等を用いた電子回路設計（1）	第3回：マイコンプログラミング（1）
第4回：論文輪読	第4回：論文輪読
第5回：オペアンプ等を用いた電子回路設計（2）	第5回：マイコンプログラミング（2）
第6回：論文輪読	第6回：論文輪読
第7回：オペアンプ等を用いた電子回路設計（3）	第7回：マイコンプログラミング（3）
第8回：論文輪読	第8回：論文輪読
第9回：計測プログラミング（1）	第9回：信号処理（1）
第10回：論文輪読	第10回：論文輪読
第11回：計測プログラミング（2）	第11回：信号処理（2）
第12回：論文輪読	第12回：論文輪読
第13回：計測プログラミング（3）	第13回：信号処理（3）
第14回：論文輪読	第14回：論文輪読
第15回：計測プログラミング（4）	第15回：信号処理（4）

成績評価方法：

平常点評価 100% 輪読は、論文読解力、説明能力により評価。

実習は、内容の理解度、取り組みの積極性により評価。

リハビリテーション科学演習（2） A（前期）・B（後期）

村岡 慶裕

授業概要：心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引きのばす方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標：授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：ガイダンス
第2回：修士論文研究経過報告	第2回：修士論文研究経過報告
第3回：論文輪読	第3回：論文輪読
第4回：修士論文研究経過報告	第4回：修士論文研究経過報告
第5回：論文輪読	第5回：論文輪読
第6回：修士論文研究経過報告	第6回：修士論文研究経過報告
第7回：論文輪読	第7回：論文輪読
第8回：修士論文研究経過報告	第8回：修士論文研究経過報告
第9回：論文輪読	第9回：論文輪読
第10回：修士論文研究経過報告	第10回：修士論文研究経過報告
第11回：論文輪読	第11回：論文輪読
第12回：修士論文研究経過報告	第12回：修士論文研究経過報告
第13回：論文輪読	第13回：論文輪読

第14回：修士論文研究経過報告	第14回：修士論文研究経過報告
第15回：論文輪読	第15回：論文輪読

成績評価方法：

平常点評価 40% 研究課題関連論文の読解力と説明能力

そ の 他 60% 研究課題の取り組みの主体性

[臨床心理学研究領域]

心身医学演習（１） A（前期）・B（後期）

野村 忍

授業概要：心身医学に関する最近の研究をとりあげ、ストレスと心身相関、ストレス評価、薬物療法、心理療法、疫学研究など幅広い領域について学習する。また、症例研究をとりあげ、その診断・治療法についてディスカッションする。

授業の到達目標：心身医学的研究計画・治療法を理解する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：抄読（14）（最新の国内研究（1））
第2回：抄読（1）（心身症の診断）	第2回：抄読（15）（最新の国内研究（2））
第3回：抄読（2）（心身症の治療）	第3回：抄読（16）（最新の国内研究（3））
第4回：抄読（3）（神経症の診断）	第4回：抄読（17）（最新の国内研究（4））
第5回：抄読（4）（神経症の治療）	第5回：抄読（18）（最新の国内研究（5））
第6回：抄読（5）（うつ病の診断）	第6回：抄読（19）（最新の海外研究（1））
第7回：抄読（6）（うつ病の治療）	第7回：抄読（20）（最新の海外研究（2））
第8回：抄読（7）（ストレスの評価）	第8回：抄読（21）（最新の海外研究（3））
第9回：抄読（8）（心身相関）	第9回：抄読（22）（最新の海外研究（4））
第10回：抄読（9）（精神生理学）	第10回：抄読（23）（最新の海外研究（5））
第11回：抄読（10）（薬物療法）	第11回：修士論文研究計画発表（1）
第12回：抄読（11）（心理療法）	第12回：修士論文研究計画発表（2）
第13回：抄読（12）（疫学研究）	第13回：修士論文研究計画発表（3）
第14回：抄読（13）（ヘルスプロモーション）	第14回：修士論文研究計画発表（4）
第15回：レポート課題と解説（1）	第15回：レポート課題と解説（2）

成績評価方法：

レポート 50% レポート及び発表の内容を評価する

平常点評価 50% 全回出席を原則とし、欠席は減点する

心身医学演習（２） A（前期）・B（後期）

野村 忍

授業概要：演習（１）を基礎にして、受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の解釈について発表し、ディスカッションする。また、関連する先行研究の文献を抄読する。

授業の到達目標：心身医学的研究計画の実際について理解する

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：統計解析実習（1）
第2回：修士論文研究計画発表（1）	第2回：統計解析実習（2）
第3回：修士論文研究計画発表（2）	第3回：統計解析実習（3）
第4回：修士論文研究計画発表（3）	第4回：統計解析実習（4）
第5回：修士論文研究計画発表（4）	第5回：修士論文中間発表（1）
第6回：調査用紙の製作実習（1）	第6回：修士論文中間発表（2）
第7回：調査用紙の製作実習（2）	第7回：修士論文中間発表（3）
第8回：調査用紙の製作実習（3）	第8回：修士論文中間発表（4）

第9回：調査用紙の製作実習（４）	第9回：最新の研究トピックスについての解説（１）
第10回：調査用紙の製作実習（５）	第10回：最新の研究トピックスについての解説（２）
第11回：研究テーマに関する調査（１）	第11回：修士論文発表（１）
第12回：研究テーマに関する調査（２）	第12回：修士論文発表（２）
第13回：研究テーマに関する調査（３）	第13回：修士論文発表（３）
第14回：研究テーマに関する調査（４）	第14回：修士論文発表（４）
第15回：レポート課題と解説（１）	第15回：レポート課題と解説（２）

成績評価方法：

レポ ー ト 50% レポート及び発表の内容について評価する

平常点評価 50% 全回出席を原則とし、欠席は減点する

認知行動カウンセリング学演習（１） A（前期）・B（後期）

根建 金男

授業概要：認知行動カウンセリング学について理解を深めるために、論理情動行動療法、認知療法、ストレス免疫訓練などの、代表的な認知行動カウンセリングのアプローチについて学ぶ。また、認知行動理論や構成主義的カウンセリングの新しい知見を学ぶ。さらに、認知行動カウンセリングの源流となった後期ストア派の哲学や一般意味論などについても学習したい。これらのねらいを実現するために、文献を講読し、議論する。なお、１年生は演習（１）A、演習（１）Bのみ登録すること。演習（２）A、演習（２）Bを同時に登録することは認めない。

授業の到達目標：認知行動カウンセリング学の領域における重要な文献（書籍）の内容を理解する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：前期受講ガイダンス	第1回：後期受講ガイダンス
第2回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Preface、Chapter 1（１）	第2回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 5（１）
第3回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Preface、Chapter 1（２）	第3回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 5（２）
第4回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Preface、Chapter 1（３）	第4回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 5（３）
第5回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 2（１）	第5回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 5（４）
第6回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 2（２）	第6回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 5（５）
第7回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 2（３）	第7回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 6（１）
第8回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 3（１）	第8回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 6（２）
第9回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 3（２）	第9回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 6（３）
第10回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 3（３）	第10回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 6（４）

第11回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 4（1）	第11回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 6（5）
第12回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 4（2）	第12回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 7（1）
第13回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 4（3）	第13回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 7（2）
第14回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counseling in Action”の輪 読—Chapter 4（4）	第14回：パーソナル・コンストラクトカウンセリング “Personal Construct Counselling in Action”の輪 読—Chapter 7（3）
第15回：総合討論 “Personal Construct Counseling in Action”の Preface—Chapter 4に関する総合討 論	第15回：総合討論 “Personal Construct Counselling in Action”の Chapter 5-7に関する総合討論

教科書：Fransella, F. & Dalton, P. 2000 Personal Construct Counselling in Action London: Sage Publications

成績評価方法：

平常点評価 50% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。

そ の 他 50% 出席状況を評価する。

認知行動カウンセリング学演習（2） A（前期）・B（後期）

根建 金男

授業概要：受講者が、各自の研究テーマについての研究計画・進捗状況、関連の研究動向などを発表し、教員を含めて全員で議論する。なお、この講義の登録が認められるのは2年生のみである。

授業の到達目標：受講者各自の修士論文を作成する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：前期受講ガイダンス	第1回：後期受講ガイダンス
第2回：各自の研究の進捗状況の確認（1）	第2回：各自の研究の進捗状況の確認（2）
第3回：各自の研究テーマに関する発表と討論（1）	第3回：各自の研究テーマに関する発表と討論（13）
第4回：各自の研究テーマに関する発表と討論（2）	第4回：各自の研究テーマに関する発表と討論（14）
第5回：各自の研究テーマに関する発表と討論（3）	第5回：各自の研究テーマに関する発表と討論（15）
第6回：各自の研究テーマに関する発表と討論（4）	第6回：各自の研究テーマに関する発表と討論（16）
第7回：各自の研究テーマに関する発表と討論（5）	第7回：各自の研究テーマに関する発表と討論（17）
第8回：各自の研究テーマに関する発表と討論（6）	第8回：各自の研究テーマに関する発表と討論（18）
第9回：各自の研究テーマに関する発表と討論（7）	第9回：各自の研究テーマに関する発表と討論（19）
第10回：各自の研究テーマに関する発表と討論（8）	第10回：各自の研究テーマに関する発表と討論（20）
第11回：各自の研究テーマに関する発表と討論（9）	第11回：各自の研究テーマに関する発表と討論（21）
第12回：各自の研究テーマに関する発表と討論（10）	第12回：各自の研究テーマに関する発表と討論（22）
第13回：各自の研究テーマに関する発表と討論（11）	第13回：各自の研究テーマに関する発表と討論（23）
第14回：各自の研究テーマに関する発表と討論（12）	第14回：各自の研究テーマに関する発表と討論（24）
第15回：前期のまとめ	第15回：後期のまとめ

成績評価方法：

平常点評価 50% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。

そ の 他 50% 出席状況を評価する。

学校カウンセリング学演習（1） A（前期）・B（後期）

菅野 純

授業概要：学校期（幼児期—青年期）の子どもたちが抱える教育心理臨床的諸テーマ（例えば、不登校、家庭内暴力など）を対象に、実践的研究の方法を模索しながら、各自のテーマを研究することを目的とする。

授業の到達目標：教育心理臨床的諸テーマについて、学校カウンセリング学関係の文献研究や事例研究を通し

て理解を深め、修士論文につなげていく。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：学校カウンセリング学序論（1）	第1回：個人研究テーマ発表（8）
第2回：学校カウンセリング学序論（2）	第2回：個人研究テーマ発表（9）
第3回：学校カウンセリング学文献講読（1）	第3回：個人研究テーマ発表（10）
第4回：学校カウンセリング学文献講読（2）	第4回：個人研究テーマ発表（11）
第5回：学校カウンセリング学文献講読（3）	第5回：個人研究テーマ発表（12）
第6回：学校カウンセリング学文献講読（4）	第6回：学校カウンセリング学文献輪読（1）
第7回：学校カウンセリング学文献講読（5）	第7回：学校カウンセリング学文献輪読（2）
第8回：学校カウンセリング学文献講読（6）	第8回：学校カウンセリング学文献輪読（3）
第9回：個人研究テーマ発表（1）	第9回：学校カウンセリング学文献輪読（4）
第10回：個人研究テーマ発表（2）	第10回：修士論文計画発表（1）
第11回：個人研究テーマ発表（3）	第11回：修士論文計画発表（2）
第12回：個人研究テーマ発表（4）	第12回：修士論文計画発表（3）
第13回：個人研究テーマ発表（5）	第13回：修士論文計画発表（4）
第14回：個人研究テーマ発表（6）	第14回：修士論文計画発表（5）
第15回：個人研究テーマ発表（7）	第15回：修士論文計画発表（6）

成績評価方法：

レポート 20% 学校カウンセリングの各テーマの趣旨をどれだけ正確に理解したかを問う。

平常点評価 80% ゼミ発表、ゼミ討論への参加を量的・質的に問う。

学校カウンセリング学演習（2） A（前期）・B（後期）

菅野 純

授業概要：演習（1）で取り上げたテーマを更に深めるとともに、学校期の諸テーマのみではなく、社会文化的背景、発達との関連、家族問題、諸外国との比較など、幅広く研究することを目的とする。

授業の到達目標：先行研究と修士論文作成にかかわる各自のテーマとを関連づけて研究を完成させる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：学校カウンセリング学研究概論（1）	第1回：修士論文経過報告（8）
第2回：学校カウンセリング学研究概論（2）	第2回：修士論文経過報告（9）
第3回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（1）	第3回：修士論文経過報告（10）
第4回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（2）	第4回：修士論文経過報告（11）
第5回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（3）	第5回：修士論文経過報告（12）
第6回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（4）	第6回：修士論文経過報告（13）
第7回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（5）	第7回：修士論文経過報告（14）
第8回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（6）	第8回：修士論文経過報告（15）
第9回：修士論文経過報告（1）	第9回：修士論文経過報告（16）
第10回：修士論文経過報告（2）	第10回：修士論文経過報告（17）
第11回：修士論文経過報告（3）	第11回：修士論文経過報告（18）
第12回：修士論文経過報告（4）	第12回：学校カウンセリング学私論（1）
第13回：修士論文経過報告（5）	第13回：学校カウンセリング学私論（2）
第14回：修士論文経過報告（6）	第14回：学校カウンセリング学私論（3）

第15回：修士論文経過報告（7）	第15回：学校カウンセリング学私論（4）

成績評価方法：

レポート 20% 学校カウンセリングの各テーマの趣旨をどれだけ正確に理解したかを問う。

平常点評価 80% ゼミ発表、ゼミ討論への参加を量的・質的に問う。

行動臨床心理学演習（1） A（前期）・B（後期）

嶋田 洋徳

授業概要：行動療法、認知行動療法に関する最近の研究を取り上げ、最新の知見、理論的發展、方法論に関する理解を深める。特に、心理臨床場面への応用を前提とした認知や行動に関する研究に主眼を置く。また、症例研究を取り上げ、研究知見との整合的な理解、アセスメントや治療技法に関する行動論的理解を試みる。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

授業の到達目標：行動臨床心理学（行動療法や認知行動療法）の最新理論や技法の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（4）
第2回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（1）	第2回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（5）
第3回：症例研究と実践報告検討（1）	第3回：症例研究と実践報告検討（5）
第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（1）	第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（5）
第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（2）	第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（6）
第6回：症例研究と実践報告検討（2）	第6回：症例研究と実践報告検討（6）
第7回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（2）	第7回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（6）
第8回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（3）	第8回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（3）
第9回：症例研究と実践報告検討（3）	第9回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（4）
第10回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（3）	第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（5）
第11回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（1）	第11回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（7）
第12回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（2）	第12回：症例研究と実践報告検討（7）
第13回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（4）	第13回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（7）
第14回：症例研究と実践報告検討（4）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

教科書：使用しない。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献：演習中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 60% 課題内容の達成度による。

平常点評価 40% 討論における貢献度による。

行動臨床心理学演習（2） A（前期）・B（後期）

嶋田 洋徳

授業概要：演習（1）を基礎として、そのエビデンスを重視しながら、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。主な研究課

題は、さまざまな不適応行動や症状の改善、適応行動や健康行動の形成に関する行動療法、認知行動療法などに代表される認知行動的アプローチである。また、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

授業の到達目標：行動臨床心理学（行動療法や認知行動療法）の最新理論や技法の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（7）
第2回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（1）	第2回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（8）
第3回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（1）	第3回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（9）
第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（2）	第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（10）
第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（2）	第5回：症例研究と実践報告検討（2）
第6回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（3）	第6回：症例研究と実践報告検討（3）
第7回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（3）	第7回：症例研究と実践報告検討（4）
第8回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（4）	第8回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（3）
第9回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（4）	第9回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（4）
第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（1）	第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（5）
第11回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（2）	第11回：研究テーマに関するまとめ（1）
第12回：症例研究と実践報告検討（1）	第12回：研究テーマに関するまとめ（2）
第13回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（5）	第13回：研究テーマに関するまとめ（3）
第14回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（6）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

教科書：使用しない。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献：演習中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 60% 課題内容の達成度による。

平常点評価 40% 討論における貢献度による。

産業カウンセリング学演習（1） A（前期）・B（後期）

鈴木 伸一

授業概要：うつ病、不安障害をはじめとするさまざまなストレス関連疾患への臨床心理学的研究に関する最新の文献を展望するとともに、地域・職場・医療機関等で行われる予防的支援および治療的支援をねらいとした認知行動療法の実際について学ぶ。

授業の到達目標：臨床ストレス科学、認知行動療法、および行動医学等の最新の知見や臨床テクニックの習得を目指す。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：文献講読と議論（15）
第2回：文献講読と議論（1）	第2回：文献講読と議論（16）
第3回：文献講読と議論（2）	第3回：文献講読と議論（17）
第4回：文献講読と議論（3）	第4回：文献講読と議論（18）
第5回：文献講読と議論（4）	第5回：文献講読と議論（19）
第6回：文献講読と議論（5）	第6回：文献講読と議論（20）
第7回：文献講読と議論（6）	第7回：文献講読と議論（21）
第8回：文献講読と議論（7）	第8回：文献講読と議論（22）
第9回：文献講読と議論（8）	第9回：文献講読と議論（23）
第10回：文献講読と議論（9）	第10回：文献講読と議論（24）
第11回：文献講読と議論（10）	第11回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（1）
第12回：文献講読と議論（11）	第12回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（2）
第13回：文献講読と議論（12）	第13回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（3）
第14回：文献講読と議論（13）	第14回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（4）
第15回：文献講読と議論（14）	第15回：まとめ

教科書：教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献：参考書は随時指示する。

成績評価方法：

平常点評価 100% 出席状況、分担発表および授業中の積極的な発言により評価する

備考・関連 URL：<http://www.f.waseda.jp/ssuzuki/>

産業カウンセリング学演習（2） A（前期）・B（後期）

鈴木 伸一

授業概要：ストレス関連疾患の発症・維持・増悪のメカニズムの解明に向けた臨床ストレス科学研究の課題や、ストレス関連疾患への認知行動療法の実践について展望し、研究の理論的、方法論的問題を議論するとともに、各研究の臨床的意義や実践応用可能性を探索する。

授業の到達目標：参加者の研究テーマにそくした理論的、方法論的問題点を議論するとともに、各研究の臨床的意義や実践応用可能性を明確にする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：研究構想発表と議論（15）
第2回：研究構想発表と議論（1）	第2回：研究構想発表と議論（16）
第3回：研究構想発表と議論（2）	第3回：研究構想発表と議論（17）
第4回：研究構想発表と議論（3）	第4回：研究構想発表と議論（18）
第5回：研究構想発表と議論（4）	第5回：研究構想発表と議論（19）
第6回：研究構想発表と議論（5）	第6回：研究構想発表と議論（20）
第7回：研究構想発表と議論（6）	第7回：研究構想発表と議論（21）
第8回：研究構想発表と議論（7）	第8回：研究構想発表と議論（22）
第9回：研究構想発表と議論（8）	第9回：研究構想発表と議論（23）
第10回：研究構想発表と議論（9）	第10回：研究構想発表と議論（24）
第11回：研究構想発表と議論（10）	第11回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（1）

第12回：研究構想発表と議論（11）	第12回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（2）
第13回：研究構想発表と議論（12）	第13回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（3）
第14回：研究構想発表と議論（13）	第14回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流（4）
第15回：研究構想発表と議論（14）	第15回：まとめ

教科書：教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献：参考書は随時指示する。

成績評価方法：

平常点評価 100% 出席状況、分担発表および授業中の積極的な発言により評価する

備考・関連 URL：<http://www.f.waseda.jp/ssuzuki/>

臨床心理アセスメント学演習（1） A（前期）・B（後期）

熊野 宏昭

授業概要：人間はどうして変わることができるのか、その過程をどうすれば測定できるか、「治療の科学科」はいかにして実現できるか、に焦点を当てて行く。具体的には、臨床行動分析（アクセプタンス&コミットメント・セラピー：ACT）やマインドフルネスに関わる基礎研究及び介入研究、注意訓練やマインドフルネスが前頭葉機能と心理行動的な介入効果に及ぼす影響の研究、そして「治療・援助プロセスの科学化」を目指す臨床心理アセスメントに関わる研究などの文献講読と議論を行う。また、症例研究を題材にして、機能的なケースフォーミュレーションとそれに基づく介入の進め方の習得を目指す。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の理解を深める。

授業の到達目標：専門分野の文献講読と議論を通して、世界に通用する学識と研究の方法論を身につけることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：文献講読と議論（15） ACT 初級
第2回：文献講読と議論（1） 臨床行動分析初級	第2回：文献講読と議論（16） ACT 中級
第3回：文献講読と議論（2） 臨床行動分析中級	第3回：文献講読と議論（17） ACT 準中級
第4回：文献講読と議論（3） 臨床行動分析準中級	第4回：文献講読と議論（18） ACT 上級
第5回：文献講読と議論（4） 臨床行動分析上級	第5回：文献講読と議論（19） ACT 超上級
第6回：文献講読と議論（5） 臨床行動分析超上級	第6回：学会・研修会への参加とレポート（1） シンポジウム報告
第7回：文献講読と議論（6） 応用脳科学初級	第7回：学会・研修会への参加とレポート（2） 口頭発表報告
第8回：文献講読と議論（7） 応用脳科学中級	第8回：学会・研修会への参加とレポート（3） ポスター発表報告
第9回：文献講読と議論（8） 応用脳科学準中級	第9回：学会・研修会への参加とレポート（4） ワークショップ報告
第10回：文献講読と議論（9） 応用脳科学上級	第10回：文献講読と議論（20） MCT 初級
第11回：文献講読と議論（10） 応用脳科学超上級	第11回：文献講読と議論（21） MCT 中級
第12回：文献講読と議論（11） メタ認知初級	第12回：文献講読と議論（22） MCT 準中級
第13回：文献講読と議論（12） メタ認知中級	第13回：文献講読と議論（23） MCT 上級
第14回：文献講読と議論（13） メタ認知準中級	第14回：文献講読と議論（24） MCT 超上級
第15回：文献講読と議論（14） メタ認知上級	第15回：まとめ

参考文献：演習時に適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 発表時のレポートにより評価する。

平常点評価 50% 出席状況、議論への参加状況等により評価する。

備考・関連 URL：夏期休業期間と春季休業期間にゼミ合宿を行う。
<http://hikumano.umin.ac.jp/>

臨床心理アセスメント学演習（２） A（前期）・B（後期）

熊野 宏昭

授業概要：演習（１）を基礎として、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。具体的には、不安障害（パニック障害、社会不安障害など）、気分障害（うつ病など）、摂食障害、糖尿病、メタボリック症候群、アスペルガー障害など、青年期以降に多く認められ、改善のために生活のセルフコントロールの必要性が大きい精神疾患や生活習慣病などを研究の対象にする。そして、大学生などを対象にしたアナログ研究（調査研究、実験研究、介入研究）か、臨床群を対象にした同様の研究によって、マインドフルネスや ACT など「自分の思考と距離を取りつつ、必要な行動を実行できるようにする方法」が持つ効果を明らかにすること、及びセルフコントロールと深く関わる前頭葉機能を注意訓練やマインドフルネスなどによって高めることが持つ効果を明らかにすることを、主要な研究テーマとする。

授業の到達目標：各自の研究構想発表と議論を通して、世界に通用する成果が出せる研究を継続的・発展的に実施できるようになることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：研究構想発表と議論（15） 結果集計中級
第2回：研究構想発表と議論（1） 研究準備初級	第2回：研究構想発表と議論（16） 結果集計準中級
第3回：研究構想発表と議論（2） 研究準備準初級	第3回：研究構想発表と議論（17） 結果集計上級
第4回：研究構想発表と議論（3） 研究準備中級	第4回：研究構想発表と議論（18） データ解析初級
第5回：研究構想発表と議論（4） 研究準備準中級	第5回：研究構想発表と議論（19） データ解析準初級
第6回：研究構想発表と議論（5） 研究準備上級	第6回：研究構想発表と議論（20） データ解析中級
第7回：研究構想発表と議論（6） 研究準備超上級	第7回：研究構想発表と議論（21） データ解析準中級
第8回：研究構想発表と議論（7） 研究計画初級	第8回：研究構想発表と議論（22） データ解析上級
第9回：研究構想発表と議論（8） 研究計画準初級	第9回：研究構想発表と議論（23） 考察初級
第10回：研究構想発表と議論（9） 研究計画準中級	第10回：研究構想発表と議論（24） 考察準初級
第11回：研究構想発表と議論（10） 研究計画準中級	第11回：研究構想発表と議論（25） 考察中級
第12回：研究構想発表と議論（11） 研究計画上級	第12回：研究構想発表と議論（26） 考察準中級
第13回：研究構想発表と議論（12） 研究計画超上級	第13回：研究構想発表と議論（27） 考察上級
第14回：研究構想発表と議論（13） 結果集計初級	第14回：研究構想発表と議論（28） 考察超上級
第15回：研究構想発表と議論（14） 結果集計準初級	第15回：まとめ

参考文献：演習時に適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 発表時のレポートにより評価する。
 平常点評価 50% 出席状況、議論への参加状況等により評価する。

備考・関連 URL：夏期休業期間と春季休業期間にゼミ合宿を行う。
<http://hikumano.umin.ac.jp/>

【感性認知情報システム研究領域】

感性認知科学演習（１） A（前期）・B（後期）

齋藤 美穂

授業概要：

A（前期）

感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法也多岐にわたるが、本演習では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて、特に色彩やデザインの認知およびその利用方法、対人認知、感覚協調などを中心としたテーマにより嗜好との関わりを含めて検討する。また心理的のみならず生理的なアプローチにより感性

研究に対する指導を行うことにより、この研究領域のみならず人間科学への理解を深めて行く。具体的には1) 色彩やデザインに関する嗜好と認知、2) 色彩やデザインが及ぼす心理的效果や生理的效果、3) 香りと色、音と色などの感覚協調、4) 表情や化粧などの対人認知、5) これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主とし、各人の研究テーマに対して文献講読とディスカッションを中心に演習をすすめる。演習では研究領域に関連した機器のレクチャーやデータ処理・分析方法のレクチャーも行う。

B (後期)

ディスカッションにより、各人が研究テーマを設定し、計画を立て、実験や分析を行い、科学的な論文を作成するまでの課題を習得していく。さらにこれらの課題を通して各人が人間科学研究への学際的なアプローチに対する理解をも深めて行くことを期待する。

授業の到達目標：これらの課題を通して各人が人間科学研究への学際的なアプローチに対する理解をも深めて行くことを期待する。適宜、文献講読や実習などに対するレポート提出が求められる。さらに、ディスカッションにより、各人が研究テーマを設定し、計画を立て、実施可能なレベルにまで具現化していくことを目標とする。

授業計画：

A (前期)	B (後期)
第1回：感性認知科学演習のオリエンテーション	第1回：機器レクチャー③（感性研究における生理測定機器の実習）
第2回：感性認知科学に関する研究の紹介	第2回：研究計画および関連論文の検索（計画の検討）
第3回：ゼミにおける論文や研究テーマの紹介	第3回：研究計画および関連論文の検索（関連論文検索）
第4回：質疑応答と講評	第4回：研究計画および関連論文の発表（検索結果発表）
第5回：博士課程を含む学生による昨年度の研究発表（修士2年以外）	第5回：研究計画および関連論文の発表（ディスカッション）
第6回：質疑応答、ディスカッションと講評	第6回：個別研究指導（研究計画の問題点の抽出）
第7回：学会発表予行	第7回：個別研究指導（研究計画の吟味）
第8回：質疑応答、ディスカッションと講評	第8回：研究計画の吟味と検討（研究史との関連性の検討）
第9回：色彩計測機器レクチャー（色彩色差計・光源）解説	第9回：研究計画の吟味と検討（ディスカッション）
第10回：色彩計測機器の実習	第10回：研究計画の実験・調査に関する指導（実験・調査計画の報告）
第11回：機器レクチャー①（感性研究における視知覚機器の解説）	第11回：研究計画の実験・調査に関する指導（ディスカッション）
第12回：機器レクチャー①（感性研究における視知覚機器の実習）	第12回：個別研究指導（分析方法の報告）
第13回：機器レクチャー②（感性研究における表情研究機器の解説）	第13回：個別研究指導（分析方法の吟味）
第14回：機器レクチャー②（感性研究における表情研究機器の実習）	第14回：研究進捗報告と発表
第15回：機器レクチャー③（感性研究における生理測定機器の解説）	第15回：質疑応答、ディスカッションおよび講評

成績評価方法：

A (前期)

レポート 20% 課題への取組みと完成度
 平常点評価 70% 授業への参加状況、積極的に議論に参加し、活発に発言しているかどうか
 その他 10% 学会への参加状況や自主性

B (後期)

平常点評価 80% 授業への参加状況、積極的に議論に参加し、活発に発言しているかどうか
 その他 20% 各人の研究に対する自主性、課題への取組み

感性認知科学演習（２） A（前期）・B（後期）

齋藤 美穂

授業概要：この演習では感性認知科学演習（１）での学習を踏まえ、各人の研究テーマに対する研究計画、展望、分析に関してディスカッションし、具体的事例の検討を行う。各人は演習（１）で行った実習、データ処理や分析方法を実際の研究テーマに活用し、本演習の終了時に論文を完成させ提出することが求められる。さらに学会発表や学術論文作成の指導を行い、修士論文に向かって助言と指導を進めて行く。

授業の到達目標：演習（１）で行った実習、データ処理や分析方法を実際の研究テーマに活用し、本演習の終了時に論文を完成させ提出することを到達目標とする。さらに結果を、学会発表（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会など）することを目標とする。また学術論文の作成を開始することも望まれる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：研究進捗報告	第１回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第２回：質疑応答、ディスカッションおよび講評	第２回：個別論文指導（研究計画の最終報告）
第３回：研究計画と論文作成計画	第３回：個別論文指導（研究計画の最終チェック）
第４回：質疑応答、ディスカッションおよび講評	第４回：論文作成進捗状況の発表
第５回：論文作成レクチャー（データ処理の解説）	第５回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第６回：論文作成レクチャー（データ処理の実習）	第６回：論文進捗状況の報告
第７回：論文作成レクチャー（分析①：SPSSの解説）	第７回：論文進捗状況の検討
第８回：論文作成レクチャー（分析①：SPSSの実習）	第８回：個別論文指導（論文骨子の報告）
第９回：論文作成レクチャー（分析②：各種検定等の解説）	第９回：個別論文指導（論文の書き方の指導）
第10回：論文作成レクチャー（分析②：各種検定等の実習）	第10回：個別論文指導（分析内容の報告）
第11回：論文作成レクチャー（分析③：多変量解析等の解説）	第11回：個別論文指導（分析内容の確認）
第12回：論文作成レクチャー（分析③：多変量解析等の実習）	第12回：個別論文指導（投稿論文のアウトラインの報告）
第13回：論文作成計画の発表	第13回：個別論文指導（論文投稿の助言と指導）
第14回：質疑応答、ディスカッションおよび講評	第14回：修士・博士合同による修論論文口頭試問予行
第15回：論文作成計画の確認	第15回：質疑応答、講評

成績評価方法：

A（前期）

平常点評価 80% 授業への参加状況、積極的参加、発言がなされているか

そ の 他 20% 自主性、学会への参加状況

B（後期）

平常点評価 60% 授業への参加状況、積極的参加、発言がなされているか

そ の 他 40% 自主性、学会への参加状況、論文の完成度

安全人間工学演習（１） A（前期）・B（後期）

石田 敏郎

授業概要：安全に係る学問分野は、人間工学、心理学、人間信頼性工学、安全工学などがある。近年、システムの巨大化とともにエラーの内容も複雑になってきており、個々の人間のエラーのみでなく、組織的なエラーに対する対応も求められている。ヒューマンエラーの心理学および人間工学的研究に関する文献を中心に、人間行動モデルの理解、ヒューマンエラーの実験的検討の方法、事故分析の実際、および事故防止対策立案の方法とその評価について学ぶ。対象となる分野は、道路交通、航空をはじめ、各産業現場である。

授業の到達目標：安全人間工学に関連した専門的知識の習得と理解。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：人間工学と安全に関する講義	第１回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第２回：人間工学と安全に関する講義	第２回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第３回：人間工学と安全に関する講義	第３回：安全人間工学の基本的な文献の輪読

第4回：人間工学と安全に関する講義	第4回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第5回：人間工学と安全に関する講義	第5回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第6回：人間工学と安全に関する講義	第6回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第7回：人間工学と安全に関する講義	第7回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第8回：人間工学と安全に関する講義	第8回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第9回：人間工学と安全に関する講義	第9回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第10回：人間工学と安全に関する講義	第10回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第11回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第11回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第12回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第12回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第13回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第13回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第14回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第14回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第15回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第15回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表

成績評価方法：

レポート 60% レポートによる評価

平常点評価 40% 平常点による評価

安全人間工学演習（２） A（前期）・B（後期）

石田 敏郎

授業概要：演習（１）を基礎とし、各分野の事故統計資料および事故・不具合報告書をもとに、統計的分析と事例分析を行い、ヒューマンエラー防止のための具体的方策を探る。その際、人間行動からの観点および事故分析的な観点からのアプローチが必要となる。演習（２）では、これらの観点から、如何に事故防止対策を導き出すかについて、実際のデータをもとに検討する。さらに、安全に関する人間行動の理解には、観察、実験、調査といった手法が不可欠であるが、それらの手法について文献調査と過去に当研究室で実施してきた研究を基に検討を加え、修士論文作成のための基礎的な研究知識の習得を目指す。

授業の到達目標：修士論文作成のための該当分野の研究知識および研究手法の習得を目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：事故統計資料の分析	第1回：事故事例分析
第2回：事故統計資料の分析	第2回：事故事例分析
第3回：事故統計資料の分析	第3回：事故事例分析
第4回：事故統計資料の分析	第4回：事故事例分析
第5回：事故統計資料の分析	第5回：事故事例分析
第6回：事故統計資料の分析	第6回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第7回：事故統計資料の分析	第7回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第8回：事故統計資料の分析	第8回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第9回：事故統計資料の分析	第9回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表

第10回：事故統計資料の分析	第10回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不 具合データの分析の発表
第11回：事故事例分析	第11回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不 具合データの分析の発表
第12回：事故事例分析	第12回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不 具合データの分析の発表
第13回：事故事例分析	第13回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不 具合データの分析の発表
第14回：事故事例分析	第14回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不 具合データの分析の発表
第15回：事故事例分析	第15回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不 具合データの分析の発表

成績評価方法：

レポート 60% レポートによる評価

平常点評価 40% 平常点による評価

福祉工学演習（1） A（前期）・B（後期）

藤本 浩志

授業概要：福祉工学では、単にモノづくりのためのツールとしての工学的な知識のみならず、支援する対象であるヒトの諸機能の理解も重要である。福祉工学演習（1）では、このような福祉工学の各論を構成する以下の事柄について、関連資料や現場での体験を通じて学ぶ。

- ・移動支援機器、コミュニケーション支援機器、介助支援機器等、狭義の福祉機器である機能代行機器の現状および研究開発動向。
- ・健常者のみならず障害者や高齢者の身体の諸機能（運動機能特性、感覚知覚特性）の定量的な評価手法。

授業の到達目標：修士課程の研究を立ち上げる際に必要となる当該領域に関する広範な知見を身に付ける。併せて必要なテクニックも習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：現状の問題の紹介と課題の提示（運動機能特性）
第2回：現状の問題の紹介と課題の提示（移動機能代行機器）	第2回：輪読およびディスカッション（1）
第3回：輪読およびディスカッション（1）	第3回：輪読およびディスカッション（2）
第4回：輪読およびディスカッション（2）	第4回：輪読およびディスカッション（3）
第5回：輪読およびディスカッション（2）	第5回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）
第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）	第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）
第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）	第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（3）
第8回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）	第8回：現状の問題の紹介と課題の提示（感覚機能特性）
第9回：現状の問題の紹介と課題の提示（コミュニケーション機器）	第9回：輪読およびディスカッション（1）
第10回：輪読およびディスカッション（1）	第10回：輪読およびディスカッション（2）
第11回：輪読およびディスカッション（2）	第11回：輪読およびディスカッション（3）
第12回：輪読およびディスカッション（3）	第12回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）
第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）	第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）

第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）	第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（3）
第15回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（3）	第15回：総括と講評

教科書：なし。必要に応じてプリントを配布する。

成績評価方法：

平常点評価 30% 積極性と他者への貢献

そ の 他 70% 自身の研究課題への取り組みとその発表

福祉工学演習（2） A（前期）・B（後期）

藤本 浩志

授業概要：福祉工学演習（1）を踏まえて、ヒトの機能を補完し環境との円滑なインタラクションの実現を目指した適切なインターフェースに関する具体的な課題に取り組む。その際には、身体諸機能の機序の解明に関する基礎研究と、同時にそれらの知見に基づいて実用化を目指した機器に関する応用研究の両方の視点に留意したい。また特に応用研究については、広義の福祉機器として、ユーザを障害者や高齢者に限定しないユニバーサルデザインのコンセプトも併せて検討する。

授業の到達目標：修士課程の研究を推進する上で、自立した研究者に必要な問題解決能力を習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス	第1回：課題の提示（床面材料環境と下肢運動との関連）
第2回：課題の提示（ヒューマンインターフェース）	第2回：輪読およびディスカッション（1）
第3回：輪読およびディスカッション（1）	第3回：輪読およびディスカッション（2）
第4回：輪読およびディスカッション（2）	第4回：輪読およびディスカッション（3）
第5回：輪読およびディスカッション（2）	第5回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）
第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）	第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）
第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）	第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（3）
第8回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）	第8回：課題の提示（床面形状環境と下肢運動との関連）
第9回：課題の提示（バーチャルリアリティ皮膚感覚ディスプレイ）	第9回：輪読およびディスカッション（1）
第10回：輪読およびディスカッション（1）	第10回：輪読およびディスカッション（2）
第11回：輪読およびディスカッション（2）	第11回：輪読およびディスカッション（3）
第12回：輪読およびディスカッション（3）	第12回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）
第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（1）	第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）
第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（2）	第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（3）
第15回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（3）	第15回：総括と講評

教科書：なし。必要に応じてプリントを配布する。

成績評価方法：

平常点評価 30% 積極性と他者への貢献

そ の 他 70% 自身の研究課題への取り組みとその発表

情報処理心理学演習（１） A（前期）・B（後期）

中島 義明

授業概要：

A（前期）

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「理論的問題」を取り上げ、これらの諸問題につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

B（後期）

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「理論的問題」を取り上げ、これら諸問題の「方法論」について、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

授業の到達目標：

A（前期）

理論的研究の遂行に必要な「基礎的知識」を習得する。

B（後期）

理論的研究の遂行に必要な「方法論」に関する基礎的知識を習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：授業の概要と進め方
第2回：各自の研究テーマの発表（１）グループ A	第2回：各自の修士論文の研究計画（特に方法論）に関する発表（１）グループ A
第3回：各自の研究テーマの発表（２）グループ B	第3回：各自の修士論文の研究計画（特に方法論）に関する発表（２）グループ B
第4回：各自の研究テーマの発表（３）グループ C	第4回：各自の修士論文の研究計画（特に方法論）に関する発表（３）グループ C
第5回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論（１）グループ A	第5回：上記発表について討論（１）グループ A
第6回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論（２）グループ B	第6回：上記発表について討論（２）グループ B
第7回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論（３）グループ C	第7回：上記発表について討論（３）グループ C
第8回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文）（１）グループ A	第8回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文；方法論的観点より選択）（１）グループ A
第9回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文）（２）グループ B	第9回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文；方法論的観点より選択）（２）グループ B
第10回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文）（３）グループ C	第10回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文；方法論的観点より選択）（３）グループ C
第11回：上記輪読内容に関する討論（１）グループ A	第11回：上記輪読内容に関する討論（１）グループ A
第12回：上記輪読内容に関する討論（２）グループ B	第12回：上記輪読内容に関する討論（２）グループ B
第13回：上記輪読内容に関する討論（３）グループ C	第13回：上記輪読内容に関する討論（３）グループ C
第14回：「情報処理心理学の効用と限界」について全員で討論	第14回：「情報処理心理学の方法論」について全員で討論
第15回：総括	第15回：総括

成績評価方法：

そ の 他 出席状況・発表・レポートを総合して評価する。

備考・関連 URL：上記授業計画は必要に応じた変更があり得る。

情報処理心理学演習（２） A（前期）・B（後期）

中島 義明

授業概要：

A（前期）

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「実際的問題」を取り上げ、これら諸問題の理論的側面につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

B（後期）

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「実際の問題」を取り上げ、これら諸問題で用いられる方法論について、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

授業の到達目標：

A（前期）

現実生活場面と密着した研究の遂行に必要な、これまでの研究から明らかにされた基礎的諸知識を習得する。

B（後期）

現実生活場面と密着した研究の遂行に必要な、これまでの研究で用いられた方法論の諸知識を習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の概要と進め方	第1回：後期の授業の概要と進め方
第2回：各自が関心を有する「実際の問題」についての発表（1）グループA	第2回：各自の修士論文のテーマに即した「実際の問題」について発表（1）グループA
第3回：各自が関心を有する「実際の問題」についての発表（2）グループB	第3回：各自の修士論文のテーマに即した「実際の問題」について発表（2）グループB
第4回：各自が関心を有する「実際の問題」についての発表（3）グループC	第4回：各自の修士論文のテーマに即した「実際の問題」について発表（3）グループC
第5回：各自が関心を有する「実際の問題」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論（1）グループA	第5回：上記発表について討論（1）グループA
第6回：各自が関心を有する「実際の問題」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論（2）グループB	第6回：上記発表について討論（2）グループB
第7回：各自が関心を有する「実際の問題」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論（3）グループC	第7回：上記発表について討論（3）グループC
第8回：輪読（「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」）（1）グループA	第8回：輪読（情報処理心理学の応用的研究論文；方法論的観点より選択）（1）グループA
第9回：輪読（「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」）（2）グループB	第9回：輪読（情報処理心理学の応用的研究論文；方法論的観点より選択）（2）グループB
第10回：輪読（「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」）（3）グループC	第10回：輪読（情報処理心理学の応用的研究論文；方法論的観点より選択）（3）グループC
第11回：上記輪読内容に関する討論（1）グループA	第11回：上記輪読内容に関する討論（1）グループA
第12回：上記輪読内容に関する討論（2）グループB	第12回：上記輪読内容に関する討論（2）グループB
第13回：上記輪読内容に関する討論（3）グループC	第13回：上記輪読内容に関する討論（3）グループC
第14回：「情報処理心理学」の今後の応用について全員で討論	第14回：「情報処理心理学の応用的研究における方法論」について全員で討論
第15回：総括	第15回：総括

成績評価方法：

その他 出席状況・発表・レポートを総合して評価する。

備考・関連 URL：上記授業計画は必要に応じた変更があり得る。

社会的実践認知科学演習（1） A（前期）・B（後期）

宮崎 清孝

授業概要：認知に対する今日的アプローチは、その脳神経的基盤を求めようとするもの、認知をコンピュータとのアナロジーで、いわゆる情報処理プロセスとして捉えようとするもの、環境との相互作用として捉えようとするもの、さらに認知を社会的、文化的な基盤に基づくものとして捉えようとするものがある。これを認知に対する「文化歴史的アプローチ」というが、学習を問題にする場合には、この最後の立場が重要になる。この授業ではこの立場の考え方を学ぶため、関係する論文を読む。

授業の到達目標：文化歴史的アプローチの方法について、感覚をつかめること

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：イントロダクション	第1回：論文輪読
第2回：イントロダクション	第2回：論文輪読
第3回：講義：認知科学の最近の話題について	第3回：論文輪読
第4回：講義：認知科学の最近の話題について	第4回：論文輪読
第5回：講義：認知科学の最近の話題について	第5回：論文輪読
第6回：講義：認知科学の最近の話題について	第6回：論文輪読
第7回：論文輪読	第7回：論文輪読
第8回：論文輪読	第8回：論文輪読
第9回：論文輪読	第9回：論文輪読
第10回：論文輪読	第10回：論文輪読
第11回：論文輪読	第11回：論文輪読
第12回：論文輪読	第12回：論文輪読
第13回：論文輪読	第13回：論文輪読
第14回：論文輪読	第14回：論文輪読
第15回：論文輪読	第15回：論文輪読

参考文献：授業時間中に示す

成績評価方法：

A（前期）

そ の 他 論文講読の質を評価する

B（後期）

そ の 他 論文講読の質を考慮する。

社会的実践認知科学演習（2） A（前期）・B（後期）

宮崎 清孝

授業概要：社会的実践認知科学演習（1）を参照。認知に対する「文化歴史的アプローチ」から、学習、アート、創造といった諸問題を研究している論文を読む。

授業の到達目標：文化歴史的アプローチの方法について、感覚をつかめること

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：イントロダクション	第1回：論文輪読
第2回：イントロダクション	第2回：論文輪読
第3回：講義：認知科学の最近の話題について	第3回：論文輪読
第4回：講義：認知科学の最近の話題について	第4回：論文輪読
第5回：講義：認知科学の最近の話題について	第5回：論文輪読
第6回：講義：認知科学の最近の話題について	第6回：論文輪読
第7回：論文輪読	第7回：論文輪読
第8回：論文輪読	第8回：論文輪読
第9回：論文輪読	第9回：論文輪読
第10回：論文輪読	第10回：論文輪読
第11回：論文輪読	第11回：論文輪読
第12回：論文輪読	第12回：論文輪読
第13回：論文輪読	第13回：論文輪読
第14回：論文輪読	第14回：論文輪読
第15回：論文輪読	第15回：論文輪読

参考文献：授業時間中に示す

成績評価方法：

A（前期）

そ の 他 論文講読の質を評価する。

B（後期）

そ の 他 論文講読の質を考慮する。

心理行動学演習（１） A（前期）・B（後期）

鈴木 晶夫

授業概要：実験計画は、調査・実験の研究の基本であると考えられるので、整理しておきたい。さらにこの演習では、ノンバーバル行動、コミュニケーション、感情、健康、からだ、行動をキーワードとして、身体と精神の相互作用を中心に考えたい。これらに関連する先行研究の文献を取り上げ講読する。人間科学という視点から心理行動学を幅広く追究したい。

授業の到達目標：専門的基礎知識の説明ができること、研究方法の理解と適用ができること、批判的・創造的な論理思考を形成すること、心理行動学の実際応用と理解ができること、心理行動学に関わる価値観を形成することなどを授業の到達目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習全体の進め方	第1回：前半のまとめと後半全体の進め方
第2回：哲学と心理学	第2回：文献講読（コミュニケーション概説）
第3回：心理学の背景	第3回：文献講読（コミュニケーション研究の方法論）
第4回：心理学の歴史	第4回：文献講読（言語と非言語の関連研究）
第5回：科学としての心理学	第5回：文献講読（ノンバーバル行動概説）
第6回：科学的方法 観察	第6回：文献講読（ノンバーバル行動研究の方法論）
第7回：科学的方法 相関的研究	第7回：文献講読（感情関連研究概説）
第8回：科学的方法 実験	第8回：文献講読（感情研究の方法論）
第9回：科学的推論	第9回：文献講読（健康関連研究概説）
第10回：測定尺度	第10回：文献講読（健康研究の方法論）
第11回：測定と統計	第11回：文献講読（身体と精神の相互作用）
第12回：記述統計、推測統計の復習	第12回：修士論文研究計画 先行研究まとめ
第13回：仮説を考える	第13回：修士論文研究計画 方法論の検討
第14回：方法論	第14回：修士論文研究計画 結果・分析方法
第15回：実験計画入門のまとめ	第15回：修士論文研究計画 全体的方向性討議

参考文献：適宜指示

成績評価方法：

レポート 20% 課題に対する適切性、専門知識の理解度

平常点評価 80% 専門知識の理解・応用度（プレゼンテーションを含む）

心理行動学演習（２） A（前期）・B（後期）

鈴木 晶夫

授業概要：各受講者の研究テーマを中心に、その研究の背景、問題、研究目的、研究計画、結果等について個人発表してもらい、討論する。

授業の到達目標：専門的基礎知識の説明ができること、研究方法の理解と適用ができること、批判的・創造的な論理思考を形成すること、心理行動学の実際応用と理解ができること、心理行動学に関わる価値観を形成することなどを授業の到達目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習全体の進め方	第1回：秋学期演習全体の進め方
第2回：修士論文の研究背景（研究史を中心に）	第2回：修士論文の研究史再考
第3回：修士論文の方法論（説明）	第3回：修士論文の方法論再考
第4回：修士論文の方法論（討議）	第4回：修士論文の方法論再考について討議
第5回：修士論文のデータ収集方法（説明）	第5回：修士論文のデータ収集方法再考

第6回：修士論文のデータ収集方法（討議）	第6回：修士論文のデータ収集方法再考について討議
第7回：修士論文のデータ解析 基礎	第7回：修士論文のデータ解析基礎編再考
第8回：修士論文のデータ解析 応用	第8回：修士論文のデータ解析応用編再考
第9回：修士論文のデータ解析 実践	第9回：修士論文のデータ解析全体的まとめ
第10回：修士論文の途中経過発表	第10回：修士論文の第一段階経過発表
第11回：研究目的についての討議	第11回：修士論文の第一段階経過発表についての討議
第12回：研究計画（概要）の発表	第12回：研究計画概要確認
第13回：研究計画（方法論）の発表	第13回：修士論文（方法論・データ解析・結果）の確認
第14回：研究計画（データ解析）の発表	第14回：修士論文（考察）の確認
第15回：研究計画（結果）の発表	第15回：修士論文の第二段階経過発表・討議

参考文献：適宜指示

成績評価方法：

レポート 20% 課題に対する適切性、専門知識の理解度

平常点評価 80% 専門知識の理解・応用度（プレゼンテーションを含む）

言語情報科学演習（１） A（前期）・B（後期）

菊池 英明

授業概要：音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデル構築およびその応用を目的として、音声言語メディアの特性について調査・分析を行う。具体的には、音声対話インタフェース、感情・態度の理解表出モデル、知的検索エンジンなどへの応用を想定して、音声言語メディアの特性について関連分野の知見を文献により調査したり、音声言語データを収集・解析して、その特性を明らかにする。定期的に進捗状況報告、輪講、発表などを行なう。

演習（１）と演習（２）を同一年次に履修してよい。

授業の到達目標：各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進めることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：研究計画の発表	第1回：研究計画の発表
第2回：進捗状況報告（１）	第2回：進捗状況報告（14）
第3回：進捗状況報告（２）	第3回：進捗状況報告（15）
第4回：進捗状況報告（３）	第4回：進捗状況報告（16）
第5回：進捗状況報告（４）	第5回：進捗状況報告（17）
第6回：進捗状況報告（５）	第6回：進捗状況報告（18）
第7回：進捗状況報告（６）	第7回：進捗状況報告（19）
第8回：進捗状況報告（７）	第8回：進捗状況報告（20）
第9回：進捗状況報告（８）	第9回：進捗状況報告（21）
第10回：進捗状況報告（９）	第10回：進捗状況報告（22）
第11回：進捗状況報告（10）	第11回：進捗状況報告（23）
第12回：進捗状況報告（11）	第12回：進捗状況報告（24）
第13回：進捗状況報告（12）	第13回：進捗状況報告（25）
第14回：進捗状況報告（13）	第14回：進捗状況報告（26）
第15回：中間発表	第15回：発表

成績評価方法：

平常点評価 100% 自身の研究の進捗管理状況と演習での議論参加状況を評価する。

言語情報科学演習（２） A（前期）・B（後期）

菊池 英明

授業概要：音声言語メディアの特性を踏まえたうえで、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築し、音声対話インタフェース、感情理解ロボット、

知的検索エンジンなどの実現を試みる。ソフトウェア・システム開発やデータベース構築などの一連の技術サイクルを通して、進捗状況報告、成果発表、デモンストレーション発表などを行なう。

演習（１）と演習（２）を同一年次に履修してよい。

授業の到達目標：各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進めることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第１回：研究計画の発表	第１回：研究計画の発表
第２回：進捗状況報告（１）	第２回：進捗状況報告（１４）
第３回：進捗状況報告（２）	第３回：進捗状況報告（１５）
第４回：進捗状況報告（３）	第４回：進捗状況報告（１６）
第５回：進捗状況報告（４）	第５回：進捗状況報告（１７）
第６回：進捗状況報告（５）	第６回：進捗状況報告（１８）
第７回：進捗状況報告（６）	第７回：進捗状況報告（１９）
第８回：進捗状況報告（７）	第８回：進捗状況報告（２０）
第９回：進捗状況報告（８）	第９回：進捗状況報告（２１）
第１０回：進捗状況報告（９）	第１０回：進捗状況報告（２２）
第１１回：進捗状況報告（１０）	第１１回：進捗状況報告（２３）
第１２回：進捗状況報告（１１）	第１２回：進捗状況報告（２４）
第１３回：進捗状況報告（１２）	第１３回：進捗状況報告（２５）
第１４回：進捗状況報告（１３）	第１４回：進捗状況報告（２６）
第１５回：中間発表	第１５回：発表

成績評価方法：

平常点評価 100% 自身の研究の進捗管理状況と演習での議論参加状況を評価する。

知識情報科学演習（１） A（前期）・B（後期）

松居 辰則

授業概要：

A（前期）

知識情報科学演習（１）では、A、Bを通して知識情報処理、感性情報処理、人工知能、認知科学、e-learningなど、本研究室において大学院の研究を進める上で基礎基本となる理論、技術、研究方法論の習得を目的とします。

本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探求し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究のテーマの例です。

・人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発（音楽情報処理）、・コンピュータ上のエージェント（疑似人間）やロボットと人間とのインタラクション、・コンピュータ上での何気ない操作（マウスやキーボード）からの人間の心理的な状態の推定方法、・人間が「飽きる」ことの数理モデルとシミュレーション、・人間の感じる「調和感」の生成メカニズム、・医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システム、・（うまい）授業、スポーツ、芸術におけるスキルに関する研究（スキルサイエンス）、・人間の「感性」の起源に関する研究、・遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズムに関する研究

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。したがって、知識情報科学演習（１）では、関連文献の講読（輪講）にみならず、研究を進める上で必要となる実験装置・実験器具の使用目的と操作方法の習得、実験を通しての様々な研究方法論の体験を目的とした実習をバランスよく配置します。

B（後期）

知識情報科学演習（１）B では知識情報科学演習（１）A に引き続き、知識情報処理、感性情報処理、人工知能、認知科学、e-learning など、本研究室において大学院の研究を進める上で基礎基本となる理論、技術、研究方法論の習得を目的とします。

本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探求し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究のテーマの例です。

・人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発（音楽情報処理）、・コンピュータの上のエージェント（疑似人間）やロボットと人間とのインタラクション、・コンピュータ上での何気ない操作（マウスやキーボード）からの人間の心理的な状態の推定方法、・人間が「飽きる」ことの数理モデルとシミュレーション、・人間の感じる「調和感」の生成メカニズム、・医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システム、・（うまい）授業、スポーツ、芸術におけるスキルに関する研究（スキルサイエンス）、・人間の「感性」の起源に関する研究、・遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズムに関する研究

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発見する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。したがって、知識情報科学演習（１）では、関連文献の講読（輪講）にみならず、研究を進める上で必要となる実験装置・実験器具の使用目的と操作方法の習得、実験を通しての様々な研究方法論の体験を目的とした実習をバランスよく配置します。

授業の到達目標：

A（前期）

春学期のなるべく早い段階で研究テーマを設定して研究を進めます。研究を進めるにあたってはグループ Meeting と個別指導になります。知識情報科学演習（１）では、修士課程での研究の大枠が確定することを目指します。

なお、大学院修士課程から研究室に配属される方は、次項目の授業計画にしたがって、知識情報科学演習（１）を進めます。そして、春学期中に研究テーマを設定します。

B（後期）

なるべく早い段階で研究テーマを設定して研究を進めます。研究を進めるにあたってはグループ Meeting と個別指導になります。知識情報科学演習（１）B の終了時には、修士課程での研究の大枠が確定することを目指します。

なお、大学院修士課程から研究室に配属される方は、次項目の授業計画にしたがって、知識情報科学演習（１）を進めます。そして、春学期中に研究テーマを設定します。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の進め方についての説明	第1回：実験器具の使用目的（５） 力覚デバイス（その１） 動作原理の説明と基本的な操作方法
第2回：科学技術文書の作成法（１） 論理的展開	第2回：実験器具の使用目的（６） 力覚デバイス（その２） 簡単な実験とデータ解析
第3回：科学技術文書の作成法（２） TeX のインストールと、TeX による文書作成	第3回：研究方法論の体験（１） 観察実験（その１） 実験計画と実験環境の整備
第4回：統計解析パッケージの利用（１） R のインストールと簡単な使い方	第4回：研究方法論の体験（２） 観察実験（その２） コンテンツ作成、評価実験と分析
第5回：統計解析パッケージの利用（２） R による統計解析、多変量解析（因子分析など）	第5回：研究方法論の体験（３） メディアの利用（その１） 仮想現実感（VR）システムの動作原理と使用方法

第6回：実データを用いての R による解析と TeX を用いてのレポート作成（１）	第6回：研究方法論の体験（４） メディアの利用（その２） 仮想現実感（VR）のコンテンツの作成と評価
第7回：実データを用いての R による解析と TeX を用いてのレポート作成（２）	第7回：輪講（１） 感性情報処理に関する文献（その１）
第8回：統計的手法の修得（１） 記述統計	第8回：輪講（２） 感性情報処理に関する文献（その２）
第9回：統計的手法の修得（２） 推測統計	第9回：輪講（３） 感性情報処理に関する文献（その３）
第10回：統計的手法の修得（３） 多変量解析（因子分析、クラスター分析 など）	第10回：輪講（４） 人工知能・認知科学に関する文献（その１）
第11回：統計的手法の修得（４） 心理尺度構成（信頼性、妥当性）、SD 法による印象評価 など）	第11回：輪講（５） 人工知能・認知科学に関する文献（その２）
第12回：実験器具の使用法（１） アイマーク・レコーダー（その１） 動作原理の説明と基本的な操作方法	第12回：輪講（６） 人工知能・認知科学に関する文献（その３）
第13回：実験器具の使用法（２） アイマーク・レコーダー（その２） 簡単な実験とデータ解析	第13回：輪講（７） 学習科学・e-learning に関する文献（その１）
第14回：実験器具の使用法（３） 脳波計測計（その１） 動作原理の説明と基本的な操作方法	第14回：輪講（８） 学習科学・e-learning に関する文献（その２）
第15回：実験器具の使用法（４） 脳波計測計（その２） 簡単な実験とデータ解析	第15回：輪講（９） 学習科学・e-learning に関する文献（その３）

教科書：特に指定しません。

参考文献：研究テーマにあわせて選択します。

成績評価方法：

平常点評価 20% 輪講や研究室の実験等への参加状況によって評価します。

そ の 他 80% 研究の進捗状況、大学院生としての振る舞い等を総合的に評価します。

知識情報科学演習（２） A（前期）・B（後期）

松居 辰則

授業概要：

A（前期）

知識情報科学演習（２）A では、知識情報科学演習（１）A B での成果を受けて、各自の研究テーマに関する研究進捗と関連論文等の紹介を中心に進めます。

本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探求し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究のテーマの例です。

（１）人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発（音楽情報処理）、（２）コンピュータ上のエージェント（疑似人間）やロボットと人間とのインタラクションに関する研究、（３）コンピュータ上での何気ない操作（マウスやキーボード）からの人間の心理的な状態の推定方法に関する研究、（４）人間が「飽きる」ことの数理モデルとシミュレーション、（５）人間の感じる「調和感」の生成メカニズムに関する研究、（６）人間の心理的要因を考慮した経済予測モデルの研究、（７）医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システムに関する研究、（８）（うまい）授業、スポーツ、芸術におけるスキルの表現、共有、伝承に関する研究（スキルサイエンス）、（９）学習者の「やる気」や「モチベーション」を維持するための e-learning システムや教材開発、（１０）人間の「感性」の起源に関する研究、（１１）遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズムに関する研究

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデル

として表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。

B（後期）

知識情報科学演習（2）Bでは、知識情報科学演習（2）Aでの成果を受けて、各自の研究テーマに関する研究進捗と関連論文等の紹介を中心に進めます。

本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探求し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究のテーマの例です。

（1）人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発（音楽情報処理）、（2）コンピュータ上のエージェント（疑似人間）やロボットと人間とのインタラクションに関する研究、（3）コンピュータ上での何気ない操作（マウスやキーボード）からの人間の心理的な状態の推定方法に関する研究、（4）人間が「飽きる」ことの数理モデルとシミュレーション、（5）人間の感じる「調和感」の生成メカニズムに関する研究、（6）人間の心理的要因を考慮した経済予測モデルの研究、（7）医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システムに関する研究、（8）（うまい）授業、スポーツ、芸術におけるスキルの表現、共有、伝承に関する研究（スキルサイエンス）、（9）学習者の「やる気」や「モチベーション」を維持するための e-learning システムや教材開発、（10）人間の「感性」の起源に関する研究、（11）遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズムに関する研究

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。

授業の到達目標：基本的には知識情報科学演習（1）の継続になります。各自の研究を推進し、成果を出すことを目指します。関連学会の研究会、全国大会での口頭発表ができることが望ましいです。

なお、大学院修士課程から研究室に配属された方は、次項の授業計画に従って演習を進めます。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習（2）の進め方や評価に関するガイダンス	第1回：輪講・文献紹介（1） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第2回：輪講・文献紹介（1） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第2回：輪講・文献紹介（2） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第3回：輪講・文献紹介（2） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第3回：輪講・文献紹介（3） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第4回：研究進捗発表（1） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第4回：研究進捗発表（1） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第5回：研究進捗発表（2） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第5回：研究進捗発表（2） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第6回：輪講・文献紹介（3） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第6回：輪講・文献紹介（4） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第7回：輪講・文献紹介（4） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第7回：輪講・文献紹介（5） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第8回：輪講・文献紹介（5） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第8回：輪講・文献紹介（6） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第9回：研究進捗発表（3） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第9回：研究進捗発表（3） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第10回：研究進捗発表（4） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第10回：研究進捗発表（4） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

第11回：輪講・文献紹介（６） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第11回：輪講・文献紹介（７） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第12回：輪講・文献紹介（７） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第12回：輪講・文献紹介（８） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第13回：輪講・文献紹介（８） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第13回：輪講・文献紹介（９） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第14回：研究進捗発表（５） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第14回：研究進捗発表（５） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第15回：研究進捗発表（６） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第15回：研究進捗発表（６） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

教科書：特に定めません。

参考文献：研究の進捗に応じて選定します。

成績評価方法：

平常点評価 20% 輪講や研究室の実験等への参加状況によって評価します。

そ の 他 80% 研究の進捗状況、大学院生としての振る舞い等を総合的に評価します。

人間生体機能動態学演習（１） A（前期）・B（後期）

宮崎 正己

授業概要：本授業では人間と環境を中心とした労働生理学的な観点から進めていく。とりわけ人間の諸機能と日常生活に関連した文献等を選択し論説をおこなっていく。また、感性工学に関する文献も取り扱う。

授業の到達目標：人間工学や感性工学の分野における必要性について労働生理学的な観点から理解ができることが目標となる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：授業の方針	第1回：暑熱下における適正な作業とは
第2回：労働生理学とは	第2回：漁業における労働生理学
第3回：労働生理学の生物学的な意義	第3回：圧作業下における生体反応
第4回：労働生理学の分野に存在する問題について	第4回：圧作業下における生体への影響
第5回：日常生活における労働生理学	第5回：減圧症とは
第6回：身体作業能の評価と身体作業負荷	第6回：宇宙における人の生体への影響
第7回：作業環境の評価法	第7回：宇宙における人の滞在
第8回：精神的あるいは、感情的なストレス	第8回：人の作業能
第9回：作業ストレス	第9回：人体測定とは
第10回：マネジメントのストレス	第10回：人の作業域
第11回：シフト作業とサーカディアンリズム	第11回：ひとの筋肉活動
第12回：航空機制御におけるストレス	第12回：筋肉活動の定量化
第13回：工場における熱ストレス	第13回：疲労とは
第14回：寒冷条件下の於ける人の生体反応	第14回：作業下の於ける疲労回復
第15回：暑熱下環境下における人の生体反応	第15回：人のパフォーマンス研究について

成績評価方法：

レポ ー ト 15% レポートによる評価

平常点評価 85% 平常点による評価

人間生体機能動態学演習（２） A（前期）・B（後期）

宮崎 正己

授業概要：本授業では、人間と環境を中心とした労働生理学的な観点から、人間の健康に焦点をあてて、授業を進めていく。また、快適性の追求に関しても言及する予定である。

授業の到達目標：本授業では人間における感性を人間工学及び感性工学の関連分野からのより深い理解をすることが到達目標である。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：日常生活におけるストレス	第1回：感性情報処理のまとめ
第2回：唾液から、ストレスが測れるか？	第2回：生活者にとっての商品づくりとは
第3回：酸化還元電位とは	第3回：感性とは何か
第4回：心電図からみたストレスの評価方法について	第4回：感性と商品開発の実例（1）
第5回：水とストレス	第5回：感性と商品開発の実例（2）
第6回：表面微小血管反応とは	第6回：感性と住宅開発
第7回：感性情報処理へのアプローチ	第7回：感性と自動車
第8回：感性と知性の関係	第8回：感性工学手法（1）
第9回：触覚と感性情報	第9回：感性工学手法（2）
第10回：音が導く感性反応	第10回：感性工学手法（3）
第11回：動きにおける感性の分析	第11回：感性工学の手順
第12回：音楽演奏における感性情報	第12回：感性工学の応用事例（1）
第13回：間の感性工学的解明	第13回：感性工学の応用事例（2）
第14回：顔の印象学について	第14回：感性による品質管理とは
第15回：快適性の追求とは	第15回：感性による品質管理の実例

成績評価方法：

レポート 15% レポートによる評価

平常点評価 85% 平常点による評価

感覚情報処理学演習（1） A（前期）

百瀬 桂子

授業概要：感覚系を脳活動により評価する方法の1つとして、脳波などの生体信号を評価するための技術を、文献輪読を通して学ぶ。生体信号特有の不規則性・非線形性を評価するために、まず不規則信号の統計学的取り扱いを学び、さらに特定の感覚応答信号を対象としてとりあげ、その信号処理技術を理解する。

授業の到達目標：各自の研究計画を実践するうえで必要な生体信号計測について、その信号の特性と解析方法を理解し、研究遂行に必要な計測と分析が行えるようになる。

授業計画：

第1回：演習の概要と進め方	第9回：研究計画に関する文献講読（3）
第2回：関心のある生体信号計測に関する討議	第10回：生体信号処理実習（1）
第3回：生体信号計測の基礎（1）	第11回：生体信号処理実習（2）
第4回：生体信号計測の基礎（2）	第12回：研究計画実施状況の報告と討議（1）
第5回：生体信号処理の基礎（1）	第13回：生体信号処理実習（3）
第6回：生体信号処理の基礎（2）	第14回：生体信号処理実習（4）
第7回：研究計画に関する文献講読（1）	第15回：研究計画実施状況の報告と討議（2）
第8回：研究計画に関する文献講読（2）	

参考文献：講義時に必要に応じて紹介する予定。

成績評価方法：

平常点評価 100% 文献講読については、以下の点を評価します。

- ・担当箇所の理解度と発表内容および説明方法、およびそれらへの取り組みの積極性
- ・担当者の発表内容に基づく議論への積極性と貢献度

実習については、内容の理解度と取り組みの積極性と貢献度を評価します。

各自の研究テーマについては、研究テーマへの理解度と、取り組みの積極性、成果について総合的に評価します。

感覚情報処理学演習（2） A（前期）

百瀬 桂子

授業概要：感覚系の情報処理過程に関して、コンピュータ技術を活用した評価法とその評価情報の応用・活用について、最近の研究論文輪読と討議を通して、具体的な評価対象や方法論に関する研究を学ぶ。これによって、情報通信技術の生体情報の測定への応用の現状と新たな可能性を論考する。

授業の到達目標：関心研究領域の研究論文を読んで適切に理解できるようになる。

関心研究領域の最近の研究状況を理解する。

授業計画：

第1回：演習の概要と進め方	第9回：研究計画に関する討議（3）
第2回：関心のある研究領域に関する討議	第10回：関心研究領域の文献輪読（5）
第3回：関心研究領域の文献輪読（1）	第11回：関心研究領域の文献輪読（6）
第4回：関心研究領域の文献輪読（2）	第12回：研究計画実施状況の報告と討議（1）
第5回：関心研究領域の文献輪読（3）	第13回：関心研究領域の文献輪読（7）
第6回：関心研究領域の文献輪読（4）	第14回：関心研究領域の文献輪読（8）
第7回：研究計画に関する討議（1）	第15回：研究計画実施状況の報告と討議（2）
第8回：研究計画に関する討議（2）	

参考文献：講義時に必要に応じて紹介する予定。

成績評価方法：

平常点評価 100% 文献輪読については、以下の点を評価します。

- ・担当箇所の理解度と発表内容および説明方法、およびそれらへの取り組みの積極性
- ・担当者の発表内容に基づく議論への積極性と貢献度

各自の研究テーマについては、研究テーマへの理解度と、取り組みの積極性、成果について総合的に評価します。

生態心理学演習（1） A（前期）・B（後期）

三嶋 博之

授業概要：実験論文を読み、討議することを通じて、ギブソン生態心理学の基本的アイディアについて学習するとともに、実証的な研究を自ら発想し遂行するための基礎技術（論文投稿の方法や、実験機材の使用法等）について学習する。実際に研究を遂行していくために必要な種々の実践的知識を吸収するため、グループでの追試研究を行う。

授業の到達目標：生態心理学における実験研究を遂行するための基礎的な能力を身につける。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：講義の概要と進め方	第1回：輪読（10）（ダイナミックタッチ実験論文）
第2回：輪読（1）（ダイナミックタッチの理論）	第2回：輪読（11）（ダイナミックタッチ実験論文）
第3回：輪読（2）（ダイナミックタッチの理論）	第3回：輪読（12）（ダイナミックタッチ実験論文）
第4回：輪読（3）（ダイナミックタッチの理論）	第4回：輪読（13）（ダイナミックタッチ実験論文）
第5回：輪読（4）（ダイナミックタッチの理論）	第5回：輪読（14）（ダイナミックタッチ実験論文）
第6回：輪読（5）（ダイナミックタッチの理論）	第6回：輪読（15）（ダイナミックタッチ実験論文）
第7回：輪読（6）（ダイナミックタッチ実験論文）	第7回：ダイナミックタッチ実験の追試（4）：機材の検討
第8回：輪読（7）（ダイナミックタッチ実験論文）	第8回：ダイナミックタッチ実験の追試（5）：計測法の検討
第9回：輪読（8）（ダイナミックタッチ実験論文）	第9回：ダイナミックタッチ実験の追試（6）：実験の実施
第10回：輪読（9）（ダイナミックタッチ実験論文）	第10回：ダイナミックタッチ実験の追試（7）：実験の実施
第11回：ダイナミックタッチ実験の追試（1）：機材の検討	第11回：ダイナミックタッチ実験の追試（8）：分析
第12回：ダイナミックタッチ実験の追試（2）：実験	第12回：実験データの検討会（3）：結果のまとめ
第13回：ダイナミックタッチ実験の追試（3）：分析	第13回：実験データの検討会（4）：課題の検討
第14回：実験データの検討会（1）：結果のまとめ	第14回：仮説の検討
第15回：実験データの検討会（2）：課題の検討	第15回：レポート課題と解説

成績評価方法：

平常点評価 100% 各個人に割り当てられたテーマに関する発表内容、議論およびグループワークにおける貢献度について評価します。

備考・関連 URL：修士課程 1 年生を対象とする。

生態心理学演習（２） A（前期）・B（後期）

三嶋 博之

授業概要：ギブソンおよびその後継者たちによって展開されている生態心理学的研究のうち、受講者の修士論文課題と関連した文献を過去から現在まで網羅的に収集し、検討を加える。また、必要に応じて、関連の統計的手法や、機材、ソフトウェアの使用法について学ぶ。併せて、APA 形式の論文書式について学習する。

授業の到達目標：生態心理学における実験研究を自律的に遂行し、研究論文としてまとめるための基礎的な能力を身につける。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第 1 回：講義の概要と進め方	第 1 回：輪読（10）（生態心理学実験論文）
第 2 回：輪読（１）（APA Style に関して）	第 2 回：輪読（11）（生態心理学実験論文）
第 3 回：輪読（２）（APA Style に関して）	第 3 回：輪読（12）（生態心理学実験論文）
第 4 回：輪読（３）（APA Style に関して）	第 4 回：輪読（13）（生態心理学実験論文）
第 5 回：輪読（４）（APA Style に関して）	第 5 回：輪読（14）（生態心理学実験論文）
第 6 回：輪読（５）（生態心理学実験論文）	第 6 回：輪読（15）（生態心理学実験論文）
第 7 回：輪読（６）（生態心理学実験論文）	第 7 回：輪読（16）（生態心理学実験論文）
第 8 回：輪読（７）（生態心理学実験論文）	第 8 回：輪読（17）（生態心理学実験論文）
第 9 回：輪読（８）（生態心理学実験論文）	第 9 回：時系列データの解析演習（１）：周波数解析
第10回：輪読（９）（生態心理学実験論文）	第10回：時系列データの解析演習（２）：自己相関
第11回：統計演習（１）：分散分析	第11回：時系列データの解析演習（３）：RQA
第12回：統計演習（２）：分散分析	第12回：時系列データの解析演習（４）：RQA
第13回：統計演習（３）：分散分析	第13回：時系列データの解析演習（５）：DFA
第14回：統計演習（４）：分散分析	第14回：時系列データの解析演習（６）：DFA
第15回：レポート課題と解説（１）	第15回：レポート課題と解説（２）

成績評価方法：

平常点評価 100% 個人に割り当てられたテーマに関する発表内容、議論およびグループワークにおける貢献度について評価します。

備考・関連 URL：本演習は修士課程 2 年生を対象とする。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

教育実践学演習（１） A（前期）・B（後期）

浅田 匡

授業概要：

A（前期）

教育実践を対象とした研究に関して、アクション・リサーチに焦点をあて、アクション・リサーチの理論的背景について論考する。アクション・リサーチは、そのバックグラウンドなる考え方が、知識論、ヒューマニスティック・サイコロジー、システム論等、多岐にわたり、教育におけるアクション・リサーチ研究の変遷から、今後の実践研究の方向性も論及する。中心となる文献は、The Sage Handbook of Action Research 2nd (ed.)を用いる。また、必要に応じて関連する文献を講読する。

B（後期）

教育実践を対象としたアクション・リサーチ研究に関して、The Sage Handbook of Educational Action Research を講読しながら、教育研究におけるアクション・リサーチについて論考する。本書は、欧米の教育研究で注目された文献であり、教師教育をはじめとする実践研究の方向性を示しているため、近年の研究動向を踏まえたい。また、教育におけるアクション・リサーチ研究の変遷から、今後の実践研究の方向性も論及する。必要に応じて関連する文献を講読する。

授業の到達目標：

A（前期）

1. アクション・リサーチの概要を理解する。
2. アクション・リサーチの理論的背景である、J. ハーバマス、ソフト・システム論、経験学習理論など、アクション・リサーチに関する理論を理解する。
3. それらの理論的枠組みを前提とし、日本において、教師教育でのアクション・リサーチの日本型モデルを考えることができる。

B（後期）

1. 教育のアクション・リサーチの方法論を理解する。
2. 知識創造、職能発達とアクション・リサーチとの関係を理解する。
3. 教師の人間の成長とアクション・リサーチとの関係について理解する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：アクション・リサーチとは何か アクション・リサーチのモデルを概説する	第1回：教育理論とアクション・リサーチ アクション・リサーチによる教育理論構築について概説する
第2回：参加型アクション・リサーチ 参加型アクション・リサーチの考え方を概説する	第2回：教師研究 教師研究としてのアクション・リサーチについて概説する
第3回：批判的理論とアクション・リサーチ 批判的理論とアクション・リサーチとの関連を概説する	第3回：対話による探求 協働的探究としての対話について概説する
第4回：システム思考とアクション・リサーチ アクション・リサーチにおけるシステム思考の役割を概説する	第4回：批判的アプローチ アクション・リサーチにおける批判的アプローチについて概説する
第5回：社会的構成主義とアクション・リサーチ 社会的構成主義の考え方がアクション・リサーチに果たす役割を概説する	第5回：アクション・リサーチと授業研究 アクション・リサーチとしての授業研究の特徴を概説する
第6回：Living Inquiry アクション・リサーチとしてのLiving Inquiry	第6回：アクション・リサーチと教育改革 教育改革の担い手としての教師によるアクション・リサーチを概説する
第7回：Appreciative Inquiry を概説する アクション・リサーチとしての価値を実現する探究を概説する	第7回：アクション・リサーチとリーダーシップ 教師によるアクション・リサーチとリーダーシップの関係について概説する
第8回：Clinical Inquiry アクション・リサーチとしての臨床的探究を概説する	第8回：職能発達とアクション・リサーチ アクション・リサーチと職能発達および学校システム改革との関係を概説する
第9回：Action Science アクション・リサーチとしての行動科学を概説する	第9回：アクション・リサーチによる教師の協働のマネジメント 教師の協働をいかにマネジメントするかについて概説する
第10回：アクション・ラーニング アクション・リサーチとしてのアクション・ラーニングを概説する	第10回：Narrative Inquiry ナラティブによる探究とアクション・リサーチとの相違を概説する
第11回：History Learning アクション・リサーチとしての学習歴を概説する	第11回：自己開発とアクション・リサーチ アクション・リサーチによる自己開発を仏教の考え方を踏まえて概説する
第12回：Co-operative Inquiry アクション・リサーチとしての協働探究を概説する	第12回：複雑性とアクション・リサーチ 複雑性の概念とアクション・リサーチとの関係を概説する

第13回：研究倫理とアクション・リサーチ アクション・リサーチにおける研究倫理の問題を概説する	第13回：実存主義とアクション・リサーチ アクション・リサーチにおいて実存主義の考え方が果たす役割を概説する
第14回：間主観的アプローチとアクション・リサーチ 間主観的アプローチを概説し、アクション・リサーチとの関係を論考する	第14回：アクション・リサーチとクロスカルチャー研究 異文化交流におけるアクション・リサーチを概説する
第15回：日本型アクション・リサーチ 日本型アクション・リサーチをこれまでの研究レビューから考える	第15回：アクション・リサーチにおける主体の問題 アクション・リサーチにおける主体性の確立について概説する

教科書：

A（前期）

The Sage Handbook of Action Research 2nd (ed.)

B（後期）

The Sage Handbook of Educational Action Research

成績評価方法：

レポート 50% 学習内容の習得レベルと論理性

平常点評価 50% レジュメ、討論への参加

備考・関連 URL：研究共同校の教員との合同講義となる場合がある。

教育実践学演習（2） A（前期）・B（後期）

浅田 匡

授業概要：

A（前期）

教育実践学が研究対象とする、教師の知識研究、教師の信念研究、教師の思考様式、など教師の思考過程に関して、マネジメント学習の観点から論及し、これからの教師及び授業研究の研究課題を探究する。また、学校においてはスクールリーダーシップが求められ、特にスクールリーダーの育成が急務である。学校におけるリーダーシップに関しても学習や発達の観点から考察する。基本文献は、The Sage Handbook of Management Learning, Education, and Development を用いる。必要に応じて関連する文献を講読する。

B（後期）

教師の成長発達において、メンタリングとコーチングの重要性が指摘されて久しい。本講義では、メンタリングとコーチングに関して基本的な理論と実践研究を取り上げ、メンタリングとコーチングが現職教育あるいは教員養成において果たす役割を論考する。また、教師教育においてクロス・カルチャラル研究が進められていることを踏まえて、e-mentoring についても論考する。基本文献は、The Blackwell Handbook of Mentoring を用いる。必要に応じて関連する文献を講読する。

授業の到達目標：

A（前期）

1. 「場」概念や組織マネジメントといったことが教師教育においても重要性が増していることから、組織としての知性に関する理論的枠組みと最新の研究動向を理解する。
2. 学校組織と企業組織の共通性と差異を明確にし、学校組織における教師の知識獲得および組織の知性の開発への研究アプローチを理解する。

B（後期）

1. メンタリングの定義について理解する。
2. さまざまな組織におけるインフォーマルおよびフォーマルなメンタリング関係の特徴について理解する。
3. メンタリングの効果について理解する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：マネジメント学習における知識の特徴 マネジメント学習における知識と知識獲得の特徴を概説する	第1回：メンタリングの定義 メンタリングの定義について概説する

第2回：経験学習 経験学習理論について概説する	第2回：高等教育におけるメンタリング 高等教育におけるメンタリングの理論的方法論的問題を概説する
第3回：集団学習と知識の転移 集団学習における知識の転移のあり方について概説する	第3回：仕事場におけるメンタリング 仕事場におけるメンタリングの理論的方法論的問題を概説する
第4回：反省的实践 反省的实践とその組織化について概説する	第4回：メンタリング関係 メンタリング関係の理論的方法論的問題を概説する
第5回：批判的マネジメント教育 批判的なマネジメント教育について概説する	第5回：インフォーマルなメンタリング関係 インフォーマルなメンタリング関係に関する研究を概観する
第6回：協働的学習 協働的学習について概説する	第6回：フォーマルなメンタリング・プログラム（1）高等教育におけるフォーマルなメンタリング・プログラムについて概説する
第7回：リーダーの養成 EQの教授と情緒的スキルのトレーニングについて概説する	第7回：フォーマルなメンタリング・プログラム（2）仕事場におけるフォーマルなメンタリング・プログラムについて概説する
第8回：マネジメント教育における遠隔教育 マネジメント教育における遠隔学習と Web-Based training について概説する	第8回：メンタリングの効果（1）高等教育におけるメンタリングの効果について概説する
第9回：学習中心のコース・デザイン 学習中心のコース・デザインについて概説する	第9回：メンタリングの効果（2）仕事場におけるメンタリングの効果について概説する
第10回：マネジメント教育における認知スタイルと学習ストラテジー マネジメント教育における認知スタイルと学習ストラテジーについて概説する	第10回：教えることを学ぶこととメンタリングのモデル Learning to teach とメンタリング・モデルとについて概説する
第11回：Project-based Learning アプローチ プロジェクト型の学習アプローチについて概説する	第11回：教師の専門性とメンタリング・モデル 教師の専門性とメンタリング・モデルとについて概説する
第12回：リフレキシビリティと学習 リフレキシビリティと学習との関係について概説する	第12回：教授モデルとメンタリングへの適用 教授モデルのメンタリングへの適用について概説する
第13回：マネジメント教育におけるアクション・ラーニング アクション・ラーニングについて概説する	第13回：反省的メンタリング 反省的メンタリングについて概説する
第14回：マネジメントにおけるメンタリングとコーチング マネジメントにおけるメンタリングとコーチングについて概説する	第14回：学校におけるメンタリング メンター・ティーチャーについて概説する
第15回：実践共同体 実践共同体について概説する	第15回：メンタリングにおける新しい方向 メンタリングの新しい研究動向について考える

教科書：The Sage Handbook of Management Learning, Education, and Development

成績評価方法：

レポート 50% 学習内容の習得レベルと論理性

平常点評価 50% レジュメ、討論への参加

備考・関連 URL：学校との共同講義を一部取り入れ、小学校の教員との合同講義となる場合がある。また、これらの論考に基づき、共同校の問題解決プログラムの開発などと連携する場合がある。

情報意味論演習（1） A（前期）・B（後期）

岩坪 秀一

授業概要：アンケート調査の集計結果及び入学者選抜試験成績データを素材に、本来の評価目的を達成出来な

かった例を幾つか取り上げて、その欠点がどこにあったかを探るための統計的方法を紹介する。

授業の到達目標：アンケート調査の欠点を探る統計的方法を理解し応用していく力を養うことを目標にする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方	第1回：事例研究（3）（テスト項目の信頼性）
第2回：輪読（1）（意味と情報）	第2回：事例研究（4）（テスト項目の信頼性）
第3回：輪読（2）（意味と情報）	第3回：事例研究（5）（調査項目の妥当性）
第4回：輪読（3）（情報の偏り）	第4回：事例研究（6）（調査項目の妥当性）
第5回：輪読（4）（情報の偏り）	第5回：事例研究（7）（調査項目の妥当性）
第6回：輪読（5）（調査法）	第6回：事例研究（8）（調査項目の妥当性）
第7回：輪読（6）（調査法）	第7回：事例研究（9）（調査項目の信頼性）
第8回：輪読（7）（サンプリング）	第8回：事例研究（10）（調査項目の信頼性）
第9回：輪読（8）（サンプリング）	第9回：事例研究（11）（調査の設計）
第10回：輪読（9）（調査項目の設計）	第10回：事例研究（12）（調査の設計）
第11回：輪読（10）（調査項目の設計）	第11回：事例研究（13）（調査票作成）
第12回：輪読（11）（調査分析法）	第12回：事例研究（14）（調査票作成）
第13回：輪読（12）（調査分析法）	第13回：事例研究（15）（調査データの収集）
第14回：事例研究（1）（テスト項目の妥当性）	第14回：事例研究（16）（調査データの分析）
第15回：事例研究（2）（テスト項目の妥当性）	第15回：レポート課題と解説

成績評価方法：

レポート 60% 課題の取り組みに見られる基本的理解度を評価する。

平常点評価 40% 簡単な演習問題を出して到達度を評価する。

情報意味論演習（2） A（前期）・B（後期）

岩坪 秀一

授業概要：情報意味論（1）に基づいて、実際にアンケート調査を計画、実施し、その統計的分析結果から調査票の全面的検討を行う。

授業の到達目標：調査票の作成を疎かにしない態度を養い、信頼性、妥当性の備わった調査票を作成するための基本的能力を養成することを目指す。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の概要と進め方	第1回：実習（13）（予備調査2データの分析結果の検討）
第2回：輪読（1）（調査法）	第2回：実習（14）（調査項目改定）
第3回：輪読（2）（調査分析法）	第3回：実習（15）（調査項目決定）
第4回：実習（1）（調査設計）	第4回：実習（16）（本調査の準備）
第5回：実習（2）（調査設計）	第5回：実習（17）（本調査の実施）
第6回：実習（3）（調査項目作成）	第6回：実習（18）（本調査データの編集）
第7回：実習（4）（調査項目作成）	第7回：実習（19）（本調査データの分析）
第8回：実習（5）（予備調査1）	第8回：実習（20）（本調査データの分析）
第9回：実習（6）（予備調査1データの分析）	第9回：実習（21）（本調査データ分析結果の検討）
第10回：実習（7）（予備調査1データの分析結果の検討）	第10回：実習（22）（本調査データ分析結果の検討）
第11回：実習（8）（調査項目改定）	第11回：実習（23）（本調査データ分析結果の検討）
第12回：実習（9）（調査項目案1作成）	第12回：実習（24）（報告書作成）
第13回：実習（10）（予備調査2の準備）	第13回：実習（25）（報告書作成）
第14回：実習（11）（予備調査2の実施）	第14回：反省と課題
第15回：実習（12）（予備調査2データの分析）	第15回：レポート課題と解説

成績評価方法：

レポート 60% 課題の取り組みに見られる基本的理解度を評価する。

平常点評価 40% 簡単な演習問題を出して到達度を評価する。

情報コミュニケーション科学演習（１） A（前期）・B（後期）

金子 孝夫

授業概要：コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを旨とし、マルチメディア教育の方法とその効果について実験・調査検討を行う。なお、演習（２）の授業計画との間で、授業の順番を入れかえることがある。

授業の到達目標：修士論文研究をスタートできることを到達目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：演習の内容紹介、自己紹介、担当決めなど	第1回：授業ガイダンス
第2回：輪読（１） 教科書の第1章	第2回：進路に関する懇談会
第3回：輪読（３） 教科書の第3章	第3回：輪読（１） 1番目の受講生が選んだ論文
第4回：輪読（５） 教科書の第5章	第4回：輪読（３） 3番目の受講生が選んだ論文
第5回：輪読（７） 教科書の第7章	第5回：輪読（５） 5番目の受講生が選んだ論文
第6回：実習課題（１）の提示	第6回：輪読（７） 7番目の受講生が選んだ論文
第7回：実習（Flashコンテンツの制作） 素材の準備	第7回：研究内容の検討（１）
第8回：実習（Flashコンテンツの制作） 全体の制作	第8回：研究内容の検討（３） 研究テーマ案の決定
第9回：実習課題（１）の発表と提出	第9回：研究テーマに関する実験調査（１）
第10回：住まいの概略設計（１）	第10回：研究テーマに関する実験調査（３） データのまとめ
第11回：実習課題（２）の提示	第11回：論文形式のレポート作成（１）
第12回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの検討	第12回：論文形式のレポート作成（３） 内容の推敲
第13回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの作成	第13回：発表用スライド作成（１）
第14回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの改良	第14回：発表用スライド作成（３） 発表の練習
第15回：実習課題（２）の発表と提出	第15回：発表会（１）

教科書：輪読で使用する教科書は授業の中で指定する。

参考文献：授業の中で紹介する。

成績評価方法：

A（前期）

その他 100% 輪読、実習課題、発表などにより評価する。

B（後期）

その他 100% 輪読、論文形式のレポート、発表により評価する。

情報コミュニケーション科学演習（２） A（前期）・B（後期）

金子 孝夫

授業概要：コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを旨とし、マルチメディアコンテンツの活用法とその効果について実験・調査検討を行う。なお、演習（１）の授業計画との間で授業の順番を入れかえることがある。

授業の到達目標：修士論文研究をスタートできることを到達目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：実験室の見学など	第1回：研究テーマの相談
第2回：輪読（2） 教科書の第2章	第2回：進路に関する懇談会
第3回：輪読（4） 教科書の第4章	第3回：輪読（2） 2番目の受講生が選んだ論文
第4回：輪読（6） 教科書の第6章	第4回：輪読（4） 4番目の受講生が選んだ論文
第5回：輪読（8） 教科書の第8章	第5回：輪読（6） 6番目の受講生が選んだ論文
第6回：実習課題（1）の提示	第6回：輪読（8） 8番目の受講生が選んだ論文
第7回：実習（Flash コンテンツの制作） 素材の準備	第7回：研究内容の検討（2）
第8回：実習（Flash コンテンツの制作） 全体の制作	第8回：研究テーマの決定
第9回：実習（1）の発表と提出	第9回：研究テーマに関する実験調査（2）
第10回：住まいの概略設計（2）	第10回：研究テーマに関する実験調査（4） データのまとめ
第11回：実習課題（2）の提示	第11回：論文形式のレポート作成（2）
第12回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの検討	第12回：論文形式のレポート提出
第13回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの作成	第13回：発表用スライドの作成（2）
第14回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの改良	第14回：発表用スライドの提出
第15回：実習課題（2）の発表と提出	第15回：発表会（2）

教科書：

A（前期）

輪読で使用する教科書は授業の中で指定する。

B（後期）

輪読で使用する論文は授業の中で決定する。

参考文献：授業の中で紹介する。

成績評価方法：

A（前期）

そ の 他 100% 輪読、実習課題、発表により評価する。

B（後期）

そ の 他 100% 輪読、論文形式のレポート、発表により評価する。

ネットワーク情報システム学演習（1） A（前期）・B（後期）

金 群

授業概要：情報処理の基礎理論および高度な応用技術について学ぶ。人間中心のネットワーク情報システムをテーマに、（1）ネットワーク情報システムの基盤をなすデータベースの応用技術、（2）利用者の振る舞いに適応するユーザ・インターフェース、（3）誰もが簡単に利用できる安全・安心な情報環境、（4）人間中心の Web 情報探索と共有活用、（5）高度な情報通信技術による e-ラーニング支援環境の構築などを、受講生の関心と興味に応じて一部選択し、具体例を通して講義を進める。

授業の到達目標：演習（2）とあわせて、ネットワーク情報システムに関する新たなモデル手法とフレームワーク、構築法などを理解し、研究遂行上必要な基礎知識と関連する基盤技術および問題発見・解決力を身につける。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：イントロダクション（前期授業の概要と進め方）	第1回：イントロダクション（後期授業の概要と進め方）
第2回：データベース応用技術の基礎	第2回：Web 情報探索と共有活用の基礎
第3回：高度なデータベース応用技術	第3回：Web 情報探索と共有活用の関連技術
第4回：高度なウェブベースデータベース応用技術	第4回：Web 情報探索と共有活用（演習）

第5回：ユーザ・インターフェース技術の基礎	第5回：e-ラーニング支援技術の基礎
第6回：高度なユーザ・インターフェース技術	第6回：高度なe-ラーニング支援技術
第7回：高度なウェブ・ユーザ・インターフェース技術	第7回：e-ラーニング支援技術の活用
第8回：前期中間まとめ・討論会	第8回：後期中間まとめ・討論会
第9回：安全・安心な情報環境の基礎	第9回：情報通信技術の最新動向と展望
第10回：安全・安心な情報環境の構築	第10回：情報システム学研究の最新動向と展望
第11回：安全・安心な情報環境の応用	第11回：情報システム技術の最新動向と展望
第12回：最新動向紹介・輪読・討論会（データベース応用技術）	第12回：最新動向の紹介と輪読・討論会（Web 情報探索と共有活用）
第13回：最新動向紹介・輪読・討論会（ユーザ・インターフェース技術）	第13回：最新動向の紹介と輪読・討論会（e-ラーニング支援技術）
第14回：最新動向紹介・輪読・討論会（安全・安心な情報環境）	第14回：最新動向の紹介と輪読・討論会（ネットワーク情報システム学の研究）
第15回：前期総まとめ・討論会	第15回：後期総まとめ・討論会

教科書：とくに指定しないが、必要に応じて随時参考文献や資料などを指定するか配る。

参考文献：授業中に紹介

成績評価方法：

レポート 80% 輪読・討論会の状況、課題レポートなど総合して評価する

その他 20% 出席状況

ネットワーク情報システム学演習（２） A（前期）・B（後期）

金 群

授業概要：サービス・コンピューティングなど最新のネットワーク技術について学ぶ。コンピュータと人間が協調できるネットワーク情報システムをテーマに、（１）情報を分散して蓄積、管理、利用するための分散データベース技術、（２）何時でも何処でも誰もがアクセスできるユビキタス・ネットワーク環境とそれを利用した知識情報共有・活用支援、（３）ライフタイムにわたる情報マネジメント、（４）時間・空間を越えたコラボレーションを円滑にするグループウェア技術とそれを利用した協調作業支援、（５）情報弱者を含む多様な利用者を対象とした Web サービス・ユニバーサルサービスなどを、受講生の関心と興味に応じて一部選択し、具体例を通して講義を進める。

授業の到達目標：演習（１）とあわせて、ネットワーク情報システムに関する最新の技術動向と展望を理解し、遂行上必要な要素技術と研究方法論を習得する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：イントロダクション（前期授業の概要と進め方）	第1回：イントロダクション（後期授業の概要と進め方）
第2回：分散データベース技術の基礎	第2回：グループウェア技術の基礎
第3回：高度な分散データベース技術	第3回：協調作業支援
第4回：分散データベース技術の応用	第4回：グループウェア技術による協調作業支援の実際
第5回：ユビキタス・ネットワーク技術の基礎	第5回：ユニバーサル Web サービスの基礎
第6回：高度なユビキタス・ネットワーク技術	第6回：ユニバーサル Web サービスのモデル
第7回：ユビキタス・ネットワーク技術の応用	第7回：ユニバーサル Web サービスの応用
第8回：前期中間まとめ・討論会	第8回：後期中間まとめ・討論会
第9回：情報マネジメントの基礎	第9回：ワイヤレスネットワーク技術の最新動向と展望
第10回：情報マネジメントシステム	第10回：モバイルネットワーク技術の最新動向と展望
第11回：情報マネジメントシステムの応用	第11回：センサーネットワーク技術の最新動向と展望
第12回：最新動向紹介・輪読・討論会（分散データベース技術）	第12回：最新動向紹介と輪読・討論会（グループウェア技術と協調作業支援）

第13回：最新動向紹介・輪読・討論会（ユビキタス・ネットワーク技術）	第13回：最新動向紹介と輪読・討論会（ユニバーサル Web サービス）
第14回：最新動向紹介・輪読・討論会（情報マネジメント）	第14回：最新動向紹介と輪読・討論会（ネットワーク技術）
第15回：前期総まとめ・討論会	第15回：後期総まとめ・討論会

教科書：とくに指定しないが、必要に応じて随時参考文献や資料などを指定するか配る。

参考文献：授業中に紹介

成績評価方法：

レポート 80% 輪読・討論会の状況、課題レポートなど総合して評価する

その他 20% 出席状況

インストラクショナルデザイン論演習（1） A（前期）・B（後期）

向後 千春

授業概要：インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。前期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。後期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論演習（2）」との同時受講はできません。最終的にはミニ修論（1,000字×30ページ以上）を作成します。なお、本授業は、週ごとに教室での実習とオンデマンド授業が交代します。

授業の到達目標：学会主催の研究会（例：日本教育工学会研究会など）、あるいは、全国規模の学会の大会（例：日本教育工学会、日本心理学会、日本教育心理学会、大学教育学会などの大会）で発表できるレベルの研究をまとめること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：（教室授業）授業の進め方	第1回：（教室授業）研究実施へのオリエンテーション
第2回：（コースナビ）テーマを探す	第2回：（コースナビ）研究実施の準備
第3回：（教室授業）テーマを探す	第3回：（教室授業）研究実施の準備
第4回：（コースナビ）先行研究を探す	第4回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（1）
第5回：（教室授業）先行研究を探す	第5回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（1）
第6回：（コースナビ）序論を書く	第6回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（2）
第7回：（教室授業）序論を書く	第7回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（2）
第8回：（コースナビ）方法を書く	第8回：（コースナビ）データ整理と統計処理
第9回：（教室授業）方法を書く	第9回：（教室授業）データ整理と統計処理
第10回：（コースナビ）予備研究の実施	第10回：（コースナビ）ミニ修論作成（1）
第11回：（教室授業）予備研究の実施	第11回：（教室授業）ミニ修論作成（1）
第12回：（コースナビ）結果と考察を書く	第12回：（コースナビ）ミニ修論作成（2）
第13回：（教室授業）結果と考察を書く	第13回：（教室授業）ミニ修論作成（2）
第14回：（コースナビ）発表する	第14回：（コースナビ）プレゼンテーション
第15回：（教室授業）発表する	第15回：（教室授業）プレゼンテーション

参考文献：適宜指示する。

成績評価方法：

レポート 40% ミニ修論の出来を評価する。

平常点評価 30% 演習ゼミと議論への参加と貢献を評価する。

その他 30% オンデマンド講義のあとに出される個人課題を評価する。

備考・関連 URL：

【授業形態】この授業は、オンデマンド講義の週と教室授業の週が入れ替わる「ブレンド型授業」です。オンデマンド講義の週は、オンデマンド講義を視聴して、個人課題を各自でやってください。教室授業の週は、全員が教室に集まってグループワークを行います。

【ビデオ】収録ビデオは2012年度に新規収録したものを配信します。

関連 URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

インストラクショナルデザイン論演習（２） A（前期）・B（後期）

向後 千春

授業概要：インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。前期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。後期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論演習（１）」との同時受講はできません。最終的にはミニ修論（1,000字×30ページ以上）を作成します。なお、本授業は、週ごとに教室での実習とオンデマンド授業が交代します。

授業の到達目標：学会主催の研究会（例：日本教育工学会研究会など）、あるいは、全国規模の学会の大会（例：日本教育工学会、日本心理学会、日本教育心理学会、大学教育学会などの大会）で発表できるレベルの研究をまとめること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：（教室授業）授業の進め方	第1回：（教室授業）研究実施へのオリエンテーション
第2回：（コースナビ）テーマを探す	第2回：（コースナビ）研究実施の準備
第3回：（教室授業）テーマを探す	第3回：（教室授業）研究実施の準備
第4回：（コースナビ）先行研究を探す	第4回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（１）
第5回：（教室授業）先行研究を探す	第5回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（１）
第6回：（コースナビ）序論を書く	第6回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（２）
第7回：（教室授業）序論を書く	第7回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（２）
第8回：（コースナビ）方法を書く	第8回：（コースナビ）データ整理と統計処理
第9回：（教室授業）方法を書く	第9回：（教室授業）データ整理と統計処理
第10回：（コースナビ）予備研究の実施	第10回：（コースナビ）ミニ修論作成（１）
第11回：（教室授業）予備研究の実施	第11回：（教室授業）ミニ修論作成（１）
第12回：（コースナビ）結果と考察を書く	第12回：（コースナビ）ミニ修論作成（２）
第13回：（教室授業）結果と考察を書く	第13回：（教室授業）ミニ修論作成（２）
第14回：（コースナビ）発表する	第14回：（コースナビ）プレゼンテーション
第15回：（教室授業）発表する	第15回：（教室授業）プレゼンテーション

参考文献：適宜指示する。

成績評価方法：

レポート 40% ミニ修論の出来を評価する。

平常点評価 30% 演習ゼミと議論への参加と貢献を評価する。

その他 30% オンデマンド講義のあとに出される個人課題を評価する。

備考・関連 URL：

【授業形態】この授業は、オンデマンド講義の週と教室授業の週が入れ替わる「ブレンド型授業」です。オンデマンド講義の週は、オンデマンド講義を視聴して、個人課題を各自でやってください。教室授業の週は、全員が教室に集まってグループワークを行います。

【ビデオ】収録ビデオは2012年度に新規収録したものを配信します。

関連 URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

情報コミュニケーション技術論演習（１） A（前期）・B（後期）

スコット ダグラス

授業概要：This seminar's theme is "information and communication technologies." In the first semester, we look at the many ways people communicate, including face-to-face, telephone, email, computer and video conferencing. Topics of interest include cell phone use by Japanese young people, Internet-based communications by American college students, and gender differences in the use of communication technologies. Students read one or more articles each week and discuss them in class. Compared with traditional lecture courses, students a greater responsibility to be prepared for every class so they can actively participate in discussions.

This seminar is taught in English, and all readings, homework, and theses are done in English. Students should have TOEIC scores of 700 and above to function effectively in this class. Students interested in studying the English language or linguistics should select a different seminar.

授業の到達目標 : This semester's goal is to read and understand English-language articles on information and communication technology.

授業計画 :

A (前期)	B (後期)
第1回 : Introduction, course overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	第1回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第2回 : Introduction, course overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	第2回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第3回 : Introduction to communication technologies.	第3回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第4回 : Introduction to communication technologies.	第4回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第5回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第5回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第6回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第6回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第7回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第7回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第8回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第8回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第9回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第9回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第10回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第10回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第11回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第11回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第12回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第12回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第13回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第13回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.
第14回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第14回 : Semester summary and Fall semester planning.
第15回 : Read this week's article and discuss the main points as a class.	第15回 : Semester summary and Fall semester planning.

教科書 : Materials will be provided.

成績評価方法 :

そ の 他 Grades are based on attendance, participation, homework, and writing assignments.

情報コミュニケーション技術論演習 (2) A (前期)・B (後期)

スコット ダグラス

授業概要 : In the second semester, students will prepare for their graduation thesis by doing background research on a topic related to communication technologies, usually one of the topics covered during the first semester. This preliminary work forms the basis of their graduation thesis.

This seminar is taught in English, and all readings, homework, and theses are done in English. Students should have

TOEIC scores of 700 and above to function effectively in this class. Students interested in studying the English language or linguistics should select a different seminar.

授業の到達目標 : This semester's goal is to find background information on a topic of your choice in preparation for writing your thesis next year.

授業計画 :

A (前期)	B (後期)
第1回 : Introduction, semester overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	第1回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第2回 : Introduction, semester overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	第2回 : Academic paper writing: Citations and references.
第3回 : Introduction to the individual research project.	第3回 : Academic paper writing: Citations and references.
第4回 : Introduction to the individual research project.	第4回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第5回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	第5回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第6回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	第6回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第7回 : Introduction to academic paper writing.	第7回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第8回 : Introduction to academic paper writing.	第8回 : Academic paper writing: Methods section.
第9回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	第9回 : Academic paper writing: Methods section.
第10回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	第10回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第11回 : Academic paper writing: Outlining and paragraph structure.	第11回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第12回 : Academic paper writing: Outlining and paragraph structure.	第12回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第13回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	第13回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
第14回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	第14回 : Course summary & graduation thesis planning.
第15回 : Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	第15回 : Course summary & graduation thesis planning.

教科書 : Materials will be provided.

成績評価方法 :

そ の 他 Grades are based on attendance, participation, homework, and written assignments.

インターネット科学演習 (1) A (前期)・B (後期)

西村 昭治

授業概要 : Google App Engine の Native 言語である Python を習得することによって、インターネット上の様々なデータやサービスを自由に扱う基礎を学習する。

授業の到達目標 : Python を使ったインターネットアプリケーションの開発能力の獲得

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（1）：科目の目的	第1回：クラスとオブジェクト指向開発（1）
第2回：ガイダンス（2）：授業実施方法等	第2回：クラスとオブジェクト指向開発（2）
第3回：プログラミング言語 Python	第3回：クラスの継承と高度なオブジェクト指向機能（1）
第4回：変数と組み込み型（1）	第4回：クラスの継承と高度なオブジェクト指向機能（2）
第5回：変数と組み込み型（2）	第5回：例外処理
第6回：条件分岐とループ	第6回：モジュール（1）
第7回：関数（1）	第7回：モジュール（2）
第8回：関数（2）	第8回：スコープとオブジェクト
第9回：組み込み型を使いこなす（1）	第9回：標準ライブラリを使う（1）
第10回：組み込み型を使いこなす（2）	第10回：標準ライブラリを使う（2）
第11回：組み込み型を使いこなす（3）	第11回：アプリケーションを作る
第12回：ファイル処理（1）	第12回：Google App Engine（1）
第13回：ファイル処理（2）	第13回：Google App Engine（2）
第14回：華麗で短いプログラミング（1）	第14回：Google App Engine（3）
第15回：華麗で短いプログラミング（2）	第15回：まとめ

教科書：柴田 淳（著）みんなの Python 改訂版 ISBN-10: 4797353953

参考文献：講義で言及する

成績評価方法：

平常点評価 100% 毎週課される実習課題の対応状況を点数化し加算する。

備考・関連 URL：本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。

http://coreblog.org/ats/stuff/minpy_support/frontpage

インターネット科学演習（2） A（前期）・B（後期）

西村 昭治

授業概要：インターネット科学演習（1）を受けて、受講者毎個別に Python を用いてインターネット上の様々なデータやサービスを分析するツールやシステムを開発する。

授業の到達目標：Python を使ったインターネットアプリケーションが上級開発能力の獲得、インターネットデータ分析実践能力の獲得

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス（1）	第1回：個別テーマ中間報告会（2）
第2回：ガイダンス（2）	第2回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第3回：個別開発課題の設定（1）：個別ヒアリング（1）	第3回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第4回：個別開発課題の設定（2）：個別ヒアリング（2）	第4回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第5回：個別開発課題の設定（3）：個別テーマに関するプレゼンテーション（1）	第5回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第6回：個別開発課題の設定（4）：個別テーマに関するプレゼンテーション（2）	第6回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第7回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第7回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第8回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第8回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第9回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第9回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第10回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第10回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第11回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第11回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス

第12回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第12回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第13回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第13回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス
第14回：個別開発課題開発進捗報告&アドバイス	第14回：個別テーマ成果報告会（1）
第15回：個別テーマ中間報告会（1）	第15回：個別テーマ成果報告会（2）

参考文献：講義で言及する

成績評価方法：

平常点評価 100% 毎週課される実習課題の対応状況を点数化し加算する。

備考・関連 URL：本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。受講者はインターネット科学演習（1）既習者に限定するとともに同時履修は認めない。

教育開発論演習（1） A（前期）・B（後期）

野嶋 栄一郎

授業概要：教える—学ぶ過程に関わるヒトと環境とそれらの接面に関するシステムについて講義及び討議を行う。通常このような分野は教育工学とよばれるが、より広く、教育に関する科学研究を志向している。教育工学、教育心理学、教育測定学、認知心理学、教育学などの諸分野にまたがる内容となる、理論的中心課題、研究の方法論等、研究の核となる部分に関連するテーマが中心となる。特に人間科学としての教育工学の位置づけに、また人間科学とシステム理論の関係性に言及することを試みる。

授業の到達目標：各人のテーマについて達成レベルの設定が、授業の冒頭に求められる。特にこのとき、発展的レベルの目標設定が求められ、各自に求められるプレゼンテーションと質疑を通して、達成水準が評価される。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：コトバと体験による教育	第1回：授業評価の技法
第2回：映像と教育	第2回：指導と評価の一体化
第3回：開かれた学習環境と能動的な学習活動	第3回：学習活動の過程に在る評価
第4回：学習過程としての科学的思考の発達	第4回：ヒトの行動と文脈
第5回：理科の学習と創造性の教育	第5回：コンピュータ利用の協同作業に及ぼすパートナーの顔画像の評価（1）
第6回：教育機器とコミュニケーション	第6回：コンピュータ利用の協同作業に及ぼすパートナーの顔画像の評価（2）
第7回：放送教育と学習過程	第7回：ヒトとヒトが対峙する関係とコンピュータとヒトの関係（1）
第8回：教育評価の理論的基礎（1）	第8回：ヒトとヒトが対峙する関係とコンピュータとヒトの関係（2）
第9回：教育評価の理論的基礎（2）	第9回：メディアと教育測定（1）
第10回：教育評価の理論的基礎（3）	第10回：メディアと教育測定（2）
第11回：教育評価の理論的基礎（4）	第11回：メディアと教育測定（3）
第12回：教育評価で人を育てる（1）	第12回：オープン教育と学習活動の測定（1）
第13回：教育評価で人を育てる（2）	第13回：オープン教育と学習活動の測定（2）
第14回：教育評価で人を育てる（3）	第14回：オープン教育と学習活動の測定（3）
第15回：評価で授業を改善する—総論	第15回：エスノメソドロジーによる社会的相互交渉の分析

成績評価方法：

平常点評価 20% 授業への参加、質疑への積極的な参加

その他 80% プレゼンテーションと質疑の内容

教育開発論演習（2） A（前期）・B（後期）

野嶋 栄一郎

授業概要：教育開発論演習（1）は、比較的、基礎的、理論的色彩が強いが、ここでは演習（1）をベースに、データや開発課題を眼前にした、具体的な課題提供を試みる。カリキュラム開発と評価、教材開発と評価、教授＝学習過程に関わる実践研究、コンピュータネットワークを前提とした新しい学習環境の開発研究、マルチメディアの教育効果、教育実践に関わる測定と評価等、柔軟性に富んだテーマ設定を試みる。

授業の到達目標：授業を通じて実践的に各人の研究デザインの習作を完成させることを目標とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：学業成績固定要因の分析（1）	第1回：S-P表による授業の分析と評価（2）
第2回：学業成績固定要因の分析（2）	第2回：野嶋・高橋論文（1987）によるマイクロティーチングの評価（1）
第3回：学業成績固定要因の分析（3）	第3回：野嶋・高橋論文（1987）によるマイクロティーチングの評価（2）
第4回：学業成績固定要因の分析（4）	第4回：オープンスペースの学習行動の評価（1）
第5回：藤田論文（1975）の検討（1）	第5回：オープンスペースの学習行動の評価（2）
第6回：藤田論文（1975）の検討（2）	第6回：研究のデザインと改善・評価（1）
第7回：藤田論文（1975）の検討（3）	第7回：研究のデザインと改善・評価（1）
第8回：藤田論文（1975）の検討（4）	第8回：研究のデザインと改善・評価（2）
第9回：岸・野嶋論文（2007）の検討（1）	第9回：研究のデザインと改善・評価（2）
第10回：岸・野嶋論文（2007）の検討（2）	第10回：研究のデザインと改善・評価（3）
第11回：岸・野嶋論文（2007）の検討（3）	第11回：研究のデザインと改善・評価（3）
第12回：岸・野嶋論文（2007）の検討（4）	第12回：研究のデザインと改善・評価（4）
第13回：多重対問形式を利用した形成的評価（1）	第13回：研究のデザインと改善・評価（4）
第14回：多重対問形式を利用した形成的評価（2）	第14回：研究のデザインと改善・評価（5）
第15回：S-P表による授業の分析と評価（1）	第15回：研究のデザインと改善・評価（5）

成績評価方法：

レポート 50% 1～20回目の授業に関わるレポート 評価基準 60点以上

平常点評価 50% プレゼンテーションと発表の質 評価基準 60点以上

教育コミュニケーション学演習（1） A（前期）・B（後期）

保崎 則雄

授業概要：

A（前期）

学校での教育コミュニケーション活動、教科指導、教科外活動において、人、言語、アーティファクト（メディア）が学習者、教員、保護者、コミュニティのコミュニケーションにどのような役割、機能を果たしているのか、果たすべきなのかということを研究する。具体的には、言語（英語、日本語）活動の重要性、学習対象語であり教室言語である英語の在り方、学校 教育／社内教育などにおけるメディア使用などについても検討する。

また、ワークショップ型の学び、field trip, study tour の教育機能、情報館としての図書館の機能、BICS, CALP, i+1, LPP, ZPD, SL などについても必要に応じて触れる。

受講生は、関連分野の書籍、論文を輪読しつつ、現実の教育現場に存在（不存在）するコミュニケーション過程の改善について考察を深める。

B（後期）

学校での教育コミュニケーション活動、教科指導、教科外活動において、人、言語、アーティファクト（メディア）が学習者、教員、保護者、コミュニティのコミュニケーションにどのような役割、機能を果たしているのか、果たすべきなのかということを研究する。具体的には、言語（英語、日本語）活動の重要性、学習対象語であり教室言語である英語の在り方、学校 教育／社内教育などにおけるメディア使用などについても検討する。

また、ワークショップ型の学び、field trip, study tour の教育機能、情報館としての図書館の機能、BICS, CALP, i+1, ZPD, SL などについても必要に応じて触れる。

受講生は、関連分野の書籍、論文を輪読しつつ、現実の教育現場に存在（不存在）するコミュニケーション過程の改善について考察を深める。

授業の到達目標：受講生は、基礎的なメディア教育、言語教育の理解をし、教授学習場面において研究課題を発掘する。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：研究課題の紹介と学校ボランティア活動の報告とディスカッション（春学期中、継続）	第1回：小学校英語活動の歴史的俯瞰1
第2回：研究課題の紹介と学校ボランティア活動の報告とディスカッション（継続）	第2回：小学校英語活動の歴史的俯瞰2
第3回：研究課題の絞り込みと文献紹介（データ収集と分析）	第3回：小中学校連携の教育について考える1
第4回：研究課題の絞り込み（継続）と文献検索の方法	第4回：小中学校連携の教育について考える2
第5回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告1	第5回：中高等学校連携の教育について考える1
第6回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告2	第6回：中高等学校連携の教育について考える2
第7回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告3	第7回：幼稚園から社会人につながる英語教育について考える
第8回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告4	第8回：「今、コミュニケーション教育に何が問われているのか」
第9回：研究課題につながる研究計画書の作成指導と輪読（継続）	第9回：メディア教育研究へつなげるために 卒業研究の指導
第10回：研究課題につながる研究計画書の作成指導と輪読（継続）	第10回：言語教育研究へつなげるために1 卒業研究の指導
第11回：米国協働研修の分析、論文などの輪読とプレゼン	第11回：言語教育研究へつなげるために2 卒業研究の指導
第12回：米国協働研修の分析、論文などの輪読とプレゼン	第12回：課題研究（修論）の進捗状況の報告1
第13回：Study tour の分析、論文などの輪読とプレゼン	第13回：課題研究（修論）の進捗状況の報告2
第14回：Study tour の分析、論文などの輪読とプレゼン	第14回：課題研究（修論）の進捗状況の報告3
第15回：米国協働研修、Study tour などの分析、論文などの輪読とプレゼン	第15回：授業のまとめと評価 研究計画書の作成

参考文献：授業時に知らせる予定

成績評価方法：

A（前期）

試験 0% 適用せず

レポート 0% 適用せず

平常点評価 100% レポート、プレゼンテーション、ディスカッション、自己評価を総合的に判断する。

その他 0% 適用せず

B（後期）

試験 0% 該当せず

レポート 0% 該当せず

平常点評価 100% レポート、発表、ディスカッション、研究計画書、自己評価を総合的に判断する。

その他 0% 該当せず

備考・関連 URL：（学校教育支援ボランティア活動を春学期から開始の予定）

教育コミュニケーション学演習（2） A（前期）・B（後期）

保崎 則雄

授業概要：受講生の研究課題を中心に、修論作成に向けての指導が中心となる。その過程で国内外における関連学会での発表を義務づける。論文作成にあたっては、「APA 論文作成マニュアル」を参考にする。

授業の到達目標：受講生は、修論作成の基礎固めをする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：研究計画書の修正とディスカッション	第1回：「教育メディア研究」から読み取る1
第2回：文献輪読とディスカッション	第2回：「教育メディア研究」から読み取る2
第3回：文献輪読とディスカッション	第3回：「TESOL Quarterly」から読み取る1
第4回：文献輪読とディスカッション	第4回：「TESOL Quarterly」から読み取る2
第5回：文献輪読とディスカッション、学会誌発表論文の作成	第5回：「TESOL Quarterly」から読み取る3
第6回：文献輪読とディスカッション、学会誌発表論文の作成	第6回：「Language Ed. & Technology」から読み取る1
第7回：文献輪読とディスカッション、学会誌発表論文の作成	第7回：「Language Ed. & Technology」から読み取る2
第8回：文献輪読とディスカッション	第8回：「Language Ed. & Technology」から読み取る3
第9回：文献輪読とディスカッション	第9回：教育研究の現状の紹介1
第10回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第10回：教育研究の現状の紹介2
第11回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第11回：教育研究のあり方
第12回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第12回：修士論文の進捗状況の報告1
第13回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第13回：修士論文の進捗状況の報告2
第14回：文献輪読とディスカッション	第14回：修士論文の進捗状況の報告3
第15回：修論作成への個別指導	第15回：授業のまとめと評価

参考文献：授業時に知らせる予定

成績評価方法：

A（前期）

試験 0% 該当せず
レポート 0% 該当せず
平常点評価 100% レポート、発表、ディスカッション、研究論文作成、自己評価を総合的に判断する。
その他 0% 該当せず

B（後期）

試験 0% 該当せず
レポート 0% 該当せず
平常点評価 100% レポート、発表、ディスカッション、自己評価を総合的に判断する。
その他 0% 該当せず

備考・関連 URL：（video conference, face-to-face, on-demand での授業を併用の予定）

情報メディア教育論演習（1） A（前期）・B（後期）

森田 裕介

授業概要：情報メディアを活用した教育の一つとして、オンデマンド・コンテンツの利用があげられる。本演習では、オンデマンドコンテンツの作成から配信まで、すべてを一人で行うための基礎的な技能を習得する。まず、サーバの構築の演習を行う。OS は Linux とし、コマンドの復習からストリーミングサーバの構築までを実施する。次に、オンライン学習コンテンツの作成を行う。ネットワークに関する基礎的な知識をベースとして、映像教材の開発を行う。続いて、学習管理システムに関する演習を行う。具体的には Moodle などフリーの LMS（Learning Management System）を取り上げる。最後に、オンライン学習の評価に関する演習を行う。

授業の到達目標：本講義の到達目標は、（1）コンテンツを配信するためのサーバをひとりで構築できる、（2）オンライン学習コンテンツを一人で作成することができる、（3）学習管理システムの仕組みを理解し、オンライン学習を管理することができる、の3点である。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：導入	第1回：導入
第2回：サーバの構築（1）：Linux のインストール	第2回：オンライン学習コンテンツの開発（1）：オーサリングツールの活用
第3回：サーバの構築（2）：コマンド	第3回：オンライン学習コンテンツの開発（2）：オーサリングツールによる同期
第4回：サーバの構築（3）：Web サーバ	第4回：オンライン学習コンテンツの開発（3）：Web サーバとストリーミングサーバの活用
第5回：サーバの構築（4）：ファイル共有	第5回：オンライン学習コンテンツの開発（4）：学習コンテンツの配信実験
第6回：サーバの構築（5）：ストリーミング・サーバのインストール	第6回：学習管理システム（1）：学習管理システムの実践
第7回：サーバの構築（6）：ストリーミング・サーバの設定	第7回：学習管理システム（2）：オンライン学習の実践
第8回：ネットワーク映像配信（1）：動画配信とUDP	第8回：学習管理システム（3）：学習履歴
第9回：ネットワーク映像配信（2）：映像のエンコードとデコード	第9回：学習管理システム（4）：学習支援方法
第10回：オンライン学習コンテンツの開発（1）：サンプル紹介	第10回：学習管理システム（5）：BBS による討議
第11回：オンライン学習コンテンツの開発（2）：設計と計画	第11回：学習管理システム（6）：Blog
第12回：オンライン学習コンテンツの開発（3）：動画撮影	第12回：オンライン学習の評価（1）：システム
第13回：オンライン学習コンテンツの開発（4）：キャプチャとノンリニア編集	第13回：オンライン学習の評価（2）：コンテンツ
第14回：オンライン学習コンテンツの開発（5）：特殊効果	第14回：オンライン学習の評価（3）：学習支援
第15回：まとめ	第15回：まとめ

教科書：特になし。

参考文献：適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 40% 正確な知識を習得し、講義の内容を踏まえて自分の意見を論理的に述べることができる。

平常点評価 30% 講義に出席し、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。

その他 30% 講義に関する課題を遂行することができる。

備考・関連 URL：各自で PC を用意し、オーサリングソフトウェアをインストールする必要がある。どうしても PC 等を準備できない場合は教員に相談をすること。

情報メディア教育論演習（2） A（前期）・B（後期）

森田 裕介

授業概要：情報メディアを活用した教育の一つとして、バーチャルリアリティ教材の作成を行う。まず、コンピュータグラフィックスの基礎を学び、プリミティブの配置、マテリアル、テクスチャマッピング、カメラの配置、ライティングなどを習得する。続いて、VR 空間の立体映像表示を試みる。

授業の到達目標：本講義の到達目標は、（1）コンテンツを配信するためのサーバをひとりで構築できる、（2）オンライン学習コンテンツを一人で作成することができる、（3）学習管理システムの仕組みを理解し、オンライン学習を管理することができる、の3点である。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：導入	第1回：導入

第2回：立体映像教材の基礎（1）：奥行き感と立体映像	第2回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（1）：ソフトウェア
第3回：立体映像教材の基礎（2）：両眼立体情報	第3回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（2）：モデリング
第4回：立体映像教材の基礎（3）：奥行き感度	第4回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（3）：テクスチャマッピング
第5回：立体映像教材の基礎（4）：立体視の特性	第5回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（4）：アニメーション
第6回：立体映像教材の基礎（5）：立体映像と視覚負担	第6回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（5）：特殊効果
第7回：立体映像教材の基礎（6）：立体ディスプレイ	第7回：CG教材の作成（1）：ソフトウェアの活用
第8回：立体映像の撮影（1）：カメラフォルダの取扱い	第8回：CG教材の作成（2）：モデリングの実際
第9回：立体映像の撮影（2）：デュアルカメラの特性	第9回：CG教材の作成（3）：テクスチャマッピングの実際
第10回：立体映像の撮影（3）：映像特性	第10回：CG教材の作成（4）：アニメーションの実際
第11回：立体映像の編集（4）：デュアルカメラ映像のノンリニア編集	第11回：CG教材の作成（5）：特殊効果の実際
第12回：立体映像の編集（5）：偏光式立体映像	第12回：仮想空間の構築（1）：CG教材の立体映像提示
第13回：立体映像の編集（6）：裸眼式立体映像	第13回：仮想空間の構築（2）：インタラクティブ性
第14回：立体映像の編集（7）：液晶シャッター式立体映像	第14回：仮想空間の構築（3）：デバイス
第15回：まとめ	第15回：まとめ

教科書：特になし。

参考文献：適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 40% 正確な知識を習得し、講義の内容を踏まえて自分の意見を論理的に述べるができる。

平常点評価 30% 講義に出席し、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。

その他 30% 講義に関する課題を遂行することができる。

備考・関連URL：各自でPCを用意し、CGソフトウェアをインストールする必要がある。どうしてもPC等を準備できない場合は教員に相談をすること。

学習環境デザイン論演習（1） A（前期）・B（後期）

尾澤 重知

授業概要：本授業では、何らかのテクノロジーや道具、システムを用いた学びの支援と評価方法について、教育工学、学習科学、知識科学の観点から検討する。「理論」と「実践」のバランスを図りつつ、研究内容を第三者に分かりやすく伝えるための論文作法やプレゼンテーション技法も扱う。

授業の到達目標：講義、輪講、ケース・スタディ、ディスカッション等を通して、（1）関連する理論を第三者に対して分かりやすく説明する力、（2）先行研究や先行事例を批判的に捉えると同時に、経験から学ぶ姿勢の修得、（3）学習環境のデザインと評価技法の習得を目指す。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス、研究概要の報告（1）	第1回：事前課題に対するフィードバック
第2回：研究概要の報告（2）	第2回：学習環境の評価方法（1） 研究方法の確認
第3回：基本概念の整理（1） 自身の研究のマッピング	第3回：学習環境の評価方法（2） 研究方法の確認（演習）
第4回：基本概念の整理（2） 相互評価	第4回：学習環境の評価方法（3） 研究デザイン

第5回：基本概念の整理（3） 自身の研究のマッピング（演習）	第5回：学習環境の評価方法（4） 研究デザイン（演習）
第6回：基本概念の整理（4） 相互評価	第6回：学習環境の評価方法（5） 実験と実践研究
第7回：概念構築（1） モデルの検討	第7回：学習環境の評価方法（6） 実験と実践研究（演習）
第8回：概念構築（2） 相互評価	第8回：プレゼンテーション技法（1）
第9回：概念構築（3） プレゼンテーション	第9回：プレゼンテーション技法（2）（演習）
第10回：概念構築（4） 相互評価	第10回：論文構成法（1）
第11回：先行事例の批判的検討（1） 国内文献	第11回：論文構成法（2）（演習）
第12回：先行研究の批判的検討（2） 国内文献	第12回：相互評価（1）
第13回：先行事例の批判的検討（3） 海外文献	第13回：相互評価（2）（演習）
第14回：先行研究の批判的検討（4） 海外文献	第14回：最終プレゼンテーション
第15回：期末プレゼンテーション	第15回：全体に対するフィードバック

参考文献：適時、授業内で紹介する。

成績評価方法：

A（前期）

レポート 70% 論文の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性

その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

B（後期）

レポート 70% 研究の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性

その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

備考・関連 URL：授業順序や割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

<http://www.ozaken.org/>

学習環境デザイン論演習（2） A（前期）・B（後期）

尾澤 重知

授業概要：本授業では、何らかのテクノロジーや道具、システムを用いた学びの支援と評価方法について、教育工学、学習科学、知識科学の観点から検討する。「理論」と「実践」のバランスを図りつつ、研究内容を第三者に分かりやすく伝えるための論文作法やプレゼンテーション技法も扱う。

授業の到達目標：講義、輪講、ケース・スタディ、ディスカッション等を通して、（1）関連する理論を第三者に対して分かりやすく説明する力、（2）先行研究や先行事例を批判的に捉えると同時に、経験から学ぶ姿勢の修得、（3）学習環境のデザインと評価技法の習得を目指す。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：ガイダンス、研究概要の報告（1）	第1回：事前課題に対するフィードバック
第2回：研究概要の報告（2）	第2回：学習環境の評価方法（1） 研究方法の確認
第3回：基本概念の整理（1） 自身の研究のマッピング	第3回：学習環境の評価方法（2） 研究方法の確認（演習）
第4回：基本概念の整理（2） 相互評価	第4回：学習環境の評価方法（3） 研究デザイン
第5回：基本概念の整理（3） 自身の研究のマッピング（演習）	第5回：学習環境の評価方法（4） 研究デザイン（演習）
第6回：基本概念の整理（4） 相互評価	第6回：学習環境の評価方法（5） 実験と実践研究
第7回：概念構築（1） モデルの検討	第7回：学習環境の評価方法（6） 実験と実践研究（演習）
第8回：概念構築（2） 相互評価	第8回：プレゼンテーション技法（1）
第9回：概念構築（3） プレゼンテーション	第9回：プレゼンテーション技法（2）（演習）
第10回：概念構築（4） 相互評価	第10回：論文構成法（1）
第11回：先行事例の批判的検討（1） 国内文献	第11回：論文構成法（2）（演習）
第12回：先行研究の批判的検討（2） 国内文献	第12回：相互評価（1）
第13回：先行事例の批判的検討（3） 海外文献	第13回：相互評価（2）（演習）

第14回：先行研究の批判的検討（４） 海外文献	第14回：最終プレゼンテーション
第15回：期末プレゼンテーション	第15回：最終プレゼンテーションへのフィードバック

参考文献：適時、授業内で紹介する。

成績評価方法：

A（前期）

レポート 70% 研究の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性

その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

B（後期）

レポート 70% 研究や発表の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性

その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

備考・関連 URL：授業順序や割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

<http://www.ozaken.org/>

【講義科目】

【地域・地球環境科学研究領域】

環境管理計画学特論

天野 正博

授業概要：地球環境問題のうち地球温暖化、熱帯林減少問題を取り上げ、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の報告書を用いて、問題の実態を分析する。また、関連する国際条約文書を教材として取り上げ、こうした環境問題に対する人類の取り組みについて議論を行い、問題解決のための理解を深める。なお、地球温暖化の基礎知識、京都議定書の内容は既知のこととして講義を進めるので、学部講義「環境管理計画学」を履修していることが望ましい。

授業の到達目標：地球環境問題のうち地球温暖化問題について科学的な背景や、国際的な合意の枠組みがどのように達成されてきたのか、また合意文書はどのように読むべきかを理解できるようになる。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：IPCC 第4次報告書の輪読（8）
第2回：IPCC 第4次報告書の輪読（1）	第10回：気候変動枠組み条約の輪読と解説（1）
第3回：IPCC 第4次報告書の輪読（2）	第11回：気候変動枠組み条約の輪読と解説（2）
第4回：IPCC 第4次報告書の輪読（3）	第12回：気候変動枠組み条約の輪読と解説（3）
第5回：IPCC 第4次報告書の輪読（4）	第13回：京都議定書の輪読と解説（1）
第6回：IPCC 第4次報告書の輪読（5）	第14回：京都議定書の輪読と解説（2）
第7回：IPCC 第4次報告書の輪読（6）	第15回：確認テストと解説
第8回：IPCC 第4次報告書の輪読（7）	

教科書：Climate Change 2007, UNFCCC, Kyoto Protocol

参考文献：受講時に配布する。

成績評価方法：

レポート 40% レポート内容で評価する。

その他 60% プレゼンテーション

備考・関連 URL：IPCC 第4次報告書 Summary for policy maker 及び Kyoto Protocol をテキストとして用いるので、事前に UNFCCC の Web サイトからダウンロードしておくこと。また、地球温暖化に関する専門用語が多いので、この分野の英文に熟知していることが望ましい。

地球生態学特論

太田 俊二

授業概要：生態学は葉一枚のなかでの生物の動きから、地球規模の植物群系や純一次生産力の分布まで、さまざまな空間スケールを理解する学問である。また、生物の分布や個体数が時間的にどのように変化してきているのかを探るため、時間スケールは数秒から数十年、ときには数万年単位に及ぶこともある。この講義では比較的大きな空間（地球規模）と長めの時間スケールで生物の生きていく姿を追いかけていこうと考えている。そのた

め気候学的な思考法について、また、生態学初学者向けに個体群動態などの時間変化の考え方についても講義する予定である。

授業の到達目標：生態学的思考法と気候学的思考法から地球システムを定量的に捉え、それをもとに地球環境問題を考えることができるようになる。

授業計画：

第1回：ガイダンス、概論	第9回：生態系の構造と機能（1）地球の物質生産
第2回：個体間の相互作用と個体群（1）種内競争と密度効果、自己間引き	第10回：生態系の構造と機能（2）物質生産と現存量の比、生物群集の多様性
第3回：個体間の相互作用と個体群（2）ロトカ・ヴォルテラの捕食式、メタ個体群	第11回：生態系の構造と機能（3）生元素の循環
第4回：個体間の相互作用と個体群（3）個体群のサイクル変動とそのメカニズム	第12回：生態系の構造と機能（4）エネルギー流、生態効率
第5回：生物群集とその分布（1）栄養段階と食物連鎖	第13回：地球規模の生態学（1）生態モデリング、炭素収支
第6回：生物群集とその分布（2）植物の環境形成作用と遷移、更新	第14回：地球規模の生態学（2）地表面の変化、熱収支
第7回：生物群集とその分布（3）バイオーム	第15回：地球環境システムのなかの生物の役割
第8回：生物群集とその分布（4）植生の変動と気候要因	

教科書：太田俊二「変化する気候と食料生産－21世紀の地球環境情報」コロナ社

参考文献：講義中に紹介する。

成績評価方法：

平常点評価 100% 理解度を随時直接評価する

環境社会学特論

鳥越 皓之

授業概要：環境社会学についての専門性の高いレベルの方法論の検討をする。したがって、すでにこの分野についての学部での環境社会学以上の十分な研究史の知識と分析能力があることを受講の条件とする。また、すべての授業の出席を前提とする。自分で環境社会学的課題を見つけたし、現在の環境社会学の動向を踏まえて報告をすることが義務づけられる。

授業の到達目標：本年度は『地域の自立シマの力上下』の論文をいくつか選んでそれを読む。基本的に社会学的発想、また論文の創造性について討議をする。

授業計画：

第1回：環境社会学の進め方と基本方針	第9回：グループ発表とディスカッション（4）
第2回：環境社会学概説（1）	第10回：グループ発表とディスカッション（5）
第3回：環境社会学概説（2）	第11回：グループ発表とディスカッション（6）
第4回：環境社会学史（1）	第12回：グループ発表とディスカッション（7）
第5回：環境社会学史（2）	第13回：最終レポートについて
第6回：グループ発表とディスカッション（1）	第14回：最終レポート討議
第7回：グループ発表とディスカッション（2）	第15回：環境社会学の課題と今後の可能性
第8回：グループ発表とディスカッション（3）	

成績評価方法：

平常点評価 100% 発言内容

人間環境変遷特論

井内 美郎

授業概要：地球規模環境問題の自然科学的側面の例として水収支を取り上げる。記録の指標として湖水面高度を取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら講義を展開する。

授業の到達目標：地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の水収支についての議論が可能となる。

授業計画：

第1回：ガイダンスー水と生活ー 本講義の目的と概要について説明します。	第9回：野尻湖における湖水面変動の証拠 野尻湖の湖水面高度が変化した証拠について学びます。
第2回：水資源の現状と将来	第10回：湖水面変動史に年代目盛りを入れる 湖水面高度が変化した証拠の年代を求める方法について学びます。
第3回：水の収支 水収支を構成する要素について学びます。	第11回：なぜ湖水面高度が昇降を繰り返したか 湖水面高度が変化した要因について学びます。
第4回：水収支指標としての湖水面高度	第12回：なぜ寒冷期に湖水面が上昇するのか 寒冷期に湖水面が上昇した原因について学びます。
第5回：湖水面高度推定法 湖水面高度をします証拠について学びます。	第13回：野尻湖湖水面変動ーまとめー 野尻湖の湖水面変動について学んだ内容についてまとめを行います。
第6回：世界の湖水面変動研究	第14回：レポート第2回 これまでに学んだ内容についてレポートします。
第7回：湖水面高度を変動させるもの 湖水面高度を変動させる要因について学びます。	第15回：まとめ この講義のまとめを行います。
第8回：レポート第1回	

教科書：特に指定しない

参考文献：適宜紹介する

成績評価方法：

試験 60% 試験の満点を60点とする。

レポート 10% レポートを2回課す

平常点評価 30% 毎回小テストを実施する。

備考・関連 URL：開講回数の1／3以上小テスト・レポートが未提出の場合、成績評価は行わない。

地域資源特論

山田 忍

授業概要：本講義においては、地域資源の中核をなす地域自然資源とそれを主として利用とする食料・農業・農村問題について理論的な言及を加える。農業・農村問題の中核をなす食料の生産から消費に至る過程を体系的にとらえ、それを経済学の理論と食料をめぐる実態との両側面から学んでいく。加えて、今日の食料・農業を取り巻く経済的諸問題は、グローバルな視点から諸問題を理解していくことが不可欠となっている。種々の実態を通じ、飽食と飢餓の並存する世界を直視し、食料から日本と世界を見つめ直していく。

授業の到達目標：地域資源の中核をなす地域自然資源の特質と利用、それを巡る諸問題に関する理解について農業経済学、食料経済学、環境経済学の観点から深める。授業の到達目標は、次の点である。①地域自然資源の特質とその利用。②世界の食料需給の動向の把握。③食の安全性をめぐる諸問題。④食料と環境問題との関係。

授業計画：

第1回：地域資源論とは	第9回：経済発展と食生活の変化
第2回：発展途上国と先進国の食料需給構造	第10回：食料輸入の増大と食料自給率の推移
第3回：人口増加と食料不足	第11回：わが国の主要食料品生産・流通・消費
第4回：農業の技術進歩と食料供給	第12回：「食」の外部位化と展開と食品産業の特質
第5回：世界的にみた耕地における食糧生産①	第13回：「食」の安全性と品質の確保：遺伝子組み替え作物を中心に
第6回：世界的にみた耕地における食糧生産②	第14回：食料と環境問題：バイオマスエネルギー利用の可能性
第7回：世界的にみた水圏における食料生産③	第15回：レポート課題と解説
第8回：農業生産の成長と食料問題の克服	

教科書：講義時に適宜プリントを配布する。

参考文献：講義時に適宜紹介する。

成績評価方法：
レポート 100% レポート課題は15回目講義時に提示する。
備考・関連 URL：環境省 HP、農林水産省 HP

[人間行動・環境科学研究領域]

学習動機づけ特論

青柳 肇

授業概要：動機づけ理論の重要な論文を輪読し理解を深める。
授業の到達目標：学習・動機づけ・適応の概念は相互にからみ合っていることを学ぶ。
授業計画：

第1回：学習動機づけ研究の概要（1）	第9回：文献講読（7）
第2回：学習動機づけ研究の概要（2）	第10回：文献講読（8）
第3回：文献講読（1）	第11回：文献講読（9）
第4回：文献講読（2）	第12回：文献講読（10）
第5回：文献講読（3）	第13回：文献講読（11）
第6回：文献講読（4）	第14回：文献講読（12）
第7回：文献講読（5）	第15回：文献講読（13）
第8回：文献講読（6）	

成績評価方法：
平常点評価 100% レポータと出席

発達行動学特論

根ヶ山 光一

授業概要：親子関係の変化をめぐる諸問題について、子別れの観点から動物行動学の知見もまじえつつ講じる。とくに現代社会における親子関係とその身体性に注目し、子別れの過程や、それを取り巻く哺乳類・霊長類としての生物学的要因、テクノロジーや価値観などの社会文化的要因と、その相互関連性を中心に検討する。なお、本講義はオンデマンド方式と分類されるが、実際には所沢キャンパスでの教室における授業とオンデマンド授業を隔週で行うハイブリッド型とする。

授業の到達目標：発達行動学の基本的枠組みについて習得し、自らの見解を表明できるようになる。
それを学会に報告し、かつ論文文化できる。

授業計画：

第1回：授業の概要説明	第9回：食をめぐる対立（2）討論
第2回：離れつつ保護する（1）講義	第10回：子どものメッセージを読みとる（1）講義
第3回：離れつつ保護する（2）討論	第11回：子どものメッセージを読みとる（2）討論
第4回：子別れのプロセス①（1）講義	第12回：ほどよい隔たりとは（1）講義
第5回：子別れのプロセス①（2）討論	第13回：ほどよい隔たりとは（2）討論
第6回：子別れのプロセス②（1）講義	第14回：子どものからだと危害（1）講義
第7回：子別れのプロセス②（2）討論	第15回：子どものからだと危害（2）討論
第8回：食をめぐる対立（1）講義	

教科書：根ヶ山光一 著「〈子別れ〉としての子育て」（NHK 出版）

参考文献：適宜指示する。

成績評価方法：
レポート 20% 理解度および独創性
平常点評価 70% 受講の積極性
その他 10% 勉学態度
備考・関連 URL：積極的な参加・発言を期待する。

発達科学特論

大藪 泰

授業概要：乳幼児の社会的認知能力の発達について論じる。人間の心は、養育者との間で誕生し育つ。それは他の霊長類に比し、圧倒的に重要な出来事である。特異な人志向性能力をもつ乳児の心は、養育者からの共感的

な関わりを梃子にして、きわめて豊かな意味共有の世界を構築し、心と心の結びつきを強めてゆくからである。そこには外界との関係性に気づくのみならず、自己をも静観的に眺めようとする、有能で相補的な情動と認知の働きの存在が予想される。この特論では、乳児がもつ生物としての「ココロ」が、養育者との関係を足場に、人間らしく文化化された「心」に発達する過程を展望する。特に、人との共有世界の原型を誘導する「情動性」、人や物がもつ意味世界への気づきを促す「静観性」、そして同一の事物に人と一緒に注意を向ける「共同注意」といった現象を基底において論述し、文化世界へ参入し文化を学習する主体としての子どもの心を探ってみたい。

授業は講義形式で行い、多くの映像（動画、静止画）を使用して、乳幼児の行動を身近に感じられるようにしたい。

尚、本講義内容は、臨床発達心理士の DP 科目「認知」1-3、1-4、2-1、3-1、3-4、DP 科目「社会情動」1-4、1-5、DP 科目「言語」1-2、1-3、1-4 に該当する。

授業の到達目標：乳幼児の社会的認知能力の発達を理解する。その能力は母子相互の「情動性」、「静観性」、「共同注意」といった精神機能に支えられていること、さらにそれは人間に固有な文化発展の基盤でもあることを認識できるようになる。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：言語的自己感
第2回：乳児発達研究の歴史的経緯	第10回：他者感と物の認識（1）
第3回：乳児の発達を論じる視点（1）	第11回：他者感と物の認識（2）
第4回：乳児の発達を論じる視点（2）	第12回：人との共有世界（1）
第5回：新生児の初期行動	第13回：人との共有世界（2）
第6回：新生児の行動と母親の応答性	第14回：人との共有世界（3）
第7回：新生児から乳児への発達移行	第15回：まとめ
第8回：体感的自己感	

教科書：使用しない

参考文献：

大藪 泰 共同注意 川島書店 2004

トマセロ 心とことばの起源を探る 勁草書房 2006

成績評価方法：

レポート 80% レポートにより評価する。与えられた課題を講義内容と関連づけ、いかに深く考察しているかどうかを評価する。

平常点評価 20% 出席を含めた授業への参加姿勢などによって評価する。

建築環境学特論

小島 隆矢

授業概要：建築学における環境心理生理研究分野では、近年、顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識や行動を把握するための調査分析手法が独自の発展をみせている。本講義では、特に「コンジョイント分析」という、実験計画法を応用して回答者の価値意識を定量的に把握する調査分析手法を取り上げ、講義と実習（PCを用いたデータ分析の実習を含む）を行う。実習の結果は調査報告書の形式にまとめ、発表を行う。講義部分は主にオンデマンドで行い、実習と発表は教室で行う（回数等の詳細は「授業計画」参照）。

授業の到達目標：

- ・実験計画法を中級レベルまで理解する
- ・コンジョイント分析という形式で実験計画法を用いた調査・分析を体験する

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方（教室授業）	第9回：調査用紙の作成（教室授業）
第2回：コンジョイント分析の事例（オンデマンド）	第10回：コンジョイント分析による調査実習（教室授業）
第3回：コンジョイント分析の仕組み（オンデマンド）	第11回：調査データの入力・加工（オンデマンド）
第4回：直交表とその周辺（オンデマンド）	第12回：コンジョイント分析におけるデータ分析（オンデマンド）
第5回：要因と水準、評価方法の設定（教室授業）	第13回：データ分析の経過発表（教室授業）
第6回：交互作用を考慮した実験計画（オンデマンド）	第14回：分析結果の発表・講評（1）（教室授業）

第7回：最適化計画、拡張計画（オンデマンド）	第15回：分析結果の発表・講評（2）（教室授業）
第8回：要因・水準の割付け（教室授業）	

教科書：とくに指定しない。

参考文献：適宜、指示する。実験計画法に関する書籍。

成績評価方法：

レポート 70% 調査報告書と発表を評価する。

平常点評価 30% 教室授業の出席、オンデマンド講義の参照等の状況を評価する。

備考・関連 URL：履修者は、分散分析の基礎的な部分が理解できていることが望ましい。

〔文化・社会環境科学研究領域〕

産業職業社会学特論

河西 宏祐

授業概要：労働組合論について考察する。受講生には毎時間のレポート提出、および研究発表を義務づける。その上で、研究論文（3万字以上）を作成し提出すること。

授業の到達目標：研究論文の作成

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：レポート提出、および研究発表・議論
第2回：労働組合論（歴史・上級）	第10回：労働組合論（機能論・上級）
第3回：レポート提出、および研究発表・議論	第11回：レポート提出、および研究発表・議論
第4回：労働組合論（歴史・超上級）	第12回：労働組合論（機能論・超上級）
第5回：レポート提出、および研究発表・議論	第13回：レポート提出、および研究発表・議論
第6回：労働組合論（組織論・上級）	第14回：労働組合論（全般）
第7回：レポート提出、および研究発表・議論	第15回：全体を通しての研究論文の提出
第8回：労働組合論（組織論・超上級）	

参考文献：授業のなかで随時紹介する。

成績評価方法：

その他 出席状況・レポート・研究発表・研究論文を総合して評価する。

備考・関連 URL：

- ・授業の内容は極めて高度であり、専門的である。高度な研究水準・知識がなければ、履修は難しい。
- ・産業職業社会学研究指導A、産業職業社会学研究指導Bを合わせて履修すること。
- ・産業職業社会学演習（1）A、産業職業社会学演習（2）Aを、合わせて履修することが望ましい。

歴史人類学特論

蔵持 不三也

授業概要：歴史人類学の知見と方法論を、「アナル派」と蔵持の著作を中心に講義する。

授業の到達目標：講義の内容を通して、歴史人類学の可能性を理解してもらう。

授業計画：

第1回：歴史の見方・考え方	第9回：文献解題
第2回：歴史の見方・考え方	第10回：文献解題
第3回：歴史の見方・考え方	第11回：文献解題
第4回：歴史人類学の方法論	第12回：文献解題
第5回：歴史人類学の方法論	第13回：文献解題
第6回：文献解題	第14回：文献解題
第7回：文献解題	第15回：まとめ
第8回：文献解題	

教科書：授業で提示する

参考文献：授業で提示する

成績評価方法：

試験 実施せず

レポート 90% 課題に対する習熟度

平常点評価 10% 出席状況

備考・関連 URL : Wikipedia の蔵持関連項目

アジア地域研究特論

店田 廣文

授業概要：アジア社会に関する英文文献の講読をおこなう。取り上げるテーマは、都市と都市化、人口、移民、イスラームなどのうちから選択する予定である。

授業の到達目標：英文の学術文献に慣れ親しむとともに、アジア社会の一端を理解すること。

授業計画：

第1回：アジア地域研究イントロダクション	第9回：文献講読と発表・討論（8）
第2回：文献講読と発表・討論（1）	第10回：文献講読と発表・討論（9）
第3回：文献講読と発表・討論（2）	第11回：文献講読と発表・討論（10）
第4回：文献講読と発表・討論（3）	第12回：文献講読と発表・討論（11）
第5回：文献講読と発表・討論（4）	第13回：文献講読と発表・討論（12）
第6回：文献講読と発表・討論（5）	第14回：文献講読と発表・討論（13）
第7回：文献講読と発表・討論（6）	第15回：レポート提出と解説
第8回：文献講読と発表・討論（7）	

参考文献：授業中に紹介する

成績評価方法：

レポート 65% 構成、内容、文章作成などを評価

平常点評価 35% 出欠、発表への参加などを評価

備考・関連 URL : <http://www.imemgs.com>

都市社会学特論

臼井 恒夫

授業概要：近年、先進国の大都市の構造転換についてさまざまな角度から多くの研究が積み重ねられている。ここでは、都市社会学の研究を中心にこれまでに蓄積されてきた研究成果のなかから基本的かつ重要と思われる研究を取りあげながら、今日の都市の変容を読み解くための視点や論点について解説する。

授業の到達目標：「都市的」な事象が現代社会を大きく特徴づけていることが、都市という場所をすぐれて現代的な場所として浮かび上がらせている。ここでは、現代都市の特徴点や諸相について理解を深めてゆく。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：高度成長と地域社会の変容（2）
第2回：現代都市の変容（1）	第10回：階級・階層とエスニシティ（1）
第3回：現代都市の変容（2）	第11回：階級・階層とエスニシティ（2）
第4回：変化する都市構造（1）	第12回：ニュータウンの変容
第5回：変化する都市構造（2）	第13回：郊外の誕生と変容
第6回：産業都市の変容（1）	第14回：グローバリゼーションと都市の変容
第7回：産業都市の変容（2）	第15回：レポート課題と解説
第8回：高度成長と地域社会の変容（1）	

教科書：テキストはとくに使用しない。

参考文献：参考文献は教場で指示する。

成績評価方法：

レポート 60% 授業期間中のレポートの評価を重視する。

平常点評価 40% 授業への参加態度で評価する。

科学史科学哲学特論

加藤 茂生

授業概要：近年の歴史学において、病気・医療・衛生の歴史は新しい研究領域として注目を集めている。とりわけ、近代において国家が個人に介入・統制する回路として医療・衛生が大きな役割を果たしてきたことが重要視されている。そこで、近代中国・台湾における病気・医療・衛生の社会史について、最新の英語文献を読み、出席者全員で討論を行う。

授業の到達目標：近代中国・台湾において病気・医療・衛生が社会の変容にいかに関わったのかを理解し、近

代において国家が個人に介入、統制する回路としての医療・衛生について論ずる力を身につける。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：A Forgotten War: Malaria Eradication in Taiwan, 1905-65 台湾におけるマラリア対策
第2回：Hygienic Modernity in Chinese East Asia イン トロダクション	第10回：The Elimination of Schistosomiasis in Jiaying and Haining Counties, 1948-58 中国における住血 吸虫病対策
第3回：The Evolution of the Idea of Chuanran Contagion in Imperial China 中国における「伝染」概念	第11回：The Case of SARS and Traditional Chinese Medicine SARSと中国伝統医学
第4回：The Treatment of Night Soil and Waste in Modern China 清末中国における屎尿・ゴミ処理	第12回：Governing Germs from Outside and Within Borders: Controlling 2003 SARS Risk in Taiwan 台湾におけるSARS対策
第5回：Constituting Notifiable Infectious Disease and Containing the Manchurian Plague 清末中国 におけるペスト対策	第13回：Biomedicine in Chinese East Asia: From Semicolonial to Postcolonial? 東アジアにお ける生物医学
第6回：Eating Well in China: Diet and Hygiene in Nineteenth-Century Treaty Ports 19世紀末中 国の条約港における食事と衛生	第14回：総括的討論（1）
第7回：Vampires in Plagueland: The Multiple Meanings of Weisheng in Manchuria 満州におけるペスト の意味	第15回：総括的討論（2）
第8回：Women's Birthing Networks, Knowledge, and Skills in Colonial Taiwan 植民地期台湾における出産	

教科書：Angela Ki Che Leung and Charlotte Furth, eds., Health and Hygiene in Chinese East Asia: Policies and Publics in the Long Twentieth Century (Durham and London, Duke University Press, 2010).

参考文献：授業時に紹介する。

成績評価方法：

レポート 10% 授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。総合的に評価する。

平常点評価 90% テキストの理解力、洞察力、歴史的想像力に関して成績を評価する。

フランス表象文化史研究特論

中村 要

授業概要：フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究の一環として、フランスの表象文化について歴史的展望を行なう。人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。日本文化との比較、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題：フランスの特殊性と普遍性、表象と共同体、他者との共生、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標：表象文化研究についての理解を深めること。

授業計画：

第1回：授業のオリエンテーション。	第9回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。
第2回：表象文化研究の歴史的展望（1）。ディスカッション。	第10回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。
第3回：表象文化研究の歴史的展望（2）。ディスカッション。	第11回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。
第4回：表象文化研究の歴史的展望（3）。ディスカッション。	第12回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。
第5回：表象文化研究の歴史的展望（4）。ディスカッション。	第13回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。
第6回：表象文化研究の歴史的展望（5）。ディスカッション。	第14回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。

第7回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。	第15回：授業のまとめ。
第8回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。	

参考文献：授業の中で紹介する

成績評価方法：

平常点評価 50% 授業への参加、貢献度等を総合的に評価

その他 50% 口答発表と提出物等を総合的に評価

ドイツ近代国民国家特論

村上 公子

授業概要：「ドイツ」という国がどのような成り立ち方をしたかを、Wege – Irrwege – Umwege, Die Entwicklung der parlamentarischen Demokratie in Deutschland. に採られた論考をもとに学ぶ。

授業の到達目標：近代ドイツ国家が、国民国家としての形を整え、議会制民主主義国家という現在の政体に至るまでの過程を理解する。

授業計画：

第1回：授業概要、テキスト紹介	第9回：Das kaiserliche Deutschland (2)
第2回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (1)	第10回：Das kaiserliche Deutschland (3)
第3回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (2)	第11回：Das kaiserliche Deutschland (4)
第4回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (3)	第12回：Die Weimarer Republik (1)
第5回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (4)	第13回：Die Weimarer Republik (2)
第6回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (5)	第14回：Die Weimarer Republik (3)
第7回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (6)	第15回：Das Dritte Reich
第8回：Das kaiserliche Deutschland (1)	

教科書：Wege, Irrwege, Umwege, Die Entwicklung der parlamentarischen Demokratie in Deutschland. Berlin 2002.

成績評価方法：

レポート 30% 講読テキストの内容から興味ある時期を選んで研究し、報告する。

平常点評価 70% テキストの内容を正確に理解し、出席の上それに基づいて議論する。

生活文化史研究特論

木立 雅朗

授業概要：京都を代表する伝統産業である京焼・清水焼の産地、五条坂における地域史調査の実例を報告し、それがどのような形で展開してきたのか、京都や「伝統工芸」に対するまなざしがそうした学問的営為に対してどのような影響を及ぼしているのかを考える。近代化のなかで、京都は「創られた伝統」としての伝統工芸を完成させてきた。それは他地域との競争のなかでとった近代化戦略であったが、現在は京都に対するまなざしを決定づけ、生活や研究にも大きな影響を与えていることを明らかにする。基本的な研究スタンスは考古学だが、近現代史研究あるいは民俗学・人類学と交差するテーマであり、講義の重点は受講生の関心のありように応じて柔軟に変更していきたい。

授業の到達目標：五条坂を中心とした地域史研究の学問的背景や意義について理解すること。その上で、他地域で類似した研究ができる可能性を模索すること。

授業計画：

第1回：授業ガイダンス 考古学・地域史・京都	第9回：伏見人形と京焼・カワラケ・瓦 ー京焼の周辺ー
第2回：「京都」へのまなざしと地域史	第10回：伏見は「土人形発祥の地」か？ー考古学から見た人形の歴史ー

第3回：「五条坂」を歩くー京焼と伝統的産地、象徴としての登り窯、煙突の思い出、集う人々ー	第11回：五条坂・かわさき商店の磁器人形から見た人形の近代化ー『黒い煙と白い河』の世界ー
第4回：「五条坂」における現代登り窯の発掘調査ー昭和40年代の遺跡ー	第12回：五条坂の民具研究ー棧板・亀板・カタギ箱・ゴウ(匣鉢)、陶器製手榴弾ー
第5回：道仙化学製陶所の聞き取り調査と近現代文書ー貸し窯の実態ー	第13回：近代化をもたらした戦争、打撃を与えた戦争ー信楽焼汽車土瓶と和鏡ー
第6回：五条坂の「化学陶器」(理化学陶磁器)と「民芸陶器」ーこれは「京焼」か？ー	第14回：友禅染の収集と染織産業の現代ー伝統工芸になった染織産業ー
第7回：五条坂の歴史ー文化史・陶磁器史から見た京焼と五条坂ー	第15回：伝統工芸と「京都の近代化戦略」
第8回：伝統産業へのまなざしと現実ー最先端産業としての京焼・高い技術に支えられた民芸ー	

教科書：特に指定しない。

参考文献：テーマごとに配布するプリントにおいて、重要な関連文献を紹介する。

成績評価方法：

レポート 70% 授業内の小レポート(数回)と最終レポートで評価する。

平常点評価 30% 授業への参加度・出席点により評価する。

社会学説特論

西原 和久

授業概要：本年度は、グローバル化時代に対応する社会学説の検討をおこなう。具体的には、まず近代・社会・国家への私たち自身のまなざしを検討した後に、社会学成立期の古典的 sociology 説の意義と問題点を、具体的な歴史的展開を追いながら考察する。あわせて、戦前期と戦後期の日本社会と日本社会学を、アジアや世界を射程に入れながら、現代社会(学)との比較の意味を込めて、検討する。さらに講義の後半では、1960年代を中心とする社会学説を検討した後に、構造主義の思潮も視野に入れて、現代社会学理論に直接につながる1980年代の現代社会学説の検討をおこなう。基本となるのは、これまでの相互行為論と意義と問題点である。

授業の到達目標：現代社会学やその理論がグローバル化時代に果たす役割を理解する。その際、中心となるのは、新たな相互行為論に立脚し、グローバル化時代に対応した、間主観的・人際的な現象学的社会学の視点である。身近な例を数多く取り上げながら、また NPO/NGO の話も交えて、グローバル化時代において「社会学に何ができるのか」を自分なりに考える契機としたい。

授業計画：

第1回：1-1：序論・現代社会を見る眼：近代の特性・二つのインド論？	第9回：4-2：現代社会学の基底2：〈意味社会学〉の相互行為論的視点
第2回：1-2：社会とは何か：社会の構造と変動：市民と国家を問い直す	第10回：5-1：構造主義とポスト構造主義の基本視線：近代批判と言語論
第3回：2-1：19世紀の社会と社会学の成立：社会学の視線をめぐって	第11回：5-2：1980年代の〈統合的 sociology 理論〉：その意義と限界を問う
第4回：2-2：20世紀初頭の世界とアジア：帝国期の社会学のまなざし	第12回：6-1：1990年代の本格的グローバル化：ポスト冷戦下の社会変化
第5回：3-1：1930年代の問い：〈批判的 sociology 理論〉の前提・問い・射程	第13回：6-2：21世紀のトランスナショナリズムとコスモポリタニズム
第6回：3-2：戦前期日本とアジア：東洋と西洋・あるいは近代化と社会学	第14回：7-1：ポスト・グローバル化時代の現象学的社会学と間主観性論
第7回：付 論：戦後期日本社会を問い直す：〈1960年代〉論を中心にして	第15回：7-2：結論・21世紀への社会的問い：アジア・世界への視線
第8回：4-1：現代社会学の基底1：〈機能社会学〉と社会システム理論	

教科書：西原和久・保坂稔編『入門・グローバル化時代の新しい社会学』新泉社、2007年

参考文献：

①西原和久『間主観性の社会学理論——国家を超える社会の可能性』新泉社、2010年

②西原和久・油井清光編『現代人社会学・入門——グローバル化時代の生活世界』有斐閣、2010年

成績評価方法：

レポート 65% レポートによる評価

平常点評価 35% 平常点による評価

備考・関連 URL : <http://kazuhisa-nishihara.com/>

自然人類学特論

藤田 尚

授業概要：自然人類学は、ヒトを生物として捉える学問である。われわれは、他の生物に比して素晴らしく文明を発達させたが、それはいかなる要因によるのか。その一方で、ヒトは難産になり、成長に時間がかかり、他者とのコミュニケーションは非常に複雑になった。授業では、担当教員の専門である古病理学の論文（和文・英文）を輪読していくことにより、自然人類学の先端的研究に触れて欲しい。疾病が人間社会にいかに多大な影響を及ぼしたか。時として疾病は、社会や国家を替えてしまうほどの「威力」を持ち、われわれの歴史を替えてきたのである。ある疾病が人類集団の中にどうして存在することとなったのか、またその疾病の存在意義は何なのかについて考える。温故知新という言葉通り、過去を知らずして現在を理解することはできない。この授業を通して、人類とは何なのかについて、根本的に考える機会として欲しい。

授業の到達目標：大学院で人間科学を専攻する諸君には、人類の進化や過去の人類の歴史を生物学的視点から学ぶことが不可欠である。生物としてのヒトの進化や特徴のすべてを教授することはできないが、最先端の研究および担当教員の専門分野の研究から、自然人類学の重要性和面白さを十分に感じ取ってほしい。そして、おのおのの専攻する人間科学の諸分野に、是非自然人類学の視点や発想を取り入れて、幅と深みのある研究成果を上げられることを期待する。

授業計画：

第1回：自然人類学分野の論文講読	第9回：自然人類学分野の論文講読
第2回：自然人類学分野の論文講読	第10回：古病理学的研究の紹介と講義（パワーポイント使用）
第3回：自然人類学分野の論文講読	第11回：古病理学的研究の紹介と講義（パワーポイント使用）
第4回：自然人類学分野の論文講読	第12回：古病理学的研究の紹介と講義（パワーポイント使用）
第5回：自然人類学分野の論文講読	第13回：古病理学的研究の紹介と講義（パワーポイント使用）
第6回：自然人類学分野の論文講読	第14回：古病理学的研究の紹介と講義（パワーポイント使用）
第7回：自然人類学分野の論文講読	第15回：古病理学的研究の紹介と講義（パワーポイント使用）
第8回：自然人類学分野の論文講読	

教科書：「古病理学事典」同成社

参考文献：使用しない。

成績評価方法：

レポート 50% 理解が適格であるか、また独創性の有無により評価する。

平常点評価 50% 平常点は出席率に置き換える。

備考・関連 URL : 集中講義なので2/3以上の出席が単位取得の条件である。特に初回の授業には極力出席すること。

【健康・生命医科学研究領域】

生体機能学特論

今泉 和彦

授業概要：本特論では、オンデマンド方式により、私達の研究室が最近実施した研究データを中心としてその学術的背景を述べると共に、アルコール代謝、茶カテキン摂取による熱産生能、ドーピング薬物や香辛料辛味摂取による生理機能の応答及び亜鉛欠乏による生体ストレス応答とそのメカニズム等について紹介する。

授業の到達目標：飲酒（＝アルコール摂取）、茶カテキン・香辛料辛味成分・ドーピング薬物等の摂取、ミネラルのうち亜鉛が欠乏したとき、生体機能がどのように変動するかを系統的に把握・理解することを目標におく。

授業計画：

第1回：飲酒（アルコール摂取）と生体機能との関連（1）	第9回：亜鉛欠乏と生体機能との関連（2）
第2回：飲酒（アルコール摂取）と生体機能との関連（2）	第10回：鉄欠乏と生体機能との関連
第3回：飲酒（アルコール摂取）と生体機能との関連（3）	第11回：香辛料（特にトウガラシ成分）摂取と生体機能との関連
第4回：茶カテキン摂取による生体機能との関連（1）	第12回：骨格筋の可塑性（肥大・萎縮）とその調節（1）
第5回：茶カテキン摂取による生体機能との関連（2）	第13回：骨格筋の可塑性（肥大・萎縮）とその調節（2）
第6回：ドーピング作動薬と生体機能との関連（1）	第14回：最近の研究成果の紹介
第7回：ドーピング作動薬と生体機能との関連（2）	第15回：最近の研究成果の紹介
第8回：亜鉛欠乏と生体機能との関連（1）	

参考文献：Sato S, et al.: J Physiol Sci, 60: 119-127 (2010) ; Imaizumi K, et al.: J Toxcol Sci, 35: 583-589 (2010)

成績評価方法：

レポート 50% 5段階評価

平常点評価 50% BBSの発言数とその内容を5段階で評価する

備考・関連 URL：<http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

神経内分泌学特論

山内 兄人

授業概要：からだの機能は液性情報と神経情報にコントロールされている。血液を介して情報を伝達するホルモンは液性情報の代表である。一方、脳は脳神経、脊髄神経により体内外の知覚情報を受け、かつ、筋や内臓に指令情報を送る神経情報の本部である。ホルモンを分泌する内分泌器官も神経制御を受け、脳の神経細胞もホルモンによって影響を受ける。また、脳そのものからも、ホルモンが分泌されている。内分泌系と神経系のお互いの関係や、神経と内分泌系によるからだの機能の制御を明らかにしていく学問が神経内分泌学である。この講義では、性行動や母性行動、排卵、妊娠、授乳などの生殖生理の神経内分泌制御を研究室の最新の知見を中心に学ぶ。特にセロトニン神経に焦点をあてる。

授業の到達目標：脳による生殖機能制御と脳の性分化におけるセロトニン神経の役割を理解する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：セロトニンと妊娠
第2回：脳機能	第10回：セロトニンと母性行動、授乳
第3回：セロトニン神経	第11回：性分化序説
第4回：内分泌学	第12回：脳機能の性分化1
第5回：雌生殖機能序説	第13回：脳機能の性分化2
第6回：セロトニンと雌性行動	第14回：セロトニンと性分化1
第7回：セロトニンと雄性行動	第15回：セロトニンと性分化2
第8回：セロトニンと排卵	

教科書：脳がこどもを産む 平凡社選書 194 1999

参考文献：脳の性分化 裳華房 2006、ホルモンの人間科学 コロナ社 2006、脳の人間科学 コロナ社 2006、性差の人間科学 コロナ社 2008

成績評価方法：

レポート 80% より深く要点をまとめてあるかどうかで評価する

平常点評価 20% 討論における態度

備考・関連 URL：講義順、内容が変わることもあります。教科書は授業前に必ず読んでおいてください。

<http://www.f.waseda.jp/hedgehog/>

研究室：E530号室

運動制御・バイオメカニクス特論

鈴木 秀次

授業概要：日常生活やスポーツ活動時に起こる動きの仕組みを運動制御とバイオメカニクスの立場から解説し、その動きの科学的根拠がどこにあるかを講義する。特にいま話題となっている初動負荷理論について、なぜこのトレーニングによって、スポーツ活動に必須の条件であるスピードとパワーがそなわり、躍動感、リズム、爆発力が身につくのか。さらにこのトレーニングによって、柔軟性が高まり、怪我の予防と健康増進につながるのかについて最近の実験データを踏まえながら解説する。

(本授業は、全回オンデマンド授業として実施します)

授業の到達目標：日常生活やスポーツ活動時に起こる動きの仕組みを運動制御とバイオメカニクスの立場から理解することを本授業の到達目標とする。

授業計画：

第1回：(オンデマンド授業) はじめに	第9回：(オンデマンド授業) 随意運動
第2回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングと従来の筋力トレーニングとの違い	第10回：(オンデマンド授業) 運動における小脳の係わり
第3回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニング動作のキネマティクス	第11回：(オンデマンド授業) 運動における大脳基底核の係わり
第4回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニング動作のキネティクス	第12回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングの効果1
第5回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニング動作時の筋活動	第13回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングの効果2
第6回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングによる動きづくり	第14回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングの今後の課題
第7回：(オンデマンド授業) 運動における筋紡錘の係わり	第15回：(オンデマンド授業) まとめ
第8回：(オンデマンド授業) 反射運動	

参考文献：Neuromechanics of Human Movement (4th Ed) Roger Enoka, Human Kinetics 2008 (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

成績評価方法：

レポート 70% 与えられた課題を講義内容の視点と絡めて深く考察しているかどうかを評価します (Course N@vi 上から)。

平常点評価 30% 毎回の授業において自身の理解度や授業の感想などを Course N@vi 上からレポートする。

備考・関連 URL：本授業は、全回オンデマンド授業として実施する。

<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

神経機能学特論

永島 計

授業概要：講義では神経機能、特に自律神経に焦点をあて解説を加えていく。特に自律神経の解剖、生理を整理するとともに現在すすんでいる研究のトピックスをテーマに進行する。大学院生が対象であるので、まず個々にテーマを与えプレゼンテーションをしながら、解説していく。トピックスとしては代謝、摂食、体温、体液、生体リズム、睡眠などをあげ、その研究法などについても理解を深めることを目的とする。論文、総説などを題材とする。

授業の到達目標：一般的な神経科学にかかわる基礎知識を身につける。

授業計画：

第1回：自律神経の解剖、生理の基本の理解	第9回：睡眠 (神経機構)
第2回：視床下部、脳幹の機能の理解	第10回：睡眠 (分子機構)
第3回：体温調節と自律神経 (1)	第11回：体液調節 (1)
第4回：体温調節と自律神経 (2)	第12回：体液調節 (2)
第5回：摂食の調節 (神経機構)	第13回：運動と自律神経 (1)
第6回：摂食の調節 (ホルモン)	第14回：運動と自律神経 (2)
第7回：生体リズム (神経機構)	第15回：総括とレポート
第8回：生体リズム (分子機構)	

成績評価方法：

試験 10% 小テストを随時行います。

レポート 30% 適時レポートを提出 評価します。

平常点評価 60% 出席 授業への積極的な参加を評価します。

応用健康科学特論

竹中 晃二

授業概要：従来、健康教育の研究では、ヒトの健康阻害要因の除去や制御、たとえば喫煙、飲酒、栄養（肥満）、運動不足、ストレス問題など、健康に対するネガティブな要因を別々に評価し、それらを除去したり、変容させることに注意が向けられていた。しかし、最近ではヒトの健康関連問題を「総合的」に捉えたり、健康関連問題を「行動」として扱う視点が主流を占めるようになってきた。前者の観点では、健康阻害要因のそれぞれは複雑にリンクしており、そのため総合的な健康プログラムとしてのウエルネス活動、またはヘルスプロモーション活動が注目を浴びている。たとえば、健康危険因子の評価、禁煙、血圧コントロール、運動や体力作り、体重コントロール、栄養教育、ストレス・マネジメント、腰痛予防などを一つの総合的プログラムとして扱い、健康教育と実践を一つの範疇で捉える動きである。もう一つの観点は、ヒトの健康に関わる行為を「行動」と見なし、その行動を変容させたり維持させるためにいくつかの健康行動モデルを想定し、それらのモデルによって介入を考えるという研究である。

授業の到達目標：行動変容における理論・モデルおよび技法についての理解とそれらの適用例について熟達する。

授業計画：

第1回：講義の概要と背景	第9回：健康指導に活かすカウンセリング
第2回：健康行動変容	第10回：高齢化社会と転倒予防
第3回：健康行動変容プログラム開発の興味とグループ分け	第11回：プログラム開発の手順と方法
第4回：子どもの健康づくり	第12回：プログラム開発の中間発表
第5回：ヘルスコミュニケーション	第13回：ヘルスプロモーションビデオの鑑賞
第6回：ストレスマネジメント	第14回：効果的なデリバリーチャンネル
第7回：ダイエットプログラム	第15回：スクーリング：グループ別研究発表
第8回：禁煙プログラム	

教科書：行動変容：健康行動の開始・継続を促すしかけづくり（健康・体力づくり事業財団）

成績評価方法：

レポート 30% 課題レポート

平常点評価 30% 課題の提出（書き込み課題）

その他 40% グループ別発表の完成度。毎回のBBSへの書き込み課題、小レポートの提出、スクーリングにおける研究発表および課題レポートによって加算評価を行う。

備考・関連URL：<http://takenaka-waseda.jp/>

分子神経科学特論

榊原 伸一

授業概要：神経系は生物の行動を効率的に行うために外界からの情報を伝達、処理するために発達したシステムであり、人間の生理現象や行動をコントロールする重要な器官である。しかしその形成される過程や発達後に維持されるメカニズムはまだわからないことが多いのが現状である。本講義では脳や脊髄の構築を概観し、さらにその発生過程を分子レベル、細胞レベル、組織レベルの各レベルから多面的に理解することを目指す。また各自の興味を持つ神経科学に関するトピックスについてプレゼンテーションを行うとともに、代表的ないくつかの研究論文（英語）を輪読することによって、教科書や講義では得られないより深い理解を目指す。

授業の到達目標：神経系の構造と各部の働き、形成過程を理解する。脳の様々な回路について理解し、解説できる能力を身につける。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：演習（プレゼンテーション）③
第2回：神経系の概観 各部の形態と機能	第10回：演習（プレゼンテーション）④

第3回：神経組織の成立と構成細胞（ニューロンの構造と機能・グリアの種類と機能）	第11回：演習（プレゼンテーション）⑤
第4回：神経系の発生メカニズム	第12回：演習（論文輪読）
第5回：脳の回路（記憶）	第13回：演習（論文輪読）
第6回：脳の回路（言語と精神疾患）	第14回：演習（論文輪読）
第7回：演習（プレゼンテーション）①	第15回：レポート課題指定と質疑応答
第8回：演習（プレゼンテーション）②	

教科書：各回に配布資料、印刷物を配布する。

参考文献：Principles of Neural Science, 4th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York
ISBN 0-8385-7701-6

成績評価方法：

レポート 20% レポート内容

平常点評価 80% 出席、プレゼンテーション、発言の積極性

【健康福祉科学研究領域】

生体計測学特論

村岡 慶裕

授業概要：生体計測の理解を深めるために、誘発筋電図の測定、ストレインアンプによる筋力測定等の課題に加え、起立、（装具）歩行、上肢動作等の各動作を3次元動作計測装置や床反力計と筋電計により運動計測を行う。得られたデータを周波数解析や、統計処理等を行い、結果について討議することで、計測・解析・考察という研究の一連の手順を体得する。

授業の到達目標：運動課題の計測を行うことによって、生体計測の理解を深める。得られたデータの解析や統計的処理を行い、結果について討議することで、計測・解析・考察という研究の一連の手順を体得する。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：信号処理されたデータを統計ソフトで分析及びデータの解釈・討論（3）
第2回：生体計測系の構築（1）：ストレンゲージによる力測定	第10回：筋電図の計測（1）：データの取得と解析
第3回：生体計測系の構築（2）：LabVIEWによるAD変換器を介してのデータ取得と表示プログラムの作成	第11回：筋電図の計測（2）：データの解釈と討論
第4回：生体信号処理（1）：FFT、相互相関関数、自己相関関数、同期加算、移動平均処理の説明	第12回：筋電図の計測（3）：データの解釈と討論
第5回：生体信号処理（2）：Matlab、LabVIEWを用いたFFT、相互相関関数、自己相関関数、同期加算、移動平均処理の実習	第13回：椅子からの立ち上がり動作（1）：筋活動解析と3次元動作解析によるデータ解析、解釈・討論
第6回：生体信号処理（3）：Matlab、LabVIEWを用いたFFT、相互相関関数、自己相関関数、同期加算、移動平均処理の実習	第14回：椅子からの立ち上がり動作（2）：筋活動解析と3次元動作解析によるデータ解析、解釈・討論
第7回：データ解析及び討論：信号処理されたデータを統計ソフトで分析（検定、分散分析、相関分析、回帰分析など）及びデータの解釈・討論（1）	第15回：レポート課題と解説
第8回：信号処理されたデータを統計ソフトで分析及びデータの解釈・討論（2）	

成績評価方法：

レポート 30% 課題は、第15回の授業で提示します。与えられた課題を講義内容の視点と絡めて深く考察しているかどうかを評価します。

平常点評価 70% 講義・討論への積極性を評価します。

備考・関連 URL：他の高価生体計測機器などが使用が可能になった場合には、適宜体験していく予定なので、講義内容は変更する場合もある。

福祉ロボット工学特論

可部 明克

授業概要：各国で研究開発が進められているサービスロボット、特に福祉ロボットについて要素技術を調査し、ベースとなるロボット（e-PUCK ロボットなど）を使用して機能設計を行い、開発プロジェクトを経験する。

また、課題提出により自らの専門分野に関連するロボット技術の深堀を行う。

“For International Students”

A project oriented course dealing with the overall principles of Service Robotics, currently developed in the world, especially for healthcare and welfare purposes. Pick up several technical issues as introduction, and design the main functions based on the robot system for education (e-PUCK robot, and others).

The final report about specific technical issues of robotics, related to major of each student, is required.

1. Trajectory Control of Robot (Mechanical Structure, 3D-Coordinate Frames, Numerical Control)
2. Sensor System of Robot (Vision, Voice Recognition, Bio-sensor, RF-ID)
3. Network System (Basic Configuration, Communication Protocol, Specific Network)
4. Application Systems of Robot (Application Functions for Healthcare and Welfare, Bio-sensor systems, Other Application Systems)

Note: The main language of this course is Japanese. Instructions and Information are provided in English for International Students additionally.

授業の到達目標：ロボットの要素技術を理解し、e-PUCK ロボットなどに実装する仕様および機能の詳細を検討する。

“For International Students”

Understand the technical elements of Robotics, and study how to implement the required specification and functions on e-PUCK robot or other robots.

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：ネットワークシステム（通信プロトコル）
第2回：ロボットの動作制御（基本構造の把握）	第10回：ネットワークシステム（具体的なネットワークシステム）
第3回：ロボットの動作制御（システム構成、座標系）	第11回：課題：ロボットの応用システム設計（機能1：特定アプリケーションなど）
第4回：ロボットの動作制御（制御方法）	第12回：課題：ロボットの応用システム設計（機能2：生体計測応用システムなど）
第5回：ロボットのセンサシステム（ビジョン）	第13回：課題：ロボットの応用システム設計（まとめ）
第6回：ロボットのセンサシステム（音声）	第14回：最終レポートの作成
第7回：ロボットのセンサシステム（IC タグ、生体センサー等）	第15回：最終レポートによるディスカッション
第8回：ネットワークシステム（基本構成）	

成績評価方法：

平常点評価 100% 授業での発言頻度・内容、プロジェクトの検討内容、課題提出

その他 “For International Students”

1. Contribution by discussion
2. Project Achievement (Creativity, Speciality, Feasibility)
3. Final Report

老年社会福祉学特論

加瀬 裕子

授業概要：老年学は、個人の身体的変化から社会的現象まで、老化に伴う諸問題について研究する学問である。老化に伴う問題を、社会福祉学の視点から研究する老年社会福祉学は、単に老人福祉を対象とするものではない。高齢化や少子化によって生じる個人の生活への影響や社会構造への影響について、国際的動向を踏まえて概説する。

授業の到達目標：学部で老年学を学んでいない者は、この授業を通じて高齢者の現状について基礎的知識を体得することをめざす。すでに老年学の知識のある者は国際的動向について知識を深めることをめざす。

授業計画：

第1回：高齢者の身体的、心理的、社会的変化	第9回：アメリカの高齢者介護
第2回：高齢者の生活保障	第10回：高齢者の在宅ケア—介護保険と在宅サービスの現状—
第3回：高齢者の健康と医療政策の焦点	第11回：高齢者の在宅ケア—チームアプローチとケアマネジメント—
第4回：高齢者の健康づくりとサクセスフル・エイジング	第12回：変わる高齢者のネットワークと地域包括支援センターの役割
第5回：高齢者の心理と意識	第13回：認知症ケア 1
第6回：高齢者の社会貢献	第14回：認知症ケア 2
第7回：老人福祉法と老人福祉サービス	第15回：授業のまとめ
第8回：アメリカの高齢者住宅	

成績評価方法：

レポート 100% 先行研究を踏まえていること。アカデミックライティングによる明解な記述であること。

生命医療倫理学特論

土田 友章

授業概要：Bioethics の関心領域とそのいくつかの話題を紹介し、さらに文化思想史的多様性を考慮しつつ、bioethics の枠組み、基本的視座、方法を再検討する。可能であれば、参加者各人に研究発表をしてもらい、ともに検討して、bioethics の理解を深める。

授業の到達目標：討議を通して、現代実践倫理の意義と方法を理解する。

授業計画：

第1回：バイオエシックスとは？：実践倫理として	第9回：臨床の場面から（8）臓器移植
第2回：臨床の場面から（1）終末期 その医療人間的諸問題	第10回：臨床の場面から（9）出生前診断・着床前診断、妊娠中絶
第3回：臨床の場面から（2）慢性疾患、障害	第11回：生殖補助医療
第4回：臨床の場面から（3）治療拒否	第12回：遺伝情報、遺伝子治療
第5回：臨床の場面から（4）尊厳死・安楽死	第13回：Enhancement
第6回：臨床の場面から（5）介助自殺	第14回：「健康」という価値
第7回：臨床の場面から（6）脳死	第15回：総論 新たな倫理に向かって
第8回：臨床の場面から（7）臓器移植	

成績評価方法：

レポート 30% プレゼンテーション

平常点評価 70% 出席、討議への参加

健康福祉管理特論

扇原 淳

授業概要：本講義では、健康管理と福祉管理の2つの領域に関する最新の研究成果や政策の現状と展望について概説する。健康管理領域では、日本および世界が抱える健康問題（人口・保健統計、感染症、生活習慣病、環境汚染、気象・気候、薬物、国際保健協力等）とその対策の現状について具体的事例を挙げるとともに最新の研究成果について概説する。福祉管理領域では、福祉管理政策・制度の歴史、現実の福祉行政組織・機関・施設等の運営・管理（組織や人材管理の基本、医療保険、介護保険、ヘルスプロモーション、事故防止と安全確保等）および地域福祉管理（NPO、NGO、ボランティア等）の現状と課題および当該分野の研究動向について概説する。

授業の到達目標：

- 1）日本および世界が抱える健康問題とその対策の現状について説明できる。
- 2）日本の福祉政策や地域福祉の現状とその問題点について説明できる。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：保健医療福祉における格差（2）
第2回：公衆衛生と疫学統計指標	第10回：社会福祉計画

第3回：人口問題	第11回：地域福祉と介護保険
第4回：予防医学と母子保健	第12回：福祉施設の財源と経営戦略
第5回：健康教育と学校保健	第13回：福祉施設の人材確保・育成・定着
第6回：地球環境問題と水問題	第14回：福祉施設のリスクマネジメント
第7回：国際保健医療教育支援活動	第15回：まとめ
第8回：保健医療福祉における格差（1）	

成績評価方法：

試験 0% 試験は実施しない。

レポート 40% 課題に対する、客観性、論理性、独自性、発展性、文章構成および表現の点から総合的に評価する。

平常点評価 60% プレゼンテーションおよびディスカッションも含めた授業に対する積極性を評価する。

予防医学特論

町田 和彦

授業概要：授業計画に見られるように、私は過去40年間以上衛生学・公衆衛生学に席を置き、予防医学のほとんどの分野の授業と研究を行ってきた。この授業は私が行ってきた研究方法について通常の論文には表われてこない調査の仕方や実験の手技等も含め、その研究についてオンデマンド上で授業を行い、それについての各人の感想や質問、あるいはディスカッションをしてもらい予防医学全体についての理解を深めることを目標としている。

授業の到達目標：この授業は私の研究生活を振り返り、論文にはないその研究の発想、具体的な実験や調査のやり方、さらに予防医学とはどのようなものかを理解してもらう事を目的としている。そのため、オンデマンド授業による各授業からそのようなことを学んでもらい、自分の研究や生き方に生かしてもらいたいと思う。

授業計画：

第1回：予防医学と私の足跡—実験科学と調査—	第9回：河川水と水道水の比較調査、大学時代の運動と中高年の健康（質問紙法による調査）
第2回：生物学の進歩・環境衛生（日内リズム：動物実験）	第10回：分子予防医学研究（動物実験による日内リズム研究を中心にして）
第3回：感染症の疫学—梅毒、日本脳炎、麻疹調査—	第11回：狭山市と名栗村における健康増進運動：血清疫学的調査を含めた総合調査
第4回：重金属代謝実験（動物実験）	第12回：天津市における健康増進運動と医療行動調査
第5回：カドミウム投与実験と鉱山地域の環境汚染調査	第13回：天津市におけるスピリリナ投与調査、マッサージの効果調査
第6回：山村無医地区の健康管理—非A非B型肝炎、ATLの血清疫学調査	第14回：日本・韓国における高齢者施設の感染症対策と生きがいづくりと健康
第7回：ミネラルと健康（動物実験）、栄養調査、体力科学研究	第15回：研究発表
第8回：適度な運動・ストレスと非特異免疫を中心とした生体防御機能（動物実験）	

成績評価方法：

その他 オンデマンド授業の感想とレポートで評価

福祉教育特論

前橋 明

授業概要：本講では、児童を対象にした福祉教育をとりあげる。福祉教育は、将来、社会の担い手となる子どもたちが、人を人として尊び、人間一人ひとりが平等で、かつ、相互に思いやりの心で援助し合っていくという「福祉」の心を育てることを通して、福祉に対する理解と関心を深めるとともに、社会に奉仕する実践的態度の育成を図ることをねらいとする。また、福祉教育は、子どもたちの人間性の育成に密接な関わりをもつものであるから、学校における教育活動だけでなく、学校外における家庭や地域の全教育活動を通して行う必要性を理解する。

そこで、本講では、学校ならびに家庭や地域における福祉教育のあり方やその具体的実践について演習する。なお、本講義内容は、DP科目 育児保育2-2、2-3、6-2、6-3、6-4、7-2、7-3、7-4、

7-5に該当する。

授業の到達目標：福祉に対する理解と関心を深め、社会に奉仕する態度を育む「福祉教育」のあり方やその具体的実践方法を、講義や与えられた課題を遂行することによって、企画・提案できるようになる。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：育児・保育現場での支援と福祉の心
第2回：福祉教育の目的と内容	第10回：輝く子どもの未来づくり（子ども支援・保護者支援・保育者支援・地域支援を考える）
第3回：高等学校福祉科の現状と課題	第11回：学校ならびに家庭や地域における福祉教育の具体的実践・ボランティア活動
第4回：高等学校福祉科が行っている福祉体験・レポート課題の提示	第12回：レポート課題報告と討論・評価①
第5回：福祉体験Ⅰ（車椅子援助体験）	第13回：レポート課題報告と討論・評価②
第6回：福祉体験Ⅱ（視覚障がい者の方への手引き体験）	第14回：レポート課題報告と討論・評価③
第7回：福祉体験Ⅲ（福祉レクリエーション）	第15回：課題レポートの最終提出と解説
第8回：バリアフリー調査・チェックリスト作成	

教科書：前橋 明『ケアのしごと基本百科』ひかりのくに、2006

参考文献：

前橋 明『子どもの未来づくり1』明研図書、2010

前橋 明『子どもの未来づくり2』明研図書、2010

成績評価方法：

レポート 50% 与えられた課題を講義内容を絡めて考察・論述しているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 発表やディスカッションへの参加を評価する。

児童家庭福祉特論

川名 はつ子

授業概要：少子高齢社会の脅威を強調した社会防衛のための少子化対策を超えて、誰もが人間らしい生き方を追求できるように、子どもと家庭の側から「よりよく生きること」を考えたい。児童家庭福祉を専攻しない院生の受講も考慮し、この分野について刺激的問題提起を含む教科書を選定した。「子どもとは何か」「子どもの権利」などの問題意識を念頭におき、トピックスや事例をまじえた講義とする。また子どもの居場所見学も行う。

本講義内容は、DP科目基礎1-3、4-1、DP科目認知2-1、2-2、DP科目社会情動1-6、1-7およびDP科目育児保育1-1、1-2、2-1、2-2、6-2、6-6、7-3、7-4、7-5、7-7に該当する。

授業の到達目標：現代社会を生きる子どもと家庭の置かれた困難な事態を理解し、乳幼児保育の場や学校・地域で包括的に子育てを支援していくための視点を獲得する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：子どもの居場所考（その1）
第2回：子どもの権利規範の形成過程（権利思想、権利論、権利宣言、権利条約）	第10回：子どもの居場所考（その2）
第3回：スウェーデンの「子どもの権利絵本」に学ぶ	第11回：子どもの居場所見学（その1：早期療育教室）
第4回：子どもの権利条約（その1：子どもの参加）	第12回：子どもの居場所見学（その2：フリースクールなど）
第5回：子どもの権利条約（その2：子どもの意見表明権）	第13回：見学レポートの発表（その1）
第6回：子どもの権利条約（その3：教育を受ける権利）	第14回：見学レポートの発表（その2）
第7回：いじめ・不登校・ひきこもり（その1）	第15回：討論（子どもと家庭への支援のあり方）
第8回：いじめ・不登校・ひきこもり（その2）	

教科書：浜田寿美男『子ども学序説－変わる子ども、変わらぬ子ども』岩波書店、2009年

参考文献：随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法：

レポート 80% 授業内のミニレポートや見学レポートにより理解度と考察の独自性を評価する。

平常点評価 20% 見学レポートのグループ発表への参加度、出席状況を評価する。

その他 全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連 URL：NPO 法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

精神保健福祉特論

田中 英樹

授業概要：精神保健福祉学は、精神保健という特定領域分野における社会福祉の政策と実践を範疇に形成されつつある。しかし、成立間もない若い学問であり、その体系化は今日の課題でもある。歴史的に見ると精神保健福祉学は、1997年の精神保健福祉士法の制定により、指定科目として「精神保健福祉論」が登場したことを契機に実体化した。この内容には、精神障害者福祉論そのものであり、必ずしも精神保健福祉と同義語ではない。しかし、精神保健福祉学の主要な内容であることも明らかである。

そこで、本講義では、精神障害者福祉をベースに広く精神保健福祉を国民の精神保健全般を福祉的視座から論考・解題していくこととする。講義では、精神障害者福祉の歴史と形成過程、関連する法の変遷、障害の構造的な理解、障害者自立支援法、関連施策、精神障害者の現状と人権、スティグマ、メンタルヘルスの諸課題などを取り上げながら考察していきたい。

授業の到達目標：

- 1) 精神保健福祉学の視点を学び、その概要を理解させる。
- 2) 精神保健福祉が当面する今日的な課題について、主体的に調べ、考える力を函養する。
- 3) 精神保健福祉の視点から関心のあるテーマを掘り下げ、発表する力をつけさせる。

授業計画：

第1回：わが国の精神保健・精神保健福祉の現状	第9回：精神保健福祉士の役割
第2回：障害者福祉の理念と精神保健福祉学	第10回：精神障害者リハビリテーションの課題
第3回：精神保健福祉の歴史（日本）	第11回：精神障害者の人権
第4回：精神保健福祉の歴史（欧米）	第12回：関連法、関連施策について
第5回：精神保健福祉の歴史（アジア・オセアニア）	第13回：相談援助活動とストレスモデル
第6回：精神医学の基礎知識	第14回：精神保健福祉とコミュニティソーシャルワーク
第7回：メンタルヘルスとライフサイクル	第15回：レポート課題と解説
第8回：精神障害者施策の現状	

成績評価方法：

レポート 30% レポートによる評価

平常点評価 70% 授業の出席を重視します。

健康福祉支援工学特論

畠山 卓朗

授業概要：障がいがある人と生活支援機器、さらにはそれを取り巻く社会環境に着目し、障がいがある人の生活の質（Quality of Life）向上を目指した研究を行うための基礎を身につけます。

授業の到達目標：生活支援機器全体像の把握、機器が果たす役割と今後の課題の明確化ができるようになる。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：バリアフリーを考える（1）
第2回：障がいを考える	第10回：バリアフリーを考える（2）
第3回：自立を考える	第11回：ユニバーサル・デザイン（1）
第4回：人と生活環境、社会・自然・動物との相互作用	第12回：ユニバーサル・デザイン（2）
第5回：動機付けはいかにして導き出されるか	第13回：人間中心設計について
第6回：生活支援機器とその役割	第14回：まとめ、レポート課題提示
第7回：生活支援機器供給システムのあり方	第15回：フリーディスカッション
第8回：障がい者用インタフェース	

教科書：ありません
 参考文献：適宜紹介します
 成績評価方法：
 レポート 50% 最終レポート課題
 平常点評価 50% 参加度・貢献度、課題提出状況、修士論文完成度などを総合的に評価する
 備考・関連 URL：http://homepage2.nifty.com/htakuro

ソーシャルワーク特論

岩崎 香

授業概要：主要なソーシャルワーク理論に関する考察を深め、実践に関する実証研究のあり方を学ぶことを目的とする。

まず、ソーシャルワーク理論の歴史を概観し、主要なソーシャルワーク理論について学ぶ。その上で近年のソーシャルワーク実践に関する実証研究の方法論の動向を理解し、理論と実践のあり方、現状について考察する。

また、模擬的に質的データの分析をグループで行う。

授業の到達目標：ソーシャルワーク実践と研究の関連性、実証研究の必要性に関して理解する。

授業計画：

第1回：授業に関するオリエンテーション	第9回：ソーシャルワークにおける研究手法（3）
第2回：ソーシャルワークにおける研究動向	第10回：実証研究（1）
第3回：ソーシャルワークの実践理論（1）	第11回：実証研究（2）
第4回：ソーシャルワークの実践理論（2）	第12回：実証研究（3）
第5回：ソーシャルワークの実践理論（3）	第13回：実証研究（4）
第6回：日本におけるソーシャルワーク実践と研究	第14回：実証研究（5）
第7回：ソーシャルワークにおける研究手法（1）	第15回：まとめ
第8回：ソーシャルワークにおける研究手法（2）	

成績評価方法：

レポート 50% 質的データに基づく論述の確かさ
 平常点評価 50% 授業における発表及びディスカッションへの参加

【臨床心理学研究領域】

社会病理学特論

野村 忍

授業概要：現代社会は、技術革新、情報化、グローバル化、少子高齢化社会など多くの難問に直面している。こうした社会環境の中で生活する現代人は多くのストレスを経験している。ストレスの影響は、不快な情動変化とそれに伴う身体的変化、さらにはそれらを解消するための行動変化としてあらわれる。したがって、ストレス性健康障害としては、種々の心理反応、身体反応と行動上の問題に分類される。この科目では、産業ストレスの今日的課題、ストレスのアセスメント法、および種々の社会病理的問題の対策について講義する。

授業の到達目標：今日的な種々の社会病理的問題とその対策について理解する。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：気分障害
第2回：社会病理学総論	第10回：不安障害
第3回：労働安全衛生法の解説	第11回：適応障害
第4回：ストレスのアセスメント	第12回：研究発表（1）
第5回：テクノストレス	第13回：研究発表（2）
第6回：アルコール性障害	第14回：研究発表（3）
第7回：過労死	第15回：レポート課題と解説
第8回：過労自殺	

参考文献：野村忍、情報化時代のストレスマネジメント、日本評論社、2006

成績評価方法：

レポート 50% レポート及び発表の内容について評価する。
 平常点評価 50% 全回出席を原則とし、欠席は減点する。

臨床心理査定特論Ⅱ

佐々木 和義、大月 友

授業概要：対象者理解の留意点、様々な心理査定法の解釈法、行動観察法、テストバッテリーの組み方、および報告書の書き方について講義する。

授業の到達目標：臨床心理の査定の力量（査定方法と評価書）が専門家の水準に到達すること。

授業計画：

第1回：心理査定とは。知能検査の歴史。田研式ビネー検査とウェクスラー式知能検査の構造の比較。	第9回：パーソナリティ検査の解釈と報告書の作成
第2回：他の知能検査、発達検査。対象者の状態像（注意・覚醒水準、感覚・認知障害、失行など）。	第10回：パーソナリティ検査のフィードバック
第3回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（1）	第11回：行動的アセスメント：機能分析
第4回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（2）	第12回：機能分析実習：不安障害
第5回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（3・4）	第13回：機能分析実習：気分障害
第6回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（5・6）	第14回：機能分析実習：学校不適応
第7回：K-ABCについて。心理評価書の書き方。	第15回：テストバッテリーの考え方
第8回：パーソナリティ検査の理論と実施法	

教科書：なし。適宜資料を配布する。

参考文献：講義中で適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 与えられた課題を講義内容を踏まえて深く考察しているか評価する。

平常点評価 50% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連 URL：第1～7回は佐々木担当。8～15回は大月担当。

臨床心理学特論Ⅱ

金築 優

授業概要：認知行動療法と相互補完的な関係にある、構成主義心理療法（constructive psychotherapies）、なかでも特に、George Kelly によって提唱されたパーソナル・コンストラクト療法（Personal Construct Therapy）について学ぶ。そのために、関連の文献を輪読し、議論する。

授業の到達目標：構成主義と構成主義心理療法の概要を理解したうえで、構成主義心理療法の代表格であるパーソナル・コンストラクト療法の理論と実際について、基礎的な知識を習得する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：「ジョージ・ケリイ研究（2）」（論文）に関する発表と討論（1）
第2回：構成主義心理療法とパーソナル・コンストラクト療法の概説	第10回：「ジョージ・ケリイ研究（2）」（論文）に関する発表と討論（2）
第3回：「構成主義心理療法に対する評価」（論文）に関する発表と討論（1）	第11回：「ジョージ・ケリイ研究（2）」（論文）に関する発表と討論（3）
第4回：「構成主義心理療法に対する評価」（論文）に関する発表と討論（2）	第12回：「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」（論文）に関する発表と討論（1）
第5回：「構成主義心理療法に対する評価」（論文）に関する発表と討論（3）	第13回：「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」（論文）に関する発表と討論（2）
第6回：「ジョージ・ケリイ研究（1）」（論文）に関する発表と討論（1）	第14回：「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」（論文）に関する発表と討論（3）
第7回：「ジョージ・ケリイ研究（1）」（論文）に関する発表と討論（2）	第15回：「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」（論文）に関する発表と討論（4）
第8回：「ジョージ・ケリイ研究（1）」（論文）に関する発表と討論（3）	

教科書：必要に応じて資料を配布する。

参考文献：授業計画で示した4本の論文（講義前に配付する予定である）
 マイケル・J・マホニー編 根建金男・菅村玄二・勝倉りえこ監訳 認知行動療法と構成主義心理療法 理論・研究そして実践 金剛出版

成績評価方法：
 レポート 30% 授業の理解度を評価する。
 平常点評価 40% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。
 その他 30% 出席状況を評価する。

備考・関連 URL：講義の前に、受講生を4グループに分け、授業計画にある4つの論文に関して、1グループにつき1つの論文発表を割り振る予定である。各グループには、講義の前に論文発表の十分な準備をしておくことを求める。また、受講生には、講義の前に上記の4つの全ての論文を熟読しておくことを求める。

臨床心理面接法特論Ⅰ

菅野 純

授業概要：臨床場面でのインテーク面接から終了に至るまでのプロセスを実習を通して学んでいく。主にクライエントセンタードの技法を中心に、クライエントの見たて方、カウンセリング上生じる諸問題の解決法などを学ぶ。描画療法、コラージュ、箱庭療法、プレイセラピーの実習も行っていく。

授業の到達目標：クライエントセンタードのアプローチ、描画療法、プレイセラピーなどの理論と実際について、基礎的な素養を身につける。

授業計画：

第1回：臨床心理面接法概論	第9回：カウンセリング実習（3）保護者編
第2回：発達検査（WISC-Ⅲ）施行法	第10回：カウンセリング実習（4）親子編
第3回：発達検査（WISC-Ⅲ）解釈法	第11回：描画療法実習
第4回：生育歴調査の方法	第12回：スキュグル法実習
第5回：初回面接実習（1）	第13回：プレイセラピー実習
第6回：初回面接実習（2）	第14回：コラージュ法実習
第7回：カウンセリング実習（1）児童編	第15回：箱庭療法実習
第8回：カウンセリング実習（2）生徒編	

成績評価方法：
 平常点評価 100% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。

教育臨床心理学特論

菅野 純

授業概要：現代の学校教育場面では、従来の教育的方法では対処できない問題が数多く出現している。たとえば、子供の発達障害から不適応行動、家庭崩壊や愛情飢餓など心理環境的原因からくる問題行動、そして子どもへの指導や保護者の対応などに悩み追い詰められていく教師たち…など学校はあたかも社会の縮図のごとく問題が折り重なっている。それらの問題に対して、文化的・社会的および歴史的視点を踏まえた臨床心理学的理論と方法を用いて説明をはかりたい。

授業の到達目標：教育臨床心理学の理論と方法を学び、各自の臨床実践に結実させる。

授業計画：

第1回：教育臨床と心理臨床	第9回：青少年の攻撃性（4） 現代における事例②
第2回：社会的ひきこもり問題（1） 文化的考察	第10回：「心の癒し」（1） 教育臨床心理学的考察
第3回：社会的ひきこもり問題（2） 教育臨床心理学的考察	第11回：「心の癒し」（2） 心理臨床学的考察
第4回：社会的ひきこもり問題（3） 現代におけるひきこもり事例	第12回：時代の中の青年心理（1） 文化・教育臨床心理学的考察
第5回：社会的ひきこもり問題（4） ひきこもりと犯罪	第13回：時代の中の青年心理（2） 事例検討
第6回：青少年の攻撃性（1） 文化的考察	第14回：教育臨床心理学の方法
第7回：青少年の攻撃性（2） 教育臨床心理学的考察	第15回：文化臨床心理学の方法
第8回：青少年の攻撃性（3） 現代における事例①	

成績評価方法：

試験	60%	授業内容の理解度と応用力を問う。
レポート	20%	課題の趣旨を理解し、どれだけ多くの文献参照を行ったかを問う。
平常点評価	20%	授業中に行う発問やミニレポートに対する回答の評価。

臨床心理査定特論Ⅰ

熊野 宏昭

授業概要：ロールシャッハ・テストは、投影法パーソナリティ検査の中で臨床現場で最もよく使われているものである。その理由は、パーソナリティ障害、精神病性障害、発達障害などが疑われる場合に、1回の検査で臨床的判断に役に立つ情報が得られるからである。また、他の投影法検査と比べて、はるかにデータベースが充実しており、自動診断システムも開発され、実証的な研究の数が多いことも利点となる。本講義では、3人一組のグループを構成してお互いに検査を実施し、さらにはスコアリング法、解釈法などに関する発表を担当しながら、スコアリングと解釈の進め方を身につける。さらに、パソコンによる自動診断システムの使用法も学ぶ。

授業の到達目標：検査の実施法、スコアリング法、解釈法に関する基礎知識を身につけ、臨床現場で実地に使用するために必要な能力を養成することを目標にする。

授業計画：

第1回：心理アセスメントとロールシャッハ	第9回：スコアリング実習（3）
第2回：ロールシャッハ・テスト実施技法	第10回：解釈のための基礎知識
第3回：検査実施実習（1）	第11回：解釈実習（1）
第4回：検査実施実習（2）	第12回：解釈実習（2）
第5回：検査実施実習（3）	第13回：解釈実習（3）
第6回：スコアリングのための基礎知識	第14回：その他の投影法概説
第7回：スコアリング実習（1）	第15回：臨床心理アセスメント学展望
第8回：スコアリング実習（2）	

教科書：持参を勧めるもの—改訂臨床心理アセスメントハンドブック（北大路書房）。

参考文献：適宜紹介するが、手引き・解説書は貸与する。

成績評価方法：

レポート	20%	発表の際のレポートについて評価する。
平常点評価	80%	授業出席や発表参加状況等から評価する。

備考・関連 URL：下記 URL にある「ロールシャッハ自動診断システム」を使用する。

<http://www.soc.nii.ac.jp/jspp/doc/pro00.html>

臨床心理学特論Ⅰ

鈴木 伸一

授業概要：うつ病（うつ病性障害障害）、不安障害、適応障害、摂食障害、身体表現性障害などといった成人に比較的多く見られる精神関連障害の心理社会的特徴を理解するとともに、これらの問題へのアセスメントと治療的介入（認知行動療法、行動療法など）の実践について解説する。また、事例検討などを通して介入のプランニングや他職種との連携などについても具体的に学んでいく。

履修条件：臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。

授業の到達目標：認知行動療法の諸理論と問題のアセスメントおよび治療的介入方略の基礎を身につける。

<参考図書>

鈴木伸一・神村栄一 実践家のための認知行動療法テクニックガイド 北大路書房

坂野雄二（編訳） エビデンスベースト心理治療マニュアル 日本評論社

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：認知行動療法の理論と実践（7）
第2回：認知行動療法基礎	第10回：認知行動療法の理論と実践（8）
第3回：認知行動療法の理論と実践（1）	第11回：認知行動療法の理論と実践（9）
第4回：認知行動療法の理論と実践（2）	第12回：認知行動療法の理論と実践（10）
第5回：認知行動療法の理論と実践（3）	第13回：認知行動療法の理論と実践（11）
第6回：認知行動療法の理論と実践（4）	第14回：認知行動療法の理論と実践（12）

第7回：認知行動療法の理論と実践（5）	第15回：まとめ
第8回：認知行動療法の理論と実践（6）	

教科書：教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献：参考書は随時指示する。

成績評価方法：

レポート 20% 期末レポートの提出と内容により評価する

平常点評価 80% 出席状況、分担発表および授業中の積極的な発言により評価する

備考・関連 URL：<http://www.f.waseda.jp/ssuzuki/>

臨床心理面接法特論Ⅱ

嶋田 洋徳

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。本特論では、心理臨床面接が必要とされるさまざまなスキルの獲得を目的とする。具体的には、主訴の把握、臨床心理アセスメント、診断基準、問題の焦点づけ、支援目標の設定、行動観察、介入方針や治療仮説の立案（主として行動分析）、面接の進め方、介入の中間評価と方針の変更の検討、治療の終結と評価の方法を中心に概説を行い、同時に実習を行う。また、受講生が担当している事例についても、前述の観点から検討を行う。

授業の到達目標：心理臨床面接の基本的発想や理論的背景、具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

第1回：イントロダクション、臨床心理学的アプローチの方法	第9回：行動の生起頻度を増大させる随伴操作の理論と実際
第2回：臨床心理面接の進め方の理論と実際	第10回：不適切な行動を減少させる結果操作の理論と実際
第3回：主訴の把握、臨床心理アセスメント、診断基準の理論と実際	第11回：分化強化、刺激制御、シェイピングの理論と実際
第4回：問題の焦点づけ、支援目標の設定、行動目標の作成の理論と実際	第12回：機能査定と機能分析の理論と実際
第5回：データの収集、グラフ化と行動観察の理論と実際	第13回：行動変容の般化の理論と実際
第6回：介入方針、治療仮説の立案の理論と実際	第14回：行動のセルフ・コントロールの理論と実際
第7回：一事例実験デザインの理論と実際	第15回：治療の終結の理論と実際、まとめ
第8回：介入の中間評価と方針変更の検討の理論と実際	

教科書：講義の中で別途指示する。

参考文献：講義中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 20% 記述式、多肢選択式の試験の得点による。

レポート 60% 課題内容の達成度による。

平常点評価 20% 出席の程度による。

行動療法特論

嶋田 洋徳

授業概要：行動療法とは、学習理論、もしくは行動理論に基づいた心理療法の総称である。行動療法の特徴は、様々な心理的諸問題を、人間の社会化あるいは個性化のプロセスにおいて誤って学習された結果や習慣もしくは適応的な行動や反応を未だ獲得していない結果や状態であると考えるところにある。本特論では、行動療法の歴史や基本的発想、理論的基礎を概観するとともに、症例研究を通して行動療法の理論と実際について理解することを目的とする。

授業の到達目標：行動療法の基礎的な考え方を理解し、発展的理解の素地ができる。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：オペラント型介入（シェイピング法など）
第2回：心理学における「行動」	第10回：認知媒介型介入（モデリング法など）
第3回：行動療法の考え方・位置づけ	第11回：行動療法の手続き（行動観察など）

第4回：問題行動・不適応症状の概念	第12回：治療効果の測定（統制群法、単一事例実験計画法など）
第5回：心理学的諸問題や精神疾患のアセスメント	第13回：行動療法の特徴
第6回：行動の学習（さまざまな行動が身につく過程）	第14回：セルフ・コントロール
第7回：行動（機能）分析	第15回：まとめ
第8回：レスポナント型介入（系統的脱感作法など）	

教科書：使用しない。必要に応じて配付（アップロード）する。

参考文献：講義中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 35% 記述式、多肢選択式の試験の得点による。

レポート 20% 課題内容の達成度による。

平常点評価 30% 制限時間内のアクセス記録による。

その他 15% BBSの書き込みの程度による。

備考・関連 URL：本特論は、全回オンデマンド授業として実施する。

また、人間科学部設置科目「行動療法」の単位を取得した者は、本特論の履修はできない。

臨床心理基礎実習Ⅰ A（前期）・B（後期）

菅野 純、金築 優

授業概要：臨床心理学に関する基礎的知識の習得と基礎的方法の習得を目指す。

授業の到達目標：実習で行う事例等に対して、どれだけ正確に理解し支援等を適切に行っているかを問う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：事例とは何か（1）	第1回：ケースにおける倫理的配慮（1）
第2回：事例理解の方法（1）	第2回：ケースの空間的・時間的・社会的構造（1）
第3回：事例理解の方法（3）	第3回：クライアントとセラピストの関係（1）
第4回：事例の記録の方法（1）	第4回：心理アセスメントについて（1）
第5回：事例の記録の方法（3）	第5回：心理アセスメントについて（3）
第6回：事例検討（1）	第6回：ケースフォーミュレーションについて（1）
第7回：事例検討（3）	第7回：ケースフォーミュレーションについて（3）
第8回：事例検討（5）	第8回：ケースにおける目標設定（1）
第9回：事例発表の方法（1）	第9回：臨床心理面接技法の適用（1）
第10回：事例発表の方法（3）	第10回：臨床心理面接技法の適用（3）
第11回：事例についての合同討議の方法（1）	第11回：ケースにおける失敗への対処（1）
第12回：事例についての合同討議の方法（3）	第12回：他職種との連携について（1）
第13回：事例についての合同討議の方法（5）	第13回：危機介入について（1）
第14回：事例にまつわる問題（1）リファーマの方法	第14回：ケースの終結に際して（1）
第15回：事例にまつわる問題（3）スーパーヴィジョンの受け方	第15回：スーパーヴァイズを受けるということ（1）

成績評価方法：

平常点評価 100% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。

臨床心理基礎実習Ⅱ A（前期）・B（後期）

菅野 純、金築 優

授業概要：臨床心理学に関する基礎的知識の習得と基礎的方法の習得を目指す。

授業の到達目標：実習で行う事例等に対して、どれだけ正確に理解し支援等を適切に行っているかを問う。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：事例とは何か（2）	第1回：ケースにおける倫理的配慮（2）
第2回：事例理解の方法（2）	第2回：ケースの空間的・時間的・社会的構造（2）
第3回：事例理解の方法（4）	第3回：クライアントとセラピストの関係（2）

第4回：事例の記録の方法（2）	第4回：心理アセスメントについて（2）
第5回：事例の記録の方法（4）	第5回：心理アセスメントについて（4）
第6回：事例検討（2）	第6回：ケースフォーミュレーションについて（2）
第7回：事例検討（4）	第7回：ケースフォーミュレーションについて（4）
第8回：事例検討（6）	第8回：ケースにおける目標設定（2）
第9回：事例発表の方法（2）	第9回：臨床心理面接技法の適用（2）
第10回：事例発表の方法（4）	第10回：臨床心理面接技法の適用（4）
第11回：事例についての合同討議の方法（2）	第11回：ケースにおける失敗への対処（2）
第12回：事例についての合同討議の方法（4）	第12回：他職種との連携について（2）
第13回：事例についての合同討議の方法（6）	第13回：危機介入について（2）
第14回：事例にまつわる問題（2）リファーマの方法	第14回：ケースの終結に際して（2）
第15回：事例にまつわる問題（4）スーパーヴィジョンの受け方	第15回：スーパーヴァイズを受けるということ（2）

成績評価方法：

平常点評価 100% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。

臨床心理実習Ⅰ A（前期）・B（後期）

熊野 宏昭、嶋田 洋徳、鈴木 伸一

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理基礎実習ⅠおよびⅡを履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援の援助の実践について、実習を通して理解することを目的とする。

人間科学学院心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（8）
第2回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）	第2回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第3回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）	第3回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（9）
第4回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）	第4回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第5回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）	第5回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（10）
第6回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）	第6回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第7回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）	第7回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（11）
第8回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）	第8回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第9回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）	第9回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（12）
第10回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）	第10回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第11回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）	第11回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（13）
第12回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）	第12回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）

第13回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）	第13回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（14）
第14回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（7）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

教科書：使用しない。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献：授業に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 80% 課題内容の達成度による。

平常点評価 20% 討論における貢献度による。

臨床心理実習Ⅱ A（前期）・B（後期）

熊野 宏昭、嶋田 洋徳、鈴木 伸一

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理基礎実習ⅠおよびⅡを履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインターク、アセスメントおよび治療支援の援助の実際について、実習を通して理解することを目的とする。

人間科学学術院心理相談室におけるインターク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（8）
第2回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）	第2回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第3回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）	第3回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（9）
第4回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）	第4回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第5回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）	第5回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（10）
第6回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）	第6回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第7回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）	第7回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（11）
第8回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）	第8回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第9回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）	第9回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（12）
第10回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）	第10回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第11回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）	第11回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（13）
第12回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）	第12回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第13回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）	第13回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（14）
第14回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（7）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

教科書：使用しない。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献：授業中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 80% 課題内容の達成度による。

平常点評価 20% 討論における貢献度による。

心理療法特論Ⅰ

山口 創

授業概要：まず、これらのアプローチに共通する基礎的な研究や理論について紹介し、次いで身体志向的な心理療法や心身の健康増進を目指した技法について紹介していく。具体的には、前半では心理療法として自律訓練法、動作法、マインドフルネスを、ボディワークとして野口体操、太極拳、ヨガ、マッサージなどを取り上げる。これらの技法について、各々の療法の治療体系や理論的根拠の幅広い理解を目指す。さらに各療法について体験的に学べるように、適宜ボディワークの実習も行う。後半では各自が興味ある論文を発表してもらい、全員でディスカッションし、内容の理解も深める。論文は授業で取り上げたテーマに沿ったものとする。

授業の到達目標：本講義では、数ある心理療法のなかで、特に身体的アプローチをするものについて取り上げる。身体的アプローチをする心理療法として、たとえば自律訓練法や動作療法が知られているが、それらの技法に留まらず、広い観点から「身体から心へ」と影響を与える体系としてボディ・ワークも取り上げ、各々の特徴や治療の機序について理解することを目標とする。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：身体志向的心理療法4（野口体操）
第2回：現代における身体的アプローチの意義	第10回：身体志向的心理療法5（フォーカシング）
第3回：身体心理学1（身体心理学）	第11回：発表とディスカッション1
第4回：身体心理学2（身体心理学の応用）	第12回：発表とディスカッション2
第5回：身体心理学3（タッチングの応用）	第13回：発表とディスカッション3
第6回：身体志向的心理療法1（自律訓練法）	第14回：発表とディスカッション4
第7回：身体志向的心理療法2（動作療法）	第15回：まとめと総括
第8回：身体志向的心理療法3（タッチセラピー）	

教科書：その都度、資料で紹介する

成績評価方法：

レポート 80% 与えられた課題を講義内容と絡めて深く考察しているか評価します。

平常点評価 20% 各個人の発表内容と、ディスカッションにおける積極的な態度について評価します。

学校臨床心理学特論

小林 正幸

授業概要：学校心理学を理論の背景におき、認知行動療法の方法論を主軸に、主に学校領域の臨床的な課題を材料にする。第1回～第4回は、教育問題の中核を占める「不登校」を取り上げ、現代の教育問題の構造的な課題を明確にしつつ、その周辺課題であるいじめの問題、特別支援教育の問題などを講じる。とくに、問題の形成要因が問題の未然防止や早期発見、早期対応に関わることで、維持要因が臨床場面での介入に関連することを理解する。第5回から第7回までは、事例理解に際して、クライエントの困り感を構造的に理解するマッピング法と、多様な解決策を短時間で見出す付箋法を用いて、具体的な事例への理解と方針作成について学ぶ。第9回で組織的な対応について講じた後、後半の第10回以降はロールプレイングを用いて具体的な支援場面での応答構成のスキルアップを行う。2回の事例研究コンテストは、事例理解と対応策に関わるものと、教育相談領域での関わり方の質の評価を中心に、持ち寄ったレポートを相互評価する機会とすると共に、総合的な技量向上を図るものである。

なお、本講義内容は、DP 科目基礎1-2、2-2、3-3、4-3、4-5、4-6、5-3、および、DP 科目情動1-1、1-2、1-6、2-3、2-4に該当する。

到達度について、レポートの相互評価ポイント、自発的に行う特別レポートの評価ポイント、授業の途中で行う作業ポイントなどを加算することにより、数量化して評価を行う。評価体系が複雑なので、初回に解説を行う。

授業の到達目標：スクール・カウンセラーあるいは学校内での教育相談あるいは特別支援コーディネーターレベルの力量の獲得を目指す。ある意味では、それ以上の水準の習得を目指す。（1）カウンセラー、教育相談担当

者、臨床心理学の専門家、研究者としての構え、働きかけや姿勢を形成する。(2) 実践に密着した題材から学ぶ。
(3) 実践的に思考し、実践的な技量を習得する。

授業計画：

第1回：現代の教育問題の意味（1）／本講義の目的と概要、評価方法について説明します。併せて、教育問題の時代変遷を述べ、教育問題が持つ現代的な意味について講じます。	第9回：協働による子ども支援／学校組織で子どもを支えることについて、発達障害を例に講じます。
第2回：現代の教育問題の意味（2）／上記の続きの講義を行います。	第10回：面接の方法（本人面接）／子ども本人との面接方法について講じます。
第3回：問題行動の形成要因／学校不適応問題として、不登校を取り上げ、問題の形成要因から予防策を講じます。	第11回：面接演習／本人との面接のロールプレイング演習。
第4回：問題行動の維持要因／問題の維持要因から解決策を講じます。	第12回：面接演習／本人との面接のロールプレイング2回目
第5回：学校での事例検討（1）／学校不適応問題の中から、不登校、非行、学習障害の場合などを取り上げ、事例検討会を体験します。マッピングや付箋法などを用いたワークショップです。	第13回：コンサルテーションの方法／保護者の面接手法を講じます。
第6回：学校での事例検討（2）／上記とは異なる事例で検討を行います。	第14回：コンサルテーションの演習／保護者面接ロールプレイング
第7回：学校での事例検討（3）／上記とは異なる事例で検討を行います。	第15回：事例研究コンテスト（2）／指定された事例を元に課題を貸し、レポートを持ち寄って相互評価します。
第8回：事例研究コンテスト（1）／指定された事例から、解決策を持ち寄り、相互評価を行います。	

参考文献：初回に100冊ほどの関連文献一覧を配布する。

成績評価方法：

その他 2回の実例研究コンテストをレポートを持参する形で行い相互評価を行う。加えて、特別レポートを経以上点として加算していく。

備考・関連 URL：本講義の評価体系は多軸的絶対評価のポイント制で、複雑であるので、本評価方法の様式では表現しきれないため、初回に解説を行う。

社会心理学特論

浦 光博

授業概要：人間の社会行動を、自己、他者、集団、社会といった複数レベル間の相互影響過程の中での確に理解するための理論的・概念的枠組み、ならびに実証研究のための方法論の修得を目指す。特に、社会的排斥が人と社会に及ぼす影響に焦点を当て、その影響過程の重層性について検討する。

授業の到達目標：人間の社会行動に関連する社会学的、心理学的、神経科学的メカニズムについて理解し、基礎的な研究手法を修得する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション：社会行動における重層的な影響過程	第9回：サポート過程の基盤的メカニズム
第2回：孤立と排斥の健康リスク	第10回：サポートのネガティブ効果
第3回：孤立と排斥の社会リスク	第11回：親密さのネガティブ効果
第4回：孤立と排斥はなぜ人の健康を損なうのか	第12回：貧しさと格差と対人関係
第5回：孤立と排斥はなぜ社会を劣化させるのか	第13回：嫉妬と劣等感の社会的起源
第6回：社会的排斥と心の痛み（1）	第14回：自ら孤立してしまう人たち

第7回：社会的排斥と心の痛み（2）	第15回：ディスカッション
第8回：心理社会的資源とサポート	

教科書：排斥と受容の行動科学

成績評価方法：

レポート 60% 授業の終了時に課題を示します。

平常点評価 40% 授業への出席状況を評価に加味します。

心理学研究法特論

福井 至

授業概要：主要な心理学研究法である実験計画法、調査研究法、および事例研究法について、その意義と実際の方法について解説していく。また、質的研究法による仮説構成法や、Evidence-based Psychotherapyに必要なRCT、準実験や単一事例の実験計画法などの比較的新しい展開についても、その意義と実際の方法について解説する。

授業の到達目標：心理学研究法について習熟し、上手な研究計画が立てられるようになること。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方・心理学の研究とは何か	第9回：準実験と単一事例実験
第2回：質的調査	第10回：教育・発達における実践研究
第3回：グランディッド・セオリー	第11回：臨床における実践研究
第4回：事例研究	第12回：事例研究について
第5回：量的調査	第13回：事例報告の書き方
第6回：実験の論理と方法	第14回：研究の展開
第7回：分散分析 1	第15回：まとめ
第8回：分散分析 2	

教科書：「南風原朝和・市川仲一・下山晴彦編 心理学研究法入門 東京大学出版会」

参考文献：「田中敏・山際勇一郎著 ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 教育出版」

成績評価方法：

試験 50% 第15回目の授業時間中に試験を実施し、理解度の確認を行います。

レポート 30% いくつかのテーマについてのレポートを課します。

平常点評価 20% 平常点による評価

心理統計法特論

綿井 雅康

授業概要：本講義の目的は、心理学領域の実証的な研究を進めるために必要となる統計的諸手法を実践的に習得することである。研究目的、検証すべき仮説、収集データの特性に応じて、どの統計手法を活用すべきか判断できるようになることを目指す。研究を進めるには、様々な統計手法を目的や状況に応じてより適切に適用し活用するための知識が必要となる。そこで、本講義では（1）尺度構成法、（2）実験計画法、（3）多変量解析を中心として、データの収集と整理、分析や解釈の作業手順について、自力で実践できることを目指す。

授業の到達目標：心理学領域で実証的な研究を進めるために、研究計画を立て、目的に即して適切な方法でデータを収集し、適切な統計手法を活用した解析が実践できるようになることを目指す。理論的な理解とともに、実践的な分析力や判断力を養い、自ら工夫しながら統計分析を進める態度を養う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：変数間の関係を記述しよう
第2回：基礎統計の復習	第10回：多変量解析とは
第3回：尺度構成法（1）	第11回：回帰分析
第4回：尺度構成法（2）	第12回：因子分析
第5回：よりよい尺度の作成を目指して	第13回：共分散構造分析（1）
第6回：実験計画法（1）	第14回：共分散構造分析（2）
第7回：実験計画法（2）	第15回：総まとめ
第8回：分散分析のさまざまな形	

教科書：プリントを配布

参考文献：講義中に教示

成績評価方法：

- レポート 50% 授業最終日に課題を提示する。自分なりの解析計画を立案し、結果を的確に、かつ多面的に解釈できているかを評価の対象とする
- 平常点評価 50% 出席状況と、授業中に指示する課題の点数で評価する

精神医学特論

赤穂 理絵

授業概要：前半10回の講義では、主たる精神疾患である『統合失調症』『気分障害（うつ病、躁病）』『神経症性障害』について、各々の症状と対応について概説する。特に現代の社会問題になっている“うつ病の増加”“自殺の増加”“ストレス反応性の精神障害（適応障害、PTSD）”については、詳細に解説する。後半4回で、癌をはじめとする重症身体疾患にあたっての人間の心理状態とサポートのあり方について、『リエゾンコンサルテーション精神医学』『サイコオンコロジー（精神腫瘍学）』『緩和医療における精神医学』の観点から解説する。

授業の到達目標：『統合失調症』『気分障害』『神経症性障害』の概要を理解する。

うつ病、自殺の増加の現状を理解し、問題意識を持つことができる。

重症疾患を持つ人の心理状態、ケアあり方を理解し、“人間の生と死”に関して考える時間を持つ。

授業計画：

第1回：精神科概要	第9回：不安性障害Ⅰ
第2回：統合失調症Ⅰ（症状）	第10回：不安性障害Ⅱ
第3回：統合失調症Ⅱ（疫学、治療）	第11回：その他の精神障害
第4回：統合失調症Ⅲ（社会復帰リハビリテーション）	第12回：サイコオンコロジー（精神腫瘍学）Ⅰ
第5回：気分障害Ⅰ（症状）	第13回：サイコオンコロジーⅡ（医療におけるコミュニケーション）
第6回：気分障害Ⅱ（疫学）	第14回：緩和医療における精神医学Ⅰ
第7回：気分障害Ⅲ（治療）	第15回：緩和医療における精神医学Ⅱ（家族・遺族ケア）
第8回：自殺問題の現状と対策	

成績評価方法：

- レポート 40% 第8回の授業で課題を提示します。
- 平常点評価 60% 発言などの積極性、割りあてられたテーマに関する発表内容を評価します。

心身医学特論

野村 忍

授業概要：心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。この科目では、心身症、神経症やうつ病などの病態についての理解および診断・治療法について、講義および実習を行う。また、最新のトピックスについてのレポート発表およびディスカッションを通して学習を深める。

授業の到達目標：心理臨床を志す人を対象として、必要な心身医学的知識・技術の習得を目標とする。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：気分障害
第2回：心身医学総論	第10回：自律訓練法の実習
第3回：薬物療法	第11回：交流分析の実習
第4回：心理療法	第12回：研究発表（1）
第5回：循環器心身症	第13回：研究発表（2）
第6回：消化器心身症	第14回：研究発表（3）
第7回：呼吸器心身症	第15回：レポート課題と解説
第8回：不安障害	

教科書：使用しない。教場でレジュメを配布する。

参考文献：野村忍、情報化時代のストレスマネジメント、日本評論社、2006

成績評価方法：

- レポート 50% レポート及び発表の内容を評価する。
- 平常点評価 50% 全回出席を原則とし、欠席は減点する。

心理臨床現場実習Ⅰ A（前期）・B（後期）

菅野 純

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

教科書：使用しない。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献：授業中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 80% 課題内容の達成度による。

平常点評価 20% 討論における貢献度による。

心理臨床現場実習Ⅱ A（前期）・B（後期）

野村 忍

授業概要：この科目は、人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざま技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようにする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）

第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

成績評価方法：

レポート 50% レポート及び発表の内容を評価する。

平常点評価 50% 全回出席を原則とし、欠席は減点する。

心理臨床現場実習Ⅲ A（前期）・B（後期）

根建 金男

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

成績評価方法：

レポート 80% 課題内容の達成度による。

平常点評価 20% 討論における貢献度による。

心理臨床現場実習Ⅳ A（前期）・B（後期）

佐々木 和義

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標：人間科学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）

第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 50% 実習レポートの内容を評価する。

平常点評価 50% スーパービジョン時のやりとりについて評価する。

心理臨床現場実習Ⅴ A（前期）・B（後期）

嶋田 洋徳

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

教科書：使用しない。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献：授業中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 80% 課題内容の達成度による。

平常点評価 20% 討論における貢献度による。

心理臨床現場実習Ⅵ A（前期）・B（後期）

鈴木 伸一

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

授業の到達目標：心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

教科書：教科書は使用しない。

参考文献：参考書は随時指示する。

成績評価方法：

平常点評価 100% 実習状況および実習報告書の内容により総合的に評価する

心理臨床現場実習Ⅶ A（前期）・B（後期）

熊野 宏昭

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）

第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

参考文献：適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 実習レポートにより評価する。

平常点評価 50% 授業中の発表、討論への参加を総合的に評価する。

心理臨床現場実習Ⅷ A（前期）・B（後期）

大月 友

授業概要：この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題のに対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標：心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：現場実習事前指導（1）	第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）	第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）	第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）	第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）	第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）	第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）	第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）	第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）	第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）	第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）	第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）	第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：現場実習事後指導（1）	第14回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第15回：総合まとめ

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 80% 課題内容の達成度による。

平常点評価 20% 討論における貢献度による。

〔感性認知情報システム研究領域〕

感性心理学特論

齋藤 美穂

授業概要：感性は、その研究の視点も研究手法やアプローチも多岐にわたる非常に幅広い研究テーマである。そこで、この特論では、まず感覚と感性について基礎的側面を概説したあと、感性の指標としての「嗜好」に焦

点を当てて、応用的側面に関して講義する。特にノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知科学的側面に着目することを手がかりとして感性を考えて行く。また文化的な共通点を知ると共に、相違点を講じることにより、感性に対する理解を深めるのと同時に、自文化や他文化の理解を深めて行く。なお授業はフルオンデマンドで行われる。

授業の到達目標：感覚と感性についての基礎的側面、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てた応用的側面、そして特にノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知科学的側面に着目して感性を考える。また文化的な共通点や相違点を知るのと同時に、自文化や他文化の理解を深める。最終的には各人の感性に対する見解を論理的にまとめることを到達目標とする。

授業計画：

第1回：感性心理学の概要	第9回：感性の基礎的側面の理解：感性の測定方法
第2回：感性研究テーマの理解	第10回：感性の応用的側面の理解：嗜好と感性（色彩嗜好の国際比較）
第3回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（視知覚の諸特性）	第11回：感性の応用的側面の理解：嗜好と感性（肌の色の好みと国際比較）
第4回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（視知覚の脳内情報処理メカニズム）	第12回：感性の応用的側面の理解：嗜好と感性（概念色の国際比較）
第5回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（聴覚の諸特性と情報処理）	第13回：感性の応用的側面の理解：表情と感性
第6回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（嗅覚の諸特性と情報処理）	第14回：感性の応用的側面の理解：多感覚研究および感覚協調と感性（色と香り、色と音）
第7回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（味覚の諸特性と情報処理）	第15回：感性心理学のまとめと感性研究の展望
第8回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（触覚の諸特性と情報処理）	

成績評価方法：

レポート 80% 授業内容の把握状況、レポート課題への取り組み、内容の深さなど
平常点評価 20% 授業への参加状況、積極性

安全人間工学特論

石田 敏郎

授業概要：人間工学は、異なるシステムおよび環境下における精神的、身体的タスクを行うための人間の役割、能力およびその限界を研究することを目的としている。本講では、産業現場、交通場面での人間行動を取り上げ、安全を保つための人間工学的研究について述べる。また、近年多発するヒューマンエラーに関し、その考え方、分析の方法および人間工学的対策立案に関して概括する。

授業の到達目標：安全人間工学関連の知識と、各産業現場での人間工学的安全への取り組みについて理解する。

授業計画：

第1回：授業の目的と進め方	第9回：交通と安全（1）
第2回：人間工学と安全	第10回：交通と安全（2）
第3回：安全に関わる人間特性（1）	第11回：事故防止の人間工学的対策（1）
第4回：安全に関わる人間特性（2）	第12回：事故防止の人間工学的対策（2）
第5回：事故分析の目的	第13回：事故事例研究（1）
第6回：事故分析の方法	第14回：事故事例研究（2）
第7回：分野別の事故分析（1）	第15回：まとめ
第8回：分野別の事故分析（2）	

教科書：教場でプリントを配布。

成績評価方法：

レポート 80% レポートによる評価
平常点評価 20% 平常点による評価

教授学習過程特論

宮崎 清孝

授業概要：教授学習過程論とは聞き慣れない言葉だろう。これは人間の認知の謎に、学習という切り口から迫ろうとする認知科学の一分野である。認知に対する今日のアプローチは、その脳神経的基盤を求めようとするもの、認知をコンピュータとのアナロジーで、いわゆる情報処理プロセスとして捉えようとするもの、環境との相互作用として捉えようとするもの、さらに認知を社会的、文化的な基盤に基づくものとして捉えようとするものがある。これを認知に対する「文化歴史的アプローチ」というが、学習を問題にする場合には、この最後の立場が重要になる。ここでは、学習は一個人の中で起こるものではなく、人と人の関係、とりわけ教授するものとの関係において起こると考えられる。この授業ではこの立場からの認知科学について学ぶ。「知識とは何か」「学ぶとはどういうことか」「教えることの意味は」といった諸問題に迫っていきたい。

授業の到達目標：個々の知識よりも、認知に対する「文化歴史的アプローチ」という考え方の概略をつかめること

授業計画：

第1回：認知科学としての教授学習過程（1）	第9回：協働的学習（2）
第2回：認知科学としての教授学習過程（2）	第10回：協働的学習（3）
第3回：状況論的認知論と文化歴史的アプローチ（1）	第11回：授業事例の分析（1）
第4回：状況論的認知論と文化歴史的アプローチ（2）	第12回：談話・対話・学習（1）
第5回：知識をめぐる諸問題（1）	第13回：談話・対話・学習（2）
第6回：知識をめぐる諸問題（2）	第14回：談話・対話・学習（3）
第7回：知識をめぐる諸問題（3）	第15回：授業事例の分析（2）
第8回：協働的学習（1）	

教科書：宮崎清孝著「子どもの学び教師の学び―斎藤喜博とヴィゴツキー派教育学」一草書房

参考文献：授業時間中に示す

成績評価方法：

その他 100% 出席しての発言、質問などの寄与を50%、予定している英文論文のレポート報告を50%とする。

感情心理学特論

鈴木 晶夫

授業概要：感情の定義はいろいろな側面から記述できる。「精神の動きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれ、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と広義に考え、感情研究の歴史、感情の生物学的・神経心理学的アプローチ、感情の測定・アセスメント、感情の発達、個人差・文化差、感情の表出と解釈、文化と社会、臨床、感情障害、健康、感情に関連する社会的プロセスなど、その関連領域を幅広くとらえられる視点を養うことを学習目標とする。

この講義では、上記のテーマに関するこれまでの研究を概観し、感情研究の多様な考え方について学ぶ。さらに研究発表、研究論文などを材料に感情研究の様々な問題を考えたい。

本講義内容は、臨床発達心理士（臨床発達心理士認定運営機構）DP科目「社会情動」（1-1、1-2、1-3、1-4、1-5、1-7、2-1、3-1）に該当する。

授業の到達目標：感情心理学関連について専門的知識の説明ができること、関連の研究方法の理解と適用ができること、批判的・創造的な論理思考を形成すること、感情心理学を通じて個人的成長をとげること、感情心理学に関わる価値観を形成することなどを授業の到達目標とする。

授業計画：

第1回：受講のためのオリエンテーション	第9回：感情の解釈
第2回：感情研究に関する哲学的背景	第10回：感情関連学会について
第3回：感情研究に関する歴史	第11回：課題発表 基礎編
第4回：感情の定義	第12回：感情と発達、社会・文化
第5回：基本情動	第13回：課題発表 応用編
第6回：感情の次元的研究	第14回：感情とストレス・健康・感情障害
第7回：感情の測定方法	第15回：感情研究まとめ
第8回：感情の表出	

成績評価方法：

レポート 70% 課題に対する適切性、専門知識の理解度（プレゼンテーションを含む）

平常点評価 30% 授業における理解・関心度（教場レポートを含む）

言語情報科学特論

菊池 英明

授業概要：言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。この講義では、コンピュータ・情報処理技術を導入した音声言語理解・生成・インタラクションのモデル化及びシステム開発の事例を紹介する。

なお、本講義内容は、DP 科目 言語 1－5 に該当する。

授業の到達目標：音声言語メディアの諸相を踏まえて、音声言語理解・生成・インタラクションなどの人間の言語行動のモデル化手法を理解することを目標とする。

授業計画：

第1回：導入 言語情報科学とは	第9回：音声言語生成のモデル（2）
第2回：言語情報の諸相（1）	第10回：音声言語生成のモデル（3）
第3回：言語情報の諸相（2）	第11回：音声言語インタラクションのモデル（1）
第4回：言語情報の諸相（3）	第12回：音声言語インタラクションのモデル（2）
第5回：音声言語理解のモデル（1）	第13回：音声言語インタラクションのモデル（3）
第6回：音声言語理解のモデル（2）	第14回：研究事例の紹介
第7回：音声言語理解のモデル（3）	第15回：まとめ
第8回：音声言語生成のモデル（1）	

成績評価方法：

レポート 100% モデル化手法の理解度を測る。

知識情報科学特論

松居 辰則

授業概要：この講義では、「知識情報科学」について、人工知能に関する話題を基軸にして、基本的な理論や技術を多くの事例を通して紹介します。人工知能はコンピュータに「人間のような振る舞いをさせる」ことを目的とした、理論・技術です。人間の「知能」をコンピュータに実装することを目指しますが、そのためには、人間の知的な振る舞いに関する実験や観察から始まり、そのモデル化、そして実装・・・と方法論も様々で学際的です。講義の進め方は、数学的、技術的な話に偏ることなく、「人工知能」というものが正しくイメージできるようになることを目標とします。この講義を通して、人工知能の魅力を知ると同時に、その限界も知ることにより「人間とコンピュータの共存」、そして「人間の尊さ」というテーマについて深く考えます。

授業の到達目標：

- ・「知識情報科学」、「人工知能」という分野に興味をもつ。
- ・人工知能の歴史や基本的な理論、技術、モデル化手法を理解する。
- ・自分の研究テーマにおいて学際的な視点で「知識情報科学」との関連を意識することができる。
- ・「人間とコンピュータとの共存」、「人間の尊さ」について「情報科学的な視点から」深く考えることができる。

授業計画：

第1回：講義の内容の説明、人工知能研究の目指すもの、人工知能研究の歴史	第9回：論理による柔軟な知識表現（様相論理、非単調論理、ファジィ論理）
第2回：知識の定義、知識の分類、知識の表現方法	第10回：ニューラルネットワーク（1）
第3回：問題表現（木構造、フレーム表現、意味ネットワーク）	第11回：ニューラルネットワーク（2）
第4回：探索による問題解決	第12回：遺伝的アルゴリズム
第5回：様々な推論方式	第13回：知的エージェントと Web インテリジェンス
第6回：記号論理による知識表現	第14回：人工知能の応用システム（1） エキスパートシステム
第7回：記号論理による推論方式	第15回：人工知能の応用システム（2） データマイニング、情報検索 など
第8回：述語論理による知識表現と推論方式	

教科書：特に指定しません。

参考文献：講義中に適宜紹介します。

成績評価方法：

- レポート 80% 講義期間中にレポート課題を3回程度出題し、講義内容の理解度を確認します。レポートの内容によって評価します。全て期限内に提出することが単位取得のための最低条件になります。
- 平常点評価 20% 毎回、レビューシートへの記入を求めます。期限内に記入することで出席として扱います。欠席1回につき2点の減点とします。

生態心理学特論

三嶋 博之

授業概要：本講義では、生態心理学者 James J. Gibson (1902–1979) の「知覚システム論」について、Gibson の第二の著作である“The Senses considered as perceptual systems” (1966) を題材としながらその主張を確認し、またその現代的な意味について検討する。

授業の到達目標：Gibson 生態心理学の理論的基礎について、基礎から正確に理解する。

授業計画：

第1回：刺激情報源としての環境	第9回：視覚システムとその進化
第2回：刺激情報の獲得	第10回：視覚システムと環境情報
第3回：知覚システム	第11回：人的な環境における光の構造
第4回：基礎的的定位システム	第12回：包囲光情報の抽出
第5回：聴覚システム	第13回：情報抽出理論
第6回：触覚システム	第14回：知覚の失敗
第7回：触覚－体性覚システム	第15回：レポート課題と解説
第8回：味覚－嗅覚システム	

教科書：ジェームズ・J・ギブソン（著）、佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之（監訳）、(1966/2011)。生態学的知覚システム、東京大学出版会。

成績評価方法：

- レポート 80% 最終回においてレポート課題を課します。
- 平常点評価 10% 授業期間中に複数回の小レポートを課します。
- その他 10% 出席状況を勘案します。

MR I によるヒト脳機能画像研究特論

渡邊 丈夫

授業概要：磁気共鳴画像法（MRI）は、強力な磁場と電磁波を用いて生体内部の情報を画像化する方法であり、解剖学的形態を画像化するだけでなく、脳血流変化を計測することによって脳機能を画像化することもできる。近年、MRI を用いたヒト脳機能局在研究により、脳の様々な解剖学的部位とそれらが持つ機能との関連が急速に明らかにされつつある。

本講座では、理論と実践の双方から、すなわち MRI 実験と画像解析法の理論および実際のヒト脳機能局在研究に関するゼミナール形式の授業を行う。主に機能的 MRI（fMRI）を対象とするが、脳波（EEG）、ポジトロン断層法（PET）、脳磁図（MEG）、機能的近赤外線分光法（fNIRS）など他の非侵襲脳機能画像研究も積極的に参考にする。

授業の到達目標：MRI の撮像原理および MRI を用いたヒト脳機能画像実験や画像解析法の理論を学習して基盤を築いた上で、受講生自身の興味に沿って文献調査を行い、脳科学研究の理解を深める。さらに先行研究で明らかにされていないテーマを自ら決定し、実験を計画してプレゼンテーションを行い、質疑応答を通して実験計画を検討・改善する。可能な限り実際に遂行可能で農家学的価値のある実験を計画する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：受講生による文献調査・発表
第2回：MRI 実験や画像解析法の理論に関する講義	第10回：受講生による文献調査・発表
第3回：MRI 実験や画像解析法の理論に関する講義	第11回：受講生による実験計画・発表・検討
第4回：MRI 実験や画像解析法の理論に関する講義	第12回：受講生による実験計画・発表・検討
第5回：MRI 実験や画像解析法の理論に関する講義	第13回：受講生による実験計画・発表・検討

第6回：受講生による文献調査・発表	第14回：受講生による実験計画・発表・検討
第7回：受講生による文献調査・発表	第15回：受講生による実験計画・発表・検討する。
第8回：受講生による文献調査・発表	

参考文献：各種書籍、論文

成績評価方法：

レポート 35% レポートによる評価

平常点評価 30% 平常点による評価

その他 35% 発表

備考・関連 URL：※発表は毎週約3人ずつ、20分以内のプレゼンテーションおよび10分の質疑応答とする。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

教師学特論

浅田 匡

授業概要：教師の成長・発達の問題を、専門家としての省察のあり方とそれを促進する方法、さらには「研究者としての教師（teacher researcher）」としての専門的知識及び専門的技能に関して論及する。反省的教授に関連するこれまでの研究を概観し、反省的教授に関連する概念の検討を行う。特に、リフレクション（省察）に関する理論的検討を行う。それらに基づき、教師としてのあり方、教師としての専門性を、「技術熟達者モデル」と「反省的实践家モデル」とを統合するということから考察する。授業形態は、基本文献をベースに発表および解説・討論という形式をとる。

授業の到達目標：

1. リフレクティブ・ティーチングに関連する諸概念を理解する。
2. 教師が学ぶということについて、リフレクションを踏まえて、そのキー概念を理解する。
3. 教師の専門性について自分なりの考えを持つことができる。

授業計画：

第1回：思考と反省的経験 Dewey の反省的思考について考える	第9回：教師としてのスタンダード Teacher Training Agency による教師のスタンダードについて考える
第2回：行為における省察 Schon の行為における省察について考える	第10回：教育研究のパラダイム Bassey による教育研究の3つのパラダイムについて考える
第3回：創造的熟考と専門的判断 Osborn らの創造的熟考と専門的判断について考える	第11回：教室での生活 Jackson の life in classroom を考える
第4回：反省的教授に関する省察 Tabachnik らの反省的教授に関する論考を考える	第12回：学習の科学と教えることの技 Skinner の学習理論と教授理論について考える
第5回：メンターの役割 Sampson らのメンターの役割の分析について考える	第13回：多重知能の理論 Gardner の多重知能の理論を考える
第6回：教えるこの複雑性 Calderhead の教えることに関する論考を考える	第14回：レジリエンス Claxton の学習とレジリエンスの発達を考える
第7回：研究である教師 Stenhouse の teacher as researcher について考える	第15回：よい授業 Alexander のよい授業とは何かを考える
第8回：アクション・リサーチと授業実践 Pring のアクション・リサーチと授業実践について考える	

参考文献：Readings for reflective teaching

成績評価方法：

レポート 50% 学習内容の習得レベルと論理性

平常点評価 50% レジュメ、出席・討論への参加

備考・関連 URL：受講者は必ず基本文献を講読の上、参加すること。

マルチメディア特論

金子 孝夫

授業概要：音声、静止画、映像などの各種マルチメディア情報のそれぞれの高度な表現法と技術の詳細について

て理解することを目標に講義する。これらの各メディアを統合し、コンピュータ上で処理する技術（情報圧縮、メディア処理）、ならびにマルチメディアを支えるハードウェアとソフトウェア（記録、再生、編集処理）についての情報を中心に解説し、さらにマルチメディア技術の応用について実習を行う。第1回目の授業のみ対面授業で実施し、第2回目以降はオンデマンド授業で実施する。

授業の到達目標：マルチメディア情報に関して習得した高度な表現法と技術を応用し、パソコンやメディア処理ソフトウェアなどを利用して、静止画・音声・動画を含むマルチメディアコンテンツを制作・編集し、自らの主張を情報発信できるようにする。

授業計画：

第1回：授業の内容紹介、自己紹介など（対面授業）	第9回：実習課題（1）
第2回：静止画（画像とデジタルカメラ）	第10回：実習課題（1）レポートと課題の提出
第3回：静止画（画像とデジタルカメラ）	第11回：実習課題（2）課題の説明
第4回：音声（音の性質・デジタル音声）	第12回：実習課題（2）
第5回：音声（音の性質・デジタル音声）	第13回：実習課題（2）レポートと課題の提出
第6回：動画（ビデオ録画・視聴と編集）	第14回：実習のまとめ
第7回：動画（ビデオ録画・視聴と編集）	第15回：実習課題の発表と講評
第8回：実習課題（1）課題の説明	

成績評価方法：

レポート 90% レポートと実習課題を評価する。

平常点評価 10% 出席状況。

科学英語論文作成法特論

グレイ ロバート

授業概要：Guidance in the conventions of writing research reports, abstracts and bibliographies following the conventions of the 'academic genre' are presented. A textbook—focused approach addresses a variety of topics such as Organization, Sentence Structure, Grammar and Mechanics, and The Writing Process.

Supplementary notes will be distributed.

授業の到達目標：This course will provide general guidance in understanding academic writing protocol in English.

授業計画：

第1回：ORIENTATION	第9回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES
第2回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES	第10回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES
第3回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES	第11回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES
第4回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES	第12回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES
第5回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES	第13回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES
第6回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES	第14回：REVIEW
第7回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES	第15回：EVALUATION
第8回：NOTES, PEER DISCUSSION, TEXTBOOK EXERCISES	

教科書：To be announced

参考文献：Nothing required

成績評価方法：

その他 100% Attendance and active participation in class activities

備考・関連 URL：<robgray@waseda.jp>

科学英語論文口演法特論

グレイ ロバート

授業概要：Public speaking practice for the purpose of making academic presentations in English. Students are required to speak on their main field of study, and their current research program. Speeches are critiqued by participating class members. Guidance is given by the instructor to facilitate proficiency in oral presentations, and in taking and responding to questions from the floor. Evaluation is based on the presentation of speeches, and on class participation.

授業の到達目標：The course will draw upon students' individual experience for the purpose of making short presentations in class, in English. The purpose is to give students both experience and confidence for making presentations at Academic conferences.

授業計画：

第1回：ORIENTATION	第9回：DISCURSIVE SPEECH (GROUP 4)
第2回：BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 1)	第10回：FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 1)
第3回：BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 2)	第11回：FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 2)
第4回：BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 3)	第12回：FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 3)
第5回：BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 4)	第13回：FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 4)
第6回：DISCURSIVE SPEECH (GROUP 1)	第14回：REVIEW
第7回：DISCURSIVE SPEECH (GROUP 2)	第15回：EVALUATION
第8回：DISCURSIVE SPEECH (GROUP 3)	

成績評価方法：

平常点評価 75% Presentation × 3

その他 25% Participation

インストラクショナルデザイン特論

向後 千春

授業概要：この科目では、インストラクショナルデザインという領域にこだわらず、教育・心理系の研究で広く使われる次の3つの研究手法をすべて実習します。(1) 質問紙調査法(項目分析・尺度構成)、(2) 半構造化面接法(グラウンデッドセオリーアプローチ)、(3) 実験計画法(要因配置)。レポートは全部で3回あります。実習は、5～6人のグループワークで行いますが、レポートは個人ごとに作成します。実習からレポート作成までのスケジュールはハードですので、覚悟して履修してください。

授業の到達目標：

1. 研究をどのように進めていくかについての技能を習得すること。
2. 質問紙調査法を用いた研究技能を習得すること。
3. 半構造化面接法を用いた研究技能を習得すること。
4. 実験計画法を用いた研究技能を習得すること。
5. 研究レポートを適切な形式で書くことができること。

授業計画：

第1回：教室授業「授業の進め方と科目の概要紹介」	第9回：ワーク「グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析実習」前半
第2回：教室授業「リサーチ・クエスチョンと研究の方法」	第10回：ワーク「グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析実習」後半
第3回：オンデマンド講義「リサーチ・クエスチョンと研究の方法」視聴	第11回：オンデマンド講義「質問紙調査法：作成」視聴
第4回：オンデマンド講義「リサーチ・クエスチョンと研究の方法」個人課題	第12回：オンデマンド講義「質問紙調査法：作成」個人課題
第5回：ワーク「半構造化面接法実習」前半	第13回：ワーク「質問紙調査法実習」前半
第6回：ワーク「半構造化面接法実習」後半	第14回：ワーク「質問紙調査法実習」後半
第7回：オンデマンド講義「グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析法」視聴	第15回：オンデマンド講義「質問紙調査法：分析」視聴
第8回：オンデマンド講義「グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析法」個人課題	

参考文献：適宜指示する。

成績評価方法：

レポート 40% 形式が指示に従っていることと、考察の深さを評価します。

平常点評価 30% ワークへの積極的参加を評価します。

その他 30% オンデマンド講義のあとに出される個人課題を評価します。

備考・関連 URL：

【授業形態】この授業は、オンデマンド講義と教室での実習を併用する「ブレンド型授業」です。教室での実習は、月1回土曜日の3～6限に集中して行い、全部で4回あります。日程は、4/7, 5/12, 6/16, 7/14です（シラバス印刷時点の予定。変更可能性あり）。

【ビデオ】収録ビデオは2012年度に新規収録したものを配信します。

関連 URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

情報コミュニケーション技術特論

スコット ダグラス

授業概要：This course will explore various aspects of communication technology use. We will read and talk about our communication options, for instance, face-to-face, telephone, e-mail, BBS, and video conferencing. Where possible, we will compare the relative situations in American and Japan, although examples from other countries are welcome.

Course readings and classes will be held in English. Students should have TOEIC scores of 700 and above to function effectively in this class.

Active in-class participation is essential to this course. Students will receive a daily participation grade.

授業の到達目標：This semester's goal is to read and understand English-language articles on information and communication technology.

授業計画：

第1回：Introduction, course overview, and activities.	第9回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
第2回：Overview of article selection.	第10回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
第3回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	第11回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
第4回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	第12回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
第5回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	第13回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
第6回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	第14回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
第7回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	第15回：Course summary.
第8回：Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	

教科書：To be announced in class.

成績評価方法：

その他 Grades are based on attendance, participation, and assignments.

インターネット科学特論

西村 昭治

授業概要：2010年現在、およそ8億台のコンピュータが接続され約20億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。本講義ではインターネットの定義から始まり、その歴史をひもとくとともにそれを成り立たせる様々な技術の解説を試みる。また、インターネット上の様々なサービスを解説するとともに、今後の動向について考察する。

授業の到達目標：インターネットに関する知識の習得、研究手法の獲得。

授業計画：

第1回：はじめに：授業ガイダンス	第9回：P2P

第2回：インターネット科学とは	第10回：ネットワークの近未来
第3回：過去へさかのぼるタイムマシン	第11回：研究紹介（1）：動画を用いた新しいコミュニケーション
第4回：インターネット科学の道具：統計ツール	第12回：研究紹介（2）：バーチャルリアリティ
第5回：インターネットの歴史	第13回：研究紹介（3）：Gatterbot
第6回：Google	第14回：研究紹介（4）：モーションキャプチャー
第7回：ウェブ進化論（その1）	第15回：まとめ
第8回：ウェブ進化論（その2）	

参考文献：講義で言及する

成績評価方法：

レポート 80% 講義内容の理解度、自らの考えの主張、論理性、特筆すべき点を個別に評価して加点する。

平常点評価 20% コースナビ上のBBSへの参加度合いを加点する。

備考・関連URL：本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。

教育開発特論

野嶋 栄一郎

授業概要：教育実践の場における測定の問題を、CSCW、情報のモダリティと測定の関係、ヒトの行動と文脈等をテーマに具体的な論文を利用して解説する。

授業の到達目標：教育実践の場における測定方法について開発を含め、新しい試行を提案する

授業計画：

第1回：学力観と教育測定観（総論）	第9回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（1）
第2回：実体的学力観と機能的学力観	第10回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（2）
第3回：学習成果の評価から学習過程の評価へ	第11回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（3）
第4回：行動主義、認知科学、社会的構成主義の学力観と教育工学	第12回：ヒトとヒトが対峙する関係とヒトとコンピュータが対峙する関係
第5回：狭義の教育測定から広義の教育測定へ	第13回：メディアと教育測定（総論）
第6回：ヒトの行動と文脈（総論）	第14回：情報のモダリティと測定
第7回：ヒトの行動は文脈の中で変わるか？	第15回：視聴テスト
第8回：異なった文脈下における衝動型—熟慮型の変容実験	

教科書：「教育実践を記述する—教えること・学ぶことの技法—」野嶋栄一郎編（2002）金子書房

成績評価方法：

レポート 100% 60点を通過基準とする

教育システム工学特論

野口 裕之

授業概要：心理学の研究や臨床場面で用いられる「心理測定尺度」や実際の教育場面で用いられる「テスト」は、その結果が個人の処遇や研究成果に大きな影響を及ぼすため、細心の注意をもって作成され、その性能について十分な評価がなされる必要があります。

この講義では、心理測定尺度やテストを開発・評価するのに必要な「項目分析法」や「テスト理論」の基本事項、さらにテストが及ぼす社会的な影響などについて解説する予定です。統計数理の理論的側面に偏らず、実際に実施されている大規模テストを例にして、実用水準におけるテスト理論の有用性を理解してもらえるように配慮します。具体的な事例には、講師が現在フィールドにしている日本語教育の領域で用いられるテストを取り上げ、言語テストの教育や社会への影響について触れることが多くなります。

授業の到達目標：大規模テスト開発に関する実際的な手順およびそれを支える理論（テスト理論）の概要を習得し、例えば TOEFL や PISA 調査のホームページに掲載されている専門的な研究報告が理解できるようになることを究極の目標とします。

授業計画：

第1回：テストとは	第9回：日本語能力の測定
第2回：テスト作成の流れ	第10回：項目応答理論1—その必要性—
第3回：項目分析	第11回：項目応答理論2—モデル—
第4回：測定と誤差	第12回：項目応答理論3—尺度の等化およびリンキング—
第5回：古典的テスト理論1—信頼性の定義—	第13回：項目応答理論4—特異項目（DIF）分析—
第6回：古典的テスト理論2—信頼性係数の推定—	第14回：パフォーマンスの測定—多相ラッシュ・モデル—
第7回：古典的テスト理論3—測定の妥当性—	第15回：全体を通しての質問と回答および確認テスト
第8回：外国語試験の分析	

教科書：特に定めません。

参考文献：授業中に適宜紹介します。

成績評価方法：

試験 80% 授業内容の習得状況を確認するテストを実施する

平常点評価 20% 出席状況、質問等による参加度を評価する

備考・関連 URL：統計的方法の予備知識としては、平均・分散・標準偏差・相関係数という術語がわかる程度を仮定するのですが、数式は見るのも嫌だ、記号は嫌いだ、という方にはこの講義は向きません。ただし、高校で数学が得意であった必要は全くありませんが、きちんと理解するためには自分で手を動かして数式を展開することも必要になります。

ワークショップデザイン特論

山内 祐平

授業概要：参加型体験学習の新しい様式として注目されているワークショップに関して、その歴史やデザインの特徴を検討し、実際にワークショッププランを作成することによって、創発的学習を志向した学習環境デザインについて実践的なスキルを学ぶとともに、その本質に迫る議論を行う。

授業の到達目標：ワークショップの歴史やデザインの特徴を理解し、ワークショッププランの作成に関する基礎的なスキルを習得する。

授業計画：

第1回：学習環境デザインとワークショップ（1）	第9回：ワークショッププランニング／テーマ設定（2）
第2回：学習環境デザインとワークショップ（2）	第10回：ワークショッププランニング／学習活動のデザイン（1）
第3回：ワークショップの歴史（1）	第11回：ワークショッププランニング／学習活動のデザイン（2）
第4回：ワークショップの歴史（2）	第12回：ワークショッププランニング／学習空間のデザイン（1）
第5回：ワークショップ熟達者のデザインプロセス	第13回：ワークショッププランニング／学習空間のデザイン（2）
第6回：ワークショップ熟達者のキャリア発達	第14回：ワークショッププランニング／総合討議
第7回：ワークショッププランニング／グループ分け	第15回：ワークショッププランの発表
第8回：ワークショッププランニング／テーマ設定（1）	

参考文献：美馬のゆり・山内祐平「未来の学び」をデザインする 東京大学出版会 2005

成績評価方法：

平常点評価 50% 平常点による評価

その他 50% ワークショッププランの評価

情報メディア教育特論

森田 裕介

授業概要：情報メディアを活用した教育に関する研究について、方法、開発、評価の観点から理解を深める。まず、情報社会における情報メディアの存在とその教育利用について解説する。次に、情報メディアを活用した教育に関する研究領域として、Web-Based Learning、動画伝送、マルチメディア活用、仮想現実や拡張現実に関する

る技術の応用を取り上げ、それぞれについて実践的研究の事例を提示する。これらの事例を踏まえ、受講者は、各自で論文を検索し、精読した後、ビデオプレゼンテーションを作成する。ビデオプレゼンテーションの内容については、BBS を用いたオンラインディスカッションを行う。最後に、情報メディアを活用した教育の有用性と限界について BBS を用いて議論を行う。

授業の到達目標：本講義の到達目標は、(1) 情報メディアを活用した教育に関する研究論文を読み、問題点を示すことができる、(2) ビデオプレゼンテーションを作成することができる、(3) オンラインディスカッションにおいて、研究上の有用性や問題点、限界等について自分の考えを論理的に説明し、かつ他の受講生と議論をすることができる、の3点である。

授業計画：

第1回：オリエンテーション オリエンテーションを実施する。	第9回：情報メディアを活用した教育（4）：仮想現実や拡張現実に関する技術の応用 情報メディアを活用した教育として、仮想現実や拡張現実に関する技術の応用について説明する。
第2回：情報社会における教育 情報社会における教育について説明する。	第10回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション：Web-Based Learning Web-Based Learning に関するビデオプレゼンテーションとディスカッションを行う。
第3回：BBS ディスカッション：情報社会における教育 情報社会における教育について、BBS 上でディスカッションを行う。	第11回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション：動画伝送 動画伝送に関するビデオプレゼンテーションとディスカッションを行う。
第4回：情報メディアと学習者特性 情報メディアと学習者特性について説明する。	第12回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション：マルチメディア活用 マルチメディア活用に関するビデオプレゼンテーションとディスカッションを行う。
第5回：BBS ディスカッション：学習者特性 学習者特性について、BBS 上でディスカッションを行う。	第13回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション：仮想現実や拡張現実に関する技術の応用 仮想現実や拡張現実に関する技術の応用に関するビデオプレゼンテーションとディスカッションを行う。
第6回：情報メディアを活用した教育（1）：Web-Based Learning 情報メディアを活用した教育として、Web-Based Learning について説明する。	第14回：総合討論 総合討論を行う。
第7回：情報メディアを活用した教育（2）：動画伝送 情報メディアを活用した教育として、動画伝送について説明する。	第15回：まとめ 本講義をまとめる。
第8回：情報メディアを活用した教育（3）：マルチメディア活用 情報メディアを活用した教育として、マルチメディア活用について説明する。	

教科書：特にない。

参考文献：適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 40% 論文を正しく理解し、自分の意見を論理的に述べるができる。

平常点評価 30% オンデマンド講義を授業し、BBS において積極的に発言したり議論したりすることができる。

その他 30% ビデオプレゼンテーションを作成するスキルを習得している。

備考・関連 URL：フルオンデマンド授業であるが、対面でのオフィスアワーを設ける。ビデオプレゼンテーションを行うため、各自で PC と Web カメラを用意し、MNC 推奨のソフトウェア Xpert をインストールする必要がある。

ある。どうしても PC 等を準備できない場合は教員に相談をすること。

定性データ解析特論

岩坪 秀一

授業概要：アンケート調査法においては複数個の質問項目に選択肢をいくつか設定して被験者に回答を求める。その結果、いわゆる定性的データが得られるが、そこから有用な情報を取り出すために工夫された幾つかの多変量質的データ解析法を紹介する。小規模の予備調査で得られた結果からアンケート質問項目の妥当性を評価、改善するための方法についても触れる予定。

授業の到達目標：紹介した多変量質的データ解析法の長所、欠点を理解し、統計ソフトウェアを使いこなし、適用結果の正しい解釈が出来る力を養成することを目標とする。

授業計画：

第1回：講義の概要と進め方	第9回：定性データに潜在している複数個の尺度を抽出する方法（数量化3類）（2）
第2回：定性データ向け重回帰分析（数量化1類）（1）	第10回：定性データに潜在している複数個の尺度を抽出する方法（対応分析：Correspondence Analysis）
第3回：定性データ向け重回帰分析（数量化1類）（2）	第11回：応用例（1）
第4回：応用例	第12回：応用例（2）
第5回：定性データ向け判別分析（数量化2類）（1）	第13回：対象間の近さに基づく空間配置法（数量化4類と多次元尺度構成法）
第6回：定性データ向け判別分析（数量化2類）（2）	第14回：応用例
第7回：応用例	第15回：レポート課題と解説
第8回：定性データに潜在している複数個の尺度を抽出する方法（数量化3類）（1）	

参考文献：柳井晴夫・岩坪秀一「複雑さに挑む科学—多変量解析入門—」講談社ブルーバックス

成績評価方法：

レポート 60% 課題への取り組みに見られる定性データ解析法の理解度を評価。ユニークなものは加点。
平常点評価 40% 応用例の理解度を評価する。

学習環境デザイン特論

尾澤 重知

授業概要：本授業では、何らかのテクノロジーや道具、システムを用いた学びの支援と評価方法について、教育学、学習科学、知識科学の観点から検討する。前半で基本的な概念や、テクノロジーについて理解を深め、後半はそれぞれのテーマについて、国内外の文献や、事例の批判的検討を行う。

授業の到達目標：講義、輪講、ケース・スタディ、ディスカッション等を通して、（1）関連する理論を第三者に対して分かりやすく説明する力、（2）先行研究や先行事例を批判的に捉えると同時に、経験から学ぶ姿勢の修得、（3）学習環境のデザインと評価技法の習得を目指す。

授業計画：

第1回：ガイダンス（学習環境とは何か）	第9回：知識創造とナレッジマネジメント（1） 知識共有を阻害する要因
第2回：基本概念の整理（1） 知識構成、状況論、コミュニティ・オブ・プラクティス等	第10回：知識創造とナレッジマネジメント（2） 事例研究（富士ゼロックス等）
第3回：基本概念の整理（2） 暗黙知、形式知、ナレッジマネジメント、ワークプレイスラーニング等	第11回：イノベーション（1） イノベーションの促進要因とジレンマ
第4回：テクノロジーの理解（1） コンピュータを用いた学習支援、協調学習支援（CSCL）	第12回：イノベーション（2） 事例研究（IDEO等）
第5回：テクノロジーの理解（2） Twitter、SNS、セカンドライフ、セカイカメラ等の新メディア	第13回：ワークプレイスラーニング（1） 「場」と「デザイン」

第6回：学習環境の評価法（概論）	第14回：ワークプレイスラーニング（2） 事例研究 （履修者の関心に応じて決定する）
第7回：先行研究の検討と自身の研究のマッピング （1） 学生による発表	第15回：全体の振り返り・討論
第8回：先行研究の検討と自身の研究のマッピング （2） 学生による発表	

参考文献：適時、授業内で紹介する。

成績評価方法：

レポート 20% A4で5ページ程度のレポートを課す

平常点評価 30% 講義におけるミニレポート・演習の提出（2×15回）

その他 50% 個人発表・グループ発表（10×5回）、クラスへの貢献

備考・関連 URL：授業順序や割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

<http://www.ozaken.org/>

－修士課程 1 年制コース－

【教育臨床コース】

【研究指導】

学校臨床心理学研究指導 A（前期）・B（後期）

大月 友

授業概要：学校教育場面における教育臨床上の諸問題、および、児童期から青年期にいたる心理行動面の諸問題に関する、参加各人の研究テーマをもとに指導を行なう。問題設定、研究計画立案、データの収集、データ分析、考察、課題研究論文作成、発表などの各方法についての指導・助言を通して、参加各人が教育臨床に関する研究能力を獲得することを目指す。

授業の到達目標：教育臨床に関する総合的・科学的視点、臨床心理学的視点を持ち、各種の問題に対する実践的解決能力を向上させる。

臨床認知発達学研究指導 A（前期）・B（後期）

佐々木 和義

授業概要：教育臨床に関する、科学的な課題論文の作成の指導を行う。学生のフィールドの中で実施できるテーマを選び、研究計画の立案、倫理審査申請書の作成、データの解析法、結果の表示、および考察に関して助言を行う。

発達障害に関するテーマは、発達障害児・者の特性、発達障害児・者への支援方法、親・兄弟、教師への支援方法などである。しかし、フィールドとの関連の重要性を考慮して、相談によって進めていく。

授業の到達目標：

A（前期）

様々な教育臨床上の問題に関して、統計データの意味と解析方法を理解して、科学的な論文を批判的に読むことができ、自分が遭遇する教育臨床上の問題と科学的な論文との関連を理解することができる。

B（後期）

自分が取り上げた教育臨床上の問題に関して、科学的な論文を書くことができること。

【コース必修（演習）】

学校臨床心理学演習 A（前期）・B（後期）

大月 友

授業概要：学校教育における教育臨床の諸問題をテーマに演習を行なう。

学校臨床心理学に関する理論、子どもの心理や能力、対人行動などのアセスメント方法、不登校、いじめ、反社会的行動、家庭内暴力、自殺といった問題への対処および援助方法、教職員のメンタルヘルスなどについて、文献講読を中心に演習をすすめていく。また、課題研究論文作成に必要な心理学研究法や心理統計法の基礎について概説する。

授業の到達目標：文献講読を通して、学校臨床心理学やその他の臨床心理学のこれまでの研究知見を知る。また、論文作成に必要な知識と技術を身につける。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション・心理学研究法〈合同ゼミ〉	第1回：課題研究論文構想発表〈合同ゼミ〉
第2回：心理学研究と研究倫理〈合同ゼミ〉	第2回：課題研究論文の書き方〈合同ゼミ〉
第3回：単一事例計画法〈合同ゼミ〉	第3回：文献の報告と討議（6）：課題研究論文の参考文献（1）：論文読解中級
第4回：心理統計の基礎・データ入力と記述統計量の算出〈合同ゼミ〉	第4回：文献の報告と討議（7）：課題研究論文の参考文献（2）：論文読解準中級
第5回：文献の報告と討議（1）：文献検索初級	第5回：文献の報告と討議（8）：課題研究論文の参考文献（3）：論文読解上級

第6回：t検定（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第6回：文献の報告と討議（9）：課題研究論文の参考文献（4）：論文読解超上級
第7回：文献の報告と討議（2）：文献検索中級	第7回：文献の報告と討議（10）：課題研究論文の参考文献（5）：論文読解のまとめ
第8回：実験計画法と分散分析（理論編）〈合同ゼミ〉	第8回：課題研究論文の経過報告・指導（1）：問題と目的の構成
第9回：文献の報告と討議（3）：文献検索上級	第9回：課題研究論文の経過報告・指導（2）：方法の書き方
第10回：一要因分散分析と多重比較（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第10回：課題研究論文の経過報告・指導（3）：結果のまとめ方
第11回：文献の報告と討議（4）：論文読解初級	第11回：課題研究論文の経過報告・指導（4）：考察のポイント
第12回：二要因分散分析と交互作用（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第12回：課題研究論文に関する討議（1）：発表前半〈合同ゼミ〉
第13回：文献の報告と討議（5）：論文読解準初級	第13回：課題研究論文に関する討議（2）：発表後半〈合同ゼミ〉
第14回：二要因分散分析と交互作用（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第14回：課題研究論文のプレゼンテーション〈合同ゼミ〉
第15回：課題研究論文構想発表〈合同ゼミ〉	第15回：まとめ〈合同ゼミ〉

教科書：授業の中で提示する。適宜資料を配布する。

参考文献：授業で適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。

平常点評価 50% 出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

臨床認知発達学演習 A（前期）・B（後期）

佐々木 和義

授業概要：学生による文献の報告と、それに対する討議によって、参考文献の読み方、目的のとらえ方、手続き、結果の分析方法、および考察の仕方を習得する。また、倫理的配慮に関する考え方、および倫理申請書の書き方を学ぶ。さらに、仮想データを用いて、統計的検定、および分散分析を学び、実験計画法も学ぶ。

授業の到達目標：

A（前期）

教育臨床に関する問題に対して、科学的な検討ができること。

B（後期）

教育臨床に関する問題に対して、科学的な論文を書くことができること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション／並木校舎に関する注意事項、実習記録管理	第1回：論文の書き方
第2回：研究構想発表	第2回：課題研究論文の経過報告・指導（1）
第3回：心理学研究と研究倫理	第3回：心理統計（1）／心理統計の基礎・データ入力・基礎統計量（平均値・SD）の算出
第4回：1事例の研究デザイン	第4回：課題研究論文の経過報告・指導（2）
第5回：課題研究論文指導（1）	第5回：心理統計（2）／t検定（理論編・実践編）
第6回：課題研究論文指導（2）	第6回：課題研究論文の経過報告・指導（3）
第7回：課題研究論文指導（3）	第7回：心理統計（3）／分散分析と多重比較・交互作用（理論編・実践編）
第8回：課題研究論文指導（4）	第8回：課題研究論文の経過報告・指導（4）
第9回：心理統計の基礎	第9回：心理統計（4）／ χ^2 検定（理論編・実践編）・相関分析と回帰分析（理論編）

第10回：心理研究法（質的研究法）	第10回：課題論文の経過報告と討議⑤（個人5）
第11回：課題研究論文指導（5）	第11回：課題研究論文の経過報告・指導（5）
第12回：課題研究論文指導（6）	第12回：課題研究論文の経過報告・指導（6）
第13回：課題研究論文指導（7）	第13回：課題研究論文の経過報告・指導（7）
第14回：課題研究論文指導（8）	第14回：課題論文のプレゼンテーション
第15回：研究構想発表	第15回：まとめ

参考文献：授業中に適宜紹介する。

成績評価方法：

そ の 他 授業への出席やディスカッションへの参加状況について評価する。

備考・関連 URL：

A（前期）

研究法などでは適宜合同ゼミで行う。「文献検索の方法」「心理学研究法の基礎」「心理学研究法（実験編）」「心理学研究法（調査法）」はオンデマンドでも提供する。

B（後期）

研究法などでは適宜合同ゼミで行う。

【コース必修（実習）】

心理教育臨床実習 A（前期）・B（後期）

大月 友、佐々木 和義、藤井 靖

授業概要：

A（前期）

教育臨床における基本的な技術を身につけるための体験的な基礎実習を行っていく。実習は、かかわりづくりに関する実習、傾聴技法に関する実習、カウンセリング技術に関する実習、コンサルテーション技術に関する実習で構成する。

B（後期）

教育臨床に関して、受講生がそれぞれの場で実際にかかわっている事例を取り上げ、事例検討を行っていく。心理的・環境的原因によって生じる児童・生徒の教育臨床的問題と発達・障害的原因によって生じる教育臨床的問題を取り上げる。

授業の到達目標：教育臨床における基本的な臨床技術を身につける。また、個々の児童・生徒を心理教育的な視点から理解し、支援することができるようになる。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション	第1回：事例発表に関する導入
第2回：カウンセリング・コンサルテーションとは	第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例1）
第3回：かかわりづくりに関するグループ実習（1）	第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例2）
第4回：かかわりづくりに関するグループ実習（2）	第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例3）
第5回：かかわりづくりに関するグループ実習（3）	第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例4）
第6回：傾聴実習（1）	第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例5）
第7回：傾聴実習（2）	第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例6）
第8回：傾聴実習（3）	第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例7）

第9回：カウンセリング実習（1）	第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例8）
第10回：カウンセリング実習（2）	第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例9）
第11回：カウンセリング実習（3）	第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例10）
第12回：コンサルテーション実習（1）	第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例11）
第13回：コンサルテーション実習（2）	第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例12）
第14回：コンサルテーション実習（3）	第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例13）
第15回：まとめ	第15回：まとめ

教科書：なし。適宜資料を配布する。

参考文献：講義中で適宜紹介する。

成績評価方法：

A（前期）

レポート 50% 実習内容に関して臨臨床的観点から深く考察しているか評価します。

平常点評価 50% 実習の取り組みや討議への参加状況について評価します。

B（後期）

レポート 50% 担当事例発表において臨臨床的観点から深く考察しているか評価します。

平常点評価 50% 実習の取り組みや事例検討での討議への参加状況について評価します。

備考・関連 URL：この授業の受講生は、原則として教育臨床コースに所属する大学院生に限る。所沢キャンパスで実施する。

心理臨床事例実習 A（前期）・B（後期）

大月 友、佐々木 和義、藤井 靖

授業概要：受講生がそれぞれの場で実際にかかわっている事例を取り上げ事例研究を行なう。心理的・環境的原因によって生じる児童・生徒の教育臨床的問題と発達・障害の原因によって生じる教育臨床的問題を取り上げる。

授業の到達目標：心理臨床に関する力量が専門家の水準に到達すること。

授業計画：

A（前期）	B（後期）
第1回：オリエンテーション／本実習の目的と概要、事例発表の方法、討議の方法等	第1回：オリエンテーション。事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B1）
第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A1）	第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B2）
第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A2）	第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B3）
第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A3）	第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B4）
第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A4）	第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B5）
第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A5）	第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B6）
第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A6）	第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B7）
第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A7）	第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B8）

第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A8）	第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B9）
第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A9）	第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B10）
第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A10）	第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B11）
第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A11）	第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B12）
第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A12）	第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B13）
第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A13）	第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B14）
第15回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A14）。前期のまとめ。	第15回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B15）。まとめ。

教科書：なし。適宜資料を配布する。

参考文献：講義中で適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 事例発表の内容を評価する。

平常点評価 50% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連 URL：この授業の受講生は、原則として教育臨床コースに所属する大学院生に限る。所沢キャンパスで実施する。

【コース選択必修】

教育心理学特論

青柳 肇

授業概要：子どもの学習、動機づけ、評価、適応について学ぶ。

授業の到達目標：学習、動機づけ、評価、適応は、発達の過程の中であらみ合っていることを学ぶ。

授業計画：

第1回：学習に関する文献講読（1）	第9回：動機づけに関する文献講読（4）
第2回：学習に関する文献講読（2）	第10回：動機づけに関する文献講読（5）
第3回：学習に関する文献講読（3）	第11回：適応に関する文献講読（1）
第4回：学習に関する文献講読（4）	第12回：適応に関する文献講読（2）
第5回：学習に関する文献講読（5）	第13回：適応に関する文献講読（3）
第6回：動機づけに関する文献講読（1）	第14回：適応に関する文献講読（4）
第7回：動機づけに関する文献講読（2）	第15回：適応に関する文献講読（5）
第8回：動機づけに関する文献講読（3）	

成績評価方法：

平常点評価 100% レポーター・出席

臨床認知発達学特論

佐々木 和義

授業概要：発達障害児・者の認知、身辺自立行動、社会的スキルなどの発達の諸問題を取り上げ、健常発達と比較しながら、各々の能力とは何か、その発達の教育臨床的意味、その障害のアセスメントなどに関して、講義する。

授業の到達目標：健常発達と比較して、発達障害の発達を教育臨床の現場で理解できること。

授業計画：

第1回：オリエンテーション。発達障害と知的障害の定義のアウトラインと通常発達の発達上の諸問題。	第9回：学習障害と通常発達①：幼児期から小学校低学年の発達の様相。
第2回：注意欠陥／多動性障害と通常発達①：乳幼児期から小学校低学年の発達の様相。	第10回：学習障害と通常発達②：小学校中学年から成人期の発達の様相。
第3回：注意欠陥／多動性障害と通常発達②：小学校中学年から高学年の発達の様相（認知）。	第11回：知的障害と通常発達①：乳幼児期から小学校中学年の様相。
第4回：注意欠陥／多動性障害と通常発達③：小学校中学年から思春期、成人期の発達の様相（行動、社会的スキル）。	第12回：知的障害と通常発達②：思春期から成人期の発達の様相。
第5回：自閉症スペクトラム障害と通常発達①：乳幼児期から小学校低学年の発達の様相。	第13回：重症心身障害
第6回：自閉症スペクトラム障害と通常発達②：小学校中学年から高学年の発達の様相（言語と社会性）。	第14回：行為障害と通常発達①：乳幼児期から小学校中学年の様相。
第7回：自閉症スペクトラム障害と通常発達③：小学校中学年から高学年の発達の様相（行動、社会的スキル）。	第15回：行為障害と通常発達②：思春期から成人期の発達の様相。
第8回：自閉症スペクトラム障害と通常発達④：思春期から成人期の発達の様相（就労等）。	

参考文献：講義中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 期末試験を中として評価する。

レポート 50% 与えられた課題を講義内容を踏まえて深く考察かおうしているか評価する。

平常点評価 50% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連 URL：本講義内容は臨床発達心理士の DP 科目「認知」1-1、1-2、1-4、1-8、2-1、2-2、3-1、3-2、3-3、3-4、3-5、3-6、3-7、DP 科目「社会情動」1-1、1-2、1-6、2-1、2-2、DP 科目「言語」2-1に該当する。所沢校舎で行う。

臨床心理学特論Ⅲ

熊野 宏昭

授業概要：「病気や障害、不幸な経験などによって引き起こされる心理的苦悩を軽減するために心理的援助を行い、問題の解決や改善を目指す学問」とされる臨床心理学が対象にする広汎な領域のうち、第一に、心理臨床の場で遭遇することが多い精神障害を扱う異常心理学に関する解説を行う。そして次に、臨床心理学的介入の理解を目指して、現実指向的介入法であるリラクゼーション法と認知行動療法、認知の機能に焦点づけする臨床行動分析とマインドフルネス、人生の節目の時期に有用となる力動的的心理療法とシステム論的家族療法について順次解説する。

授業の到達目標：臨床心理学全般、異常心理学、臨床心理学的なアセスメントと介入について、実践的知識を獲得することを目標とする。

授業計画：

第1回：科学としての臨床心理学	第9回：パーソナリティ障害／精神病的障害
第2回：臨床心理学の構造と実践	第10回：発達臨床心理学概説
第3回：臨床心理学研究における測定	第11回：病態毎の治療戦略（薬物療法を含む）
第4回：臨床心理アセスメント概説	第12回：リラクゼーション／認知行動療法
第5回：異常心理学概説	第13回：マインドフルネス／臨床行動分析
第6回：気分障害／不安障害	第14回：力動的的心理療法／家族療法
第7回：摂食障害／身体表現性障害	第15回：受講生と Q & A
第8回：心身症／生活習慣病	

参考文献：よくわかる臨床心理学（ミネルヴァ書房）、ストレスに負けない生活（ちくま新書）、マインドフル

ネスそして ACT へ（星和書店）。

成績評価方法：

レポート 40% 14回終了後に提出する質問をレポートに代える。

平常点評価 60% 授業出席状況から評価する。

備考・関連 URL : <http://hikumano.umin.ac.jp/>

特別支援教育特論

佐々木 和義

授業概要：発達障害と通常発達の認知、言語、身辺自立行動、社会的スキルなどの発達の諸問題を取り上げ、その発達の概観をし、生物学的・神経学的基礎、認知的基礎、社会的基礎を講義する。さらに、教育的側面と社会的・文化的側面についても理解を深めつつ、教育臨床における発達支援について講義する。

授業の到達目標：発達障害に対して個別場面、学校場面、親、教師などの様々な場面・対象に対して教育臨床の実践ができること。

授業計画：

第1回：オリエンテーション。特別支援教育における発達障害の位置づけ。	第9回：自閉症スペクトラム障害②：思春期から成人期でのジョブスキルなどの自立への支援法、および認知的アプローチ法。
第2回：障害の概念と障害特性の理解。	第10回：アスペルガー障害：社会的スキル訓練、セルフコントロール法、および認知的アプローチ法。
第3回：特別支援教育におけるアセスメント。	第11回：学習障害の、乳幼児期から小学校低学年での支援法（学習スキル・身辺自立）、親指導。
第4回：個別支援計画と支援法。	第12回：学習障害の、小学校中学年から成人期での支援法（社会的スキル・問題解決）。
第5回：学校教育場面での支援の実際。	第13回：精神遅滞の、乳幼児期から小学校中学年で支援法（身辺自立）、親指導、コンサルテーション。
第6回：注意欠陥／多動性障害①：定義、乳幼児期から児童期での支援法、親指導、および社会的スキル訓練。	第14回：精神遅滞の、思春期から成人期での支援法（社会的スキル）、親指導、コンサルテーション。
第7回：注意欠陥／多動性障害②：思春期から成人期での支援法、および認知的アプローチ法。レポート課題。	第15回：発達障害児に関するペアレント・トレーニング、ティチャーズ・トレーニング。
第8回：自閉症スペクトラム障害①：定義、乳幼児期から児童期での支援法（身辺自立・言語・認知）、親指導、コンサルテーション。	

参考文献：講義中に適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 与えられた課題を講義内容を踏まえて深く考察しているか評価する。

平常点評価 50% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連 URL：本講義内容は臨床発達心理士の DP 科目「基礎」2-1、2-2、4-1、4-2、4-3、4-4、4-5、4-6、「認知」1-1、1-2、1-4、1-6、1-7、2-1、2-2、3-2、3-4、3-6、3-7、DP 科目「社会情動」1-1、3-1、3-2、DP 科目「言語」1-1、1-2、1-3、1-4、1-5、1-6、1-7、2-2、2-3、2-4、2-5に該当する。並木校舎で行う。

教育臨床査定特論

大月 友

授業概要：学校教育場面における心理教育的アセスメントの理論と実際を学んでいく。具体的には、学校教育現場での心理教育的アセスメントの意義や倫理、個人や集団に対するさまざまなアセスメント方法、各種心理検査・発達検査の理論的背景、実習を通じた発達検査の技術獲得、検査結果に基づく教育評価および支援計画の立て方などを学んでいく。なお、本講義内容は、DP 科目「基礎」3-2～3-4、4-1、4-2、5-4、「社

会情動」2-1～2-5、「言語」2-1、2-3、2-5に該当する。

授業の到達目標：学校教育場面における心理教育的アセスメントの基本的な枠組みを理解し、発達検査の基本的な実施技術や解釈方法、解釈にもとづく指導援助の立案ができるようになる。

授業計画：

第1回：オリエンテーション・学校現場における教育評価と心理教育的アセスメント	第9回：知能検査の実施法（4）
第2回：心理教育的アセスメントの基本的考え方	第10回：知能検査結果の解釈（1）
第3回：心理教育的アセスメントの方法論	第11回：知能検査結果の解釈（2）
第4回：心理教育的アセスメントにおける心理検査	第12回：知能検査結果の解釈（3）
第5回：個人と集団に対するアセスメント	第13回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助の立案（1）
第6回：知能検査の実施法（1）	第14回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助の立案（2）
第7回：知能検査の実施法（2）	第15回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助の立案（3）
第8回：知能検査の実施法（3）	

教科書：なし。適宜資料を配布する。

参考文献：講義中で適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 40% 与えられた課題を講義内容を踏まえて深く考察しているか評価する。

平常点評価 60% 授業への出席や実習への取り組み状況について評価します。

乳幼児発達心理学特論

井原 成男

授業概要：最も大きい括りでいうと、アタッチメントの発達について論じる。今年度は、これまでの研究を大成した、移行対象から見たアタッチメントについて論じるが、常に病院での小児科臨床を念頭に置き、そこで得た知識が、学校現場ほかの他領域に、本質を変えることなくどのように応用できるか、受講生とともに考えて行きたい。Winnicott, Klein, Bion のみでなく、Stern, Mahler, Erikson についてもふれたい。

使用予定教科書：移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学、岩崎学術出版社、2006年刊（教科書については、開講時に著者割引で購入できるよう配慮します。）

なお、本講義内容は、DP 科目基礎1-2～3-4、4-2、4-4～4-6、DP 社会情動1-1～1-2、1-4～2-1、2-3～2-4、3-1～3-2に該当する。

授業の到達目標：移行対象というトピックから発達現象の本質に迫るとともに関連する発達理論について知る。報告と討論が中心となる。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：アタッチメント理論のあらまし
第2回：移行対象論（1）あらまし	第10回：アタッチメント理論の歴史
第3回：移行対象論（2）Winnicott 論	第11回：アタッチメント理論の応用
第4回：移行対象論（3）Stern, Erikson, Bion, Mahler	第12回：症例研究（1）
第5回：移行対象論（4）移行対象と自閉対象	第13回：症例研究（2）
第6回：移行対象論（5）移行対象と自閉症（1）	第14回：症例研究（3）
第7回：移行対象論（6）移行対象と自閉症（2）	第15回：まとめと全体討論
第8回：移行対象と発達心理学	

成績評価方法：

レポート 80% レポートによる評価

平常点評価 20% 平常点による評価

教育開発特論

野嶋 栄一郎

授業概要：教育実践の場における測定の問題を、CSCW、情報のモダリティと測定の関係、ヒトの行動と文脈等をテーマに具体的な論文を利用して解説する。

授業の到達目標：教育実践の場における測定方法について開発を含め、新しい試行を提案する

授業計画：

第1回：学力観と教育測定観（総論）	第9回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（1）
第2回：実体的学力観と機能的学力観	第10回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（2）
第3回：学習成果の評価から学習過程の評価へ	第11回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（3）
第4回：行動主義、認知科学、社会的構成主義の学力観と教育学	第12回：ヒトとヒトが対峙する関係とヒトとコンピュータが対峙する関係
第5回：狭義の教育測定から広義の教育測定へ	第13回：メディアと教育測定（総論）
第6回：ヒトの行動と文脈（総論）	第14回：情報のモダリティと測定
第7回：ヒトの行動は文脈の中で変わるか？	第15回：視聴テスト
第8回：異なった文脈下における衝動型—熟慮型の変容実験	

教科書：「教育実践を記述する—教えること・学ぶことの技法—」野嶋栄一郎編（2002）金子書房

成績評価方法：

レポート 100% 60点を通過基準とする

発達行動学特論

根ヶ山 光一

授業概要：親子関係の変化をめぐる諸問題について、子別れの観点から動物行動学の知見もまじえつつ講じる。とくに現代社会における親子関係とその身体性に注目し、子別れの過程や、それを取り巻く哺乳類・霊長類としての生物学的要因、テクノロジーや価値観などの社会文化的要因と、その相互関連性を中心に検討する。なお、本講義はオンデマンド方式と分類されるが、実際には所沢キャンパスでの教室における授業とオンデマンド授業を隔週で行うハイブリッド型とする。

授業の到達目標：発達行動学の基本的枠組みについて習得し、自らの見解を表明できるようになる。

それを学会に報告し、かつ論文化できる。

授業計画：

第1回：授業の概要説明	第9回：食をめぐる対立（2）討論
第2回：離れつつ保護する（1）講義	第10回：子どものメッセージを読みとる（1）講義
第3回：離れつつ保護する（2）討論	第11回：子どものメッセージを読みとる（2）討論
第4回：子別れのプロセス①（1）講義	第12回：ほどよい隔たりとは（1）講義
第5回：子別れのプロセス①（2）討論	第13回：ほどよい隔たりとは（2）討論
第6回：子別れのプロセス②（1）講義	第14回：子どものからだと危害（1）講義
第7回：子別れのプロセス②（2）討論	第15回：子どものからだと危害（2）討論
第8回：食をめぐる対立（1）講義	

教科書：根ヶ山光一 著「〈子別れ〉としての子育て」（NHK 出版）

参考文献：適宜指示する。

成績評価方法：

レポート 20% 理解度および独創性

平常点評価 70% 受講の積極性

その他 10% 勉学態度

備考・関連 URL：積極的な参加・発言を期待する。

学校臨床心理学特論

小林 正幸

授業概要：学校心理学を理論の背景におき、認知行動療法の方法論を主軸に、主に学校領域の臨床的な課題を材料にする。第1回～第4回は、教育問題の中核を占める「不登校」を取り上げ、現代の教育問題の構造的な課題を明確にしつつ、その周辺課題であるいじめの問題、特別支援教育の問題などを講じる。とくに、問題の形成要因が問題の未然防止や早期発見、早期対応に関わること、維持要因が臨床場面での介入に関連することを理解

する。第5回から第7回までは、事例理解に際して、クライアントの困り感を構造的に理解するマッピング法と、多様な解決策を短時間で見出す付箋法を用いて、具体的な事例への理解と方針作成について学ぶ。第9回で組織的な対応について講じた後、後半の第10回以降はロールプレイングを用いて具体的な支援場面での応答構成のスキルアップを行う。2回的事例研究コンテストは、事例理解と対応策に関わるものと、教育相談領域での関わりの質の評価を中心に、持ち寄ったレポートを相互評価する機会とすると共に、総合的な技量向上を図るものである。

なお、本講義内容は、DP 科目基礎1-2、2-2、3-3、4-3、4-5、4-6、5-3、および、DP 科目情動1-1、1-2、1-6、2-3、2-4に該当する。

到達度について、レポートの相互評価ポイント、自発的に行う特別レポートの評価ポイント、授業の途中でやる作業ポイントなどを加算することにより、数量化して評価を行う。評価体系が複雑なので、初回に解説を行う。

授業の到達目標：スクール・カウンセラーあるいは学校内での教育相談あるいは特別支援コーディネーターレベルの力量の獲得を目指す。ある意味では、それ以上の水準の習得を目指す。(1) カウンセラー、教育相談担当者、臨床心理学の専門家、研究者としての構え、働きかけや姿勢を形成する。(2) 実践に密着した題材から学ぶ。(3) 実践的に思考し、実践的な技量を習得する。

授業計画：

第1回：現代の教育問題の意味（1）／本講義の目的と概要、評価方法について説明します。併せて、教育問題の時代変遷を述べ、教育問題が持つ現代的な意味について講じます。	第9回：協働による子ども支援／学校組織で子どもを支えることについて、発達障害を例に講じます。
第2回：現代の教育問題の意味（2）／上記の続きの講義を行います。	第10回：面接の方法（本人面接）／子ども本人との面接方法について講じます。
第3回：問題行動の形成要因／学校不適応問題として、不登校を取り上げ、問題の形成要因から予防策を講じます。	第11回：面接演習／本人との面接のロールプレイング演習。
第4回：問題行動の維持要因／問題の維持要因から解決策を講じます。	第12回：面接演習／本人との面接のロールプレイング2回目
第5回：学校での事例検討（1）／学校不適応問題の中から、不登校、非行、学習障害の場合などを取り上げ、事例検討会を体験します。マッピングや付箋法などを用いたワークショップです。	第13回：コンサルテーションの方法／保護者の面接手法を講じます。
第6回：学校での事例検討（2）／上記とは異なる事例で検討を行います。	第14回：コンサルテーションの演習／保護者面接ロールプレイング
第7回：学校での事例検討（3）／上記とは異なる事例で検討を行います。	第15回：事例研究コンテスト（2）／指定された事例を元に課題を貸し、レポートを持ち寄って相互評価します。
第8回：事例研究コンテスト（1）／指定された事例から、解決策を持ち寄り、相互評価を行います。	

参考文献：初回に100冊ほどの関連文献一覧を配布する。

成績評価方法：

その他 2回的事例研究コンテストをレポートを持参する形で行い相互評価を行う。加えて、特別レポートを経以上点として加算していく。

備考・関連 URL：本講義の評価体系は多軸的絶対評価のポイント制で、複雑であるので、本評価方法の様式では表現しきれないため、初回に解説を行う。

応用健康科学特論

竹中 晃二

授業概要：従来、健康教育の研究では、ヒトの健康阻害要因の除去や制御、たとえば喫煙、飲酒、栄養（肥満）、運動不足、ストレス問題など、健康に対するネガティブな要因を別々に評価し、それらを除去したり、変容させ

ることに注意が向けられていた。しかし、最近ではヒトの健康関連問題を「総合的」に捉えたり、健康関連問題を「行動」として扱う観点が主流を占めるようになってきた。前者の観点では、健康阻害要因のそれぞれは複雑にリンクしており、そのため総合的な健康プログラムとしてのウエルネス活動、またはヘルスプロモーション活動が注目を浴びている。たとえば、健康危険因子の評価、禁煙、血圧コントロール、運動や体力作り、体重コントロール、栄養教育、ストレス・マネジメント、腰痛予防などを一つの総合的プログラムとして扱い、健康教育と実践を一つの範疇で捉える動きである。もう一つの観点は、ヒトの健康に関わる行為を「行動」と見なし、その行動を変容させたり維持させるためにいくつかの健康行動モデルを想定し、それらのモデルによって介入を考えるという研究である。

授業の到達目標：行動変容における理論・モデルおよび技法についての理解とそれらの適用例について熟達する。

授業計画：

第1回：講義の概要と背景	第9回：健康指導に活かすカウンセリング
第2回：健康行動変容	第10回：高齢化社会と転倒予防
第3回：健康行動変容プログラム開発の興味とグループ分け	第11回：プログラム開発の手順と方法
第4回：子どもの健康づくり	第12回：プログラム開発の中間発表
第5回：ヘルスコミュニケーション	第13回：ヘルスプロモーションビデオの鑑賞
第6回：ストレスマネジメント	第14回：効果的なデリバリーチャンネル
第7回：ダイエットプログラム	第15回：スクーリング：グループ別研究発表
第8回：禁煙プログラム	

教科書：行動変容：健康行動の開始・継続を促すしかけづくり（健康・体力づくり事業財団）

成績評価方法：

レポート 30% 課題レポート
 平常点評価 30% 課題の提出（書き込み課題）
 その他 40% グループ別発表の完成度。毎回のBBSへの書き込み課題、小レポートの提出、スクーリングにおける研究発表および課題レポートによって加算評価を行う。

備考・関連URL：<http://takenaka-waseda.jp/>

インターネット科学特論

西村 昭治

授業概要：2010年現在、およそ8億台のコンピュータが接続され約20億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。本講義ではインターネットの定義から始まり、その歴史をひもとくとともにそれを成り立たせる様々な技術の解説を試みる。また、インターネット上の様々なサービスを解説するとともに、今後の動向について考察する。

授業の到達目標：インターネットに関する知識の習得、研究手法の獲得。

授業計画：

第1回：はじめに：授業ガイダンス	第9回：P2P
第2回：インターネット科学とは	第10回：ネットワークの近未来
第3回：過去へさかのぼるタイムマシーン	第11回：研究紹介（1）：動画を用いた新しいコミュニケーション
第4回：インターネット科学の道具：統計ツール	第12回：研究紹介（2）：バーチャルリアリティ
第5回：インターネットの歴史	第13回：研究紹介（3）：Catterbot
第6回：Google	第14回：研究紹介（4）：モーションキャプチャー
第7回：ウェブ進化論（その1）	第15回：まとめ
第8回：ウェブ進化論（その2）	

参考文献：講義で言及する

成績評価方法：

レポート 80% 講義内容の理解度、自らの考えの主張、論理性、特筆すべき点を個別に評価して加点する。
 平常点評価 20% コースナビ上のBBSへの参加度合いを加点する。

備考・関連URL：本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。

臨床心理学校地域援助特論

大月 友

授業概要：乳幼児期から青年期にいたる児童・生徒の心理行動面、発達面の諸問題に対して、育児・保育・教育場面などの地域で実践される臨床心理学的支援の理論と実際を学んでいく。具体的には、地域援助の方法論としてのコンサルテーションやカンファレンス、スクールカウンセリング、他職種との連携による支援、保護者への支援、学級集団を対象とした心理教育的支援などに関して、その理論的背景を学ぶとともに具体的な実践方法の獲得を目指す。なお、本講義内容は、DP科目「基礎」4-1～4-6、5-3、「育児保育」2-1～2-3、5-1～5-4、6-2～6-5、7-2～7-6に該当する。

授業の到達目標：地域で実践される臨床心理学的支援の理論と実際を学び、具体的な実践方法を習得する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：社会的スキル訓練の理論的背景
第2回：地域援助の考え方と基本的姿勢	第10回：社会的スキル訓練の実際
第3回：スクールカウンセラーと連携支援	第11回：問題解決訓練の理論的背景
第4回：コンサルテーションの理論と方法	第12回：問題解決訓練の実際
第5回：コンサルテーションの実際	第13回：ストレスマネジメント訓練の理論的背景
第6回：保護者への支援1（コンサルテーション）	第14回：ストレスマネジメント訓練の実際
第7回：保護者への支援2（親訓練）	第15回：地域・社会への働きかけ
第8回：学級集団への予防開発的介入と治療教育的介入2	

教科書：なし。適宜資料を配布する。

参考文献：授業で適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 担当発表回の準備状況、発表内容に関して評価する。

平常点評価 50% 授業への出席状況や討議への参加状況に関して評価する。

教育発達心理学特論

大月 友、菅野 純、佐々木 和義、嶋田 洋徳

授業概要：学校教育場面において、児童・生徒の発達に伴うさまざまな課題は極めて重要な問題である。そこで本特論では、学校教育場面において基礎となる発達心理学の代表的な理論を概観しながら、教育臨床場面において、児童・生徒（乳幼児期・児童期・思春期・青年期）を発達の視点から理解し、具体的に支援する方法を概説する。本授業は、全回オンデマンド授業として実施する。なお、本講義内容は、DP科目「基礎」1-1～1-4、3-2～3-4、4-1～4-4、「認知」1-1～1-8、2-1～2-3、3-1～3-4、3-6～3-7、「社会情動」1-1～1-7、2-3～2-4、3-1～3-2、「言語」1-1、1-3～1-7、2-1～2-5、「育児保育」1-1～1-2、3-1～3-2、4-1～4-2、5-1、5-4、6-1～6-3、6-5～6-6、7-1～7-4、7-5～7-7に該当する。

授業の到達目標：発達心理学的な視点の基本的な枠組みを理解し、学校教育場面における児童・生徒への発達の支援ができるようになる。

授業計画：

第1回：イントロダクション	第9回：認知・思考の発達の支援の方法
第2回：学校教育の基盤としての発達心理学	第10回：社会性の発達の支援の方法
第3回：認知・思考の発達	第11回：言語の発達の支援の方法
第4回：自己意識の発達	第12回：発達の視点からの事例理解
第5回：社会性の発達	第13回：教育評価と心理アセスメント1
第6回：言語の発達	第14回：教育評価と心理アセスメント2
第7回：中間課題とその解説	第15回：まとめ
第8回：アセスメントの方法論（知能検査法）	

教科書：なし。適宜資料を配布する。

参考文献：講義中で適宜紹介する。

成績評価方法：

レポート 50% 与えられた課題を講義内容を踏まえて深く考察しているか評価する。

平常点評価 50% 授業への出席やディスカッションへの参加状況について評価する。

【コース選択】

家族臨床心理学特論

菅野 純

授業概要：不登校やいじめ、家庭内暴力など、子どもの臨床的諸問題は家族と切り離せない。本講義では家族心理学や家族療法についての最近のテーマを取り上げ、家族がかかわるさまざまな事例を検討し、教育臨床実践との関連をはかりたい。テーマとしては、臨床発達心理学における養育者へのカウンセリングや、対象者・家族とのコミュニケーション方法、家族の病理・事例検討、社会情動発達に関する理論およびアセスメント、介入と支援の実際、教育現場および育児現場での支援の方法などを扱う。尚、本授業は基本的には全回オンデマンド授業として実施する。

授業の到達目標：家族臨床心理学についての理論を学び、家族臨床心理学の方法による事例理解と事例への支援方法を学ぶ。

授業計画：

第1回：家族臨床心理学概論	第9回：家族の臨床的問題（3） 発達障害における具体的支援の進め方
第2回：家族の歴史と現在	第10回：家族への家族臨床心理学的アプローチ（1） 個人療法
第3回：家族の臨床的問題（1） 不登校—人間関係の障害と情動失調への介入の方法—	第11回：家族への家族臨床心理学的アプローチ（2） 家族療法
第4回：家族の臨床的問題（2） 家庭内暴力—青年期危機のアセスメントと対応—	第12回：家族への家族臨床心理学的アプローチ（3） 子どもの発達支援① 保護者への支援
第5回：家族アセスメント（1） 子どもの社会情動発達の基礎	第13回：家族への家族臨床心理学的アプローチ（4） 子どもの発達支援② 子ども本人への支援
第6回：家族アセスメント（2） 子どもの社会情動発達のアセスメント① 他者および環境を通して	第14回：家族への家族臨床心理学的アプローチ（5） 子どもの発達支援③ 地域・社会への支援
第7回：家族アセスメント（3） 子どもの社会情動発達のアセスメント② 面接法による思春期青年期危機のアセスメント	第15回：家族のライフサイクルと家族の発達課題
第8回：家族アセスメント（4） 子どもの社会情動発達のアセスメント③ ケース研究	

成績評価方法：

レポート 80% 家族臨床心理学のそれぞれの課題を正確に理解し、各自のオリジナルな考察点が含まれているかを問う。

平常点評価 20% BBSでの積極的な討論と適切なコミュニケーションを問う。

備考・関連 URL：なお、本講義内容は、臨床発達心理士のDP科目「基礎」4-5、4-6、「社会情動」1-7、2-2、2-3、2-4、3-1、3-2、「育児保育」6-2、6-3、6-4に該当する。

学校臨床生徒指導学特論

嶋田 洋徳

授業概要：本特論では、学童期から思春期、青年期に至るまでに生じるさまざまな学校の内外の生徒指導（特にいわゆる生徒指導や教育相談）上の諸問題を取り上げ、それらの理解と臨床心理学的な立場からの具体的な援助の方法を概説する。また、それらの援助方法の基盤となるカウンセリングの諸理論についても概説する。さらに、スクールカウンセラーなどの相談職員との連携の具体的なあり方についても言及する。

授業の到達目標：生徒指導や教育相談の理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画：

第1回：イントロダクション、生徒指導の定義	第9回：学校内の機能的役割分担
第2回：スクールカウンセラーと相談職員	第10回：学校内の行動連携
第3回：教師の活動、スクールカウンセラー等の活動	第11回：発達障害と特別支援教育（言語発達の基礎、言語発達支援を含む）
第4回：3つの心理学的アプローチとその差異	第12回：行動コンサルテーション

第5回：行動分析的アプローチ	第13回：社会教育と保護者
第6回：行動観察の方法	第14回：最終課題とその解説
第7回：中間課題とその解説	第15回：まとめ
第8回：機能分析的なケース理解	

教科書：使用しない。必要に応じて配付（アップロード）する。

参考文献：講義中に適宜紹介する。

成績評価方法：

試験 0% 実施しない。

レポート 60% 課題内容の達成度による。

平常点評価 25% 制限時間内のアクセス記録による。

その他 15% BBSの書き込みの程度による。

備考・関連URL：本特論は、全回オンデマンド授業として実施する。

また、本講義内容は、臨床発達心理士のDP科目「基礎」2-1、3-3、4-2、4-3、4-5、5-4、DP科目「社会情動」1-1、1-7、2-2、2-3、2-4、DP科目「言語」1-1、1-3、1-6、1-7に該当する。

教育集団心理学特論

岡安 孝弘

授業概要：現代の学校教育において、自立性および自律性を備えた人間の育成という観点から、児童生徒にライフスキルを習得させるための教育プログラムを導入することの必要性が指摘されている。本講義では、そのための方法として、（１）学級集団および学校不適応のリスクの高い小集団を対象とした心理教育プログラム（社会的スキル教育、ストレスマネジメント教育、不安や抑うつ予防教育、怒りマネジメント教育など）、および（２）キャリア教育プログラムの基本的な考え方とその実践方法について解説する。また、受講者とともに、より効果的な教育プログラムを開発するためのノウハウについて検討することを通して、独力でプログラムを作成し、実施できるようになることを目指したい。

授業の到達目標：心理教育プログラムやキャリア教育プログラムを実施することの意義やその背景にある理論を理解することが第１の目標である。最終的な目標は、受講生それぞれの教育実践現場のニーズに応じた教育プログラムを開発し、実践するためのスキルを習得することである。そのためには、積極的に授業に参加し、相互に議論を交わすことが求められる。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：抑うつ・不安予防のライフスキル教育（１）
第2回：児童生徒の学校不適応の現状	第10回：抑うつ・不安予防のライフスキル教育（２）
第3回：認知・行動の変容技法（１）	第11回：怒りコントロールプログラム（１）
第4回：認知・行動の変容技法（２）	第12回：怒りコントロールプログラム（２）
第5回：社会的スキル教育（１）	第13回：中学校・高校におけるプログラムの適用事例
第6回：社会的スキル教育（２）	第14回：キャリア教育の意義と内容
第7回：ストレスマネジメント教育（１）	第15回：キャリア教育の具体的な展開
第8回：ストレスマネジメント教育（２）	

教科書：授業の中で紹介する

参考文献：授業の中で適宜紹介する

成績評価方法：

レポート 30% 各自考案した教育プログラムをレポートにまとめる。その有効性および実践可能性を評価対象とする。

平常点評価 70% 毎回出席し、受講者相互で積極的な議論を交わしたか否かを評価する。

発達科学特論

大藪 泰

授業概要：乳幼児の社会的認知能力の発達について論じる。人間の心は、養育者との間で誕生し育つ。それは他の霊長類に比し、圧倒的に重要な出来事である。特異な人志向性能力をもつ乳児の心は、養育者からの共感的な関わりを根子にして、きわめて豊かな意味共有の世界を構築し、心と心の結びつきを強めてゆくからである。そこには外界との関係性に気づくのみならず、自己をも静観的に眺めようとする、有能で相補的な情動と認知の

働きの存在が予想される。この特論では、乳児がもつ生物としての「ココロ」が、養育者との関係を足場に、人間らしく文化化された「心」に発達する過程を展望する。特に、人との共有世界の原型を誘導する「情動性」、人や物がもつ意味世界への気づきを促す「静観性」、そして同一の事物に人と一緒に注意を向ける「共同注意」といった現象を基底において論述し、文化世界へ参入し文化を学習する主体としての子どもの心を探ってみたい。

授業は講義形式で行い、多くの映像（動画、静止画）を使用して、乳幼児の行動を身近に感じられるようにしたい。

尚、本講義内容は、臨床発達心理士のDP科目「認知」1-3、1-4、2-1、3-1、3-4、DP科目「社会情動」1-4、1-5、DP科目「言語」1-2、1-3、1-4に該当する。

授業の到達目標：乳幼児の社会的認知能力の発達を理解する。その能力は母子相互の「情動性」、「静観性」、「共同注意」といった精神機能に支えられていること、さらにそれは人間に固有な文化発展の基盤でもあることを認識できるようになる。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：言語的自己感
第2回：乳児発達研究の歴史的経緯	第10回：他者感と物の認識（1）
第3回：乳児の発達を論じる視点（1）	第11回：他者感と物の認識（2）
第4回：乳児の発達を論じる視点（2）	第12回：人との共有世界（1）
第5回：新生児の初期行動	第13回：人との共有世界（2）
第6回：新生児の行動と母親の応答性	第14回：人との共有世界（3）
第7回：新生児から乳児への発達移行	第15回：まとめ
第8回：体感的自己感	

教科書：使用しない

参考文献：

大藪 泰 共同注意 川島書店 2004

トマセロ 心とことばの起源を探る 勁草書房 2006

成績評価方法：

レポート 80% レポートにより評価する。与えられた課題を講義内容と関連づけ、いかに深く考察しているかどうかを評価する。

平常点評価 20% 出席を含めた授業への参加姿勢などによって評価する。

福祉教育特論

前橋 明

授業概要：本講では、児童を対象にした福祉教育をとりあげる。福祉教育は、将来、社会の担い手となる子どもたちが、人を人として尊び、人間一人ひとりが平等で、かつ、相互に思いやりの心で援助し合っていくという「福祉」の心を育てることを通して、福祉に対する理解と関心を深めるとともに、社会に奉仕する実践的態度の育成を図ることをねらいとする。また、福祉教育は、子どもたちの人間性の育成に密接な関わりをもつものであるから、学校における教育活動だけでなく、学校外における家庭や地域の全教育活動を通して行う必要性を理解する。

そこで、本講では、学校ならびに家庭や地域における福祉教育のあり方やその具体的実践について演習する。なお、本講義内容は、DP科目 育児保育2-2、2-3、6-2、6-3、6-4、7-2、7-3、7-4、7-5に該当する。

授業の到達目標：福祉に対する理解と関心を深め、社会に奉仕する態度を育む「福祉教育」のあり方やその具体的実践方法を、講義と与えられた課題を遂行することによって、企画・提案できるようになる。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：育児・保育現場での支援と福祉の心
第2回：福祉教育の目的と内容	第10回：輝く子どもの未来づくり（子ども支援・保護者支援・保育者支援・地域支援を考える）
第3回：高等学校福祉科の現状と課題	第11回：学校ならびに家庭や地域における福祉教育の具体的実践・ボランティア活動
第4回：高等学校福祉科が行っている福祉体験・レポート課題の提示	第12回：レポート課題報告と討論・評価①

第5回：福祉体験Ⅰ（車椅子援助体験）	第13回：レポート課題報告と討論・評価②
第6回：福祉体験Ⅱ（視覚障がい者の方への手引き体験）	第14回：レポート課題報告と討論・評価③
第7回：福祉体験Ⅲ（福祉レクリエーション）	第15回：課題レポートの最終提出と解説
第8回：バリアフリー調査・チェックリスト作成	

教科書：前橋 明『ケアのしごと基本百科』ひかりのくに、2006

参考文献：

前橋 明『子どもの未来づくり1』明研図書、2010

前橋 明『子どもの未来づくり2』明研図書、2010

成績評価方法：

レポート 50% 与えられた課題を講義内容を絡めて考察・論述しているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 発表やディスカッションへの参加を評価する。

生体機能学特論

今泉 和彦

授業概要：本特論では、オンデマンド方式により、私達の研究室が最近実施した研究データを中心としてその学術的背景を述べると共に、アルコール代謝、茶カテキン摂取による熱産生能、ドーピング薬物や香辛料辛味摂取による生理機能の応答及び亜鉛欠乏による生体ストレス応答とそのメカニズム等について紹介する。

授業の到達目標：飲酒（＝アルコール摂取）、茶カテキン・香辛料辛味成分・ドーピング薬物等の摂取、ミネラルのうち亜鉛が欠乏したとき、生体機能がどのように変動するかを系統的に把握・理解することを目標におく。

授業計画：

第1回：飲酒（アルコール摂取）と生体機能との関連（1）	第9回：亜鉛欠乏と生体機能との関連（2）
第2回：飲酒（アルコール摂取）と生体機能との関連（2）	第10回：鉄欠乏と生体機能との関連
第3回：飲酒（アルコール摂取）と生体機能との関連（3）	第11回：香辛料（特にトウガラシ成分）摂取と生体機能との関連
第4回：茶カテキン摂取による生体機能との関連（1）	第12回：骨格筋の可塑性（肥大・萎縮）とその調節（1）
第5回：茶カテキン摂取による生体機能との関連（2）	第13回：骨格筋の可塑性（肥大・萎縮）とその調節（2）
第6回：ドーピング作動薬と生体機能との関連（1）	第14回：最近の研究成果の紹介
第7回：ドーピング作動薬と生体機能との関連（2）	第15回：最近の研究成果の紹介
第8回：亜鉛欠乏と生体機能との関連（1）	

参考文献：Sato S, et al.: J Physiol Sci, 60: 119-127 (2010) ; Imaizumi K, et al.: J Toxicol Sci, 35: 583-589 (2010)

成績評価方法：

レポート 50% 5段階評価

平常点評価 50% BBSの発言数とその内容を5段階で評価する

備考・関連 URL：<http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

児童家庭福祉特論

川名 はつ子

授業概要：少子高齢社会の脅威を強調した社会防衛のための少子化対策を超えて、誰もが人間らしい生き方を追求できるように、子どもと家庭の側から「よりよく生きること」を考えたい。児童家庭福祉を専攻しない院生の受講も考慮し、この分野について刺激的問題提起を含む教科書を選定した。「子どもとは何か」「子どもの権利」などの問題意識を念頭におき、トピックスや事例をまじえた講義とする。また子どもの居場所見学も行う。

本講義内容は、DP科目基礎1-3、4-1、DP科目認知2-1、2-2、DP科目社会情動1-6、1-7およびDP科目育児保育1-1、1-2、2-1、2-2、6-2、6-6、7-3、7-4、7-5、7-7に該当する。

授業の到達目標：現代社会を生きる子どもと家庭の置かれた困難な事態を理解し、乳幼児保育の場や学校・地域で包括的に子育て・子育てを支援していくための視点を獲得する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：子どもの居場所考（その1）

第2回：子どもの権利規範の形成過程（権利思想、権利論、権利宣言、権利条約）	第10回：子どもの居場所考（その2）
第3回：スウェーデンの「子どもの権利絵本」に学ぶ	第11回：子どもの居場所見学（その1：早期療育教室）
第4回：子どもの権利条約（その1：子どもの参加）	第12回：子どもの居場所見学（その2：フリースクールなど）
第5回：子どもの権利条約（その2：子どもの意見表明権）	第13回：見学レポートの発表（その1）
第6回：子どもの権利条約（その3：教育を受ける権利）	第14回：見学レポートの発表（その2）
第7回：いじめ・不登校・ひきこもり（その1）	第15回：討論（子どもと家庭への支援のあり方）
第8回：いじめ・不登校・ひきこもり（その2）	

教科書：浜田寿美男『子ども学序説－変わる子ども、変わらぬ子ども』岩波書店、2009年

参考文献：随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法：

レポート 80% 授業内のミニレポートや見学レポートにより理解度と考察の独自性を評価する。

平常点評価 20% 見学レポートのグループ発表への参加度、出席状況を評価する。

その他 全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連 URL：NPO 法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

社会病理学特論

野村 忍

授業概要：現代社会は、技術革新、情報化、グローバリゼーション、少子高齢化社会など多くの難問に直面している。こうした社会環境の中で生活する現代人は多くのストレスを経験している。ストレスの影響は、不快な情動変化とそれに伴う身体的変化、さらにはそれらを解消するための行動変化としてあらわれる。したがって、ストレス性健康障害としては、種々の心理反応、身体反応と行動上の問題に分類される。この科目では、産業ストレスの今日的課題、ストレスのアセスメント法、および種々の社会病理的問題の対策について講義する。

授業の到達目標：今日的な種々の社会病理的問題とその対策について理解する。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：気分障害
第2回：社会病理学総論	第10回：不安障害
第3回：労働安全衛生法の解説	第11回：適応障害
第4回：ストレスのアセスメント	第12回：研究発表（1）
第5回：テクノストレス	第13回：研究発表（2）
第6回：アルコール性障害	第14回：研究発表（3）
第7回：過労死	第15回：レポート課題と解説
第8回：過労自殺	

参考文献：野村忍、情報化時代のストレスマネジメント、日本評論社、2006

成績評価方法：

レポート 50% レポート及び発表の内容について評価する。

平常点評価 50% 全回出席を原則とし、欠席は減点する。

感情心理学特論

鈴木 晶夫

授業概要：感情の定義はいろいろな側面から記述できる。「精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれ、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と広義に考え、感情研究の歴史、感情の生物学的・神経心理学的アプローチ、感情の測定・アセスメント、感情の発達、個人差・文化差、感情の表出と解釈、文化と社会、臨床、感情障害、健康、感情に関連する社会的プロセスなど、その関連領域を幅広くとらえられる視点を養うことを学習目標とする。

この講義では、上記のテーマに関するこれまでの研究を概観し、感情研究の多様な考え方について学ぶ。さらに研究発表、研究論文などを材料に感情研究の様々な問題を考えたい。

本講義内容は、臨床発達心理士（臨床発達心理士認定運営機構）DP 科目「社会情動」（１－１、１－２、１－３、１－４、１－５、１－７、２－１、３－１）に該当する。

授業の到達目標：感情心理学関連について専門的知識の説明ができること、関連の研究手法の理解と適用ができること、批判的・創造的な論理思考を形成すること、感情心理学を通じて個人的成長をとげること、感情心理学に関わる価値観を形成することなどを授業の到達目標とする。

授業計画：

第１回：受講のためのオリエンテーション	第９回：感情の解説
第２回：感情研究に関する哲学的背景	第10回：感情関連学会について
第３回：感情研究に関する歴史	第11回：課題発表 基礎編
第４回：感情の定義	第12回：感情と発達、社会・文化
第５回：基本情動	第13回：課題発表 応用編
第６回：感情の次元的研究	第14回：感情とストレス・健康・感情障害
第７回：感情の測定方法	第15回：感情研究まとめ
第８回：感情の表出	

成績評価方法：

レポート 70% 課題に対する適切性、専門知識の理解度（プレゼンテーションを含む）

平常点評価 30% 授業における理解・関心度（教場レポートを含む）

言語情報科学特論

菊池 英明

授業概要：言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。この講義では、コンピュータ・情報処理技術を導入した音声言語理解・生成・インタラクションのモデル化及びシステム開発の事例を紹介する。

なお、本講義内容は、DP 科目 言語１－５に該当する。

授業の到達目標：音声言語メディアの諸相を踏まえて、音声言語理解・生成・インタラクションなどの人間の言語行動のモデル化手法を理解することを目指す。

授業計画：

第１回：導入 言語情報科学とは	第９回：音声言語生成のモデル（２）
第２回：言語情報の諸相（１）	第10回：音声言語生成のモデル（３）
第３回：言語情報の諸相（２）	第11回：音声言語インタラクションのモデル（１）
第４回：言語情報の諸相（３）	第12回：音声言語インタラクションのモデル（２）
第５回：音声言語理解のモデル（１）	第13回：音声言語インタラクションのモデル（３）
第６回：音声言語理解のモデル（２）	第14回：研究事例の紹介
第７回：音声言語理解のモデル（３）	第15回：まとめ
第８回：音声言語生成のモデル（１）	

成績評価方法：

レポート 100% モデル化手法の理解度を測る。

知識情報科学特論

松居 辰則

授業概要：この講義では、「知識情報科学」について、人工知能に関する話題を基軸にして、基本的な理論や技術を多くの事例を通して紹介します。人工知能はコンピュータに「人間のような振る舞いをさせる」ことを目的とした、理論・技術です。人間の「知能」をコンピュータに実装することを目指しますが、そのためには、人間の知的な振る舞いに関する実験や観察から始まり、そのモデル化、そして実装・・・と方法論も様々な学際的です。講義の進め方は、数学的、技術的な話に偏ることなく、「人工知能」というものが正しくイメージできるようになることを目標とします。この講義を通して、人工知能の魅力を知ると同時に、その限界も知ることにより「人間とコンピュータの共存」、そして「人間の尊さ」というテーマについて深く考えます。

授業の到達目標：

- ・「知識情報科学」、「人工知能」という分野に興味をもつ。
- ・人工知能の歴史や基本的な理論、技術、モデル化手法を理解する。
- ・自分の研究テーマにおいて学際的な視点で「知識情報科学」との関連を意識することができる。

- ・「人間とコンピュータとの共存」、「人間の尊さ」について「情報科学的な視点から」深く考えることができる。

授業計画：

第1回：講義の内容の説明、人工知能研究の目指すもの、人工知能研究の歴史	第9回：論理による柔軟な知識表現（様相論理、非単調論理、ファジィ論理）
第2回：知識の定義、知識の分類、知識の表現方法	第10回：ニューラルネットワーク（1）
第3回：問題表現（木構造、フレーム表現、意味ネットワーク）	第11回：ニューラルネットワーク（2）
第4回：探索による問題解決	第12回：遺伝的アルゴリズム
第5回：様々な推論方式	第13回：知的エージェントと Web インテリジェンス
第6回：記号論理による知識表現	第14回：人工知能の応用システム（1） エキスパートシステム
第7回：記号論理による推論方式	第15回：人工知能の応用システム（2） データマイニング、情報検索 など
第8回：述語論理による知識表現と推論方式	

教科書：特に指定しません。

参考文献：講義中に適宜紹介します。

成績評価方法：

- レポート 80% 講義期間中にレポート課題を3回程度出題し、講義内容の理解度を確認します。レポートの内容によって評価します。全て期限内に提出することが単位取得のための最低条件になります。
- 平常点評価 20% 毎回、レビューシートへの記入を求めます。期限内に記入することで出席として扱います。欠席1回につき2点の減点とします。

－博士後期課程－

【研究指導】

【地域・地球環境科学研究領域】

環境管理計画学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

天野 正博

授業概要：地球規模での環境問題のうち、地球温暖化と森林との関係、熱帯林の減少問題に焦点を当てながら、地球環境問題の状況を統計データなどから分析するとともに、問題が生じる社会構造を明らかにするために現象をモデル化する手法を習得し、これを用いてどのような対策を立てるべきかを考える。また、地球環境問題を解決するための基本概念である公平性についてアマルティア・センの著書を教材にしながら、地球環境問題の中での公平性の実現方法を学ぶ。さらに、以下の2項目について、現実社会の動きを参考にしながら問題の分析とその解決方法について学ぶ。

- 1) 様々な国際的取り決めに対する各国の利害関係と温暖化に対する姿勢を分析しながら、気候変動枠組み条約の吸収源を中心に、国際的な合意へのプロセスと各国が取るべき戦略について研究する。
- 2) グローバル経済の中で厳しさを増す南北対立の融和を図るのに必要な開発援助について、途上国を研究対象として望ましい援助方法を検討する。とくに、住民の能力向上という観点から具体的な提案を行う。

授業の到達目標：地球環境問題について、その背景から問題の分析、解決方法までの道筋を十分に理解すると共に、具体的なプロジェクト設計について精通する。また、国際社会において地球環境問題の根本原因を見据えた解決方法を提案できる人材となる。

人口学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

阿藤 誠

授業概要：各人が自分の博士論文のために選択した研究テーマに即して、文献レビュー、理論的枠組みの構築、具体的仮説の導出、仮説検証のためのデータの検討、適切なデータ分析、分析結果の検討、それを踏まえた仮説・理論的枠組の再検討、政策提言などを順次発表し、それについての改善方法を指導し、高い水準の博士論文の作成を目指す。

授業の到達目標：博士論文執筆段階で、その成果の一部を各専門分野における学会報告あるいは学術論文として発表し、最終的に高水準の博士論文の作成を目指す。

生物圏生態学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

太田 俊二

授業概要：従来の学問領域で言えば、生態学と気象学の融合的な高度な研究を遂行するために必要事項を個別に指導する。設定された研究テーマにもとづいた指導を行うが、従来の生態学のみ、気象学のみ研究に終始することなく、融合的かつ人間活動の評価を含ませるようにしたい。このように人間科学を強く意識するものの、従来からの領域である個々の生態学や気象学のなかでも十分な研究成果が得られることも大切である。また、将来の人間社会、地球社会の予測研究といった社会的要請の強い領域に寄与できるような研究に発展できるように指導を進める。加えて、学位取得後に受講者が独自に新しいテーマを設定し、それを継続的に遂行することができる能力を涵養する。

授業の到達目標：博士学位の規定年数以内での取得は当然であり、取得後すぐに研究職に就けることが到達目標である。一年次に第一著者として国際誌に論文を最低一本は通すためには、秋までには投稿が完了しなくてはならない。二年次以降は受講者独自の視点による学術論文を国際誌で受理され、学位取得までには第一著者として国際誌に三本以上の原著論文が掲載されるように指導する。

環境生態学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

森川 靖

授業概要：人間活動は生態系に影響を与え、ヒトの生存にかかわる環境問題となっている。本研究指導では、こうした人間活動と生態系の関係に理解を深め、環境問題の解決に向けた科学的根拠を養うことを目的とする。また、基礎が解れば応用がきく、を研究指導の理念としたい。

授業の到達目標：人間科学研究科は文理融合を理念とする。すなわち、院生が自らを文系あるいは理系という枠にとらわれることを排することが指導の要点である。

環境社会科学研究指導（D） A（前期）・B（後期）**鳥越 皓之**

授業概要：環境社会学・環境民俗学分野の博士論文作成のための指導を目的とする。当該分野の方法論の検討、現代社会との関わり等についても分析を深めることになる。

授業の到達目標：博士論文の作成。

水域環境学研究指導（D） A（前期）・B（後期）**井内 美郎**

授業概要：

A（前期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する調査・分析方法の学習及び実施、分析結果の考察を行う。

B（後期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する文献学習、研究成果の発表及び討論、論文作成を行う。

授業の到達目標：

A（前期）

湖沼域等の陸水環境変遷史に関する現地調査、分析結果の考察、研究成果のとりまとめが可能になる。

B（後期）

湖沼域等の陸水環境変遷史に関する文献調査によるテーマの発掘、学会等での研究成果発表および議論、研究成果の論文投稿が可能になる。

地域資源論研究指導（D） A（前期）・B（後期）**柏 雅之**

授業概要：地球環境時代に相応した持続可能な農業生産、地域再生と政策システム、農山村地域資源管理システム、フードシステム、バイオマス産業社会などに関する研究のフロンティア前進に資することのできる人材養成をめざした研究指導をおこなう。また、博士後期課程の初年度を中心に方法論としての農業農村経済学や地域政策論の先端部分に関する知見をより深めてもらえる指導もおこなう。

基礎的な学習として、農業問題に関しては、農政改革の論理をめぐる学説検討を日本とEUの場合を通してみていく。日本の農政改革に関しては、主に生源寺眞一（東京大学）、本間正義（同）、田代洋一などの著書・論文を素材に、背景となる経済理論と実態認識について考えていく。地域再生・同政策に関しては欧州のソーシャル・エコノミーから学べるものを考えていく。

授業の到達目標：国内外での学会で高い評価を受けうる個別報告や、質の高い学会誌論文に受理される研究成果をだせるような能力を涵養する。

大気環境科学研究指導（D） A（前期）・B（後期）**松本 淳**

授業概要：大気環境科学分野に関する博士課程での研究を遂行するために、基礎事項から最新の研究動向までを理解し、研究の背景・目的を明確にする。普段の実験・解析等を通じた経験の蓄積だけでなく、現状の把握、研究遂行のための考察・改善、成果のまとめと報告・発表を行ない、課せられたテーマを着実に遂行する能力を磨く。各自のテーマに合わせて、対流圏大気化学（光化学オキシダントやその関連成分の大気動態）にて重要な「室内実験」「大気観測」「モデル計算」それぞれについて、適切な研究遂行手順について学ぶ。

授業の到達目標：博士学位の規定年数以内での取得が到達目標である。そのためには、各自のテーマに関する成果のうち、基礎的な内容や初期的なデータをベースとした論文を一年次に国際誌に投稿し、二年次以降には独自の方針に基づく発展的な成果を複数掲載されるように指導する。

動物行動生態学研究指導（D） A（前期）・B（後期）**三浦 慎悟**

授業概要：野生動物の行動生態学、個体群生態学、野生動物管理から特定の研究テーマ設定を踏まえ、研究テーマの意義を最新の研究的状況の中で位置づけるとともに、論文作成のための方法（資料収集法および分析法）を議論し、その進捗状況を点検しながら、論文作成、学会発表へと導く。

授業の到達目標：研究課題の設定、方法の習得、論文の作成。

[人間行動・環境科学研究領域]**発達行動学研究指導（D） A（前期）・B（後期）****根ヶ山 光一**

授業概要：各自の研究テーマについて、研究計画（いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差違化し

ていかに originality を盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか）・実施（フィールドや実験場面をどう確保し、具体的な手続きをどうするか）・分析（どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか）・考察（データと仮説・先行研究をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか）・発表（研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか）の指導を行うとともに、博士論文の執筆を指導する。

授業の到達目標：発達行動学の研究を自ら計画・実施・発表するとともに学術論文を作成し、博士論文としてまとめる。

建築計画学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

佐野 友紀

授業概要：受講者各自が設定した建築・都市計画に関わるテーマについて、実習的な調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって現象を分析し、結論を導き出す方法を学ぶ。

授業では受講者の発表を通して、問題解決の方法を探る。また、研究指導等を通して、成果を論文形式にまとめ、発表する。

授業の到達目標：建築、都市計画に関わる問題を発見し、分析を行うことで、問題解決方法を提案する手法を学ぶことを目標とする。

建築環境学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

小島 隆矢

授業概要：住居・建築・都市などの環境と、それら環境に関する広い意味での顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識・行動・ニーズ・CS（顧客満足）に関わる諸問題をテーマとした研究指導を行う。各自、自主的に選んだテーマについて、1）社会的背景、既往研究などの調査、2）研究目的の設定、3）研究方法の検討・設定、4）調査・分析の実施、5）考察・結論の導出、というプロセスを遂行する。要所要所で進捗状況の発表・検討会を開催し、内容のブラッシュアップをはかる。成果は論文としてまとめ、発表する。

授業の到達目標：

- ・研究する意義がある「研究目的」を設定でき、「研究の背景」等からそれを無理なく納得できるよう説得力のある研究ストーリーを組み立てることができる。
- ・目的に対して合理的な「研究方法」を選択でき、適切な「分析・考察」を行える。
- ・独創性、新規性、汎用性、精緻性、実用性など、何らかの意味で魅力のある研究を遂行できることが望ましい。

環境心理・環境デザイン研究指導（D） A（前期）・B（後期）

佐藤 将之

授業概要：建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。研究成果の応用として、デザイナー向けだけでなく一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標：授業では、受講者の発表を通じた議論を行う。フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことを必須とし、心理・行動からみた環境デザインに関する論文を作成する。

〔文化・社会環境科学研究領域〕

産業職業社会学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

河西 宏祐

授業概要：労使関係論について、文献を講読するとともに実証的研究を実施し、それを通して論文の作成を行う。

授業の到達目標：研究論文を作成する。

文化生態学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

蔵持 不三也

授業概要：学会誌及び紀要などへの論文作成指導と学会・研究会発表のためのトレーニングを行う。

授業の到達目標：論文作成と学会研究発表。

アジア社会論研究指導（D） A（前期）・B（後期）

店田 廣文

授業概要：中東・北アフリカ、アジアおよび日本社会を対象として、各自の研究課題に即した実証的研究の実施とその成果による学術論文作成について指導する。

授業の到達目標：課程内での博士論文作成と「若手」研究者としての諸能力を修得すること。

移住論研究指導 (D) A (前期)・B (後期)**森本 豊富**

授業概要：原則、修士課程の演習または移民研究特論も受講し、逐時、博論の進捗状況を発表する。

授業の到達目標：

A (前期)

学会発表、学会誌投稿の準備をする。

B (後期)

- ・学会発表を一度行う。
- ・年度内に1本の学術論文または公表学術論文（日本学術会議登録団体の学術誌）に投稿する。

物質文化論研究指導 (D) A (前期)・B (後期)**谷川 章雄**

授業概要：考古学は、主として発掘調査の成果をもとに、モノと人間との関係を読み解く学問である。また、考古学は調査・研究のさまざまなレベルにおいて、歴史学・民俗学をはじめとする他の領域との接点をもっており、総合的、学際的方向性を本質的に内包している分野である。こうした視点にもとづいて、各自が論文を作成していく上での資料の特質と限界と観察・記載の方法、分析の方法、解釈の方向性などについて指導する。

授業の到達目標：修了年限以内での博士論文の完成を到達目標とする。

[健康・生命医科学研究領域]**生体機能学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)****今泉 和彦**

授業概要：骨格筋の可塑性（肥大・萎縮）とその調節機構、微量元素（亜鉛）欠乏による遺伝子発現および生体情報伝達シグナル応答とその機構、ドーピング作動薬（ β_2 -アゴニスト）・茶カテキン・アルコール・香辛料摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、主として動物実験を中心として研究する。これらの研究を推進すると共に、日々の研究、論文の検索・読み方、実験法の測定・解析の習得および研究発表・論文の書き方・纏め方などについて直接指導・助言する。

授業の到達目標：上記のような能力を涵養することによって健康と生体機能に関わる生理科学分野を発展させ、広い視野に立って深い専門性を活かせる人材の育成を目指す。

神経内分泌学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)**山内 兄人**

授業概要：修士課程と同様に、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学および神経行動学的手法により解析し、脳の性差およびその機序をも明らかにする。特にセロトニン神経系に着目している。国際誌に掲載できる研究をおこなう。

授業の到達目標：学位をとるまでに三本の論文（英文）をまとめ国際誌にのせる。

運動制御・バイオメカニクス研究指導 (D) A (前期)・B (後期)**鈴木 秀次**

授業概要：学部および大学院修士レベルにおける運動制御とバイオメカニクスをベースとして、より高度な身体運動の仕組みの研究を実施するための研究指導を行う。よって研究指導内容は、1) 筋の収縮様式とそれらの神経制御機序、2) 姿勢維持や運動時の脊髄レベルにおける反射の関与、3) 筋収縮後の短期可塑性、4) ロコモーション等における身体運動時の力の物理的特性と神経筋協応能などのテーマが中心である。これらの研究を推進し博士論文を完成させるためのレベルの高い指導・助言を行う。

授業の到達目標：英文学術誌に投稿・受理が叶うよう頑張るのみ。

統合生理学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)**永島 計**

授業概要：恒常性の維持、体温、体液をキーワードに研究を遂行し、主に生理学、神経科学の研究方法を習得する。また学会発表、論文発表を行い、生理学者として独立して研究を遂行する知識、能力、意欲を獲得する。

授業の到達目標：一般的な生理学知識を吸収、研究のアイデア、能力を身につけることを目標とする。

応用健康科学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)**竹中 晃二**

授業概要：ヒトの自発的操作に関わる健康行動全般（リラクセーション、趣味活動、運動、スポーツ、食生活、ストレスマネジメント、禁煙など）を研究材料として、それらの社会・心理学的効果を行動科学の視点に基づいて

て研究を行う。子どもから中高年、高齢者、さらに疾患患者を対象として、行動の開始・継続を促す実践面についても研究を行う。

授業の到達目標：本研究指導では、主に介入研究に焦点を絞り、理論を実践に活かす工夫を行う。

医療人類学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

辻内 琢也

授業概要：医療人類学（medical anthropology）では、身体的・心理的・社会的・文化的（bio-psycho-socio-cultural）な複合産物として構成されている健康や病い（health and illness）という現象を、人文社会科学的アプローチ（文化人類学・社会人類学）および自然科学的アプローチ（自然人類学）の両輪を用いて、広く人類の全歴史を背景に通文化・比較文化的に探求する。

世界各地域（特に東一南一東南アジア地域）に広がる災厄や苦悩（suffering）に対峙する多元的医療システム、心理臨床や福祉領域における臨床人類学（clinical anthropology）、近代生物医学システムの抱える諸課題を問う批判的医療人類学（critical anthropology）、電磁波・化学物質・ストレスなどの現代社会を取り巻く生活環境病、機能性身体症候群・線維筋痛症・電磁波過敏症・認知症・癌などの難病をめぐる病いの語り（illness narratives）、多文化包括的なケアの実践を目指す人類学的医療（anthropological medicine）、老いと死の看取りの文化人類学、物語りと対話に基づく医療（Narrative Based Medicine）、などを研究対象とする。

授業の到達目標：本講座では、学部・修士課程で文化人類学や社会人類学を専攻した学生のみならず、医学部や看護学部で医療を専攻した者、理学療法士・言語療法士・作業療法士・芸術療法士・音楽療法士などのメディカルスタッフ、鍼灸按摩師や柔道整復師など補完代替医療を実践する者、心理臨床を行う臨床心理士で質的研究を志す者、社会福祉士や医療ソーシャルワーカーで多文化間臨床に関心のある者に開かれた研究指導を行う。

分子神経科学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

榊原 伸一

授業概要：最近発表された本人の研究領域の先端的な論文を紹介、輪読し、プレゼンテーションおよび質疑応答を行う。

授業の到達目標：神経発生に関する最新の知見を得る。

【健康福祉科学研究領域】

予防医学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

町田 和彦

授業概要：21世紀の日本は人類がかつて経験しなかった程の急速な高齢社会を迎えようとしている。戦後順調に発展を遂げてきた日本経済はバブル経済の破綻以降立ち直りをみせず、異常な累積債務を抱え、政治の混乱もあり、先の見えない社会となり、人々の気持ちも荒んだものになるつつある。一方世界的な視野から見ても、未成熟な民主主義、環境破壊の容認、格差社会の容認のもと経済発展のみを優先する巨大人口を擁する発展諸国の台頭は民主主義社会の根幹を揺るがせ、政治的混乱、深刻な環境問題、テロの横行、食糧や資源の分配、経済発展から取り残された発展途上国の問題などから来る多くの問題を生み、今まで世界政治に無関心で、危機管理意識の薄い日本人に深刻な影響を与えるものと思われる。

このような厳しい内外の状況下のもとでは予防医学も根本的な改革が必要とされる。今迄の予防医学は個々の疾病を対策を中心とした医学部教育の一環として行われてきたが、これからは生命延長の時代ではなく、単に疾病対策にとどまらず、疾病の起こる原因を人間をとりまく自然科学的、社会科学的、人文科学的要因から解明し、胎内からの健康教育の充実、各時代における心身に与える影響の除去を柱とした政策を志向し、各自が健康の維持・増進を理解するだけでなくそれに向けて実行し、生きがいのある一生を送れるような社会を作ることが必要である。そのための教育を院生と考えていきたいと思う。

授業の到達目標：博士課程の学生には授業概要にある様な予防医学的思考を生かした研究を実際のフィールドの中で実践し、世界的にも通用するような論文を作成してほしいと思う。

幼少児福祉教育論研究指導（D） A（前期）・B（後期）

前橋 明

授業概要：

A（前期）

近年の幼少児の福祉教育・健康教育（健康福祉）研究分野における研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、研究計画の実践と論文の作成、成果の発表ができるよう、博士論文作成のための研究指導を行う。

B（後期）

幼児の福祉教育・健康教育（健康福祉）分野の博士論文作成のための指導を目的とする。本指導では、各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実施、博士論文作成まで指導する。

授業の到達目標：

A（前期）

子どもの福祉教育や健康教育（健康福祉）分野における研究動向を学ぶとともに、各人のテーマに関する先行研究の検討を行う。そして、各人の研究テーマに関わるデータ収集と、論文の全体構想を目指す。各自の研究計画の実施と論文の作成、成果の発表ができるようになる。

B（後期）

博士論文作成のための研究計画を立案・実施して、論文の作成を行う。博士論文執筆段階で、その成果の一部を専門分野における学会報告や学術論文として発表する。関連学会にて、口頭発表を定期的に行い、国際会議での発表をする。（研究成果は、国内外のジャーナルに、年に1本以上投稿し、掲載されるようにする。）

緩和医療学・臨床死生学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

小野 充一

授業概要：個人の“死”を、“生命の終わり”と捉える視点から、新しい世代への“生命の伝承”という視点に変換していくことで獲得する様々な“受容の概念”について、伝承されるものを受け止める側と伝える側の両極から検証し、支える技術、支えられる方法、関係性調整の方法などを具体的に研究する作業を指導する。

授業の到達目標：

- 1）緩和医療学あるいは臨床死生学における質的研究手法の習得
- 2）死生の臨床現場におけるフィールド調査を実施し研究結果をまとめて学会発表を行う
- 3）研究結果をまとめて投稿論文としてまとめて発表する

健康福祉管理論研究指導（D） A（前期）・B（後期）

扇原 淳

授業概要：健康・医療・福祉水準の向上に寄与する「情報」の創出とその利活用という観点から、広く社会医学領域に属する種々の課題について研究する。各自研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿、学位論文作成までを指導する。従来より社会医学は、人間科学的発想を必然的に求める領域であり、現地現物を重視し、社会的要請に応える、社会に研究成果を還元することを強く意識した指導を行う。

授業の到達目標：

- 1）研究を進める上で必要となる「情報」を横断的、包括的に扱うための原理や方法論を説明できる。
- 2）国際・国内学会で自身の研究について発表し、適切な討論を行うことができる。
- 3）課程内に学位論文を作成できる。

〔臨床心理学研究領域〕

心身医学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

野村 忍

授業概要：心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。心身症、神経症やうつ病の診断・治療に関わる研究のみならず、健常者における心身相関の研究やヘルスプロモーションに関わる研究も行っている。この科目では、博士論文作成の指導（グループ指導ならびに個人指導）を行う。各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。また、学会発表や論文投稿についても指導する。

授業の到達目標：研究計画の立案・実施及び博士論文の作成。

認知行動カウンセリング学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

根建 金男

授業概要：近年、認知行動カウンセリングの発展はめざましい。特に、不安障害、強迫性障害、統合失調症などの新しいモデルが提示され、それらをめぐる実証研究も盛んである。一方、構成主義的カウンセリングの動向も活発になってきた。構成主義的カウンセリングでは、人の一生涯の成長を視野にいれたうえで、人が世界をどう構成（認識）しているかをその人の側から理解し、アプローチしようとする。このことは、エビデンス重視の認知行動カウンセリングの弱点を補い発展させるうえで重要である。カウンセリングは精神疾患を有する人に限らず健常者をも広く対象とするものであることを認識したうえで、認知行動カウンセリング学を更に発展させる

ような研究を進めていくことが求められる。そのような研究について、この研究指導では、研究計画の立案、研究の実施、データの解析、論文の作成など博士論文の執筆に関する全般にわたって、指導（個人単位、グループ単位）を行う。また必要に応じて、学会発表や投稿論文について指導する。

授業の到達目標：認知行動カウンセリングや構成主義的カウンセリングの理念を認識したうえで、博士論文を作成する、あるいはそのための準備をする。

行動臨床心理学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

嶋田 洋徳

授業概要：臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、（認知）行動論的アプローチを用いて研究と実践を行なう。具体的には、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状や問題行動の形成と維持、治療に及ぼす個人差変数の検討などを行なう。そして、博士論文の作成を念頭に置き、研究計画の立案、データの収集と解析、論文の執筆、研究成果の公表に関する指導を行なう。

授業の到達目標：博士論文の作成にあたり、必要な理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

産業カウンセリング学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

鈴木 伸一

授業概要：うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱えやすい生活上の問題や罹患しやすい身体疾患（生活習慣病や慢性疾患など）の予防およびケアにも焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した研究を行う。

授業の到達目標：研究室で行っている「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究班」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究班」、および「健康づくり・ストレスマネジメントに関する研究班」の各プロジェクトに主導的に関わるとともに、関係諸機関と連携した先進的研究に取り組んでいく。

臨床心理アセスメント学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

熊野 宏昭

授業概要：人間はどうして変わることができるのか、その過程をどうすれば測定できるか、「治療の科学科」はいかにして実現できるか、に焦点を当てて行く。そのためには、心理的变化の基礎メカニズムを追及し、アセスメントの方法論を洗練化し、ケースフォーミュレーションの最適化と治療過程のデータベース化を進めることが必要になる。そこで、臨床行動分析（アクセプタンス&コミットメント・セラピー：ACT）やマインドフルネスに関わる基礎研究及び介入研究、注意訓練やマインドフルネスが前頭葉機能と心理行動的な介入効果に及ぼす影響の研究、そして「治療・援助プロセスの科学化」を目指す臨床心理アセスメントに関わる研究などの指導を行う。

授業の到達目標：臨床行動分析と認知神経科学の基礎と応用について理解し、自らの研究の方法論として使いこなせるようになることを目標とする。

〔感性認知情報システム研究領域〕

感性認知科学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

齋藤 美穂

授業概要：情報化社会におけるバーチャルな空間は各国間の隔たりをますます小さくしている。このような環境において他の文化における感性の違いを知ることはグローバルなマーケティング戦略を展開する為に必要不可欠と考えられる。

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究方法も多岐にわたる。そこでこの研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、情報化社会においてこれからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ（具体的には「感性認知科学演習（１）」および「感性認知科学演習（２）」に記載）に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導など、論文に対する直接的な指導を行っていく。

授業の到達目標：

A（前期）

具体的研究テーマは、1）色彩やデザインに関する嗜好と認知、2）色彩やデザインが及ぼす心理的効果や生理的効果、3）香りや色、音と色などの感覚協調、4）表情や化粧などの対人認知、5）これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主としている。これらに沿って吟味された各人の具体的研究テーマについて、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね修士論文に対する直接的な指導を行っていく。学位論文の提出が目標となるが、その前段階として、学会発表や学会参加（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会、国際色彩学会など）の経験および学位論文の基盤となる投稿論文の作成を期待する。このような課程を通して各人が感性認知科学に対する理解を深めることを到達目標とする。

B（後期）

具体的研究テーマは、1）色彩やデザインに関する嗜好と認知、2）色彩やデザインが及ぼす心理的効果や生理的効果、3）香りや色、音と色などの感覚協調、4）表情や化粧などの対人認知、5）これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主としている。これらに沿って吟味された各人の具体的研究テーマについて、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね修士論文に対する直接的な指導を行っていく。学位論文の提出が目標となるが、その前段階として、学会発表や学会参加（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会、国際色彩学会など）ならびに学位論文の基盤となる投稿論文の作成などが必須となる。

安全人間工学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

石田 敏郎

授業概要：安全人間工学は、種々のシステムや環境における精神的、身体的作業を行う際の人間の役割、能力および限界を研究し、安全に作業を遂行するための方策を探る研究分野である。最近、新しい技術の発展やシステムの巨大化に伴い、人間のエラーによる事故や不具合が多く発生している。認知科学的なアプローチにより、事故・不具合の原因を探り、人間行動に適合した対策を策定し、提案することを中心に指導する。そのため、認知心理学的なヒューマンエラーの考え方と人間工学的な事故分析の方法についての研究指導を行い、そこから導き出されるヒューマンエラー防止対策について検討する。また、実験的手法により人間の安全行動を評価する方法論を同時に指導し、科学論文を作成する際の技法を習得させる。現在の主な研究テーマは、事故分析方法の研究開発、自動車運転時の視覚情報処理および事故要因の検討、リスク行動の分析および各種ヒューマン・インターフェイスの人間工学的評価である。

授業の到達目標：学生の研究テーマに沿って、博士論文を作成するための研究計画を作成する。

福祉工学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

藤本 浩志

授業概要：修士学位の取得までの課程において身に付けた研究の方法論に加えて、さらに一段成長した研究者として、自立して研究活動に取り組めるための様々な知見や問題解決能力をトレーニングする。

授業の到達目標：問題設定、アプローチの取捨選択、結果のまとめの内のどれを取っても、修士課程と比較して格段の成長が求められる。自立して基本的には独力で、これらが遂行できるようなレベルにまで成長することが目標となる。

情報処理心理学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

中島 義明

授業概要：

A（前期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（前段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、ブライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、博士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

B（後期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（後段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、ブライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、博士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際に

は、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけではなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

授業の到達目標：

A（前期）

本研究指導の過程を経て、博士学位論文の作成（前段階）へと導く。

B（後期）

本研究指導の過程を経て、博士学位論文の作成（後段階）へと導く。

心理行動学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

鈴木 晶夫

授業概要：人間を研究する際の視点として、認知的、行動的、生理的側面が考えられ、それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。特に、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用を中心に、健康、感情、言語的・非言語的情報の機能、人間関係、生活習慣、東洋的思想からの健康観、身体観、positive psychologyなどを考慮した研究をテーマとしたい。これらの背景にある心理学教育についても考えたい。

授業の到達目標：専門的知識の説明ができること、研究方法の理解と適用ができること、批判的・創造的な論理思考を形成すること、心理行動学の実応用と理解ができること、心理行動学に関わる価値観を形成すること、学会誌への投稿、学位申請論文完成などを到達目標とする。

言語情報科学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

菊池 英明

授業概要：情報化社会の進展に伴い音声言語メディアの役割は今後一層重要になる。言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。具体的には、言語学、心理学、認知科学、脳科学といった人間科学の基礎学問を前提としながら、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築していく。主な研究課題は、会話メカニズムの解明、人と機械の対話インタフェース、音声による感情・態度の理解・表出モデル、知的検索エンジンなど。

授業の到達目標：各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識体系を整理しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。成果としては言語情報科学研究の一分野の発展に寄与する学術的提案を目標とする。

知識情報科学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

松居 辰則

授業概要：「人間の深い知識への科学的アプローチ」をテーマに対して多面的（理論的・技術的・実践的）に研究を行います。具体的には、1）人間の「感性」や「暗黙知」への情報科学的アプローチ（ヒューマンインタフェース、音楽情報処理、スキルサイエンス など）、2）知識獲得プロセスの測定・評価のための量的&質的手法の開発、3）学習情報からのデータマイニングと具体的な学習支援システムへの実装、4）人間のもつ暗黙知（ノウハウ）の抽出・管理・共有の支援手法（スポーツ、医療、伝統芸能など）、5）感性を刺激するようなe-learningシステムや学習教材の開発、などが研究テーマとなります。

これからの時代は情報機器、特にコンピュータやインターネット技術と人間が高度に共生し、人間中心の豊かで安心な生活環境を構築して行かねばなりません。そのためには、コンピュータに高度な知性（Intelligence）をもたせるための人工知能研究、知識処理研究への期待は今まで以上に大きくなってきます。

そこで本研究室では、我々人間がもつ「感性」や、実生活空間の中での「暗黙知」について様々な観点から研究をしています。「感性」や「暗黙知」についての研究は柔軟な発想力と多様な研究方法論が必要です。本研究室でも、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」にアプローチしています。具体的な研究内容は下の項目を参考にしてください。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な対象領域と研究方法論を決めることになります。その後は、ユニークな研究を期待しています。

授業の到達目標：各自の研究を推進し、博士学位の取得を目指します。

博士後期課程での研究になりますので、関連学会の研究会や全国大会での口頭発表を定期的に行います。具体的には、人工知能学会、感性工学会、電子情報通信学会、情報処理学会、教育システム情報学会が中心的な活動の場となります。さらに、国際会議での発表も推奨します。研究成果は国内外のジャーナルに1年に最低でも1本が掲載されるように指導します。

また、大学院博士後期課程の学生として後輩学生の研究指導補助、若手の研究者として様々な社会活動（学会活動補助、企業との連携事業の推進、実験器材の管理等）も積極的に行います。

研究力のみならず教育力、組織のマネジメント力をバランスよく身に付けた研究者として成長するように指導します。

感覚情報処理学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

百瀬 桂子

授業概要：さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、主に生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの感覚機能およびその神経情報処理に着目し、それらの機構を客観的にとらえるための技術として、神経モデルのコンピュータシミュレーションや実際の脳活動計測データを利用する。研究テーマとしては、神経モデル解析による脳内情報処理機構の解明、感覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法などが挙げられる。このような研究について、研究計画の立案と実践、論文作成を指導する。

授業の到達目標：個別に設定した研究テーマについて、研究計画を適切に立案して実践し、論文作成を行えるようになる。

研究を進めるうえで必要な知識や技術を見極め、それらを独自に獲得できるようになる。

関連分野の学会などで、研究発表と質疑応答ができるようになる。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

情報コミュニケーション科学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

金子 孝夫

授業概要：音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学の研究手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための技術を調査研究の対象とする。

授業の到達目標：本研究指導によって、博士論文を執筆できるようになる。

ネットワーク情報システム学研究指導（D） A（前期）・B（後期）

金 群

授業概要：技術の進展に対応できる柔軟性や突発的な障害に対する高信頼性など、より広い視野からネットワーク情報システムを見通した基礎的研究、ならびに、安全・安心なサステナブル情報環境・サービスを提供するためのネットワーク情報システムの一層の高度化をめざした理論と応用の両面にわたる研究を行う。ネットワーク情報システムはとくに人間の知的活動とのつながりが深いことから、情報・ネットワーク・情報システムに関する科学を学際的観点からとらえ、人間とネットワーク情報システムとの関わり合いを重視しながら、総合的かつ体系的な構築方法論を探究する。

授業の到達目標：ネットワーク情報システム学関連専門分野における深い学識と思考力をもち、新しい学問の芽を育てることができるような、創造性の豊かな研究者を育成する。

インストラクショナルデザイン論研究指導（D） A（前期）・B（後期）

向後 千春

授業概要：インストラクショナルデザインにおける各自の研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿までを指導します。これらを積み上げて、最終的には、博士論文の作成を指導します。

授業の到達目標：全国規模の学会の論文誌に投稿できるレベルの研究をまとめること。

教育開発論研究指導（D） A（前期）・B（後期）

野嶋 栄一郎

授業概要：教員、学生双方による各自の最新の研究成果の報告とそれに関わる質疑応答。並びに学位論文完成

に向けてのモニタリング。主な研究課題は、1) 教授＝学習過程における測定・評価の研究、2) 新しい学校モデルとその評価研究、3) インターネット利用による日米の異文化間交流カリキュラムの実践と評価、4) 映像情報の処理過程と認知研究、5) 授業のデジタルアーカイブの開発とそれを利用した授業モデルの開発・評価。

Keywords：教育測定、教育評価、教授＝学習過程、新しい学校モデル、インターカルチュラルコミュニケーション、認知過程、カリキュラム、アクションリサーチ、授業アーカイブ、遠隔教育

授業の到達目標：学位論文（博士課程）の完成。

情報メディア教育論研究指導（D） A（前期）・B（後期）

森田 裕介

授業概要：教育工学を専門とする研究者に必要な能力、技能、資質を育成する。まず、教育現場における問題の所在を明らかにするとともに、解決するための方法を提案できるよう指導を行う。次に、データ分析の技能について指導を行う。同時に、コンピュータやネットワーク等の情報機器に関する基礎的な技能についても指導を行う。また、研究論文として成果をまとめ、学会論文誌や国際学会等における成果公表を支援する。

授業の到達目標：本講義の到達目標は、（1）問題の所在を明らかにし、解決方法を提案することができる、（2）質的・量的なデータの分析をすることができる、（3）研究成果を論文としてまとめ、学会論文誌や国際学会等において成果公表することができる、の3点である。

学習環境デザイン研究指導（D） A（前期）・B（後期）

尾澤 重知

授業概要：

A（前期）

学習環境デザインとその近接領域の研究について、古典的研究から最先端の研究まで文献レビューを進め、自身の研究のポジショニングを図る。実践における学習を支援するための各種教授法、テクノロジーの応用方法や、評価・分析方法について洗練させることで、研究の信頼性や妥当性、実践的意義を高める。また、成果を適切に表現するためのプレゼンテーションや、論文作成方法についても指導を行う。具体的な実践及び調査研究を進めながら、国内外の学会や論文誌に発表・公表することを目指す。

B（後期）

引き続き、学習環境デザインとその近接領域の研究について、古典的研究から最先端の研究まで文献レビューを進め、自身の研究のポジショニングを図る。実践における学習を支援するための各種教授法、テクノロジーの応用方法や、評価・分析方法について洗練させることで、研究の信頼性や妥当性、実践的意義を高める。また、成果を適切に表現するためのプレゼンテーションや、論文作成方法についても指導を行う。具体的な実践及び調査研究を進めながら、国内外の学会や論文誌に発表・公表することを目指す。

授業の到達目標：

- （1）国内外での学会発表や論文投稿などを通して、研究者として必要な調査分析力、問題発見・解決能力、表現力を高める。
- （2）学内外でのプロジェクトへの参加、学部生や院生とのディスカッションを通して、実践者・教育者として必要なメンタリング、ティーチングのスキルやマネジメント力を高める。

XVII 全学共通設置科目の概要

次の科目は、全学共通設置科目として全大学院学生を対象に設置されている。

聴講を希望する場合は、所沢総合事務センターで交付する聴講願を使用し、所定の方法によって申請をすること。なお、聴講するには指導教員の承認が必要となり、事前に申請書に指導教員の押印が必要となる。

修得した単位は、他箇所聴講科目と合わせて10単位を限度に修了に必要な単位に算入することができる。

(1) 講義科目（オープン教育センター設置科目）

科目名	氏名	学期	単位数	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 01(文章作成力養成)	太田 裕子	春学期	2	金 3時限
学術的文章の作成とその指導 02(指導力養成)	佐渡島 紗織	春学期	2	金 4時限
学術的文章の作成とその指導 03(留学生向け)	加納 なおみ 佐渡島 紗織	春学期	2	金 2時限
学術的文章の作成とその指導 04(文章作成力養成)	吉野 亜矢子	秋学期	2	木 2時限
学術的文章の作成とその指導 05(指導力養成)	太田 裕子	秋学期	2	金 3時限
学術的文章の作成とその指導 06(留学生向け)	加納 なおみ 佐渡島 紗織	秋学期	2	金 2時限
研究倫理概論	土田 友章 浦川 道太郎 嶋田 洋徳 高林 龍 深澤 良彰 横野 恵	秋学期	2	フルオンデマンド
質的研究方法入門 01	太田 裕子	春学期	2	月 3時限
質的研究方法入門 02	太田 裕子	秋学期	2	月 3時限
地域研究としての台湾	若林 正文 浅古 弘 小島 宏 春山 明哲 松岡 格	春学期	2	火 2時限
アジア太平洋における人間の安全保障(大学院用)	天児 慧 阿古 智子 浅野 茂隆 天野 正博 山田 満	春学期	2	金 3時限

(2) 大学院テーマカレッジ演習科目（オープン教育センター設置科目）

○アジア学のための名著を読む

科目名	氏名	学期	単位数	曜日時限
日本列島の日常史(後編)	高木 徳郎	秋学期	2	月 4時限
信仰と思想(前編)	森 由利亜	春学期	2	金 3時限
信仰と思想(後編)	永富 青地	秋学期	2	木 3時限
民族と人類(前編)	城倉 正祥	春学期	2	月 4時限
民族と人類(後編)	工藤 元男	秋学期	2	月 3時限

○EU・欧州統合研究(大学院)

科目名	氏名	学期	単位数	曜日時限
EU機構と政策過程研究	福田 耕治	春学期	2	火 1時限
EU国際公共政策の研究	福田 耕治	春学期	2	火 2時限
The Politics and International Relations of the European Union	ペーコン ボール・マルティン	秋学期	2	金 5時限
The Political System of the EU	舒 旻	秋学期	2	水 2時限
欧州統合理論の研究	中村 英俊	秋学期	2	月 3時限

○演劇と映像

科目名	氏名	学期	単位数	曜日時限
現代演劇特論(入門)	秋葉 裕一	春学期	2	木 3時限
現代演劇特論(発展)	秋葉 裕一	秋学期	2	木 3時限
日本の伝統演劇論(入門)	三宅 晶子	春学期	2	月 5時限
日本の伝統演劇論(発展)	三宅 晶子	秋学期	2	月 5時限
現代演劇と多文化主義(入門)	東 晴美	春学期	2	火 3時限
現代演劇と多文化主義(発展)	東 晴美	秋学期	2	火 3時限
日本映画と演劇(発展)	藤井 仁子	秋学期	2	月 3時限
日本映画と演劇(入門)	藤井 仁子	春学期	2	月 3時限
演劇とその周辺(入門)	八木 斉子	春学期	2	水 1時限
演劇とその周辺(発展)	八木 斉子	秋学期	2	水 1時限

各科目の内容等の詳細についてはWebシラバス (<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) とオープン教育センターのホームページ (http://open-waseda.jp/g_school/syllabus/) を確認してください。曜日・時限等も変更となることもありますので、併せて確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 01 (文章作成力養成)	太田 裕子	春学期	2	金 3時限

■ 授業概要

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して大学院生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。さらに、本授業で身に付けた態度と技能を、学部生のライティング指導に活かすことをお願いしています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業の到達目標

■ 自分の修士論文・博士論文を書くために学ぶクラス

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業(「文章作成力養成」クラス)は、自分の修士論文・博士論文を書くために学びたい人のためのクラスです。

■ 登録時の注意

毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、web登録時の「志望理由」欄に書かれた内容をもとに、履修者の決定を行います。

(1) 「文章作成力養成」クラス履修を希望する人

修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章を web 登録時の「志望理由」欄に入力してください。単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。

(2) 学部生への文章指導者を目指す人

学部生指導補助を希望する方は、「指導力養成」クラスを履修してください。

ただし、人数制限により「指導力養成」クラスでは選外になった場合でも「文章作成力養成」クラスで履修したい人は、《その双方に登録》しておいてください。また、指導者を目指す、ゼミと重なったなどの理由により本授業を履修できない人は、「文章作成力養成」クラスを履修してください。本授業で、欠席が2回以下で、文章力と指導力において指導に携わるレベルに到達したと授業者が判断した人は、次学期より学部生のライティング指導に携わることができます。

毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、登録時に提出してもらう文章による文章力判定と、勤務できる年数によって、履修者の決定を行います。

文章指導者を目指す場合は、「志望理由」に次の3点を記入してください。

1. 修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章。

単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。

2. 指導に携わることを希望する動機を300字程度で。

研究科や教授からの推薦を受けている場合には、必ずその旨を明記してください。

3. 指導についての場合、何学期間勤務できるか。

ここで申告した期間を実際に勤務していただきます。正直に記入してください。

(3) 留学生

「留学生向け」クラスに登録してください。

■ 成績評価方法

提出された文章の出来栄 96% (8点×12課題=96点)

他者への記述コメント 2% (1点×2回=2点)

オンディマンド授業の視聴 2% (1点×2回=2点)

* 授業に参加しなかった週は、課題文章を提出することができません。

* 2回以上欠席すると、指導員として勤務を希望する資格が失われますのでご注意ください。

遅刻は厳禁です。欠席する際には、できれば事前に断ってください。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス、外来語や専門用語を扱う

第2回：ことばと思考、「一文一義」で書く

第3回：接続表現で文と文との関係を自覚する

第4回：語句を明確に使う

第5回：主張を記す

オンディマンド授業1 論文の構成

第6回：「マップ」を作って書く、問いを立てる

第7回：全体を構成する

第8回：論点を整理する

第9回：抽象度の調節をする

オンディマンド授業2 論点を整理する

- 第10回：「パラグラフ」を作る
- 第11回：参考文献を示す
- 第12回：「ブロック引用」をする
- 第13回：要約引用をする
- 第14回：図や表を作る、読者を案内する
- 第15回：題名を付ける

毎回、800字から1000字の文章を書く課題が課せられます。

課題は、翌月曜日23：59までにコースナビで提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）『これから研究を書くひとのためのガイドブックーライティングの挑戦15週間』ひつじ書房（2,000円＋税）

宇佐美寛編著（1989）『作文の論理―[分かる文章]の仕組み』東信堂（1,900円＋税）

■ 備考・関連 URL

第1回の講義は4月6日（金）です。この日から講義を始めますので、必ず出席してください。

関連 URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 02（指導力養成）	佐渡島 紗織	春学期	2	金 4 時限

■ 副題：アカデミック・ライティング指導者を目指して

■ 授業概要

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学（院）では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して大学院生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。さらに、本授業で身に付けた態度と技能を、学部生のライティング指導に活かすことをお願いしています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。本授業の成績優秀者は、学内身分「教育補助」で、＜「学術的文章の作成」授業の指導者＞及び＜ライティング・センターのチューター＞に応募する資格を得ます。とりわけ、大学教員になることを目指している博士課程の院生に本授業を勧めます。大学教員は、専門分野に関わらず、自身が論文を書き、また卒業論文・修士論文・博士論文の指導にあたるからです。人文

系、社会科学系、理工学系、いずれの分野の院生も歓迎します。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

※第一回の講義は4月6日(金)に開始します。毎年、履修希望者がたいへん多いので、第一回の講義に欠席した人は、履修する権利を失います。注意してください。

■ 授業の到達目標

■ 指導者を目指すクラス

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「指導力養成」クラス）では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。（学部生指導補助の詳細については、ウェブサイト「早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム」をご覧ください。）履修後に学部生向け授業の指導補助に携わる気持ちのない方は、履修を遠慮してください。

■ 指導補助に携わるには

本授業で、欠席が2回以下で、文章力と指導力において指導に携わるレベルに到達したと授業者が判断した人は、次学期より学部生のライティング指導に携わることができます。毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、登録時に提出してもらう文章による文章力判定と、勤務できる年数によって、履修者の決定を行います。提出する文書は、本シラバス下段「備考」に沿って作成してください。

■ 「文章力養成」クラスとの併願

人数制限により「指導者養成」クラスでは選外になった場合でも「文章力養成」クラスで履修したい人は、《その双方に登録》しておいてください。「指導者養成」クラスで選外になった場合、予め「文章力養成」クラスへの登録がなければ、どちらのクラスも履修できなくなります。

また、指導者を目指すか、ゼミと重なったなどの理由により本授業を履修できない人は、「文章力養成」クラスから指導員の資格を得ることもできます。その場合は、「文章力養成」クラスに登録し、「志望理由」にその旨明記してください。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

試験は行いません。

レポート割合 85%

授業中に学習した技能を使って短い文章を作成する課題が毎週出されます。

平常点評価割合 15%

出席を重視します。討論や他の学生の文章への助言など、クラスへの貢献度を評価します。

その他割合 0 %

授業修了後に、指導員やチューターとして応募資格を得たかどうかを判定します。

■ 授業計画

- 第1回：外来語と専門用語を扱う
- 第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く
- 第3回：接続表現で文と文をつなげる
- 第4回：語句を明確に使う
- 第5回：「マップ」を作って書く
- 第6回：主張と主張の位置
- 第7回：論点を整理する
- 第8回：抽象度の調節をする
- 第9回：「パラグラフ」を作る
- 第10回：参考文献を示す
- 第11回：「ブロック引用」をする
- 第12回：要約引用をする
- 第13回：図や表を作る
- 第14回：「私語り」から脱出する
- 第15回：題名をつける

毎回、800字から1000字の文章を書く課題が課せられます。

課題は、授業日から4日目までにコースナビで提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』（ひつじ書房、2008）2,000円＋税

宇佐美寛編著『作文の論理—「わかる文章」の仕組み』（東信堂、1998）1,900円＋税

■ 参考文献

プリント配布。

■ 備考・関連 URL

ウェブ登録時に、「志望理由」の欄に、以下3点を記入すること。

1. 修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章
単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。
2. 指導に携わることを希望する動機を300字程度で。
研究科や教授からの推薦を受けている場合には、必ずその旨を明記してください。
3. 指導についた場合、何学期間勤務できるか。

ここで申告した期間を実際に勤務していただきます。正直に記入してください。

第1回の講義は4月6日(金)です。この日から講義を始めますので、必ず出席してください。

関連 URL:

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/ondemand/tutortraining.html>

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 03 (留学生向け)	加納なおみ 佐渡島紗織	春学期	2	金 2 時限

■ 授業概要

※2012年 3 月 1 日修正

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけることを目的とした、留学生対象のクラスです。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、各課題の完成及び、授業への積極的な参加が不可欠です。また、毎週の積み重ねが、学期最後のまとめの課題(→各自の論文の序章を書く)の完成にもつながります。

*ウェブ登録の際、「志望理由」の欄に、「大学院で研究したいこと」を500字程度で必ず書いてください。「志望理由」の記入は必須です。

クラス定員は15名です。希望者数が定員を超えた場合は、「志望理由」ならびに第一回授業への参加態度を審査して履修者の決定を行います。登録希望者は4月6日、第一回目の授業に必ず出席してください。第一回授業の欠席者は自動的に選外となります。(希望者数が定員を超えた場合は、第一回目の授業に出席しても、選外となる可能性があります。ご了承ください。)

■ 授業の到達目標

※2012年 3 月 1 日修正

■ 留学生対象クラス

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業は、自分の修士論文・博士論文の準備を進めるために、書く力を伸ばしたい、という意欲をもった留学生のためのクラスです。クラスではピア活動を通じ、読み手と書き手、両方の視点を確立していきます。論文作成の基本となる、以下の点について重点的に学びます。

修士論文など、学術論文の構成と、その書き方のプロセス

学術論文の書式

自身の思考が整理される書き方

読み手に意図が伝わったりやすい書き方

学術的文章の分析、批判のしかた

＊ウェブ登録の際、「志望理由」の欄に、「大学院で研究したいこと」を500字程度で必ず書いてください。「志望理由」の記入は必須です。

クラス定員は15名です。希望者数が定員を超えた場合は、「志望理由」ならびに第一回授業への参加態度を審査して履修者の決定を行います。登録希望者は第一回目の授業(4月6日)に必ず出席してください。第一回授業の欠席者は自動的に選外となります。(希望者数が定員を超えた場合は、第一回目の授業に出席しても、選外となる可能性があります。ご了承ください。

■ 成績評価方法

試験割合 0 %

実施しない

レポート割合 55 %

授業中に学習した技能を使って短い文章を作成する課題が毎週出されます。

平常点評価割合 30 %

出席を重視します。討論や他の学生への助言など、クラスへの貢献度を評価します。

その他割合 15 %

最終レポートとその発表

- ・最終レポートでは、授業で学習した技能を生かしながら、課題に適切にこたえているか、評価します。
- ・各自の発表に加え、討論や他の学生への助言など、クラスへの貢献度も評価の対象となります。

■ 授業計画

オリエンテーション (本講義の目的と概要) / 本講義の目的と概要について説明します。

第1回：外来語と専門用語を扱う

第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く

第3回：接続表現で文と文をつなげる

第4回：語句を明確に使う

第5回：「マップ」を作って書く

第6回：主張と主張の位置

第7回：論点を整理する

第8回：抽象度の調節をする

第9回：「パラグラフ」を作る

第10回：参考文献を示す

第11回：「ブロック引用」をする

第12回：要約引用をする

第13回：(1)「私語り」から脱出する (2)最終レポート(各自の論文の序章) 検討会その1

第14回：(1)題名をつける (2)最終レポート(各自の論文の序章) 検討会その2

第15回：まとめ

(＊上記は、一部順番や内容が留学生向けに変わる場合もあります。)

毎回、400字から800字程度の文章を書く課題が課せられます。

毎週の課題は、授業日から3日目までに提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

最終レポートは各自の論文の序章をA4 2ページ程度にまとめ、全員で検討し合います。

■ 教科書

※2012年3月1日修正

教科書：

佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブッカーライティングの挑戦15週間』（ひつじ書房、2008）2,000円＋税

準教科書：

宇佐美寛編著『作文の論理―「わかる文章」の仕組み』（東信堂、1998）1,900円＋税

■ 参考文献

プリント配布。

■ 備考・関連 URL

※2012年3月1日修正

ウェブ登録の際、「志望理由」の欄に、「大学院で研究したいこと」を500字程度で必ず書いてください。「志望理由」の記入は必須です。

クラス定員は15名です。希望者数が定員を超えた場合は、「志望理由」ならびに第一回授業への参加態度を審査して履修者の決定を行います。登録希望者は第一回目の授業(4月6日)に必ず出席してください。第一回授業の欠席者は自動的に選外となります。なお、希望者数が定員を超えた場合は、第一回目の授業に出席しても、選外となる可能性があります。ご了承ください。

関連 URL:

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 04 (文章作成力養成)	吉野亜矢子	秋学期	2	木 2 時限

■ 授業概要

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して大学院生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。さらに、本授業で身に付けた態度と技能を、学部生のライティング指導に活かすことをお願いしています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業の到達目標

■ 自分の修士論文・博士論文を書くために学ぶクラス

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「文章作成力養成」クラス）は、自分の修士論文・博士論文を書くために学びたい人のためのクラスです。

■ 登録時の注意

毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、web 登録時の「志望理由」欄に書かれた内容をもとに、履修者の決定を行います。

（１）「文章作成力養成」クラス履修を希望する人

修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章を web 登録時の「志望理由」欄に入力してください。単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。

（２）学部生への文章指導者を目指す人

学部生指導補助を希望する方は、「指導力養成」クラスを履修してください。

ただし、人数制限により「指導力養成」クラスでは選外になった場合でも「文章作成力養成」クラスで履修したい人は、《その双方に登録》しておいてください。また、指導者を目指す、ゼミと重なったなどの理由により本授業を履修できない人は、「文章作成力養成」クラスを履修してください。本授業で、欠席が2回以下で、文章力と指導力において指導に携わるレベルに到達したと授業者が判断した人は、次学期より学部生のライティング指導に携わることができます。

毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、登録時に提出してもらう文章による文章力判定と、勤務できる年数によって、履修者の決定を行います。

文章指導者を目指す場合は、「志望理由」に次の3点を記入してください。

1. 修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章。

単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。

2. 指導に携わることを希望する動機を300字程度で。

研究科や教授からの推薦を受けている場合には、必ずその旨を明記してください。

3. 指導についての場合、何学期間勤務できるか。

ここで申告した期間を実際に勤務していただきます。正直に記入してください。

（３）留学生

「留学生向け」クラスに登録してください。

毎回、800字から1000字の文章を書く課題が課せられます。

課題は、授業日から4日目までにコースナビで提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

■ 成績評価方法

レポート 85% 授業中に学習した技能を使って短い文章を作成する課題が毎週出されます。

※欠席した回の課題は提出することができません。

平常点評価 15% 出席を重視します。討論や他の学生の文章への助言など、クラスへの貢献度を評価します。

※欠席が3回を超えると、文章指導者への応募資格を失います。

■ 授業計画

第1回：外来語と専門用語を扱う

第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く

第3回：接続表現で文と文をつなげる

第4回：語句を明確に使う

第5回：「マップ」を作って書く

第6回：主張と主張の位置

第7回：論点を整理する

第8回：抽象度の調節をする

第9回：「パラグラフ」を作る

第10回：参考文献を示す

第11回：「ブロック引用」をする

第12回：要約引用をする

第13回：図や表を作る

第14回：「私語り」から脱出する

第15回：題名をつける

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』ひつじ書房（2,000円＋税）

■ 参考文献

宇佐美寛編著（1989）『作文の論理—[分かる文章]の仕組み』東信堂（1,900円＋税）

■ 備考・関連 URL

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

初回授業から課題が出ますので必ず出席してください。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 05 (指導力養成)	太田 裕子	秋学期	2	金 3 時限

■ 副題：アカデミック・ライティング指導者を目指して

■ 授業概要

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学（院）では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して大学院生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。さらに、本授業で身に付けた態度と技能を、学部生のライティング指導に活かすことをお願いしています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業の到達目標

■ 指導者を目指すクラス

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「指導力養成」クラス）では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。（学部生指導補助の詳細については、ウェブサイト「早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム」をご覧ください。）

大学教員を目指す博士後期課程の学生、および、博士後期課程に進学する意思のある修士課程の学生に履修を勧めます。大学院在籍中に、指導員として学部生の文章指導に携わる経験は、将来大學生を指導する上で貴重だからです。

本授業を履修後に、指導員の資格を教員から与えられた履修者は、科目登録時に申告した期間は、必ず指導員として勤務してください。履修後に学部生向け授業の指導補助に携わる気持ちのない方は、履修しないでください。

■ 指導補助に携わるには

本授業で、欠席が2回以下で、文章力と指導力において指導に携わるレベルに到達したと授業者が判断した人は、次学期より学部生のライティング指導に携わることができます。毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、登録時に提出してもらう文章による文章力判定と、勤務できる年

数によって、履修者の決定を行います。

■登録時に提出する文書

ウェブ登録時に、「志望理由」の欄に、以下3点を記入すること。

1. 修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章。
単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。
2. 指導に携わることを希望する動機を300字程度で。
研究科や教授からの推薦を受けている場合には、必ずその旨を明記してください。
3. 指導についた場合、何学期間勤務できるか。
ここで申告した期間を実際に勤務していただきます。正直に記入してください。

■成績評価方法

提出された文章の出来栄え 96% (8点×12課題=96点)

他者への記述コメント 2% (1点×2回=2点)

オンディマンド授業の視聴 2% (1点×2回=2点)

*授業に参加しなかった週は、課題文章を提出することができません。

*2回以上欠席すると、指導員として勤務を希望する資格が失われますのでご注意ください。

遅刻は厳禁です。欠席する際には、事前に断ってください。

■授業計画

第1回：ガイダンス、外来語や専門用語を扱う

第2回：ことばと思考、「一文一義」で書く

第3回：接続表現で文と文との関係を自覚する

第4回：語句を明確に使う

第5回：主張を記す

オンディマンド授業1 論文の構成

第6回：「マップ」を作って書く、問いを立てる

第7回：全体を構成する

第8回：論点を整理する

第9回：抽象度の調節をする

オンディマンド授業2 論点を整理する

第10回：「パラグラフ」を作る

第11回：参考文献を示す

第12回：「ブロック引用」をする

第13回：要約引用をする

第14回：図や表を作る、読者を案内する

第15回：題名を付ける

毎回、800字から1000字の文章を書く課題が課せられます。

課題は、翌月曜日23:59までにコースナビで提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

※講義の順序は変更される可能性があります。

■教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブッカーライティングの挑戦15週間』ひつじ書房 (2,000円＋税)

宇佐美寛編著 (1989) 『作文の論理―[分かる文章]の仕組み』東信堂 (1,900円＋税)

■ 備考・関連 URL

第1回講義は9月28日（金）です。この日から講義を始めますので、必ず出席してください。

関連 URL:

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 06（留学生向け）	加納なおみ 佐渡島紗織	秋学期	2	金 2 時限

■ 授業概要

※2012年4月1日修正

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学（院）では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけることを目的とした、留学生対象のクラスです。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、各課題の完成及び、授業への積極的な参加が不可欠です。また、毎週の積み重ねが、学期最後のまとめの課題（→各自の論文の序章を書く）の完成にもつながります。

* ウェブ登録の際、「志望理由」の欄に、「大学院で研究したいこと」を500字程度で書いてください。

クラス定員は15名です。希望者数が定員を超えた場合は、「志望理由」ならびに第一回授業への参加態度を審査して履修者の決定を行います。登録希望者は第一回目の授業(9月28日)に必ず出席してください。第一回授業の欠席者は自動的に選外となります。なお、希望者数が定員を超えた場合は、第一回目の授業に出席しても、選外となる可能性があります。ご了承ください。

■ 授業の到達目標

※2012年4月1日修正

■ 留学生対象クラス

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業は、自分の修士論文・博士論文の準備を進めるために、書く力を伸ばしたい、という意欲をもった留学生のためのクラスです。クラスではピア活動を通じ、読み手と書き手、両方の視点を確立していきます。論文作成の基本となる、以下の点について重点的に学びます。

修士論文など、学術論文の構成と、その書き方のプロセス

学術論文の書式

自身の思考が整理される書き方

読み手に意図が伝わったりやすい書き方

学術的文章の分析、批判のしかた

* ウェブ登録の際、「志望理由」の欄に、「大学院で研究したいこと」を500字程度で書いてください。クラス定員は15名です。希望者数が定員を超えた場合は、「志望理由」ならびに第一回授業への参加態度を審査して履修者の決定を行います。登録希望者は第一回目の授業(9月28日)に必ず出席してください。第一回授業の欠席者は自動的に選外となります。なお、希望者数が定員を超えた場合は、第一回目の授業に出席しても、選外となる可能性があります。ご了承ください。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

実施しない

レポート割合 55%

授業中に学習した技能を使って短い文章を作成する課題が毎週出されます。

平常点評価割合 30%

出席を重視します。討論や他の学生への助言など、クラスへの貢献度を評価します。

その他割合 15%

最終レポートとその発表

- ・ 最終レポートでは、授業で学習した技能を生かしながら、課題に適切にこたえているか、評価します。
- ・ 各自の発表に加え、討論や他の学生への助言など、クラスへの貢献度も評価の対象となります。

■ 授業計画

※2012年4月1日修正

第1回：外来語と専門用語を扱う

第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く

第3回：接続表現で文と文をつなげる

第4回：語句を明確に使う

第5回：「マップ」を作って書く

第6回：主張と主張の位置

第7回：論点を整理する

第8回：抽象度の調節をする

第9回：「パラグラフ」を作る

第10回：参考文献を示す

第11回：「ブロック引用」をする

第12回：要約引用をする

第13回：(1)「私語り」から脱出する (2)最終レポート(各自の論文の序章) 検討会その1

第14回：(1)題名をつける (2)最終レポート(各自の論文の序章) 検討会その2

第15回：まとめ

(※上記は、一部順番や内容が留学生向けに変わる場合もあります。)

毎回、400字から800字程度の文章を書く課題が課せられます。

毎週の課題は、授業日から3日目までに提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

最終レポートは各自の論文の序章をA4 2ページ程度にまとめ、全員で検討し合います。

■ 教科書

※2012年4月1日修正

教科書：佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』(ひつじ書房、2008) 2,000円＋税

準教科書：宇佐美寛編著『作文の論理—「わかる文章」の仕組み』(東信堂、1998) 1,900円＋税

■ 参考文献

プリント配布。

■ 備考・関連 URL

※2012年4月1日修正

ウェブ登録の際、「志望理由」の欄に、「大学院で研究したいこと」を500字程度で書いてください。

クラス定員は15名です。希望者数が定員を超えた場合は、「志望理由」ならびに第一回授業への参加態度を審査して履修者の決定を行います。登録希望者は第一回目の授業(9月28日)に必ず出席してください。第一回授業の欠席者は自動的に選外となります。なお、希望者数が定員を超えた場合は、第一回目の授業に出席しても、選外となる可能性があります。ご了承ください。

関連 URL:

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
研究倫理概論	土田 友章 浦川道太郎 嶋田 洋徳 高林 龍 深澤 良彰 横野 恵	秋学期	2	フルオンデマンド

■ 副題：—研究者を目指す人々へ—

■ 授業概要

最近、研究活動における、データ捏造や盗用等の不正行為が相次いで明らかになっています。論文作成・発表、共同研究等の研究活動を遂行するうえで、予め知っておくべき研究倫理について、研究計画のあり方から知的財産権、被験者保護等の基本的事項をはじめ利益相反、企業倫理、更には研究ノートとデータ管理、安全保障等に関する事項について、学内外の専門の先生方により、具体的な事例を多く交えながらオンデマンド形式でお伝えします。

■ 授業の到達目標

文系理系を問わず今後研究に従事する多くの大学院生および学部3・4年生が、研究倫理に関する理解を深め、研究者として地球市民として世界に参加してゆく態度を整えることを期待します。

■ 成績評価方法

講義後の小テスト、レポートを踏まえ総合的に評価する。

■ 授業計画

【序論 なぜ研究の倫理か 現代世界における科学技術研究】

第1回：はじめに なぜ研究倫理か

第2回：研究における不正行為：FFP（ねつ造・改ざん・盗用）の実例

第3回：研究における不正行為と法：民事訴訟

【研究の計画】

第4回：研究計画のあり方（1）

第5回：研究計画のあり方（2）

第6回：被験者保護の基本（1）（ヒトゲノム、ES細胞を含む）

第7回：被験者保護の基本（2）（動物実験を含む）

第8回：心理学と研究倫理

第9回：研究と利益相反

【研究の遂行】

第10回：研究ノートとデータ管理の実践

第11回：メンターとトレイニー、Authorship と出版の倫理、共同研究

【研究の成果】

第12回：知的財産権をめぐって

第13回：研究倫理と企業倫理

第14回：安全保障の観点から見た科学技術者の社会的責任

第15回：研究倫理の実践：早稲田大学の体制・終わりに

■ 備考・関連 URL

なお、第15回終了後に、全体を通した内容で対面による講義を2回（任意出席：所沢・早稲田キャンパス）行う予定です。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
質的研究方法入門 01	太田 裕子	春学期	2	月 3 時限

■ 授業概要

質的研究方法を用いた研究を行い、人文社会科学系の学術論文を作成する際必要となる基本的な考え方や研究手法を学ぶことを、本授業の目的とする。

質的研究方法は、実証研究における領域のひとつで、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする」（フリック, 2002, p.19）点がその特徴である。大がかりな質問紙調査や実験によって収集したデータを統計処理する数量的研究方法に対し、質的研究方法は、観察、インタビュー、映像分析などの手法を単独または複数組み合わせることによって、現象を捉えようとする。

どのような手法を用いてデータを収集し分析するかは、研究者の立場や研究の問いによって決定づけられる。そのため、本授業では、質的研究方法の理論的背景を理解したうえで、受講者が自分の研究の立場や問いに適した研究方法を見つけることを目指す。本授業では、特に観察とインタビューを取り上げ、それらの種類と方法を学ぶ。

受講者は、実際に観察やインタビューを用いた研究を行い、小型の学術論文を作成する（最終レポート）。そのために、毎週、論文の一部を書く課題や、論文を書くために必要な作業を行う課題が出される（課題レポート）。授業では、講義と演習を行う。演習には、受講者同士が互いのレポートやデータを検討し、助言し合う活動が含まれる。また、学期の最後には、互いの最終レポートを評価しあう活動も行う（相互評価）。よって、受講者には、積極的な参加を期待する。

■ 授業の到達目標

本授業は、次の三点をねらいとする。

- 1) 質的研究方法の理論的背景、および観察とインタビューの種類と方法を理解する。
- 2) 質的研究法の強みと弱み、倫理的問題を理解する。
- 3) 観察、インタビューの手法を用いた研究をデザインし、実施することができる。

■ 成績評価方法

試験割合 0 %

実施しない

レポート割合 80 %

- (1) 課題レポート・・・50%
- (2) 最終レポート・・・25%
- (3) 相互評価シート・・・5 %

平常点評価割合 15 %

クラスでの議論やピア活動への参加度

その他割合 5 %

最終レポート口頭発表

■ 授業計画

第 1 回：質的研究方法の特徴と種類／論文を読む（1）

第 2 回：研究の立場と研究方法の関係／論文を読む（2）

- 第3回：研究の問いと研究方法の関係／序章を書く
- 第4回：理論的枠組と文献レビュー／先行研究章を書く
- 第5回：インタビューの種類と方法
- 第6回：観察の種類と方法
- 第7回：研究対象へのアクセス、関係性、倫理的問題／研究方法章を書く
- 第8回：データの収集と調査過程の振り返り
- 第9回：データを分析する（1）
- 第10回：データを分析する（2）
- 第11回：調査結果を記述する
- 第12回：考察と結論の章を書く
- 第13回：論文を評価する
- 第14回：論文の発表と討論
- 第15回：論文の発表と討論

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』ひつじ書房

メリアム, S.B. (Merriam, S. B.) (2004) 『質的研究方法入門—教育における調査法とケース・スタディー』(堀薫夫・成島美弥訳) ミネルヴァ書房 (原著は1998)

■ 参考文献

桜井厚（2002）『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房

佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社

フリック, ウヴェ (Flick, U.) (2002) 『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳) 春秋社 (原著は1995)

Crotty, M. (1998). The foundations of social research: Meaning and perspective in the research process. Crows Nest: Allen & Unwin.

■ 備考・関連 URL

本授業は、初めて質的研究方法を学ぶ修士課程の学生を主な対象とする。所属する研究科で研究方法に関する授業が設置されている場合には、そちらを受講されたい。

また、本授業は、フィードバックの都合上、受講者を20名までとさせていただきます。そのため、履修希望者が定員を超える場合には、書類選考を行う。履修希望者は、「志望理由」の欄に、（1）この授業の履修を希望する理由、（2）修士論文のテーマと研究方法を記入すること。（「志望理由」欄が空欄の場合は選外となります。）

関連 URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
質的研究方法入門 02	太田 裕子	秋学期	2	月 3 時限

■ 授業概要

質的研究方法を用いた研究を行い、人文社会科学系の学術論文を作成する際必要となる基本的な考え方や研究手法を学ぶことを、本授業の目的とする。

質的研究方法は、実証研究における領域のひとつで、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする」（フリック, 2002, p.19）点がその特徴である。大がかりな質問紙調査や実験によって収集したデータを統計処理する数量的研究方法に対し、質的研究方法は、観察、インタビュー、映像分析などの手法を単独または複数組み合わせることによって、現象を捉えようとする。

どのような手法を用いてデータを収集し分析するかは、研究者の立場や研究の問いによって決定づけられる。そのため、本授業では、質的研究方法の理論的背景を理解したうえで、受講者が自分の研究の立場や問いに適した研究方法を見つけることを目指す。本授業では、特に観察とインタビューを取り上げ、それらの種類と方法を学ぶ。

受講者は、実際に観察やインタビューを用いた研究を行い、小型の学術論文を作成する（最終レポート）。そのために、毎週、論文の一部を書く課題や、論文を書くために必要な作業を行う課題が出される（課題レポート）。授業では、講義と演習を行う。演習には、受講者同士が互いのレポートやデータを検討し、助言し合う活動が含まれる。また、学期の最後には、互いの最終レポートを評価しあう活動も行う（相互評価）。よって、受講者には、積極的な参加を期待する。

■ 授業の到達目標

本授業は、次の三点をねらいとする。

- 1) 質的研究方法の理論的背景、および観察とインタビューの種類と方法を理解する。
- 2) 質的研究法の強みと弱み、倫理的問題を理解する。
- 3) 観察、インタビューの手法を用いた研究をデザインし、実施することができる。

※最終レポートは、受講者の専門領域における学会誌、紀要に投稿することを目指す。

■ 成績評価方法

試験割合 0 %

実施しない

レポート割合 80 %

- (1) 課題レポート・・・45%
- (2) 最終レポート・・・25%
- (3) 相互評価シート・・・10%

平常点評価割合 15 %

クラスでの議論やピア活動への参加度

※ 3 回以上欠席すると不合格となりますので、注意して下さい。

その他割合 5 %

最終レポート口頭発表

■ 授業計画

- 第1回：質的研究方法の特徴と種類／論文を読む（1）
- 第2回：研究の立場と研究方法の関係／論文を読む（2）
- 第3回：研究の問いと研究方法の関係／序章を書く
- 第4回：理論的枠組と文献レビュー／先行研究章を書く
- 第5回：インタビューの種類と方法
- 第6回：観察の種類と方法
- 第7回：研究対象へのアクセス、関係性、倫理的問題／研究方法章を書く
- 第8回：データの収集と調査過程の振り返り
- 第9回：データを分析する（1）
- 第10回：データを分析する（2）
- 第11回：調査結果を記述する
- 第12回：考察と結論の章を書く
- 第13回：論文を評価する
- 第14回：論文の発表と討論
- 第15回：論文の発表と討論

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）『これから研究を書くひとのためのガイドブッカーライティングの挑戦15週間』ひつじ書房

メリアム, S.B. (Merriam, S. B.) (2004) 『質的研究方法入門—教育における調査法とケース・スタディー』（堀薫夫・成島美弥訳）ミネルヴァ書房（原著は1998）

■ 参考文献

桜井厚（2002）『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房

佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社

フリック, ウヴェ (Flick, U.) (2002) 『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』（小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳）春秋社（原著は1995）

Crotty, M. (1998). The foundations of social research: Meaning and perspective in the research process. Crows Nest: Allen & Unwin.

■ 備考・関連 URL

本授業は、初めて質的研究方法を学ぶ修士課程の学生を主な対象とする。所属する研究科で研究方法に関する授業が設置されている場合には、そちらを受講されたい。

また、本授業は、フィードバックの都合上、受講者を20名までとさせていただきます。そのため、履修希望者が定員を超える場合には、書類選考を行う。履修希望者は、「志望理由」の欄に、（1）この授業の履修を希望する理由、（2）修士論文のテーマと研究方法を記入すること。（「志望理由」欄が空欄の場合は選外となります。）

関連 URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
地域研究としての台湾	若林 正文 浅古 弘 小島 宏 春山 明哲 松岡 格	春学期	2	火 2 時限

■ 授業概要

現在の台湾を、どのように理解すればよいか。また、これからの台湾の行方はいかなるものか。台湾を的確に捉えるには、どうすればよいのだろうか。本講義では、歴史的な見方を中心としつつ、台湾を様々な角度から検討し、地域研究としての台湾の可能性を考える。また、こうした新しい台湾研究のあり方を模索することによって、既存の比較政治学、比較法学、比較歴史研究、東アジア研究に関しても、新たな視点を提供したい。

本講義は、オムニバス形式の講義であり、政治学、歴史学、法学、地域研究、先住民族研究などを専門とする、複数の教員が担当する。それぞれ専門分野から台湾研究の現状、可能性等について、受講生とともに文献・資料等を通じて検討し議論を行う。

■ 授業の到達目標

台湾という地域への幾つかのディシプリンからのアプローチの概要と特質を理解し、受講者それぞれの関心地域の研究への切り口を鍛える。

■ 成績評価方法

レポート割合40%

レポートの課題、その他は、最終回までに指示する。

平常点評価割合50%

講義への出席・参加を重視する。

その他割合10%

講義における積極的学習・研究姿勢を評価する。

■ 授業計画

第1回：イントロダクション：地域研究としての台湾研究 担当 若林正文

- ・地域研究とは何かについての一つの見方を提示し、本講義の導入とする。
- ・なお、以下2－14回の内容や順番は、場合によって変更の可能性はある。

第2回：日本における台湾研究の歴史 担当 春山明哲

- ・日本における台湾研究、特に近代史研究の流れを紹介し、第3－7回部分の導入とする。

第3回：人物から見た近代日本と台湾1 担当 春山明哲

- ・日本の台湾植民地統治史に関わる歴史史料（日本文、活字化されたもの）を実際に読みながら、日本近代史と台湾史の関わりを人物の点から考えていく。後藤新平、原敬、岡松参太郎、新渡戸稲造、矢内原忠雄、井上伊之助などを取り上げる予定。

第4回：人物から見た近代日本と台湾2 担当 春山明哲

- ・日本の台湾植民地統治史に関わる歴史史料（日本文、活字化されたもの）を実際に読みながら、日本近代史と台湾史の関わりを人物の点から考えていく。後藤新平、原敬、岡松参太郎、新渡戸稲造、矢内原忠雄、井上伊之助などを取り上げる予定。

第5回：人物から見た近代日本と台湾3 担当 春山明哲

- ・日本の台湾植民地統治史に関わる歴史史料（日本文、活字化されたもの）を実際に読みながら、日本近代史と台湾史の関わりを人物の点から考えていく。後藤新平、原敬、岡松参太郎、新渡戸稲造、矢内原忠雄、井上伊之助などを取り上げる予定。

第6回：人物から見た近代日本と台湾4 担当 春山明哲

- ・日本の台湾植民地統治史に関わる歴史史料（日本文、活字化されたもの）を実際に読みながら、日本近代史と台湾史の関わりを人物の点から考えていく。後藤新平、原敬、岡松参太郎、新渡戸稲造、矢内原忠雄、井上伊之助などを取り上げる予定。

第7回：人物から見た近代日本と台湾5 担当 春山明哲

- ・日本の台湾植民地統治史に関わる歴史史料（日本文、活字化されたもの）を実際に読みながら、日本近代史と台湾史の関わりを人物の点から考えていく。後藤新平、原敬、岡松参太郎、新渡戸稲造、矢内原忠雄、井上伊之助などを取り上げる予定。

第8回：植民地法制史1 担当 浅古弘

- ・法制史の観点から日本の植民地支配体制の歴史を振り返り、その特色を考察する。

第9回：植民地法制史2 担当 浅古弘

- ・法制史の観点から日本の植民地支配体制の歴史を振り返り、その特色を考察する。

第10回：比較の中の台湾社会1 担当 小島宏

- ・現代台湾とその他の社会の幾つかの社会指標を比較対比する方法で、現代台湾社会のありかたの特質を考察する。

第11回：比較の中の台湾社会2 担当 小島宏

- ・現代台湾とその他の社会の幾つかの社会指標を比較対比する方法で、現代台湾社会のありかたの特質を考察する。

第12回：地域研究としての先住民族研究1 担当 松岡格

- ・台湾には、かつて「高砂族」、今日「台湾原住民族」と称される先住民族が漢族に移住以前から居住して、台湾社会に存在感を示している。外部からの移住者・統治者との関連を踏まえながら、先住民族の存在から台湾という地域を考える。

第13回：地域研究としての先住民族研究2 担当 松岡格

- ・台湾には、かつて「高砂族」、今日「台湾原住民族」と称される先住民族が漢族に移住以前から居住して、台湾社会に存在感を示している。外部からの移住者・統治者との関連を踏まえながら、先住民族の存在から台湾という地域を考える。

第14回：台湾研究という学知 担当 江正殷

- ・「台湾研究」をひとまとめの「学知」ととらえて、その上で、近現代の日本と台湾の知的からみあいを考える。

第15回：レビュー 担当 若林正丈、春山明哲、松岡格、江正殷

- ・講義全体を振り返り、まとめを行う。

■ 教科書

特定の教科書は設けない。

■ 参考文献

下記の文献の他、講義中にも適宜紹介する。

*＜とりあえず台湾史に親しむため＞周婉窈（濱島敦俊監訳）『図説 台湾の歴史』平凡社、2007年

*＜第10、11回関係＞岩井紀子・保田時男編『データで見る東アジアの家族観—東アジア社会調

査による日韓中台の比較一』ナカニシヤ出版、2009年

＊＜第3-7回関係＞春山明哲『近代日本と台湾 霧社事件・植民地統治政策の研究』藤原書店、2008年

■ 備考・関連 URL

講義に関する事柄について、Course N@vi を通じてメール連絡することもありえるので、注意すること。

関連 URL:

<http://www.soc.nii.ac.jp/jats/index.shtml>

(日本台湾学会のサイト。『日本台湾学会報』の論文が PDF ファイルで閲覧できるほか、「戦後日本台湾研究関連文献目録」へのアクセス、学会大会・定例研究会などの情報に接することができる)

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
アジア太平洋における人間の安全保障（大学院用）	天児 慧 阿古 智子 浅野 茂隆 天野 正博 山田 満	春学期	2	金 3 時限

■ 副題：アジアにおけるグローバルヘルスとガバナンスを中心に

■ 授業概要

国境を越え、特にアジア地域で社会問題となっている感染症（特に HIV、鳥インフルエンザ、新型インフルエンザ、結核など）、呼吸器疾患について、その疾病の発生、重症化、およびその治療を左右する貧困、環境、政策、教育等の因子について専門的知識を提供し、それぞれの問題を整理・提起をする。更に、それぞれの因子を克服するために必要な地域協力、研究開発、ネットワークなどの取り組みについて非伝統的安全保障として検討し、現状で自分たちには何が出来るのか、何をすれば良いのかを模索する。

■ 授業の到達目標

国境を越えて蔓延する感染症などについて、疾病の発生、重症化、およびその治療について社会・経済・政策・環境・教育などの背景因子がどのように関わっているのかを理解する。これらの因子の克服には、グローバルガバナンスが必須であり、それには地域の協力体制が必要であることを認識し、協力体制を敷くために出来ることを模索出来る。更に、背景因子の克服を図ることで、国際的な疾病の予防と死亡率の低下への寄与というモチベーションを持ち、国際貢献出来る人材を養成する。

■ 成績評価方法

試験割合 0 %

特になし

レポート割合50%

特に関心の高かった3つ以上の回の講義内容をベースにテーマ設定をし、関連付けながらレポートにする) A4用紙4枚以上

平常点評価割合50%

出席数と授業参加への積極性

■ 授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）

天児 慧（早稲田大学アジア太平洋研究科教授）：総論＝本講義の目的と同時にアジアを取り巻く国際情勢、人間の安全保障、ガバナンスなどの概況を解説

第2回：疾病の発生・重症化とその治療への影響因子

工藤 宏一郎（早稲田大学アジア研究機構客員教授、元国立医療センター副院長）

第3回：中国の貧困と感染症 1

阿古 智子（早稲田大学国際教養学術院 準教授）

第4回：中国の貧困と感染症 2

阿古 智子（早稲田大学国際教養学術院 準教授）

第5回：インフルエンザと社会経済背景

工藤 宏一郎（早稲田大学アジア研究機構客員教授、元国立医療センター副院長）

第6回：アジアの感染症（HIV）

大谷 順子（大阪大学大学院人間科学研究科準教授）

第7回：グローバルヘルスと国際ネットワーク

工藤 宏一郎

第8回：結核をとりまく諸問題

石川 信克（財団法人結核予防会 結核研究所）

第9回：アジアの紛争と平和構築ガバナンス 1

山田 満（早稲田大学社会科学学術院教授）

第10回：アジアの紛争と平和構築ガバナンス 2

山田 満（早稲田大学社会科学学術院教授）

第11回：環境破壊とガバナンス

天野 正博（早稲田大学人間科学学術院教授）

第12回：災害時医療における危機管理体制 1

浅野 茂隆（早稲田大学理工学術院教授）

第13回：災害時医療における危機管理体制 2

浅野 茂隆（早稲田大学理工学術院教授）

第14回：グローバルヘルスとガバナンスの関わり

工藤 宏一郎

第15回：結論

天児 慧

■ 教科書

特に指定なし。

必要な場合、第1回時に連絡。

■ 参考文献

天児慧編著『アジア委における非伝統的安全保障』、『中国における非伝統的安全保障』 8 いずれも勁草書房、2011年。

各回の時に、各回の参考文献の資料配布予定。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
現代演劇特論（入門）	秋葉 裕一	春学期	2	木 3 時限

■ 授業概要

演劇はナマモノである。生きた役者が時空を共にする観客の前で演じる。撮り直しや演じ直しは許されない。また、演劇はつねに現代と関わる。舞台を創造するのは生きた人間である。演じる人間の生きる時代を反映しないではない。さらに、演劇は具体的である。生身の身体を持った人間が演じる。これ以上に具体的な表現ジャンルはない。そうした性格を持つ演劇を授業で扱うのは難しい。舞台を見ずして演劇を語ることはできない。観劇体験は受講者に自身で補いを付けてもらしかない。しかしながら、受講者全員に観劇体験を求めることが難しいのも現実である。そこで、この授業では、観劇体験の少ない受講者のために、舞台の映像情報を活用する。疑似体験ではあるが、ナマモノとしての演劇、現代と関わる演劇、具体的な芸術ジャンルとしての演劇の特異性、魅力に触れてもらう。当該科目担当者は、早稲田大学演劇博物館を拠点とする21世紀 COE 事業、さらにはグローバル COE 事業において、ベルトルト・ブレヒト研究や日本におけるブレヒト受容の問題に取り組んできた。その問題意識や成果の一端を、授業において、積極的に紹介したい。扱う作家は、ブレヒトのほかに、イブセン、井上ひさし、永井愛などとなろう。なお、映像資料の放映は授業時間内に収まらない場合もある。授業時間は3限に設置されているが、授業時間を早めたり、あるいは延長するなどの必要もときには出てくる。受講を希望する諸君には、このことをあらかじめ了解しておいて欲しい。

■ 授業の到達目標

開講以降、確認しているところであるが、開講時に観劇体験のほとんどない受講希望者が大半である。劇場を身近に感じる諸君を僅かながらでも増やしたことを、この「現代演劇特論」開講の一つの功績と自負している。現代演劇が問いかける内容は、現代を生きる我々ひとりひとりの生とつながっている。その意味で、演劇や文学の研究者ばかりでなく、他の研究に携わる諸君にも参加してもらい、専門分野を超えた考察や解釈が展開させられればと願う。古典も現代劇も、海外の作品も日本の作品も含めて、より多くの舞台、戯曲に触れてもらい、それがイマ／ココ／ワレ・ワレとどう関わるのか、テキストや舞台から送られてくるメッセージをどう受け取るのか、いっしょに考えてみたい。

■ 成績評価方法

レポート割合30%

教場試験の形でレポートを提出してもらう。

平常点評価割合70%

ビデオを見て作品を鑑賞し、その作品のテキストを読む。そのあと、受講者相互あるいは担当教員との意見交換を通して、舞台や作品について考察する。これが授業の進め方の基となる。したがって、出席はきわめて重視される。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス。ブレヒトの生涯と作品について。
第2回：『コーカサスの白墨の輪』の映像資料を見る。
第3回：戯曲『コーカサスの白墨の輪』を読む。
第4回：『コーカサスの白墨の輪』について考える。
第5回：日本におけるブレヒト受容。井上ひさしの生涯と作品について。
第6回：『父と暮せば』の映像資料を見る。
第7回：戯曲『父と暮せば』を読む。
第8回：『父と暮せば』について考える。
第9回：永井愛『ら抜き殺意』の映像資料を見る。
第10回：戯曲『ら抜き殺意』を読み、考える。
第11回：イブセン『人形の家』の映像資料を見る。
第12回：戯曲『人形の家』を読み、考える。
第13回：まとめ
第14回：教場試験（予告された問題に答える一種のレポート）。
第15回：前週のレポートへの講評。

■ 教科書

授業担当者が準備する。

■ 参考文献

教場で随時、指示する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
現代演劇特論（発展）	秋葉 裕一	秋学期	2	木3時限

■ 授業概要

演劇はナマモノである。生きた役者が時空を共にする観客の前で演じる。撮り直しや演じ直しは許されない。また、演劇はつねに現代と関わる。舞台を創造するのは生きた人間である。演じる人間の生きる時代を反映しないではない。さらに、演劇は具体的である。生身の身体を持った人間が演じる。これ以上に具体的な表現ジャンルはない。そうした性格を持つ演劇を授業で扱うのは難しい。舞台を見ずして演劇を語ることはできない。観劇体験は受講者に自身で補いを付けてもらしかない。しかしながら、受講者全員に観劇体験を求めることが難しいのも現実である。そこで、この授業では、観劇体験の少ない受講者のために、舞台の映像情報を活用する。疑似体験ではあるが、ナマモノとしての演劇、現代と関わる演劇、具体的な芸術ジャンルとしての演劇の特異性、魅

力に触れてもらう。当該科目担当者は、早稲田大学演劇博物館を拠点とする21世紀 COE 事業、さらにはグローバル COE 事業において、ベルトルト・ブレヒト研究や日本におけるブレヒト受容の問題に取り組んできた。その問題意識や成果の一端を、授業において、積極的に紹介したい。扱う作家は、ブレヒトのほかは、井上ひさし、永井愛、岸田國士、松田正隆、三谷幸喜などとなる。なお、映像資料の放映は授業時間内に収まらない場合もある。授業時間は3限に設置されているが、授業時間を早めたり、あるいは延長するなどの必要もときに出てくる。受講を希望する諸君は、このことをあらかじめ了解しておいて欲しい。

■ 授業の到達目標

開講以降、確認しているところであるが、開講時に観劇体験のほとんどない受講希望者が大半である。劇場を身近に感じる諸君を僅かながらでも増やしたことを、この「現代演劇特論」開講の一つの功績と自負している。現代演劇が問いかける内容は、まさに現代を生きる我々ひとりひとりの生とつながっている。その意味で、演劇や文学の研究者ばかりでなく、他の研究に携わる諸君にも参加してもらい、専門分野を超えた考察や解釈を展開させたい。古典も現代劇も、海外の作品も日本の作品も含めて、より多くの舞台、戯曲に触れてもらい、それがイマ／ココ／ワレ・ワレとどう関わるのか、テキストや舞台から送られてくるメッセージをどう受け取るのか、みんなでいっしょに考えてみたい。

■ 成績評価方法

レポート割合30%

教場試験の形でレポートを提出してもらう。

平常点評価割合70%

ビデオを見て作品を鑑賞し、その作品のテキストを読む。そのあと、受講者相互あるいは担当教員との意見交換を通して、舞台や作品について考察する。これが授業の進め方の基となる。したがって、出席はきわめて重視される。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス。

第2回：三谷幸喜『笑の大学』の映像資料を見る。

第3回：『笑の大学』について考える。

第4回：岸田國士『動員挿話』の映像資料を見る。

第5回：『動員挿話』について考える。

第6回：松田正隆『紙屋悦子の青春』の映像資料を見る。

第7回：『紙屋悦子の青春』について考える。

第8回：井上ひさし『化粧』の映像資料を見る。

第9回：『化粧』について考える。

第10回：永井愛『こんにちは、母さん』の映像資料を見る。

第11回：『こんにちは、母さん』について考える。

第12回：ブレヒト『肝っ玉おっ母とその子供たち』の映像資料を見る。

第13回：『肝っ玉おっ母とその子供たち』について考える。

第14回：教場試験（予告された問題に答える一種のレポート）。

第15回：前週のレポートへの講評。

■ 教科書

授業担当者が準備する。

■ 参考文献

教場で随時、指示する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本の伝統演劇論（入門）	三宅 晶子	春学期	2	月 5 時限

■ 授業概要

前年度に引き続き金春禪鳳自筆能本・謡本を取り上げる。

世阿弥自筆能本について書写年代が古い金春禪鳳自筆能本（富士山）と、謡本の中から、担当者が適当な能作品を選び、諸本校合、典拠、詞章、演出などについての調査・報告、参加者による討議を行う。

現存する主な謡本との校合、詞章の解説、出典調べ、演出資料の調査など、能の作品研究に欠かせない調査・研究法の基礎をマスターすることを目的とする。

能にのみ用いる狭い研究方法ではなく、広く伝統演劇すべてに応用可能な、オーソドックスな方法論である。

担当曲を決めて、発表形式とする。

■ 授業の到達目標

1. 日本の古文書（写本・板本）読解法の習得
2. 諸本校合の方法習得
3. 校訂本文作成法の習得
4. 古文の注釈法の習得
5. 能の研究を志す受講者は能の演出記録の調査・読解法の習得

■ 成績評価方法

平常点評価割合100%

自分の担当曲の調査・報告ができているか。(50) %

他の参加者の担当曲に関しての質疑に積極的に参加し、正しい判断が出来ているか (50) %

■ 授業計画

第1回：金春禪鳳自筆能本・謡本概説・能の作品研究の方法概説

第2回：担当曲決定、謡本の調査方法概説

第3回：担当曲 1 諸本校合・校訂本文作成

第4回：担当曲 1 注釈

第5回：担当曲 2 諸本校合・校訂本文作成

第6回：担当曲 2 注釈

第7回：担当曲 3 諸本校合・校訂本文作成

第8回：担当曲 3 注釈

第9回：担当曲 4 諸本校合・校訂本文作成

第10回：担当曲 4 注釈

- 第11回：担当曲 5 諸本校合・校訂本文作成
 第12回：担当曲 5 注釈
 第13回：金春禪鳳自筆能本・謡本の特徴（用字・発音法）
 第14回：金春禪鳳自筆能本・謡本の特徴（役名・節付表記）
 第15回：まとめ

■ 教科書

授業時に影印資料コピー配布

■ 参考文献

岩波日本古典文学大系『謡曲集』上下

岩波日本思想大系『世阿弥禅竹』

『金春古伝書集成』能楽書林刊

『鴻山文庫本の研究』わんや書店刊

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本の伝統演劇論（発展）	三宅 晶子	秋学期	2	月 5 時限

■ 授業概要

前期の「日本の伝統演劇論（入門）」に引き続き金春禪鳳自筆能本・謡本を取り上げる。

世阿弥自筆能本について書写年代が古い金春禪鳳自筆能本（富士山）と、謡本の中から、担当者が適当な能作品を選び、諸本校合、典拠、詞章、演出などについての調査・報告、参加者による討議を行う。

現存する主な謡本との校合、詞章の解説、出典調べ、演出資料の調査など、能の作品研究に欠かせない調査・研究法の基礎をマスターすることを目的とする。

能にのみ用いる狭い研究方法ではなく、広く伝統演劇すべてに応用可能な、オーソドックスな方法論である。

担当曲を決めて、発表形式とする。

■ 授業の到達目標

1. 日本の古文書（写本・板本）読解法の習得
2. 諸本校合の方法習得
3. 校訂本文作成法の習得
4. 古文の注釈法の習得
5. 能の研究を志す受講者は能の演出記録の調査・読解法の習得

■ 成績評価方法

平常点評価割合100%

自分の担当曲の調査・報告ができているか。(50) %

他の参加者の担当曲についての質疑に積極的に参加し、正しい判断が出来ているか (50) %

■ 授業計画

- 第1回：担当曲1 作品研究上
- 第2回：担当曲1 作品研究下
- 第3回：担当曲2 作品研究上
- 第4回：担当曲2 作品研究下
- 第5回：担当曲3 作品研究上
- 第6回：担当曲3 作品研究下
- 第7回：担当曲4 作品研究上
- 第8回：担当曲4 作品研究下
- 第9回：担当曲5 作品研究上
- 第10回：担当曲5 作品研究下
- 第11回：研究発表1
- 第12回：研究発表2
- 第13回：研究発表3
- 第14回：研究発表4
- 第15回：研究発表5

■ 教科書

授業時に影印資料コピー配布

■ 参考文献

- 岩波日本古典文学大系『謡曲集』上下
- 岩波日本思想大系『世阿弥禅竹』
- 『金春古伝書集成』能楽書林刊
- 『鴻山文庫本の研究』わんや書店刊

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
現代演劇と多文化主義（入門）	東 晴美	春学期	2	火3時限

■ 副題：演劇の文化研究

■ 授業概要

この授業は、今日の劇場で上演される様々な舞台作品を通して、芸術・社会・文化のあり方を考察するものである。

現代の日本や海外で上演されている演劇には、日本の多文化状況を反映した作品が数多く見られる。前期では、日本の前近代に生まれた伝統演劇とくに歌舞伎・文楽と近代・現代の舞台表現とのインタラクティブな関係についてとりあげる。伝統が形を変えながら伝承され、また、同時代の芸術家や観客に刺激を与えながら受容されていったかを、文化研究の視点から探求する。

まず、伝統演劇と現代の舞台表現との交流の事例を紹介し、文化研究のテーマや方法を整理する。次に、指定した関連する作品をDVDで鑑賞し、課題となるテーマや方法に基づいた発表と討議を行う。

劇場でのフィールドワークでは、課題とする舞台を実際に鑑賞した上で、討論を行う。

■ 授業の到達目標

まず、文学や芸術を専門としない学生にとっても、自分の研究分野に応用できる教養や汎用性のある方法論を身につける。その方法論とは、異なる文化の比較ではなく、異文化が交流することによって生じた現象が、今日の舞台作品にあらわれているのかを丹念に検証することである。

次に、文献に対するクリティカルリーディングの能力を養成する。記述された事実の検証のみならず、記述者の思想的・文化的バックグラウンドや記述された時代の社会的文脈を考慮しながら分析することである。

文学や芸術、演劇を専門とする学生には、自分の専門を発展させるような新しいアプローチを展開できるようにする。

また、履修者自身の修論執筆などに役立つようなライティング指導も行う。

■ 成績評価方法

レポート割合50%

学期の最後にレポートの提出を求める。採点基準は、授業で展開した方法論を正確に理解しているか、オリジナルな知見を獲得しているかをみる。

平常点評価割合50%

発表と討議によって構成される。発表はプレゼンテーションの形式が整っているか、オリジナルな知見が見られるかを評価する。討議は積極的に議論に資する意見を述べているかを評価する。

■ 授業計画

以下のような内容について、担当教員が文献・映像資料などを提供し、履修者と議論を行う。

第1回：イントロダクション（演劇学における文化研究の方法と可能性）

第2回：現代演劇における劇場、観客、身体の再構築と伝統演劇

第3回：作品鑑賞と分析（オイディプス王とギリシャ円形劇場）

第4回：作品鑑賞と分析（唐十郎と赤テント）

第5回：作品鑑賞と分析（こんびら歌舞伎と金丸座）

第6回：日本伝統演劇の海外公演と異文化交流

第7回：作品鑑賞と分析（中村勘三郎のNY公演）

第8回：作品鑑賞と分析（ヨーロッパの日本演劇受容）

第9回：近松作品の近代における変容、現代演劇への影響、映像での再生

第10回：作品鑑賞と分析（文楽と歌舞伎の「曾根崎心中」）

第11回：作品鑑賞と分析（海外での「曾根崎心中」の翻案）

第12回：作品鑑賞と分析（映像における近松作品）

第13回：劇場でのフィールドワーク

■ 教科書

プリントして配布

■ 参考文献

『演劇学のキーワード』（ペリかん社、2007年）

■ 備考・関連 URL

授業で紹介する舞台やシンポジウムへの参加を求めます。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
現代演劇と多文化主義（発展）	東 晴美	秋学期	2	火 3 時限

■ 副題：エスニシティと演劇

■ 授業概要

この授業は、今日の劇場で上演される様々な舞台作品を通して、芸術・社会・文化のあり方を考察するものである。

現代の演劇においては、日本の多文化社会を反映し、先住民や沖縄、さらには各国からの移民など多様なアイデンティティを持った人々の表現を観ることができる。それらの作品は、民族的伝統と主流文化との混淆を通して作り上げられている。また、そのようなエスニック的要素を含んだ舞台表現が文化資源として注目されることもある。

この授業では、文化研究の視点から、このような多文化社会日本における演劇との関わりについて、民族の伝統と現代の結節点について考察する。

まず、エスニックアイデンティティに裏付けられた舞台芸術の事例を紹介し、文化研究のテーマや方法を整理する。次に、指定した関連する作品を DVD で鑑賞し、課題となるテーマや方法に基づいた発表と討議を行う。

劇場でのフィールドワークでは、指定した舞台を実際に鑑賞し、その後教室で討論を行う。

■ 授業の到達目標

まず、文学や芸術を専門としない学生にとっても、自分の研究分野に応用できる教養や汎用性のある方法論を身につける。その方法論とは、異なる文化の比較ではなく、異文化が交流することによって生じた現象が、今日の舞台作品にあらわれているのかを丹念に検証することである。

次に、文献に対するクリティカルリーディングの能力を養成する。記述された事実の検証のみならず、記述者の思想的・文化的バックグラウンドや記述された時代の社会的文脈を考慮しながら分析することである。

文学や芸術、演劇を専門とする学生には、自分の専門を発展させるような新しいアプローチを展開できるようにする。

また、履修者自身の修論執筆などに役立つようなライティング指導も行う。

■ 成績評価方法

レポート割合50%

学期の最後にレポートの提出を求める。採点基準は、授業で展開した方法論を正確に理解しているか、オリジナルな知見を獲得しているかをみる。

平常点評価割合50%

発表と討議によって構成される。発表はプレゼンテーションの形式が整っているか、オリジナルな知見が見られるかを評価する。討議は積極的に議論に資する意見を述べているかを評価する。

■ 授業計画

以下のような内容について、担当教員が文献・映像資料を提供し、履修者とともに議論を行う。

第1回：イントロダクション（演劇学における文化研究の方法と可能性）

- 第2回：沖縄の演劇（組踊・沖縄芝居・人類館）
- 第3回：作品鑑賞と分析
- 第4回：作品鑑賞と分析
- 第5回：作品鑑賞と分析
- 第6回：アイヌの芸能（国境を越える先住民の表現）
- 第7回：作品鑑賞と分析
- 第8回：作品鑑賞と分析
- 第9回：作品鑑賞と分析
- 第10回：マイノリティの舞台表現；地域の演劇と文化資源
- 第11回：作品鑑賞と分析
- 第12回：作品鑑賞と分析
- 第13回：作品鑑賞と分析
- 第14回：劇場でのフィールドワーク

■ 教科書

プリントして配布する

■ 参考文献

『多様性と伝統：日本の演劇文化』（オセアニア出版社、2005年）

■ 備考・関連 URL

授業で紹介する舞台やシンポジウムへの参加を求めます。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本映画と演劇（発展）	藤井 仁子	秋学期	2	月3時限

■ 副題：映画学文献講読

■ 授業概要

演劇・舞台の伝統との関連で日本映画を論じた、英語または日本語の文献を輪読します。たんに両者の影響関係を扱うのではなく、異質な表象形式との出会い（または出会い損ない）に注目することで、「映画とは何か」という問いをさらに突き詰めて考えてみましょう。

具体的には、語り物の伝統を継承した無声映画期の弁士、溝口健二作品に登場する歌舞伎や新劇といったテーマを取り上げる予定ですが、詳しくは受講生と相談のうえ決定します。日本映画の場合と比較するために、必要に応じて外国映画にかんする文献を読むこともありえます。

前期の「日本映画と演劇（入門）」から続けて履修することで、いっそうの学習効果が期待されます。

■ 授業の到達目標

さしあたり映画学の専門的な論文を読みこなす能力の獲得を目指しますが、英語圏での日本映画研究の成果に接することで、自文化を他者の視点から再考する契機にもしてください。

■ 成績評価方法

出席を重視し、訳読の出来に議論での発言を加味して総合的に評価します。授業期間中に関連作品の上映が行なわれる場合など、適宜レポートの提出を求め、出来に応じて加点することもあります。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス、資料配布、発表順の決定など

第2回：文献輪読と討議（1）

第3回：文献輪読と討議（2）

第4回：文献輪読と討議（3）

第5回：文献輪読と討議（4）

第6回：文献輪読と討議（5）

第7回：文献輪読と討議（6）

第8回：文献輪読と討議（7）

第9回：文献輪読と討議（8）

第10回：文献輪読と討議（9）

第11回：文献輪読と討議（10）

第12回：文献輪読と討議（11）

第13回：文献輪読と討議（12）

第14回：文献輪読と討議（13）

第15回：全体のまとめ、討議

■ 教科書

プリントを配布します。

ただし、受講生の希望によっては開講後に特定の書籍をテキストとして購入してもらうかもしれません。

■ 参考文献

適宜紹介しますが、以下はできるだけ早く各自で読んでおくべきでしょう。四方田犬彦『日本映画史100年』（集英社新書、756円）。

■ 備考・関連 URL

英文の読解力はもちろん高いに越したことはないものの、語学の授業ではないので、映画学に関心を持ち、かつそのための努力を惜しまぬすべての学生に開かれた授業とします。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本映画と演劇（入門）	藤井 仁子	春学期	2	月 3 時限

■ 副題：映画学文献講読

■ 授業概要

演劇・舞台の伝統との関連で日本映画を論じた、英語または日本語の文献を輪読します。たんに

両者の影響関係を扱うのではなく、異質な表象形式との出会い（または出会い損ない）に注目することで、「映画とは何か」という問いをさらに突き詰めて考えてみましょう。

具体的には、語り物の伝統を継承した無声映画期の弁士、溝口健二作品に登場する歌舞伎や新劇といったテーマを取り上げる予定ですが、詳しくは受講生と相談のうえ決定します。日本映画の場合と比較するために、必要に応じて外国映画にかんする文献を読むこともありえます。

後期の「日本映画と演劇（発展）」と続けて履修することで、いっそうの学習効果が期待されます。

■ 授業の到達目標

さしあたり映画学の専門的な論文を読みこなす能力の獲得を目指しますが、英語圏での日本映画研究の成果に接することで、自文化を他者の視点から再考する契機にもしてください。

■ 成績評価方法

出席を重視し、訳読の出来に議論での発言を加味して総合的に評価します。授業期間中に関連作品の上映が行なわれる場合など、適宜レポートの提出を求め、出来に応じて加点することもあります。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス、資料配布、発表順の決定など

第2回：文献輪読と討議（1）

第3回：文献輪読と討議（2）

第4回：文献輪読と討議（3）

第5回：文献輪読と討議（4）

第6回：文献輪読と討議（5）

第7回：文献輪読と討議（6）

第8回：文献輪読と討議（7）

第9回：文献輪読と討議（8）

第10回：文献輪読と討議（9）

第11回：文献輪読と討議（10）

第12回：文献輪読と討議（11）

第13回：文献輪読と討議（12）

第14回：文献輪読と討議（13）

第15回：全体のまとめ、討議

■ 教科書

プリントを配布します。

ただし、受講生の希望によっては開講後に特定の書籍をテキストとして購入してもらうかもしれません。

■ 参考文献

適宜紹介しますが、以下はできるだけ早く各自で読んでおくべきでしょう。四方田犬彦『日本映画史100年』（集英社新書、756円）。

■ 備考・関連 URL

英文の読解力はもちろん高いに越したことはないものの、語学の授業ではないので、映画学に関心を持ち、かつそのための努力を惜しまぬすべての学生に開かれた授業とします。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本列島の日常史（後編）	高木 徳郎	秋学期	2	月 4 時限

■ 副題：古島敏雄の著作を読む

■ 授業概要

古島敏雄は、戦後歴史学に大きな足跡を残した農業史・経済史家である。その著作は膨大な数にのぼり、研究の対象も前近代の地主制、家族形態、共同体論、農業技術、農学史、生活史など多方面に及んでおり、その方法も実に多彩であるため、これらの著作を読む際には多面的なアプローチが可能である。この授業では、全学からの受講が可能であるオープン教育センターの特性を活かし、古島の著作を、受講者の専攻分野の視点・方法によってじっくり読み解くことを主眼として進めていくこととしたい。したがって、受講者は全員が毎回決められた著作の該当箇所をあらかじめ読んで上で参加するのが前提で、毎回担当者を決めて、担当者による報告とそれについての討論によって授業を進めていきたい。報告者は単に著作を読むだけでなく、典拠となる資料や文献を調べた上でレジュメを作成して報告を行う。ただし、毎回どの著作を読むかは、受講者の専攻分野や関心に応じて決めることとしたい。

■ 授業の到達目標

古島敏雄の研究の意義と問題点についての理解を深めるだけでなく、戦後の経済史・農業史の達成とその水準を把握することが当面の目標である。しかし、それだけにとどまらず、自分の専攻分野と異なる分野の成果を摂取する際の方法論を身につけ、批判的摂取により自らの研究をより豊かに発展させるスキルを獲得することをめざす。近年、異なる分野を横断的に架橋する学際的な共同研究の進展が著しいが、他分野の成果の結論部分だけを「つまみ食い」するだけでは、真の意味での共同研究とはならない。むしろ、結論に至る過程こそが重要であり、それぞれの分野の独自の視点と方法論の長所と短所に自覚的となり、それぞれを活かしつつ研究に取り組まなければならない。この授業では、そうした点を意識して授業を進めたい。

■ 成績評価方法

平常点評価割合100%

割り当てられた報告の完成度や討論における発言の状況などを総合的に評価する。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス 授業の進め方の説明と意見交換および受講者の自己紹介（研究分野など）、報告担当者の決定
- 第2回：古島敏雄の研究の特徴とその史的意義
- 第3回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第4回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第5回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第6回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第7回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第8回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第9回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第10回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論
- 第11回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論

第12回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論

第13回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論

第14回：受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論

第15回：討論の成果と総括

■ 教科書

授業の冒頭で指示する。

■ 参考文献

『古島敏雄著作集』（全10巻、東大出版会）

『土地に刻まれた歴史』（岩波新書、1967年）

その他、授業の中で具体的に言及する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
EU 機構と政策過程研究	福田 耕治	春学期	2	火 1 時限

■ 副題：EU 機構と政策過程研究－欧州ガバナンスの機能と構造

■ 授業概要

現代国家の行政活動は、もはや「国民国家」の枠内にとどまらない。なぜ、さまざまな領域で国際化、グローバル化を余儀なくされ、国際機構行政を発達させ、NGO や企業、個人との協力関係をも強化していかざるを得なくなったのか、国際行政と国内行政の制度的諸関係はどのように発展してきたのか、規制行政の国際化や国際的調整をめぐる諸問題の論点は何か、について考える。

本年度は、EU 機構と政策過程研究を中心とし、欧州ガバナンスの機能と構造を取りあげる。リスボン条約は、今後の EU 統合の方向性、行方を考える上で重要な機構の枠組み、政策過程などを規定する EU の新たな基本条約であるといつてよい。本演習では、リスボン条約を単に概観するだけではなく、EU 主要機関の特質や機構改革の方向性、その意味あるいは、EU における多様なガバナンス方式の比較を通じて、リスボン条約の意義と問題点を理論的かつ実証的に検討を行い、欧州統合の全体像を俯瞰し、EU を体系的に捉えられるよう政治経済学や国際関係論の理論にも配慮するとともに、それぞれの学問分野における専門的研究へと誘えるよう、研究の方法論をも含めた丁寧な指導を行う。

■ 授業の到達目標

EU の国際機構行政と加盟国行政との関係、ガバナンスの手法等に関して検討し、第 1 次資料や文献の調査方法や使い方を身につける。

■ 成績評価方法

レポート割合 30%

全15回を通じて最も興味を持った政策についてレポートをまとめ提出すること。

平常点評価割合 70%

EU の機構と加盟国統治機構との関係、ガバナンスの手法等に関して検討し、第 1 次資料や文献の調査方法や使い方、発表の仕方を身につける。

■ 授業計画

- 第1回：ガイドンスーEU 機構と政策過程とは何か。
第2回：EU の国際行政と加盟国行政の関係、第1次資料、EU 公式資料
第3回：欧州ガバナンスの構造と EU 諸機関
第4回：EU 法秩序・リスボン条約の構造と機能
第5回：欧州理事会と EU 閣僚理事会
第6回：欧州議会の機能と構造、
第7回：欧州議会と国際政党、直接選挙の現状分析
第8回：欧州委員会の機能と構造ーリスボン条約による改革
第9回：欧州委員会事務局の構造と国際公務員人事行政
第10回：EU 政策過程の構造と利益集団、NGO の機能
第11回：EU 政策形成・決定過程と加盟国統治機構の関係・共同体方式ガバナンス
第12回：EU 政策実施過程と加盟国行政機関
第13回：EU の政策評価制度と NPM 改革
第14回：EU 財政構造と財務行政管理
第15回：EU・欧州ガバナンスの課題

■ 教科書

教科書・参考書：

福田耕治『国際行政学-国際公益と国際公共政策（新版）』有斐閣、2012年。

福田耕治編著『EU/欧州公共圏の形成と国際協力』成文堂、2010年。

福田耕治編著『EU・欧州統合研究』成文堂、2009年。

福田耕治編著『多元化する EU ガバナンス』早稲田大学出版部 2011年

■ 参考文献

EU に関する最新の英語研究論文を中心に取り上げ、検討、議論する。

■ 備考・関連 URL

関連 URL

<http://jpn.cec.eu.int>

<http://europa.eu.int/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
EU 国際公共政策の研究	福田 耕治	春学期	2	火 2 時限

■ 副題：EU を事例として考える

■ 授業概要

グローバルな視点から、現代行政と国際公共政策を関係づけ、新たな国際制度の設計や国際公共政策の策定と実施について研究する。本科目では、環境エネルギー、開発、安全保障、人権保障、社会保障、保健・医療などの諸問題は地球規模の問題であると同時に、われわれの日常生活とも密

接にかかわる、とても身近な公共政策にかかわる諸問題を取り上げる。

■ 授業の到達目標

国際公務員、国家公務員、地方公務員、NGO/NPO 職員等の志望者にとって役立つ最新の国際問題と国内問題を取り上げ、またグローバル・ビジネスに積極的ににかかわりつつ、地球規模課題の解決に果敢に取り組むことのできる人材の育成を目指す。国際公益の概念を把握し、国際機関、国と地方自治体の役割を考え、その実現方法をガバナンスの観点から理解する。

■ 成績評価方法

レポート割合40%

年度末に提出されたレポートを絶対評価する

平常点評価割合60%

講義時の報告と質疑・応答を評価する

■ 授業計画

受講者と相談のうえ、春学期・秋学期でとりあげる国際公共政策を検討する。

(以下は、参考例)

第1回：国際公共政策とは何か

第2回：地球環境エネルギー政策のガバナンスと国際行政

第3回：国際開発政策と貧困問題へのアプローチ

第4回：国際人権保障と国際社会保障政策

第5回：国際通貨・金融政策と国際行政

第6回：国際医療保健政策と国境を越える感染症

第7回：国際情報通信政策と国際行政

第8回：国際機構の移民・難民政策と国際行政

第9回：食の安全性確保政策と国際行政

第10回：国際公共政策過程と NGO の役割

第11回：国際科学技術政策とジェンダー

第12回：国際安全保障・平和構築政策と国際行政

第13回：国際社会福祉労働政策

第14回：国際保健・医療政策

第15回：国際リスク・マネジメント政策

■ 教科書

福田耕治『国際行政学-国際公益と国際公共政策（新版）』有斐閣（2012年）

福田耕治他『EU・医療専門職と患者の越境移動』文眞堂（2009年）

■ 参考文献

福田耕治編『EU とグローバル・ガバナンス』早稲田大学出版部、2009年。

福田耕治編『多元化する EU ガバナンス』早稲田大学出版部、2011年。

■ 備考・関連 URL

関連 URL:

<http://europa.eu.int/>

<http://www.oecd.org/>

<http://www.unic.or.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
The Politics and International Relations of the European Union	バーコン ポール・マルティン	秋学期	2	金 5 時限

■ 授業概要

This course offers students a comprehensive guide to twentieth century European political history. It explains the circumstances in which the project of European co-operation began. Students will gain a clear understanding of the main institutions, policies and decision-making processes of the contemporary EU, with a particular focus on EU foreign policy.

The class offers a fair and honest appraisal of the political divisions that exist between influential members of the EU, and a balanced assessment of the strengths and weaknesses of the European approach to international relations.

There will be several concrete case studies of key events in international politics that have helped to shape the contemporary EU, and which have served to reveal the EU's strengths and weaknesses. These case studies include Rwanda, Bosnia/Srebrenica, Kosovo, the Iraq War, and the question of EU enlargement.

■ 授業の到達目標

This course will give students a comprehensive understanding of the history, institutions, policies, political processes, strengths and weaknesses of the European Union.

■ 成績評価方法

レポート割合80%

Four 1000 word position papers, each worth 10% of the final grade.

One 3000 word endterm paper, worth 40% of the grade.

平常点評価割合20%

Class attendance and participation.

■ 授業計画

第1回：Introduction/The Evolution of European Political Institutions

第2回：Origins of WW I

第3回：Origins of WW II

第4回：Theories of European Integration

第5回：The European Commission

第6回：The Council of Ministers/European Council

第7回：The European Parliament

第8回：The EU and Human Rights

第9回：EU Enlargement

第10回：EU Enlargement Case Study: Turkey

第11回：The EU and Rwanda

第12回：The EU and Bosnia/Srebrenica

第13回 : The EU, NATO and Kosovo

第14回 : The EU, the US and the Iraq War

第15回 : Overview/Conclusions

■ 教科書

Michelle Cini and Nieves Borragan, European Union Politics, (Third edition), Oxford University Press, 2010.

■ 参考文献

A comprehensive list of supplementary readings will be provided in the first class.

■ 備考・関連 URL

This class is taught entirely in English, and you are expected to produce all of the written assignments in English.

関連 URL:

A list of useful URLs will be circulated in the first class.

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
The Political System of the EU	舒 旻	秋学期	2	水 2 時限

■ 副題 : Comparative Politics Approaches

■ 授業概要

Has the European Union (EU) turned into a regional government without statehood? How to decode the politics of EU policy-making beyond classic integration theories? What are the roles of conventional political actors (such as voters, parties, and interest groups) in a multi-levelled governance structure? This course intends to provide students with the basic analytical tools to answer these important questions about the EU.

In addition to Hix's acclaimed textbook - 'The Political System of the European Union' (2011, 3rd edition, Palgrave), we are going to read several key articles in comparative politics literature of the EU.

The course is divided into three parts: (i) decoding the institutional structure of the EU, (ii) tracing the actors in EU politics, and (iii) linking structure and agency in EU policy-making. Following a seminar format, each student is required to conduct in-class presentation based on pre-assigned reading materials.

■ 授業の到達目標

This course focuses on comparative politics approaches to EU studies. It aims to help graduate students achieve two goals: first, to develop an in-depth understanding of the EU as a political system; second, to lay the foundations of graduate-level research on EU politics.

■ 成績評価方法

試験割合40%

term essay

レポート割合30%

class presentation

平常点評価割合20%

in-class discussion

その他割合10%

Attendance

■ 授業計画

第1回 : Guidance and Introduction

第2回 : The EU's Institutional Context

第3回 : Executive Politics in the EU

第4回 : Legislative Politics in the EU

第5回 : Judicial Politics in the EU

第6回 : Actor I : The Member States

第7回 : Actor II : The Public

第8回 : Actor III: Domestic and European Political Parties

第9回 : Actor IV: Interest Groups and Think Tanks

第10回 : Case I : The Treaty-Making Process

第11回 : Case II: The Politics of EU Budget

第12回 : Case III: The Economic and Monetary Union

第13回 : Case IV: The Political Economy of EU's External Relations

第14回 : Case V: Referendums and European Integration

第15回 : Summary and Evaluation

■ 教科書

Hix, Simon and Hoyland, Bjorn (2011) *The Political System of the European Union*, 3rd edition, London: Palgrave.

Marks, Gary and Steenbergen, Marco R. (2004) *European Integration and Political Conflict*, Cambridge: Cambridge University Press.

■ 参考文献

Gabel, Matthew (1998) *Interests and Integration: Market Liberalization, Public Opinion, and European Union*, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Hix, Simon; Noury, Abdul and Roland, Gerard (2007) *Domestic Politics in the European Parliament*, Cambridge: Cambridge University Press.

Hug, Simon (2002) *Voices of Europe: Citizens, Referendums, and European Integration*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

Moser, Peter; Schneider, Gerald and Kirchgassner, Gebhard (eds.) (2000) *Decision Rules in the European Union: A Rational Choice Perspective*, New York : St. Martin's Press.

Thomson, Robert; Stokman, Frans N.; Achen, Christopher and Konig, Thomas (eds.) (2006) *The European Union Decides*, Cambridge: Cambridge University Press.

Van der Eijk, Cees and Franklin, Mark (1996) *Choosing Europe? European Electorate and National Politics in the Face of Union*, Ann Arbor: University of Michigan Press.

■ 備考・関連 URL

関連 URL:

http://europa.eu/index_en.htm

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
欧州統合理論の研究	中村 英俊	秋学期	2	月 3 時限

■ 授業概要

いくつかの国際地域において、国民国家を超える（＝狭義の統合）現象ないしは国境を横断する（＝広義の統合）現象が観察できる。世界において、部分的ではあるが「戦争の不在」という現象を観察することもできる。

本講義では、ヨーロッパ地域における政治統合体としての EU の事例を中心に、様々な地域統合現象の理論的考察・分析を試みたい。次のようなテーマを取り上げる予定。

1. 世界における「地域」(regions)——地域統合論と地域研究の異同性
2. 地域統合の理論と概念 (1) E・ハースの新機能主義 (2) K・ドイッチュの交流主義
(3) 比較地域統合論——J・ナイの『部分的平和』
3. ヨーロッパ統合の歴史と現状 (1) EU と超国家的制度 (2) 安全保障共同体としての EU
(3) 民生パワーとしての EU
4. 国際統合と国民統合——EU と USA の「連邦制」
5. 地域機構と「戦争の不在」——APEC, ARF, ASEAN+3/6, SAARC, NAFTA, OAS, GCC, AU, EAC,
etc.

■ 授業の到達目標

国際関係論・国際政治学(IR)における統合理論(integration theory)の重要文献を輪読し、議論する。議論に際しては、ヨーロッパ統合の現実 (EU の事例)、あるいは、(ヨーロッパ統合との比較研究の観点から) 東アジア地域統合などについても各自に調査を求めることになる。

■ 成績評価方法

授業での報告 (レジュメの作成を含む)、議論 (ディスカッション) への貢献度、レポートを総合的に評価する。

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション：国際政治学における統合論
- 第2回：地域統合論・欧州統合理論の概説
- 第3回：K・ドイッチュの交流主義アプローチ
- 第4回：E・ハースの新機能主義アプローチ
- 第5回：P・シュミッターの新機能主義と「スピル・オーバー」仮説
- 第6回：S・ホフマンによる統合論批判
- 第7回：J・ナイの比較地域統合論：1970年代
- 第8回：W・ウォーレスの「主権の共有」論
- 第9回：A・モラブチックの制度主義
- 第10回：W・マトリィの比較地域統合論：1990年代
- 第11回：E・アドラーと M・バーネットの「安全保障共同体」論
- 第12回：非ヨーロッパ地域への「安全保障共同体」概念の適用

第13回：「民生パワー」としての EU

第14回：国際政治の中の EU

第15回：総括

上記テーマについて、リーディング・リストに基づく重要文献を読む。そして、ゼミ形式の講義では、ヨーロッパ統合の理論・現実について議論し、さらに比較研究の観点から、「アジア地域統合」の可能性と限界（あるいは「東アジア共同体」創設の条件）などについての議論も重ねたい。

■ 参考文献

- ・ 鴨武彦 (1985) 『国際統合理論の研究』 (早稲田大学出版部)
- ・ Adler, Emanuel, and Barnett, Michael (eds.) (1998) *Security Communities* (Cambridge: Cambridge University Press).
- ・ Deutsch, Karl W., et al. (1957) *Political Community and the North Atlantic Area: International Organization in the light of historical experience* (Princeton University Press, 1957; reprinted, Westport, CT: Greenwood Press, 1969).
- ・ Fawcett, Louise, and Hurrell, Andrew (eds.) (1995) *Regionalism in World Politics* (Oxford University Press) [菅英輝・栗栖薫子監訳『地域主義と国際秩序』九州大学出版会、1999年]
- ・ Haas, Ernst B. (1958/1968) *The Uniting of Europe: Political, Social, and Economic Forces, 1950–1957* (Stanford University Press, Stanford, 1958; reissued with a new Preface, 1968).
- ・ Mattli, Walter (1999) *The Logic of Regional Integration: Europe and Beyond* (Cambridge University Press).
- ・ Nye, Joseph S. (1971/1987) *Peace in Parts: Integration and Conflict in Regional Organization* (Boston: Little, Brown and Company, 1971; reissued with a new Preface by University Press of America, 1987).
- ・ Antje, Wiener, and Diez, Thomas (eds.) (2009) *European Integration Theory* (Oxford University Press) [東野篤子訳『ヨーロッパ統合の理論』勁草書房、2010年]

■ 備考・関連 URL

国際関係研究 (大学院政治学研究科・政治学コース)、国際政治学概説 (同・国際政治経済学コース)、地域統合論 (同・ジャーナリズムコース)、欧州統合理論の研究 (オープン教育センター設置「大学院 EU・欧州統合研究テーマカレッジ」科目) との合併授業。授業運営に際しては、Course N@vi の機能を適宜利用する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
信仰と思想 (前編)	森 由利亜	春学期	2	金 3 時限

■ 副題：英語論文から学ぶ清朝全真教の実態

■ 授業概要

中国近世の道教として知られる全真教は、12世紀後半に金朝の支配下にある北中国で王重陽によって創始され、現在では南中国にもまたがってその伝統は継承されている。しかし、一般にこの宗教伝統の歴史は最初期ばかりが知られていて、明・清時代の歴史は知られていない。ただ、最近は

何人かの学者を中心に、清朝の全真教についてはようやく研究が進んできた。イタリア出身の全真教研究者であるモニカ・エスポジトも、清朝全真教研究の最先端にいた一人であるが、大変残念なことに昨年3月に逝去された。この授業では、エスポジトの英語による論文を読みながら、清朝全真教について考えてみたい。清朝全真教を考えることは、現在の中国の宗教伝統を考えることにも役立つはずである。教材はすべてプリントで配布する。もしエスポジトのものを早めに読み終われば、同じく全真教研究者として活躍するヴァンサン・ゴサールの英語論文を読む。

■ 授業の到達目標

目標として、ひとつには清朝期における全真教のありようへの理解を深めることを目標とする。もうひとつは、英語で中国宗教に関わる学術論文を読むことに慣れるということがある。

■ 成績評価方法

平常点のみ勘案します。

■ 授業計画

受講生には、毎回課題論文の指定した章をあらかじめ全員読んできていただき、それをもとに内容を総括しながらディスカッションする形式をとる。ただし、受講生の人数や習熟度により、おのずから進度を調節する必要があるので、回数毎の計画は定めない。

■ 教科書

(1) ESPOSITO, Monica (莫尼) “Longmen Taoism in Qing China: Doctrinal Ideal and Local Reality.” Journal of Chinese Religions, 29, 2001, pp. 191-231.

(2) “The Longmen School and Its Controversial History During the Qing Dynasty.” In John Lagerway, ed. Religion a

■ 参考文献

モニカ・エスポジト「清代における金蓋山龍門派の設立と金華宗旨」『中国宗教文献研究』京都大学人文科学研究所京都、2005年、239-264頁。

モニカ・エスポジト「清代道教と密教」 麥谷邦夫編『三教交渉論叢』京都大学京都大学人文科学研究所、2005年、289-342頁。

森由利亜「呂洞賓と全真教—清朝湖州金蓋山の事例を中心に」、砂山稔・尾崎正治・菊池章太編『講座・道教』1 〈道教の神々と経典〉、雄山閣出版、1999年、242-264頁。ほか。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
信仰と思想（後編）	永富 青地	秋学期	2	木3時限

■ 副題：陽明学の世界

■ 授業概要

中国明代、そして日本の江戸時代において大きな影響力を有していた陽明学は、決して宗教ではない。しかしながら、王守仁（陽明）およびその弟子たちが共有していた「良知」への強烈的な確信は、確かに信仰と呼ぶにふさわしいものであろう。またそれは、中国思想のバックボーンであった性善説の一つの頂点なのである。

本演習では、陽明の語録として中国および江戸期以降の日本において広く読まれた『伝習録』を読むことにより、陽明学の精髓を探っていきたい。

■ 授業の到達目標

『伝習録』の読解により、陽明学の内容を理解することはもちろん、明代の口語文（古白話）に対する理解も深めていきたい。

■ 成績評価方法

平常点評価割合100%

毎回指名して読解してもらい、その結果を成績とする。

そのため予習は欠かせない。

■ 授業計画

第1回：徐愛との出会い1（『伝習録』序文）

第2回：徐愛との出会い2

第3回：上巻における徐愛との会話1（初期の陽明学）

第4回：上巻における徐愛との会話2

第5回：上巻における徐愛との会話3

第6回：抜本塞源論1（中巻における強敵との対決）

第7回：抜本塞源論2

第8回：抜本塞源論3

第9回：抜本塞源論4

第10回：抜本塞源論5

第11回：良知とは何か1（下巻における陽明学の完成）

第12回：良知とは何か2

第13回：無善無悪説の衝撃1（王畿と銭徳洪）

第14回：無善無悪説の衝撃2

第15回：無善無悪説の衝撃3

■ 教科書

『伝習録』和刻本のコピーを配布する。

■ 参考文献

授業の各回において紹介する。

さしあたっては、島田虔次『朱子学と陽明学』を推薦する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
民族と人類（前編）	城倉 正祥	春学期	2	月4時限

■ 副題：西嶋定生を読む

■ 授業概要

現在のグローバル社会の中で、歴史学研究における「国際感覚」の重要性も高まっている。本講

義では、日本が激動する東アジア情勢の中で、対外的に国家としての体裁を整えていく古墳時代～古代に注目し、日本と東アジア各国との「関係性」を追求する諸論点について、受講者自身の専門分野に引きつけて議論を重ねる。その導入として、西嶋定生の中国と日本の関係をダイナミックに論じた著作（西嶋定生2002『西嶋定生東アジア史論集』第3巻・第4巻 岩波書店）を講読する。中華帝国を頂点とする東アジアの階層秩序（冊封体制）をキーワードとして、日本が「初期国家」あるいは「律令国家」を築き上げていく歴史的な過程を東アジアの視野で考えてみたい。

具体的には、西嶋定生の著作の講読によって惹起された受講者の問題意識、及び各自の専門分野に関連させた論点を抽出し、文献史料・考古資料の操作を重ね、その成果を発表していくゼミ形式で講義を進める。大学院生である受講者の積極的な議論によって論点を深め、授業を通じて受講者各自が必ず1本の論文として公表できるレベルのレポートを作成することを目的として指導を行う。

■ 授業の到達目標

西嶋定生の著作を講読する中で生まれた問題意識を各自の専門分野で応用する訓練を重ねる。文献史料・考古資料を駆使して、東アジアの視点でどのようにダイナミックに歴史を復原するべきか、受講者の「知的感性」と「国際感覚」を磨く。自己の目の前にある資料がどのような形で東アジアの歴史的な流れの中に位置付けられるのか、文字やモノに通底する普遍的意義の「発見」こそが歴史学の醍醐味である。文献の講読、史料・資料の調査、そしてダイナミックな仮説とその検証、研究者としてのテクニックとセンスを育てることが本講義の到達目標である。

■ 成績評価方法

試験割合 0 %

試験は実施しない。

レポート割合 40 %

最終授業で提出するレポートを評価対象とする。提出レポートは論文形式とし、完成原稿で B 5 版20枚を目安として作成・提出すること。

平常点評価割合 60 %

出席状況、及び議論への参加態度によって評価する。

■ 授業計画

第1回：オリエンテーション（講義内容・成績評価の説明）

第2回：専門分野の紹介

（受講者各自の専門分野について紹介をしてもらい、各自の問題意識の所在を確認する）

第3回：テキストの講読（論集3）

第4回：テキストの講読（論集3）

第5回：テキストの講読（論集4）

第6回：テキストの講読（論集4）

第7回：研究テーマの決定（講読を通じて各自がテーマを決める）

第8回：分析方法の確認（文献史料・考古資料の分析方法について講義する）

第9回：発表方法の確認（パワーポイント・レジュメ作成方法について講義する）

第10回：パワーポイントによる発表・議論

第11回：パワーポイントによる発表・議論

第12回：パワーポイントによる発表・議論

第13回：レポート図版のチェック

(受講者がレポートを論文形式で示し、その図版について直すべき点を議論する)

第14回：レポート文章のチェック

(受講者がレポートを論文形式で示し、その文章について直すべき点を議論する)

第15回：レポート提出・講評

■ 教科書

西嶋定生 2002『西嶋定夫東アジア史論集』第3巻・第4巻 岩波書店

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
民族と人類（後編）	工藤 元男	秋学期	2	月3時限

■ 副題：栗原朋信を読む

■ 授業概要

栗原朋信は早稲田大学文学部で長い間教鞭をとり、シルクロード史研究で有名な松田寿男とともに早稲田大学の東洋史学を確立した学者であり、戦後日本の東洋史学における東アジア古代国際関係史研究の基礎を作ったことで著名である。

本演習ではその名著『秦漢史の研究』（吉川弘文館、1960）をテキストに使用し、東アジア世界の形成過程、その秩序構造について学習する。

演習にあたっては、毎回、担当者がレジュメを作成し、報告し、それをめぐって議論する。とくに最近の考古資料の増加によって、その所論に訂正も生じているので、新たな資料を組み込むことで、今後さらにどのような展望がみえてくるかも併せて考えてみたい。

■ 授業の到達目標

古代東アジア世界のキーワードである、皇帝、天子、内臣、外臣、客臣等の概念を理解させ、それらの概念をとくに漢と南越の関係史に重ねることで、東アジア古代国際関係史を考えさせる。

■ 成績評価方法

平常点評価割合100%

毎回の報告の内容によって評価する。

■ 授業計画

第1回：栗原朋信と秦漢史研究に関するガイダンス

第2回：講読／秦記について

第3回：講読／始皇帝という名号について

第4回：講読／始皇帝の泰山封禪（1）

第5回： 〃 （2）

第6回：講読／秦水徳説の批判（1）

第7回： 〃 （2）

第8回：講読／秦の郊祀と宗廟の祭祀

- 第9回：講読／印璽小論
 第10回：講読／帝室の璽印
 第11回：講読／伝国璽に関する疑い
 第12回：講読／皇后の璽
 第13回：講読／皇后・皇太后の璽
 第14回：講読／皇太子の印
 第15回：これまでのまとめ

■ 教科書

栗原朋信『秦漢史の研究』（吉川弘文館、1960年）

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
演劇とその周辺（入門）	八木 斉子	春学期	2	水 1 時限

■ 副題：19世紀終盤から現在に至るヨーロッパ演劇および関連分野

■ 授業概要

「19世紀終盤から現在に至るヨーロッパ演劇」という枠組みを大前提とするが、事前の知識は問わない。各受講者は以下に挙げる範疇から1つ選んでテーマを設定し、それを1学期かけて追っていく。

- 1) 演劇におけるジャンル
- 2) オリジナル作品から翻案へ
- 3) 演劇、映画、テレビ
- 4) 演劇・映像における音（言語音、音楽、効果音）
- 5) 演劇・映像における空間と時間

授業では、各受講者のテーマに関連のある文献と視聴覚資料をかみ合わせで検討する。文献は主に英語によるものとなろうが、各人の英語力を考慮する。それらの検討をふまえつつ各受講者は自ら分析を進め、その進行を報告し、最終的に論文を仕上げる。

■ 授業の到達目標

聴覚や視覚を駆使した分析と「文字で書かれたもの」の分析とは何がどのように異なるのか、各人が自分なりの答えを出す。英語による文献・視聴覚資料に慣れる。

■ 成績評価方法

平常点評価割合40%

作品の鑑賞と分析、文献の検討において積極的・客観的な発言がみられるか。

その他割合60%

論文の内容と形式が共に整っているか。

■ 授業計画

第1回：講義への導入。各自、テーマの決定に向けて担当教員との相談を開始する。

第2回：（導入として）文献の検討。作品の鑑賞と分析。

第3回：(導入として) 同上

第4回：テーマを決定のうえ、今後の分析方法について簡単に報告する。

第5回：各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第6回：同上

第7回：進行中の分析について報告する。

第8回：各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第9回：同上

第10回：進行中の分析について報告する。

第11回：各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第12回：同上

第13回：執筆中の論文について報告する。

第14回：論文の提出と報告を行う。

第15回：論文の講評。まとめと展望。

■ 教科書

担当教員が準備する。

■ 参考文献

授業中に紹介する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
演劇とその周辺（発展）	八木 斉子	秋学期	2	水 1 時限

■ 副題：19世紀終盤から現在に至るヨーロッパ演劇および関連分野

■ 授業概要

春学期と同様、「19世紀終盤から現在に至るヨーロッパ演劇」という枠組みを大前提とする。各受講者は以下に挙げる範疇から1つ選んでテーマを設定し、それを1学期かけて追っていく。

- 1) 演劇におけるジャンル
- 2) オリジナル作品から翻案へ
- 3) 演劇、映画、テレビ
- 4) 演劇・映像における音（言語音、音楽、効果音）
- 5) 演劇・映像における空間と時間

授業では、春学期と同様、各受講者のテーマに関連のある文献と視聴覚資料をかみ合わせて検討する。文献は主に英語によるものとなろうが、各人の英語力を考慮する。それらの検討をふまえて各受講者は自ら分析を進め、その進行を報告し、最終的に論文を仕上げる。春学期よりも緻密な分析を求めるため、入門科目は履修済みであることが望ましい。

■ 授業の到達目標

聴覚や視覚を駆使した分析と「文字で書かれたもの」の分析とは何がどのように異なるのか、緻密な実践をつうじて客観的に説明することができる。

■ 成績評価方法

平常点評価割合40%

作品の鑑賞と分析、文献の検討において積極的・客観的な発言がみられるか。

その他割合60%

論文の内容と形式が共に整い、春学期のレベルにくらべて緻密なものとなっているか。

■ 授業計画

第1回：春学期を簡単に振り返る。各自、今期のテーマ決定へ向けて担当教員との相談を開始する。

第2回：（導入として）文献の検討。作品の鑑賞と分析。

第3回：（導入として）同上

第4回：テーマを決定のうえ、今後の分析方法について簡単に報告する。

第5回：各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第6回：同上

第7回：進行中の分析について報告する。

第8回：各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第9回：同上

第10回：進行中の分析について報告する。

第11回：各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第12回：同上

第13回：執筆中の論文について報告する。

第14回：論文の提出と報告を行う。

第15回：論文の講評。まとめと展望。

■ 教科書

担当教員が準備する。

■ 参考文献

授業中に紹介する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバス

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

2012年度 大学院人間科学研究科学科目配当表

頁	履 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担 当 教 員	備 考
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導 A	—	前期	無	その他	天野 正博	
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導 B	—	後期	無	その他	天野 正博	
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	人口学研究指導 A	—	前期	無	その他	阿藤 誠	
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	人口学研究指導 B	—	後期	無	その他	阿藤 誠	
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	生物圏生態学研究指導 A	—	前期	無	その他	太田 俊二	
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	生物圏生態学研究指導 B	—	後期	無	その他	太田 俊二	
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導 A	—	前期	無	その他	森川 靖	
54	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導 B	—	後期	無	その他	森川 靖	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導 A	—	前期	無	その他	鳥越 皓之	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導 B	—	後期	無	その他	鳥越 皓之	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	社会人類学研究指導 A	—	前期	無	その他	矢野 敬生	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	社会人類学研究指導 B	—	後期	無	その他	矢野 敬生	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	水域環境学研究指導 A	—	前期	無	その他	井内 美郎	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	水域環境学研究指導 B	—	後期	無	その他	井内 美郎	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	地域着源論研究指導 A	—	前期	無	その他	柏 雅之	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	地域着源論研究指導 B	—	後期	無	その他	柏 雅之	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	大気環境科学研究指導 A	—	前期	無	その他	松本 淳	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	大気環境科学研究指導 B	—	後期	無	その他	松本 淳	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	動物行動生態学研究指導 A	—	前期	無	その他	三浦 慎悟	
55	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	地域・地球環境科学	動物行動生態学研究指導 B	—	後期	無	その他	三浦 慎悟	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	学習動機づけ論研究指導 A	—	前期	無	その他	青柳 肇	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	学習動機づけ論研究指導 B	—	後期	無	その他	青柳 肇	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	発達行動学研究指導 A	—	前期	無	その他	根ヶ山 光一	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	発達行動学研究指導 B	—	後期	無	その他	根ヶ山 光一	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	建築計画学研究指導 A	—	前期	無	その他	佐野 友紀	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	建築計画学研究指導 B	—	後期	無	その他	佐野 友紀	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	建築環境学研究指導 A	—	前期	無	その他	小島 隆矢	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	建築環境学研究指導 B	—	後期	無	その他	小島 隆矢	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	環境デザイン研究指導 A	—	前期	無	その他	佐藤 将之	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	人間行動・環境科学	環境デザイン研究指導 B	—	後期	無	その他	佐藤 将之	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	環境心理・環境デザイン研究指導 A	—	前期	無	その他	河西 宏祐	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	環境心理・環境デザイン研究指導 B	—	後期	無	その他	河西 宏祐	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導 A	—	前期	無	その他	蔵持 不三也	
56	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導 B	—	後期	無	その他	蔵持 不三也	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導 A	—	前期	無	その他	蔵持 不三也	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導 B	—	後期	無	その他	蔵持 不三也	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導 A	—	前期	無	その他	店田 廣文	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導 B	—	後期	無	その他	店田 廣文	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	移住論研究指導 A	—	前期	無	その他	森本 豊富	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	移住論研究指導 B	—	後期	無	その他	森本 豊富	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	家族社会学研究指導 A	—	前期	無	その他	池岡 義孝	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	家族社会学研究指導 B	—	後期	無	その他	池岡 義孝	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	都市社会学研究指導 A	—	前期	無	その他	臼井 恒夫	
57	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	都市社会学研究指導 B	—	後期	無	その他	臼井 恒夫	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	科学史・科学論研究指導 A	—	前期	無	その他	加藤 茂生	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	科学史・科学論研究指導 B	—	後期	無	その他	加藤 茂生	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	物質文化論研究指導 A	—	前期	無	その他	谷川 章雄	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	物質文化論研究指導 B	—	後期	無	その他	谷川 章雄	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	表象文化論研究指導 A	—	前期	無	その他	中村 要	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	表象文化論研究指導 B	—	後期	無	その他	中村 要	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	政治社会文化論研究指導 A	—	前期	無	その他	村上 公子	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	政治社会文化論研究指導 B	—	後期	無	その他	村上 公子	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	技術文化論研究指導 A	—	前期	無	その他	余語 琢磨	
58	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	技術文化論研究指導 B	—	後期	無	その他	余語 琢磨	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	地域文化論研究指導 A	—	前期	無	その他	竹中 宏子	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	文化・社会環境科学	地域文化論研究指導 B	—	後期	無	その他	竹中 宏子	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	生体機能学研究指導 A	—	前期	無	その他	今泉 和彦	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	生体機能学研究指導 B	—	後期	無	その他	今泉 和彦	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導 A	—	前期	無	その他	山内 兄人	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導 B	—	後期	無	その他	山内 兄人	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導 A	—	前期	無	その他	鈴木 秀次	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導 B	—	後期	無	その他	鈴木 秀次	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	統合生理学研究指導 A	—	前期	無	その他	永島 計	
59	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	統合生理学研究指導 B	—	後期	無	その他	永島 計	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	健康医学研究指導 A	—	前期	無	その他	河手 典彦	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	健康医学研究指導 B	—	後期	無	その他	河手 典彦	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導 A	—	前期	無	その他	竹中 晃二	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導 B	—	後期	無	その他	竹中 晃二	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	医療人類学研究指導 A	—	前期	無	その他	辻内 琢也	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	医療人類学研究指導 B	—	後期	無	その他	辻内 琢也	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	分子神経科学研究指導 A	—	前期	無	その他	榊原 伸一	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	分子神経科学研究指導 B	—	後期	無	その他	榊原 伸一	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	基礎老化学研究指導 A	—	前期	無	その他	千葉 卓哉	
60	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康・生命医科学	基礎老化学研究指導 B	—	後期	無	その他	千葉 卓哉	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	福祉産業学研究指導 A	—	前期	無	その他	可部 明克	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	福祉産業学研究指導 B	—	後期	無	その他	可部 明克	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	福祉産業学研究指導 A	—	前期	無	その他	加瀬 裕子	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	福祉産業学研究指導 B	—	後期	無	その他	加瀬 裕子	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	高齢社会福祉学研究指導 A	—	前期	無	その他	土田 友章	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	高齢社会福祉学研究指導 B	—	後期	無	その他	土田 友章	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	バイオエシックス研究指導 A	—	前期	無	その他	吉村 正	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	バイオエシックス研究指導 B	—	後期	無	その他	吉村 正	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論研究指導 A	—	前期	無	その他	吉村 正	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論研究指導 B	—	後期	無	その他	吉村 正	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	社会保険政策論研究指導 A	—	前期	無	その他	植村 尚史	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	社会保険政策論研究指導 B	—	後期	無	その他	植村 尚史	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	予防医学研究指導 A	—	前期	無	その他	町田 和彦	
61	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	予防医学研究指導 B	—	後期	無	その他	町田 和彦	
62	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	幼少児福祉教育論研究指導 A	—	前期	無	その他	前橋 明	
62	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	幼少児福祉教育論研究指導 B	—	後期	無	その他	前橋 明	
62	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	緩和医療学・臨牀死生学研究指導 A	—	前期	無	その他	小野 充一	
62	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	緩和医療学・臨牀死生学研究指導 B	—	後期	無	その他	小野 充一	
62	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	児童家庭福祉論研究指導 A	—	前期	無	その他	川名 はつ子	
62	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	児童家庭福祉論研究指導 B	—	後期	無	その他	川名 はつ子	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	精神保健福祉論研究指導 A	—	前期	無	その他	田中 英樹	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	精神保健福祉論研究指導 B	—	後期	無	その他	田中 英樹	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	健康福祉支援工学研究指導 A	—	前期	無	その他	島山 卓朗	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	健康福祉支援工学研究指導 B	—	後期	無	その他	島山 卓朗	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	健康福祉管理論研究指導 A	—	前期	無	その他	扇原 淳	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	健康福祉管理論研究指導 B	—	後期	無	その他	扇原 淳	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	ソーシャルワーク論研究指導 A	—	前期	無	その他	岩崎 香	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	ソーシャルワーク論研究指導 B	—	後期	無	その他	岩崎 香	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	リハビリテーション科学研究指導 A	—	前期	無	その他	村岡 慶裕	
63	修士 (2 年制)	研究指導 (修士)	健康福祉科学	リハビリテーション科学研究指導 B	—	後期	無	その他	村岡 慶裕	

頁	課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	心身医学研究指導 A	—	前期	無	その他	野村 忍	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	心身医学研究指導 B	—	後期	無	その他	野村 忍	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	認知行動カウニングセラリング学研究指導 A	—	前期	無	その他	根建 金男	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	認知行動カウニングセラリング学研究指導 B	—	後期	無	その他	根建 金男	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	学校カウニングセラリング学研究指導 A	—	前期	無	その他	菅野 純	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	学校カウニングセラリング学研究指導 B	—	後期	無	その他	菅野 純	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導 A	—	前期	無	その他	嶋田 洋徳	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導 B	—	後期	無	その他	嶋田 洋徳	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	産業カウニングセラリング学研究指導 A	—	前期	無	その他	鈴木 伸一	
64	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	産業カウニングセラリング学研究指導 B	—	後期	無	その他	鈴木 伸一	
65	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	臨床心理アセスメント学研究指導 A	—	前期	無	その他	熊野 宏昭	
65	修士(2年制)	研究指導(修士)	臨床心理学	臨床心理アセスメント学研究指導 B	—	後期	無	その他	熊野 宏昭	
65	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	感性認知科学的研究指導 A	—	前期	無	その他	齋藤 美穂	
65	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	感性認知科学的研究指導 B	—	後期	無	その他	齋藤 美穂	
66	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導 A	—	前期	無	その他	石田 敏郎	
66	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導 B	—	後期	無	その他	石田 敏郎	
66	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	福祉工学研究指導 A	—	前期	無	その他	藤本 浩志	
66	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	福祉工学研究指導 B	—	後期	無	その他	藤本 浩志	
66	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	情報処理心理学研究指導 A	—	前期	無	その他	中島 義明	
66	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	情報処理心理学研究指導 B	—	後期	無	その他	中島 義明	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	社会的実践認知科学的研究指導 A	—	前期	無	その他	宮崎 清孝	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	社会的実践認知科学的研究指導 B	—	後期	無	その他	宮崎 清孝	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	心理行動学研究指導 A	—	前期	無	その他	鈴木 晶夫	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	心理行動学研究指導 B	—	後期	無	その他	鈴木 晶夫	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	言語情報科学的研究指導 A	—	前期	無	その他	菊池 英明	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	言語情報科学的研究指導 B	—	後期	無	その他	菊池 英明	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	知識情報科学的研究指導 A	—	前期	無	その他	松居 辰則	
67	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	知識情報科学的研究指導 B	—	後期	無	その他	松居 辰則	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	人間生体機能動能学研究指導 A	—	前期	無	その他	宮崎 正己	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	人間生体機能動能学研究指導 B	—	後期	無	その他	宮崎 正己	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	人間生体機能動能学研究指導 A	—	前期	無	その他	宮崎 正己	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	人間生体機能動能学研究指導 B	—	後期	無	その他	宮崎 正己	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	感覚情報処理学研究指導 A	—	前期	無	その他	百瀬 桂子	(休講)
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	感覚情報処理学研究指導 B	—	後期	無	その他	百瀬 桂子	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	生感心理学研究指導 A	—	前期	無	その他	三嶋 博之	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	生感心理学研究指導 B	—	後期	無	その他	三嶋 博之	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	生態心理学研究指導 A	—	前期	無	その他	三嶋 博之	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	感性認知情報システム	生態心理学研究指導 B	—	後期	無	その他	三嶋 博之	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学研究指導 A	—	前期	無	その他	浅田 匡	
68	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学研究指導 B	—	後期	無	その他	浅田 匡	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論研究指導 A	—	前期	無	その他	岩坪 秀一	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論研究指導 B	—	後期	無	その他	岩坪 秀一	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学的研究指導 A	—	前期	無	その他	金子 孝夫	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学的研究指導 B	—	後期	無	その他	金子 孝夫	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学的研究指導 A	—	前期	無	その他	金子 孝夫	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学的研究指導 B	—	後期	無	その他	金子 孝夫	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学研究指導 A	—	前期	無	その他	金 群	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学研究指導 B	—	後期	無	その他	金 群	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論研究指導 A	—	前期	無	その他	向後 千春	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論研究指導 B	—	後期	無	その他	向後 千春	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論研究指導 A	—	前期	無	その他	スコット ダグラス	
69	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論研究指導 B	—	後期	無	その他	スコット ダグラス	
70	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学研究指導 A	—	前期	無	その他	永岡 慶三	
70	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学研究指導 B	—	後期	無	その他	永岡 慶三	
70	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学的研究指導 A	—	前期	無	その他	西村 昭治	
70	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学的研究指導 B	—	後期	無	その他	西村 昭治	
70	修士(2年制)	研究指導(修士)	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論研究指導 A	—	前期	無	その他	野嶋 栄一郎	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担 当 教 員	備 考
70	修士 (2 年制) 研究指導 (修士)	教育・コミュニケーション情報科学	教育開発論研究指導 B	教育コミュニケーション学研究指導 A	—	後期	無	その他	野崎 栄一郎	
70	修士 (2 年制) 研究指導 (修士)	教育・コミュニケーション情報科学	教育・コミュニケーション学研究指導 B	教育コミュニケーション学研究指導 A	—	前期	無	その他	保崎 則雄	
70	修士 (2 年制) 研究指導 (修士)	教育・コミュニケーション情報科学	教育・コミュニケーション学研究指導 B	情報メディア教育論研究指導 A	—	後期	無	その他	保崎 則雄	
71	修士 (2 年制) 研究指導 (修士)	教育・コミュニケーション情報科学	教育・コミュニケーション学研究指導 B	情報メディア教育論研究指導 A	—	前期	無	その他	森田 裕介	
71	修士 (2 年制) 研究指導 (修士)	教育・コミュニケーション情報科学	教育・コミュニケーション学研究指導 B	情報メディア教育論研究指導 A	—	後期	無	その他	森田 裕介	
71	修士 (2 年制) 研究指導 (修士)	教育・コミュニケーション情報科学	教育・コミュニケーション学研究指導 B	学習環境デザイン論研究指導 B	—	前期	無	その他	尾澤 重知	
71	修士 (2 年制) 研究指導 (修士)	教育・コミュニケーション情報科学	教育・コミュニケーション学研究指導 B	学習環境デザイン論研究指導 B	—	後期	無	その他	尾澤 重知	
72	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境管理計画学演習 (1) A	環境管理計画学演習 (1) A	2	前期	土	2 時限	天野 正博	
72	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境管理計画学演習 (2) A	環境管理計画学演習 (2) A	2	前期	土	3 時限	天野 正博	
72	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境管理計画学演習 (2) B	環境管理計画学演習 (2) B	2	後期	土	3 時限	天野 正博	
73	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	人口学演習 (2) A	人口学演習 (2) A	2	前期	金	4 時限	阿藤 誠	
73	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	人口学演習 (2) B	人口学演習 (2) B	2	後期	金	4 時限	阿藤 誠	
74	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習 (1) A	生物圏生態学演習 (1) A	2	前期	火	1 時限	太田 俊二	
74	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習 (1) B	生物圏生態学演習 (1) B	2	後期	火	1 時限	太田 俊二	
74	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習 (2) A	生物圏生態学演習 (2) A	2	前期	火	2 時限	太田 俊二	
74	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習 (2) B	生物圏生態学演習 (2) B	2	後期	火	2 時限	太田 俊二	
75	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境生態学演習 (1) A	環境生態学演習 (1) A	2	前期	火	1 時限	森川 靖	
75	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境生態学演習 (1) B	環境生態学演習 (1) B	2	後期	火	1 時限	森川 靖	
76	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境生態学演習 (2) A	環境生態学演習 (2) A	2	前期	火	2 時限	森川 靖	
76	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境生態学演習 (2) B	環境生態学演習 (2) B	2	後期	火	2 時限	森川 靖	
76	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境社会学演習 (1) A	環境社会学演習 (1) A	2	前期	金	3 時限	鳥越 皓之	
76	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境社会学演習 (2) A	環境社会学演習 (2) A	2	後期	金	3 時限	鳥越 皓之	
77	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	環境社会学演習 (2) B	環境社会学演習 (2) B	2	前期	金	4 時限	鳥越 皓之	
77	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	社会人類学演習 (1) A	社会人類学演習 (1) A	2	前期	水	1 時限	矢野 敬生	
77	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	社会人類学演習 (2) A	社会人類学演習 (2) A	2	後期	水	1 時限	矢野 敬生	
78	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	社会人類学演習 (2) B	社会人類学演習 (2) B	2	前期	水	2 時限	矢野 敬生	
78	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	社会人類学演習 (2) B	社会人類学演習 (2) B	2	後期	水	2 時限	矢野 敬生	
79	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	水域環境学演習 (1) A	水域環境学演習 (1) A	2	前期	月	3 時限	井内 美郎	
79	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	水域環境学演習 (1) B	水域環境学演習 (1) B	2	後期	月	3 時限	井内 美郎	
80	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	水域環境学演習 (2) A	水域環境学演習 (2) A	2	前期	月	4 時限	井内 美郎	
80	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	水域環境学演習 (2) B	水域環境学演習 (2) B	2	後期	月	4 時限	井内 美郎	
82	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	地域資源論演習 (1) A	地域資源論演習 (1) A	2	前期	月	5 時限	柏 雅之	
82	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	地域資源論演習 (1) B	地域資源論演習 (1) B	2	後期	月	5 時限	柏 雅之	
82	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	地域資源論演習 (2) A	地域資源論演習 (2) A	2	前期	月	6 時限	柏 雅之	
82	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	地域資源論演習 (2) B	地域資源論演習 (2) B	2	後期	月	6 時限	柏 雅之	
83	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	大気環境科学演習 (1) A	大気環境科学演習 (1) A	2	前期	金	1 時限	松本 淳	
83	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	大気環境科学演習 (1) B	大気環境科学演習 (1) B	2	後期	金	1 時限	松本 淳	
84	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	大気環境科学演習 (2) A	大気環境科学演習 (2) A	2	前期	金	2 時限	松本 淳	
84	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	大気環境科学演習 (2) B	大気環境科学演習 (2) B	2	後期	金	2 時限	松本 淳	
85	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	動物行動生態学演習 (1) A	動物行動生態学演習 (1) A	2	前期	火	5 時限	三浦 慎悟	
85	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	動物行動生態学演習 (1) B	動物行動生態学演習 (1) B	2	後期	火	5 時限	三浦 慎悟	
85	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	動物行動生態学演習 (2) A	動物行動生態学演習 (2) A	2	前期	火	6 時限	三浦 慎悟	
85	修士 (2 年制) 演習科目	地域・地球環境科学	動物行動生態学演習 (2) B	動物行動生態学演習 (2) B	2	後期	火	6 時限	三浦 慎悟	
86	修士 (2 年制) 演習科目	人間行動・環境科学	学習動機づけ論演習 (2) A	学習動機づけ論演習 (2) A	2	前期	木	4 時限	青柳 肇	
86	修士 (2 年制) 演習科目	人間行動・環境科学	学習動機づけ論演習 (2) B	学習動機づけ論演習 (2) B	2	後期	木	4 時限	青柳 肇	
86	修士 (2 年制) 演習科目	人間行動・環境科学	発達行動学演習 (1) A	発達行動学演習 (1) A	2	前期	月	1 時限	根ヶ山 光一	
86	修士 (2 年制) 演習科目	人間行動・環境科学	発達行動学演習 (1) B	発達行動学演習 (1) B	2	後期	月	1 時限	根ヶ山 光一	
87	修士 (2 年制) 演習科目	人間行動・環境科学	発達行動学演習 (2) A	発達行動学演習 (2) A	2	前期	月	2 時限	根ヶ山 光一	
87	修士 (2 年制) 演習科目	人間行動・環境科学	発達行動学演習 (2) B	発達行動学演習 (2) B	2	後期	月	2 時限	根ヶ山 光一	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
88	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築計画学演習(1) A	建築計画学演習(1) A	2	前期	木	3時限	佐野 友紀	
88	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築計画学演習(1) B	建築計画学演習(1) B	2	後期	木	3時限	佐野 友紀	
89	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築計画学演習(2) A	建築計画学演習(2) A	2	前期	木	4時限	佐野 友紀	
89	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築計画学演習(2) B	建築計画学演習(2) B	2	後期	木	4時限	佐野 友紀	
90	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築環境学演習(1) A	建築環境学演習(1) A	2	前期	火	1時限	小島 隆矢	
90	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築環境学演習(1) B	建築環境学演習(1) B	2	後期	火	1時限	小島 隆矢	
90	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築環境学演習(2) A	建築環境学演習(2) A	2	前期	火	3時限	小島 隆矢	
90	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	建築環境学演習(2) B	建築環境学演習(2) B	2	後期	火	3時限	小島 隆矢	
91	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	環境心理・環境デザイン演習(1) A	環境心理・環境デザイン演習(1) A	2	前期	月	4時限	佐藤 将之	
91	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	環境心理・環境デザイン演習(1) B	環境心理・環境デザイン演習(1) B	2	後期	月	4時限	佐藤 将之	
92	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	環境心理・環境デザイン演習(2) A	環境心理・環境デザイン演習(2) A	2	前期	月	5時限	佐藤 将之	
92	修士(2年制) 演習科目	人間行動・環境科学	環境心理・環境デザイン演習(2) B	環境心理・環境デザイン演習(2) B	2	後期	月	5時限	佐藤 将之	
93	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	産業職業社会学演習(2) A	産業職業社会学演習(2) A	2	前期	水	1時限	河西 宏祐	
93	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	産業職業社会学演習(2) B	産業職業社会学演習(2) B	2	後期	水	1時限	河西 宏祐	
94	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	文化生態学演習(1) A	文化生態学演習(1) A	2	前期	月	2時限	蔵持 不三也	
94	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	文化生態学演習(1) B	文化生態学演習(1) B	2	後期	月	2時限	蔵持 不三也	
95	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	文化生態学演習(2) A	文化生態学演習(2) A	2	前期	月	3時限	蔵持 不三也	
95	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	文化生態学演習(2) B	文化生態学演習(2) B	2	後期	月	3時限	蔵持 不三也	
95	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(1) A	アジア社会論演習(1) A	2	前期	金	3時限	店田 廣文	
95	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(1) B	アジア社会論演習(1) B	2	後期	金	3時限	店田 廣文	
96	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(2) A	アジア社会論演習(2) A	2	前期	金	4時限	店田 廣文	
96	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(2) B	アジア社会論演習(2) B	2	後期	金	4時限	店田 廣文	
97	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	移住論演習(1) A	移住論演習(1) A	2	前期	火	5時限	森本 豊富	
97	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	移住論演習(1) B	移住論演習(1) B	2	後期	火	5時限	森本 豊富	
98	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	移住論演習(2) A	移住論演習(2) A	2	前期	火	6時限	森本 豊富	
98	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	移住論演習(2) B	移住論演習(2) B	2	後期	火	6時限	森本 豊富	
99	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	家族社会学演習(1) A	家族社会学演習(1) A	2	前期	火	2時限	池岡 義孝	
99	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	家族社会学演習(1) B	家族社会学演習(1) B	2	後期	火	2時限	池岡 義孝	
100	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	家族社会学演習(2) A	家族社会学演習(2) A	2	前期	火	3時限	池岡 義孝	
100	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	家族社会学演習(2) B	家族社会学演習(2) B	2	後期	火	3時限	池岡 義孝	
101	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	都市社会学演習(1) A	都市社会学演習(1) A	2	前期	金	5時限	臼井 恒夫	
101	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	都市社会学演習(1) B	都市社会学演習(1) B	2	後期	金	5時限	臼井 恒夫	
102	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	都市社会学演習(2) A	都市社会学演習(2) A	2	前期	金	6時限	臼井 恒夫	
102	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	都市社会学演習(2) B	都市社会学演習(2) B	2	後期	金	6時限	臼井 恒夫	
103	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(1) A	科学史科学哲学演習(1) A	2	前期	水	6時限	加藤 茂生	
103	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(1) B	科学史科学哲学演習(1) B	2	後期	水	6時限	加藤 茂生	
104	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(2) A	科学史科学哲学演習(2) A	2	前期	火	5時限	加藤 茂生	
104	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(2) B	科学史科学哲学演習(2) B	2	後期	火	5時限	加藤 茂生	
104	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(1) A	日本物質文化論演習(1) A	2	前期	火	2時限	谷川 章雄	
104	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(1) B	日本物質文化論演習(1) B	2	後期	火	2時限	谷川 章雄	
105	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(2) A	日本物質文化論演習(2) A	2	前期	火	3時限	谷川 章雄	
105	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(2) B	日本物質文化論演習(2) B	2	後期	火	3時限	谷川 章雄	
105	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(1) A	フランス表象文化論演習(1) A	2	前期	火	2時限	中村 要	
105	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(1) B	フランス表象文化論演習(1) B	2	後期	火	2時限	中村 要	
106	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(2) A	フランス表象文化論演習(2) A	2	前期	金	2時限	中村 要	
106	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(2) B	フランス表象文化論演習(2) B	2	後期	金	2時限	中村 要	
107	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(1) A	ドイツ政治社会文化論演習(1) A	2	前期	金	3時限	村上 公子	
107	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(1) B	ドイツ政治社会文化論演習(1) B	2	後期	金	3時限	村上 公子	
108	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(2) A	ドイツ政治社会文化論演習(2) A	2	前期	金	2時限	村上 公子	
108	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(2) B	ドイツ政治社会文化論演習(2) B	2	後期	金	2時限	村上 公子	
108	修士(2年制) 演習科目	文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(1) A	技術史・技術文化論演習(1) A	2	前期	月	2時限	糸路 琢磨	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
108	修士(2年制) 演習科目		文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(1) B	2	前期	月	2時限	余語 琢磨	
110	修士(2年制) 演習科目		文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(2) A	2	後期	月	3時限	余語 琢磨	
110	修士(2年制) 演習科目		文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(2) B	2	後期	月	3時限	余語 琢磨	
112	修士(2年制) 演習科目		文化・社会環境科学	ス페인・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) A	2	前期	金	5時限	竹中 宏子	
112	修士(2年制) 演習科目		文化・社会環境科学	ス페인・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) B	2	後期	金	5時限	竹中 宏子	
113	修士(2年制) 演習科目		文化・社会環境科学	ス페인・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) A	2	前期	金	6時限	竹中 宏子	
113	修士(2年制) 演習科目		文化・社会環境科学	ス페인・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) B	2	後期	金	6時限	竹中 宏子	
114	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	生体機能学演習(1) A	2	前期	土	1時限	今泉 和彦	
114	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	生体機能学演習(1) B	2	後期	土	1時限	今泉 和彦	
115	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	生体機能学演習(2) A	2	前期	土	2時限	今泉 和彦	
115	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	生体機能学演習(2) B	2	後期	土	2時限	今泉 和彦	
116	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	神経内分泌学演習(1) A	2	前期	火	2時限	山内 兄人	
116	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	神経内分泌学演習(1) B	2	後期	火	2時限	山内 兄人	
117	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	神経内分泌学演習(2) A	2	前期	火	3時限	山内 兄人	
117	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	神経内分泌学演習(2) B	2	後期	火	3時限	山内 兄人	
117	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(1) A	2	前期	金	3時限	鈴木 秀次	
117	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(1) B	2	後期	金	3時限	鈴木 秀次	
118	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(2) A	2	前期	金	4時限	鈴木 秀次	
118	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(2) B	2	後期	金	4時限	鈴木 秀次	
119	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	統合生理学演習(1) A	2	前期	月	4時限	永島 計	
119	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	統合生理学演習(1) B	2	後期	月	4時限	永島 計	
120	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	統合生理学演習(2) A	2	前期	月	5時限	永島 計	
120	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	統合生理学演習(2) B	2	後期	月	5時限	永島 計	
120	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	健康医学演習(1) A	2	前期	金	1時限	河手 典彦	
120	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	健康医学演習(1) B	2	後期	金	1時限	河手 典彦	
121	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	健康医学演習(2) A	2	前期	金	2時限	河手 典彦	
121	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	健康医学演習(2) B	2	後期	金	2時限	河手 典彦	
122	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	応用健康科学演習(1) A	2	前期	木	5時限	竹中 晃二	
122	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	応用健康科学演習(1) B	2	後期	木	5時限	竹中 晃二	
122	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	応用健康科学演習(2) A	2	前期	火	5時限	竹中 晃二	
122	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	応用健康科学演習(2) B	2	後期	火	5時限	竹中 晃二	
123	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	医療人類学演習(1) A	2	前期	金	3時限	辻内 琢也	
123	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	医療人類学演習(1) B	2	後期	金	3時限	辻内 琢也	
124	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	医療人類学演習(2) A	2	前期	金	4時限	辻内 琢也	
124	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	医療人類学演習(2) B	2	後期	金	4時限	辻内 琢也	
124	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	分子神経科学演習(1) A	2	前期	水	6時限	榑原 伸一	
124	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	分子神経科学演習(1) B	2	後期	水	6時限	榑原 伸一	
125	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	分子神経科学演習(2) A	2	前期	月	3時限	榑原 伸一	
125	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	分子神経科学演習(2) B	2	後期	月	3時限	榑原 伸一	
125	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	基礎老化学演習(1) A	2	前期	金	2時限	千葉 卓哉	
125	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	基礎老化学演習(1) B	2	後期	金	2時限	千葉 卓哉	
126	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	基礎老化学演習(2) A	2	前期	金	3時限	千葉 卓哉	
126	修士(2年制) 演習科目		健康・生命医科学	基礎老化学演習(2) B	2	後期	金	3時限	千葉 卓哉	
127	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	福祉産業学演習(1) A	2	前期	金	3時限	可部 明克	
127	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	福祉産業学演習(1) B	2	後期	金	3時限	可部 明克	
127	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	福祉産業学演習(2) A	2	前期	金	2時限	可部 明克	
127	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	福祉産業学演習(2) B	2	後期	金	2時限	可部 明克	
128	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	老年社会福祉学演習(1) A	2	前期	木	1時限	加瀬 裕子	
128	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	老年社会福祉学演習(1) B	2	後期	木	1時限	加瀬 裕子	
129	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	老年社会福祉学演習(2) A	2	前期	木	2時限	加瀬 裕子	
129	修士(2年制) 演習科目		健康福祉科学	老年社会福祉学演習(2) B	2	後期	木	3時限	加瀬 裕子	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
129	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	バイオエシックス演習(1) A	2	後期	月	2時限	土田 友章	
129	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	バイオエシックス演習(1) B	2	前期	月	2時限	土田 友章	
130	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	バイオエシックス演習(2) A	2	前期	月	3時限	土田 友章	
130	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	バイオエシックス演習(2) B	2	後期	月	3時限	土田 友章	
130	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(1) A	2	前期	土	1時限	吉村 正	
130	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(1) B	2	後期	土	1時限	吉村 正	
131	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(2) A	2	前期	土	2時限	吉村 正	
131	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(2) B	2	後期	土	2時限	吉村 正	
132	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	社会保障政策論演習(1) A	2	前期	火	4時限	植村 尚史	
132	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	社会保障政策論演習(1) B	2	後期	火	4時限	植村 尚史	
134	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	社会保障政策論演習(2) A	2	前期	火	5時限	植村 尚史	
134	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	社会保障政策論演習(2) B	2	後期	火	5時限	植村 尚史	
135	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	予防医学演習(1) A	2	前期	木	4時限	町田 和彦	
135	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	予防医学演習(1) B	2	後期	木	5時限	町田 和彦	
137	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	予防医学演習(2) A	2	前期	金	5時限	町田 和彦	
137	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	予防医学演習(2) B	2	後期	金	6時限	町田 和彦	
137	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉教育論演習(1) A	2	前期	火	4時限	前橋 明	
137	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉教育論演習(1) B	2	後期	火	4時限	前橋 明	
138	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉教育論演習(2) A	2	前期	火	5時限	前橋 明	
138	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉教育論演習(2) B	2	後期	火	5時限	前橋 明	
139	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	緩和医療学・臨牀死生学演習(1) A	2	前期	木	3時限	小野 充一	
139	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	緩和医療学・臨牀死生学演習(1) B	2	後期	木	3時限	小野 充一	
140	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	緩和医療学・臨牀死生学演習(2) A	2	前期	木	4時限	小野 充一	
140	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	緩和医療学・臨牀死生学演習(2) B	2	後期	木	4時限	小野 充一	
141	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	児童家庭福祉論演習(1) A	2	前期	火	5時限	川名 はつ子	
141	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	児童家庭福祉論演習(1) B	2	後期	火	5時限	川名 はつ子	
142	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	児童家庭福祉論演習(2) A	2	前期	火	6時限	川名 はつ子	
142	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	児童家庭福祉論演習(2) B	2	後期	火	6時限	川名 はつ子	
143	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	精神保健福祉論演習(1) A	2	前期	月	4時限	田中 英樹	
143	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	精神保健福祉論演習(1) B	2	後期	月	4時限	田中 英樹	
144	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	精神保健福祉論演習(2) A	2	前期	月	5時限	田中 英樹	
144	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	精神保健福祉論演習(2) B	2	後期	月	5時限	田中 英樹	
145	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉支援工学演習(1) A	2	前期	金	2時限	畠山 卓朗	
145	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉支援工学演習(1) B	2	後期	金	2時限	畠山 卓朗	
145	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉支援工学演習(2) A	2	前期	金	3時限	畠山 卓朗	
145	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉支援工学演習(2) B	2	後期	金	3時限	畠山 卓朗	
146	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉管理論演習(1) A	2	前期	火	4時限	扇原 淳	
146	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉管理論演習(1) B	2	後期	火	4時限	扇原 淳	
147	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉管理論演習(2) A	2	前期	火	5時限	扇原 淳	
147	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉管理論演習(2) B	2	後期	火	5時限	扇原 淳	
148	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	ソーシャルワーク論演習(1) A	2	前期	金	4時限	岩崎 香	
148	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	ソーシャルワーク論演習(1) B	2	後期	金	4時限	岩崎 香	
148	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	ソーシャルワーク論演習(2) A	2	前期	金	5時限	岩崎 香	
148	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	ソーシャルワーク論演習(2) B	2	後期	金	5時限	岩崎 香	
149	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	リハビリテーション科学演習(1) A	2	前期	月	5時限	村岡 慶裕	
149	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	リハビリテーション科学演習(1) B	2	後期	月	5時限	村岡 慶裕	
150	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	リハビリテーション科学演習(2) A	2	前期	月	6時限	村岡 慶裕	
150	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	リハビリテーション科学演習(2) B	2	後期	月	6時限	村岡 慶裕	
151	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心身医学演習(1) A	2	前期	月	2時限	野村 忍	
151	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心身医学演習(1) B	2	後期	月	2時限	野村 忍	
151	修士(2年制) 演習科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心身医学演習(2) A	2	前期	月	5時限	野村 忍	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
151	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	心身医学演習 (2) B	2	後期	月	6 時限	野村 忍	
152	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習 (1) A	2	前期	月	4 時限	根建 金男	
152	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習 (1) B	2	後期	月	4 時限	根建 金男	
153	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習 (2) A	2	前期	月	5 時限	根建 金男	
153	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習 (2) B	2	後期	月	5 時限	根建 金男	
153	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	学校カウンセリング学演習 (1) A	2	前期	月	4 時限	菅野 純	
153	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	学校カウンセリング学演習 (1) B	2	後期	月	4 時限	菅野 純	
154	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	学校カウンセリング学演習 (2) A	2	前期	月	3 時限	菅野 純	
154	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	学校カウンセリング学演習 (2) B	2	後期	月	3 時限	菅野 純	
155	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	行動臨床心理学演習 (1) A	2	前期	月	4 時限	嶋田 洋徳	
155	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	行動臨床心理学演習 (1) B	2	後期	月	4 時限	嶋田 洋徳	
155	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	行動臨床心理学演習 (2) A	2	前期	月	5 時限	嶋田 洋徳	
155	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	行動臨床心理学演習 (2) B	2	後期	月	5 時限	嶋田 洋徳	
156	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	産業カウンセリング学演習 (1) A	2	前期	月	4 時限	鈴木 伸一	
156	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	産業カウンセリング学演習 (1) B	2	後期	月	4 時限	鈴木 伸一	
157	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	産業カウンセリング学演習 (2) A	2	前期	月	5 時限	鈴木 伸一	
157	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	産業カウンセリング学演習 (2) B	2	後期	月	5 時限	鈴木 伸一	
158	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	臨床心理アセスメント学演習 (1) A	2	前期	月	4 時限	鈴木 伸一	
158	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	臨床心理アセスメント学演習 (1) B	2	後期	月	4 時限	熊野 宏昭	
159	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	臨床心理アセスメント学演習 (2) A	2	前期	月	5 時限	熊野 宏昭	
159	修士 (2 年制) 演習科目	臨床心理学	臨床心理学	臨床心理アセスメント学演習 (2) B	2	後期	月	5 時限	熊野 宏昭	
159	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	感性認知科学演習 (1) A	2	前期	火	4 時限	齋藤 美穂	
159	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	感性認知科学演習 (1) B	2	後期	火	4 時限	齋藤 美穂	
161	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	感性認知科学演習 (2) A	2	前期	火	5 時限	齋藤 美穂	
161	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	感性認知科学演習 (2) B	2	後期	火	5 時限	齋藤 美穂	
161	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	安全人間工学演習 (1) A	2	前期	火	4 時限	石田 敏郎	
161	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	安全人間工学演習 (1) B	2	後期	火	4 時限	石田 敏郎	
162	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	安全人間工学演習 (2) A	2	前期	火	5 時限	石田 敏郎	
162	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	安全人間工学演習 (2) B	2	後期	火	5 時限	石田 敏郎	
163	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	福祉工学演習 (1) A	2	前期	月	3 時限	藤本 浩志	
163	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	福祉工学演習 (1) B	2	後期	月	3 時限	藤本 浩志	
164	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	福祉工学演習 (2) A	2	前期	火	1 時限	藤本 浩志	
164	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	福祉工学演習 (2) B	2	後期	火	1 時限	藤本 浩志	
165	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	情報処理心理学演習 (1) A	2	前期	火	2 時限	中島 義明	
165	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	情報処理心理学演習 (1) B	2	後期	火	2 時限	中島 義明	
165	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	情報処理心理学演習 (2) A	2	前期	火	3 時限	中島 義明	
165	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	情報処理心理学演習 (2) B	2	後期	火	3 時限	中島 義明	
166	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習 (1) A	2	前期	月	2 時限	宮崎 清孝	
166	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習 (1) B	2	後期	月	2 時限	宮崎 清孝	
167	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習 (2) A	2	前期	月	3 時限	宮崎 清孝	
167	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習 (2) B	2	後期	月	3 時限	宮崎 清孝	
168	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	心理行動学演習 (1) A	2	前期	月	1 時限	鈴木 晶夫	
168	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	心理行動学演習 (1) B	2	後期	月	1 時限	鈴木 晶夫	
168	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	心理行動学演習 (2) A	2	前期	水	1 時限	鈴木 晶夫	
168	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	心理行動学演習 (2) B	2	後期	水	1 時限	鈴木 晶夫	
169	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	言語情報科学演習 (1) A	2	前期	木	4 時限	菊池 英明	
169	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	言語情報科学演習 (1) B	2	後期	木	4 時限	菊池 英明	
169	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	言語情報科学演習 (2) A	2	前期	木	5 時限	菊池 英明	
169	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	言語情報科学演習 (2) B	2	後期	木	5 時限	菊池 英明	
170	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	知識情報科学演習 (1) A	2	前期	金	2 時限	松居 辰則	
170	修士 (2 年制) 演習科目	感性認知情報システム	感性認知情報システム	知識情報科学演習 (1) B	2	後期	金	2 時限	松居 辰則	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
172	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	知識情報科学演習 (2) A	2	前期	金	3 時限	松居 辰則	
172	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	知識情報科学演習 (2) B	2	後期	金	3 時限	松居 辰則	
174	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習 (1) A	2	前期	水	2 時限	宮崎 正己	
174	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習 (1) B	2	後期	水	2 時限	宮崎 正己	
174	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習 (2) A	2	前期	水	3 時限	宮崎 正己	
174	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習 (2) B	2	後期	水	3 時限	宮崎 正己	
175	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	感覚情報処理学演習 (1) A	2	前期	木	1 時限	百瀬 桂子 (休講)	
175	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	感覚情報処理学演習 (2) A	2	前期	木	2 時限	百瀬 桂子 (休講)	
175	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	感覚情報処理学演習 (2) B						
176	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	生体心理学演習 (1) A	2	前期	金	4 時限	三嶋 博之 (休講)	
176	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	生体心理学演習 (1) B	2	後期	金	4 時限	三嶋 博之	
177	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	生体心理学演習 (2) A	2	前期	金	5 時限	三嶋 博之	
177	修士 (2 年制)	演習科目	感性認知情報システム	生体心理学演習 (2) B	2	後期	金	5 時限	三嶋 博之	
177	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学演習 (1) A	2	前期	火	4 時限	浅田 匡	
177	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学演習 (1) B	2	後期	火	4 時限	浅田 匡	
179	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学演習 (2) A	2	前期	火	5 時限	浅田 匡	
179	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学演習 (2) B	2	後期	火	5 時限	浅田 匡	
180	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論演習 (1) A	2	前期	水	1 時限	岩坪 秀一	
180	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論演習 (1) B	2	後期	水	1 時限	岩坪 秀一	
181	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論演習 (2) A	2	前期	水	2 時限	岩坪 秀一	
181	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論演習 (2) B	2	後期	水	2 時限	岩坪 秀一	
182	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学演習 (1) A	2	前期	木	1 時限	金子 孝夫	
182	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学演習 (1) B	2	後期	木	1 時限	金子 孝夫	
182	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学演習 (2) A	2	前期	木	2 時限	金子 孝夫	
182	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学演習 (2) B	2	後期	木	2 時限	金子 孝夫	
183	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学演習 (1) A	2	前期	無	オンデマンド	金 群	
183	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学演習 (1) B	2	後期	無	オンデマンド	金 群	
184	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学演習 (2) A	2	前期	無	オンデマンド	金 群	
184	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学演習 (2) B	2	後期	無	オンデマンド	金 群	
185	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論演習 (1) A	2	前期	木	6 時限	向後 千春	
185	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論演習 (1) B	2	後期	木	6 時限	向後 千春	
186	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論演習 (2) A	2	前期	木	7 時限	向後 千春	
186	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論演習 (2) B	2	後期	木	7 時限	向後 千春	
186	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論演習 (1) A	2	前期	金	2 時限	スコット ダグラス	
186	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論演習 (1) B	2	後期	金	2 時限	スコット ダグラス	
187	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論演習 (2) A	2	前期	金	3 時限	スコット ダグラス	
187	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論演習 (2) B	2	後期	金	3 時限	スコット ダグラス (休講)	
	修士 (2 年制)	演習科目	教育情報工学演習 (1) A							
	修士 (2 年制)	演習科目	教育情報工学演習 (1) B							
	修士 (2 年制)	演習科目	教育情報工学演習 (2) A							
	修士 (2 年制)	演習科目	教育情報工学演習 (2) B							
188	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学演習 (1) A	2	前期	無	オンデマンド	西村 昭治 (休講)	
188	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学演習 (1) B	2	後期	無	オンデマンド	西村 昭治	
189	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学演習 (2) A	2	前期	無	オンデマンド	西村 昭治	
189	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学演習 (2) B	2	後期	無	オンデマンド	西村 昭治	
190	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論演習 (1) A	2	前期	木	2 時限	野嶋 栄一郎	
190	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論演習 (1) B	2	後期	木	2 時限	野嶋 栄一郎	
190	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論演習 (2) A	2	前期	木	3 時限	野嶋 栄一郎	
190	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論演習 (2) B	2	後期	木	3 時限	野嶋 栄一郎	
191	修士 (2 年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育コミュニケーション科学演習 (1) A	2	前期	火	1 時限	保崎 則雄	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
191	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	教育コミュニケーション学演習(1) B	2	後期	火	1時限	保崎 則雄	
192	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	教育コミュニケーション学演習(2) A	2	前期	火	2時限	保崎 則雄	
192	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	教育コミュニケーション学演習(2) B	2	後期	火	2時限	保崎 則雄	
193	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論演習(1) A	2	前期	木	1時限	森田 裕介	
193	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論演習(1) B	2	後期	木	1時限	森田 裕介	
194	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論演習(2) A	2	前期	木	2時限	森田 裕介	
194	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論演習(2) B	2	後期	木	2時限	森田 裕介	
195	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン論演習(1) A	2	前期	金	2時限	尾澤 重知	
195	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン論演習(1) B	2	後期	金	2時限	尾澤 重知	
196	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン論演習(2) A	2	前期	金	3時限	尾澤 重知	
196	修士(2年制) 演習科目		教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン論演習(2) B	2	後期	金	3時限	尾澤 重知	
197	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	環境管理計画学特論	2	後期	木	1時限	天野 正博	
197	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	地球生態学特論	2	後期	金	3時限	太田 俊二	
198	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	環境社会学特論	2	後期			(休講)	
198	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	民族誌学特論	2	後期	金	2時限	鳥越 皓之	
199	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	人間環境変遷特論	2	前期	無	オンデマンド	(休講)	
199	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	地域資源特論	2	前期	月	4時限	井内 善郎	
	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	開発援助実践学特論					(休講)	
	修士(2年制) 講義科目		地域・地球環境科学	大気環境科学特論					(休講)	
200	修士(2年制) 講義科目		人間行動・環境科学	学習動機づけ特論	2	前期	水	1時限	青柳 肇	
200	修士(2年制) 講義科目		人間行動・環境科学	発達科学特論	2	後期	火	6時限	根ヶ山 光一	1年制合同
201	修士(2年制) 講義科目		人間行動・環境科学	建築環境学特論	2	前期	月	2時限	大藪 泰	1年制合同
202	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	産業職業社会学特論	2	前期	火	2時限	小島 隆矢	
202	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	歴史人類学特論	2	後期	木	1時限	河西 宏祐	
203	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	アジア地域研究特論	2	後期	月	4時限	蔵持 不三也	
	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	移民研究特論	2	前期	金	2時限	店田 廣文	
203	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	都市社会学特論	2	前期	火	4時限	(休講)	
203	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	科学史科学哲学特論	2	前期	火	3時限	加藤 茂生	
204	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	フランス表象文化史研究特論	2	前期	火	5時限	中村 要	
205	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	ドイツ近代国民国家特論	2	後期	火	6時限	村上 公子	
205	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	生活文化史研究特論	2	夏季集中	無	その他	木立 雅朗	
206	修士(2年制) 講義科目		文化・社会環境科学	社会学説特論	2	夏季集中	無	その他	西原 和久	
207	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	自然人類学特論	2	夏季集中	無	その他	藤田 尚	
207	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	生体機能学特論	2	前期	無	オンデマンド	今泉 和彦	1年制合同
208	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	神経内分泌学特論	2	前期	火	1時限	山内 兄人	
209	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス特論	2	後期	無	オンデマンド	鈴木 秀次	
209	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	神経機能学特論	2	後期	水	6時限	永島 計	
	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	健康医学特論					(休講)	
210	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	応用健康科学特論	2	後期	無	オンデマンド	竹中 晃二	1年制合同
	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	ヘルスプロモーション特論					(休講)	
210	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	分子神経科学特論	2	後期	金	2時限	神原 伸一	
211	修士(2年制) 講義科目		健康福祉科学	生体計測学特論	2	後期	火	4時限	村岡 慶裕	
	修士(2年制) 講義科目		健康・生命医科学	基礎老化学特論					(休講)	
212	修士(2年制) 講義科目		健康福祉科学	福祉ロボット工学特論	2	後期	火	3時限	可部 明克	
212	修士(2年制) 講義科目		健康福祉科学	老年社会福祉学特論	2	前期	月	3時限	加瀬 裕子	
213	修士(2年制) 講義科目		健康福祉科学	生命医療倫理学特論	2	後期	月	5時限	土田 友章	
	修士(2年制) 講義科目		健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント特論					(休講)	
213	修士(2年制) 講義科目		健康福祉科学	健康福祉管理特論	2	後期	月	3時限	扇原 淳	
214	修士(2年制) 講義科目		健康福祉科学	予防医学特論	2	前期	無	オンデマンド	町田 和彦	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
214	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉教育特論	2	前期	木	2 時限	前橋 明	1 年制合同
215	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	児童家庭福祉特論	2	前期	火	4 時限	川名 はつ子	1 年制合同
216	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	精神保健福祉特論	2	前期	金	3 時限	田中 英樹	
216	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	健康福祉支援工学特論	2	後期	金	4 時限	畠山 卓朗	
217	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	ソーシャルワーク特論	2	後期	木	2 時限	岩崎 香 (休講)	
217	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床死生学特論						
217	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	社会病理学特論	2	後期	月	1 時限	野村 忍	1 年制合同
218	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学特論Ⅱ	2	後期	木	3 時限	佐々木 和義、大月 友	
218	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学特論Ⅱ	2	夏季集中	無	その他	金築 優	
219	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学特論Ⅰ	2	前期	金	1 時限	菅野 純	
219	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学特論Ⅰ	2	後期	水	1 時限	菅野 純	
220	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学特論Ⅰ	2	前期	木	3 時限	熊野 宏昭	
220	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学特論Ⅰ	2	後期	月	3 時限	鈴木 伸一	
221	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学特論Ⅱ	2	前期	月	3 時限	嶋田 洋徳	
221	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	行動療法特論	2	前期	無	オンデマンド	嶋田 洋徳	
222	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学基礎実習Ⅰ A	1	前期	水	5 時限	菅野 純、金築 優	
222	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学基礎実習Ⅰ B	1	後期	水	5 時限	菅野 純、金築 優	
222	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学基礎実習Ⅱ A	1	前期	水	6 時限	菅野 純、金築 優	
222	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学基礎実習Ⅱ B	1	後期	水	6 時限	菅野 純、金築 優	
223	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学実習Ⅰ A	1	前期	水	5 時限	熊野 宏昭、嶋田 洋徳、 鈴木 伸一	
223	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学実習Ⅰ B	1	後期	水	5 時限	熊野 宏昭、嶋田 洋徳、 鈴木 伸一	
224	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学実習Ⅱ A	1	前期	水	6 時限	熊野 宏昭、嶋田 洋徳、 鈴木 伸一	
224	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	臨床心理学実習Ⅱ B	1	後期	水	6 時限	熊野 宏昭、嶋田 洋徳、 鈴木 伸一	
225	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理療法治論Ⅰ	2	前期	木	1 時限	山口 創	
225	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理療法治論Ⅱ						
225	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	学校臨床心理学特論	2	前期	火	6 時限	小林 正幸 (休講)	1 年制合同
226	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	行動医学特論	2	夏季集中	無	その他	浦 光博	
227	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	社会心理学特論	2	夏季集中	無	その他	福井 至	
227	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理学研究法特論	2	夏季集中	無	その他	綿井 雅康	
228	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理統計法特論	2	後期	木	5 時限	赤穂 理絵	
228	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	精神医学特論	2	前期	月	1 時限	野村 忍	
229	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心身医学特論	1	前期	水	7 時限	菅野 純	
229	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅰ A	1	前期	水	7 時限	菅野 純	
229	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅰ B	1	後期	水	7 時限	菅野 純	
229	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅱ A	1	前期	水	7 時限	野村 忍	
229	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅱ B	1	後期	水	7 時限	野村 忍	
230	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅲ A	1	前期	水	7 時限	根建 金男	
230	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅲ B	1	後期	水	7 時限	根建 金男	
230	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅳ A	1	前期	月	2 時限	佐々木 和義	
230	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅳ B	1	後期	月	2 時限	佐々木 和義	
231	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅴ A	1	前期	水	7 時限	嶋田 洋徳	
231	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅴ B	1	後期	水	7 時限	嶋田 洋徳	
232	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅵ A	1	前期	水	7 時限	鈴木 伸一	
232	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅵ B	1	後期	水	7 時限	鈴木 伸一	
232	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅶ A	1	前期	水	7 時限	熊野 宏昭	
232	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅶ B	1	後期	水	7 時限	熊野 宏昭	
233	修士 (2 年制) 講義科目	健康福祉科学	健康福祉科学	心理臨床現場実習Ⅷ A	1	前期	月	2 時限	大月 友	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担 当 教 員	備 考
233	修士 (2 年制)	講義科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅷ B	1	後期	月	2 時限	大月 友	
233	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	感性心理学特論	2	後期	無	オンデマンド	齋藤 美穂	
234	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	安全人間工学特論	2	前期	木	3 時限	石田 敏郎	
	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	生活支援工学特論					(休講)	
	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	情報処理心理学特論					(休講)	
235	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	教授学習過程特論	2	前期	火	2 時限	宮崎 清孝	
235	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	感情心理学特論	2	前期	金	2 時限	鈴木 晶夫	1 年制合同
236	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	言語情報科学特論	2	前期	無	オンデマンド	菊池 英明	1 年制合同
236	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	知能情報科学特論	2	後期	無	オンデマンド	松居 辰則	1 年制合同
	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学					(休講)	
	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	感覚情報処理学特論					(休講)	
	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	視覚デザイン特論					(休講)	
237	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	生体心理学特論	2	後期	金	3 時限	三嶋 博之	
237	修士 (2 年制)	講義科目	感性認知情報システム	MR I によるヒト脳機能画像研究特論	2	前期	月	5 時限	渡邊 丈夫	
238	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教師学特論	2	前期	火	3 時限	浅田 匡	
238	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	マルチメディア特論	2	前期	火	3 時限	金子 孝夫	
	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	ソフトウェア工学特論					(休講)	
239	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	科学英語論文作成法	2	後期	木	2 時限	グレイ ロバート	
240	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	科学英語論文口演法	2	前期	木	2 時限	グレイ ロバート	
240	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン特論	2	集中講義 (前期)	土	3 時限～6 時限	向後 千春	
241	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術特論	2	後期	月	2 時限	スコット ダグラス	
	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学特論					(休講)	
241	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学特論	2	後期	無	オンデマンド	西村 昭治	1 年制合同
242	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発特論	2	後期	火	4 時限	野嶋 栄一郎	1 年制合同
	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	メディアリテラシー特論					(休講)	
242	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教育システム工学	2	夏季集中	無	その他	野口 裕之	
243	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	ワークスツップデザイン特論	2	夏季集中	無	その他	山内 裕平	
243	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育特論	2	前期	無	オンデマンド	森田 祐介	
245	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	定性データ解析特論	2	前期	水	4 時限	岩坪 秀一	
245	修士 (2 年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン特論	2	後期	木	6 時限	尾澤 重和	
247	修士 (1 年制)	研究指導 (修士)	教育臨床コース	学校臨床心理学研究指導 A	—	前期	無	その他	大月 友	
247	修士 (1 年制)	研究指導 (修士)	教育臨床コース	学校臨床心理学研究指導 B	—	後期	無	その他	大月 友	
247	修士 (1 年制)	研究指導 (修士)	教育臨床コース	臨床認知発達学研究指導 A	—	前期	無	その他	佐々木 和義	
247	修士 (1 年制)	研究指導 (修士)	教育臨床コース	臨床認知発達学研究指導 B	—	後期	無	その他	佐々木 和義	
247	修士 (1 年制)	コース必修 (演習) 科目	教育臨床コース	学校臨床心理学演習 A	2	前期	月	6 時限	大月 友	
247	修士 (1 年制)	コース必修 (演習) 科目	教育臨床コース	学校臨床心理学演習 B	2	後期	月	6 時限	大月 友	
248	修士 (1 年制)	コース必修 (演習) 科目	教育臨床コース	臨床認知発達学演習 A	2	前期	月	6 時限	佐々木 和義	
248	修士 (1 年制)	コース必修 (演習) 科目	教育臨床コース	臨床認知発達学演習 B	2	後期	月	6 時限	佐々木 和義	
249	修士 (1 年制)	コース必修 (実習) 科目	教育臨床コース	心理教育臨床実習 A	1	前期	水	7 時限	大月 友、佐々木 和義、 藤井 靖	
249	修士 (1 年制)	コース必修 (実習) 科目	教育臨床コース	心理教育臨床実習 B	1	後期	水	7 時限	大月 友、佐々木 和義、 藤井 靖	
250	修士 (1 年制)	コース必修 (実習) 科目	教育臨床コース	心理臨床事例実習 A	1	前期	水	6 時限	大月 友、佐々木 和義、 藤井 靖	
250	修士 (1 年制)	コース必修 (実習) 科目	教育臨床コース	心理臨床事例実習 B	1	後期	水	6 時限	大月 友、佐々木 和義、 藤井 靖	
251	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育心理学特論	2	後期	火	6 時限	青柳 肇	
251	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	臨床認知発達学特論	2	前期	木	6 時限	佐々木 和義	
252	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	臨床心理学特論Ⅲ	2	後期	木	7 時限	熊野 宏昭	
253	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	特別支援教育特論	2	前期	木	7 時限	佐々木 和義	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担 当 教 員	備 考
253	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育臨床査定特論	2	前期	月	7 時限	大月 友	
254	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	乳幼児発達心理学特論	2	後期	土	2 時限	井原 成男	
254	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育開発特論	2	後期	火	4 時限	野嶋 栄一郎	2 年制合同
255	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	発達行動学特論	2	前期	火	6 時限	根ヶ山 光一	2 年制合同
255	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	学校臨床心理学特論	2	前期	火	6 時限	小林 正幸	2 年制合同
256	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	応用健康科学特論	2	後期	無	オンデマンド	竹中 晃二	2 年制合同
257	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	インターネット科学特論	2	後期	無	オンデマンド	西村 昭治	2 年制合同
258	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	臨床心理学地域援助特論	2	後期	火	7 時限	大月 友	2 年制合同
258	修士 (1 年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育発達心理学特論	2	前期	無	オンデマンド	大月、菅野、佐々木、嶋田	
259	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	家族臨床心理学特論	2	前期	無	オンデマンド	菅野 純	
259	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	学校臨床生徒指導学特論	2	前期	無	オンデマンド	嶋田 洋徳	
260	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	教育集団心理学特論	2	前期	土	3 時限～4 時限	岡安 孝弘	2 年制合同
260	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	発達科学特論	2	後期	月	2 時限	大藪 泰	2 年制合同
261	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	福祉教育特論	2	前期	木	2 時限	前橋 明	2 年制合同
262	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	生涯機能学特論	2	前期	無	オンデマンド	今泉 和彦	2 年制合同
262	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	児童家庭福祉特論	2	前期	火	4 時限	野村 忍	2 年制合同
263	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	社会病理学特論	2	後期	月	1 時限	鈴木 晶夫	2 年制合同
263	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	感情心理学特論	2	前期	金	2 時限	鈴木 晶夫	2 年制合同
264	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	言語情報科学特論	2	前期	無	オンデマンド	鈴木 晶夫	2 年制合同
264	修士 (1 年制)	コース選択科目	教育臨床コース	知能情報科学特論	2	後期	無	オンデマンド	松居 辰則	2 年制合同
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導 (D) A	—	後期	無	その他	天野 正博	
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	天野 正博	
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	人口学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	阿藤 誠	
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	人口学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	阿藤 誠	
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	生物圏生態学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	太田 俊二	
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	生物圏生態学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	太田 俊二	
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	森川 靖	
266	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	森川 靖	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	鳥越 皓之	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	鳥越 皓之	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	水域環境学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	井内 美郎	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	水域環境学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	井内 美郎	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	地域資源論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	相 雅之	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	地域資源論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	相 雅之	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	大気環境科学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	松本 淳	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	大気環境科学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	松本 淳	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	動物行動生態学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	三浦 慎悟	
267	博士後期	研究指導 (博士)	地域・地球環境科学	動物行動生態学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	三浦 慎悟	
267	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	発達行動学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	根ヶ山 光一	
267	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	発達行動学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	根ヶ山 光一	
268	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	建築計画学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	佐野 友紀	
268	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	建築計画学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	佐野 友紀	
268	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	建築環境学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	小島 隆矢	
268	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	建築環境学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	小島 隆矢	
268	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	環境心理・環境デザイン研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	佐藤 将之	
268	博士後期	研究指導 (博士)	人間行動・環境科学	環境心理・環境デザイン研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	佐藤 将之	
268	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	河西 宏祐	
268	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	河西 宏祐	
268	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	蔵持 不三也	
268	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	蔵持 不三也	
268	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	店田 廣文	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担当教員	備 考
268	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	店田 廣文	
269	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	移住論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	森本 豊富	
269	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	移住論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	森本 豊富	
269	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	物質文化論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	谷川 章雄	
269	博士後期	研究指導 (博士)	文化・社会環境科学	物質文化論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	谷川 章雄	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	生体機能学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	今泉 和彦	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	生体機能学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	今泉 和彦	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	山内 兄人	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	山内 兄人	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	鈴木 秀次	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	鈴木 秀次	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	統合生理学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	永島 計	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	統合生理学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	永島 計	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	竹中 晃二	
269	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	竹中 晃二	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	医療人類学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	辻内 琢也	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	医療人類学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	辻内 琢也	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	分子神経科学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	神原 伸一	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康・生命医科学	分子神経科学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	神原 伸一	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	予防医学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	町田 和彦	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	予防医学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	町田 和彦	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	幼少児福祉教育論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	前橋 明	
270	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	幼少児福祉教育論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	前橋 明	
271	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	緩和医療学・臨床死生学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	小野 充一	
271	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	緩和医療学・臨床死生学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	小野 充一	
271	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	健康福祉管理論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	扇原 淳	
271	博士後期	研究指導 (博士)	健康福祉科学	健康福祉管理論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	扇原 淳	
271	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	心身医学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	野村 忍	
271	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	心身医学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	野村 忍	
271	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	認知行動カウセンシング学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	根建 金男	
271	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	認知行動カウセンシング学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	根建 金男	
272	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	嶋田 洋徳	
272	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	嶋田 洋徳	
272	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	産業カウセンシング学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	鈴木 伸一	
272	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	産業カウセンシング学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	鈴木 伸一	
272	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	臨床心理アセスメント学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	熊野 宏昭	
272	博士後期	研究指導 (博士)	臨床心理学	臨床心理アセスメント学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	熊野 宏昭	
272	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	感性認知情報システム研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	齋藤 美穂	
272	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	感性認知情報システム研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	齋藤 美穂	
273	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	石田 敏郎	
273	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	石田 敏郎	
273	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	福祉工学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	藤本 浩志	
273	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	福祉工学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	藤本 浩志	
273	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	情報処理心理学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	中島 義明	
273	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	情報処理心理学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	中島 義明	
274	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	心理行動学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	鈴木 晶夫	
274	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	心理行動学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	鈴木 晶夫	
274	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	言語情報科学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	菊池 英明	
274	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	言語情報科学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	菊池 英明	
274	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	知識情報科学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	松居 辰則	
274	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	知識情報科学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	松居 辰則	

頁	課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	学 期	曜 日	時 限	担 当 教 員	備 考
275	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	感覚情報処理学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	百瀬 桂子	
275	博士後期	研究指導 (博士)	感性認知情報システム	感覚情報処理学研究指導 (D) B	—	後期	無	オンデマンド	百瀬 桂子	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	金子 孝夫	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	金子 孝夫	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	金 群	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	金 群	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	向後 千春	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	向後 千春	
	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学研究指導 (D) A					(休講)	
	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学研究指導 (D) B					(休講)	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	野嶋 栄一郎	
275	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	野嶋 栄一郎	
276	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	森田 裕介	
276	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	森田 裕介	
276	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン研究指導 (D) A	—	前期	無	その他	尾澤 重知	
276	博士後期	研究指導 (博士)	教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン研究指導 (D) B	—	後期	無	その他	尾澤 重知	

索引

M

MRIによるヒト脳機能画像研究特論…………… 237

あ

アジア社会論演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 95
 アジア社会論演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 96
 アジア社会論研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 57
 アジア社会論研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 268
 アジア地域研究特論…………… 203
 安全人間工学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 161
 安全人間工学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 162
 安全人間工学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 66
 安全人間工学研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 273
 安全人間工学特論…………… 234

い

移住論演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 97
 移住論演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 98
 移住論研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 57
 移住論研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 269
 医療人類学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 123
 医療人類学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 124
 医療人類学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 60
 医療人類学研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 270
 インストラクショナルデザイン特論…………… 240
 インストラクショナルデザイン論演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 185
 インストラクショナルデザイン論演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 186
 インストラクショナルデザイン論研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 69
 インストラクショナルデザイン論研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 275
 インターネット科学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 188
 インターネット科学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 189
 インターネット科学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 70
 インターネット科学特論…………… 241, 257

う

運動制御・バイオメカニクス演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 117
 運動制御・バイオメカニクス演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 118
 運動制御・バイオメカニクス研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 59
 運動制御・バイオメカニクス研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 269
 運動制御・バイオメカニクス特論…………… 209

お

応用健康科学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 122
 応用健康科学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 122

応用健康科学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 60
 応用健康科学研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 269
 応用健康科学特論…………… 210, 256

か

科学英語論文口演法特論…………… 240
 科学英語論文作成法特論…………… 239
 科学史・科学論研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 58
 科学史科学哲学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 103
 科学史科学哲学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 104
 科学史科学哲学特論…………… 203
 学習環境デザイン研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 276
 学習環境デザイン特論…………… 245
 学習環境デザイン論演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 195
 学習環境デザイン論演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 196
 学習環境デザイン論研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 71
 学習動機づけ特論…………… 200
 学習動機づけ論演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 86
 学習動機づけ論研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 56
 家族社会学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 99
 家族社会学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 100
 家族社会学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 57
 家族臨床心理学特論…………… 259
 学校カウンセリング学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 153
 学校カウンセリング学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 154
 学校カウンセリング学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 64
 学校臨床心理学演習 A（前期）・B（後期）…………… 247
 学校臨床心理学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 247
 学校臨床心理学特論…………… 225, 255
 学校臨床生徒指導学特論…………… 259
 感覚情報処理学演習（１）A（前期）…………… 175
 感覚情報処理学演習（２）A（前期）…………… 175
 感覚情報処理学研究指導 A（前期）…………… 68
 感覚情報処理学研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 275
 環境管理計画学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 72
 環境管理計画学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 72
 環境管理計画学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 54
 環境管理計画学研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 266
 環境管理計画学特論…………… 197
 環境社会学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 76
 環境社会学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 77
 環境社会学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 55
 環境社会学研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 267
 環境社会学特論…………… 198
 環境心理・環境デザイン演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 91
 環境心理・環境デザイン演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 92
 環境心理・環境デザイン研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 56
 環境心理・環境デザイン研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 268
 環境生態学演習（１）A（前期）・B（後期）…………… 75
 環境生態学演習（２）A（前期）・B（後期）…………… 76
 環境生態学研究指導 A（前期）・B（後期）…………… 54
 環境生態学研究指導（D）A（前期）・B（後期）…………… 266
 感情心理学特論…………… 235, 263

感性心理学特論	233
感性認知科学演習 (1) A (前期)・B (後期)	159
感性認知科学演習 (2) A (前期)・B (後期)	161
感性認知科学研究指導 A (前期)・B (後期)	65
感性認知科学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	272
緩和医療学・臨床死生物学演習 (1) A (前期)・B (後期)	139
緩和医療学・臨床死生物学演習 (2) A (前期)・B (後期)	140
緩和医療学・臨床死生物学研究指導 A (前期)・B (後期)	62
緩和医療学・臨床死生物学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	271

き

技術史・技術文化論演習 (1) A (前期)・B (後期)	108
技術史・技術文化論演習 (2) A (前期)・B (後期)	110
技術文化論研究指導 A (前期)・B (後期)	58
基礎老化学演習 (1) A (前期)・B (後期)	125
基礎老化学演習 (2) A (前期)・B (後期)	126
基礎老化学研究指導 A (前期)・B (後期)	60
教育開発特論	242, 254
教育開発論演習 (1) A (前期)・B (後期)	190
教育開発論演習 (2) A (前期)・B (後期)	190
教育開発論研究指導 A (前期)・B (後期)	70
教育開発論研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	275
教育コミュニケーション学演習 (1) A (前期)・B (後期)	191
教育コミュニケーション学演習 (2) A (前期)・B (後期)	192
教育コミュニケーション学研究指導 A (前期)・B (後期)	70
教育システム工学特論	242
教育実践学演習 (1) A (前期)・B (後期)	177
教育実践学演習 (2) A (前期)・B (後期)	179
教育実践学研究指導 A (前期)・B (後期)	68
教育集団心理学特論	260
教育情報工学研究指導 A (前期)・B (後期)	70
教育心理学特論	251
教育発達心理学特論	258
教育臨床査定特論	253
教育臨床心理学特論	219
教師学特論	238
教授学習過程特論	235

け

健康医学演習 (1) A (前期)・B (後期)	120
健康医学演習 (2) A (前期)・B (後期)	121
健康医学研究指導 A (前期)・B (後期)	60
健康福祉管理特論	213
健康福祉管理論演習 (1) A (前期)・B (後期)	146
健康福祉管理論演習 (2) A (前期)・B (後期)	147
健康福祉管理論研究指導 A (前期)・B (後期)	63
健康福祉管理論研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	271
健康福祉支援工学演習 (1) A (前期)・B (後期)	145
健康福祉支援工学演習 (2) A (前期)・B (後期)	145
健康福祉支援工学研究指導 A (前期)・B (後期)	63
健康福祉支援工学特論	216
言語情報科学演習 (1) A (前期)・B (後期)	169

言語情報科学演習 (2) A (前期)・B (後期)	169
言語情報科学研究指導 A (前期)・B (後期)	67
言語情報科学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	274
言語情報科学特論	236, 264
建築環境学演習 (1) A (前期)・B (後期)	90
建築環境学演習 (2) A (前期)・B (後期)	90
建築環境学研究指導 A (前期)・B (後期)	56
建築環境学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	268
建築環境学特論	201
建築計画学演習 (1) A (前期)・B (後期)	88
建築計画学演習 (2) A (前期)・B (後期)	89
建築計画学研究指導 A (前期)・B (後期)	56
建築計画学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	268

こ

行動療法特論	221
行動臨床心理学演習 (1) A (前期)・B (後期)	155
行動臨床心理学演習 (2) A (前期)・B (後期)	155
行動臨床心理学研究指導 A (前期)・B (後期)	64
行動臨床心理学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	272

さ

産業カウンセリング学演習 (1) A (前期)・B (後期)	156
産業カウンセリング学演習 (2) A (前期)・B (後期)	157
産業カウンセリング学研究指導 A (前期)・B (後期)	64
産業カウンセリング学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	272
産業職業社会学演習 (2) A (前期)・B (後期)	93
産業職業社会学研究指導 A (前期)・B (後期)	56
産業職業社会学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	268
産業職業社会学特論	202

し

自然人類学特論	207
児童家庭福祉特論	215, 262
児童家庭福祉論演習 (1) A (前期)・B (後期)	141
児童家庭福祉論演習 (2) A (前期)・B (後期)	142
児童家庭福祉論研究指導 A (前期)・B (後期)	62
社会学説特論	206
社会心理学特論	226
社会人類学演習 (1) A (前期)・B (後期)	77
社会人類学演習 (2) A (前期)・B (後期)	78
社会人類学研究指導 A (前期)・B (後期)	55
社会的実践認知科学演習 (1) A (前期)・B (後期)	166
社会的実践認知科学演習 (2) A (前期)・B (後期)	167
社会的実践認知科学研究指導 A (前期)・B (後期)	67
社会病理学特論	217, 263
社会保障政策論演習 (1) A (前期)・B (後期)	132
社会保障政策論演習 (2) A (前期)・B (後期)	134
社会保障政策論研究指導 A (前期)・B (後期)	61
情報意味論演習 (1) A (前期)・B (後期)	180
情報意味論演習 (2) A (前期)・B (後期)	181

情報意味論研究指導 A (前期)・B (後期)	69
情報コミュニケーション科学演習 (1) A (前期)・B (後期)	182
情報コミュニケーション科学演習 (2) A (前期)・B (後期)	182
情報コミュニケーション科学研究指導 A (前期)・B (後期) ...	69
情報コミュニケーション科学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	275
情報コミュニケーション技術特論	241
情報コミュニケーション技術論演習 (1) A (前期)・B (後期) ...	186
情報コミュニケーション技術論演習 (2) A (前期)・B (後期) ...	187
情報コミュニケーション技術論研究指導 A (前期)・B (後期) ..	69
情報処理心理学演習 (1) A (前期)・B (後期)	165
情報処理心理学演習 (2) A (前期)・B (後期)	165
情報処理心理学研究指導 A (前期)・B (後期)	66
情報処理心理学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ...	273
情報メディア教育特論	243
情報メディア教育論演習 (1) A (前期)・B (後期) ...	193
情報メディア教育論演習 (2) A (前期)・B (後期) ...	194
情報メディア教育論研究指導 A (前期)・B (後期) ...	71
情報メディア教育論研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	276
神経機能学特論	209
神経内分泌学演習 (1) A (前期)・B (後期)	116
神経内分泌学演習 (2) A (前期)・B (後期)	117
神経内分泌学研究指導 A (前期)・B (後期)	59
神経内分泌学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ...	269
神経内分泌学特論	208
人口学演習 (2) A (前期)・B (後期)	73
人口学研究指導 A (前期)・B (後期)	54
人口学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	266
心身医学演習 (1) A (前期)・B (後期)	151
心身医学演習 (2) A (前期)・B (後期)	151
心身医学研究指導 A (前期)・B (後期)	64
心身医学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	271
心身医学特論	228
心理学研究法特論	227
心理教育臨床実習 A (前期)・B (後期)	249
心理行動学演習 (1) A (前期)・B (後期)	168
心理行動学演習 (2) A (前期)・B (後期)	168
心理行動学研究指導 A (前期)・B (後期)	67
心理行動学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	274
心理統計法特論	227
心理療法特論 I	225
心理臨床現場実習 I A (前期)・B (後期)	229
心理臨床現場実習 II A (前期)・B (後期)	229
心理臨床現場実習 III A (前期)・B (後期)	230
心理臨床現場実習 IV A (前期)・B (後期)	230
心理臨床現場実習 V A (前期)・B (後期)	231
心理臨床現場実習 VI A (前期)・B (後期)	232
心理臨床現場実習 VII A (前期)・B (後期)	232
心理臨床現場実習 VIII A (前期)・B (後期)	233
心理臨床事例実習 A (前期)・B (後期)	250

す

水域環境学演習 (1) A (前期)・B (後期)	79
水域環境学演習 (2) A (前期)・B (後期)	80

水域環境学研究指導 A (前期)・B (後期)	55
水域環境学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	267
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習 (1) A (前期)・B (後期)	112
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習 (2) A (前期)・B (後期)	113
スポーツ健康マネジメント論演習 (1) A (前期)・B (後期)	130
スポーツ健康マネジメント論演習 (2) A (前期)・B (後期)	131
スポーツ健康マネジメント論研究指導 A (前期)・B (後期) ...	61

せ

生活文化史研究特論	205
政治社会文化論研究指導 A (前期)・B (後期)	58
精神医学特論	228
精神保健福祉特論	216
精神保健福祉論演習 (1) A (前期)・B (後期)	143
精神保健福祉論演習 (2) A (前期)・B (後期)	144
精神保健福祉論研究指導 A (前期)・B (後期)	63
生体機能学演習 (1) A (前期)・B (後期)	114
生体機能学演習 (2) A (前期)・B (後期)	115
生体機能学研究指導 A (前期)・B (後期)	59
生体機能学研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	269
生体機能学特論	207, 262
生体計測学特論	211
生態心理学演習 (1) A (前期)・B (後期)	176
生態心理学演習 (2) A (前期)・B (後期)	177
生態心理学研究指導 A (前期)・B (後期)	68
生態心理学特論	237
生物圏生態学演習 (1) A (前期)・B (後期)	74
生物圏生態学演習 (2) A (前期)・B (後期)	74
生物圏生態学研究指導 A (前期)・B (後期)	54
生物圏生態学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ...	266
生命医療倫理学特論	213

そ

ソーシャルワーク特論	217
ソーシャルワーク論演習 (1) A (前期)・B (後期) ...	148
ソーシャルワーク論演習 (2) A (前期)・B (後期) ...	148
ソーシャルワーク論研究指導 A (前期)・B (後期) ...	63

た

大気環境科学演習 (1) A (前期)・B (後期)	83
大気環境科学演習 (2) A (前期)・B (後期)	84
大気環境科学研究指導 A (前期)・B (後期)	55
大気環境科学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ...	267

ち

地域資源特論	199
地域資源論演習 (1) A (前期)・B (後期)	82
地域資源論演習 (2) A (前期)・B (後期)	82
地域資源論研究指導 A (前期)・B (後期)	55
地域資源論研究指導 (D) A (前期)・B (後期)	267

地域文化論研究指導 A (前期)・B (後期) ……	59
地球生態学特論 ……	197
知識情報科学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	170
知識情報科学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	172
知識情報科学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	67
知識情報科学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	274
知識情報科学特論 ……	236, 264

て

定性データ解析特論 ……	245

と

ドイツ近代国民国家特論 ……	205
ドイツ政治社会文化論演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	107
ドイツ政治社会文化論演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	108
統合生理学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	119
統合生理学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	120
統合生理学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	59
統合生理学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	269
動物行動生態学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	85
動物行動生態学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	85
動物行動生態学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	55
動物行動生態学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	267
特別支援教育特論 ……	253
都市社会学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	101
都市社会学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	102
都市社会学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	57
都市社会学特論 ……	203

に

日本物質文化論演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	104
日本物質文化論演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	105
乳幼児発達心理学特論 ……	254
人間環境変遷特論 ……	198
人間生体機能動態学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	174
人間生体機能動態学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	174
人間生体機能動態学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	68
認知行動カウンセリング学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	152
認知行動カウンセリング学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	153
認知行動カウンセリング学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	64
認知行動カウンセリング学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	271

ね

ネットワーク情報システム学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	183
ネットワーク情報システム学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	184
ネットワーク情報システム学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	69
ネットワーク情報システム学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	275

は

バイオエシックス演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	129

バイオエシックス演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	130
バイオエシックス研究指導 A (前期)・B (後期) ……	61
発達科学特論 ……	200, 260
発達行動学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	86
発達行動学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	87
発達行動学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	56
発達行動学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	267
発達行動学特論 ……	200, 255

ひ

表象文化論研究指導 A (前期)・B (後期) ……	58

ふ

福祉教育特論 ……	214, 261
福祉教育論演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	137
福祉教育論演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	138
福祉工学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	163
福祉工学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	164
福祉工学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	66
福祉工学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	273
福祉産業学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	127
福祉産業学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	127
福祉産業学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	61
福祉ロボット工学特論 ……	212
物質文化論研究指導 A (前期)・B (後期) ……	58
物質文化論研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	269
フランス表象文化史研究特論 ……	204
フランス表象文化論演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	105
フランス表象文化論演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	106
文化生態学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	94
文化生態学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	95
文化生態学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	57
文化生態学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	268
分子神経科学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	124
分子神経科学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	125
分子神経科学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	60
分子神経科学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	270
分子神経科学特論 ……	210

ま

マルチメディア特論 ……	238

よ

幼少児福祉教育論研究指導 A (前期)・B (後期) ……	62
幼少児福祉教育論研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	270
予防医学演習 (1) A (前期)・B (後期) ……	135
予防医学演習 (2) A (前期)・B (後期) ……	137
予防医学研究指導 A (前期)・B (後期) ……	61
予防医学研究指導 (D) A (前期)・B (後期) ……	270
予防医学特論 ……	214

り

リハビリテーション科学演習（１）A（前期）・B（後期）・・・	149
リハビリテーション科学演習（２）A（前期）・B（後期）・・・	150
リハビリテーション科学研究指導　A（前期）・B（後期）・・・	63
臨床心理アセスメント学演習（１）A（前期）・B（後期）・・・	158
臨床心理アセスメント学演習（２）A（前期）・B（後期）・・・	159
臨床心理アセスメント学研究指導　A（前期）・B（後期）・・・	65
臨床心理アセスメント学研究指導（D）A（前期）・B（後期）・・・	272
臨床心理学特論Ⅰ	220
臨床心理学特論Ⅱ	218
臨床心理学特論Ⅲ	252
臨床心理学学校地域援助特論	258
臨床心理基礎実習Ⅰ　A（前期）・B（後期）	222
臨床心理基礎実習Ⅱ　A（前期）・B（後期）	222
臨床心理査定特論Ⅰ	220
臨床心理査定特論Ⅱ	218
臨床心理実習Ⅰ　A（前期）・B（後期）	223
臨床心理実習Ⅱ　A（前期）・B（後期）	224
臨床心理面接法特論Ⅰ	219
臨床心理面接法特論Ⅱ	221
臨床認知発達学演習　A（前期）・B（後期）	248
臨床認知発達学研究指導　A（前期）・B（後期）	247
臨床認知発達学特論	251

れ

歴史人類学特論	202

ろ

老年社会福祉学演習（１）A（前期）・B（後期）	128
老年社会福祉学演習（２）A（前期）・B（後期）	129
老年社会福祉学研究指導　A（前期）・B（後期）	61
老年社会福祉学特論	212

わ

ワークショップデザイン特論	243

早稲田大学はハラスメント防止に真摯に取り組んでいます。

もう一歩先のハラスメント理解のためのQ&A

解説

Q. ハラスメントって何ですか？

A. ハラスメントとは、性別、社会的身分、人種、国籍、信条、年齢、職業、身体的特徴等の属性あるいは広く人格に関わる事項等に関する言動によって、相手方に不利益や不快感を与え、あるいはその尊厳を損なうことをいいます。大学におけるハラスメントとしては、性的な言動によるセクシュアル・ハラスメント、勉学・教育・研究に関連する言動によるアカデミック・ハラスメント、優越的地位や職務上の地位に基づく言動によるパワー・ハラスメントなどがあります。

Q. ハラスメントって何で問題なのですか？

A. 人権侵害だからです。ごく気軽な気持ちでの行為や言動が相手にとっては耐えられない苦痛となっていることもあります。結果として、日常生活に支障をきたすケースも少なくありません。自分に置き換えて、問題意識を高く持つことが大切です。そのためには正しい知識、理解が求められます。ハラスメント防止委員会では、「ハラスメント防止に関するガイドライン」を制定し、対応を定めるとともに、パンフレットやWebサイトで様々な情報を提供しています。是非活用してください。

ハラスメント防止委員会URL

<http://www.waseda.jp/stop/>

Q. 学生がハラスメントにあうのは、どんな場面ですか？

A. きわめて残念なことです。授業・ゼミ等がアカデミック・ハラスメントやセクシュアル・ハラスメントの場、サークル等がセクシュアル・ハラスメントやパワー・ハラスメントの場になりえます。

Q. 学生が加害者になることもありますか？

A. はい、あります。たとえばサークルのコンパで性的な言動を繰り返したり、飲酒を強要したり、交際をしつこく迫った結果、相手が不快感を持った場合には、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメントになりえます。

相談

Q. ハラスメントをうけた場合、どこに相談すればいいのでしょうか？

A. ハラスメント防止室（相談室）に相談してください。開室時間、相談方法、連絡先等の詳細については**下記を参照してください**。

Q. ハラスメント防止室では何をしてもらえるのですか？

A. 現状について専門の相談員が詳細をうかがいます。かなりのケースが、この段階で気持ちに整理がつき、解決にいたっています。相手との関係について調整を希望する場合は、【対応策の検討】に進みます。その後、ハラスメント防止委員会の苦情処理案件の対象と認定された場合は、当事者からあらためてお話を伺い、相手方との調整が始まります。秘密堅持と被害者への報復等の禁止が明確に定められているので、安心して相談してください。また、外部の相談窓口もWebサイトで紹介しています。

Q. ハラスメントなのかわからないのですが、相談してもよいでしょうか？我慢しようか悩んでいます。

A. 感情には個人差があるので人によってはハラスメントと感じないようなケースでも、本人の主観的な感情が重要な要素になり、ハラスメントになることがあります。まずは、ハラスメント防止室に相談してください。

Q. 友人から相談されているのですが？

A. 友人に相談されたら、まずは真剣に耳を傾けて下さい。そして、適切な対処のために、ハラスメント防止室などの専門窓口へ相談するよう勧めてください。

■相談窓口 ハラスメント防止室

相談は、電話・メール・Fax・手紙どの方法でも承ります。来室前なら匿名での相談も可能です。来室の際は必ず電話で予約をしてください。

【TEL】 03-5286-9824 *留守番電話機能つき

【Fax】 03-5286-9825

【E-mail】 stop@list.waseda.jp

【URL】 <http://www.waseda.jp/stop/>

【開室時間】 月～金 9:30～17:00

【事務所所在地】

〒169-8050 新宿区戸塚町1-104

早稲田大学24-8号館2階（相談室）

早稲田大学大学院人間科学研究科

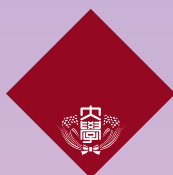
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

電話 04-2947-6848 (ダイヤルイン)

FAX 04-2947-6801

<http://www.waseda.jp/human/graduate/>

jinken@list.waseda.jp



早稲田大学大学院人間科学研究科

GRADUATE SCHOOL OF HUMAN SCIENCES, WASEDA UNIVERSITY